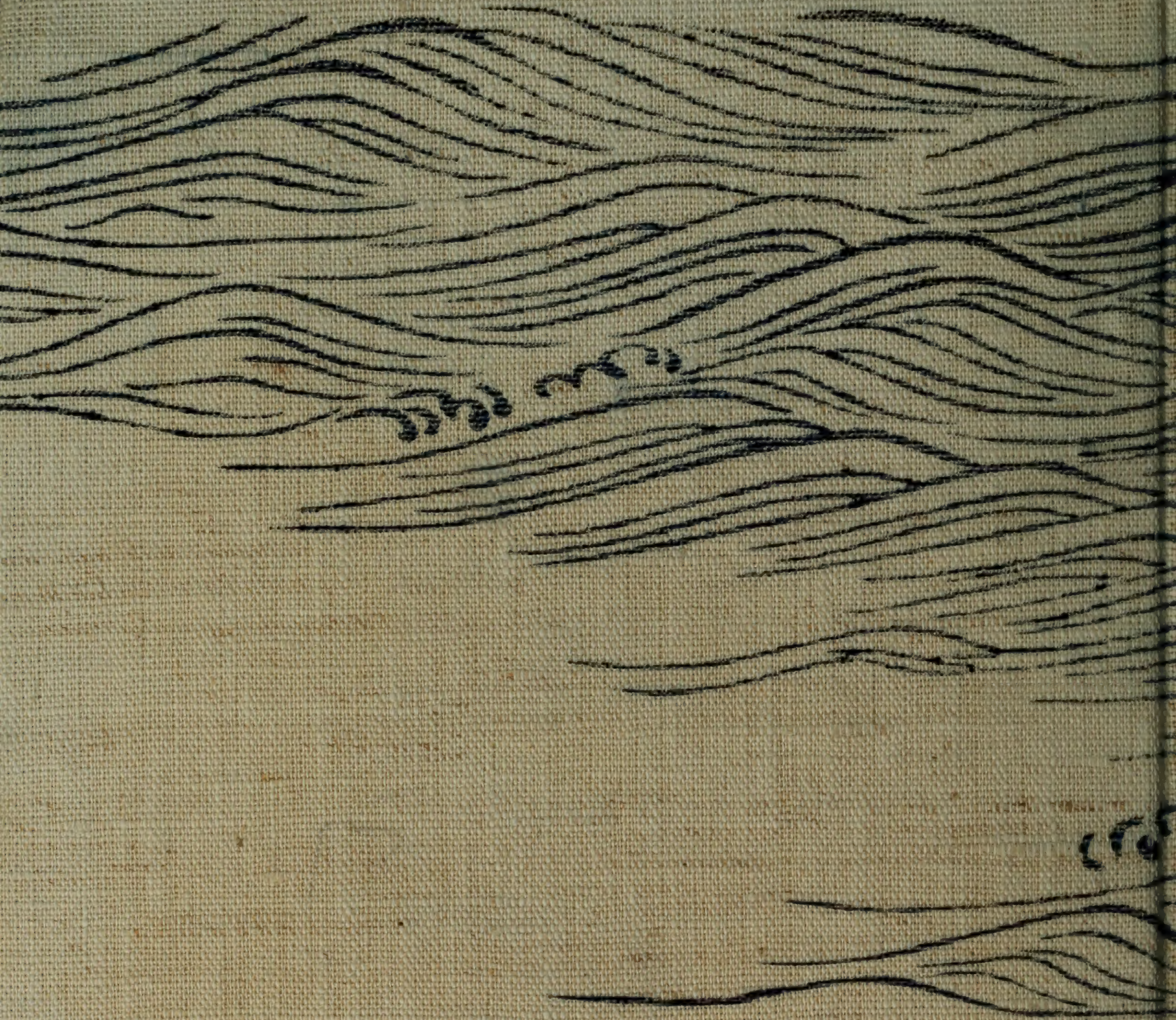




黙阿弥全集

第十五巻

解説

默阿彌筆看板下繪。明治二年の顔見世狂言に、守田座に於て菅原傳授手習鑑の通し狂言が上演された。其時に大阪風の一枚看板を座の前に掲げた。これはその爲に默阿彌が畫いて畫工へ廻した下繪である。右方より說明して見ると、(一)(二)の上部は加茂堤、下部は傳授場。(三)は道明寺。(四)の上方は車引。(五)は賀の祝ひ。(六)の下方が寺小屋、上方が天拜山といふことになる。=故竹柴其水の舊藏であつたもので、看板下繪としては上乘のものと言つてよい。





默阿彌筆菅原傳授手習鑑の看板下繪



河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第十五卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第十五卷目次

挿絵目次

茲發狂言大意古寫本殺法傳輪

此頃澤井正宗と名高き刀の遺恨により靭負を討し又五郎夫を匿ふ矢部生田が深き巧みを笹川は知らず老母を奪れて祖先の墓所に無念の切腹伯父が情に勘當のお蝶夫婦が死際の別れ是も盡せぬ縁日に蝶々賣の六兵衛が打れし喧嘩を宗治が買ひ群がる人の大和國郡山家へ倉橋が推擧に依て仕官なし武運を開く櫻井と御前試合に十分の勝を讓りし政右衛門暇願ひに大内記へ三ケの傳授の置土産武助孫八兩人も死る覺悟に許れし旅路の供に忠義の兩掛お谷は憂に寐やらで現か夢の市藏は男を磨く町奴相手は旗本八萬騎に天下の亂を憚りて意外の智慧も伊豆屋が配劑其藥故はか無も身を捨鐘の一時半兵衛科なきお勝へ去狀を送る心の鬼玄丹勇士と共に出立を名に大坪が手引により落行雁の小田町に志津摩が本望遂げたるも三十餘人討ち取りしたぐひ荒木が二刀の助太刀

武名輝上野晨明

日本晴伊賀報讐

「實錄伊賀越」は、明治十三年三月、作者六十五歳の時、新富座に書卸された。主として講談に材を仰いだもので、實錄の「伊達」や「鏡山」等と並んで、作者の新富座時代を飾り明治初年の歌舞伎劇の全盛期をを暗示する大作の一つである。大略は俗說通りの運びであるが、夢の市藏なる俠客を點出して、主要なる人物とし、活躍せしめたことは、全然作者の創意になるものであつた。團十郎の政右衞門、菊五郎の夢の市藏、宗十郎の大內記、笹川丹右衞門、左團次の一時半兵衞等何れも適役で非常の好評を得たものである。

書卸しの時の役割は、市川團十郎(荒木政右衞門、伊豆屋十兵衞、矢部城五郎)尾上菊五郎(澤井又五郎、町奴夢の市藏)市川左團次(生田官兵衞、柘榴武助、一時半兵衞)中村宗十郎(譽田大內記、笹川丹右衞門)岩井半四郎(政右衞門妻お谷、市藏女房おてふ)中村仲藏(渡邊靭負、櫻井林左衞門、大坪彥左衞門、青松寺の敎山)坂東家橘(池添孫八、夢の子分長吉)市川小團次(渡邊志津摩、宵寐の宗次)中村鶴助(進藤野守之助、倉橋彌三衞門)中村鶴藏(櫻井甚八、蝶々賣六兵衞)岩井小紫(武助妹おしづ、半兵衞女房お勝)等であつた。

挿繪にしたのは楊洲周延筆の錦繪で、伊賀越仇討の場である。

大正十四年二月

校訂者誌す



日本晴伊賀報讐（實錄伊賀越──八幕）

序幕

神田明神境内の場
生田家渡邊宅の場
澤井宅靱負殺の場
矢部屋敷夜會の場

〔役名──矢部城五郎、生田官兵衛、渡邊志津摩、進藤野守之助、山野四郎左衛門、澤井の下部丑内、渡邊の若黨林平、中間杢助、生田の家中牛窪船藏、同神村山平、同大島海六、矢部の臣三羽鷲藏、文使燕雁助、渡邊靱負、澤井又五郎。茶見世の娘お清、同お仲、矢部の腰元若菜、同早蕨、近習等。〕

（神田明神境内の場）──本舞臺眞中後へ寄せて石の大鳥居、此左右こけら葺の軒口を見せたる茶見世、常足の二重、薄縁を敷き、後半分板羽目臂掛け窓、此の下誂への聯を掛け、軒口に掛提灯、前の方に茶釜を掛けたる茶道具の荷を置き、舞臺前に床几三脚並べあり、是れより後日本橋邊より下谷淺草を見たる遠見、上下所々に松、楓の立木、日覆より同じく釣枝、總て神田明神境内の體、爰にお清お仲、前垂掛け、茶屋娘にて左右に分れ立掛り居る、雁助着流し尻端折り、吉原の文使にて床几に掛り居る、此の見得よろしく楊弓の音宮神樂にて幕明く。

雁助　もし姐さん、いつもこつちの見世へおいでなさる、生田様の御連中は、まだお見えなさいませんか。

お清　昨日は皆さんがお非番ゆゑ、早くからお出でゞしたが、今日はまだどなたもお出でなさらぬわいな。

お仲　ほんにあの御連中はお清さんを當込んで、毎日のやうにお出でゝござんすが、まだ見えぬのは昨夜から、又北廓へでも居續けでありませうよ。

雁助　なに、昨夜はお揃ひで宵の口に例の所へお出でだつたが、勤番衆ゆゑ引け前に、樰駕籠でお歸りと寐ず番の喜助の話し、それといふもあの衆は、此の美しい姐さん達に熱い〳〵で居なさるから、おツつけ爰へお出でゝあらうが、もし、姐さん、煽てると罪になりますぜ。

お清　えゝもう言つて下さんすな、此のお山に軒を並べ、斯うして見世を出して居れば、生醉客や經師屋連が、どこの見世へも來ますけれど、取り分けきざな御連中、何ぞといふと厭味ばつかり、ほんに蟲が好かぬわいなあ。

お仲　そりやお清さんのお言ひの通り、外のお客の邪魔をして、擧句の果てが茶碗を毀すか暖簾を破るがお定り、あんなお客は、なあお清さん。

お清　ほんに七里けッぱいで、

兩人　ござんすわいなあ。

雁助　成程、ちよつと顏を見ても南瓜に目鼻ちんちくりん、それに思案橋といふ山さんだから、何處へ行つても鼻摘みだが、女郎衆は可愛さうだ、あんな客でも斯うやつて文で迎ひに寄越すのも、隙な時の用心かしらん。

お清　わたし共は、まだいやでも、世辭で丸めて厭味なことを、受けるばかりでござんすが、

お仲　女郎衆は一つ寐して、身儘にならねばならぬから、嘸いやでござんせうな。

雁助　それもやつぱり苦界の勤めさ。それはさうと此の文を、早く皆さんへ屆けたいものだ。

ト皆々煙草を呑んで居る。宮神樂になり、花道より牛窪船藏、神村山平、大島海六、袴裴大小吸筒の瓢簞を腰に提げ、酒に醉ひたる思入にて出來り、花道に留り、

船藏　これ〳〵神村氏、どうしたのか拙者は、頻りと嚔が出てならぬ、ハックショ。

山本　牛窪氏、僕も同然だ、ハックショ。

海六　あゝ分つた、昨夜の相方が僕輩の惚けでも申して居るか、ハックショ。

船藏　いや〳〵、向うの茶屋のお淸やお仲が、定めて惚けて居るのであらう。

山平　左樣でござれば重疊だが、
海六　風の神は眞平だ。
三人　ハックショ〳〵。（ト三人は嚏をしながら舞臺へ來る、お清お仲を見て）
お清　噂をすれば影とやら、ようまあお出でなされました。
お仲　さつきからあなた方の、どんなに噂をして居ましたらう。
船藏　定めて左樣と拙者どもゝ、此の神經へ感じたか、先程より三人共嚏が凡そ五六十、出續けで居つたわい。
山平　風ならぞく〳〵いたさうが、酒のせゐだか頭から、ぽつぽと煙が淺間山だ。
海六　これ〳〵、そち達もよい加減に惚けて置け、鼻の下がぴり〳〵いたすわ。
ト皆々床几へ掛ける、雁助前へ出で、
雁助　もし〳〵旦那、そのお噂は爰ばかりぢやあござりません、北廓でも女郎衆が大惚けで、今夜も是非と、直にお文でござります。
船藏　おゝ、誰かと思へば、北廓から便りをいたす燕屋か。
山平　さては北廓でもわれ〳〵の、やはり噂をいたすとか。

海六　定めてそんなら今の内に、北廓の嘘も交つて居たらう。

雁助　いや、あつかましい。

三人　何だと。

雁助　いえ、熱い／＼の女郎衆から屆いたお文でござります。さうして、此の一本はどうぞ澤井樣へお上げなすつて下さいまし。（卜皆々受取り、）

船藏　こりや銘々に一本づゝぢやが、是れなる文は梅の香から澤井氏へ屆けるのか、よし／＼それも承知いたした。（卜件の文の上書を見て、）おゝ、拙者のは上書に「牛さまゐる、馬より」といたしてあるが、はゝあ讀めた、宮城野の新造で宮はねと申すから、大方はね馬と洒落をつたか。

山平　又僕のは、「神さま參るさいせん」、はて神さまにさいせんはをかしいが、どつこい賽錢ではない千山の假名であつた。

海六　いや／＼身共のは變でござる。なに、「島さんこんさん中のりさん、岩戸さんへは道續き」が聞いて呆れるわ、はゝゝゝゝ。（と此内三人は文を開いて見る、船藏思入あつて、）

船藏　我々共の文言は何れも極つた迎ひ文だが、澤井どのへ梅の香より寄越した文は並のより、三本位かさがござるが、噂に違はず彼女の方から餘程きたつて居ると見えるな。

雁助　それはあなた方の仰しやる通り、梅の香さんは澤井様へ此頃は大逆上せで、内證からは大小言、馴染のお客は落ちたといふ、二階中の噂であります。
船藏　金を遣つて嫌はれるより、まだ好かれぬが勿怪の幸ひ。
山平　われ〱共の相方へも、其内參つて戀しがる顏を見せてやらうから、
海六　其方よきやうに申して置きやれ。
雁助　えゝ、押の強い。
三人　何と申す。
雁助　いえ押の強い澤庵を買つて來てくれと賴まれましたから、歸りに田町で買つて行かう。左樣ならお近いうちに、きつとお出でを願ひます、大きにおやかましうござりました。
　　ト宮神樂になり、雁助皆々へ挨拶して下手へはひる。
船藏　文使の雁助も、爰に居らねばお淸坊、もつと寄つてもよいではないか。
山平　澤井氏は女郎が好きだが、われ〱どもは地物が好物、お仲も共々爰へ來やれ。
海六　一角づゝはづむから、これ、うんと言つても、
三人　よいではないか。（ト三人はお淸お仲の手を取り引寄せる、）

お清　ほんに皆さんのお詞ばかりでも、有難うございますが、堅いが自慢の私達、そんな厭味は存じませんわいな。

お仲　御常談をなされずと、其の吸筒のお酒を開き、爰でゆつくり召上り、晩まで遊んでおいでなさりませいな。

船藏　成程色氣より喰氣として、

山平　瓢簞の酒を開くから、

海六　快く酌でもいたせ。

お清　お酌ならいつまでもお相手を、

お清
お仲　しませうわいな。

三人　さあ〳〵、ついでくれ〳〵。

ト是れにて三人は吸筒を開き、お清、お仲酌をして酒盛をして居る、三味線入りの大拍子になり、花道より渡邊志津摩、羽織袴大小、跡より杢助白髪鬘巾間の親仁にて、附添ひ出來り、花道に留り、

志津　これ杢助、身は此度江戸表へ初めての勤番ゆゑ、當地の事は方角さへ一向知らねば、何處が何處やら繁華ゆゑ、其の人足に道さへもとんと忘れてしまひしが、あれなる宮は名に高き、神田明神

と申すのか。

杢助　へい、左様にございます、是れから、あの山續きが湯島天神で、向うに見えます森の中が、則ち上野でございます。

志津　其方は江戸表に久しく居ると申すことゆゑ、道案内に召連れしが聞きしに勝る此の神垣、ても賑かなことである、何は然れあれなる茶屋で、暫時休息いたさうから、其の方よきに案内しやれ。

杢助　畏りました。

志津　さゝ參れ。（ト右の鳴物にて舞臺へ來る、お清お仲是れを見て、）

お清　もしあなた、是れへお掛けなされませ。

お仲　もしお清さん、よいお武家樣ではござんせぬか。（ト茶を汲んで出す、志津摩床几へ掛け、）

志津　いや／＼、決して構やるな、暫く見世を借りるであらう。

お清　あなた樣なら何時までも、

お仲　御ゆつくりとなされませいな。

ト　お清、お仲は好い男だとよろしく囁く、此の内以前の船藏、山平、海六、志津摩を見て、

船藏　あゝこれ／＼、それへおいでなされしは、渡邊氏の御子息、志津摩どのでは、

三人　ござらぬか。（ト是れにて志津摩心附き、）

志津　これは〳〵、どなたかと存ぜしに、牛窪氏を始めとして神村大島の御兩所でござつたか、存ぜぬこととて今の失禮、眞平御容赦下されい。

船藏　いや〳〵其の失禮は互ひのこと、して、志津摩どのには中間をたゞ一人にてお忍びは、ハヽア貴殿も狐の巣窟でも、お突當てに御遊歩かな。

山平　われ〳〵共とは雲と泥、御大身の其許と申し、御器量のよいお生れゆゑ、先づ當所から芝神明、淺草の奥山あたりの楊弓でも引かるゝか。

海六　八寸的の大弓より見るからきれいな女子の的へ、かちりどんと當つた日には、三間堂通し矢より餘程興がござるから、われ〳〵もお供をいたし、ちと御指南を受けたうござる。

船藏　何は兎もあれ、持ち合した猪口を一つ差上げようから、貴殿もそこでわれ〳〵と打ちくつろいで、ゆつくりと召上つて、

三人　おいでなされい。（ト船藏猪口を志津摩へさす、志津摩思入あつて、）

志津　存じ寄らざるお持成し、折角の御意ながら生得拙者は下戸でござれば、頂戴したも同じこと、矢張りお猪口は其儘に、

杢助　とんだ所で惡い奴に。（ト言ふを志津摩冠せて、）
志津　あいや、平にお納め下さりませ。（ト是れにて三人はムッとして、）
船藏　われ〳〵共は最前より、此の吸筒をたしなくいたし、酩酊いたして居ることゆゑ、如何なる無禮を申したか其處は一向存ぜぬが、其の儘にお返しあるは。
山平　あゝ聞えた、毒でもあるとの御懸念か、但しはわれ〳〵三人は、小給者ゆゑ大身の、其許などに直き〳〵に猪口を差しゝが御立腹か、假令酩酊いたせばとて、武士たる者が差した杯。
海六　それともお若い貴殿ゆゑ、是れからわれ〳〵取巻いて、北廓へでもお供を仕ようと、惡いことでも勸めるだらうと、それでお外しなさるのか、折角上げた其の杯、是が非であらうと志津摩どの、さあ、なみ〳〵と、
四人　受けさつしやれ。（ト三人杯を志津摩へ突附ける。志津摩思入あつて、）
志津　これは又御無禮千萬、貴殿方の御親切を無にいたせしやうなれど、生得好まぬ不調法、殊に遊山にござれども、父が内用申し含め、ちと寄道をいたしますれば、つい此先きを急ぐゆゑ、御辭退申せし拙者が不念、お氣に障らば如何やうにも、此の場に於てお詫びいたせば、何卒御勘辨な下されい。

お清　ほんに折角皆さんから、お差しなさつた此のお猪口、あなた樣の呑み掛けなら、

お仲　私共が助けますから、さうおつしやらずと、マアあなた、一ツお過しなされませ。

志津　そち達までも親切に、申してくれることなれば、

杢助　呑まねば彼れ是れ面倒ゆゑ、おいやであらうが、若旦那樣。

お清 お仲　さあ〳〵お上りなさんせいな。（ト是れにて志津摩思入あつて杯を取上げ、）

志津　遠國者ゆゑ彼れ是れと强情を申しましたは、返す〴〵も拙者が粗忽、左樣ござれば此のお猪口頂戴いたすでござりませう。

船藏　おゝ、呑むとあるなら、われ〳〵が、今申した詞も立ち、

山平　二言と引かぬ吸筒の、酒の泉にすつぱり流し、

海六　拙者がお酌をいたさうから、志津摩どの、なみ〳〵一ツ、

三人　お受けなされい。

お清　さあ〳〵、お酌をいたしませうわいな。

志津　然らば女中、ついで〻くりやれ。

お清 お仲　あい〳〵、合點ぢやわいなあ。

ト お清お仲は件の吸筒を奪ひ合ひ悦んで酌をする、敵役三人は是れを見て顏見合せ無念の思入、

ト ゞ志津摩は酒を呑み乾し、

志津　左樣でござれば牛窪氏へ、いざ、御返杯を。（ト出すを押返し、）

船藏　こりや餘りお見事、今一獻。

志津　いや〳〵、是れにてお納め下され。（ト兩人よろしく杯を爭ふ、杢助是れを見て見兼ねて中へはひり、）

杢助　あゝこれ、まあ〳〵暫くお待ち下さりませ、若旦那には最前より、御迷惑だとおつしやるを、そんなに無理にお勸めなら、主人の名代此の親仁が、一ッお合をいたしませう。

船藏　えゝ親仁のお合は眞平だ、出過ぎものめ、控へて居ろ。

杢助　それでもあんまり皆樣が、惡すゝめをなさるゆゑ、見兼ねて親仁も出ましたが、おいやとあるなら仕方がないが、ならうことなら一つお合を。（ト杯を取らうとするゆゑ、船藏腹を立て、）

船藏　えゝ、しみッたれな老耄め。

ト船藏杢助を突退ける、此の途端杢助ひよろ〳〵と前へ倒れる、是れにて脇差柄より折れる、お清お仲これを見て、

お清　こりや、お中間のお腰の物が、

お仲　柄から二つに折れましたぞえ。

杢助　南無三、是れは。

ト杢助びつくりして折れたる脇差を取らうとする、船藏突退げ、件の脇差を取上げ、

船藏　あゝこれ、何れも御覽なされい、志津摩どのゝお中間は、これ此通り差料の柄からぽつきり折れました、はて笑止千萬なことでござる。

山平　成程これは大笑ひだ、流石日頃御自慢の武藝に長けし渡邊氏、御家來にまで竹箆の中身とは、御注意だ。

海六　がつくり丸の大業物、亂れ燒かと思ひの外、こりやこれ竹箆竹光だ、如何に親仁の差料でも、天晴これは名刀々々。

船藏　赤鰯なら猫であらうが、竹光だから雀でも、大方飛びつくでござらうわい、何といづれも御覽なされ、笑止なことだ。

三人　むゝ、はゝゝゝ。

ト敵役三人始終酒に醉ひたるこなしにて、件の脇差を、突附け、志津摩に掛けて言ふ。志津摩無念の思入にて、杢助を引附け、

志津　こりや杢助、何ゆゑそちは此のやうな、竹篦なぞを帯せしぞ。(ト合方になり、志津摩思入あつて、)父上には他家と違ひ、假令中間小物なりとも帯する刀脇差は、金銀を惜しまずにお求めあつてお渡しあるに、其の方のみが何時の間にか中身を取替へ竹篦に何ゆゑ取替へ置きたるぞ、所もあらうに賑はしい此の境内の人中で、よくも主人に恥辱を與へ、不覺を取らせし憎き下郎。えゝ、こゝな不埒ものめが。(トきつと言ふ。)

杢助　只今となり如何やうの申譯をいたしても、恐れ入つたと申すより外に詞はございませぬが、年寄りまして腰が重く、御主人様よりお渡しの刄物をそつと拔替へまして、つい竹篦にいたしましたは、此の杢助が一生の過り、何卒以後を愼みますから、此の場のことは是れなりに御免なされて下さりませ。

ト是れにて、船藏皆々よい氣味だといふこなしあつて、

船藏　あゝいや志津摩どの、假令今更老耄めを御折檻あつたとて、彼れは世にいふ渡り中間、夜鷹の勤めか呑代に、刄物を屑屋の手に渡し、其の身代りの竹篦ゆゑ、

山平　しかつめらしくお談じあつても、諺にいふ糠に釘、捨て置いたがよろしからうが、親仁も親仁だ、渡された刄物を賣つたら鈍刀でも、それ相應の品に替へず、なぜ竹篦にいたしたのだ。

志津六　渡邊氏は評判の昔堅氣のむづかしやでも、一家同樣先祖から因みを結ぶ澤井氏は、御苦勞人との噂ゆゑ、少しの錢ならお惠みあらうに、それを言はずにわれ〳〵の此の目の前で恥辱を取り、御主人までへ面目ない恥辱を取らすは大きな誤り、立寄らば大木の下、此後錢に困つたら、澤井氏へ申すがよい。

山平　われ〳〵とてもお側にて、又五郎殿へ取成して、渡邊氏の御迷惑にならざるやうにいたして遣らう。

海六　遠慮いたさず是れからは、お慈悲深い澤井殿へ無心に參るが早手廻しだ、然し眼前御主人の志津摩どのへは失禮だが、お氣に障らばわれ〳〵より、

船藏　お詫びをいたす、

三人　御免下され〳〵。

志津　あゝいや〳〵、何のお詫に及ばうぞ、かゝる小者が不所存より各方へも御配慮掛け、恐入つた次第なれど、他家の惠みを受けずとも父が日頃の心懸け、武士たる者の帶劍は第一の表道具、數なりませぬ某でさへ、世に名刀と稱されし帶せし刀は五郞正宗、何で澤井に劣らうや、とさ申すも矢張りお話しなれば、各方にもお心に、必ずお掛け下さりますな。

　　　　トよろしく思入にていふ、船藏是れを聞き咎め、
船藏　あゝいや志津摩どの、只今是れにて承はれば、御自慢たらぐ、お差料の彼の正宗の名刀を御祕藏あると仰せありしが、
山平　我々豫て聞き及びしは、此度御親父靭負殿より御懇望あつて正宗を、澤井氏より達ての御所望。
海六　元正宗は、又五郎どのが家の重器とせられしゆゑ、同藩にても名刀の異名に申す澤井正宗。
船藏　左すればそれなる一刀は、澤井氏より御親父が、お貰ひなされた、
三人　品でござるか。（ト是れを聞き志津摩ムッとして、）
志津　あいや御中言ではござれども、此の正宗の一刀は澤井より貰ひはいたさぬ、仔細あつて我が方へ取戻したのでござりまする。
船藏　すりや名刀は又五郎どのより、貰ひし品にあらずして、
山平　取戻されしと言はるゝなら、我人ともに知らざることゆゑ、
海六　後學の爲め此の場にて、如何なる仔細か我々へ、
船藏　其の來歷をお聞かせ、
三人　下されし。（トこれにておせい、おなかは囁さ合ひ後へはひる。志津摩思入あつて、）

志津 御懇望とあるからは、委しき仔細を此場にて、然らばお話し申すでござらう。（卜筌の入りし誂の合方になり） 抑々正宗の一刀は、元渡邊の重寶にて、先祖靭負が祕藏の名刀。さんぬる元和の戰爭に主君と共に難波表へ出張なして數度の軍功、敵は名に負ふ大阪方、一日味方大いに崩れ、名ある勇士の面々が多人數討死ありし中に、我が先祖にも則ち討死、されど烈しき戰ひゆゑ、敵も味方も折り重なり、屍を積んで見分ぬを澤井の先祖又左衞門殿、其の場にあつて正宗の、空しく敵の手に渡らん事殘念なりと踏み止まり、終に帶せし名刀を首尾よく手に入れ持ち歸られ、其の後天下一統の斯く泰平の御代となり、此の事委しく物語られ再び正宗我が家へ、お返しありしが其の頃は、祖父金右衞門幼年にて、なか〳〵かゝる名刀を帶することも叶はねば、成長なすまで澤井家に預り置いてたまはれと、即ち一書を取交し其儘にいたし置きしが、誰いふとなく其の後は澤井正宗と世にも聞えて、正しく澤井の重寶となりしを父が殘念と、存ぜしゆゑに兩家の祖父が取替したる約定書を證據となして先達て、取戻したる是れなる正宗、元々拙者が家の所有、必ず故なく貰ひしなどゝ浮說を信じ一家中へ、申觸らし下さるは近頃以て迷惑至極、仔細と申すは斯くの通り、各々方にも御會得あつて、此後ともに斯樣な儀を、決して口外下さりますな。

船藏 成程今のお話しは、幼少の折茶呑み話しに、故老の物語りしを、我々小耳に挾みしが、假令元は

山平　渡邊家の重寶にせよ、數年來預かり置けば澤井の所有。
海六　それを無理に取返されたを、直素直に渡された、澤井氏は結構人。
船藏　なんぼ律義な靭負殿でも、其の正宗を取揚げ娑アで、差替一腰送らぬは、是れがまことに蟲がいゝと、サ申さばお腹も立ちませうが、それに引替へはい〳〵と、お渡しあつた又五郎どの、我我感心、
三人　いたしてござる。（卜始終敵役三人志津摩へ掛けて言ふ、志津摩無念の思入にて、）
志津　假令如何やう貴殿方が仰せらるゝも、祖先の約束、世間の口には戶が建てられねば、浮說はやはり打捨て置くが武士の情でござらう。あゝ、いらざることにて暫時の隙入り、左樣ござらば何れも方、お先きへ一足御免下され。（卜行かうとする、船藏留めて、）
船藏　はて志津摩どの、よいではないか、益なきことを申し募り、
山平　此の儘お別れ申しては、何とやら心掛り、
海六　歸りがけに丹後前の風呂屋にて一呑みは、
三人　如何でござるな〳〵。（卜志津摩の手を取る、志津摩思入あつて）

志津　折角のお招きながら、最前も申せし通り、父が所用に下谷邊まで立寄らねば相成りませねば、失禮ながら某は、此儘お別れ申すでござる。

船藏　はて、是れは堅い〳〵、是非ともお供を願はねば、何やら物に角が立てば、

山平　御迷惑でも志津摩どの、

海六　平に是れより御同道を。

志津　あいや、用事もござれば今日は、何卒これにてお別れ申す。

三人　でも、此儘では。（ト志津摩の袖を捉へる、志津摩むつとして袖を振拂ひ、きつとなつて、）

志津　はて、しつこい、何れも、お先きへ御免下され。

ト唄になり、志津摩思入あつて杢助附いて花道へはひる、此の時後より以前のお清、お仲出て跡を見送り、

お清　ほんに今のお侍は、お小姓衆でもござんすか、美しいではござんせぬか。

お仲　あれで前髪がござんしたら、大津繪の鷹匠さん、役者のやうでござんせうな。

船藏　いや、兎角色が生白いと婦人はかれこれ褒めるものだが、いざ鎌倉といふ時は、お精靈の白茄子より鍋釜色のわれ〳〵でなければ功名手柄は出來ぬ。

山平　日頃小癪に障るから、澤井氏を褒めそやし、耄碌爺いの靭負めを惡しざまに申したら、猿のやうに眞赤になり、よほど腹を立つた樣子。
海六　もし手向ひでもいたしたら、われ〳〵三人力を添へ、小ツ酷い目に逢はしてやるもの、彼れも日頃の氣に似合ず、尻尾を卷いて行き居つたが、是れで癪が納りました。
船藏　然し是れなるお淸もお仲も、兎角ぴんしやんいたすから、いつそ是れから丹後前の風呂屋へ參つて呑み直さう。
山平　成程、それが宜しからう。（ト三人は吸筒を腰に附け立上るを、お淸お仲留めて、）
お淸　あゝもし、皆さん、まあよいではございませんか。
お仲　もそつとお遊びなされませ。
船藏　袖引き煙草で留めるなら、なぜ口說くのにうんと言はぬ。
山平　それともさつき申したことを、
海六　叶へる積りで呼び留めたのか。
お淸　又しても、御常談ばつかり、
お仲　そんなことは知りませぬわいな。

船藏 二言目には知りませぬわいなで、ごまかす奴等に構はずと、湯女でも相手に風呂屋へ行き、緣起直しに一杯やらう。

山平
海六 それがよろしい〳〵。

三人 さゝ、御同道仕らう。

ト大拍子になり、三人は茶代を置き、ひよろ〳〵して花道へはひる。お清、お仲跡を見送り、

お清 ほんに毎日うるさい人達、どこへ行つても鼻摘みを知らずに厭味なことばかり、切れ放れでも又よければ、讀みと歌でござんすが、吝嗇で大風なあの人達、

お仲 肴もなしで吸筒の瓢簞酒を一升ばかり、呑んだ擧句にあのお方へ喧嘩賣はうの無理難題、さんざ見世の邪魔をして、一人前が五十の茶代。

お清 ほんに呆れたしい〳〵坊、たゞでもよいがあの衆は、玩具によくある仕入れの面。

お仲 よくも揃つた般若にひよつとこ、わたしのやうなおかめでも、

お清 あんな外道は、（ト有合ふ茶碗の鹽を撒くを、道具替りの知らせ、）

兩人 眞平だねえ。（ト此模樣よろしく宮神樂にて、此道具廻る。）

（渡邊宅座敷の場）——本舞臺三間の間常足の二重、大和葺の軒口を見せ、向ふ一間床の間、山水の掛物、是れに續いて風雅なる違ひ棚、花溜に菊の花を澤山さし、此の下腰張りの茶壁、太鼓張りの襖出這入りあり、上手の方後へ下げて中窓の屋體、此の前四つ目垣、生花の植込み、石の燈籠同じく手水鉢、いつもの所枝折戸、下の方建仁寺垣の見切り、此の前松楓の立木、日覆より同じく釣枝、總て渡邊靱負宅座敷の體、爰に渡邊靱負袴裝一本差しにて、屋體上手に誂へ本行の風爐鑵子をかけ、此の脇誂への棚、これに茶道具一式あり、獨樂に茶を立て居る體よろしく、誂への兩吟にて此道具留る、と兩吟の文句の内、靱負袱紗さばきなどよろしくあつて、合方彈き流し、思入あつて、

靱負「不審、花開いて今日の春」とは、千家の流れを汲まれたる彼の山田宗偏が禪味を含みし自贊とやら、冬とはいへど菊月の今日は取分け暖かゆゑ、常の時雨に引替へて庭のながめもまた一入、好事の人を招きしがまだ一人も見えざるは、巣鴨染井の造菊でも見物に行かれしか、何にいたせ今朝より、用意をなせし新茶の口切り、亭主も客も獨樂では、さて〳〵風情のなきことぢやなあ。

ト又兩吟になり、靱負此内本行の手前あつて、トヾ茶を立て呑むこそ、是れと一杯に唄切れる、跡合方になり、

それに附けても今日は、非番の閑暇に悴志津摩は、今朝よりして中間の杢助を同道なし、神田邊へ參りしが、いまだに歸宅いたさぬが、大分遲いことではある。

ト案ずる思入にて、驛路を鳴らす、是れにて下手の襖を明け、林平縞の袴若黨のこしらへにて出來り、

林平　はツ、何ぞ御用にござりまするか。

靭負　おゝ林平か、して、悴はいまだ歸宅いたさぬか。

林平　未だお歸り遊ばしませぬ。

靭負　年老いし杢助が供に參れば、遊里などへ誘引はいたすまいが、彼れは未だ江戸表は今年初めての出府ゆゑ、土地は一向不案内、歸らぬ内は何となく、案じられてならぬわい。

林平　成程それも御尤にはござりまするが、日頃よりお物堅い若旦那樣、もう程なく御歸宅遊ばされませう。（ト林平思入あつて懷中より封書を出し）つい申し上げまするを失念仕つりましたが、只今郡山より御狀が屆きましてござります。（ト出す、靭負取つて、）

靭負　なに、聟荒木方より屆きし書狀とな、して、飛脚が持參いたせしか。

林平　御意にござりまする。（ト此内靭負封を解き、内より二通の書狀を出し、開き見て、）

靭負　おゝ、こりや、娘谷よりも狀が參つた、是れでは彼れも息災と見えるな。

ト此内靭負は狀を讀む、林平思入あつて、

林平　承はれば荒木様には、此の程より譽田家へお召抱へと申すことにて、既にお目見得も相濟みしと承はりましたが、いよ〳〵御仕官にござりますか。

靭負　おゝ、そちも悦びくれ、此の書狀の趣きでは娘谷を媒介ありし、彼の倉橋彌三右衛門殿が推擧により、御目見得も首尾よく相濟み、まだ食祿は極らねどお召抱へになりし由、大名多くある内にも譽田殿には世に聞えし武藝好きの殿様なれば、必ず聟が腕前では御意に叶ひて追々に、立身出世いたすであらう、娘が緣に聟舅、老屈しては好い耳の便りを聞くが何よりか、壽命の藥に相成るわい。

林平　それは結構なことにござりまする、してお谷様には、まだお目出度の御沙汰はござりませぬか。

靭負　おゝ、一子は夫婦の鎹ゆゑ、早くお谷にまうけさせ、初孫の顔が見たいものぢやが、まだ此の書狀に認めなければ、左様な沙汰はないと見える。不器用な奴である。

林平　最早御婚禮遊ばしてより、もう半年もたちますれば、やがてお目出度の御沙汰がござりませう。此林平も旦那様の、お悦び遊ばすお顔が少しも早う拜したうござります。

靭負　然し達者で居りさへすれば、先づ一安堵と申すものぢや、はゝゝゝ。谷が自筆の此の文は譬にもいふ女の筆、まゐらせ候でくだ〳〵と大分長い文言ぢやわい。

ト靱負伴の文を見てゐる、林平思入あつて、

林平　いやなに旦那樣、其のお文に附きまして、お目に掛けます文がごりまするざ。（ト懐より幕明の文を出し、）只今小用に參りませうとお勝手口を出ました時、計らず落ちて居りましたを、取上げまして見ました所、宛名は澤井と認めありて然も女の書いた文、もしやと存じて拾ひ取り、持參いたして參りました、然し落した其人が、嘸尋ねて居りませう。

ト出すを靱負取つて見て、思入あつて、

靱負　宛名ばかりでそれぞとは、慥に中は知れねども、こりや遊里より參りし文、彼れも未だ無妻ゆゑ心の迷ひに此程は、繁々遊里へ通ふよし、意氣地と張りの惡所ゆゑ、諺にいふ廓の金、詰る習ひに人知れずお上よりお預りの、いや、上よりお咎めなき内に一家の誼に遠からず、異見を言はねばならぬわい。（ト思入にていふ、此時奥にてお歸りといふ聲する、林平心附き、）

林平　あれは慥に、若旦那樣のお歸りと見えまする。

靱負　なに、忰志津摩が歸りしとか。

林平　どりや、お出迎ひを仕つりませう。

ト林平奥へはひる。此の内靱負茶道具を片附ける。合方になり、下手奥より以前の志津摩出來り下手

に住ひ、

志津　父上、只今歸宅いたしましてござりまする。

靱負　お丶志津摩か、いつより歸宅の遲いので、大抵案じたことではない、して今日は神田邊より、淺草邊まで見物いたして參つたか。

志津　はツ仰せの通り今日は邸を出で、日本橋を北の方へと志し、神田の社へ參詣なしそれより湯島天神上野東叡山、不忍邊まで見物いたさうとは存じましたが、ちと仔細あつて神田限りで立歸つて、ござりまする。

靱負　左樣でありしか、其方とても是れよりは永らく當地に勤番なれば、又其の内に參るがよい。お丶、まだ炭もかれず、丁度湯加減もよろしいから、父が手前の一服は如何ぢやな。

志津　有難うはござりまするが、今日はお預けにいたしたうござりまする。

ト志津摩は始終俯向き、鬱ぐ思入、靱負これを見て、

靱負　最前より何となく、常に替りし顏の色、そちは氣分でも惡いか。

志津　はツ仰せの通り先程より、心惡うござりまする。

靱負　あ丶、腹痛でもいたすか。

志津　いえ、病氣ではござりませぬ。

靱負　なに、病氣でないとは。

志津　父上、口惜しうござります。

靱負　何と申す。（ト合方きつばりとなり、志津摩思入あつて、）

志津　斯く某が血色に顯れまする無念の元は、今日神田明神へ參詣なさんと境内の鳥居先まで參りし所、傍への出茶屋に同藩士牛窪はじめ神村大島、三人共に吸筒の酒に何れも酩酊なし、此の志津摩に合をせよと辭退いたすも聞入れず、猪口を無禮の惡勸め、元より下戸の某ゆゑ困却なせしを横合より、見兼ねて中間杢助が詫びを無禮と突き退けし、拍子に帶せし脇差が柄より折れて二つになりしが、生憎中身は竹篦ゆゑ、竹光なりと大音に我を蔑なす惡口雜言、それのみならず先達て父上より差料にお讓り下さる此の正宗、これは元々澤井家より貰ひしなど、又五郎を、褒めそやしたる無禮の詞、返す返すも殘念ゆゑ、いつそ彼等を討果し、其場を去らず切腹と、思ひしなれど日頃より、父上の御教訓は爰なりと、ぢつと怺へて歸りしが、是れと申すも杢助が竹の中身に面目なく、此身に及ぼす恥辱の段々、それに附けても重代の此の正宗を差料に一旦父より賜りしが、これを帶して居る時は一家中の譏りを受け、此の後如何なる恥辱をば此身に受けんも計

り難し、何卒是れなる正宗は、再び澤井へ此儘にお返しなされて下さりませ。

ト思入あっていふ、靱負これを聞き、扨はといふこなし、

靱負　扨はそちが顏色の惡きはかゝる原因なりしか、それに附けても牛窪はじめ、彼の三人は日頃より澤井が無二の友にして、遊里へ常に同伴なし、よからぬ噂も豫てより靱負が耳にはひりしが、又五郎とは親戚の因みに是れまで打捨て置き、折がなあらば說得なし、異見を加へ遣はさんと思ひしことも前後となり、そちを蔑なし何事をか引出さんと惡口せしも、是れ皆澤井が深き奸計、短氣を出さず堪忍の二字を守りて其儘に、よくぞ歸宅いたせしぞ。

ト此の以前より以前の林平杢助下手に居て樣子を聞き、此の時枝折戸を明け恐る〳〵前へ出で平伏して、

林平　只今の御樣子は殘らずあれにて承はりましたが、かゝる恥辱を若旦那がお受けなされし元はといへば、是れ皆杢助が不所存ゆゑ、お名を汚せし申し譯に、身でも投げて死ぬと申して、只今部屋から駈出しましたをやう〳〵留めて此の以後を、愼みますやう及ばずながら、私から申し附けましてござりまする。何卒今日の不調法、御免なされて下さりませ。

杢助　今林平の申し上げました通り何とお詫びをいたさうと途方に暮れて居りましたが、旦那様よりお

渡しの本身が重うござりますゆゑ、つい竹光と取替へましたも老耄なした杢助が一生の不調法、死んでお詫びと覺悟までいたした所へ林平が、留めた尾に附き面目ない、親仁が顏へ面を冠り、是れまでお詫びに參りました。

林平　年寄りました杢助ゆゑ、以來をきつと愼しませますから、何分今度の不出來しは、御免なされて、

兩人　下さりませ。（トよろしく詫びる、靱負思入あつて、）

靱負　今と相成り其方が、假令一命捨てたとて忰が恥辱が此儘に、雪げる譯にも至らねば、決して無分別を出さぬがよい。殊に是れまで中間小者が、木刀さすは昔より諸家の習ひに、左程まで恥辱に相成らねど、當節一般武藝の流行、他家の聞えも面目なければ、以來はきつと心を用ひよ。

志津　父上のお詞あれば某とても、杢助の罪は問はねば、死なうなど〻無分別は出すまいぞ。

林平　これ杢助、旦那樣のお慈悲のお詞に此上ともに氣を附けて、忠義をせねばならぬぞよ。

杢助　何の空に思ふものか、假令この儘お手討ちになつても濟まぬ此身の不埓、此の御恩は死んだとてどうして忘れてよいものか。

靱負　篤と會得いたしたら、最早爰に用事はない。

志津　少しも早く部屋へ參り、休息いたしたがよいぞ。

林平
杢助　えゝ有難うござりまする、左様なればお二人様。

靱負　さゝ、早く參つて休息いたせ。（ト是れにて林平杢助は辭儀をして立上り、下手へ來て、）

林平　あゝお慈悲深い旦那樣、これ杢助、仇疎かに思つては、其の身に罰が當るぞよ。

杢助　どうして忘れてよいものか、おれが命の拾ひものだ。

林平　どりや、部屋へ行つて、

兩人　休息しよう。（ト合方になり、兩人捨ぜりふにて下手へはひる、靱負志津摩跡を見送り、）

靱負　小人罪なし玉を抱いて罪ありと、彼れも日頃の愚直ゆゑ、老屈なして竹光に中身を替へしばつかりに思はぬことが恥辱と相成り、打ち凋れての今の詫言。

志津　僅の扶持を頂戴する中間でさへ恥を知り、既に一命捨てんとまで思ひ詰めたに引替へて、數代お家の祿を食み、作事役を勤めながら、橫道者の又五郎。

靱負　其上それなる正宗を、我が家に永く留め置かば、如何なることを申し觸らし、それが互ひの遺恨となり、

志津　萬一事ある其時は、取つて返らぬことなれば、

靱負　如何にもそちが詞の如く、此一刀を返した上、祖先よりして兄弟の因みを思ひて交りを、斷たずに

彼れへ異見を加へ、

志津　渡邊澤井の兩家とも、後の榮えを計らひて、

靭負　後とも云はず、是れより直に、刀を澤井へ返し與へん。

志津　そりや父上には、是れより直に、

靭負　猶豫いたさず持參なせば、それ、悴羽織を。

志津　はッ。（ト亂れ箱の羽織を志津摩取つて靫負の肩へ掛けるを、道具替りの知らせ、）

靭負　行つて來るぞよ。

ト羽織の紐を結ぶ、志津摩は件の正宗を風呂敷へ包む、此の模樣よろしく合方、時の鐘にて此道具廻る。

（靫負殺しの場）――本舞臺四間通し中足の二重、本庇 本緣附蹴込より緣の下を見せたる出入り、向ふ床の間、下手一面の襖、上の方一間障子屋體、いつもの所枝折戸、是れより下の方一面の黑塀、此前見越しの松。上手柴垣の見切り、日覆より松の釣枝、總て澤井宅の體。爰に燭臺を點し酒肴など取散らしあり、床の間に誂への碁盤、同じく碁笥、二重に以前の船藏、山平、海六酒を呑み、丑内紺看

板の中間にて酌をして居る、此見得よろしく、稽古唄にて此の道具留る。

丑内　お銚子の代り目、さあ、一つお酌をいたしませう。

船藏　いや〳〵構はつしやるな。時に何れも、今日神田の境内にて文使の雁助から我々共に屆いた文、定めて中を御覽じたらうな。

山平　そりやもう戀しがつて居る彼等が文、開封遲しと讀んでは見たが、矢張りいつもの迎ひ文、晩に來てくれより新文句はござらぬ。

海六　それに引替へ拙者のは遣手や朋輩の代筆ならず、一入床しいあれが自筆に、讀んで見ても鹿尾菜の行列、さつぱりと分りませぬ。

丑内　いや何れも樣のお株のお惚け、こりやたゞは聞かれません、御褒美に一つお合をいたしませう。

船藏　おゝ遣はさう〳〵、然し最前碁のお相手に、我々共をお招きに相成つたが、して澤井氏には何れへ參られたな。

丑内　旦那樣は今し方、據ないお客來でお玄關までお出でなされましたが、もう是れへお出でゞござりませう。

船藏　主人が此場に見えなくては、何となく酒席が淋しい、早く其方玄關へ參り、御催促申して來やれ。

丑内　へい／＼畏りました、旦那樣も堅苦しいお客でお氣のない御樣子、どれ箒でも立てゝ來ませう。

ト丑内立ちかゝる、此時襖の内にて、

又五　あいや、お迎ひなくとも只今それへ。

丑内　や、あのお聲は、

三人　又五郎どの。

ト合方になり、奥より又五郎羽織袴大小好みのこしらへにて出來り、上手に住ひ、

又五　思はぬことにて暫時中座、失禮御容赦下されい、それに附けても今日は餘り徒然に日暮れより何れも方をお招ぎ申し、圍碁の勝負を決せんと存じたなれど心に任せず、いつそ御酒をば獻じたく、思ふ矢先へ野暮な客が舞込んだので今の中座、平に御免下されい。

船藏　あゝ、いや／＼其の御挨拶では痛み入る、毎夜貴殿のお招きにて御馳走受ける拙者共、殊に昨夜は拔けがけして、銘々北廓の惚けを申し、

山平　口說と愚痴を並べ立て、言ひたいことを申して居れば、其の御配慮には及び申さぬ。

海六　それに附けても澤井氏へ、お見せ申す品がござる。牛窪氏、それ夫の品を。

船藏　成程とんと失念いたした。（ト懷を搜すことあつて）やゝこれは奇妙だ、大事な文が見えないが取落

せしか、はてさて不思議。（トいろ／＼搜すことある、山平、海六思入あつて、）

山平　なに、大事なお文を貴殿には、

海六　取落されたと云はるゝか。

船藏　神田の社内で燕屋から預つて來た大事な文、澤井氏へお屆け申し、奢らせようと存じたに、どこへ落してしまひしか、こりやいつそ裸になり、念の爲め搜して見よう。

（ト船藏襦袢一つになる、又五郎思入あつて、）

又五　貴殿方には北廓より文が來たとて受賃に、拙者に酒を奢らせようとお申合せの計略でも、文が見えねばたゞでは濟まさぬ。こりや牛窪氏には、何ぞお奢りなされませ。

丑内　こりや旦那樣のおつしやる通り、今更ないとは胡散なお詞、此の罰金には三ツ物と酒を五升、前町へ申し付けて參りませうか。

船藏　あゝこれ／＼、文をなくしたは拙者が不念、罰金代りに奢れとの仰せも至極御尤だか、昨夜の愉快にお恥かしいが財布は腹をすつぱり下し、金氣といつたら大小より外に貯へ一文なしゆゑ、此儀は平に御容赦々々。

又五　無いとあるなら是非もないが、左樣なら此場にて、何ぞお隱し藝でもお遣りなされ。

山平　成程、これはよい御趣向。
海六　牛窪氏には此の場にて、
山平 海六　お隱し藝をお出しなされ〳〵。（ト是れにて船藏是非なく、）
船藏　えゝ罰金代りだ、仕方がござらぬ、てんぽの皮、やッつけませう。

ト誂への甚句になり、船藏よろしく可笑味の振事あつて納まる、此時下手奧にて頼まう〳〵といふ聲する、丑内心附き

丑内　や、又どなたかお出でと見える。どれ、お取次をいたしませうか。

ト丑内奧へはひる、又五郎思入あつて、

又五　酒宴半へ心なく、又候誰が參りしが、はて無粹な奴ではあるわい。（ト以前の丑内出て、）
丑内　もし旦那樣、渡邊靭負樣がお出でゞござります。
又五　なに靭負殿がござつたとな、折の惡い此の客來、暫く玄關にお控へ下されと、其方早く申して參れ。
丑内　はッ。（又奧へはひる、又五郎思入あつて、）
又五　滅多に是れまで我が宅へ參つたこともあらざるに、今宵に限つて推參なせしは、はて心掛りなことでござる。（ト是れにて三人顏見合せこなしあつて、）

船藏　こりや、靭負めは神田にて、悴志津摩へ與へたる恥辱を雪ぎに參つたのか。
山平　但しは貰ひし正宗と、蔑なしくれたを遺恨に思ひ、
海内　其の仕返しにうせをつたか、何れそれ等の、
三人　用でござらう。
又五　すりや靭負には遺恨を含み、拙者が宅へ參りしとな。
船藏　御存じなきゆゑ貴殿には、其の御不審は御尤、實は今日神田の社内で、彼れが悴の志津摩に出逢ひ、
山平　かねぐ貴殿が御懇望の彼の正宗の一刀は、元澤井家より貰ひし品と思ふ存分嘲弄なし、
海六　恥辱を與へて歸せしが、さてはそれを恨に思ひ、彼の名刀を返しに來たか、又は遺恨の仕返しにうせ居つたか、二ツ、一ツ、
船藏　どの道脫れぬわれ〳〵三人、どこが何處まで澤井氏の、お力となり老ぼれめを、事に臨まば、
三人　眞ツ二つに。（ト立ちかゝるを又五郎留めて、）
又五　はて、それとても面會なし、仔細を聞かねば善惡とも、物の道理が分らねば、急かずと拙者に任せあれ、然しさういふ幸先では、各〻方には此の席にお出でのないがよろしからう。

船藏　然らばわれ〳〵三人は、

山平　此のお座敷から二階へ廻り、

海六　こつそり吉左吉、

三人　相待ち申さう。

又五　如何にも、それが宜しからう、さゝ、早くござれ。

三人　又五郎殿、御免下され。

ト是れにて三人件の酒肴を片附けなどして、上手障子へそつとはひる。此の内又五郎衣紋を直し酒の醉を隱し、思入あつて手を拍つ、是れを聞いて以前の丑内奥より出で、

丑内　はツ。

又五　渡邊氏をお通し申せ。

丑内　はツ。（ト下手へ向ひ、）いざ、是れへお通り下さりませ。

靭負　然らば許しやれ。

ト誂へのしんみりした合方になり、奥より以前の靭負羽織袴大小にて、正宗の刀箱を抱へ出來り、又五郎は靭負を上手へ請ずる、是れにて靭負は上手、又五郎は下手へ住ふ。此の内丑内茶煙草盆を出

し下手に控へ居る、又五郎酒の醉を隱し、思入あつて、

又五　思ひがけない渡邊氏には、夜中と申し此のお運び、ようこそ御入來下さりました。

靭負　同家中でありながら繁き勤めに取紛れ、つい御疎遠に相成りしが、其許にも御健勝にて祝着に存じ申す。

又五　靭負殿には、御丁寧なる其のお詞、御疎遠いたすは互ひの事、某とても先代より兄と敬ふ貴殿ゆゑ、お目に掛れば何とやらお懷かしう存じまするが、して、夜に入つての御入來は、如何なる御用にござりますな。

靭負　如何にも夜中に推參せしは、ちと面會をいたした上、込入つたる用事あれば、わざ〱靭負參つてござる。

又五　御用があると仰せなれば、そちはお茶の用意をしやれ。

丑内　畏りました。（ト丑内奧へはひる。又五郎膝を進め、）

又五　して某へ御用とは、如何なることでござりまするな。

靭負　いや、用事と申すは外でもない、讓り受けたる此の正宗。（ト件の刀箱を前へ出す、）

又五　なに、正宗を。（トぎつくり思入。）

靭負　今宵又候其許へ、此の一刀を返上申す。

又五　何と言はるゝ。（ト誂への合方になつ、靭負思入あつて、）

靭負　今改めて申さずとも、此の正宗の來歴は、互ひの祖父が約束なし、證書までを取替し、數年の間其許の家へ預けて置きたるを、先頃忰へ讓り度く證書を返して正宗を拙者方へ取戻し、則ち志津摩へ讓りしが、名に負ふ稀なる名作ゆゑ、其の持主を選むとあれば、或る相者に劍相を占ひくれと見せたるに、案に違はず忰には相性合はずと相者の敎へ、かゝる名刀を帶する時は必ず家に祟りあらんと、思へば片時も差置き難く、それゆゑ再び其許へ返上いたせば、以前の如く永く澤井の重器となし、御祕藏あつて然るべし。仔細と申すは斯くの通り、いざ正宗を改めて、さゝお受取り下されい。

ト思入あつていふ、又五郎不審の思入にて、

又五　そりや正宗が御子息の、性に合はぬと仰せあつて、拙者に再び返さるゝは近頃以て不審千萬、如何にも是れが其砌り間もないことなら是非もなけれど、取戻されて最早三年、年月經つてお返しあるは、さては刄が鈍きゆゑ、物の用に立たざれば、こりや拙者へお返しあるか、何にいたせ今となり、俄の仰せは其の意を得ませぬ。こりや靭負殿、御未練でござりませう。

勒負　いや〳〵、左樣に仰せあるは道理に似たれども、名に負ふ名譽の五郎正宗、其の切味は替らねど家に祟りをなすとあれば、是非なく貴殿へ返上申すが何しに未練と言はるゝぞ、辭退めされず御懇望の此の一腰は澤井氏、さゝ、お受取り下されい。

又五　成程勝れし名刀ゆゑ、其の切味に替りはないと仰せはあれど畑水練、貴殿が詞のみにては某篤と胸に落ちねば、こりや刄表に何事かござるに相違あるまい。

勒負　いや、其の疑ひは御無用にめされ、其切味は某が篤と見屆け罷りあれば、其の一儀なら請合ひ申す。

又五　さほど慥に仰せあるは、それなる刀で貴殿には、實地をお試しなされしか。

勒負　如何にも忰が當七月、お國表で試してござる。

又五　何と。

勒負　御疑念晴しに正宗の其切味を試せしこと、此場に於てお話し申さん。（ト合方きつばりとなり。）そも初秋の吉例に、お國表は武家町人打交りての盆踊り、見物群集の其中にて、御身の家來平六と我が家來の數馬の兩人、酒興の上にて口論なし、終に數馬は平六の刄に掛りて相果てしを、忰志津摩が聞き及び、人もなげなる振舞なりと、早くも其場へ馳附けて家來の敵と渡り合ひ、其正宗の

一刀にて難なく平六を打つて捨て、其の切味を試せしが、餘の刀劍の及ばぬ業物、かゝる實地を經驗なせば、よも鈍りしとは言はれまじ。澤井氏、これにて御疑念お晴らし下され。

ト此の內又五郞無念のこなしにて、

又五　ふむ、すりや此正宗にて當七月、我が家來の平六を、志津摩殿が討たれしとか。

靭負　則ち證據は名刀ながら其時よりして刄表に、聊か曇りが生じたり。

又五　なに、刄表に曇りがあるとな、（ト又五郞思入あつて件の刀を拔き、きつて見て、）さては非命の死を遂げし、拙者が家來平六が、無念の血汐であつたるか。（ト刄表を見て無念のこなし。）

靭負　かゝる切味試せし上は、疑ひ晴らして澤井氏、相性惡き刀ゆゑ、今日改め返上なせば、何卒御受納下されい。

ト件の刀箱を突附ける、此內又五郞は始終刄表を見詰め居て、此時無念のこなしにて堪へ兼ね、

又五　その切味を、

ト思入あつて件の刀にて靭負へ切つて掛る、靭負これを扇にてちよつとあしらひ、トヾ刀を打落し、につたり思入あつて又五郞を突廻し、有合ふ碁盤を見事に切る、是れにて又五郞は下手へどうとなり、

やゝゝゝ、こりや碁盤を、何ゆゑに。

勅負　おゝ、如何にも碁盤は貴賤となく、圍碁の勝負に用ひれど、是は卽ち四足にて取りも直さずこれ畜生。

又五　何と。

勅負　犬に等しき日頃の行狀、此の名刀を帶する上は、今日よりして其方が、身の放埓を改めよ。

又五　なに、改めよとは。

勅負　やあ、知るまいと思ひ居るか、慥な證據は我が家來が、最前汝が門口にて拾ひしこれなる遊里の文。

ト懷中より以前の文を出す、又五郎びつくりして、

又五　どうしてそれを。（ト取りにかゝるを突廻し、勅負又五郎を引きすゑ、）

勅負　えゝ、こゝな犬侍めが、（ト合方きつぱりとなり、）先達より朋友と屢々遊里で現をぬかし、夜毎に通ふそちが放埓、我が耳に入つたれどまだ壯年の無分別、酒興の上の廓通ひと聞かぬ振りして今日が日まで心に納めて居つたれど、いよ〳〵募る放埓無賴、高い聲では言はれぬがそちが役の作事方、諸職人へ遣す金子を上より受取り、下々へは渡さず汝が私用となす、是れ皆遊里で遣ひ捨て上を僞る大罪人、われが愚に比較して、此邪曲を知るまいと、思へど勅負は存じ居るぞよ、

斯かる不忠の侍と知らで是れまで誼を思ひ、祖先に盡す我が義心、蔭になり日向となり家老中へも汝が執成し、褒めそやせしが面目ない。それに何ぞや只今も、よく某を討たうとしたな。これ、此正宗は汝等が鈍き腕で骨のある此の靭負は切れぬぞ、それゆゑ幸ひ四ッ足の碁盤を切つて畜生の穢れに譬へし犬侍、とさ申したが無念なら、日頃の行狀改めてまことの武士に改心なせ。斯くまで異見を加へても改心なさねば是れまでの、因みも則ち今日限り、汝を此の儘引捕へ繩打つて家老中へ、此の靭負より差出さうか。

又五　さあ、それは。

靭負　但しは前非後悔なし、眞人間に相成るか。

又五　さあ、それは。

靭負　繩打たうか。

又五　さあ。

靭負　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。

靭負　えゝ、こゝな横道者めが。

ト靭負思入あつて又五郎を突放す、是れにて又五郎は、むゝと詰りしこなしあつて氣を替へ、形を改め前へ出で、兩手を突き、こなしあつて、

又五　今の御異見骨身にこたへ、恐入つてござります。

靭負　何と。（ト誂への合方になり、又五郎思入あつて、）

又五　我が邪曲の行ひを誰知るまいと思ひしに、天道はこはいもの、貴殿が今の御異見に今日といふ今日目が覺めて、是れまでなせし此身の不埒、若氣の至りに跡先の考へもなく遊里へ通ひ、上より預かる作事方の金子を竊に遣ひ捨て、私慾に耽りし身の越度、是れを餘人に聞かれなば言はずと知れた上の御處置、切腹なすか左もなくても禁獄になる又五郎、さすれば數代續きたる澤井の家名斷絶なし、上への不忠祖先への不孝、どの道命を捨てねばならぬ、それを一家の誼ある貴殿に聞かれたばつかりで、他聞を憚り此樣に、事を分けたる今の御異見、向後心を改めて遊里通ひを思ひ切り、早速金子調達なし、諸職人にもそれ〴〵拂ひ、此上とも身の行狀を愼みて忠勤を勵みますれば、何卒此末穩便にかゝる惡事を他の者へ、お漏らしなされて下さりまするな、あゝ是れが餘人であつたなら、此身は直に繩目の恥辱、御思慮深き靭負殿、殊には先祖の因みを思はれ父にも勝る今の御異見、此世は愚末代まで、此の御恩は忘れませねば、返す〴〵も御他言なく、猶

此上のお執成し、偏に願ひ奉つりまする。

又五郎始終酒の醉を隱すこなしあつて言ふ、靭負是れを聞き思入あつて、

靭負　惡に強きは善にもと、左樣に先非後悔なし身の行ひを改めて、謹愼の身とならるゝなら、元々一家同樣の澤井の家の浮沈にも拘はる儀なれば　某も、此の上力になり申さん。又今日までかゝる事口外いたさぬ程なれば、何しに此後他言いたさう、今の異見に此後とも、曲りし心改めて直なる人に相ならば、

又五　昔に替らぬ同家の誼、

靭負　則ち君子は罪を憎み、

又五　犯せし人を憎まねば、

靭負　弟と思ふ澤井氏。

又五　兄と敬ふ靭負殿。（ト時の鐘、靭負思入あつて）

靭負　あの鐘は最早亥の刻、夜更けぬ内に歸宅いたさう。（ト靭負立ち上る。）

又五　なに、最早御歸宅めさるとな、取込みゆゑにお茶さへも、碌々上げぬ此の失禮、何卒御容赦下されい。

靭負　何の〳〵、此の靭負こそ老の一徹、怒りに任せ失禮を申せしことは必ず共に、お心に掛けられな、左樣ござれば又五郎殿、お暇いたすでござらう。

又五　こりや、渡邊氏のお立ちなるぞ。（ト又五郎下手へ向ひ手を拍つ、靭負思入あつて、）

靭負　あゝいや、決してお構ひあるな。

ト靭負下手へ行き掛ける、此内又五郎は思入あつて燭臺の明りを吹消す、靭負びつくりして、

やゝ、こりやどうして明りを。

ト思入あつて身構へをする。此内又五郎は件の正宗を抜き、闇がりの思入にて探り〳〵靭負に切つて掛る、靭負身を躱しきつとなり、

さては心を改めると、油斷を見せて某を、欺し討ちにする計略なるか。何ちよこざいな。

ト靭負抜合せ、是れより又五郎とちよつと立廻り、よき見得にて誂への鳴物になり、闇がり探り合ひ烈しき立廻りになり、トゞ靭負に切り立てられ又五郎危くどうとなる、此の以前より丑内緣の下に忍び居て、よき時分靭負を目がけ、緣板より刀を突通す、是れにて靭負太股を突かれどうとなり、疵口を押へ思入あつて、

やゝゝゝ、油斷をなして手を負ひしか。

ト無念の思入、此時上手屋體より、以前の船藏、山平、海六何れも拔身にて手燭に火を點し持ち出で、

三人　又五郎殿、われ〳〵もお助太刀申せば、お心丈夫に思はれよ。

又五　忝ない。

ト靭負へ切つてかゝる、是れより鳴物替つて、トヾ靭負四人を相手に危ふき立廻りあつて手負ひになるを、又五郎疊みかけ、トヾ靱負を切倒し、ほつと思入、皆々見て、

四人　こりや、老ぼれめを仕留められしか。

ト是れにて又五郎靭負を蹴返し、きつと見得。時の鐘、合方になり、

又五　日頃懇意の因みによつて、何れも助太刀下すつて千萬忝うござる。さるにても、遺恨重なる渡邊靭負、よくも最前又五郎を畜生に譬へたな。まつた是れなる正宗も、碁盤を切つて四ツ足の穢れを與へし憎き老ぼれ。（ト靭負の死骸を踏み躪り、唾をかけて無念の思入あつて、）今ぞ澤井が止めの一刀、思ひ知れ。（ト又五郎宜しく靱負へ止めを差し、血刀を拭ふ。皆々小聲になり、）

船藏　して、此上は澤井氏、此場を立ち退く、

三人　御所存でござるか。

又五　かねて御存じ知らるゝ如く、某始め貴殿方にも、上より預かる作事の金子、遊里で殘らず遣ひ

捨てし悪事の段々露顯いたさば、此身の大事に及ばんと、心も心ならざるゆゑ、疾くより逐電なさんと思ふ其の幸先きへ是れなる老ぼれ、我を畜生同樣に蔑なすのみか我々が、悪事を氣取りし憎き靭負、どうせ立ち退く行き掛けの駄賃に首尾よく討つて捨て、此の正宗を所持なして是れから逐電なす所存、何れも方にも御油斷なく、人目に掛らぬ其内に、支度を調へ此の場をば、少しも早くお立退き下され。

船藏　すりや貴殿には、此の場をば、

山平　疾くより逐電なす心か。

海六　罪科はのがれぬ我々三人、

三人　然らば是れより、

又五　後日に面會いたすであらう。

三人　おさらばでござる。（ト暇を告げて下手へはひる。）

丑内　して旦那には、是れより何くへ。

又五　あこれ。（ト邊りへ思入あつて丑内へ囁く、丑内呑み込み）

丑内　今宵の闇を幸ひに、

又五　片時も早く此塀を、さゝ、支度いたせ。

丑内　はッ。

ト四邊へ思入あつて、丑内の肩を足代にして塀を乘越え逃げてはひろ。此時下手より杢助出來り、是れにて入替つて下手へはひろ。合方。

杢助　喧嘩でも始まつたか、何にしろ旦那のお身の上、さうだ〳〵。（ト言ひながら枝折戸を明け内へはひり、靭負の死骸を見てびつくりして）やゝゝゝ、こりや旦那様を、人殺し〳〵。

ト逃げようとするを、以前の丑内窺ひ寄り、

丑内　えゝ、やかましい。

ト後より切倒し、止めを刺して蹴返し、刀を口へ銜へ下手塀際の松の木へ登る、此時花道揚幕の内にて人音するゆゑ、丑内びつくりして塀よりあわてゝ向うへ飛びおりる。早き合方ばた〳〵になり、花道より以前の志津摩羽織袴大小、林平袴大小股立ちにて、手丸提灯を持ち出來り、花道にて、

志津　合點行かざる先程よりの胸騷ぎ、それに附けても父上には、先刻澤井へ正宗を御持參あつて最早二た時、かゝる長座は心得難し。

林平　何にいたせお歸りの、遲いは合點が參りませぬ。

志津　表へ廻るまでもない、庭口より案内いたせ。

林平　はッ。（ト兩人舞臺へ來り、林平枝折戸の明けてあるを見て）やゝ、こりや庭口が明け放し、（ト提灯にて内を透して見てびつくりして、）やゝ、夥しい此の血汐、こりやたゞ事ではござりませぬ。

志津　なに、血汐が滴りあるとな。（ト是れにて志津摩つか〳〵と内へはひり、件の死骸を見て、）やゝゝや、こりや、父上には餘程の深手。それ、燈火をこれへ。

林平　はッ。（ト提灯を出す、志津摩思入あつて、靭負を抱起し、）

志津　父上、お心を慥にお持ちなされ、父上樣々々。こりやもう息は絶え果てたか。

ト志津摩死骸に取附き、愁ひの思入、此の内林平杢助の死骸を見て、

林平　こりや杢助親仁も諸共に、敵なき最期をいたせしか。

志津　何にいたせ屋内には、人音なきこそ不審の一つ、察する所父上を討ちたる者は此家の主人。

林平　又五郎めでござりまするか。

志津　さては日頃の誼を忘れ、我が差料の正宗を、返せしことを遺恨に思ひ、

林平　欺し討ちとは卑怯未練、

志津　もう一足早くんば、おめ〳〵不覺は取るまじきに、思へば〳〵。

林平　若旦那樣、

志津　林平、（ト兩人顏見合せ、林平提灯を引くを道具替りの知らせ、）

殘念なことをいたしたなあ。

ト志津摩死骸に取附き、泣落す、林平矢張り愁ひのこなし、此模樣よろしく、時の鐘早き合方にて、道具廻る。

（矢部邸奧殿の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う九尺の床の間、上の方違ひ棚下の方張附の壁、床に大幅の掛物同じく香爐の置物などよろしく、上下折廻しの杉戸出這入りあり、日覆より同じく張壁の大欄間を下し、舞臺前一面に薄緣を敷き詰め、總て矢部邸奧殿の體、爰に硯蓋鉢肴など立派な廣蓋へ並べ、銚子、杯臺、上下に燭臺を照しあり、上手に矢部城五郎、其次に生田官兵衛、下手に進藤野守之助、山野四郎左衞門何れも袴裝一本差し旗本のこしらへ、後刀掛に刀をかけ、服臺に羽織を載せあり、上下に○△腰元にて酌をして居る、此の見得誂への琴の手ごとの唄にて、此の道具留る。

○　何れも樣には、御遠慮なく、

△　もそつとお過し、

兩人　遊ばしませ。（ト腰元酌をする、官兵衞杯を取り思入あつて、）
官兵　存じ寄らざる矢部氏のお持成、宵より拙者分を過し、大層酩酊いたしてござる。
野守　斯く朋友が夜會の催し、樂しき酒宴の席に列なり、
四郎　十分馳走に預るも、所謂これぞ泰平の腹鼓。
官兵　これと申すも神君の、皆御餘光と申すもの、實に有難い、
三人　御代でござるな。（ト誂への合方になり、城五郎思入あつて、）
城五　こりや何れもの仰せの如く、斯く泰平の御代となりしも、我が神君未だ三河にまします頃、僅か二萬に足らざる御知行、至つて小祿にて御座ありしが、其刻みより我々の祖先は何れも御譜代にて、お側を放れず附添ひ參らせ、彼の昔語に申す如く、七十餘度の御難戰にも所謂生死を共にし、困苦を嘗めし甲斐あつて、今一天下を知しめすも、是れ皆旗本の功しなり、是れ等の事を今の世に親しく知るは御存じの、鷄聲ケ窪の彥左殿より知る者外にござらねば、やゝともいたすと大阪や小田に屬せし二股侍、今は萬石以上ゆゑ大名なりと幅を利かせ、手柄顏いたすのが近頃小癪に障つてならぬ。
官兵　こりや矢部氏の仰せの通り、夜もとざゝぬ泰平に納つたのも我々が、弓矢を取つて命のせり合

ひ、烈しい修羅場を凌いだお蔭、それに當時は鐵砲や弓矢は警護に用ふるのみ、やれ大名のと綺羅を飾り、横柄面は奇怪至極。

野守　大坪氏を初めとして今八萬騎の我々共、小祿ゆゑに胡麻擂りて大名共が下に附くは、日頃無念に存ずれば、いざ戰爭の其の時は三河武士の手並を見せ、高い鼻を挫がんと思へど、今は四海泰平。

四郎　治に居て亂を忘れぬ爲め、武術を磨き膽を練りぢつと蟄して罷りあるが、どうか此頃大名の家に萬一騷動にても惹起さば、其の時こそは旗本の日頃の武藝を顯はして、奢りに長じた大名に一泡吹かせてやりたいものだ。

城五　いや、それに附いて此程より彼の大坪の親仁を賴み、軍學の講釋と表向をこしらへて、御直參の我々が相談なして八萬騎それ〴〵に組を立て、遊里などにて喧嘩を好む彼の町奴を懲らす爲めと、山谷散茶の編笠に面を包んで廓内を大道狹しと押歩くも、其内幕は大名の陪臣などが丹前風、派手を好んで六法出立、主人の威光を肩に着て我がもの顏が傍痛く、彼れ等を見たら喧嘩を仕掛け、其仕返しに大名を相手になさん下心、それゆゑ近々大坪が、邸で夜會を催す所存、何れも方にも同盟あつて、日頃の鬱憤散じられよ。

官兵　それは何より耳よりだ、折角磨いた此腕も、泰平ゆゑに自づと鈍り、

野守　武者震ひがしてならぬから、
四郎　廓中なぞで喧嘩とは、
官兵　こりやよい思ひ附きで、
三人　ござるわい。（ト此せりふの内よろしく杯の取遣りある、此の時奥より鷲藏袴裝近習にて出で、）
鷲藏　はツ、御前樣へ申し上げます。
城五　何事なるぞ。
鷲藏　只今生田家の御藩、澤井又五郎殿がお出でにて、是非御前樣へお目通りを願はれしますが、如何取計らひませうや、此儀お伺ひ申し上げまする。（ト是れにて城五郎思入あつて、）
城五　なに、澤井又五郎が參りしとな、かゝる夜中に推參せしは、何とも以て心得難し。はて、何用で參つたか。
官兵　おゝ、其の澤井と申す者は、樋貴殿の御緣家とかねぐ我々承はりしが、
野守　して又、如何なる御緣つゞきか、
四郎　心得の爲め、われぐへ、
官兵　お聞かせなされて、

四人　下されい。

城五　いや、お尋ね受けて、お話し申すも無益ながら、如何にも彼れは某が母方の緣者にて、切つても切れぬ親戚なれど、御存じの通り彼れは陪臣、平生疎遠にいたし居れば、所謂親は泣き寄りゆゑ、何事を申して來たか、心掛りなことでござる。

官兵　かゝる御緣のある澤井が、最早今宵も子の刻過ぎ、

野守　藩士の身にて今時分、

四郞　お目通りを願はるゝは、

官兵　こりやたゞごとでは、

三人　ござるまい。

城五　御酒宴半の妨げながら、逢はずに返す譯にも行かねば、又五郞を案内して、次の間へ通すがよい。

鷲藏　はッ、畏りましてござりまする。（ト鷲藏下手杉戶の內へはひる。此の內官兵衞初め三人思入あつて、）

官兵　澤井どのゝ參られしは、定めて仔細あることならん。

野守　用人衆へ取次を賴まず、直き〳〵面會を乞はるゝは心掛り、

四郞　眞面目な話しに我々が、御酒を頂戴いたしては、

官兵　餘り失禮極まれば、暫時我々、

三人　お外し申さう。（ト立たうとするを城五郎留めて、）

城五　はて、其の御配慮には及び申さぬ、彼れは緣家に隔てなければ、其許方には、やはり其の儘、

官兵　いや〳〵密事に相違なければ、御面會の其間、席を替へて今一獻、

三人　頂戴いたすといたさう。

城五　左樣ござらばお心任せ、こりや酒肴を仕替へて、饗應いたせ。

腰元　畏りました。（ト立ちかゝるを皆々留めて、）

官兵　あゝいや、其のお手數では恐縮ゆゑ、矢張り此の儘〳〵。

野守
四郎　どりや、我々もお手傳ひ仕つらう。

ト官兵衞先きに野守之助、四郎左衞門銘々銚子杯を持ち、腰元二人酒肴などを持ち運び、皆々上手杉戸の內へはひる。跡張扇の合方になり、下手杉戸より以前の鷲藏案內して、跡より以前の又五郎羽織袴、脇差ばかりにて出來り、下手に平伏する、城五郎見て、

城五　おゝ又五郎か、さゝ是れへ〳〵。

又五　久々御機嫌も伺ひませず、斯く深夜に推參いたし、恐入りましてござりまする。

城五 いや、其の無沙汰は相互ひぢや、今宵は朋友の客來あつて、未だ酒宴最中ゆゑ、決して苦しうござらねば、用事の趣き述べられよ。

又五 御遊興をば妨げまして、猶々恐入ります為。

城五 いや〳〵遠慮いたされな、貴殿と我とは縁者の誼、たゞ何事も隔心なければ是れへモツと進まれよ。して澤井には何用あつて、夜中是れへ入來はありしぞ。

又五 はツ、斯く夜中をも顧みずお目通りを願ひしは、ちと密々に其許樣へお願ひの筋がござりまして是れまで推參仕つりましてござります。（ト是れにて城五郎思入あつて、）

城五 何事かは存ぜねど、密事とあれば他聞の憚り、鷲藏、そちは退座いたせ。

鷲藏 はツ、畏りましてござりまする。（ト鷲藏又五郎に挨拶して下手へはひる。）

城五 最早誰も爰に居らねば、遠慮はない、澤井近う。

又五 はツ。

ト又五郎四邊を見返り、思入あつて前へ進む、城五郎始終又五郎へ目を附けて居て、此時小聲になり、

城五 こりや又五郎、そちや人をあやめて參つたな。

又五 えゝ。（トぎつくり思入、城五郎又五郎をぢつと見て、）

城五　最前よりそちが樣子、たゞごとならずと推量なせば、篤と面色窺ふところ、血色とても常ならず、鬢髮白と逆立ちて語音の狂ひ、滿面に怒氣を含みしそちが面體、人をあやめしと身が推量、それに相違はあるまいな。

又五　はッ、恐入つたる御眼力、如何にも貴殿の仰せの如く、（ト四邊へ思入あつて、）人をあやめて參りました。

城五　おゝ、さうであろ／＼。して何者を討果せしぞ。

又五　それぞ拙者が同家中、渡邊靭負を遺恨によつて、討果してござりまする。

城五　して／＼、それは如何なる遺恨で殺害せしか、心を落着け、此場に於て申し聞けよ。

又五　只今是れにて申し上げるでござりませう。（ト誂へ笙の入りし合方になり、）只今御前へ申上げし渡邊靭負と申す者へ某が遺恨の根ざしは、當七月のことにして、本國表の城下にて盆踊の節、我が家來平六と申す者を、靭負が悴志津摩に討たれ、恥辱を取りしが初めにて、また某が祖父又左衞門と彼れが祖父金右衞門と約せし詞を變ぜずに、預り置きし澤井正宗、懇望により渡邊へ返却なして遣はせしに、何ゆゑあつてか其の正宗を今宵拙者へ返せし上、朋友共に誘はれて一二度遊里へ通ひしを事大仰に言ひ觸らし、其上ならず正宗にて有合ふ碁盤を切捨て、四本足に某

罪を自訴なして、此儀只管願はしく、是れまで推參仕つてござります。
まで竊に落延びしが、あはれ母に面會なすまで、何卒拙者を御當家へお匿ひ下さるやう、此身の
に此身の不所存物語り、不孝を詫びし其上にて、切腹なして相果てんと一命存へ恥を忍び、是れ
延びしは近頃未練の至りながら、武士の一分忍び難く靭負を討ちし一部始終、せめて國なる母人
を畜生なりと誹謗の雜言、かゝる遺恨に止み難く、其場を立たせず討つて捨て、塀を乗越え逃げ

ト思入あつていふ、城五郎思入あつて、

城五　そちが切なる一部始終、遺恨に依つて討果せし委細は某會得いたした。かの諺にも申す通り、窮鳥懐に入る時は狩人も是れを捕らず、我を見込んで邸内へ逃延びし上からは、他人にても見脱されず、まして縁家の其方ゆゑ、如何にもそちが頼みを引受け、善惡ともに身が邸へ、當分匿ひ遣はさん。

又五　すりや、お匿ひ下さりまするか。

城五　一旦武士が請合ふからは他家より指でもさゝせぬが、そちは名に負ふ中國に、其名も高き生田家の家來であれば、匿ひしと萬一悟らば使者を以て、必ず受取りに參るであらうが、善惡共に某が一命助け匿ふ上は滅多にうんとは言はねども、相手は國主の生田右內、渡さぬ以上は數千騎の

兵を率ゐて參るであらう、それぞこつちの望む所、其時こそは八萬騎の旗本勢にて一戰なし、關東武士の手並を見せ、一泡吹せて遣るばかり、何の造作もないことぢや。

又五　すりや左程まで緣家の誼に、逐電なせし拙者めに、力をお添へ下さりまするか。

城五　それも母への孝養と、申す詞に義を重んじ、そちが望みに任すのぢや。

又五　これには拙者も一安堵、死すとも御恩は忘れませぬ、えゝ有難うござりまする。

ト是れにて又五郎悅ぶ、此時上手杉戸より以前の官兵衞、野守之助、四郎左衞門出來り、

官兵　お襖越しに承はつたが、心持のよい今のお話。

野守　日頃憎しと思ふ大名、かゝる時こそ是れ幸ひ、

四郎　お膝元なる旗本の、威勢を彼等に見せてくれん。

官兵　こりやよい都合に、

三人　成つて來たわい。（ト三人も悅ぶ、城五郎思入あつて、）

城五　お聞きとあらば申さずとも、豫て同盟の貴殿方、共に力にお願ひ申すが、然し進藤山野氏は掛構ひはござるまいが、官兵衞殿には生田の分家、如何に同盟なればとて、本家へ弓は引かれまい。

官兵　成程、貴殿の御懸念は御尤にはござれども、以前は如何にも生田の分家、假令誼があるにもせよ、

今は貴殿と同列に關東方の御直參、八萬騎の內なれば、義を見てせざるは勇なきなり、矢部氏へ一味なし、本家生田と絕交して、官兵衞弓を引く心だ。

城五　はて勇ましき生田氏、それでこそまことの朋友、美名を末世に殘すのは、斯ういふ時がよい機會、

又五　物數ならぬ某を、斯くまで不便と思召す、何れも樣の御心中、えゝ、有難う存じまする。

城五　斯く合體の上からは、最早夜明けに間もなければ、明けなば各手分けなし、

官兵　大坪親仁を始めとして、

野守　八萬騎を勸め込み、

四郎　手筈を定めて生田家の、

又五　討手を引受け下さらば、

城五　假令手薄の住居でも、

官兵　金城湯池に異ならず、

城五　おゝ幸先き祝して、（ト城五郎手を拍つ、是れにて奧より以前の鷲藏、腰元兩人銚子杯酒肴を持ち出る。）いざ一獻。（ト杯を取上げるを木の頭、）さゝ、つげ〱。

ト鷲藏酌をする、官兵衞、又五郎は上手、野守之助、四郎左衞門は下手にて、何れも杯を取上げる、

腰元これへ酌をする、是れをきつかけに下座にて、〽頼みある中の酒宴かな、と本行の謠曲へ誂へ
の鳴物をあしらひ、此の見得よろしく、

ひやうし幕

二幕目

郡山柏木八幡の場
譽田屋敷試合の場
同家中荒木宅の場

〔役名 ― 荒木政右衛門、柘榴武助、倉橋彌三右衛門、渡邊の若黨林平、櫻井の門弟轟伴藏、同猿澤權六、同石塚傳吉、同外山專八、八幡の社家鈴成、近習六人、櫻井林左衛門、譽田大内記。政右衛門妻お谷、武助妹お靜、家中娘お春、同お夏、同お秋等。〕

（八幡額堂の場）＝本舞臺一面の平舞臺。眞中三間白木の額堂、此内一面の落間、軒下所々に奉納の額、正面の欄間に白木の額面、是れにたんぽ附の槍、其の外木太刀を掛け、櫻井林左衛門奉納と記し、脇に門弟の名前大勢記しあること、上手石の高麗犬同じく玉垣、此内石燈籠澤山あり、下の方同じ玉垣、樹木の張物にて見切り、所々に紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、總て大和國郡山柏木八幡額堂の體、爰にお春、お夏、お秋家中娘のこしらへにて立ちかゝり、上手に鈴成烏帽子直垂、神主の裝にて床几に腰を掛け居る、此の見得三味線入り、壬生狂言の鳴物にて幕明く。

鈴成 是れは御家中のお孃さま方、ようこそ御參詣でござりました、先づ是れへお掛け下さりませ。
お春 左樣なれば、
三人 御免下さりませ。（ト三人床几へ掛ける。）
鈴成 幸ひ今日は九月十五日、當社八幡宮の祭禮に神樂を奏す、其外に隣國の山城より壬生狂言の奉納がござるゆゑ、孃さま方には丁度よい折、まあ御ゆるりと御見物をなさるがよい。
お春 それはよい所へ參詣いたし、何よりお嬉しうござります。
お夏 それに今日は參詣ながら、かねぐ\人が評判の櫻井樣が御奉納ありし、
お秋 槍術奥儀の額面を、
三人 拜見に出ましたわいな。
鈴成 いや、是れは又一段とお見事なことでござる、先づ是れを御覧なされ。（ト件の額へ指をさし、）櫻井先生を始めとして、數多ある御門弟の御姓名が載せてござる。（ト是れにて三人も見ながら、）
お春 櫻井樣の御門弟の内、轟さまは御高弟ゆゑ、一番太く出て居りますな。
鈴成 先づ轟さまを始めとして、數多ある御門弟の内に、定めし美男子もござらうが、孃さま方は此額にて、よい聟さまをお見立てがよからう。

お春　その樣なことは、
三人　存じませぬわいなあ。
鈴成　いや、假令存ぜぬと仰せあつても、お武家の家にお育ちゆゑ、今に立派なお家武樣を是非お迎へでござらうから、只今の内此中より選取つてお置きなされい。
お秋　折角額のお名前を拜見いたさうと存じまして、樂みにして參りましたに、其のやうなことおつしやつては、お恥かしうござりますわいな。
鈴成　其のお恥かしいは御尤も、そこが孃さま方の身上と申すもの、所で拙者が恥かしいとか又怖いとかと申す事を、神前にて祈念いたし、よいお聟さまをお迎へなさるやう、信心をして差上げませう。
お春　いつに替らぬ神主さま、
お夏　御常談ばかりおつしやつて、
お秋　ほんに陽氣な、
三人　お方でござりまする。
鈴成　いや常談でない、是れは眞劍でござる。
トやはり右の鳴物にて花道より轟伴藏、猿澤權六、石塚傳吾、外山傳八、何れも袴大小雪駄にて出來

り、花道に留り、

伴藏　何といづれも御覽なされい、過日師匠が奉納ありし槍劍兼し額面は、一段見事ではござらぬか。

權六　數多額もござるけれど、或は禁酒或は願掛け、又は一生の成行を畫面になして揭げるなどゝ。

傳吾　他愛もない其中へ、一際目立つ師匠の額面、今日當社の祭禮へ斯く同伴なして參詣いたすも、

專八　倉橋氏が推擧によつて、今日御前でお抱へになる、荒木政右衞門と師匠の立合ひ、

伴藏　試合の勝は知れてあれど、そこが子弟の間柄、弓矢神の八幡へ祈念いたすは武士の本意、

權六　先づ神前へ參りし上、

傳吾　武運長久、

四人　祈るでござらう。（ト四人舞臺へ來る。此内舞臺の皆々四人を見遣り、）

鈴成　是れは櫻井の御門弟衆、ようこそ御參詣下さりました、先づ是れへお掛け下さりませ。

伴藏　いや、是れは神職殿、よい所でお目に掛つた。（ト女形を見遣り、）これは〳〵娘御たち。

四人　參詣に參られたかな。

お春　先刻より是れへ參り、御評判の此の額を拜見いたし、皆樣のお噂いたして。

三人　居りましたわいな。

伴藏　なに、噂をいたしをつた。は、あ、こりや身共等を、こなた衆には定めし惡く、
四人　申したであらうな。
お春　いえ／＼惡くは申しませぬ、轟さまを始めとして、御門弟衆のお名前を、
お夏　一々讀んでは皆さまのことを、
三人　褒めて居つたのでござりまする。
伴藏　すりや本當に、褒めて居つたかな。
お春　何で嘘を、
三人　申しませうかいな。
四人　いや、それは千萬忝ない。
　ト此内專八額面の下へ床几を直し、其上に立上り、我が名を指さし、
專八　お褒め下されしとあれば承はるが、此姓名の男は各方は如何でござるな。
お春　それは外山專八さま、あなたのことでござりますな。
專八　如何にも左樣。
お春　外のお方はよいけれど、外山さまは人並より餘りお體が小さいゆゑ、私はいやでござりまする。

專八　ほい、是れはしくじつた。（ト入替つて權六床几へ上り、）
權六　然らば此名前の男は如何でござるな。
お夏　猿澤權六さまでござりまする、そんな鼻の低いお方はいやでござんすわいな。
權六　いや、是れは御挨拶だ。（ト傳吾入替つて、床几へ上らずに下より指をさして、）
傳吾　然らば、此の姓名はよろしからうな。
お秋　石塚傳吾さまは、餘り足が長すぎで、あなたもいやでござんすわいな。
傳吾　ほい、惡い足ぢやわい。
伴藏　然らば初筆の某に、定めし目を附け置いたであらうな。
お春　はい轟さまは最初より、いやに太つておいでなさると、實は惡く、
三人　申しましたわいな。
伴藏　さうして見ると、此の四人は、
權六　誰一人こなた衆に、
傳吾　思ひ附かれた、
四人　者はないのか。

お春　お先きへ御免を、
三人　蒙りまする。（ト女形三人立掛るを捉へ、）
作藏　只今一緒に、
四人　參詣いたさう。
お春　いえ、外聞が惡う、（ト振拂ひ、）
三人　ござりますわいな。（トやはり右の鳴物にて女形三人上手へはひる。伴藏等四人ほつと思入、）
鈴成　いや、木折りで行かぬが戀の道、まだ孃さま方でござるゆゑ、眞の味を御存じないゆゑ、たゞ好い男のみお好みゆゑ、まことにお氣の毒でござりまする。
作藏　それでは身共等四人の者は、
權六　惡い男と申さぬ。
四人　ばかりか。
鈴成　先づ左樣にござりまする。（ト伴藏思入あつて、）
作藏　武藏坊辨慶を始めとして、朝比奈三郎、肥後守清正、武にのみ心委ねし者は、兎角女に好かれぬわえ。

鈴成　其の御武藝に附き先刻より、當社神前へ御舍弟の櫻井甚八樣、お出でゝござりまする。
伴藏　おゝ、櫻井の御舍弟は、最早參詣にお出でとな。
鈴成　して、今日は御門弟衆が當社へ御參詣でござりまするは、お目出度でもござりまするかな。
伴藏　弓矢八幡を祈念いたすは、今日上の庭前におき、我が師櫻井先生と試合を催す相手と申すは、此度新規お抱へ入れの、荒木政右衞門と申すもの、
權六　元柳生十兵衞の門弟にて、免許皆傳を受けし奴。
傳吾　打物取つての早業は、小天狗とまで呼ばれしゆゑ、
專八　そやつと師匠の立合に、何卒首尾よく勝を得ん爲め、
伴藏　御前へ出仕の其の前方、
權六　當社へ參詣、
四人　いたしてござる。
鈴成　いや、それならば是れより直に、神前におき某も共々祈念仕つれば、見事お勝ちに相違ござらぬ。
傳吾　その見事にて思ひ出せしは、其又荒木が家内と申すは頗る美婦と承はりしが、未だ拙者は拜顏

いたさぬ。

專八　それは倉橋彌三右衞門殿の媒介に依つて、嫁せしといふことにて、親は鎌倉生田の藩中千二百石の用人にて、

權六　渡邊靭負と申す者、その息女にて名代の美婦と、われ〳〵共も聞き及びしが、

伴藏　荒木が腕前見るよりも、美なる家内が面ざしを、早く見たい、

四人　ものでござる。

鈴成　假令面會なさるゝとも、やはり今のお腕前では、

四人　如何いたした。

鈴成　いえなに、お腕前の美なることは、言はずと知れし各方。

伴藏　何は然れ甚八殿が、神前にござるとあれば、

權六　神職殿に案内を乞ひ、

傳吾　是れより社へ、

四人　參るといたさう。

鈴成　左樣ござらば何れも方、

伴藏　どれ面會を、

四人　いたすでござらう。

トやはり三味線入り壬生の鳴物にて、鈴成先きに伴藏の四人附いて上手へはひる。大拍子の合方になり、花道よりお谷紋附の着附、家中女房のこしらへ、お賤同じく下女の裝にて甲斐絹の風呂敷包みを持ち、ずつと跡より柘榴武助、羽織袴股立大小若黨のこしらへにて附き添ひ出來り、花道にて、

お谷　これ賤、是れから參詣して行つても、遲いことはあるまいの。

お賤　只今五つの廻りゆゑ、旦那樣のお上りが正午と申すことなれば、御ゆつくりと遊ばしませ。

武助　わけて今日は櫻井樣と初めてのお立合、武家が祈りの弓矢神、よく御信心を遊ばしませ。

お谷　どうぞお上の御前にて勝をお取り遊ばすやう、いたしたいものぢやな、（ト三人舞臺へ來り、件の額へ思入あつて、）此額が噂のある、櫻井樣が奉納ありし、槍術免許の方々を記せし額と申すこと。

お賤　御當家の御指南番、其の名も高き櫻井樣ゆゑ、大層な御門弟でござりますな。

武助　いや、此額に姓名は數多記してあるとはいへど、樣子を聞くと櫻井さまは、名聞家と申すことゆゑ、皆が皆御門弟の氣遣ひはござりませぬ、大方是れは餘の人も、記してあるのでござりませう。

お賤　こりや兄さんの言ひなさんす通り、是れ程の御門弟はわたしもないと思ひますわいな。

武助　まだ刻限もお早いことゆゑ、まあ是れへお掛けなされて、御ゆつくりとなされませ。

お谷　ほんにさうして行きませうわいの。（ト合方になり、三人床几へ掛け、お谷額へ思入あつて、）此の御門弟の其内に、かね〴〵そちに兎や斯うと申す者があると聞きしが、どのお方であるかいの。

お賤　心安くもいたしませねば、しかと名前は存じませねど、慥爰に記してある轟伴藏と申す、高弟の方でござりまする。

お谷　そちも武助が縁によりこちへ奉公に參りしより、萬事に心を用ひくれ、よう働いて勤めるゆゑ、行く〳〵わしが世話をして、其身の落着きいたすやう心に掛けて居るわいの。

武助　恐れ入つたる其仰せ、私ばかりか妹までお遣ひ下さるのみならず、まるで身内か何ぞのやうにお目をお掛け下さりますは、なか〳〵詞に盡されず、毎度妹と申し暮し、有難涙をこぼしまする。

お賤　まだ在所より參りし折は、碌々人に物言ふも出來ぬ位な武骨もの、それをあなたの御丹精にて行儀作法や縫針の、女子の業をお教へ下され、先づ人並になりましたも偏にお蔭でござりまする。

お谷　其心根を存ぜしゆゑ、もう年頃のそちなれば媒介なして何れへか、縁附けて遣りたいと、此程旦那と相談なし心掛けて居る所へ、親の年忌に先達て暇を乞うて在所へ行きし、そちが朋輩孫八は

丁度似合のよい年頃、當人同士の心は知らねど、疾うから思つて居るわいの。

武助　あの孫八は律義眞法、舊主人に仕へる時より一緒に居つて私もよく人物を存じ居れば、左樣なりますことなれば、まことに仕合せにござりまする。

お谷　して賤は、孫八をいやと思うては居やらぬか。

お賤　はい、決していやでは。（と言ひかけ恥しき思入、武助こなしあつて、）

武助　實は疾うから妹も、あの孫八には。

お賤　あゝもし、兄さん、何を言はしやんすぞいな。

武助　いえなに、あの孫八にはこの兄が、疾うより惚れて居りますわい。（ト言ひ紛らす、）

お谷　それをわしも察せしゆゑ、ほゝゝゝ。（トお谷もよろしくこなし、）

武助　其の孫八に惚れましたが、旦那樣に御指南受け、もう此頃ではいつぱしに槍劍ともに出來る腕前、既に是れに記しある櫻井樣の御高弟、轟さまなどゝ較べても、私共の目から見ても遙に上の太刀筋ゆゑ、斯うして立派な名前の者より、譬に申す泥中の蓮に勝る彼れが腕前。是れと申すも御丹精、人と生れたらよい主人は、持ちたいものでござりまする。

ト此内お谷お賤四邊へ思入あつて、

お谷　あゝこれ、四邊群集の此境内、もし御門弟衆の耳にはひらば。

お賤　御立腹もござんすから、必ず靜に言ひなさんせいな。

武助　いや言つても大事ないといふは、此間も櫻井さまの道場を隙見いたし、轟さまを始めとして數多の弟子が稽古するのを、一々太刀筋見ましたところ、いやもう大した者は一人もなく、あの師匠なら先生も、大概知れて居りますわい。

ト武助蔑なす、此前よき自分より上手玉垣の内へ、甚八羽織袴大小、以前の四人附添ひ出で、是れを窺ひゐて、此時前へ出で、

甚八　卒爾ながら、それにござるは、荒木氏の御内室でござるな。（ト是れにてお谷思入あつて、）

お谷　私は政右衛門が妻、谷と申しますものでござります。

甚八　おゝ左樣でござるか、拙者は櫻井林左衛門が舍弟同苗甚八と申す者、以後お見知り置かれ下されい。

お谷　それではあなたが櫻井樣の、（トお谷三人と顏見合せ、ぎよつとせる思入あつて氣を替へ、）左樣にござりまするか。

作藏　拙者は門弟轟作藏と申す者。

權六　同じく門弟猿澤權六。
傳吾　石塚傳吾。
專八　外山專八。
伴藏　以後お見知り置かれ、
四人　下されい。
お谷　これは〳〵何れも樣には、初めてのお近附き、此上共に夫諸共同じ御家中へ參りますれば、何卒お目掛けられて下さりますやう、お願ひ申し上げまする。
伴藏　痛み入つたる御挨拶、未だその許とは初めてなれど、是れにござるお賤どのとは、每度お心安ういたし居れば、猶此上に御主人諸共、御別懇にいたすでござる。
お賤　ほんに好かない。
お谷　あこれ、（ト制す、お賤武助にあれだといふ思入）して、あなた方には當社へ、御參詣にござりまするか。
甚八　如何にも今日ツた祭日ゆゑ、門弟共と諸共に、
伴藏　打ち連れ立つて、

五人　參つてござる。
お谷　左樣にござりましたか、私共も是れより直に參詣をいたしまして、夫が御前へ出仕の前方、歸宅いたす心得ゆゑ、失禮ではござりますれど、是れにてお別れ申しまする。さあ、そなたも同道しやいの。（ト お谷立上り、お賤先きに武助附いて上手へ行かうとするを、）
甚八　あ、いや〳〵御內室、暫くお待ち下され。
お谷　何ぞ御用でござりまするか。
甚八　如何にも尋ねる用事ござれば、先づ暫くお掛けなされい。
お谷　左樣ではござりませうが、夫が出仕の前方ゆゑ。
甚八　いや〳〵、決して手間は取らせぬ程に、暫くお待ち下され。
お谷　ぢやと申しまして、
甚八　はて、お待ちなされいと申すに。
お谷　はアい。（ト 合方になり、お谷餘儀なく床几へ掛ける、お賤武助下手へ控へる、）して、御用とおつしやりまするは。
甚八　用事と申すは外でもござらぬ、それに居るこなたの御家來、某あれにて承はれば、兄が道場を

覗き折、門弟共は言ふに及ばず林左衛門も手練未熟と誹謗せしを承はりしが、いや流石は荒木政右衛門殿の御家來程あつて、且頃のお仕込み、腕に覺えのある事と、それゆゑお呼止め申してござる。

伴藏 われ〳〵共は門人ゆゑ、よしんば誹謗されしとて、其の身の未熟を顧みて、了簡いたすことなれど。

權六 門弟のみか師匠まで、武藝未熟と言はれては、弟子の身として聞き捨てならず、

傳吾 定めし斯樣に申すからは、荒木氏のお仕込にて、槍劍共に心得居らう、

專八 われ〳〵が耳に入り、聞き捨てになす其時は、師匠までの名の汚れ、

甚八 さ、御内室、此の御返答が、

五人 承はりたい。（トきつと言ふ。お谷思入あつて、）

お谷 何事のお尋ねかと、存じの外なる家來が粗忽、何とお詫びをいたさうやら、申し譯なき此場の仕儀。これ武助、わしが言はぬことではない、あなた方のお耳に入り、申し譯がないわいの。

ト是れにて武助俯向き、當惑の思入にて、おづ〳〵と前へ出て、手を突き、

武助 何れも樣も居らつしやるとも心附かずに申せしは、下郎が口のさがなきゆゑ、御立腹の段は幾重

にもお詫びをいたしまする程に、此場のことはお聞き流しに、御勘辨なされて下さりませ。

トお谷も共々詫びる、四人思入あつて、

作藏　いや其了簡は罷りならぬ、甚八殿は舍兄のことゆゑ、御勘辨もなされうが、われ〳〵は師弟の因みあれば、たゞその詫びでは、

四人　了簡ならぬわ。

武助　さゝ、そりや御尤ではござりますれど、相手はほんの下司下郞、取るに足らぬと思召し、どうぞ此場を穩便に、

四人　えゝ、ならぬと申すに。

武助　たつてならぬと仰せあれば、假令下郞を踏むなりと又打つなりとも御存分に、お腹の癒えるやう何れもさま、どうぞなされて下さりませ。

甚八　いやそりや此方で相成らぬ、兄が手練が未熟なりと申せし上は此場におき、われ〳〵と立合いたせ。

武助　どういたしまして、下郞の身分で、

作藏　いや、蔑なすからは覺えがあらう。

権六　いで、此場にて、

四人　立合ひいたせ。

武助　ぢやと申して私には、

甚八　然らば何ゆゑ誹謗なした。

武助　さあ、それは、

四人　立合いたすか。

武助　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

甚八　下郎め、返事は如何なるぞ。（トきつと言ふ、武助ぢつとこなし、お谷お賤心遣ひの思入あつて）

お谷　さ、其のお腹立は御尤、重々あれが不調法、今お立合をいたすとも及ばぬのは知れしこと、且は夫へ供先にて斯様な失禮いたせしこと、もし知れました其時は言譯がござりませねば、成され難い御了簡を、何卒私へお免じ下され。

お賤　数なりませぬ私も、共々お詫びをいたしますれば、どうぞ此儘御了簡をなされて下さりまするやう。

兩人　お願ひ申し上げまする。

甚八　假令主人が詫びなりとも、此場で立合いたさねば、武士の恥辱が雪げぬゆゑ、

伴藏　是非とも勝負を、

五人　いたさねばならぬ。

武助　すりや、是れほど主人がお詫びなしても、

甚八　えゝ、くどいわえ。（トきつと言ふ、武助もうこれまでといふ思入にて、）

武助　是れ程までに申しても、御了簡出來ませずば、是非に及ばぬ此場にて、いざお相手をいたしませう。

甚八　こりや面白い、それぞこつちで望む所、

伴藏　然し此場で立合なし、

權六　もし其方が負けとならば、

傳吾　其分には、

五人　いたさぬぞ。

武助　そりや申すまでもござりませぬ、體を微塵になさるとも、鈍き腕ゆゑ恥にはござらぬ。

伴藏　こりやよい覺悟の下郎だわえ。
傳吾　それ、支度さつせえ。
武助　いえ、支度などには及びませぬ、此儘お立合いたしまする。
專八　いや、づう〱しい。
四人　奴だわえ。
甚八　それ、轟氏、
伴藏　心得ました。

ト伴藏下緒を襷になし身支度をなす、傳吾奉納の額より木太刀を下し雙方へ置く、此内お谷、氣遣ひのこなしにて武助を留める、武助氣遣ひないといふ思入あつて、竹刀を持ち、伴藏と立上り、雙方きつと構へる、是れを誂への鳴物になり、兩人ちよつと立廻つて、伴藏の竹刀を打落す、是れにて甚八それと指圖するゆゑ、四人一時に打つて掛り、武助是れを相手に烈しき立廻り、トゞ四人とも打ち据ゑられる、甚八悸へかれ、件の竹刀を取り打つて掛る、武助其手を押へ、

武助　御免。

ト突放して打込み、甚八と立廻り、トゞ甚八危くなる、よき時分ばた〱になり、花道より政右衞門

上下大小雪駄にて走り出來り、

政右　これ武助、暫く待て。必ず粗忽いたすまいぞ。

ト言ひながら舞臺へ來り、兩人の中へ割つて入り、武助の持ちし太刀を取つて、武助を打ち据ゑる。

武助　こりや旦那樣には、何ゆゑに。

政右　何ゆゑとは無禮な奴、陪臣の身を以て櫻井氏の御舍弟へ、手向ひなせし粗忽者、其身を顧み控へ居れ。

武助　でも餘りなる。

政右　えゝ、控へ居らぬか。

武助　へえい――。（ト跡へ下る。政右衛門甚八へ會釋をなし、）

政右　これは〳〵櫻井氏には、存じ寄らざる此場の仕儀、如何なる家來が粗忽なせしか。御立腹の段は幾重にも拙者お詫び仕つれば、何卒御宥免の下さりませ。

甚八　思ひ掛けない貴殿のおいでに、危い所を、いやなに、危く彼れが一命にも拘はるべきをお留め下され、先は是れにて安堵いたした。

政右　如何にも貴殿の仰せの通り、拙者是れへ馳せ附けずば、彼れが體は粉微塵、命冥加な、（ト四人

へ思入あつて氣を替へ、）奴であるわえ。

伴藏　流石は荒木の御家來程、驚き入つた彼れが腕前、假令下郎に至るまでも、又お仕込が格別と、

權六　一同感心、

四人　いたしてござる。

政右　各方へも此場にて、定めし無禮いたせしならんが、拙者が詫びにて幾重にも御了簡下されい。

伴藏　其の御挨拶には及び申さぬ、彼れが粗忽と申すもの丶、言はゞ此方より望みしこと、高が匹夫の下郎ゆゑ、必ず氣には、

四人　止めませぬ。

政右　それは千萬忝けない、こりや武助、各方が御勘辨のお詞なくば其方は、許し置かれぬ奴なるぞ。以後をきつとたしなみ居らうぞ。

武助　主人が是れへお出でなくば、（ト思入あつて、）いやなに、お出でがなくば私の一命にも拘はる所、格別のお慈悲にて、無事に濟みしは下郎の仕合せ、有難うござりまする。

お谷　どうなる事と女子の身で、仕方なく〳〵心配せしも、事なう納まる上からは、

お賤　やう〳〵是れで落着きましたわいな。（ト甚八思入あつて、）

甚八　拙者は兄と諸共に、程なく上へ出仕いたせば、其節拜顔いたすでござる。
政右　手前も今日御舍兄とは、初めて立合ひいたすことゆゑ、何分共にお執成しよろしく願ひ上げます
る。
伴藏　此後必ず、今日の遺恨を、
甚八　あ、これ、
伴藏　いやなに、遺恨殘さず、是れより直に、
政右　後刻面會、
皆々　いたすでござる。（ト甚八先きに四人體の痛むな、恪へながら下手へ行き、）
伴藏　思へば憎き、（ト武助へ思入）
甚八　あこれ、（ト留め、）さ、お出でなされい。
ト唄になり、甚八先きに之へ附いて花道へはひる。跡合方になり、武助思入あつて、
武助　今日上へお目見得の、其前方に斯樣なる粗忽をいたし、旦那樣や又御新造へ御心配を掛けました
のも、日頃から憎しと思ふ櫻井兄弟、此度御前へ御出仕を嫉んで居ると承はり、其のむやくし
さが胸にあるゆゑ、思はず爰で立合の勝を取らうといたせしも、跡先見ずの下司の了簡、何卒お

許し下さりませ。

政右　定めし餘儀なきことよりして、斯く立合をいたせしならんが、今日御目見得濟まざる內は、大事の前の是れ小事、其身を愼しみ居らねばならぬぞ。

武助　恐れ入りましてござりまする。

お縫　御新造樣も御心配遊ばし、再三お止めなさるれど、一徹短慮なお前の氣に、遂に旦那樣へお手數を掛け、お供いたせし私まで申し譯がないわいな。

お谷　そなたよりわしが居ながら、斯ういふことを仕出せしは、誰よりか先きへ濟まぬわいの。

政右　些細なことより遺恨を含み、後日の障りになることは、世間には往々あることなれば、其方とても他出の折は別して心を用ひられよ。

ト合方きつぱりとなり、下手より倉橋彌三右衛門上下大小にて、紺看板の中間附添ひ出來り、

彌三　これは〳〵荒木氏、よき所でお目にかゝつた。

政右　倉橋氏、先づ是れへ。

彌三　御免下され。（ト床几へ掛け、）御內室にも、御參詣でござつたかな。

政右　最早刻限も近ければ、かね〴〵御推擧下されし上への御目見得願はんと、是れより貴邸へ伺ふ所。

彌三　いや、それは丁度幸ひ、手前も最早出仕いたせば、當社へ參詣なせし上、御同道をいたすでござらう。
お谷　何分共に夫が身の上、お執成しを願ひ上げまする。
彌三　それは必ずお案じあるな。當家御指南番を勤め居る櫻井氏の腕前とは、勝るとも劣らぬ其許、然し勝負は時の運、若し負けとなる其時は、此倉橋も上へ對し推擧いたせし甲斐なければ、何卒手柄いたされよ、左すれば大和一般へ貴殿の名前の響くは必定、其時こそは共々に、身共も鼻が高うござる。
政右　御前に於て晴れの立合、必ず敗は取らざる心得なれど、相手は音に聞えし、寶藏院の奧儀を極めし管槍に名うての櫻井殿、容易なことにて勝は得難し、確とお受合は出來ませぬ。
彌三　そこを偏に負けぬやう、首尾よく打つて下されよ。
政右　精々仕つるでござりまする。
彌三　其の一言にて彌三右衛門、先づは安堵いたしてござる。
政右　然らば是れより其許と、御同伴を仕つらう、武助供いたせ。
武助　はッ。

政右　そちは賤と同道なし、直樣歸宅いたせ。
お谷　畏りましてござりまする。
お賤　して、倉橋樣の御家來は、
彌三　荒木氏と同伴なせば、先きへ戻るがよい。
中間　はツ。（ト下手へはひる。）
彌三　左樣なれば、御內室。
お谷　何分共にお執成し、
政右　いざ、御同伴の仕つらう。
ト三味線入り大拍子になり、彌三右衞門、跡より武助附いて上手へはひる。
お谷　よしない事にて最前より、手間取りしゆゑお社へ、參詣もせず戻るといふは、心掛りのことぢやの。
お賤　旦那樣のお留守ゆゑ、是れにて御拜を遊ばしまして、又其內お出で遊ばしませ。
お谷　それも尤、そんなら爰でお拜み申し、直さま歸宅仕ませうわいな。
トやはり右の鳴物にて上手より以前の鈴成、黑塗の三方へ守を載せ出來り、

鈴成　それにお出でなさるのは、郡山様の御藩でござるかな。

お谷　はい、左様にござりまする。

鈴成　郡山様の御藩中なれば、只今神事の式終り、開運のお守をお屋敷の方々へ差上げまする所ゆゑ、幸ひ一枚呈しませう。（ト三方の札を取つて出す、お谷扇子を廣げ受けながら、）

お谷　それは幸ひ、よい所へ、有難うぞんじまする。

お賤　お初穂は何程差上げませうな。

鈴成　いや、お屋敷の御奉納がござれば、其の御心配には及びませね、あなた方も御都合よくば、拜殿へお出でなされい。

お谷　ちと宅を急ぎますれば、又御参詣いたしまする。

鈴成　然らば是れにてお別れ申しまする。

ト鈴成挨拶なして上手へはひろ、是れにてお谷件の守を紙入へしまはうとして取上げる途端に、扇子を落す、お賤取上げ、

お賤　もし、お扇子が。（ト出す、お谷受取る時、親骨放れ居るゆゑ、ちつと思入あつて、）

お谷　や、此親骨のはなれしは。

お曉　もしや何ぞの。（ト氣遣ひの思入、お谷氣を替へ、）

お谷　いや、勝負の知らせを、（ト扇子を帯へ挾むを道具替りの知らせ。）待ちませうわいな。

ト兩人よろしくこなし、三味線入り大拍子にて此の道具廻る。

（譽田家奥殿庭先の場）――本舞臺四間高足の二重本 庇本緣附、向う金襖、上下 後へ下げて一面 障子屋體の前面、眞中に白洲階子、下手網代塀楓樹の立木、日覆より同じく釣枝、平舞臺の上下三ツ葵の紋附きし幕張り、總て譽田家奥殿庭先の體。二重の緣側に一、二、三、四、五、六の近習六人上下にて控へ居る、此の見得調べにて道具留る。

一　お座敷向きは殘る所なく、今日正午限りにてお掃除萬端行き屆き、お床は唐の陶淵明が三幅對の大幅にて、

二　花器は奈良より取寄せし、根來の花臺に見事なお花、居るから唐の樣を寫し一段好事な飾り附け、

三　お茶事はお茶道宗賀の掛り、是れも珍器の飾り附け、してお庭方の掃除萬端、最早行き屆き居りまするか。

四　是れもやはり正午までと申し附けおきしゆゑ、只今此れなる瀬山氏と同道いたし檢分せしが、

五　菊の花壇を初めとして、瀧のお茶屋の紅葉の邊まで、殘る隈なく行き屆き、
六　植木方よりお床の間へ蘇鐵の鉢を運び居れば、それにて殘らず整ひまする。
一　先づは是れにて役目も相濟み、たゞ此上は上の御入りを、是れにてお待受け致すのみ。
二　然し未の上刻には、最早程なくなるでござらう。
三　各萬端よろしうござるな。
四　委細承知、
皆々　いたしてござる。

ト爰へ奥より袴侍〇△の兩人、褥脇息を持ち出で眞中へ直し、下手を向き、

〇　程なく上の御入りにござれば、
△　此段申し上げまする。
六人　はッ。

ト〇△の兩人辭儀をなしはひろ。六人は縁側下手へ居並ぶ、時計の音になり、正面の襖を近習明ける、奥より磐田大内記羽織袴一本差しにて出る、跡より小姓兩人刀を持ち附添ふ、大内記眞中に住ひ、皆々ハッと平伏なす。

大内　今日庭前におき、槍劍の試合を申し附け置きしが、兩人とも出仕せしか。

一　はツ、先刻よりお庭先の幕張りの內に雙方とも。

六人　控へさせてござりまする。

大内　然らば目通りへ呼び出せ。

一　はツ、（ト後の近習へ向ひ、）兩人是れへ。

侍二人　はツ。

ト是れにて侍一人づゝ白洲階子を下り、上下へはひる、是れより張扇の入りし合方になり、上手より林左衞門上下、差添にて、跡より以前の甚八、作藏、權六の門弟四人、たんぽ附の槍、木太刀を持ち出る、下手より政右衞門、上下、差添跡より彌三右衞門附添ひ、一人の侍短き木太刀を持ち出で双方上下へ住ひはッと平伏なす、侍兩人上下後へ控へる、大內記皆々を見遣り思入あつて、

大内　櫻井荒木が立合を予も疾うより樂しみ居りしが、不快によつて數日の延引、今日全快の祝ひ旁々此場に放て催すは、殊に滿足に思ふぞ。

皆々　はあ――。（ト辭儀をなす。林左衞門思入あつて、）

林左　恐れ入つたる其の御諚、上を始め御家中衆の斯く御出仕ござりまするは、此身に取つて如何ばか

りか大慶至極に、
甚八　五人　存じ奉つりまする。（ト上手の皆々辭儀をなす。）
政右　拙者事もまッ其如く、上のお目見得いたすさへ、身に餘りたることとなるに、櫻井氏と立合いたすは、此上もなき身の大慶、
彌三　共に列なる拙者めも、有難く存じ、
政右　彌三　奉つりまする。（ト兩人辭儀をなす。林左衞門政右衞門を見て思入あつて、）
林左　いやなに荒木氏、かねゞゝ御姓名は聞き及びしが、お手合せ仕つるは今日御前が始めてなり、其許には當時名高き柳生流の皆傳を極められしと承はれば、定めし見事なお腕前と舍弟並びに門弟共と、かねゞゝお噂いたし居りしが、測らず上の御庭前にてお手合せいたすのは、此身に取つて修行の爲め、隨分お手やはらかにお頼み申す。
政右　是れは恐れ入つたる其仰せ、願うてもない此の試合、名に負ふ貴殿は寶藏院の奧儀を極められしことは、當國大和はいふに及ばず日本中に響きし其許、其のお相手になりまするは未熟の拙者が身の譽れ、是れも偏に上のお蔭と、是れなる倉橋諸共、御禮申すで、
政右　彌三　ござりまする。

甚八　世の諺に申す如く、能ある鷹は爪を隱すと、斯樣に卑下めさるゝは定めし勝れしお腕前。

伴藏　後學の爲われ〱共も、試合の太刀筋拜見なし、其の甲乙を試すでござらう。

權六　然し師匠も御當家にて、御指南番を勤め居れば、隨分そこらも思召され、

傳吾　失禮ながら一心の、臍を固めて、

伴藏 四人　おかゝりなされい。

甚八　こりや何れも、相手は名に負ふ柳生の達人、又先刻の、いやなに、先生方の御出席、失禮申しては相成らぬぞ。

四人　はツ。(ト彌三右衞門思入あつて、)

彌三　上にも定めしお待兼ね、雙方御用意めされい。

林左 政右　はツ。

ト白囃子になり、林左衞門政右衞門肩衣をはね襷を掛ける。此内上手より伴藏槍、下手より近習木太刀を持ち出で、眞中へ置く、林左衞門政右衞門は双方座を拂ひ大内記へ禮をなし、兩人立ち上つてきつと構へる。是より靜なる白囃子へ陣太鼓を冠せし鳴物になり、林左衞門槍を突きかける、政右衞門太刀を構へるゆゑ突けぬこなし、又立廻つて突かうとし突き兼ね息を切り、林左衞門急き込んで突

いて掛るを、政右衛門拂ひ退ける、此の途端槍を打落す。林左衛門はツと思入、甚八隙さず木太刀を取つて出す。林左衛門手早く取あげ上段に構へ、双方きつと見得。是れより誂への鳴物になり、兩人立廻りの内大内記目を放さず見遣る、甚八門弟は氣遣ひのこなし、立廻りの内林左衛門二三度危くなる、トヾ政右衛門態と一太刀打たれ、はツと太刀を突出し、後へ下つて平伏なし、

政右　恐れ入つてござりまする。（ト是れにて林左衛門息の切れし思入にて、安堵なす。）

甚八　いや流石は兄上、相手は名に負ふ荒木氏、如何あらんと固唾を呑みお手合せの内拜見せしが、

作藏　案に違はず勝となり、荒木氏には嘸御無念、是れ等のことは日頃より、噂に聞いても知れさうなもの、

權六　所謂是れが生兵法、大きな恥を取らぬ内、恐れ入つたと言はれしは、あれが柳生の免許皆傳、

傳吾　荒木どころか枯木の枝折れ、まだ打ち所が宜しきゆゑ、此の場で氣絶もめされぬが、

專八　もし先生の太刀先が、お胴へいつた其時は、何かは以てたまらぬ所、

甚八　さて〱御高運な、

六人　ことでござる。

ト口々に譏なす、此内大内記は眞の勝ではないといふこなし、林左衛門皆々を制し、

林左　こりや〳〵、御前邊にて高聲は相成らぬぞ。
六人　はツ。（ト控へる、大内記思入あつて、）
大内　双方勝れし手練の達人、予も如何やと存ぜしに、數年指南を勤めるだけ、流石は櫻井見事な太刀打、感心のいたせしぞ。
林左　御賞譽に預かり、有難き仕合せに存じ奉ります。
大内　甚八始め門弟共、師の譽れを共に悦び、猶も修行いたすがよいぞ。
甚八　有難き御諚の趣き、
伴藏　一同忘却、
五人　仕つりませぬ。
ト辭儀をなす。此内政右衛門彌三右衛門は面目なき思入にて、下手に俯向き居て、
彌三　かゝる恥辱は取るまじと上へ推擧いたせしかど、申譯なき此の場の仕儀、恐入りましてござりまする。
大内　他國に置かば一流の達人とも申されんが、當郡山には斯くの如き林左衛門が控へ居れば、容易に勝は取らせまじ、まだ其方は、（ト林左衛門へ思入あつて、）未熟な奴ぢやぞ。

ト よろしくこなし、政右衞門ハッと平伏なす。林左衞門思入あつて、

林左　さて荒木氏、某斯樣に勝は取れど、後日に是れを遺恨に思ひ仕返しなどは仕たまふな。此の御對面を御縁となし其許の身にかゝりしことなら、又如何やうとも我が君へお執成しのいたさう程に、此の場の無念は跡へ殘さず、又御相談もござるなら、御遠慮には及ばぬゆゑ拙者が宅へ御出でなされ、篤とお話しいたすでござらう。

政右　重々厚き思召し、斯く未熟なる拙者めを、左樣に水魚の仰せあるは、流石當家の御指南役、追つて伺ひまするでござる。（ト辭儀をなす、大内記思入あつて）

大内　定めし長の試合にて、身體の疲れもあらん、櫻井、次にて休息いたせ。

林左　有難うはござりますれど、なに、これしきの試合にては、聊か疲れはござりませぬ。

ト 態と落着き居る、大内記僞りを言ふといふ思入にて、

大内　こりやさうあらう筈、追つてそちにも賞を與へん、一同次にて控へ居よ。

林左　然らば仰せに隨ひて、休息いたすで、

五人　林左ござりまする。（ト林左衞門先に甚八伴藏の四人附いて、上手へはひる。彌三右衞門思入あつて）

彌三　上へお詫びは拙者より、申し上ぐれば荒木氏、さ、お暇を仕つらう。

政右　はツ。（ト彌三衞門は大内記へ辭儀をなし、悄々と立たうとするを、）
大内　こりや〳〵、暫く待て。
彌三　はツ、御用でござりまするか。
政右
大内　暫く控へい。（ト思入あつて○の近習を招き、ちよつと囁き、）次へ立て。
皆々　はツ。（ト皆々辭儀をなし奥へはひる。大内記四邊を見廻し。）
大内　兩人、近う。
彌三　はツ。（ト白洲階子の際へ、摺り寄る。）
政右
大内　いや、苦しうない、是れへ參れ。
政右　それでは、あまり恐れあり。
彌三　いや、仰せなればお進みなされい。
政右　はツ、はツ。
　ト誂への合方になり、政右衞門彌三右衞門塵を拂ひ二重へ上り、下手緣側へ住ひ平伏なす、大内記思入あつて、
大内　今其方が試合を見るに、天晴なる達人ゆゑ、只今より五百石に召抱へるぞ。

政右　え。（トびつくりなし、）
彌三　政右　すりや拙者めが敗を取りし、不鍛錬のお叱りもなく、五百石にお召抱へとな。
彌三　共に連なる拙者めも、面目もなき事と存じ、後日のお叱り蒙るを覺悟いたし居つたる所、
政右　存じ寄らざる其仰せ、
彌三　こりや一圓合點が、
兩人　參りませぬ。
大内　こりや政右衛門、そちは大器量ある遣ひ手ぢやな。
政右　何とおつしやりまする。（ト合方きつぱりとなり、）
大内　予は遊藝亂舞は好まねど、武藝に於ては世間よりも好き者と言はれし者なるが、今其方が試合を見るに、櫻井などゝは遙に勝り手練の太刀筋、尚驚きしは、慥に打込む隙のありしは既に二度三度に及べり、そこを救ひて打込まず、古參を思ひて櫻井に勝を讓りて敗を取りしは、驚き入りし　そちが心中、まことに感心いたせしぞ。
政右　すりや拙者めが三度まで打込む隙を打たざるを、上には御承知ありしとな。はッ、好き者と仰せ遊ばすほど、驚き入りましてござりまする。

彌三　拙者はそこへ心附ず、たゞ打込まれしに恐怖なし、前後忘却仕つりしが、只今のお詞にてやうやく安堵いたしてござる。（ト大内記政右衛門をぢつと見やり、）

大内　こりや倉橋、

彌三　はツ。

大内　柳生十兵衛殿は、よい高弟を持たれたの。

彌三　御意の通りにござりまする。

大内　今日より其方を、我が指南番と頼むぞよ。

政右　はツ、仰せにはござりますれど、なかなか以て未熟の某。

彌三　はて、お直の仰せ、五百石にお召抱へに相成る上は、遠慮いたさずお請けいたしやれ。

政右　はツ、冥加に餘る其のお詞、有難く存じ奉つりまする。

大内　然らば汝が眞の手練を、此の場に於て見せてくりやれ。

政右　委細承知いたしてござる。

ト大内記紙臺の驛路を振る、是れにて以前の諸士一、二、三、四、五、六の六人、袴股立にて木太刀を持ち、下手よりばらばらと出來り、一本の木太刀を眞中へ置き、三人づゝ上下に別れ、

一　君の仰せ荒木氏、

二　此の場に於て、

六人　お立合ひ下され。

政右　いで、お相手仕つらん。御免。

　ト二重よりひらりと飛下り、件の太刀を取つてぢつと構へる、誂への鳴物になり、双方より一時に打つて掛る、是れを相手に烈しき立廻り、此内大内記心を配りよろしく思入、彌三右衛門感心のこなし、トヾ六人をきつと留め、

　是れが則ち。(ト呑み込ませる、)

大内　おゝ、(ト又打つてかゝる、ちよつと立廻つて六人を打ち伏せ、下手へ下る。大内記悦ばしき思入。皆々上手へ控へる。)おゝ、見事々々。

政右　何れも失禮、お許し下され。

大内　流石は荒木が手練の早業、感心ぢやの。

六人　はツ、恐れ入つてござりまする。(ト大内記思入あつて、)

大内　我は武門の果報者、よき家來をば、(ト思はず縁端へ進み出るを道具替りの知らせ、)求めしぞ。

ト悦ばしき思入、皆々はツと平伏なす、此の模樣張扇の音、合方にて道具廻る。

（荒木宅の場）――本舞臺一面の平臺、正面一間の床の間、續いて三尺の地袋、違ひ棚、下手墨繪山水の襖、上手一間の障子屋體、下手板羽目、是れに馬乘提灯などを掛け、いつもの所屋根附の門、是れに表札を掛け、此の外黑塀にて見切り、總て譽田家藩中政右衞門住居の體、床に柳生の書きし一行物の軸を掛け、此の前に允可の卷物を三方へ載せ、神酒を供へあり、爰に以前のお谷裏向きにて掛物へ拜をなし、下手にお賤佇ひ、合方にて此道具留る。とお谷こちらへ來り、お賤床へ思入あつて、

お賤　今日お床へお掛けなされし、あのお掛物は、どなた樣のお筆と申すのでござりますか。

お谷　あれは旦那のお師匠樣、柳生十兵衞樣のお筆、又前にある一卷は柳生流を傳授の卷物、今劍道の達人と言はるゝやうにお成りなされし、その御恩人であるわいの。

お賤　それで御樣子が分りました、外ならぬ今日は旦那樣が御當家へお抱へにおなり遊ばす、いはゞ大事のお日柄ゆゑお祝ひ遊ばすのでござりませう。もう程なく兄さんが、試合の御左右を申し上げに一先づ先きへ戻る筈、きつと御勝利とは思へども、少しも早く御樣子を承はりたいものでござりまする。

お谷　たゞ心掛りに思ふのは、此間よりの夢見の惡さ。又二つには八幡樣のお守受けし其の時に、持ちし扇子の親骨が、自然とはなるゝ忌はしさ。(ト思入あつて、)もしや鎌倉表にて何ぞ凶事でもありはせまいか。それとも今日のお目見得に、變りしことのある知らせか、早く樣子が聞きたいわいの。

お賤　御殿と申せどお屋敷內、ちよつと私がお玄關口まで一走り行て兄に逢ひ、樣子を聞いて參じませう。

お谷　あゝこれ、女子の行くは旦那の外聞、今に知らせがあらうほどに、まあ待つて居やいの。

トお賤立ちかゝるな。

お賤　それでもあなたが、御心配を、

お谷　はて、まあ待ちやいといふに。

ト是れにて餘儀なく控へる、合方ばたばたになり、花道より以前の武助走り出來り、直舞臺へ來り、門口を開けようとして考へ、

武助　お供待にて樣子を聞き、腹立ち紛れに宙を飛び、お內へ知らせに戻つて來たが、よくよく思ひ廻して見ると、今かくと奧樣が試合の勝負の吉左右を、お待ち遊ばす其の矢先きへ、恥辱をお取

りなされたとのめ〳〵言つて行かれもせず、こりや立戻つて旦那様の、お供をして歸ると仕よう、さうだ〳〵。（トつか〳〵と花道へ行き、）いや〳〵、とはいふもの〻奥様や、又妹が待つて居よう、いつそ思ひ切つてお知らせ申さう。（ト又門口へ來て、）こいつはどうも言ひ出し難いわえ。

ト門口にてぢつと考へ居る。内には兩人思入あつて、

お賤　斯うして居る間も心掛り、旦那のお恥にならぬやう、ちよつと見て參じませう。

お谷　それ程までに言やるなら、なるたけ傍へ目立たぬやうに。

お賤　はい、畏りましてござりまする。（トお賤立上り門口を明け、出ようとして見附け、）もし兄さん、何を立つて居なさんす。

武助　今爰へ戻つて來たれど、内へはどうもはひりにくいわえ。

お賤　なに、はひりにくいことがござんすものか、先程からお待兼ね、早うこちへ來なさんせ。

武助　お待兼ゆゑ、猶言はれぬわえ。（ト是れにてお賤心附き、）

お賤　そんなら、もしや、旦那のお身に、

武助　拘はることが出來たわえ。

お賤　え〻〻〻。（トびつくりなす、此聲にお谷心附き、）

お谷　なに、旦那の御身にかゝりし事とは。これ武助、早う樣子を聞かしやいの。

　　　　　ト是れにて武助内へはひり、

武助　奧樣、殘念でござります。（ト男泣きに泣く。）

お谷　なに、殘念と、

兩人　言やるのは。（ト合方になり、）

武助　さ、今日君の御前に置き、櫻井との御立合、十分勝と思ひの外、噂を聞けば再度三度旦那が打込む太刀が外れ、トヾの詰りは負けになりしと、承はつてござりまする。

お谷　すりや、あの、打ち負けたまふとか。

お賤　えゝゝゝ。（トびつくりなす。）

武助　さゝ、まだそればかりではござりませぬ、お上の樣子聞く間もなく、林左衛門を始めとして今朝社内で出合つたる弟の甚八轟伴藏四人の弟子が、肩臂怒らし、遙々遠き他國より此の大和郡山まで恥をさらしに參りし政右衛門、倉橋氏も諸共に斯樣な奴を推擧なし、試合の恥辱に差控へを仰せ附かりしのみならず、旦那は其場で梵天國と皆口々に惡口雜言、こりやもういつそ一摑みと、飛び掛らうとはいたせしが、先刻のお詞にも決して手向ひいたすなと、仰せありしに是非な

くなく、握拳の汗を掴み、立ち歸つてござりまする。（トよろしく思入、お谷無念の思入にて、）

お谷 さういふ事にならうとは、神ならぬ身の露知らず、床に掛けたる先生のお筆を祈りし甲斐もなう、今日の試合に打ち負けたまふは、未だ御運の開かぬ知せか、えゝ情ないことぢやなう。

ト愁ひのこなし。

お賤 今兄さんが門口に戻ると知らずお玄關へ樣子を聞きに行かうとせしが、まだ其時は吉左右を樂しみ居りしが今となり、あなたさまのお心根を、お察し申すと何とやら。

武助 悔し涙の止め途なく、是れと知つたら社内にて、片ッ端から打ち倒さうもの、えゝ無駄に助けて遣つたわえ。（ト武助無念のこなし、合方替つて、花道より政右衞門上下大小にて出來り、）

政右 待たせ置いたる家來の者が、無念の面に立歸りしと、お玄關にて承はりしが、深き樣子を知らざるゆゑ、こりや某が恥辱を取りしと、思ひ違ひをいたしたと見える。

ト舞臺へ來り、門口を明け上手へ通る、皆々おづ〳〵と出迎へ、

お谷 只今お下りに、

三人 ござりまするか。（ト政右衞門床の間に拜をなし、上手へ住ひながら、）

政右 御庭前にて試合の後、上の御機嫌うるはしく、存外に暇取りしぞ。

三人　え。（ト不審の思入）
政右　其方達も今日の首尾、最上吉を悦びくれよ。
　ト政右衛門落着き居る故、三人顔見合せ、試合に負けした隠すといふこなしあつて、
お谷　あなたはお隠しなされませうが、
お賤　今日の御試合に、
武助　櫻井めに打たれしは、
お谷　武助が注進、
三人　いたしました。（トきつといふ、政右衛門思入あつて、）
政右　さ、諺に申す負けるが勝、それゆゑ上のお首尾もよく、日頃の望みも叶ふたわえ。
武助　なに、日頃のお望み、
三人　叶ひしとは、
政右　五百石に抱へられしぞ。
三人　何とおつしやりまする。（ト合方きつぱり、）
政右　今朝郡山神社の境内にて、林左衛門が舎弟なる甚八始め四人の門弟、先きより無禮いたすといへ

ども、陪臣の身を以て恥辱を與へしのみならず、又候上の御前におき、假初にも御指南番たる櫻井殿を打負かさば、一人ならず數多の門弟暇にならんも計られず、左すれば我に遺恨かゝり、思はぬ敵を持たねばならぬ、そこを察して御前に置き勝つべき試合に態と打負け、鼻高々と櫻井殿に花を持たせて歸せし跡、流石當家の礎たる、上にはそれを御存じあつて、負けを取つたる某へ直樣その場で五百石、高祿たまはる此身の面目、たゞ勝つのみを勝とせず、負けを勝となさずんば一國亂を起すの基、そちも短慮を愼みて再度の異見を忘るゝな。

トよろしく思入、皆々安堵せしこなしにて、

武助　一部始終を承はり驚き入りし御教訓、既に只今櫻井始め門弟衆の歸宅の折も、手出しを仕ようと存じましたも、今朝のお詞にぢつと控へし此身の幸ひ、成程人は負けるが專一、それが始終の勝といふもの、恐れ入りましてござります。

お谷　噂を聞いて立歸りし武助が忠義一途の氣に、思ひ詰めたる此胸も、

お賤　今のお話し承はり、私までも共々に、

三人　落着ましてござりまする。

ト合方きつぱりとなり、下手より以前の彌三右衞門やはり上下大小にて、以前の中間に袱紗の掛りし

白臺を持たせ出來り、直門口より內へはひる、

政右　是れは倉橋氏、先づ〱これへ。

彌三　眞平御免下され。（トよき所へ住ひ、）さて先刻は御前におき、見事な手練御覽に入れ、殿にも殊の外御滿足、御賞譽下し置かれしぞ。（ト下手に向ひ、）それ、お取次ぎ下され。

ト武助中間の持ちし白臺を受取り出す、中間は下手へはひる。政右衞門は右の白臺の袱紗を取る、內に時服を載せてあること。

政右　お詞下しおかれたるさへ、勿體なく存ぜしに、又もや斯樣な御時服まで頂戴いたす此の身の面目、是れも偏に其許のお執成しと、有難く御禮申し上げ奉つります。

彌三　返す〲も貴殿の御手練、且はお上の御眼力、双方劣らぬ智仁勇兼備いたせし御計らひ、世俗に申さば目の寄るところ、玉磨かざれば光りなし、爰が御運の開け口、こんな目出度い事はござらぬ。

ト彌三右衞門悅び、皆々共に悅ぶ、合方きつぱりとなり、花道より前幕の林平旅裝大小草鞋にて出來り、

林平　通用門で聞いたには、三軒目の屋根附の門と、教へてくれたは慥に向ふ、どれ、あれへ行つて尋

ねて見よう。(ト舞臺へ來り表札を見て、)おゝ、當家に相違ない、お頼み申す。

ト門口を明ける、武助出て、

武助　おゝ、林平どの、よくこそ參られた。

林平　眞平御免下さりませ。(ト門口にて草鞋を脱ぐ。)

武助　鎌倉表より林平が、參りましてござりまする。

政右　なに、渡邊より使ひが參つたとな。

お谷　何ぞ火急な用事ありしか。

彌三　身共に構はぬ、是れへ來やれ。

武助　さ、ずつとあれへ通つたがよい。

林平　眞平御免下さりませ。(ト林平足を拂ひ、下手へ住ひ、お賤茶を出す、此内懐中より書狀を出し、)委細は此の書中に認めてござるが、鎌倉表に變事ござつて、取る物も取りあへず、志津摩樣の書狀を持ち、罷り越してござりまする。(ト一封を出す。)

政右　なに、變ありしとは氣遣ひなるが、(ト開封なし、讀終りてびつくりなし、)こりや、容易ならざる一儀なるぞ。

彌三　なに、一大事とは氣遣はしいが、
お谷　して、其の變と、
皆々　申すのは。
政右　さ、そちが親父靭負殿には、
お谷　如何なされましてござります る、
政右　人手に掛つて相果てしぞ。
皆々　えゝゝゝ。（ト皆々びつくりなし。）
林平　さ、其のお驚きは御尤樣、少しも早く此事を知らせてくれと若旦那が、涙ながらの御傳言、實に
　お察し申し上げまする。
武助　して、大旦那を討ちたる者に、お手掛りでもござりますか。
政右　此文體に記しあるは、同藩澤井又五郎、家重代の正宗より事起りて打果し、逐電せしと申す事。
武助　そんなら澤井又五郎が、あの大旦那を。（ト無念のこなして思はず大きく言ふ。）
政右　これ、竊にいたせ。（ト制する、お谷林平へ思入。）
お谷　してくそれは、どういふ譯にて。

林平　委細は跡にて志津摩様、取片附けを濟ませし上敵討の願ひを上げ、御免次第御當家へお越し遊ばすお積りゆゑ、其時申し上げまするが、大事の前の小事と申せば、御當家とても今日より、なかなか油斷は出來ませぬ。
お谷　女子なれども武士の妻、よう合點して居るわいの。（ト政右衛門ぢつと思入あつて、）
政右　悦びあれば悲しみと、此身に賜る高祿も、
お谷　前表なるか讓られし、扇子の骨の放れしは、
武助　思ひ廻せば鎌倉の、此凶變の辻占を、
お睦　神や佛のお告げなりしか。
彌三　荒木氏にも舅のことゆゑ。（ト政右衛門きつと思入あつて、）
政右　仕儀によつては、助太刀に、
皆々　え。
政右　知行も返上、（ト腕組をなすを木の頭、）せずばなるまい。
ト皆々ぢつと思入、此の模様時の鐘、合方にてよろしく、

ひやうし幕

三幕目

矢部屋敷門外の場
芝青松寺切腹の場

（役名――町奴夢の市藏、矢部城五郎、生田官兵衞、寺門番惣助、生田の徒士作内、矢部の臣三羽鷲藏、生田の徒士三平、夢の市藏子分奴千太、矢部の足輕市平、同仁助、同三藏、同四郎八、生田の足輕吾助、同陸藏、門七平、八十八、所化西念、所化雲念、青松寺の住僧敎山、笹川丹右衞門。市藏女房お蝶、又五郎母鳴見等。）

（矢部表門外の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に白木の冠木門、兩袖附、下手潛り出入り、上の方日窓、長屋の前側、書割よろしく、下の方九尺の門番所、中窓太き格子、簾を掛け、續いて忍び返し附黑塀、總て旗本屋敷の體、爰に序幕の鷲藏、麻上下大小にて床几に掛け、足輕四人菖蒲革の袴股立一本ざしにて、六尺棒を持ち、左右に控へ居る、此の見得時の太鼓にて幕明く。

市平　いや、鷲藏樣へ伺ひますが、今も御當家へ生田家より、

仁助　御使者が參ると申すことにて、門前の警固仰せ附かり、

三藏　今朝より我々四人、張番いたして居りますが、

四郎　御門內へ通さぬのは、如何なる仔細でござりますな。

鷲藏　此の一條は其方共も、かね〴〵聞いて居るであらうが、生田の藩中澤井又五郎殿遺恨あつて、同藩の渡邊靭負を討つて捨て、御當家へ立退かれしを、御同家の誼を以てお匿ひなされし所、生田家より取戻しに屢々使者も差越せど、此方にて渡さゞるゆゑ、國元より澤井殿の御老母を呼び下し、强て渡さぬ其時は、命を斷つと嚴しき掛合。

市平　其のお噂は此間、承はりましてござりますが、

仁助　その後如何なるお掛合に、相成りましてござりますな。

鷲藏　澤井殿も是れを聞かれ、我が犯したる罪ゆゑに、親に一命捨てさせては、不幸の至りと後悔なされ、一昨日お組合の進藤殿を初めとして、御集會の上御評議あつて、元生田家の御分家たる生田殿が參られて、種々仲裁のお掛合あつて、今日當御門前におき又五郎殿と御老母を、引替へに受取り渡し、先づ事濟みに相成るのだ。

市平　それでは今日生田殿より、御老母を召連れ參り、

仁助　又五郎殿と引替にいたしますのでござりますか。

三藏　さうとは知らず私共は、大騷動になりませうと、

四郎　お噂いたして居りましたが、よく穩便に參りましたな。

鷲藏　所詮餘人が參つては折合ぬ所なれど、いはゞ内輪の御分家ゆゑ、官兵衞殿のお扱ひで、引替ることになつたのだ。

市平　未だ大阪兩度の戰に、出張ありし方々が、

仁助　多くおいでなさるゝゆゑ、やゝともすると一戰しろと、

三藏　兎角に戰をお好みなさるが、われ〳〵共は鐵砲除け、

四郎　楯の代りの先陣は、眞平御免でござります。

鷲藏　そりや其方共ばかりでない、身共なども此程より頭痛にいたし居つたるが、無事に納まる御沙汰を聞き大安心をいたしたて。いや、何は兎もあれ生田殿より、使者が參らば門前にて、請取り渡しの應對あれば何事なるかと往來の、諸人が見物なすであらう、其時こそは其方共、左右へ別れて追拂へ。

四人　畏つてござります。

鷲藏　最早程もあるまいから、是れにて入來を相待ち申さう。

ト誂への合方になり、花道より笹川丹右衞門上下大小草履、作内、三平紺羽織袴股立大小草履若黨にて附添ひ、續いて乘物一挺、紺看板の中間舁ぎ、羽織袴股立大小足輕にて附添ひ、跡より紺看板の

中間挾箱を擔ぎ附添ひ出來り、花道にて、

丹右　あれなる矢部家の門前に、家臣の出迎へ居る樣子、其方參つて案內いたせ。

作內　畏つてござりまする。（ト作內先へ駈け拔け、）お取次お賴み申す。

鷲藏　はツ。

作內　生田家より使者として、家臣笹川丹右衞門罷り越してござりまする。

鷲藏　先刻より御入來を、是れにてお待ち申してござる。

丹右　それはお役目御苦勞千萬、拙者參りし趣きを上へ御披露下されい。

鷲藏　只今申し上げるでござる、暫くそれにお控へ下され。

丹右　承知いたしてござる。

ト合方きつぱりとなり、鷲藏門の潛りへはひる、此內下手よき所へ中間挾箱を立てる、是れへ丹右衞門腰を掛け、作內、三平左右に控へ下手へ乘物を置き足輕中間此脇に佇ひ、時計の音誂への合方になり、門の扉を開き、城五郎、官兵衞繼上下、大小草履にて出來る、跡より中間二人革床几を持ち出來る、丹右衞門挾箱を放れ、辭儀をする。官兵衞思入あつて、

官兵　本家より今日の使者に、誰が參るかと先刻より相待ちしに、忠臣無二の聞え高き笹川丹右衞門な

るか、請取りの役目大儀に存ずる。

丹右　生田様にも昨日は、主人方へ御入來下され、種々お取扱ひありし上、又五郎と其老母と取替へ渡すお約定、是れにて無事に納まるも、御懇切のお扱ひゆゑ、家老中を始めとして、一同御禮申し上げます。

官兵　今大名旗本と列は替れど同家の某、如何にも傍觀いたし難く昨日推參いたせし所、身不肖なる某が仲裁を入れたる所、早速お聞き濟み下され、千萬忝なう存じ申す、右ゆゑ矢部氏其方へ一禮を述べたしと、是れへ御出張いたされしぞ。

丹右　これは〳〵御自身に、恐れ入つてござりまする。（ト辭儀をする。）

官兵　先づ〳〵それへ掛けられよ、此方も是れへ掛けるでござる。

ト城五郎官兵衞床几へ掛ける、是れにて丹右衞門も元の挾箱へ掛ける。

城五　今般我が甥又五郎が、靭負を討ちし一條より、既に大名旗本の仲に大いな縺れを生じ、天下の亂にも及ぶべきを、是れなる同姓官兵衞殿が、仲裁の扱ひを早速お聞き濟み下され、我等に於ても大慶至極、邸内へ請待いたし、厚く馳走いたすべきを、門前に於て請取り渡す約定ゆゑに、是れへ出で一禮を申し述ぶる、失禮の段許されよ。何れ近日御身をばゆる〳〵請待いたすであらう。

丹右　御丁寧なる其の仰せ愚臣身に取り冥加千萬、有難く存じ奉つる、實は此度又五郎をお返し下されずば、止むを得ざる武門の意地に如何なる變を生ぜんかと、重役一同眉を顰め痛心いたし居つたる所、御同姓のお扱ひ、且は尊公の御配慮にて、今日双方事なく相濟み、使者に立ちし拙者まで祝着至極にござりまする。

官兵　是れと申すも老臣始め、御身の如き秀才のよい家來が多いゆゑ、我が本家の則ち仕合せ、殿は所謂懷子一途に立腹いたされしを、薪に油を添へるやうな愚臣の多き其時は、我が仲裁を聞き濟みなく、萬一兵でも向けられなば及ばずながら此方とても、旗本中一致なし一戰に及ばにやならぬ、名に負ふ大家の大名を、小身者が相手となしいかで勝利を得ることあらん、後來恥辱を殘す所、

城五　仁惠深き生田殿、此方よりの歎願を速に聞き濟まれしゆゑ、天下の亂にも及ばずして人命をも失はず、斯く平穩に納りしは此上もなきことでござる、上邊は各力み居れど內實及ばぬことを知れば、昨日是れなる官兵衛殿の返事を聞くまで我れ人共に、苦心なして居つたる所、聞き濟みありしと承はり、會合なせし旗本一同、愁眉を開き生田殿の、寬仁大度を賞してござる。

官兵　今矢部氏の言はるゝ如く、實は今般の一條は、生死存亡に拘はる儀ゆゑ、旗本一同眞以て上なきことに悅び居れば、歸邸の後殿を始め重役衆へ御吹聽下され。

ト城五郎官兵衞丁寧に思入あつて言ふ。

丹右　其儀は手取方にても、平穩に事納りしを、何れも悦び居りまする。

官兵　して、約定の澤井が母は、今日是れへ召連れられしか。

丹右　如何にも、同道いたしてござる。（ト是れにて城五郎思入あつて、）

城五　さて笹川氏手前共折入つて頼みがござるが、お聞き濟み下されうか。

丹右　如何なることか存ぜねど、身に叶ひしことにござらば。

官兵　それは千萬忝けない、官兵衞此通りお禮を申す。（ト膝へ手を突き辭儀する。）

丹右　して、お頼みと仰せらるゝは。（ト合方きつぱりとなり、）

城五　いや、餘の儀にもござらぬが、昨日是れなる官兵衞殿生田殿へ罷り越し、種々御談判いたせし上、今日手前門前にて又五郎と老母をば交換いたす約定ゆゑ、昨夜又五郎へ其趣き篤と申し聞けし所、彼れも先非後悔なし落涙數刻に及びし上、某等へ强ての頼み、今日舊邸へ引かれなば死罪の刑に行はるゝか、又は寬典のお慈悲にて、切腹仰せ附けらるゝか、どの道助命叶はねば母に再び逢ふことならず、先祖の勤功を水となし、數代連綿と續きたる澤井の家の斷滅なすも、我が一朝の怒りゆゑ、嘸かし母も恨み申さん、此身の不埒を詫びし上又と逢はれぬ今生の暇乞がいたしたけれ

官兵　ば、武士の情に暫くの、猶豫いたしくれよと餘儀なき頼み。
人を害せし身を以て、未練な事と存ずれど、又退いて兩人が親子の情を斟酌いたせば、暇乞がいたしたいと申すも尤なることゆゑ、矢部氏にも此お頼み。
城五　是れにて對面さすべきなれど、老母は元より又五郎も、今生の別れなれば定めて悲歎に迫るでござらう、左すれば爰は往來ゆゑ他見の嘲り免れ難し、暫時の猶豫下さらば當門内にて對面させ、暇乞相濟まば、直に老母が乘物へ又五郎を打乘せて、御身へ渡し申すでござらう。
官兵　昨日までは敵となりし、矢部氏ゆゑに計略かと、定めて懸念がござらうが、今日無事に納るを旗本一同悦び居れば、決して左樣なことはござらぬ。其の證人は分家たる此の官兵衞が請合ひ申せば、暫時の間駕籠の儘老母をお渡し下さるまいか。
城五　暫時なれども其の間は斯くいふ兩人人質に、此の場に居れば懸念なく、
官兵　同家の身共へその老母、
城五　暫時渡して下さらば、
官兵　返すぐも、
兩人　大慶なり。（ト兩人よろしく思入にて言ふ、丹右衞門ぢつとこなしあつて、）

丹右　斯く御身分ある御兩所が、仰せによもや僞りはござるまいと存ずるゆゑ、丹右衛門寸志を以て、暫時老母をお渡し申さん。

城五　すりや、此方が頼みをば、

官兵　異議なくお聞き濟み下さるとか。

城五　御身の厚情、

兩人　忝けない。

ト兩人辭儀をなし、官兵衛乘物の側へ行き戸を明ける、内に鳴海、白髮鬘、又五郎の母のこしらへにて乘り居る。

官兵　こりや老母、只今それにて聞いたであらうが、親子の情を斟酌あつて、矢部殿のお頼みにて逢はれぬ悴に對面するを、有難きことに思へ。（ト鳴海思入あつて。）

鳴海　厚恩受けし靭負殿を殺害なせし人でなしを、先非を後悔いたせしとて、矢部樣はじめ生田樣、悴を不便に思召され笹川殿へ對面をお頼み下さる御厚情、駕籠の内にて私は有難涙にくれましたが、其陰にて對面なさば、申して詮なきことながら數代續きし、澤井の家名を失ふ彼れが不所存を、篤と申して此の母が、愚癡に固まる心をば、晴らしたうござりまする。

官兵　所詮此世で逢はれざる悴に逢ふも外ならず、笹川氏の計らひゆゑ、是れにて厚く禮を言はれよ。

鳴海　古朋輩の誼とて、暫しの猶豫なし下さる笹川氏のお取計らひ、お禮は詞に盡されませぬ。

丹右　身共も親子の情を酌み、暫時の間猶豫いたす、遲刻いたせば役目の越度、疾く〳〵對面いたされよ。

鳴海　有難う存じまする。

官兵　如何にも、猶豫いたして、情が仇となつては濟まぬ。

城五　こりや鷲藏、其方駕籠に差添ひ參り、門内に於て對面させ、名殘りが濟まば其の駕籠へ、直に又五郎を打乘せ、此處へ連れ參れ。

鷲藏　委細畏つてござりまする。

城五　それ、中間共早くいたせ。

中間　はツ。

ト合方にて矢部の中間鳴海の乘りし駕籠を擔ぎ、鷲藏附添ひ門の内へはひる。城五郎思入あつて、

城五　見受けし所笹川氏には、未だ四十路にならざる年配、家老中の目鏡を以て使者に立たれし程あつて、智勇あること言を待たず、然るに只今某等對面の儀を頼みしに、古朋輩の誼を以て暫時の

猶豫を許されしは、是れ則ち仁なり、まことに御身は智仁勇三德兼備の侍なり。

官兵　矢部殿の仰せの如く、一存を以て對面を許されしは大器量、大抵の者ならば何樣身共が請合ふとも、其心底を疑うて、なか〳〵承諾いたすまじ。實に武士たる者の手本、人は斯くこそ有りたきもの。

城五　かゝる仁者が今日の、使者に當家へ參られしは、澤井親子が身の幸ひ、

官兵　就てはわれ〳〵兩人も、

城五　彼等に對面いたさせて、

官兵　まことに大慶、

兩人　至極でござる。（ト兩人顏見合せにつたり笑ふ。丹右衞門兩人の詞が心に觸る思入にて、）

丹右　最前より御兩所が、拙者を御賞與下さるは、餘り過ぎたるお詞にて、却つて迷惑仕つる、それは兎もあれ暫時とあるゆゑ、老母をお渡し申せしが、お約定ゆゑ又五郎を、早くお渡し下されい。

官兵　如何にも、お渡し申すでござる。

城五　最早對面いたせしならんに、何ゆゑあつて手間取り居るか。

トばた〳〵になり、下手の潛りより鷲藏出來り、

鷲藏　はッ、申し上げます。
城五　何事なるか。
鷲藏　又五郎殿老母に逢ひ、小兒の如く膝に縋り涙に暮れて別れを惜しみ、拙者再應促せども、いッかな其場を立たれませぬが、此儀如何いたしませう。(ト城五郎是れを聞き、立上りて、)
城五　母に縋りて涙に暮れ、別れを惜しんで立たぬなどゝは、對面させし恩義を忘れ、近頃卑怯未練な奴。
官兵　遲刻いたさば、われ〱が使者に對して言譯なし。
城五　某參つて引立て來らん。

ト ばた〱には、城五郎鷲藏潛りより門の内へはひる、丹右衞門は、もしやたばかれしかといふ思入あつて、

丹右　先非を後悔なせしとあれど、元より奸智の又五郎、變心なせしも計られず。(ト立ちかゝるを、)
官兵　いや、必ず氣遣ひめさるゝな、只今矢部殿參られゝば、假令何やう申さうとも、約定通り又五郎をお渡し申すに相違ない。
丹右　ではござれども遲刻いたすは、もしや矢部殿拙者をたばかり、老母を引上げめされしか。

官兵　小身なれどもわれ〳〵も、徳川譜代の旗本なり、卑怯未練なことをなさうか、殊に身共は生田の分家、本家を欺き申さんや、急かずと是れに控へられよ。

丹右　然らば即刻お渡し下されい。（ト門の内にて、）

鷲藏　只今お渡し申すでござる。

ト合方きつぱりとなり、門を開き以前の駕籠を中間擔き、鷲藏附添ひ足輕六人火繩附きの鐵砲を持ち出來る。

官兵　約定通り笹川殿、いざ、又五郎を請取りめされ。

丹右　承知いたしてござる。（ト丹右衞門駕籠の側へ立寄り、戸を明け內を見てびつくりなし、）やゝ、こりや駕籠の內には。

官兵　匿ひ置きし又五郎を、渡すと言つたは僞りだ。

丹右　さては我を欺きしか。

官兵　知れたことだ。

丹右　やゝゝゝゝ。（ト驚く。）
皆々

官兵　澤井又五郎が母鳴海、慥に身共が請取つたと、立歸つてさう申せ。

丹右　さりとは卑怯至極な仕方、武士たる者にあるまじき虚言を以て我を欺き、約定せしを違約なし、鳴海を奪ひ取つたるか。(ト丹右衛門悔しきこなしにて鍔元を持ち、切らうといふ思入)

官兵　何だ〳〵、刀へ手を掛け此の官兵衛を、われは切る氣か、痩せても枯れても天下の旗本、殊にはわれが主人たる生田右内が分家の某、いはゞ主人も同然だぞ、陪臣の身で分家をば切れるものなら切つて見ろ。

足輕　手向ひなさば、

六人　一打だぞ。(ト筒先を向ける、丹右衛門これにて無念を怺へ、氣を替へて)

丹右　なに、お手向ひをいたしませうや。

官兵　よもや、身共は切られまいな。

丹右　ムウ。(ト無念の思入)

官兵　昨日の約定變替ず、流石は大家の大名だけ、よくぞ鳴海を送られしと、右内に禮を言つてくりやれ。

丹右　ちえゝ。(ト始終無念のこなし)

官兵　丹右衛門大儀。(ト時の太鼓になり、官兵衛先きに皆々門内へはひる)

丹右　御分家ゆゑに手出しもならず。召連れ參りし澤井が母を、やみ〳〵奪ひ取られしか。
作内　いで、此上は此の門を、
三平　踏み破つて、
皆々　取返さん。（ト皆々立掛る、此時門の上へ鷲藏半身を出し）
鷲藏　此門破つて打ち入らば、豫て用意の飛道具で、片ツ端から。
大勢　打ちとるぞ。（ト空砲を二發打つ）
作内　恥辱を取りし上からは、
三平　なに、飛道具に、
皆々　恐れうや。（ト皆々門へ立かゝるを）
丹右　やれ、者共逸まるな。
作内　なぜお止め、
皆々　なされまする。
丹右　手出しをなさば猶のこと、お家の恥辱に相成るぞ。
三平　假令恥辱に、

皆々　なればとて。
丹右　心逸るも尤なるが、此の丹右衛門が所存あれば。
皆々　それぢやと申して、
丹右　はて、待てと申さば、
皆々　むゝ、
丹右　まあ〳〵待ちやれ。
皆々　ちえゝ。（トロ惜しき思入にて下手へ下る、丹右衛門思入あつて、）
丹右　矢部殿ならば渡さゞれど、御分家たる生田殿が請合ふゆゑに猶豫なし、又五郎が母を渡せしは此丹右衛門が役目の粗忽、其方共が越度ならず、今此門を打ちこはし、込み入るはいと易けれど、向ふは豫ての用意ゆゑ皆物の具に身を固め、飛道具を所持なせば、小人數にては敵し難し、此上不覺を取る時は猶々お家の恥辱なり、一先づ爰を退いて再び事をなすに如かず、其方共は屋敷へ歸り、此趣きを重役へ有體に訴へよ。
作内 三平　して、笹川樣には、
丹右　我は思ふ仔細あれば、跡より歸邸いたすであらう。

作內　とはいへ、此儘引取るが、

三平　如何にも殘念、

皆々　至極ゆゑ。

丹右　其の殘念を晴らさんと、思へば恥辱を重ぬるゆゑ。

皆々　すりや、此儘に、

丹右　疾く／＼屋敷へ引返せ。

皆々　はあゝ。

丹右　返す／＼も欺かれしは、（ト跡を見返り無念の思入あつて氣を替へ）さゝ、參れ／＼。

ト誂への合方になり、作內三平を先きに中間駕籠を擔ぎ、足輕中間花道へはひる。跡より丹右衛門靜靜と花道へ行き、振返りきつと見て、花道へ足早にはひる。合方きつぱりとなり、正面の門を開き城五郎官兵衛出て、丹右衛門の跡を見送る。此時、門の內後へ、腹卷籠手臑當の兵士大勢、鐵砲を持ち控へ居る。

城五　生田氏、

官兵　思ふ通りに行きましたな。

城五　今日の一擧は同姓たる、其許ゆゑに首尾よく參つた。

官兵　日頃木家の者共は、小祿を取る旗本ゆゑ、分家ながら某を蔑ろにする口惜しさ、いつぞは意趣を返さうと存じ居つたる所ゆゑ、旨々木家を欺いて、日頃の恨みを晴らしてござる。

城五　戰場ならば十分の、勝利を得たる今日の出來。

兵士　たゞわれ〳〵は今朝より、

同　用意の鐵砲、

皆々　打たぬが殘念。

官兵　其方共には奧庭にて、

城五　鏡を拔いて、（ト兵士を見返るを道具替りの知らせ、）酒を與へん。

ト皆々はツと平伏する。時の太鼓になり、此道具廻る。

（青松寺墓場の場）――本舞臺常足の二重、草土手の蹴込み、正面に誂への立派な石塔、竹筒に樒を揷し、周圍三方駒寄せ、上の方に振好き松の立木、此の枝に白木綿三布の切れ引掛けあり、左右種々の石塔、此後玉椿の生垣山の張物にて見切り、日覆より松の釣枝、總て青松寺墓場の體、爰に千太奴鬘紺看板尻端折、跣足にて墓手桶を傍へ置き、眞中の石塔を掃除して居る、此の見得替つた

禪の勤めにて道具留る、千太四邊へ水を撒きながら、

千太　親分はどうしなすつたか、花を買つて直行くから、お墓の掃除をして置けと言ひなすつたから、先きへ來て綺麗に掃除をしてしまつたが、本堂へ先きへ行きなすつたか、早く來てくんなさりやあいゝに、晝でも墓場に一人居るのは、何だか氣味の惡いものだ。（ト風の音になり、松の枝に掛けてある白布指金で千太の肩へ落ちる、びつくりして飛びのき、）やあ、幽靈だ〱。（トよく〱見て、）ああ、此の切が落ちたのか、怖い〱と思ふ所へ、ふはりと是れが落ちたから、幽靈だと思つてびつくりした。

ト臆病なる思入、誂への合方になり、花道より夢の市藏、羽織尻端折り一本ざし草履、手廻りの頭のこしらへ、お蝶着流し駒下駄、同じく女房のこしらへにて出來る、跡より惣助やつし裝老けたるこしらへ低き下駄、門番の親仁にて樒を持ち出來り、花道にて、

市藏　今朝曉映がしたけれど、五ツ過ぎからすつかり晴れ、いゝ天氣になつたゆゑ、墓參りに出て來たが、いつの間にかしぐれてしまひ、泣き出しさうな天氣になつた。

お蝶　此お天氣より千奴が産れ附の臆病ゆゑ、一人でお墓の掃除をして泣顔をして居りませう。

惣助　あの奴さんは墓場が嫌ひで、代參にでもおいでの時は、氣味が惡いから來てくれと、わしを引張

つて來なさいます。

市藏　不斷は隨分いたづらで、なか〳〵人に負けねえ奴だが、何であんなに臆病だか。

お蝶　見たこともなからうのに、幽靈がきつい嫌ひ。

惣助　嘸びく〳〵して居なさいませう。

市藏　それぢやあ早く行つてやらう。（ト右の合方にて本舞臺へ來る。）

千太　おゝ、親分おいでなすつたか。

お蝶　さぞ一人で怖かつたらうね。

千太　怖い所か、たつた今幽靈が爰へ出ました。

お蝶　え、そりや本當のことかえ。

惣助　何ぼお寺の墓場でも、晝日中何で出ませう。

千太　幽靈だつて臆病なやつは、晝日中出るだらう。

市藏　いゝ加減に馬鹿を言へ、（ト言ひながら下を見て、）これ奴、手前が水を撒いたのか。

千太　へい、綺麗にしろと言ひなすつたから、すつかり水を撒きました。

市藏　今おれが草履で來るのを、知つて居ながら氣の利かねえ。

千太　こつちが跣足で居たものだから、さつぱり其處へ氣が附かなんだ。

お蝶　ほんに、お前もぼんやりだね。（ト惣助跣足になつて下駄を出し、）

惣助　もし親分さん、わしの下駄ゆゑ汚ないが、田圃で借りたと思召し、是れをお履きなさいまし。

市藏　そりやあ早速有難いが、然しお前を跣足にしちやあ、

惣助　なに、お前さん、わし共は佛が來れば穴を掘るので、跣足は不斷でござります。

市藏　それぢやあ貸してくんなせえ。（ト下駄を履く。）

惣助　お孃さまはお駒下駄か。

お蝶　又お前はわたしのことを、お孃さまとお言ひだね。

惣助　つい以前申し附けた癖が出てなりませぬ。（ト此内市藏は以前の白布を見て、）

市藏　此の白布はどうしたのだ。

千太　それが今出た幽靈さ。

市藏　なに、これが幽靈とは。

千太　怖い〳〵と思ふ所へ腥い風が吹いて來て、それがふは〳〵と飛んで來たから、幽靈だと思つてびつくりしました。

お蝶　成程、是れは怖かつたらう、わたしでもどつとしないね。
惣助　是れは昨日早桶へ掛けて來たのでござりますが、湯灌の時に濡らしたゆゑ、此の松の木へ引掛けて干して置いたのでござります。（ト言ひながら白布を松の枝へ掛ける、お蝶は墓を見て、）
お蝶　誰かお參りに來たと見えて、大層花が上つてゐる。
惣助　はい、今朝早く中間衆が、お掃除に參りました。
千太　是れぢやあたんと挿せませぬ、（ト竹筒へ樒を挿し、）親分二本餘りました。
惣助　餘つたらわしが方へ、二本下に取りませう。
市藏　なに、それにやあ及ばねえ、そこらへ挿して置くがいゝ。
千太　爰へ挿して置きませう。（ト駒寄せの側へ挿して置く、）
市藏　花を上げたら、奴は早く足を洗つてしまふがいゝ。
千太　足を洗ふは造作もねえが、井戸の側の柳の木が、何だか氣味が惡いね。
惣助　怖くば一緒に行つて上げよう。
千太　そりやア何より有難い。
ト右の合方へ木魚を冠せ、兩人下手へはひる、兩人樒の葉で水向なし、拜むことあつて、

市藏　これお蝶、此の戒名がお父さんだな。

お蝶　あい、春光院東風霞山信士といふがお父さんで、秋月院草露花香信女といふがおッかさんでござんす。

市藏　達者でおいでなさる時分、おとつさんにはお供先でお目にかゝつたことがあつたが、おッかさんは知らなんだ。

お蝶　そりや其筈でござんす、おッかさんは病身で、外へ出たことがござんせぬ。

市藏　嘸や冥土でお二人が、おれを恨んでござるだらう。

お蝶　そりや何ゆゑに。（ト誂への合方になり、兩人蹲んで、）

市藏　今更言ふのも愚癡のやうだが、親の代から引續き生田樣のお出入りで、手廻り頭をして居た市藏、久しい跡の初午に神樂堂を舞臺にして、假に左右へ棧敷を掛け、藤間の師匠の踊りがあつて、爪も立たない見物におぬしが押されて困るのを、棧敷へ上げてやつたのが、それが二人の緣となり、ぱつと家中に浮名が立ち跡先見ずに連れて逃げ、終に隱すに隱されず表沙汰になつたので、おれは屋敷の出入を止められ、おぬしは親の勘當受け、町家の身寄りが引取つて、それから二人夫婦になり、今では子まで出來たれど、あの時心得違ひをせずば、立派な所へ片附いて御新造さまと

言はれるのを、姐御々々と言はれるのも、おれが誘ひ出したゆゑ、草葉の蔭でお二人が、恨んでござるに違ひない。

お蝶　そりやお前よりわたしの科、女子は親の指圖を受け、夫を持つのが當り前、それを我が身のいたづらに情夫をこしらへ家を出て、親に恥辱を與へしは此上もない不幸ゆゑ、お詫びを仕ようと思ふ内お二人ともに引續き、遠い彼の世へお出でなされ、跡に殘りし兄さんへお詫びをすれど物堅く、勘當許して下されず、此の青松寺のお住持が伯父樣ゆゑにお願ひ申せど、折をば待てとおつしやるので、昨日と過ぎ今日と暮れ、明日は忌日に二人してお墓參りも是れまでの、不幸のお詫びをいたす心。

市藏　その物堅いおぬしの兄、丹右衛門樣には下馬先きで時折お目にかゝれども、互ひに顔を背け合ひ、見て見ぬ振りをする苦しさ、未だお出入りをする時分御懇意にした靭負樣が、表向きではならぬけれど、内證で出這入りするやうに其内詫びをして遣らうと、おつしやつたを樂しみに待つて居つたる甲斐もなく、その靭負樣は果敢ない御最期。

お蝶　討つた敵の又五郎が、内縁のある矢部樣へ駈込んだので匿はれ、渡せ渡さぬ爭ひから縺れとなつて此頃は、大名衆と旗本衆が敵同士になつたとやら、

市藏　大坪様でも中へはひり、早く双方留めなんだら、天下の騷ぎになるだらう。

お蝶　今は町家に住へども、産れた屋敷にわたしなども、よい心持はしませぬわいな。

市藏　そりやあ何とやらも釣方で、あれからこちらは下馬先きで、つい旗本に突ッ掛り幾度喧嘩をしたか知れねえ。（ト兩人よろしく思入、ばた／＼になり、下手より以前の惣助出來り）

惣助　もし、お孃さま／＼。

お蝶　其お孃さんはよしておくれよ。

惣助　左樣なら備前町の、親方さんのお上さん。

市藏　あわたゞしく來なすつたのは、何ぞ急な用でもあつてか。

惣助　今お兄樣の丹右衞門樣が、本堂へおいでなさいました。

お蝶　それではお堂へ兄さんが、お參りにおいでなさんしたとか。

惣助　お出逢ひなさらぬ其内にと、お知らせ申しに參りました。

市藏　大方明日の御命日で、御參詣においでなされたのだらう。

お蝶　お別れ申してそれきりゆゑ、

市藏　おれもお目にかゝりたいが、

お蝶　表向きでは兄さんに、
市藏　晴れて逢はれぬ二人が身の上。
惣助　左樣なれば御住持の、お部屋へおいでなされまして、襖の陰から御覽なされませ。
お蝶　見られぬやうに庫裏を廻り、
市藏　それではこつそり、臺所から、
惣助　緣側傳ひにお住持の、
市藏　部屋へ忍んで餘所ながら、
お蝶　思ひがけなくお目にかゝるも、
市藏　これも盡きせぬ、（ト市藏立上るを道具替りの知らせ）御緣だなあ。
ト寺鐘にて、よろしく道具廻る。

（青松寺客殿の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、正面大床の間、大幅の掛物、獅子の置物、上手違ひ棚下手袋戶棚、上下折廻し墨畫山水の襖、高麗緣の薄緣を敷詰め、下手に大衝立を置き、總て客殿の體。上手に以前の丹右衞門住ひ、前に書院煙草盆、下手に數山好みの法衣老けたる住僧のこしらへに

て住ひ、寺鐘にて道具留る。と床の淨瑠璃になり、

〽青々とそびえし松の大寺も、庭の紅葉に夕陽の暮るゝも遲き廣書院、客は住持が俗緣の甥に遠慮もあられ釜、所化がもてなす茶の手前、

ト此内下手襖の內より、小坊主鼠の齊附腰衣にて高杯の菓子を持ち出で、丹右衞門の前へ置き辭儀をしてはひる、跡より同じく小坊主紫の袱紗へ樂燒の茶碗を載せ、これを持ち出で、丹右衞門の前へ置き、辭儀をして、

小坊　粗茶一服召上られませう。

丹右　これは〳〵忝けない。（ト茶碗を頂き、よろしく呑みて茶碗を下へ置く。）

敎山　今一服如何でござるな。

丹右　最早十分にござりまする。

小坊　はツ。

〽所化は茶碗を携へて、禮儀みださず立つて行く。

ト小坊主茶碗を持ち、辭儀をなして下手へはひる。

丹右　今日は晝より時雨しが、快晴の日は小春ゆゑ、餘程暖氣でござりますな。

敎山　殊更今年は季候がおくれ、未だ九月の末なれど、紅葉も菊も盛りでござる。

丹右　季候は四時の僞りなく、春は花秋の紅葉、冬は必ず雪降るに、それに引替へ世の中に、僞り多き人心。

〽跡言ひさして丹右衞門、吐息をつけば住職が、

ト丹右衞門無念の思入、敎山合點の行かぬこなしあつて、

敎山　今日は春光院の逮夜ゆゑに、御參詣ありしか。

丹右　いえ廟參ではござりませぬ、今日拙者上りしは、伯父上へ折入つてお願ひがござります。

敎山　願ひといふは如何なることか、見れば顏の色も惡しく、例の寒じで不快なるか。

丹右　いえ、不快ではござらねど、我が顏色の惡しきといふは、殘念なることあつて。

ト丹右衞門拳を握り、無念の思入

敎山　拳を握り無念の樣子は、容易ならざることならん。して、此の伯父へ願ひといふは。

丹右　只今拙者が申す事、如何なる儀でも伯父上には、お聞き濟み下されまするか。

敎山　おゝ、僧侶の身にて叶ふことなら。

丹右　其のお願ひは外ならず、豫て世間の風説に、お聞き及びござりませうが、

〽あたり見廻し、聲ひそめ、（ト誂への鉦の入りし合方になり、丹右衞門思入あつて）

先達て渡邊靭負を遺恨あつて討果し、脱走なせし澤井又五郎、内緣に依り旗本なる矢部城五郎殿へ駈込みしを、其儘屋敷へ匿ひて、數度取戻しの使者を立つれど、旗本一同腰押なし、又五郎を戻さゞるゆゑ、當家に於ても御親類の諸侯方を打集め、屢々御評議ありし上、兵を以て取戻さんと、既に一決なせし所、元御分家にて同姓を名乘り今旗本の列に加はる、生田官兵衞殿參られ、種々仲裁を申し入れ、其砌り國元より人質に呼び寄せし又五郎が母鳴海、かれを緣家矢部方へ引渡し下さらば、速かに又五郎を生田家へ渡し申さん、此儀同家の因みによつてお取扱ひ仕つるが、御許容なくば引くに引かれず天下の亂になるは必定、左ある時は將軍家へ恐れ多きことなれば、枉げて承引下されたしと申す詞は尤ゆゑ、皆々評議なせし上其の意に任せ約定なし、某使者の役目を蒙り、今日矢部の門前へ鳴海召連れ參りし所、早速矢部殿生田殿門前へ立ち出られ交換の儀を厚く謝し、然して母に又五郎と今生の別れいたさせたし、武士の情に暫時の間猶豫いたしくれと強ての賴み、其内兩人人質に罷り居ると申せしゆゑ、よも僞りはあるまじと鳴海を先きへ渡せしに、又五郎が名殘りを惜しみ立たざる由を告げしゆゑ、矢部は卑怯と罵りて引立て參ると門内へ、入ると間もなく中間共が舁き出しは空駕籠にて、欺かれしが殘念ゆゑ既に鯉口をくつろげ

しかど、主人の分家に手出しもならず、殊には用意の飛道具に是非なく鳴海を奪ひ取られ、生涯になき恥辱を取り、おめ／＼歸る我が殘念、御推量下さりませ。

〽面色變り目は血走り、握る扇も碎くるばかり、事の破れに丹右衞門が無念を忍ぶ心中を、伯父數山も察し遣り、（ト此內丹右衞門無念の思入よろしく、數山も思入あつて、）

數山　又五郎と其母を交換いたす噂をば、我も今朝承はり、事平穩に納るを蔭ながら悅び居つたが、さてはそれも計略なりしか、御身が殘念推量いたす、浮世の塵に交はらぬ僧侶の身でさへ承はり、拔けし奧歯を嚙むほどなるぞ。

丹右　右の仕儀ゆゑ召連れし足輕中間門を破り、討入らんといたせしかど、飛道具にて固め居れば討入る時は忽ちに、皆討死をなさねばならず、さすれば主家の恥辱ゆゑ支へ留めて屋敷へ返し、某一人途中より、當寺へ竊に參つてござる。

數山　御身が話しの趣きを逐一之れにて承はれば、今日は逮夜の廟參ならず、當寺へ竊に參られしは、切腹いたす所存なるか。

〽悟道を極めし老僧が、星をさしたる一言に、

丹右　むゝ、流石は武家より出でし伯父上、よくぞ拙者が胸中をお察しなされて下さりました、願ひと

申すは當寺にて、切腹お許し下さりませ。

教山　主命により召連れし老母を矢部へ奪はれては、此上もない役目の越度、切腹なさずば武士道立つまじ、賴みの趣き承知いたした。

丹右　すりや、お聞き屆け下さりますか。

教山　當寺に古き檀家といひ、まして我等は一方ならぬ俗緣の脱れぬ伯父甥なれば、賴みを聞かいで何といたさう。

丹右　然らば是れより廟所へ參り、御先祖初め亡き父母へ家名を失ふ身の詫びなし、其上切腹いたすでござる。

教山　斯く決心の上からは、此世に居るも僅の內、申置くべきことあらば今の內に申されよ。

丹右　此期に及び別段に申し置くことござらねど、切腹なせしこと知れなば、屋敷よりして見屆けに必ず使者が參るでござらう、不覺を取りし申し譯に一命捨てし一條を、よしなにお話し下さりませ。

教山　其儀は委細承知いたした。

〽障子に殘る日の影も、薄き緣のおとゞひが袖に時雨のふることを、思ひ出して丹右衞門、

ト丹右衞門思入あつて、

丹右　爰に一つの心掛りは、不義をいたして父上の勘當受けし我が妹、母が末期の遺言に春光院が七回忌の法事の節は其方が、御靈前へお詫びをなし、屋敷へ出入りをさせずとも、勘當だけを許してくれと、くれ〴〵母に頼まれし其の甲斐もなく相果つれば、憚りながら伯父上には、七回忌の法事の節亡父へお詫びをなし下され、勘當お許し下さりませ。

教山　我も疾くより其事は左樣存じ居りし所、若氣の至りに家出なし、今は町家に住ひなし、先非を悔いて廟所へは心に掛けて參詣いたす。兄の詞はあるけれど、我は世外の出家ゆゑ、其の勘當の罪を問はず、來る度毎に對面いたすが、二人の中に子をまうけ、替ることなく暮し居る。

丹右　町人ながら妹が夫夢の市藏と申す者は、物の頭になる程あつて、身分は賤しき手廻りなれど、なか〳〵勝れし大器量、密通なさずば表向き、妹を嫁にやるべきもの、親の心に背きしゆゑ、勘當受けて兄妹にも晴れて對面なすことならず。

教山　今日御身が切腹せしを、跡にて聞かば嘸や嘸、本意なく思ふことであらう、春光院が七回忌の法事も最早來年なれば、愚僧が兄へ詫びようから勘當許して妹に、逢うてやつてはくれまいか。

丹右　手前の一人の妹ゆゑ、對面をいたしたけれど、父は元より母の詞七回忌の法事までは、生きて居つては對面ならず、切腹なして相果てなば伯父上の思召しにて、我が死顏に妹をお逢はせなされ

て下さりませ。

敎山　おゝ、承知いたした。

〽逢度き妹の勘當を許さぬ兄の胸の内、伯父は察して涙に暮れ、暫し詞も中の間より人目の關の衝立を、小楯に夫婦は忍び泣き、

ト此内丹右衞門敎山愁ひの思入よろしく、下手の屋體より衝立の蔭へ、市藏お蝶出で、濟まぬことだといふ思入、此の時八ツの時計を打つ。

丹右　今打ちしは八ツの時計、最前より餘程の間時刻をうつせば廟所へ參り、片時も早く切腹なさん。

敎山　かゝる事とは昨日まで、存ぜざりしが測らずも、一命捨つる災厄來り、

丹右　長く御恩を蒙りしも、日足短き今日限り、

敎山　生ある者は必ず滅し、

丹右　又會者は離るゝ譬、

敎山　世の習ひとはいひながら、

丹右　最早是れが今生の、

敎山　互ひに面の、

兩人　見納めなるか。

〽亡父に似たる伯父の顔、こなたは兄に似たる甥、名殘惜しげに打守り、咽ぶ涙に衝立の蔭に忍びし妹が、怺へ兼ねて泣き伏せば、

ト丹右衞門敎山互に顏見合せ、愁ひの思入、衝立の外の兩人もよろしく思入あつて、お蝶ハアーと泣き伏す。

丹右　や、思ひがけない其方は、

敎山　さては、それに忍び居つたか。

〽言ふ尾に附いて進み寄り、（ト床の合方になり）

お蝶　親の敎へを背きました不孝な我が身を顧みず、お詫びは申しにくけれど、どうぞ此場で御勘當を、お許しなされて下さりませ。

丹右　今も今とて伯父上のお詞添へがありしといひ、たつた一人の妹ゆゑ、許して遣り度きものなれど、亡き母上の遺言ゆゑ、春光院が七回忌の法事までは許されぬぞ。

お蝶　そこをどうかお情に、親なき後は兄は親、今兄さんが御勘當をお許しなされて下さらねば、わたしは生涯日陰の身、それを不便と思召し、お許しなされて下さりませ。

丹右　何やうそちが申すとも、母の詞はもどかれず、今勘當は許されぬぞ。（トきつと言ふ。）

お蝶　はあゝ。

〽はツとばかりに泣き伏せば、我が身の科におづ〳〵と、頭を下げて身を進め、
ト床の合方にて、市藏面目なき思入にて前へ出て、

市藏　あなた樣にお目にかゝるは面目もない身の不屆き、數代御恩を蒙りしお出入屋敷の生田樣、その御家中の娘御と親の許さぬ不義をなし、おびき出したる跡先見ず、掟嚴しきお屋敷の御法を破りし科により、手廻り頭を上げられて、お出入り叶はぬ御門止め、初めて二人も目が覺めて、轉び寐したる身の科を後悔なして朝夕に、宅から丁度ふさがりの北に當りしお屋敷を拜まぬ日とてはござりませぬ、せめての事と御兩親の御命日を缺さずにお墓掃除に參りますも、不義をいたしたお詫びの種、定めてお腹も立ちませうが、心得違ひをいたしましたも、皆此の市藏が惡いゆゑ、生涯お出入り叶はずとも、私ことは爲した罪、いたし方がござりませぬが、どうかお蝶が御勘當をお許しなされて此世のお別れ、一言妹とお詞を、お掛けなされて下さりませ。

丹右　事を分けたる其方が、賴みなれども聞かれぬのは、今日大事の役目をば我が身の粗忽に仕損じて、申譯に死す某、是れが平穩の時ならば親に代りて勘當を許すまいものでなけれど、罪を犯して縫

川の家名を失ふ身を以て、何とて勘當許されう、遺言通り七回忌の、法事の時まで相待つべし。

市藏　承はれば御尤、强ひてお願ひ申されぬ丹右衛門樣の今のお詞、こりや七回忌の御法事まで、待つより外に思案はない。

お蝶　そんならどうでも御勘氣を、お許しなされて下さりませぬか。

丹右　許したいはそちよりも、兄が心は十倍なれど、家名を絶す丹右衛門、出來し顔に許されうか。是非なき事とあきらめよ。

お蝶　はい。（ト俯向き泣き居る。）

市藏　假令勘當お許しなくとも、測らず爰へ參り合せ、いまはの際にお目に掛るは、此上もない二人が仕合せ。

敎山　七回忌の法事とても、最早來年のことなれば、兄の詞に随うて一先づ宅へ歸るがよい。

お蝶　はい。

〽はいとはいへど二人とも、名殘りを惜しみ立ち兼ぬれば、（ト市藏お蝶立兼ねる思入。）

丹右　さあ、勘當許さぬ其内は、我に緣なき二人の者、此の場に叶はぬ早く歸れ。

市藏　たつてとも申し兼ぬれど、

お蝶　せめてお腹を召すまでは、
丹右　えゝ、他人のそちが入らぬこと。
敎山　兎やかう言ふは最期の妨げ、
丹右　疾く〱爰を歸り居らう。（トきつと言ふ。）
お蝶　はあゝ。（ト泣くを、市藏思入あつて、）
市藏　御最期なさるを妨げと聞いては爰に居られぬぞ。
お蝶　それぢやというて、
市藏　はてまあ、一緒に來やれといふに。
〽是れが別れとおとゞひが、口に言はねど眼に持ちし、涙は胸に滿汐や濡れにし袖に干潟なく、引別れてぞ入りにける。
ト市藏お蝶の手を取り引立てる、丹右衞門も是れが別れといふ思入、双方愁ひの思入よろしく、市藏お蝶不手へはひる。丹右衞門跡を見送り、
丹右　又も妨げなき内に、
敎山　片時も早く、

丹右　切腹なさん。
〽かゝる最期も矢部ゆゑと、恨みは深き三途川、死出の門出ぞ。
ト丹右衛門立上り、花道を見込み無念の思入、叡山は惜しむ思入よろしく、三重にて道具廻ろ、
（墓所切腹の場）――本舞臺元の墓所の道具、替つた禪の勤めにて道具留ろ。と右の鳴物にて、下手より以前の惣助、薄縁を持ち出來り、
惣助　明日は春光院樣の御命日ゆゑ、笹川樣がお墓へお參りなされるから、薄縁を敷いて置けと、お住寺樣がおつしやるゆゑ臺所から持つて來たが、此間葬で煮奴をひつくりかへし、そこら中がしみだらけ、（ト言ひながら墓の前へ薄縁を敷き思入あつて、）幸ひ爰に早桶へ白無垢代りに掛けて來た風呂敷程ある白木綿、是れを上へ敷いて置かう。（ト松の枝に掛けてある白木綿を取つて薄縁の上へ敷く、）何にしろ風で木綿の飛ばぬやうに、しつかりと此の樒で挿して置かう。（ト以前の樒を上下へ白木綿の押へに挿し、）いや、斯うした所は芝居でする、とんと切腹の道具のやうだ。
〽一人呟く其所へ、靜々立ち出る丹右衛門、（ト上手より丹右衛門出來り、）
丹右　おゝ、惣助、大儀であつた。
惣助　これは／＼笹川樣、いつもお早うございますのに、お遲い御參詣でございますな。

丹右　今日は上の御用にて、他へ參りしゆゑ遲うなつた。

惣助　敷物は敷いて置きましたれば、何ぞ御用がござりましたら、ちよつとお呼び下さりませ。

丹右　おゝ、用があらば呼ぶであらう。

惣助　左樣なれば旦那樣、御ゆるりとなされませ。

〽小腰屈めてとつかはと門番所へと急ぎ行く、跡見送りて丹右衛門、廟所の前へ座を占めて
四邊見廻し吐息をつき、

ト惣助よろしく思入あつて下手へはひる、丹右衛門跡を見送り白布の上へ住ひ、墓へ向ひ思入あつて、
床の合方になり、

丹右　御先祖始め代々の諸聖靈へ、丹右衛門是れよりお詫び申し上げます、今日拙者思慮淺く、矢部城五郎生田官兵衛兩士に欺き計られて、交換なすべき又五郎が母鳴海を奪ひ取られ、此上もなき役目の越度、申し譯に墓所に於て只今切腹仕つる、數代續きし笹川の家名を失ふ我が不孝、御宥免下さりませう。やがて冥土へ赴きて、仔細を具に申し上げん。

〽石碑に向ひ我が詫びも、今となりてはあら墓や、明日は鬼籍の數に入る身の薄命を打ち歎き、諸肌ぬいで差添拔き、はや切腹の折柄に、住持敎山珠數爪繰り、香爐携へ立出でゝ。

ト此内笙をあしらひ、丹右衛門よろしく思入あつて肌を脱ぎ、差添を抜き鼻紙で巻く、此時上手より以前の敬山、白木の臺へ香爐を載せ、これを持ち、珠數を爪繰りながら出來り、

敬山 みだりに人の參らぬやう、墓場の口へ錠を下せば、心靜に切腹めされ。

丹右 何から何まで伯父上の、御配慮の段忝けなし。

敬山 我れも以前の武士なら、そちが介錯なすべきに、今は世外の沙門の身に、介錯代りは彼の世の引導。

丹右 たゞ此上のお願ひは、死したる跡の取片附けを。

敬山 それらのことは心配いたすな。

丹右 然らば淸く最期を遂げん。

〽肌くつろげて左の脇腹、ぐつと突込み引廻せば、伯父は目を閉ぢ唱ふる唱名、小蔭に忍ぶお蝶市藏、わつと一聲泣く聲に、

ト丹右衛門文句の通り差添を脇腹へ突き立て引廻す、敬山は目を閉ぢ、口の内にて經を唱へる、此の以前下手へ市藏お蝶窺ひ出で、此の時つか〳〵と前へ出て、お蝶はハアーと泣き伏す、丹右衛門此の聲を聞き、

伯父上、誰か是れへ參りましたか。

数山 おゝ、お蝶市藏兩人が、

ト言ふを丹右衛門打ち消して、

丹右 いや、最前勘當許されぬ餘儀なき譯を申し聞せば、よもや二人は參りますまい、最早眼中衰へて誰が誰やら分らねど、大方是れへ參りしは、數年當寺の門番いたす、惣助夫婦でござりませうな。（ト丹右衛門態と目の見えぬ思入、皆々顔見合せて思入）こりや惣助、父が勘當なされたる妹が亭主市藏に、其方出逢ふことあらば、前に兩親相果て、今又兄も死去なせば、世に便りなき妹が身の上、生涯見捨てくれぬやう、我が申せしと其方より、よく市藏に傳へてくりやれ。

市藏 はッ。（ト丹右衛門市藏よろしく思入）

数山 いや、惣助夫婦も多年の馴染、是れへ參つて兄妹の、いや、今日につゞまる此の世の別れ、側へ參つて名殘りを惜しめ。

市藏 はゝ、有難う、

市藏お蝶 ござりまする。

ト伯父が許しに進み寄り、涙拭うて見上ぐれば、是れが此世の別れぞと右に左に見合す顔、

勘當ゆゑに兄妹の名乘りもなさぬ胸の内、哀れはいとゞ彌增せり、

ト此内お蝶は上手、市藏は下手へ來り、丹右衞門をちつと見る、三人顏見合せ、兄弟の名乘りの出來ぬを悔むこなしよろしくあつて、

丹右　定めて話に聞いたであらうが、矢部生田に計られて無念の最期いたす丹右衞門、我が悔しさを察してくれよ。

市藏　嘸御無念にござりませう、及ばずながら私が、あなたの意趣を返しまする。

丹右　むゝ、返してくれるか忝けない。

お蝶　跡へお心殘さずに、早う御最期なされませ。（ト縋る、其手を取り）

丹右　こりや惣助が妻、譬にもいふ三界に、女は家なき身の上なるぞ、決して喧嘩いさかひせず、中睦じう添ひ遂げよ。

お蝶　はあゝ。（トお蝶泣くを突放し）

丹右　いでや、冥土へ赴いて、父へ御詫仕つらん。

〽引廻したる刀を拔き、咽のくさりを搔き切つて、かつぱと前へ打伏せば、

ト丹右衞門腹へ突立てし差添を拔き、のどのくさりを切り、前へ倒れる。

敎山　あゝ、果敢なき最期をいたせしよなあ。（ト愁ひの思入、市藏丹右衞門を引起し、きつとなつて、）

市藏　あなたが今日の御無念は、きつとお晴らし申しまする。（ト耳に口を寄せて言ふ。）

丹右　むゝ。（トにつたりと笑ひ、手を合す。）

敎山　それ、末期の水を。

お蝶　はい。（ト手桶の水を柄杓で汲んで出す、丹右衞門一口呑み、がつくりとなる。本釣鐘。）

〽あはれ果敢なや、

ト三重本釣鐘にて、丹右衞門落入る、市藏介抱し、お蝶は泣伏す。敎山は手を合せ拜む。引張りよろしく、

幕

四幕目

愛宕縁日喧嘩の場

三軒家矢部邸の場

備前町市藏内の場

〔役名――矢部城五郎、町奴夢の市藏、同一時半兵衞、脊寐の宗治、進藤野守之助、山野四郎左衞門、矢部中間丑内實は澤井の中間、夢の市藏子分幻長次、同寐言の藤藏、同手枕五郎吉、同鼾の根太郎、同小奴千太、蝶々賣六兵衞。市藏女房お蝶、同母おさが、茶屋娘梅本のお仙、子守娘お民等。〕

（愛宕喧嘩の場）——本舞臺眞中に登り詰の石段、左右石垣山の張物、此前に杉の大樹、日覆より同じく釣枝、上の方屋根附き石の手水鉢、下の方葭簀張の出茶屋、茶道具の飾附よろしく、よき所へ長床几を出し、總て芝愛宕山男坂下の體、爰に○△□◎の參詣の仕出し四人、思ひ〳〵の拵へにて床几に腰を掛け居る見得、大般若の摩護摩の佛器を叩く音へ、合方をあしらひ幕明く。

○　時に、よい日和になつたではないが、寒い時分にはどつとしないが、春先きから夏へかけて、神田の明神湯島の天神、皆高臺ゆゑ茶見世から江戸中を見晴して、見飽きぬほどの景色だが、此の愛宕山には叶ふめえ。

△　さうとも〳〵、愛宕山は海が近く、芝浦から品川掛け沖を一目に見渡して、今日のやうに長閑だと遠目鏡で見た日にやあ、安房と上總が手に取るやうに見えるし、こんな所は外にはあるまい。

□　それに又爰のお娘は茶見世中で一の器量、お參りがてら有やうは顏を見ようと思つて來たが、見世を明けてどこへ行つたか、早く歸つて來ればいゝに。

◎　實はみんなを出し拔いて、此間から二三度も爰の見世へ遊びに來るが、時々お娘が居ないから、風でも引いて出ないかと、先きの茶見世の年増に聞いたら、意氣な筋をちよつと聞いたぜ。

○　其の話しはおれも聞いたが、筋といふのは備前町の、市藏親分の子分で、宗治といふ若い者だと、

矢場で專ら評判ださうだ。

△ 道理で此頃何時來ても、うは〳〵して居ると思つた、それぢやァ張つても無駄の尻尾だ。

□ 情人が出來たと聞いた日にやあ、百も餘計に置くのは無駄だ、歸らぬ内に參詣しよう。

◎ お娘の顏を見ない替り、茶代を置かずに茶を呑んで、こんな割なことはない。

○ 賽錢だけを散財して、

△ 山から海を見て歸らう。

□ それぢやあ爰はたゞか、

◎ 愛宕の山はめつぽふ高いが、

○ 茶代を置かにやあ安いものだ。

三人 違えねえ、

△ さあ行かう。

ト仕出し四人石坂を登りてはひろ。跡合方楊弓の音になり、花道より宵寐の宗治好みの鬘着流し、派手な帶、白足袋草履手廻りのこしらへ、お仙島田鬘前垂掛け、吾妻下駄茶屋娘のこしらへ、跡よりお民銀杏返し子守娘にて、搔卷で赤い手拭を冠せ抱兒を背負ひ出來り、花道にて、

宗治　お仙さん、不斷とは違ふぜ、今日は御緣日で人の出るのに、見世を明けてどこへ行つたのだ。
お仙　どこへわたしが行きませう、お前が矢場の春よしで遊んでおいでと聞いたので、氣が揉めてならないから、今迎ひに行つたのさ。
宗治　友達が居て呼込まれたから、ちよつと門口へ寄つたのだ、何で遊んで居るものか。
お仙　さうでございますか、何もあすこの前を通らないでもいゝではありませんか。
お民　お仙さん油斷をおしでない、昨日も春よしに居なすつたよ。
宗治　またそんな噓を吐く、おらア春よしへ行つたことはありやあしねえ。
お仙　寄らないとお言ひなら、寄らないにして上げますから、まあ見世へお出でなさいよ。

ト舞臺へ來り、床几に腰を掛け、

お民さん、よく敎へておくれだ、此のお禮にあたま掛を上げるから、又春よしに居なすつたら敎へておくれよ。
お民　どうで毎日守をして、愛宕さまへ來ますから、又敎へて上げませう。
宗治　そんな餘計なことをいふと、蝶坊をおッことしたことを、お上さんに言ッ附けるぞ。
お民　あゝ、それを言つちやあいけませんよ。

お仙　お民さんも、とんだとこを見られたね。
宗治　何しろ蝶坊に風が當つちやあ惡からう、早く家へ歸るがいゝ。
お民　わたしが居ては、お邪魔でござりませうね。
お仙　あれさ、さうではないが其お子さんが、お厄でおいでなさいますから。
お民　それぢやあ早く愛宕さまへ、お詣りをして歸りませう。
お仙　石坂は危ないから、氣を附けておいでよ。
お民　なに、下から拜んで置きますから、大丈夫でござります。（トこなしあつて上手へはひる。）
宗治　どれ、おれもお參りをして來よう。
お仙　あれ、そんなに行きたがらずと、話しがあるから待つておくんなさいな。
宗治　くだらねえ話しなら、今に限つたことはあるめえ。
お仙　お柳さんと違つて、わたしの話しはどうでくだらないのさ。
宗治　へん、極りを言つて居やァがる。（ト媚めきやうの合方になり）それぢやァおれが春よしへ呼び込まれて話しをして居たのを、お民が手前に知らせたので、それでおつゥ思ふのだな。よく言ッ附け口をしやあがる、忌えましい餓鬼だ。

お仙　そんなにお前、腹を立てなくつてもいゝではないか。
宗治　腹が立つことがあるから、立つのだ。
お仙　そりや、あたしの方で言ふことだわね、お前と斯ういふ仲になつたのは、此の愛宕さまの茶屋から矢場で誰知らない者もなく、寄ると觸ると噂をされ、弄られるは嬉しいけれど、其替りに又苦勞になるは、わたしに過ぎたお前だから、どうぞ人に取られまいと、ほんのことだが九ツまで鹽斷ちをして居る位、放れた所でもあることか、同じ所の春よしへ、お前を取られた其の日にはわたしや爰に居られないから、身でも投げてしまひます。
宗治　馬鹿も大概に言ふがいゝ、身を投げて手前どうする氣だ。
お仙　どうするものか、身を投げて死んでしまへば取附くのさ。
宗治　常談ぢやあねえ、此頃は出るとは取られ〳〵、貧乏神に取附れ、困り切つて居る其上に、手前に取附かれてたまるものか。
お仙　女の思ひはひどいから、さう思つておいでよ。
宗治　何より怖い怨靈除けに、愛宕さまへ早くお參り申して來よう。（ト立ちかゝるを留めて）
お仙　お參りにおいでなら、わたしも一緒に行くからお待ちよ。

宗治　しつッこい、又一緒に行くといふのか。

お仙　生きて居る内から取附くのさ。(ト寄添ひ手を取るを、)

宗治　えゝ、みつともねえ、放さねえか。(ト袖を振拂つて上手へはひる。)

お仙　宗治さん、お待ちといつたら、お待ちでないかねえ。

ト十二座の神樂になり、お仙上手へはひる。右の鳴物にて、花道より丑内紺看板一本差し、草履中間にて竹の先きへ附きし蝶々を三本かつぎ出來り、跡より蝶々賣六兵衞、白髮鬘やつし裝股引尻端折り、草履にて、辨慶へ蝶々を澤山挿したるを持ち、武太平、九間八同じく中間にて六兵衞を支へながら、出來り、花道にて、

六兵　もし〱、商ひ物をたゞお持ちなさるは、酷うござります、代を下さいまし。

丑内　こんな物を錢を取らうとは、押のつえゝ爺ィだ、おら達を何だと思つて居るのだ。

六兵　さあ、お前さん方のゑ、一本百づゝのを、三本二百にお負け申しますから、どうぞ代を下さいまし。

武太　おい爺さん〱、お前もいゝ年をして居ながら、往生際の惡い人ぢやあねえか。

九間　高が三本二百の蝶々、默つてくれてしまひなせえ。

六兵　いえ〱、假令何とおつしやつても、たゞ上げる法はございませぬ。
丑内　あらうがなからうが貰つて行くのだ。（ト皆々舞臺へ來り、六兵衞丑内の持つたる蝶々に手を掛け、）
六兵　無法なことをおつしやつても、商ひ物ゆゑ、どうもたゞは上げられません。
丑内　えゝ、うるせえ爺ィだ。（ト六兵衞を突倒し、）これよく聞け、外と違つて平河や愛宕の緣日へ出る者は、看板着に取られるのは、こりやァ商人の覺悟の前だ。
武太　それを手前が强情に、達て錢をくれといふなら、綺麗に拂つて遣らうから。
九間　おら達三人の供をして、爰から近い三軒家の矢部の屋敷へ一緒に來い。
六兵　御常談おつしやつてはいけません、そりやもう大した商人なら、お前さん方へ上げますのを覺悟の前でもございませうが、僅な元手の蝶々賣、みんな賣つても五百か六百、二朱と纏る儲けはなし、ほんの爺ィの小商ひで其の日を送る際物生業、月に一度の御緣日にお前さん方の供をして、三軒家まで行かれませうか、そんなことをして居ては、今日喰ふことが出來ません。
丑内　喰ふことが出來ざァくたばつてしまへ、又供をして行かれざァよしにしろ、達て來いと言やあしねえ。
武太　手前は新米か知らねえが、屋敷町へ商ひに來て、

九間　おら達のやうな看板着から、錢を取らうといふが無理だ。
六兵　商人が代物を賣つて代を取るのが、何で無理なことがござりませう、錢を下さらずば蝶々を返して下さいまし。
武太　えゝ、分らねえ奴ぢやあねえか。（ト六兵衛を突倒す、六兵衛起上り、）
六兵　いえ、お前さん方が分りません。
九間　分らざあ、分けてやるから、一緒に來い。（ト六兵衛を引立てる。）
六兵　いえ、どうぞ爰で下さいまし。
丑內　面倒くせえ、勝手にしやあがれ。
ト三人して六兵衛を突倒し、起上らうとするを蹴返し、木刀を拔いて散々に毆る。此の時上手より以前の宗治お仙出で、此の體を見てびつくりなし、宗治尻を端折り、此の中へ割つてはひり、やにはに木刀を引ッたくり、三人を毆る、お仙六兵衛を介抱して、
お仙　これ父さん、どこも怪我は仕はせなんだかえ。
六兵　おゝ娘か、よい所へ宗治さまがお出でなされて、お陰で何處も怪我はせぬわい。
宗治　どうした譯だか知らねえが、怪我をしなけりやあ、まアよかつた。

ト三人起きあがつて、宗治を見て、

丑内 あいたゝゝゝ、やい、青二才め、何で矢部の御家來を、

武太 手籠めにうぬは、

三人 毆りやあがつた。

宗治 そりやあこつちで言ふことだ、見る影もねえ爺さんを、寄つてたかつて毆るから、默つて見ちやあ居られねえ、まして知つて居る人だから、喧嘩をおれが買つて出たのだ。

ト此内丑内宗治をよく〳〵見て、

丑内 や、さういふ手前は下馬先で、面に覺えのある奴だ。

武太 さうだ〳〵、名のねえ奴もあるめえが、おら達の知らねえ野郎ぢやあ。

九間 大方どこぞの喰潰しだらう、いつてい手前は、

丑内 どこの、

三人 居候だ。（ト合方きつぱりとなり。）

宗治 知らざあ言つて聞かせやせう、今手廻りの親方で一二といはるゝ町奴、其の名は千里に鳴り響く、虎の門から間近の備前町に隱れのねえ、腕に彫つた蝶々から夢と渾名の市藏が子分も多い其中で、

餓鬼の時からづう〱しく形はちつと小粒だが、父とお母アが死んでから、膽ツ玉が大きくなり、どんな山が崩れて來ても、びくりともせず寐轉んで鼾はかいても喧嘩ぢやあ、恥を搔いたことのねえ、宵寐の宗治といふものだ。（トきつと思入。）

武太　それぢやあ手前は備前町で、元は生田の手廻り頭、

九間　丹右衞門が妹を、女房にした夢の寄子か。

丑内　其の市藏の子分と聞いちやあ、たゞ此儘には濟まされねえ。

武太　こりやあ面白く、

三人　成つて來たわえ。（ト三人鉢卷をなし思入、宗治もきつとなり。）

宗治　そつちが矢部の家來とありやあ、こつちも此儘濟まされねえ。

丑内　生ぎゝな奴だ、此奴から先きへ毆り倒せ。

武太　どれ木刀を、

九間　負はしてやらう。

ト日限地藏の双盤になり、三人木刀で打つてかゝる、宗治身を躱して木刀を引ツたくり、三人を相手に立廻り、此内六兵衞お仙捨ぜりふにて氣を揉むこなし、よき程に上手より幻長次、寐言の藤藏、

鼾の根太郎、手枕五郎吉、紺の袷看板、綿入の羽織、草鞋がけ、手廻り下馬歸りの拵へにて出來り、

此の體を見て、

長次　や、誰かと思やあ、内の宗治ぢやあねえか。

藤藏　宗治だ〳〵、喧嘩の相手を、

四人　叩きしめろ〳〵。

ト茶見世の薪を持つて、三人を打据ゑるごつちやの立廻りよろしくあつて、トヾ武太平九間八上手へ逃げてはひる。跡に丑内を皆々にて打ちのめし、宗治丑内を踏附け、

宗治　さあ野郎、ふざけやあがると踏殺すぞ。（ト蹴返す、丑内額糊紅になり、體の痛むこなしにて、）

丑内　さあ、殺せ〳〵、紺看板一枚で、見掛けはけちな野郎だが、餓鬼の折から神田へ來て三河町で人と成り、旋毛の曲つた雇ひ中間、去年の秋から住込んだ主人は天下のお旗本矢部城五郎の家來だぞ、おれを殺しやあ片ッ端うぬらはみんな下手人だ、まだ其上に親分の夢と渾名の市藏初め、蝶蝶賣の爺ィまで其の素ッ首が宙へ飛ぶから、覺悟をしておれを殺せ、中間部屋に燻ッてゝも物相飯や濁酒の味を知らねえ渡りもの。さあ、お旗本の御家來を殺せるものなら殺して見ろ、さあ殺せ殺せ。

宗治　おゝ、殺さねえでどうするものだ。（ト立ちかゝる、六兵衞お仙留めて、）

六兵　喧嘩の元は私ゆゑ、大事になつては困りますから、もうよい加減にして下さいまし。

お仙　もし宗治さん、こんなに親仁が氣を揉むから、どうぞ皆さんを留めて下さいまし。

ト兩人氣を揉むこなし。

宗治　なに、こいつを殺したつて、爺さんに迷惑を掛けるものか。

丑內　さあ、殺せ〳〵。

ト暴れるゆゑ皆々にて打ち据ゑる、爰へ上手より中間三人愛宕の法被足袋跣足にて出來り、此中へはひり皆々を留め、

一　おい〳〵兄い達、どういふ譯だか知らねえが、相手はたつた一人ぢやアねえか。

二　大勢して毆つちやあ、人に聞かれてみつともなからう。

三　腹の立つこともあるだらうが、愛宕の法被に負けてくんねえ。

宗治　有難うございますが、御迷惑は掛けませんから、

長次　見ねえ振をしておくんなせえ。

一　そんなことを言はねえで、おら達が預かるから、

二　不承だらうが、

三　勘辨しねえ〳〵。

ト口々に言ひながら皆々を留め、殺せ〳〵と暴れる丑内を三人して肩に掛け上手へはひる。跡に皆々よい氣味だといふこなしあつて、

長次　よくあいつらは爰へ來て、茶見世や矢場へはひり込み、

藤藏　ぐづ〳〵言つていやがらせ、酒を買はせる錢貰ひ、

五郎　相手が宗治と聞いたから、譯も聞かずに飛び込んで、

根太　無闇にあいつを毆つたが、此の間違ひはどうしたのだ。

宗治　委しい譯は知らねえが、此の爺さんを毆るから、おれが喧嘩を買つたのだ。

ト此内お仙皆々へ茶を汲んで出す、六兵衞後悔せし思入にて前へ出で、

六兵　實はあの衆に打たれたのは、私が惡かつたのでございます。

長次　なに、爺さんが、

四人　惡かつたとは。

六兵　さあ僅か一二百の蝶々を、やつてしまへばよかつたに、代を取らうとしたばかりに、飛んだ間違ひ

になりまして、お前様方に御苦勞かけ、濟まぬことをいたしました。

お仙　それ御覽な、これだから不斷わたしがどうでもするから、出商ひは止しなさんせと、あれ程いふに出なさるから、こんなことになりますわね。

六兵　それだといつて達者な體で、遊んで居るは勿體ないから、せめておぬしの手助けと賣りに出た蝶蝶を、たゞで三本取られるのが悔しくつてならぬから、つい強情を張つたのだ。

宗治　今更言つても仕方がねえから、其の荷を持つて爺さんは、早く家へ歸りなせえ。

六兵　左樣なら私は、直に家へ歸りますでござります。

長次　然し爺さん、一人では。

お仙　いえ、私が送つて參ります。（ト此内六兵衞荷を持ち氣味の惡き思入にて）

六兵　どうぞ途中で今のやつらに、

お仙　出逢はぬやうにしたうござんす。

藤藏　そりやあ爺さん案じなさんな。

五郎　どうでおら達が歸りがけ、

根太　家まで一緒に行つてやらう。

宗治　それぢやァみんな御苦勞だが、家まで一緒に行つて遣つてくんねえ。
長次　さうしてお前は。
宗治　おらあ、是れから愛宕の頭へ、ちよつと禮に寄つて行くから、
藤藏　それぢやァ一足先きへ行かうか。
お仙　そんなら宗治さん、さつきの事を。
宗治　これさ餘計なことを言はねえで、早く家へ歸るがいゝ。
六兵　左樣なら、皆樣方、
四人　さあ、行きなせえ。
ト双盤になり、お仙先きに六兵衞荷を持ち、長次、藤藏、五郎吉、根太郎附いて花道へはひろ、宗治殘り思入あつて、
宗治　小ツ旗本の中間が妥らを荒して困るといふから、此間からしめて遣らうと思つた矢先きに喧嘩を買ひ、とんだ間違ひを仕出來したが又親分の厄介だわえ。何にしろ愛宕の頭へちよつと禮に寄つて行かうか。
ト行き掛けろ、此の時上手より野守之助、四郎左衞門羽織袴大小旗本のこしらへにて出來り、

野守
四郎　町人待て。(ト宗治橫柄な奴だといふ思入)
宗治　何ぞ御用でござりますか。
野守　用があるから呼留めたのだ。
四郎　此れへ來やれ〳〵。(ト兩人床几へ腰を掛ける。)
宗治　して、私へ御用とは、何御用でござります。
　　ト此内上手より、以前の丑内を武太平、九間八引連れ、中間二人附添ひ出て、四郎左衞門こなしあつて、
四郎　こりや町人、最前此者を手前が打つたか、どうぢや、有やうに申せ。
　　ト宗治丑内を見て、ぎつくりなし、
宗治　へい、如何にもわつちが打ちました。
野守　よく申した、あれ見やれ、額に疵が附いたぞよ。
宗治　むう〳〵。(ト思入、誂への合方になり)
野守　趣意の善惡はさておいて、中間たりとも旗本の家來、手廻り風情に面體へ斯く疵を附けられては、其儘にはいたされぬぞ。

宗治　その儘にいたされぬとは、どうなさる氣でござりますな。
四郎　どうと申して高が町人、相手にいたすは大人氣ないが、打ち捨て置けば此後に、增長いたすは知れたこと、其の腕立てをひしぐ爲め、
野守　此れなる家來が打たれし如く、
四郎　われを打たねば、
兩人　一分立たぬ。
宗治　一分立たずば私を、どうなりとなさりませ、然し手足がござりますから、たゞ自由にはなりませぬ、其思召しでなせえまし。
野守　自由になるのならぬのと、しやら臭きことを申すな。
四郎　それ丑內、そちが打たれた通り、存分此れにて打ちのめせ。
ト丑內嬉しき思入にて立ちかゝり、宗治を見て後へ下り、
丑內　こいつを爰で打ちのめし、遺恨を晴らしたうござりますが、
武太　見掛けに寄らねえ强い奴、
九間　わつちらの手には合ひませぬ。

野守　はて、後に兩人控へて居るから、

四郎　臆せず存分打ちのめせ。

一　幾ら手強い野郎でも、旦那方が控へてござれば、

二　鬼に金棒も同じことだ、ちつとも怖いことはねえ。

丑内　それぢやァ爰で、

三人　毆つてやらう。（ト宗治是れまでといふ思入あつて、）

宗治　どうとも勝手にしやあがれ。（ト眞中へどつさり直る。）

武左 九間　うぬ、そのいけ口を。

ト兩人宗治にかゝる、宗治有合ふ薪にて兩人を毆る、是れにて野守之助四郎左衞門出で宗治の持ちたる薪を打落し、双方きつとなる、合方楊弓の音になり、三人無手の立廻りよろしくあつて、トゞ柔術の手にて宗治を引き据ゑる、爰へ丑内出で、木刀で宗治の眉間を打つ、是れにて宗治の額糊紅になり、起上らうとするを野守之助四郎左衞門押へ附け、中間皆々にて宗治を袋叩きにする、宗治悔しき思入にて、

宗治　もう此上は。（ト野守之助へ飛び掛るを皆々支へる。）

野守　やあ、武士に向つて無禮の振舞、討果すべき奴なれど、

四郎　人立ち多き往來ゆゑ、屋敷へ連れ行き成敗なさん。

宗治　どこへなりと連れて行け、どうで命は捨てる覺悟だ。

丑内　それ、引ッかつげ。

四人　合點だ。

　　ト早き大拍子になり、中間皆々宗治を擔がうとする、宗治めつた打ちに皆々を毆る、トゞ押へ附け四人にて宗治を引ッ擔ぎ、丑内附いて上手へはひる。

野守　彼等は日頃武士たる者を、聊か恐れぬ横道者ゆゑ、懲らしてやるは以後の見せしめ。

四郎　ぶち殺してしまつた所が、高の知れた町奴、あれで少しは懲りるでござらう。

野守　何にいたせ、今の騷ぎで、

四郎　御同然に砂塗れ。

兩人　はてさて酷い、（ト野守之助扇を開く、四郎左衞門袴の塵を拂ふを道具替りの知らせ、）埃でござるな。

　　トほこりを拂ふこなし、此の見得大拍子にて道具廻る。

（市藏内の場）――本舞臺四間の間常足の二重、上手如輪鏡板の戸棚、眞中紺の暖簾口、下手腰羽目の鼠壁、二重に惣銅壺の竈、後膳棚名前を書きし膳箱大分載せてあり、よき所に大藥罐を掛けし樫の長火鉢を据ゑ、上手一間障子屋體、いつもの所門口、下手に蝶の紋を書きし腰障子、此脇へ井戸側を出し、續いて櫻田備前町と記せし天水桶、總て夢の市藏手廻り頭の家の體、爰に以前の長次、藤藏、五郎吉、根太郎思ひ〳〵の着附に着替へ、砂鉢に蟹を積み一升徳利を置き酒を呑み居る、二幕目の千太竈を拭いて居る、門口に半田稻荷好みの拵へ、大きな杓子を背負ひ幟と鈴を持ち踊り居る、此の模樣半田稻荷の合方にて道具留る。

半田「葛西金町半田の稻荷、疱瘡も輕いな、痲疹も輕いな、」（ト躍つて居る、千太錢を遣る。）有難い、疱瘡も輕いな痲疹も輕いな。（ト小さな畫を置いて下手へはひる。）

長次　千太、坊つちやんも居ねえのに、何で半田の稻荷を呼んだのだ。

藤藏　大きな形をしやあがつて、畫を貰つて何にするのだ。

千太　二三日跡から坊つちやんが、疱瘡をして居なさるから、半田が毎日踊りに來るのだ。

五郎　慥あれも幾日とか日限りがあつて、しまふ時には、立派な衣や袈裟を掛け、

根太　袋を配つて錢を集め、一廉の金になるさうだが、妙なものもあるものだな。

長次　家の坊つちやんは疱瘡で、ゝゝぞやみが濟んで水膿とかだ、それも輕いので大仕合せだ。
藤藏　何ぼ輕くッても、疱瘡ッ子を風に當てちやあ惡からうに、お民ッ子はまだ歸らねえのか。
千太　愛宕の矢場を、遊んで居るに違えねえ。
五郎　いや、愛宕といやあおら達は、お仙の親仁を送りながら、
根太　一足先きへ歸つたが、宗治は何をして居るだらう。
長次　頭の所へ禮に行つたが、酒でも呑んで居るかも知れねえ。
　　　トばたばたになり、花道より以前のお民走り出來り、直に門口を明け、
お民　これお前方、知つておいでか、宗治さんが打たれなすつたよ。（ト是れにて皆々びつくりなし）
長次　なに、宗治が打たれた。
藤藏　相手はどいつだか、
四人　知つて居るか〳〵。（ト口々にいふ、お民息の切れるこなしにて）
お民　さつき喧嘩を仕なすつた、其の中間の主人だとかいふお旗本が二人來て、宗治さんを打つた上屋敷へ連れて行きましたから、早くどうかしてお上げなさい。あゝ、切ない。
　　　ト息を切つていふ、皆々立ち上り、

長次　さつき毆つた中間の、主人といやあ三軒家の、矢部の屋敷に違えねえ。
藤藏　宗治を擔いで行かれちやあ、
五郎　おいら達も掛り合え、
根太　こりや斯うしちやあ、
四人　居られねえ。

ト皆々身拵へなする。早き合方になり、奥よりお蝶三幕目の女房好みのこしらへにて出來り、

お蝶　樣子は奥で聞いて居たが、矢部は遺恨のある旗本、お前方が行つたとて、所詮返して寄越すまいから、內の人の歸るまで、急かずと待つて居なさんせ。(トいふを冠せて、)
長次　さあ遺恨のあるのを承知して、宗治が喧嘩の彌次馬に、わつちら四人が出たからは、
藤藏　屋敷へ連れて行かれたを、默つて見ては居られねえ。
五郎　命をきりに押掛けて、
根太　宗治を貰つて、
四人　來にやあならねえ。(ト皆々尻を端折り、出掛けようとするを留めて、)
お蝶　お前方の氣性だから、さう思ふのは尤だが、內の人のおつかさんが大病で寐て居なさるゆゑ、

氣を揉ましては濟まないから、何であらうと親分が、歸るまで待つておいでな。

長次　是ればッかりはお上さん、

藤藏　留めずにやつて、

四人　おくんなせえ。

お蝶　それぢやあどうでも待たれないのかね。

長次　えゝぐづ〳〵しちやあ、

四人　居られませぬ。

ト大神樂の獅子の狂ひの鳴物になり、四人跣足で花道へ駈出す、此時花道より以前の市藏、羽織着流し尻端折り草履にて、銀拵への脇差をさし腕組をして出來り、是の體を見て思入あつて手を廣げ、四人をきつと留め、

市藏　これ〳〵、みんな待て〳〵。

長次　親分には濟まねえが、

藤藏　見ねえ顏をして、

四人　遣つて下せえ。

市藏　いや、見ねえ顔も出來なけりやあ、もう聞かねえ分にはならねえぞ。

長次　それぢやアもしや、

四人　喧嘩の樣子を。

市藏　おゝ、喧嘩の樣子は梅本のお仙と親仁に聞いて來た、宗治を連れて行かれちやあ所詮捨ては置かれねえが、相手が矢部とあるからは、迂濶に行きやあ恥の上塗り、根ごしを極めておれが行くから、まあ手前達は内へ歸れ。

四人　それだと言つて、

市藏　えゝ、歸れと言つたら歸らねえか。

トきつといふ、是れにて四人是非なく後退りに舞臺へ戻る、此の内抱兒泣くゆゑお蝶抱き取り、お民は奥へはひる、四人内へはひり、下手にもぢ〳〵して居る、市藏内へはひりよき所へ住ふ。

お蝶　おゝ、よい所へ歸つて下さんした、とんだ間違ひが出來たわいな。（ト言ふを冠せて、）

市藏　いや、何も話すに及ばねえ、喧嘩の縺れで矢部の屋敷へ宗治が連れて行かれた事は、蝶々賣の六兵衞と娘のお仙に委しく聞いた。これ千太、立つて居ずと茶でも汲まねえか。

千太　あい〳〵。（ト鉢卷を取り、湯呑みへ茶を汲んで出す、四人下に居て、）

長次　委しく譯を聞きなすつたら、別に話しはしませんが、小旗本の家へ子分を擔がれたと言はれちや、
藤藏　親分ばかりの恥ぢやあねえ、江戸中の町奴の、仲間の恥になりますから、
五郎　此の久保町から京橋居廻り、神田をきつて人數を集め、
根太　矢部の屋敷へ押掛けて、宗治を連れて歸らにやあわつちらの、
四人　顏が立たねえ。（ト皆々力む。）
市藏　いゝから、靜にしろ。（ト替つた合方になり、市藏四人を制し思入あつて、）手前達がさう思ふは尤だが、おれの子分と聞いた日にやあ、生田の屋敷に緣があるから、すべよく宗治を返しやあしめえ是れからおれが支度をして、自身に矢部へ貰ひに行くから、手前達は待つて居ろ。
長次　待てといふなら待つて居ますが、親分お前が行つたつて、
藤藏　所詮何かいゝもくを附け、素直に宗治を渡すめえぜ。
五郎　何でも末の六十日は、誰か命を捨てなけりやあ、
根太　どうでも方は附きますめえぜ。
市藏　そりやあ手前達が言はずとも、三軒家へ貰ひに行くにやあ、おれも死ぬ氣で出掛けるのよ。
長次　親分お前が死ぬ氣なら、何で一人遣るものか。

藤藏　不斷附合ふ友達が、骨は拾つてくれようから、
五郎　邪魔でもあらうが、わつちらも、
根太　連れて行つてくんなせえ。
　　ト皆々頼むを市藏尤もだといふ思入。お蝶疱瘡ッ子を抱きながら前へ出て、
お蝶　もし親分、お前の不斷の氣性では、貰ひに行かずに居られまいが、輕いけれど此子も疱瘡、まだ本膿にもならぬのに、たつた一人のおつかさんが、三月越しの大病ゆゑ氣を揉ましては濟まないから、お前が行くよりちつとも早く半兵衞さんを呼びに遣り、相談をした其の上で貰ひに遣つて下さんせ、お前が矢部へ行くと聞けば、病人が苦勞にして　、猶々病が重らうから、行くのは止めて下さんせ。
　　ト思入あつていふ、市藏もこなしあつて、
市藏　餓鬼は兎もあれ世話になつた、大恩のあるお袋に、苦勞を掛けちやあ濟まねえが、子分を矢部へ擔いで行かれ、人を頼んで貰ひに遣つちやあ、備前町の市藏は渾名の夢だと後指をさゝれるは知れたこと、さうなる日にやあ明日から下馬へ面が出せねえから、是非ともおれが行かにやアならねえ。
　　ト此の内抱兒頻りに泣くゆゑ、

お蝶　さうでもあらうが、是れお見な、此の子がこんなに泣き立てるも、蟲が知らせて留めるのだから、どうぞ待つて下さんせ。

市藏　え丶、しみッたれなことを言やあがるな。

トきつといふ、獅子の鳴物、ばた〳〵にて花道より一時半兵衛、羽織着流し、草履尻端折り、陸尺頭のこしらへにて走り出來り、直に門口に來て、

半兵　兄貴、とんだ間違ひが出來たな。

市藏　お丶、半兵衛か。（ト此內半兵衛よき所へ住ふ、皆々嬉しき思入にて、）

お蝶　よい所へ來て下さんした。

長次　今お迎ひに上らうかと、

藤藏　わつちら四人が、

四人　出掛ける所さ。

半兵　そりやア丁度よかつた。

お民　お茶をお上りなされませ。（ト出す。）

半兵　取込みの中だから、構ひなさんな。

市藏　それぢやあ手前、誰ぞに話しを聞いて來たのか。（ト合方きつぱりとなり。）

半兵　子分の者が愛宕山で、喧嘩のあつた話しを聞き、宙を飛んで駈けて歸り、知らせたゆゑに飛んで來たが、みんなも定めし心配だらう、さうしてわしに相談とは。

お蝶　さあ、其の御相談といふは外の事でもござんせぬ、今お聞きだと言はしやんした、喧嘩の縺れで、内の宗治が、矢部の屋敷へ行つて居るゆゑ、内の人が三軒家へ貰ひに行くといふけれど、知つての通りあの屋敷は遺恨もあれば内で行くと、どんな面倒にならうも知れねば、お前に相談した上でと、今留めて居る所でござんす。（ト是れを聞き、半兵衞市藏に向ひ、）

半兵　兄貴、こりやあ成程お前が行つては面倒だらう、斯ういふ時の兄弟分、おれが瀬踏みに迎ひに行かう。

市藏　半兵衞、さう言つてくれるは有難えが、外と違つて遺恨のある矢部城五郎が屋敷だけ、手前が行つても直素直に所詮宗治を渡すめえ、恥でもかいて歸つて來ると猶々癪に障るから、おれが行く方が早手廻しだ、然し若しものことでもあつた時には、骨は半兵衞拾つてくれろ。

半兵　そりやあ言ふまでもなく承知だが、おれが瀬踏みに行くといふのは、あの矢部樣は吉原で、一番生えの旗本が町奴と喧嘩の時、中へはひつて兩三度お目にかゝつたこともあるから、是れから屋

敷へ貰ひに行きやあ、多分は貰つて來る氣だが、もし強情にくれねえで無法なことでもするやうなら、お前の顔にも拘はるから、命を賭けて遣る所まで遣つて退ける了簡だ、そりやあお前の目から見りやあ心許なく見えるだらうが、おれも諸侯の引立てゞ今賣出しの一時半兵衛、萬更どぢもしめえから、今日の所はうんと言つて、器用におれに任してくんねえ。

ト思入にていふ、市藏もこなしあつて、

市藏 どうでもおれが直附に貰ひに行かにやあならねえが、折角手前が矢部の屋敷へ、宗治を貰ひに行かうといふのを、無にするのも本意でねえから、半兵衛手前に任せるから、おれが代りに行つてくれ。

半兵 それぢやあおれに任してくれるか。

市藏 手前の詞を立つて遣るから、おれの顔も立つやうに、宗治を連れて歸つてくれろ。

半兵 そりやあ兄貴大丈夫だ、先づ是れでおれも安心だ。

お蝶 どうなることかと案じましたが、是れでわたしも安心しました。

長次 頭が請合つて行きなさりやあ、大丈夫に違えねえが、

藤藏 何しろ相手が相手だから、

五郎　何の役にも立つめえが、

根太　わつちらも一緒に、

四人　行きませう。

半兵　その心配は尤だが、何といつても身分のある、向うは立派な旗本衆、まさか無法もしめえから、大勢行くにやあ及ばねえ。

市藏　喧嘩の中へ立入つて二三度逢つたとあるからは、萬更知らねえ先きぢやあなし、こりやあ大勢行くよりやあ、半兵衛一人の方がよからう。

お蝶　どうか首尾よく宗治をば、

半兵　首尾よく行つても行かねえでも、どうぞおれに任して下せえ。（ト門口へ行く、お民草履を直す。）

お蝶　爰から直ぐにおいでなら、

千太　石と鎌なら爰にあります。（ト出す、お蝶半兵衛へ切火を打ちかける。）

市藏　それぢやァ半兵衛、

半兵　兄貴、行つて來ますぜ。

ト獅子の鳴物になり、半兵衛威勢よく花道へはひる、跡に皆々思入あつて、

お蝶　おつかさんは年に似合ず、耳が近うござんすから、大方今日の此事を案じておいでなさんせう。

お民　お袋さまは何でもかでも、よく御存しでござります。

お蝶　半兵衛さんがおいでのことを、どれお話し申しませうか。

ト合方にてお蝶お民奥へはひる、市藏思案のこなし、子分四人手持無沙汰の思入にて、

長次　もし親分、兎も角もわつちらは、矢部の屋敷の門前まで、是れから迎ひに行きませう、

市藏　いや、迎ひに行くにやあ及ばねえ、どうで一度で宗治をば、すべよく返して寄越しやあしねえ。

藤藏　それぢやァ向うが旗本風で、

五郎　半兵衛さんの顔を潰し、

根太　宗治を返さぬ其時は、

長次　親分お前、

四人　どうしなさる。（ト詰め寄る。）

市藏　どうも斯うもいるものか、宗治を返さぬ曉は、浮世の夢の覺め所、此の市藏が命を捨て、

四人　や、

市藏　喧嘩で名をば、（ト持つて居る煙管を投げ出すを、道具替りの知らせ）殘す氣だ。

トちつと思入、四人顔を見合せ勢ひだといふこなし、此の模樣獅子の鳴物にて道具廻る。

（矢部屋敷庭先の場）――本舞臺四間中足の二重、本緣附本庇、向う一面雲母形の襖、上の方一間塗骨障子屋體、此前に松の立木、石燈籠、四ツ目垣山吹の下草、いつもの所枝折戸、下の方屋根附の枝折門、左右建仁寺垣見越しの松、日覆より同じく釣枝、總て矢部屋敷庭先きの體。平舞臺へ筵を敷き宗治白布で天窓を結へ寐て居る、傍に武太平九間八控へ、丑內同じく白布で天窓を結へ弓の折を持ち立ちかゝり居る、二重に野守之助四郞左衞門煙草を呑み見て居る、此の見得胡弓入りの合方にて道具留る。と丑內弓の折にて宗治の天窓を突き、

丑內　やい野郞、手前も天窓が痛からうが、よくもさつきおれを毆りやあがつたな。

武太　進藤樣と山野樣が、あの時おいでなさらにやあ、

九間　ぶたれ損で三人とも、悄々屋敷へ歸る所、

野守　まだそち達の運がよく、我々兩人通り合せ、斯うして屋敷へ引立て參れば、所謂袋の鼠同然、もう身動きは出來まいから、目に物見せてそち達の、恥辱をこれにて雪ぐがよい。

四郞　町人風情に旗本の家來が打たれしと流布なさば、其方ばかりか我々の恥辱になるゆゑ止むを得ず、

丑内　屋敷へ連れて歸つたは、此後手出しをいたさぬやう、彼れを懲らして遣はす爲めだ。總別不斷下馬先きで大名風を吹かしやあがつて、力み散らす手廻り陸尺、今日こそこいつを締め上げて、お旗本の御威光を、どんなものだか見せてやらう。

武太　なか〳〵死太い野郎だから、大概なことぢやあ懲りめえぜ。

九間　一息ついたら替り〴〵に、手酷くこいつをしめてやらう。（ト是れを聞き、宗治顏を上げ、）

宗治　うぬらを十分毆つたから悔しいことはないけれど、小ッ旗本に市藏の子分が屋敷へ擔がれたと、言はれた日には親分の恥になるのが忌えましい、いつそさつきわい等をば打ち殺したらよかつたに助けて遣つたがおれの誤り、さあ未練に手出しはしねえから、おれの體にこたへるやう、何處からでも勝手に打て。（トきつとなる。）

野守　引かれ者の小唄とやら、樣々なことをほざき居るわえ。然しわれは仕合せ者だ、身分も輕い手廻り陸尺、その又子分の下司奴が恐れ多くもお旗本の、此の庭内へ連れて來られ、

四郎　見附けぬ所を拜んだら死んでも悔む所はあるまい。矢部城五郎樣の御庭前を極樂淨土の入口と、三拜なして念佛でも、又題目でも勝手に唱へ、息の絕ゆるを待つて居やれ。

丑内　どれ、もう一遍川きしめて、青い息を吹かしてやらう。

ト弓の折にて宗治を散々に打つ、宗治怺へる思入よろしくあつて、

宗治　どうで死ぬは覺悟の前、いつそ一思ひに殺してくれ。

丑内　おゝ、覺悟とあるなら一思ひに、殺してやらう。

ト丑内打たうとする、ばたばたになり、下手の枝折戸より以前の用人出來り、

用人　はッ、申し上げます。

野守　何事ぢや。

用人　櫻田備前町の手廻り頭、市藏の名代に半兵衛と申す者、參りましてござりまする。

四郎　市藏の名代に、半兵衛と申す者が參つたとか。

用人　御意にござりまする。

野守　その半兵衛と申すは、先達て廓に於て喧嘩の折、

四郎　仲へはひつた陸尺の、大方一時半兵衛ならん。

野守　苦しうない、是れへ通せ。

用人　はッ。（ト下手へはひる。）

四郎　市藏方より半兵衛が、參りしとあるからは、そやつを打つを暫く待て。

三人 はツ。

野守 何にもせよ半兵衛が、參りし趣き矢部氏へ。（ト立ちかゝる、と奥にて、）

城五 いやおいでに及ばぬ、只今それへ。（ト合方になり、奥より城五郎袴一本ざしにて出來り、）

四郎 して、市藏方より參りしことを、

城五 襖の蔭で承はつたが、お手前方の察しの通り、一時半兵衛ならん。（ト下手にて。）

用人 さあ、半兵衛とやら、こちらへござれ。

ト合方きつぱりとなり、下手の方より用人先きに以前の半兵衛出來り、宗治を見て思入あつて、氣を替へ、

半兵 眞平御免下さりませ。（ト腰を屈め、平舞臺下手へ來り下に居る、）

城五 おゝ、半兵衛か、久し振りであつたな。

半兵 御前樣には御機嫌よろしう、お目出たうござりまする。

野守 先達て吉原で、喧嘩の折はわれ〳〵も、

四郎 其方の世話になつたが、とんと其後、

兩人 逢はなんだな。

半兵　まことに御無沙汰をいたしましてござりまするが、あなた方樣にもお變りなく、お目出度いことにござりまする。
城五　さあ、半兵衞これへ參れ〳〵。
半兵　めつさうな、それは餘り恐れ多うござります。
城五　何の遠慮には及ばぬ、是れへ來やれ〳〵。
半兵　ではござりまするが。
野守　はて、矢部氏のお詞なれば、
四郎　苦しうない、是れへ參れ。
半兵　左樣なら、御免下さりませ。（トおづ〳〵二重縁側へ上り下手へ平伏する。）
城五　さて半兵衞、そちに逢ふのも久し振りゆゑ話したいこともあるが、先づ差當り今日は市藏の名代に參りしと聞いたが、予が屋敷へ何しに參つた。
半兵　今日私が出ましたは、お詫びに參りましてござりまする。
城五　詫びに參つたとは、彼れが事か。（ト宗治へ思入、半兵衞こなしあつて、）
半兵　御意にござりまする、若い者とは申しながら跡先きの考へもなく、お屋敷のお中間衆にとんだ不

調法をいたしまして、相濟まぬことでござりまする、愛宕へ參つて樣子を聞けば、全く宗治が酒興の上と申す事ゆゑ、定めて御立腹にござりませうが、以來斯樣なことをいたさぬやうきつと申し聞けますから、今日の所は幾重にも御勘辨を願ひます、全體これの親分市藏が、早速お詫びに出ます筈でござりますが、年取りました母の病氣に據なく私がお詫びに出ましてござります、どうかお情を持ちまして宗治をお渡し下さりますやう、へい〳〵お願ひ申し上げまする。

ト平伏する、城五郎思入あつて、

城五　すりや市藏は、母なる者が病氣ゆゑ、參られぬと申すのか。

半兵　へい、御意にござりまする、どうか御勘辨を願ひまする。

城五　先頃廓内で世話にもなつた外ならぬ其方ゆゑ、返して遣りたいものなれど、どうも此儘には返されぬ。

半兵　そりやもう御立腹の段は重々恐れ入りまするが、そこを何卒お慈悲をもちまして、お渡しなされて下さりまするやう、くどうもお願ひ申し上げまする。

城五　折角のそちが頼み、聞き届けぬは氣の毒ぢやが、所存あつて返されぬから、半兵衞惡しく思ふな。

半兵　すりや斯やうにお詫びいたしましても、お心濟みがござりませず、宗治をお返し下さりませぬか。

城五　返されぬは市藏が、物の禮儀を知らざるゆゑ。
半兵　何とおつしやりまする。(ト合方きつぱりとなり。)
城五　總じて近頃下馬先きで、國主を初め大身の諸侯の陸尺手廻りが、小身者の旗本を取るに足らぬと侮つて登上の節に數度の無禮、憎き奴等と思へども今泰平の世の中ゆゑ、只何事も勘辨いたし是れまで除けて通せしが、追々增長いたすよし、今日とてもその如く全く市藏が病氣ならば止むを得ぬ場合なれど、母の病氣を言ひ立てゝ、そちを代りに寄越せしは、其身大名の抱へゆゑ此城五郎を小旗本と見侮つてのことであらう、下賤なれども市藏は數多の子分を取扱ひ、頭とか親分とか人にいはるゝ身を以て、餘り禮儀を知らざる奴、それゆゑ宗治は返さぬから、立歸つて左樣に申せ、返す〳〵も不屆きな奴だ。(ト立腹のこなし、野守之助四郎左衞門思入あつて、)
野守　こりや半兵衞、其方も仲間ゆゑ存ぜぬことはよもあるまい、每度下馬で町奴が、吾々共に無禮をいたすが、斯樣な事を取鎭める目鼻の明いた頭はないのか、勿論身共ならば陸尺手廻りを人間とは思はぬから、決して取上げはいたさぬが、行く〳〵そち達も爲にならぬと思ふがどうぢやな。
四郎　こりや進藤氏の言はるゝ如く、理非を辨へぬ蛆蟲に申し諭すも益なき事と打捨て置けばよいと心得、下馬の無禮に慊らず家來の者が往來の砌り、態とそち達が行當り、口論いたすは度々の事、

手討ちにいたすは刀の穢れと、今日までは勘辨せしが、

丑内　此通り疵を受けては、御奉公が勤まらねえ、おれが扶持が上るかはり、

武太　此後下馬で幅を利かせ、お旗本へ失禮を、

九間　しねえやうに懲らして遣るのだ。

城五　然し命は取らぬから、無禮をなした宗治が親分、市藏が來て詫つたら返してやるまいものでもないが、左もない内は返されぬ。

ト此内宗治天窓を上げ悔しき思入、半兵衞もぢつとこなしあつて氣を替へ、

半兵　御尤でございますが、九死一生の大病ゆゑ、見兼て出ました私は兄弟分にございますれば、何卒市藏と思召し、お心濟まずば私を御存分になされまして、宗治をお渡し下さりませ。そりやもう見る影もねえ私ゆゑ、市藏と見るは御不承でもございませうが、どうか殿様半兵衞を、男になすつて下さりませ。

城五　左程までに申すゆゑ、如何にもそちが顏を立て、宗治を返して遣りたいが、代りに參りし半兵衞を市藏と見なす時は、予が一分を立てねばならぬ。

半兵　とは又、なぜでございまする。

城五　兄弟分と申すからは定めてそちも存じ居らうが、青松寺におき先達て、おのが粗忽で切腹せし生田の家中笹川の妹が彼れの女房ゆゑ、我に遺恨を含むよし、外の者なら知る人の半兵衛そちが顏を立て、綺麗に返し遣はすが、かゝる譯ゆゑ市藏が、自身に詫びて來ぬうちは、誰が幾度參らうとも此城五郎は勘辨いたさぬ、小身なれど三河以來、勤功盡す天下の旗本、一分立たねば返されぬぞ。（トきつと言ふ。）

半兵　むう。（ト當惑の思入、宗治起上り、半兵衛へこなしあつて、）

宗治　かしら、まことに濟まねえ、堪忍しておくんなせえ、親分達へこんなに餘計な苦勞を掛けるも、おれが喧嘩を仕出したからだ、あの時いつそ打ち殺されたらこんな縺れも起るめえに、息があるので引擔がれ、散々今まで毆られたから、御不承だらうが矢部の殿樣、喧嘩の相手の此の宗治を爰で殺しておくんなせえ。

ト體の痛むを怺へる思入あつて、尻を捲り立ちかゝるゆゑ、半兵衛二重より下りて宗治を引据ゑ、

半兵　これ宗治、手前何を言ふのだ、喧嘩の相手は中間衆、御前へ對して失禮なことを言つちやあ濟まねえ、これさ、親分初め半兵衛が、氣を揉んで居るを知らねえのか。

宗治　さあそれもおれが生きて居るからだ、死にせえすりやあそれまで、苦勞を掛けることはねえ。さ

お殿様、殺してくんねえ。

半兵　これ、如何に血の氣が多いとて、跡先きを見て物を言へ。

宗治　それだと言つて。

半兵　えゝ、分らねえ野郎だなあ。

ト宗治を引据ゑる、此内丑内思入あつて前へ出で、

丑内　やい宗治、それ程われが死にたけりやあ、喧嘩の相手の丑内が、其息の根を留めてやらうか。

と弓の折れを持ち立ちかゝる。

城五　これ待て〱。

丑内　又お留めなされますか。

城五　かれが親分市藏が詫びて參らば返してやると、予が申した詞もあれば、今殺しては言ひし事が反故になるゆゑ相成らぬぞ。

丑内　いえ、そんな道理が分る奴ぢやあござりませぬ。

城五　はて、何であらうと市藏が、貰ひに來るまで大事の怪我人、厚く手當をいたし遣はせ。

丑内　畏りましてござりまする。（ト是非なく控へる。）

半兵　左樣なればどうあつても、お返しなすつては下さりませぬか。

城五　男を磨く一時半兵衞、顏を立てゝやりたいが、どうも此儘返されぬ。

野守　一先づ歸つて市藏に、

四郎　此場の樣子を申し聞かせい。（ト是れにて半兵衞是非なき思入にて、）

半兵　どうも是非がござりませぬ。左樣なら御前樣、何れ出直して上ります。（ト辭儀をなす。）

城五　此れなる宗治はいたはつて、屋敷へ置くから案じるな。

半兵　有難うござりまする。（ト悄々として立ちかゝる、宗治思入あつて、）

宗治　こりやもういつそ。（ト立ちかゝり、沓脱ぎへ足を踏み掛ける。）

城五　無禮者めが、（ト宗治を煙管で突くを道具替りの知らせ。）憎い奴でござるなう。

ト城五郎、野守之助四郎左衞門へこなしある、宗治ひよろ〳〵と筵の上へ轉がり、起上つて悔しき思入、半兵衞此體を見て寄らうとするを中間三人隔てる。誂への合方にて此道具廻る。

（元の市藏内の場）――本舞臺元の市藏内の道具、二重に以前の市藏好みの裝に着替へ、煙草を呑み居る、下手に以前の六兵衞お仙泣いて居る、合方飴賣の唐人笛にて道具廻る。

六兵　まことに親分、お前さんに私が濟まぬ。
市藏　お前がおれに濟まぬと、言譯することはねえわな。
六兵　いえ、ない所ではござりませぬ、相手が惡いと存じましたから、僅か二百の代物ゆゑ遣つてしまへばよかつたに、兎や斯う言つたばツかりに、飛んだことになりまして、どうも申譯がござりませぬ。
お仙　宗治さんが親仁を庇つて下さんしたばツかりに、大勢に擔いで行かれ嘸酷い目に逢つて居なさんせう、わたしや悲しくつてなりませぬ。(ト愁ひのこなしにていふ。)
市藏　そりやあお前が案じるのも無理ぢやあねえが、あの宗治は餓鬼の時から、惡戯者で子分の内でも氣が早く、やゝともすると喧嘩をして、年中打たれ附けて居るから、そんなにめげることぢやあねえ。
六兵　宗治さまがもしひよつと、殺されでもさつしやりますれば、わしは生きては居られませぬから、直に身を投げて死にまする。
お仙　わたしも宗治さんに別れゝば、生きて居る氣はござんせぬ、お前と一緒に死にますわいな。
市藏　おれに義理を立てゝ、親子とも死ぬといふのは、尤だが、決して詰らねえことはしねえがいゝぜ。

六兵　御親切さまに有難うござりまする、さうして貰ひにお出での半兵衞さまは、大分お手間が取れますが、

お仙　むづかしいことを、言つて居るのでござりませうね。

市藏　何といつても上と下、小旗本でも御直參ゆゑ、慮外をしたから討捨てたと言はれてしまやあ仕方がねえが、京橋切つて備前町でおれも男を賣る市藏、仕方がねえと見ちやあ居ねえ、敵を取らにやあ置かねえから、無分別を出さねえで、其の曉を待つて居ねえ。

六兵　どうぞそんな事にならぬやう、

お仙　無事にお歸りなされゝばよいがなあ。（ト兩人案じるこなし）

市藏　もう今に歸らうから、安否を聞いて行きなせえ。

ト誂への合方唐人笛になり、花道より以前の半兵衞手拭を冠り、足早に出來り、花道に留り、面目なき思入にて、

半兵　お袋や姉御が氣を揉むのが氣の毒だから、おれが行つて貰つて來ると請合つて行きは行つたが、馴染甲斐もなく顏を潰され、兄貴に逢ふのも面目ねえが、みんなも定めし待つて居よう、えゝ仕方がねえ、思ひ切つて兄貴に逢はう。（ト舞臺へ來り、門口を明け）兄貴、今歸りました。

市藏　おゝ、半兵衞歸つたか。

ト半兵衞を見て首尾よくいかれえなといふ思入　半兵衞悄々とよき所へ住ふ。

六兵　これはく半兵衞さま、御苦勞さまでござりました。（ト前へ出ろを留めて、）

お仙　もし、宗治さんはどうなさいましたえ。

六兵　これ何ぞといふと、宗治さんくと、親分の前へおれが濟まぬ、ちと氣を附けたがよい。

ト叱ろ、お仙手拭にて顏を隱し愁ひのこなし、市藏思入あつて、

市藏　半兵衞、矢部で宗治は返すめえな。

半兵　さあ、ちつと向うに根があつて、直素直に返しませぬ。

市藏　むゝ、さうだらうと思つて居た。（ト合方きつぱりとなり、半兵衞面目なきこなしにて、）

半兵　まことにおれも今となり、お前に對して面目ねえ、どうか此れを取つてくんなせえ。

ト四ツ折の半紙の上へ髷を載せて出す、市藏見て、

市藏　半兵衞詰らねえ、なぜ髷ツぷしを切つたのだ、此れが他人といふぢやあなし、兄弟分に入らぬ義理、切つたものは仕樣がねえが、何でこんなことをしたのだ。

半兵　何で切つたと言ひなさるが、おれも駈出しの若藏ぢやあなし、少しは仲間の其内でも人に知られ

た半兵衛が、おれに任してくんなせえと口幅ツたく呑込んだを、指を銜へて歸つたから兄貴は更、もあれ子分の衆へ、姿を替へにやあ逢はれねえ。

ト手拭を取る、坊主鬘に替り居るを、六兵衛お仙見てびつくりなし、

六兵　えゝ、そんならお前さまが此事で、髮をお切りなされましたか。

お仙　こりやどうしたらようござりませう。

市藏　先達も坊主になつて、やうやく髷が出來たのに、又坊主になつては今更言つても仕方がねえが、野暮なことをしたぢやあねえか、さうして矢部の屋敷へ行つて、何と手前は掛合つた。

半兵　お前のお袋が大病で他出の出來ねえことを言つて、お馴染たけに半兵衛が名代に來ましたと、悔しいけれど宗治をば貰ひてえばかり、再三詫びをしたけれど、下駄の喧嘩を根に持つて、お前が自身に詫びに來にやあ誰が來ても渡されぬと、飽まで因業に言やあがるが、手出しをすりやあ宗治まで玉なしにする仕事ゆゑ、恥を忍んで歸つて來たが、こんな忌えましいことはねえ。

市藏　むゝ、それぢやあおれが誤りに、行かにやあ宗治は渡さねえとか。

半兵　それも屋敷へ又五郎を匿つて置く所から、生田の屋敷へ遺恨があつて、内の姉御が笹川樣の妹御ゆゑ、宗治をば返さねえのに違えねえが、此れを無難に取戻す工風を此れから編み出して、再び

矢部をひしぐ積りだ。

ト是れを聞き市藏きつとなり、脇差を出す六兵衛お仙びつくりなす。

市藏 さういふことならおれが行つて、矢部の殿に逢つた上、器用に宗治をくれゝばよし、四の五の言やあ命の遣り取り、小身ながら天下の旗本、相手に取つちやあ不足はねえ、此れから直に出掛けるから、半兵衛手前跡を頼むぞ。（ト行き掛けるを留めて、）

半兵 そりやあ兄貴お前でもねえ、向うはこつちで仕掛けて行くのを、手ぐすね引いて待つて居るのだ、そこへ行くのは、七分の弱身、爰は一番我慢して、短氣を出す所ぢやあねえ。

市藏 いゝや。向うでおれに來いと、いふのを行かずに居た日にやあ、所詮方が附きやあしねえ。

六兵 御尤でございますが、半兵衛樣もこのやうに、氣を揉んでおいでなされば、

お仙 どうぞ親分短氣なことを、なさいませんで、

兩人 まあ〳〵お待ち下されませ。

ト留める、獅子の鳴物になり、奥より以前の長次、藤藏、五郎吉、根太郎出來り、

長次 樣子は奥で聞きましたが、親分お前が行きなさるなら、

藤藏 わつちら四人は最初から、

五郎　宗治が喧嘩の彌次馬ゆゑ、
根太　一緒に行つて一か八、
長次　命を捨てに、
四人　行きませう。（ト皆々鉢卷をする、六兵衞お仙困つたものだといふ思入。）
市藏　いゝや、誰も行くにやあ及ばぬ、おれ一人で澤山だ。
半兵　これさ兄貴、まあ待ちねえといふに。
　　ト半兵衞市藏きつと留める、ばた〳〵にて、奥より以前のお蝶出で、子分四人を留め、
お蝶　これ、お前方はどうしたものだ、半兵衞さんが内の人を一生懸命留めて居るに、一緒に命を捨てようなどゝ、薪に油を添へるやうな、何でそんなことを言ふのだ。
四人　それだと言つて、
お蝶　わたしの言ふ事は聞かれないのか。（トきつといふ、六兵衞割つてはひり、）
六兵　もし皆さん、お上さんがお留めなされば、
お仙　まあ〳〵お待ちなされませ。
六兵　ト留める此の内市藏半兵衞を突き退け行かうとする、半兵衞遣るまいと爭ふ立廻り、お蝶氣を揉むこ

なし、爰へ奥よりお民抱兒を抱へ、おさが更けたる病人のこしらへ、是れを千太介抱しながら出來り

さが これ悴、大病人の親を殘し命を捨てに行くといふなら、此世の別れにとつくりとわしに顏を見せてくりや、（ト是れにて市藏ぢつとなる、合方きつぱりとなり、）今年の九月は父親の十三年の年忌ゆゑ、それまでどうぞ生きて居たいと、年取つて未練ぢやが無理な御願を掛けて居たに、杖柱と賴みにする悴をむざ〳〵殺しにやり、何が樂しみで生きて居よう、直にわしは死んでしまふが、孫が不便でならぬわいの。

ト泣き伏す、千太おさがの背中を擦る、六兵衛愁ひのこなしにて、

六兵 親分樣やお袋さまが、果敢ない御最期をなされますも、元の起りは六兵衛ゆゑ、わしから先きへ死なねばならぬ。

お蝶 御恩になつたおつかさんや内の人が命を捨てるも、生田樣に緣のあるわたしゆゑの此の縺れ、黃泉の障りにならぬやう、不便ながらも蝶太を抱いてわたしから、先きへ身を投げて死にまする。

ト抱兒を引き取り、井戸の方へ行かうとするを、子分四人にて留める、此内市藏切なき思入あつて、

市藏 大恩受けたお袋はじめ、六兵衛どのや女房子が、命を捨てるといふからは、思ひ止らにやあならねえが、宗治の親仁やお袋が死ぬ時おれに賴んだ身の上、それを捨てちやあ佛へ立たねえ、爰が世

間へ顔を賣り人に知られた身の悲しさ、お袋には大不孝、六兵衞どんには氣の毒だし、又女房子は邪險だと、みんなおれを恨むだらうが、是非とも行かにやあ男が立たねえ。

ト思入あつていふ、おさがきつとこなしあつて、

さが　それではそちは亡なつた、宗治が親へ義理を立て、

六兵　此大病のお袋さまに、親分義理がござりませぬか。

市藏　なに、それはねえとは言やあしねえ。

お蝶　六兵衞さんが義理ゆゑに、死ぬのもお前は構ひなさんせぬか。

市藏　そりやあ殺してえことがあるものか。

さが　嫁や孫が死んでもよいか。

市藏　いゝといふ譯も、ござりませぬが。

半兵　それぢやあ行くのを止つてくれるか。

市藏　それだといつて。（ト市藏じゆつなき思入、半兵衞詰め寄つて、）

半兵　これ兄貴、三方四方を不義理にして命を捨てに行きなさるは、宗治へ義理が立てたいゆゑであらうがな。

市藏　親兄弟もねえ者ゆゑ、おれが見捨てることは出來ねえ。
半兵　その宗治は最う一遍、命にかけて半兵衞が、必ず貰つて來ようから、今日の所を待つてくんねえ。
市藏　いや、おれも男だ、さう〳〵人には頼めねえ。
半兵　遣り損なつた曉ゆゑ、さう思ふのは尤だが、今度は一番大丈夫だ。
長次　はてな、親分でなけりやあ渡さねえと、
藤藏　手強く向うで刎ね附けられ、
五郎　坊主になつて言譯した、
根太　その叉兄ィが矢部へ行き、
お仙　宗治さんを大丈夫、
お民　貰つて來ると言はしやんすは、
千太　どういふ譯でござります。
長次　えゝ、手前は默つて聞いて居ろ。（ト市藏思入あつて、）
市藏　これ半兵衞、おれが行くのは十が九ツ返さねえと覺悟して、命を捨てに行く氣だが、手前の思案はどう附いた。

半兵　されば力づくにも腕づくにも、行かぬは旗本八萬騎中に優れた名うての矢部、幸ひ神田の伊豆屋の元締、お出入りとはいひ御懇意ゆゑ、仲間内での智慧者ゆゑ十兵衛さんへおれが話し、宗治を返して貰はうから、坊主になつた天窓に免じ、もう一遍おれに任して、行くのを止つてくんなせえ。

市藏　むう。

ト脇差を突き思案のこなし、此内抱兒頻りに泣く、おさが懐より剃刀を出し思入あつて、

さが　それともたつて行くといふなら、

お蝶　今見る前で三人四人、

六兵　爰で一緒に、

お仙　死にませうか。

市藏　さあそれは、

半兵　行くのを止めてくんなさるか、

市藏　さあそれは、

さが　孫と女房、

お蝶　六兵衞どのや、
六兵　お袋さまも今爰で、
半兵　見殺しにしてしまふ氣か。
市藏　さあ、
半兵　止つてくれるか。
市藏　さあ、
半兵　みんなを殺すか。
市藏　さあ、
五人　さあ、
皆々　さあ〳〵。
半兵　死んだ氣になり半兵衞に、もう一度任せて下せえ。（トきつといふ、市藏ぢつとなる）
長次　こりやあ親分、
四人　考へものだぜ。（ト投首をなす、市藏悔しき思入にて、）
市藏　えゝ、義理に負けにやあ、（ト脇差を下へ置くを木の頭、）ならねえか。

トきつと思入、皆々ほつとこなしある、時の鐘早き合方へ唐人笛を冠せよろしく、

ひやうし幕

五幕目

譽田家荒木宅の場
同廣書院傳授の場

〔役名──荒木政右衞門、栃榴武助、池添孫八、渡邊志津摩、倉橋彌二衞門、櫻井甚八、渡邊の若黨林平、櫻井門弟轟伴藏、同石塚傳吉、同外山專八、同猿澤權六、近臣池澤左門、同小泉右膳、同堀松彌源次、同柏木宇源太、同櫻井林左衞門、譽田大內記。政右衞門妻お谷、武助妹お賤。〕

（譽田邸內井戸端の場）──本舞臺一面の平舞臺、上手へ寄せて屋根附の一間の庭口、內三尺の引戸柱に荒木勝手口と記せし札を打ちあり、此左右一面の黑塀忍び返しの好みよろしく、舞臺眞中に屋根附の車井戸、後と左右三方とも駒寄せあり、下手の脇に柳の立木日覆より同じく釣枝、總て譽田家邸內家中長屋裏手の體。爰にお賤島田鬘木綿やつし裝前垂掛けにて、流し下駄を履き、井戸端へ手桶を置き水を汲まうとして居る、伴藏くりさげ鬘、袴着流し一本ざし、下駄がけにて、お賤を留めて居る、此の見得稽古唄にて幕明く。

お賤　伴藏さま、必ず構うて下さりますな。

伴藏　いやく、構はずには居られぬわい、かほそいそちの體にて此の車井の大釣瓶は汲むのになかかな

か骨が折れる、大力無双の某が、小指の先きにてつい一釣り、汲んでやるから待つて居やれ。

お賤 いえ〳〵、それには及びませぬ。

伴藏 いや、及んでも及ばいでも、是非とも汲んでやらねばならぬ。

ト無理に水を汲み上げ、手桶へあけるはずみに、お賤の前垂へ水を掛ける。

お賤 あなたがお邪魔をなされましたゆゑ、到頭前垂を汚しましたわいなあ。

ト腹の立つこなしにて、前垂の紐を解いて居る。

伴藏 それだから身共一人に任せて置けばよいことを、そちがなまじ手を出したゆゑ、思はぬ粗相をいたしたのだ、然し日當りのよい此の井戸端、その駒寄せへ掛けて置けば、少しの間に直きに干る、どれ〳〵身共が乾してやらう。

お賤 いえ〳〵、お頼み申しませぬわいなあ。（ト駒寄せへ前垂を掛けて居る。）

伴藏 はて、其やうにぴんしやんと拗ねるには及ばぬことぢや、先づ前垂の干る間ちよつと下に居てくりやれ。はてさ、まあ下に居やれ。（ト手桶を引取り、お賤を無理に下に居させることあつて、）斯様申せば何とやら、手前味噌をあげるやうぢやが、當譽田家の一家中へ御指南番をいたされる櫻井氏の一番弟子、武藝に於ては免許以上、又力量は人に勝れ、久保田團右衞門さへ恐れ戰く英雄豪傑

の轟作藏、役柄とても御近習の上席に坐す身分ゆゑ、そちが身共の妻になれば味噌漉ならぬ玉の輿、手鍋や手桶は提げさせぬ、轟さまの御新造と人に尊敬されるのが、此の車井の釣瓶のやうに、つい目の先きへぶら附き居るが、深い思ひを汲み別けて、しつぽりぬれる氣はないか、お賤返事はどうぢや〳〵。

お賤　えゝもう、其のやうなことは知りませぬわいなあ。

作藏　いや、知らぬとはすげない挨拶、爰で逢ひしは大極上首尾、色よい返事を聞くまでは、金輪奈落逃しはせぬぞ。

お賤　早く水を汲んで參りませぬと、御新造さまに叱られします、そこをお退きなされませ。

作藏　いや〳〵返事を聞かぬ内は、めつたに手桶は渡されぬ。

お賤　それでは奧へ告げますぞえ。

作藏　告げるとあれば、おゝさうぢや。（ト駒寄せへ掛けし前垂を取り）此の前垂を取上げるぞ。

お賤　其の前垂は御新造さまに、お貰ひ申した大事の品、こちらへおよこしなされませ。

作藏　いや、さう聞いては猶遣られぬ、そもじの前へ掛けたと思へば、好もしい此の前垂、替りを遣るから身共にくりやれ。

お賤　いえ〳〵、それは上げられませぬ。

ト兩人前垂を取らうと爭ひ居る、稽古唄きつぱりとなり、花道より孫八袴大小草履若黨のこしらへにて出來り、花道にて此體を見て、思入あつて舞臺へ來り、兩人の中へ割つてはひり、

孫八　轟さま、何をなされまする。

伴藏　や、貴公は孫八。

お賤　よい所へ來て下さんした。(ト嬉しきこなし、伴藏思入あつて、)

伴藏　身共が爰に居つたのは、おゝさうぢや、荒木殿の召仕ゆゑ、女ながらも柔術の心得位はあらうと思ひ、お賤の手並を試して居つたのだ。

孫八　それで女をお捉へなされて、じやらくらとしてござりましたか。

お賤　いえ〳〵さうぢやござんせぬ、わたしを捉へていやらしい。(トいふを冠せて、)

伴藏　あゝこれ〳〵、何にもいふな、身共が只今發言した、柔術の極意は祕密の大事、他人に漏れてはならぬぞ〳〵。

孫八　所を爰で是非ともに、心得の爲め聞いておきたい。

お賤　いえ柔術ではござんせぬ、わたしを捉へて伴藏さまが、御人體にもお似合ひなされぬ。

作藏　あゝこれはしたり、嘘を申すな。
お賤　いえ〳〵嘘ではござんせぬ。
作藏　えゝ、教へ甲斐のない奴めが。（ト前垂を持ちし儘に上手へ逃げてはひる。孫八跡を見送りて、）
孫八　晝日中女を捉へ、色氣狂ひにも困つたものだ。（ト替つた合方になり、）
お賤　たうとうわたしの前垂を、手籠めに持つて行きをつたわいなあ。
孫八　そなたもあんな氣狂ひに、常談などを言はぬがよい。
お賤　いえ、常談所ぢやござんせぬ、わたしを見ると附けつ廻しつ、厭らしいことを言ひますから、逃げるやうにして居りますが、今も井戸端で水を汲んで居る所へ通り掛つてわたしを捉へ、色よい返事を聞かぬ内は前垂を渡さぬなどゝ、じやらくらとして居ましたも、お前が折よくお出でゆゑ、わたしや難儀を脱れました。
孫八　いやも女を見るとじやらくらと、戯れたがる奴もあれば、浮かぬ心のお隣りで子供が浚ふ稽古唄も耳やかましく思ふわれ〳〵、嘸旦那様や御新造様は御殘念やら本意ないやらで、御愁傷なことであらうと、お察し申せばそなたとても、常談所ぢやあるまいわえ。
お賤　ほんにお前のお言ひの通り、わたしの兄の武助どのが大恩受けし旦那様の御緣に繋がる舅御様が、

孫八　不慮の御最期なされしゆゑ、お暇願ひの御混雑、それに連なるわたしまで、本意ない事になりました。（トほろりとせしこなし、孫八思入あつて、）
何は兎もあれ晝日中、二人が爰に話して居ては、人の見る目も憚りあれば、早くお内へはひるがよい。
お霞　いえ〳〵、お前に聞いておかねばならぬことがござんすゆゑ、少し爰に居て下さんせ。
孫八　それでも爰で立ちながら、話しをしても居られまい。（トお賤後の塀の側にある植木鉢の臺を見て、）
お霞　爰によいものがござんした、是れへ掛けて下さんせ。（ト前へ持つて出る。）
孫八　床几の代りに誂へ向だ。（ト兩人腰を掛ける、合方きつぱりとなり、）
お霞　もし孫八どの、わたしや今度の御混雑で、お前と女夫になられぬのが殘念でなりませぬが、お前は丁度幸ひと思うておいでゝござんせう、それが聞きたうござんすわいなあ。
孫八　何で幸ひと思はうぞ、其の殘念は同じこと、兄と賴みし武助どのゝ妹のそなたと夫婦になれば、重なる緣と悅びしも、今度の騷ぎでそつち退け、結ばぬ緣になると思へば、張合ひ拔けがしたやうだ。
お霞　さうして今度旦那樣が、お暇願ひがお叶ひなされ、志津摩樣のお助太刀に御出立をなさる時は、

お前もお供で御一緒に、旅へ立つのでござんすか。

孫八 そりや言はずとも知れたこと、お供を願ひ共々に、助太刀をして上げねばならぬ。

お賤 それでわたしも御新造樣の、お供を願つて御一緒に、旅へ行くとしませうわいなあ。

孫八 いや〳〵それは叶はぬことだ、常から武道をお立てなさる旦那樣のことだから、御新造樣やこなたなどを、一緒に連れて敵討の御出立はなさるまい、女は跡に取り殘り、お留守をせねばならぬわえ。

お賤 そんならどうでも夫と思ふ、お前に別れにやならぬかいなあ。

孫八 はて御主人樣の御夫婦さへ、別れ〳〵におなりなされば、家來の身では當り前、遠慮をせねばならぬ譯だ。（トお賤思入あつて、）

お賤 そりやもうお主の御難儀を、お察し申せばこちと風情は、我慢をせねばなりませぬが、不義徒を愼んで、口へは出さねどつい何時か、御新造樣のお目に餘り、それ程思ふ男なら旦那樣へお話し申し表向きにて女夫にすると、お情と慈悲のお詞は、夢ではないかと思ふほど悅んで居た甲斐もなく、降つて湧いたるお取込みに、急にお前は江戸表の、渡邊樣へ志津摩樣をお迎ひに行くことになり、先頃旅行をした時さへわたしや氣拔けがしたやうで、お奧の御用も手に附ず、くよ〳〵

思うて居りましたが、やう〳〵それも四五日跡戻つて見えて嬉しやと思ふ間もなく又お前に、別れにやならぬと思ひますと、生きて居る氣はござんせぬ、一生添はれぬことならば、いつそ死にたうござりますわいなあ。

ト思入にていふ、此内孫八四邊を憚るこなしあつて、

孫八 いや、一生添はれぬと何も極つた譯ではない、旦那樣のお助太刀で首尾よく渡邊志津摩樣が本意をお遂げなされた上では、一同目出度く歸國なし、又元々の御身分にお成りなさるは知れたこと、其時こそは改めて、こちらも夫婦になられうから、必ず短氣は出さぬがよい、今もこなたの言ふ通り御主人方のお目を掠め、不義徒をしては濟まぬと、心で心を戒めて、まだ一ッ寢こそせぬけれど、こなたの方が其氣なら、こつちは元より望む緣組、夫婦になるを樂みに、お主を大事と辛抱して、時節の來るを待つがよい。

お睦 それで少しは安心しました。さうしてお立ちになりますのは、何時頃でござんせう。

孫八 昨日倉橋彌三衞門樣まで、お暇願ひの御願書をお上げなされし御樣子ゆゑ、其のお許しがありさへすれば、直にもお立ちになるであらう。

お睦 成らうことならお許しが、なるたけ遲く出ればよい。

孫八　あこれ、それではお主へ不忠といふもの、了簡違ひはせぬものだ。
お賤　ほんにわたしとしたことが、ついうつかりと言ひました、
　ト兩人よろしくこなし、此の以前、下手より以前の伴藏件の前垂を冠り、差足をして出來り、眞中の井戸の後へ隱れ窺ひ居て、よき程に井戸側へ乘り、風呂敷を女の亂れ髮と見せて冠り、幽靈のこなしにて、
伴藏　えゝ、うらめしい。（ト大きくいふ、是れにて兩人びつくり飛び退き、）
お賤　あれえゝ
　ト逃げかゝる、孫八さそくに小石を拾ひ、えいと伴藏に打ち附ける、伴藏其儘井戸の中へ落ちる、水の音して兩人井戸の中を覗きびつくりなし、
孫八　やゝ、怪しきものと思ひしが、中へ落しは　轟　伴藏。
お賤　掛り合ひにならぬ内、早く行かうぢやござんせぬか。
　ト床几の臺を元の所へ片附ける、此の時井戸の中にて、
伴藏　あゝ、助けてくれ〳〵。（ト聲するゆゑ、）
孫八　此儘行くも本意ならず、こちも粗相だ、助けてやらう。

お賤　でも憎らしうござんすゆゑ。

孫八　いや〳〵、あれでも人一人だ、（ト井戸の側へ行き中を覗き、）それ、釣瓶へしつかりと縋つて居るのだ。

ト釣瓶の繩を持ち引揚げる。井戸の内より伴藏やはり風呂敷を冠りしまゝ、水に濡れ半身出て、

伴藏　あゝ、うらめしい。（トお賤を睨める、）

お賤　どうやら是れは皿屋敷の、

孫八　お菊にしては土佛な幽靈、

伴藏　こりや水脹れに脹れたのだ。

お賤　ても、口の減らぬ幽靈ゆゑ。

孫八　もそつと水に脹れるやう、（ト繩をゆるめるゆゑ、伴藏井戸の中へはひりながら、）

伴藏　あゝこれ〳〵、助けてくれ〳〵。（ト片手にて拜むゆゑ孫八又引揚げる、伴藏半身出て、）あゝ、恨めしい。

お賤　こりやまあ、出たり引込んだり、

孫八　とんだ吹矢の、

ト繩を弛めるゆゑ伴藏井戸側へつかまり、ばつくりと口をあく、是れを見てお賤孫八へ縋るを道具替りの知らせ、

もゝんがあだ。

ト笑つて居る、此の模樣獅子虎でんの唄にて、伴藏前垂にて石橋を振ることよろしく道具廻る。

（荒木住居の場）――本舞臺一面常足の二重、上の方障子屋體、正面一間の床の間、此次同じく地袋違ひ棚、此の下手白地雲母形の襖、正面の長押に木太刀二本掛けてあること、ずつと下の方に九尺の玄關、前に本緣程の式臺、正面小形白地の襖、左右海鼠緣の杉戸、柱に荒木政右衞門といふ表札を掛け、玄關と奥の境低き板羽目にて見切り、總て家中長屋荒木住居の體。二重の下手に彌三衞門少し老けたる鬘、繼上下一本ざしにて刀を置き住ひ居る、前に茶煙草盆、下手に二幕目のお谷人柄よき毛卷髷、着流し、家中女房忌中のこしらへにて住ひ、其次に志津摩羽織着流しにて住ひ、此の見得常の唄にて幕明く。

彌三　江戸國表と隔たり居れば、志津摩殿には一別以來其後は面會せざりしが、承はれば江戸表にて、御親父渡邊靭負殿には不慮の御最期遂げられし由、御愁傷の程嘸かしと、御推察をいたしてござる。

お谷　此の郡山へ參りてより、倉橋樣には一方ならぬ御厚恩に預りしゆゑ、ようお禮を申してたも。

志津　久々にて倉橋樣に拜顏を得ましてござりますが、何時に替らぬ御壯健の體恐悅至極にござります、舊來の御入懇とて父が橫死をお傷み下され、忝けなき其のお詞、又兄上より紙面を以て度々江戶表へ申し越し、承知いたして居りまするが、御當家樣へ政右衞門を仕官の御推擧下されし上、萬端厚きお世話に相成り、一方ならぬ御懇切の由、いつかは御目にかゝりし上にて御厚意を謝さんと心得、時節を待ちし甲斐もなく、今般不慮の凶變にて御當地へ罷り越し、お悔み受くる拙者が薄命、御推察なし下されませう。

彌三　それに附き政右衞門殿へ申し入れたきことあつて、態々推參いたしてござるが、今日は御在宅かな。

お谷　只今書齋で認めものをいたし居れば、御入來の由を申し聞けるでござりませう。

ト立たうとする、上手障子の內にて、

政右　いや、只今それへ參るであらう。（ト合方きつぱりとなり、政右衞門羽織着流しにて出來り、彌三衞門へ會釋して二重下手へ住ひ、）これは〳〵倉橋氏には、態々の御入來、疾く御挨拶に出づべきを、書齋に於て存ぜざるゆゑ、遲刻の段は御容赦下され。

彌三　いや〳〵、緣者も同然なる手前へ對し、左樣な會釋は必ず共に無用でござる、いやも、思ひ寄ら

ざる御不幸にて御多用の儀も嘸かしならん、至急の狀でも御認めなら、御遠慮なくなさるゝがよいぞ。

政右　只今認め終りしゆゑ、最早用事はござりませぬ。

お谷　お心置きなく御ゆるりと、

志津　お話しなされて、

兩人　下さりませ。

彌三　あゝ申して返らぬ儀でござるが、武藝勝れし其許ゆゑ上へ推擧いたせし所、殊の外なる御意に叶ひ、手前に於ても一家中へ肩身を廣く勤める悦び、親類同樣幾久しく互ひに入懇を結ばんと末頼もしく存ぜしに、計らざる儀が出來いたし、お別れ申すが彌三衞門、まことに殘念至極でござる。

政右　さしてもなき拙者の武藝、御賞美あつて御當家へ御推擧下さるのみならず、是れまで種々の御懇切、其の御恩も謝さずして近々當地を發足のお暇願ひを差出しまするは、拙者に於ても殘念ながら、引くに引かれぬ武道の表、御容赦なされて下されい。

お谷　それと申すも弟が、若年ゆゑに夫にまで、よしなき苦勞を掛けまするは、心苦しきお暇願ひ。

志津 報ずる御恩も報ぜずして、却つてお手数かけまするも段、平に御容赦下さりませ。
彌三 いやく、其儀も餘儀なき次第、必ず御配慮に及びませぬ。
政右 して一昨日願ひ出せし、彼の一條は御許容に相成りませうや、如何でござるな。
彌三 されば、昨日手前を始め家老中衆議の上にて、君へ願書を差上げたれば、御前様にも御披見あつて、惜しき家來も是非なしと、御聞き濟みある樣子でござる。
政右 すりや、お暇を、
三人 下さりますとな。
彌三 多分今明兩日の內、上より御沙汰があるでござらう。
政右 いやも仕官の身ゆゑ我が君の、御許容なくては何分にも、進退自由は得られませねど、早速御許容下さるは寬仁大度の思召し。
お谷 是れと申すも我が君樣の、お覺え目出度き倉橋樣が、お執成しを下されしゆゑ、
志津 返すぐも此の御恩、いつかは報じ奉つる。（ト此時八ツの時計鳴る、）
彌三 最早未の上刻なれば、手前は是れより出立いたし、御沙汰があらばお知らせ申さん。
政右 何卒よしなに、

三人　願ひまする。
彌三　然らば是れにて、荒木氏。
政右　左樣ござらば、
三人　倉橋樣、
彌三　御沙汰のあるをお待ちなされい。（ト刀を提げて立上り、下手へ行く、お谷後へ向ひ、）
お谷　それ、お立ちぢやぞや。
ト呼ぶ、下手襖の內にて、はッと答へて以前のお賤出來り、玄關へ行き式臺にある草履を直し、控へ居る、此の內彌三衞門刀を差し玄關へ出る、跡より政右衞門お谷志津摩送つて出る、彌三衞門お賤を見て、
彌三　賤には、いつも美しいぞよ。
トにつこり笑ふを唄になり、彌三衞門花道へはひる、是れにて政右衞門志津摩は元の座へ戾る、お賤は彌三衞門を見送り式臺にて、
お賤　ハア丶。（ト泣き伏すゆゑ、お谷此の體を見て、）
お谷　倉橋樣のお歸りを、そちは何で泣きやるのぢや。

お賤 承はればお暇の、願ひも多分今明日、お聞き濟みに相成りますと、倉橋樣の仰せゆゑ、さうなる時は御主人樣には、お別れ申さにやなりませぬか。

お谷 いやお暇の願ひが叶ひ、いよ〳〵此家を立退く時はわしもお供を願ふ氣ゆゑ、そちもお願ひ申して遣れば、必ず共に案じやるな。

お賤 左樣なれば私を、お連れなされて下さりますとか、えゝお嬉しう存じまする。

お谷 さあ〳〵、次へ行つて居や。

お賤 何分お願ひ申し上げまする。（ト お賤は下手奥へはひる、お谷元の座へ來る、政右衞門思入あつて）

政右 倉橋氏のお詞には、今にも御免の御沙汰あらん、志津摩も安堵いたすがよい。

お谷 我が父上の事よりして、偶々御仕官なされしを、又御浪々させまするは、

志津 心苦しき姉弟二人、御容赦なされて下さりませ。

政右 いや〳〵左樣な心配いたすな、我は性來氣儘者ゆゑ、仕官なすより浪々なし、天地の間を心の儘遊歷いたすが勝手なれば、舅の仇討勇ましく助太刀なすが悅ばしいわえ。

お谷 其のお詞で我々も、

志津 大慶至極に、

兩人　ござりまする。

　　ト爰へ下手の襖を明け、武助袴着流し一本差し、若黨のこしらへにて、以前の孫八と出來り、平舞臺
　　下手に居て、

武助　委細のお話し承はり、

孫八　恐悅申し、

兩人　上げまする。（ト辭儀をなす。是より合方替つて政右衛門、扨はといふ思入あつて、）

政右　すりや、そち達も聞いて居つたか。

武助　へい、失禮にはござりまするが、お襖越しに我々も御樣子を伺ひましたが、只今お歸り遊ばしました倉橋樣のお詞では、今明日の其内に、お暇願ひが叶ひまして御沙汰があらうとお心添へ。

孫八　お暇出づれば御出立も、火急な事と存じますゆゑ、心嬉しく恐悅を、

武助　申し上ぐるで、

兩人　ござりまする。

お谷　是れも偏に倉橋樣の、

志津　お執成しゆゑ悅びくりやれ。（ト此内政右衛門思入あつて、）

政右　其儀に附いて女房へ、申し渡して置きたきは、今にも上より御許容の御沙汰下らば早速に、そちは一先づ賤を連れ當地を立つて江戸へ下り、世に便りなき母人へ厚く孝養盡すべし、幸ひ先日江戸表より志津摩を送り參りたる、林平を供に連れ、長の旅中も恙なく江戸へ到着いたすがよいぞ。

お谷　いえ仰せではござりまするが、此身の爲にも肉親の父の敵にござりますれば、人非人たる又五郎を一太刀なりと恨みたく、それのみ祈り居りますれば、お邪魔ながらも御一緒に、お連れなされて下さりませ。

政右　そりやはや實父の敵ゆゑ、討つて恨みを晴らしたいは孝道の一つなれど、志津摩がなくば其方が討たんと計りて然るべきだが、弟のある以上はそちが出づるには及ばぬ事、萬一我等や弟志津摩が運拙くして又五郎に返討ちに相成りなば、其時こそは女子たりとも不倶戴天の父の仇、討つて恨みを晴らすべし、武道の恥ゆゑ仇討の、供に女は連れられぬ。

お谷　ではござりませうが、是非共に、お連れなされて下さりませ。

政右　やあ、そちも渡邊靭負が娘、武士の作法を心得居らうが。（トきつと言ふゆゑ、）

お谷　はッ。（トさし俯向く。）

志津　こりや兄君の仰せの如く、母上事も御老年にて父を先立て拙者に別れ、お心細くおはしませば、御介抱こそあなたのお役、お賤諸共江戸表へ、何卒お下りなされまして、母のお世話を只管に姉上お頼み申しまする。

武助　我々共が差出まして申し上げるも如何ながら、御亡父様へのお手向に敵をお討ちなされまするも、御母公さまへ此世にて御孝行をお盡しなさるも、つゞまる所は同じこと。

孫八　押してあなたが敵討に、御出立をなされますれば、志津摩樣には是非なくも、江戸表なる御母公さまのお世話なさらにやなりますまい。

武助　それもどうやらお勝手違ひと、憚りながら存じますれば、

孫八　お賤を連れて江戸表へ、

武助　お下りなされて、

兩人　下さりませ。（ト兩人にて勸める、是れにてお谷是非なきこなしにて、）

お谷　押して願へば弟の爲めにならぬとあるならば、お別れ申すでござりまするが、たゞさへ旅は物憂きに男ばかりの御不自由勝、お名殘惜しうござりまする。

　ト お谷こなしあつて差し俯向く、政右衞門も不便だといふこなしあつて氣を替へ、

政右　それにて我等も悦ばしいぞ。
志津　然らば賤にも此由を、申し聞せて置きたければ、此處へ呼んでくりやれ。
　　ト此前方下手玄關の襖を明け、以前のお賤出て、下手の隔ての所に窺ひ居て、
お賤　其の御樣子はお次にて、承はりましてござります。（トしを／＼として前へ出る、）
武助　承知とあれば言ふに及ばず、御新造さまのお供をしやれ。
お賤　御新造さまさへ敵討のお供が叶はぬ仕儀なれば、別れ／＼に江戸表へお供いたすでござりまするが、假令別れて居るとても必ず替つて、（ト孫八へこなしあつて氣を替へ、）さあ、お替りのござりませぬやう、御無事を祈つて居りまする。（トよろしくこなし、政右衞門思入あつて、）
政右　何は格別、お暇の願ひ叶はゞ明朝にも、出立いたす心得ゆゑ、御沙汰次第で猶豫はなるまじ、當地へ參つて淺からぬ厚意に預かる倉橋氏の、お宅へ參つて御內室へ、そちは暇を告げて參れ。
お谷　仰せの通り御出立も、火急となればおち／＼と、お暇乞も出來ませねば、左樣いたすでござりまする。
志津　賤も一緒に參るがよいぞ。
お賤　はい。（ト孫八の側を放れ兼ねるこなし）

武助　それ、お履物を取つて來やれ。
お賤　ても、意地の惡い。
武助　や、
お賤　いえ、道惡るではなかつたわいなあ。（ト奥へはひる。お谷身支度をして、政右衛門の前へ出で）
お谷　左樣なら行つて參ります。
政右　おゝゆつくりと話して參れ。
お谷　弟跡を賴みまする。
　　ト、お谷立ち上る、志津摩武助孫八附いて下手玄關の所へ來る、此の内お賤奥より女の雪駄を二足持つて出で、お谷の雪駄を直す、お谷四邊を見廻し、
志津　此の玄關もお手入を、なされて三月と住まざれど、跡に見捨てゝ出立を、なされませねばなりますまい。
武助　左樣なれば、
武助孫八　御新造さま。
お谷　どれ、暇乞をして來ませう。（ト唄になり、お谷先きにお賤附いて下手へはひる、皆々元の座へ來り）

志津　兄上のお諭しにて、母の介抱姉上にお頼み申せば一つの安堵。

武助　御沙汰次第で御當所を、御出立なされまして、

孫八　首尾よく敵に廻り合ひ、御本意お遂げなされませ。（ト此内政右衞門思入あつて、）

政右　其本懐を達するにも、大事に大事を取らねばならぬが、敵と覘ふ又五郎は、山本流の槍の達人、殊更以て江戸表の旗本中が腰押しなし、助力いたすと聞き及べば、定めて相手は多人數ならん、それに對する其方ゆゑ容易なことでは討ち難し。

志津　それゆゑ遙々兄上を、お頼み申しに參つてござる。

政右　そりやはや、我にも舅の仇、助太刀なすは當然なれど、目指す敵の又五郎は是非其方が渡り合ひ、討たねば亡父へ手向けにならぬ、昨年以來立別れ、國を隔てゝ居つたるゆゑ、そちの手並も久方見ざれど、定めて上達せしならん。

志津　仰せの如く兄上に、お別れ申して二ケ年越し、お稽古とても願ひませねど、其後は柳生のお家へ願ひ御指南受けてござりまする。

政右　おゝ、其噂も聞き及んだ。（ト政右衞門思入あつて、）志津摩、覺悟。

ト扇子にて舞臺を打つ、是れにて志津摩ハツと後へ飛びしさり、きつと身構へをなす。政右衞門立上

り、正面の長押に掛けし木太刀を二本取り、

それ兩人、打ち据ゑ見よ。

ト武助と孫八の方へ一本づゝ投げてやる、兩人手早く木太刀を取上げ、

武助　是れにてお相手、

兩人　仕らん。

ト左右より打つて掛る、志津摩扇子にて是れをあしらひ、ちよつと立廻つて、武助は上手孫八は下手に木太刀を構へ、位取りの見得、志津摩眞中に扇を持ち、双方へ目配りなしきつとなり、是れより誂への合方になり、志津摩扇子にて兩人を相手に氣合の立廻りあつて、三人とも互角の手練ゆゑ互に隙なく、打込み兼ねろこなしにて爭ひ居る、政右衞門二重眞中にて是れへ目を附け居ることよろしく、三人はトヾ息の切れしこなしにて三方へ別れきつと見得、政右衞門思入あつて、

政右　ほゝお、切瑳琢磨の效顯はれ、志津摩の手の内相分つた。兩人引け。

ト聲をかける、武助孫八はツと控へる、志津摩下手へ下り扇を下に置き、

志津　はゝツ、未熟の手の内御覽に入れ、何とも以て面目なし、よしなに御教諭下さりませう。

政右　おゝ、猶も是れより政右衞門が、柳生の奧儀を教授せん、武助孫八大儀であつた。

ト此内兩人は體の汗を手拭にて拭くことなどあつて、

武助　なか〱以て我々が及ぶべきにはござりませねど、旦那様から段々と、御指南受けしお蔭にて、やつとの事で志津摩樣の、お相手いたしてござりまする。

孫八　此お手並では又五郎と、一騎がけにて渡り合ひ、御本意お遂げなされまするは、鏡に掛けて見る如し。

武助　及ばずながら我れ〱も、お助太刀をばいたしますれば、

孫八　何卒今度の御供に、

武助　お連れなされて、

兩人　下さりませ。（ト是れにて政右衞門、志津摩ちよつと顏見合せ思入あつて、）

政右　いや、兩人は此度の御供に連れては行かれぬぞ。

兩人　えゝ。（トびつくりなし、）

武助　そりや何ゆゑで、

兩人　ござりまする。（ト合方替へて、）

政右　只今も申す如く、敵又五郎を討留めるは、當の相手の志津摩が役、又助太刀は先方に假令何人あらうとも、此方にては靭負殿の聟となりたる我一人、他人は供に召連れぬぞ。

武助　いえ、他人だとおつしやりまするが、命の親なり師弟なり、主從となる上からは、三千世界に此のやうな深い因みはござりませぬ、改め申すに及びませぬが、私事は藝州の福島家に仕へました若侍でござりましたが、主家斷絕いたしてから妹諸共流浪なし、旣に先年勢州の桑名の渡しで路用に盡き兄妹命を捨てる所を、あなた樣に助けられ御家來にして下さるのみか、柳生流の極意までお許しなされて下されしゆゑ、只今御舍弟志津摩樣のお相手も出來ますするは皆あなた樣の御丹精、此度御恩を報ぜずば何時の世までも此御恩、報ずる時節もござりませねば、是非共今度の御供にお連れなされて下さりませ。

孫八　おゝよく言はれた武助どの、私とても其以前、是れなる武助と國元にて入懇を結びし緣により御道場へ便りまして御家來となり長の年、御高恩を蒙れば主從師弟の因みは同じ、あなたの方では他人だと思召すかは存じませぬが、こちらは三世の御主人と寐た間も御恩を忘れねば、部屋へ下つて臥りましてもお居間の方へ足を向け、臥つたことはござりませぬ、それを今度の御出立に連れぬと仰せられますは、未練な者とお見下げあつてか、命を的の助太刀ゆゑ、お供にお連れなされぬを、人はお慈悲と思ひませうが、却つてお恨み申しまする。

ト兩人思入にていふ、此時政右衞門志津摩顏見合せ、それ程までにといふこなしあつて、氣を替へ、

政右　いや、假令何樣申しても敵の多勢におぢ恐れ、家來を連れて政右衛門が出立せしと云はれなば、末代までの恥辱なれば二人は供に召連れぬ。
志津　左程そち達兄上を、恩人なりと思ひなば、習ひ覺えし武藝を言ひ立て、何れへなりと仕官なし、身の安泰を計りし上、立派な武士になつてくりやれ。
武助　いや〳〵御恩を餘所にして、二君に仕へる所存はなし、
孫八　命を的に此度の、お供がしたうござりまする。
政右　はてさて理解の分らぬ奴、押して申さば主從や、師弟の縁も是れ限りぢやぞ。
武助　すりや、どうあつても、
孫八　お供にお連れ、
兩人　下さりませぬか。
政右　百度言うても叶はぬことぢや。
武助 孫八　そこを何卒。（ト寄らうとするゆゑ）
政右　えゝ、くどいわえ。（トきつといふ、是れにて兩人顏見合せ、志津摩の側へ行き）
武助　もし志津摩樣、あなた樣より旦那樣へ、

孫八　お執成し下さりまして、願ひをお叶へ、
兩人　下さりませ。
志津　いや折角の頼みなれど、日頃の氣質兄上が、ならぬと仰せ出されし上は、執成しても益なき事ぢや。
武助　すりや、どうあつても叶ひませぬか。
孫八　こりやどうしたらよからうなあ。
ト兩人當惑の思入、此留り、ばた〳〵になり、花道より足輕一人、白木の狀箱を持ち出來り、直に舞臺玄關の前へ來り、
足輕　頼まう。（ト大きく言ふ。）
志津　どうれ、（ト答へ、）それ、玄關に案内があるぞ。
ト是れにて孫八是非なく、ハツと立上り、悄々と玄關の所へ出で、
孫　宅内どの、何御用だ。
足輕　倉橋殿より書狀が參つた、是れを奥へ上げて下さい。
ト狀箱を渡す、孫八受取り、やはりしな〳〵とこちらへ持ち來り、

孫八　倉橋樣より、御狀でござりまする。

ト志津摩の前へ出す、志津摩取次政右衛門受取り、開き見て悅ばしきこなしあつて、

政右　只今出仕仕つると、使ひのものへ申してくりやれ。（ト狀箱を戾す、孫八こちらへ持つて來り。）

孫八　只今出仕つかまつりますと、

足輕　倉橋樣へ言ふのであらう。

孫八　聞いて居たなら、言ふだけ無駄だ。

足輕　大方そこらと察したのだ。

ト狀箱を持つて花道へはひる。孫八は元の座へ返る。志津摩思入あつて、

志津　倉橋氏より御書狀は、御免の御沙汰でござりまするか、

政右　火急のお召しと認めあれば、御免の御沙汰に相違ない。

武助　御免の御沙汰が出る時は、直に明日御出立、

孫八　それに附けても我々の、願ひをお叶へ下さりませ。

政右　やあ叶はぬ事ぢや。上下を持て。

武助
孫八　はツ。（トもぢ〳〵して居るゆゑ、）

志津　それ、御上下を持つて來ぬか。

兩人　はッ。（トやはり立兼れて居る、政右衞門態ときつとなつて、）

政右　え〻、何をうだ〳〵、（ト立上るを道具替りの知らせ、）早くいたせ。

トきつといふ、是れにて兩人是非なく立上る、此模樣早舞にて道具廻る。

（廣書院の場）＝本舞臺一面平舞臺、正面上下三方共金地丸の内に立葵の紋散らしの襖、日覆より同じく大欄間を下し、花道の揚幕の所杉戸の出這入り、舞臺花道とも高麗縁の薄縁を敷詰め、總て譽田家廣書院の體、眞中より少し上寄りに褥、脇息、紙置臺、煙草盆などを直しあり、上手に池澤左門、小泉左膳、並松彌源次、柏木字源太の近習、何れも上下にて住ひ、下手に以前の轟伴藏上下裝、石塚傳吾、外山傳八、猿澤權六同じく上下裝、敵役の諸士にて住ひ、此模樣調べの鳴物にて道具留る。

左門　いやなに各、先頃當家へお抱へになられし、柳生流の達人たる荒木氏こそ、我々のよき師匠と悦びしも、測らず今般我が君へ、お暇の願ひを出し退身いたすと申すこと。

右膳　承はれば內室の實父渡邊靱負とやらが、江戸表の生田家にて、同家中の澤井とやらに暗殺をいたされしゆゑ、子息志津摩と申すものが、敵討の願ひを上げ、主家を浪人いたせし樣子。

彌源　其志津摩ことは若年ゆゑ、姉聟の因みにより、助太刀なして討たせる爲め。

宇源 暇の願ひを出されしとやら、惜しき師匠に放れまするは、殘念至極な儀でござる。

伴藏 未熟な武藝を申し立てに、倉橋氏の推擧にて當家へ仕官の政右衛門、胡麻で仕上げし劍道を、信仰いたす人々は定めて惜しいと思はれんが、我々共は櫻井氏を、やはり師匠と賴み居れば、

傳吾 假令荒木が退身なすとも師匠に放るゝ憂ひなく、以前に替らず安泰にて劍道修行が出來ますれば、あちらへべつたりこちらへべつたり、內股へ張る膏藥武士とは、爰らで相場が違ひまする。

專八 敵の助太刀いたすと申すは、上を繕ふ拵へごと、其內實は櫻井氏に、

權六 眞劍勝負で立合つては、大事な命がござらぬゆゑ、退身するに相違なし。

ト是れを聞き、上手の四人むつとなし、

左門 やあ、我々共を各には膏藥武士との當こすり、

右膳 次第に依つては其分に、聞き捨てられぬ惡口雜言、

彌源 櫻井氏に恐れをなし、

宇源 何ゆゑ師匠が退身なさんや。

伴藏 いや、各方を當附けて、申した譯ではござらぬが、

傳吉 師匠に放れて此後は、肩身がお狹いことでござらう。

專八　近頃笑止に存ずるから、
權六　ものゝ譬を申してござる。
左門　やあ、返すぐも、
上手四人　其の雜言。（トきつとなる。）
作藏　はて、氣の早いも、
下手四人　程がある。

ト嘲笑ひ居る。合方になり、花道揚幕の杉戸を明け、二幕目の林左衞門上下大小にて先きに立ち、後より、甚八同じく上下大小にて附添ひ出來り花道にて舞臺を見て、

林左　火急のお召しに取敢ず、急ぎ出仕をいたしたが、未だ近習の面々ばかり御前の御出座なき樣子ぢや。
甚八　して今日の火急のお召しは、何事でござりませうな。
林左　されば昨日政右衞門が、暇願ひを出せしと聞けば、又々身共に一家中の指南番をいたせとある、手前勝手な御諚であらう。
甚八　いやも、高い聲では申されぬが、兎に角御前は喰ひ散らして、珍らし物をお好みあれど、元木に

林左　勝る末木なしと大方左樣な儀でござらう。

林左　何にいたせあれへ參つて、御前の出座を待つといたさう。

甚八　何さま、それがようござる。（ト右の合方にて兩人舞臺へ來る、上手の近習四人此體を見て）

左門　櫻井氏には、お早き御出仕、

右膳　未だ我が君御出座なきゆゑ、

彌源　暫時の間お控へあつて、

宇源　君の御出座を、

上手四人　お待ちなされい。

林左　然らば是れにて、

林左甚八　お待ち申さん。（ト兩人舞臺下寄りに住ふ、下手の諸士四人前へ出で）

伴藏　兩先生には、今日御出仕、

傳吾　御苦勞千萬に、

下手四人　存じまする。（ト辭儀をなす。）

林左　何等のお召しか存ぜねど、急お召しにより兄弟二人、打揃つて出仕いたした。

甚八　各方にはお召しの次第、聞き及ばれしことでもなきや。
作藏　未だわれ〳〵御内意とても承はりはいたしませねど、
傳吾　多分は今日又候や、御指南番を先生へ、
專八　仰せ附けられまするのかと、
權六　我々推察仕つりまする。
林左　身共も左樣存ずる所。
甚八　はて、迷惑な儀でござる。

ト此時後にて警蹕の聲聞えるゆゑ、双方席を改め居る、時計の音になり、正面の襖を左右に明け、奥より大内記羽織袴一本ざしにて出る、是れへ子役の袴小姓二人附添ひ、一人は紫袱紗にて刀を持ち、一人は錦の袋へ入りし誂への刀を持ち出る、大内記褥の上へ住ふ、小姓二人後へ控へる、双方皆々平伏なし居る、下手の近習頭を上げ、

左門　お召しに依つて櫻井兄弟、
右膳　只今出仕いたしまして、
彌源　御前樣の御出座を、

宇源　あれにて相待ち、
上手四人　控へ居りまする。（ト是れにて大内記下手を見て、）
大内　林左衞門、甚八、火急の出仕大儀なるぞ。
林左　はッ、何時に替らぬ美しき尊顔、拜しまするも臣等が大慶、
甚八　何等の御用にござりまするか、取る物も取り敢ず出仕いたして、
兩人　ござりまする。（ト是れより本調子の合方になり、）
大内　其方共兩人を呼出せしは餘の儀にあらず、此度荒木政右衞門儀、舅たる渡邊靱負が同藩澤井又五郎に討たれ不慮なる横死を遂げしゆゑ、靱負の悴渡邊志津摩敵討の志願を立て、江戸表なる生田家より暇を取りて此地へ來り、助太刀の儀を依賴するに附き、親族の誼止むを得ず義理ある弟に助力なし、本懷を遂げさせ度暇の願ひを差出したれば、惜しき家來と存ずれど、是非なき儀ゆゑ政右衞門に今日暇を遣はす間、そち達をも是れへ呼びしぞ。
林左　すりや先頃御指南番に、お召抱へに相成りましたる、荒木を今日お暇とな。
甚八　それゆゑ我々兩人を、お召出しに相成りしは、又候元の御指南番を、
林左　拙者へ仰せ、

再人　附けられまするか。
大內　いや、指南番は申し附けぬが、定めてそち達兩人にも、長の暇を願ふであらうな。
　　ト是れにて林左衞門甚八心得ぬ思入にて、
林左　思ひも寄らぬ其仰せ、何ゆゑあつて我々兄弟、荒木同樣御前樣へ、暇の願ひを差出しませうや。
甚八　政右衞門儀は敵討の助太刀いたす志願あつて、お暇の儀を願ひしならんが、我々兄弟は義を金鐵、
林左　君へ忠勤、
兩人　盡す心底。
大內　いや、忠勤は盡されまじ、日頃よりしてそち達が弓馬槍劍に秀でしものを甲乙つくる談話にも、今江戸表の生田家には山本流の弓術を鍛練なせし壯士あり、其名は澤井又五郎と申し、則ち斯くいふ林左衞門が一人の甥なりと、度々賞讃いたせしが、左すればそちは伯父ではないか。
　　ト是れにて林左衞門思入あつて、
林左　仰せの如く又五郎儀は拙者の甥にござりますれど、彼れは生來身持惡しく、放蕩無賴にござりまするゆゑ、伯父甥たりとも音信不通、是れまで疎遠に打過ぎますれば、渡邊靱負を害せしとて、伯父が成敗いたしまする權利とてもござりませず、靱負が最期をいたむのみ、たゞ〳〵氣の毒に

存じまする。

大内　いや、成敗はならずとも、甥の又五郎に力を添へ、助太刀せずば相成るまい。

林左　假令内縁ござりまするとも、放蕩無頼の又五郎めに、

甚八　助太刀などをいたしまする、所存は毛頭ござりませぬ。

大内　いや、それにては不信義ならん、志津摩方には政右衛門と申す一騎當千の武術者あつて、義兄の誼助太刀なせば、所詮及ばぬ又五郎、それを存じて伯父甥の間柄なる其方が、手をつかねては居られぬ筈ぢや。

林左　そりやはや、澤井又五郎がまことの所業で志津摩の爲めに討たれますると承はれば、手をつかねては居られませぬが、

甚八　恩人と聞く靱負を害し、無道の所業と承知いたせば、討たれまするは自業自得、助太刀とては、

兩人　いたされませぬ。

大内　然らば問はんが、伯父甥の脫れぬ緣ある其方なれば、こたびの變を聞き及ばゞ江戸表へ罷り下り、よしなき澤井又五郎に助力いたすと噂ある、粋狂人たる旗本等に說諭いたして生田家の、怒りを鎭め、何故無事を計らはぬ。

林左甚八　さあ、其の儀は。

大内　縁者にあらぬ旗本すら、武道の意地に又五郎へ助力をいたす噂あるに、假令疎遠に過ぎしとて、日頃汝の口よりして賞讃なせし又五郎を、只今となり無道と嘲り、助太刀の儀を脱れるは、志津摩に助力の政右衛門を、恐れて信義を盡さぬか。

林左　何ゆゑあつて林左衛門、荒木如きに恐れませうや。

大内　然らば縁者の信義を盡し暇を願ひ、助太刀いたせ。

林左甚八　さあ、それは、

大内　汝等兄弟手をつかね、此度助太刀いたさねば、林左衛門は信義なしと旗本共に誹謗されん、左すればそちの恥辱は勿論、主たる予まで恥辱を受くるが、それでも暇を願はざるか、篤と思案をいたして見よ。

　　トきつといふ、是れにて林左衛門甚八顏見合せ、見込の違ひしこなしにて、

林左　はゝツ、恐れ入つたるそのお諭し、仕官の身ゆゑ君慮を憚り、御遠慮いたし居りましたが、斯く有難き君命を蒙りまする上からは、如何で猶豫をいたすべきや、拙者兄弟におきましてもお暇願ひ奉つる。

大内　すりや、弟甚八諸共。

甚八　はツ、拙者が爲めにも又五郎は、やはり伯父甥の間ゆゑ、助太刀いたして力を添へ、信義を盡すでござりませう。

大内　むゝ、それでこそ武の本文、予に於ても滿足なるぞ。

トよろしくこなし、上手の近習四人是れな聞き居て、

左門　櫻井殿にもお暇出づれば、

右膳　師匠と賴みし人々にも。

彌源　やはり我々同樣ゆゑ。

宇源　定めて肩身が狹うござらう。（ト下手の四人へ當付けていふ。）

下手四人　むゝ。

大内　申し附けし品、これへ持て。

ト呼ぶ、奥にてはツと答へ、袴裝の近習一人、白銀を載せし白木の臺を持ち出來り、大内記の前へ出す、大内記指圖して、林左衞門の前へ持ち行かせる。近習は辭儀をして奥へはひる、林左衞門思入あつて、

林左　此の御品は、
大内　暇のしるし其方へ、餞別を遣はすぞ。
林左　すりや御餞別を賜はるとな。はゝッ有難く頂戴仕つりまする。
　ト白木の臺を取つて押し戴く、甚八こちらへも呉れさうなものだといふこなしあつて、
甚八　こりや二人分、込んであるのか。
林左　こりや。（ト疊を叩いて目顔で知らせろゆゑ、）
甚八　はゝッ、有難く頂戴いたしまする。
　ト遲れて受けをなす、此時、花道より以前の彌三衞門先きに、政右衞門上下にて出來り、舞臺を見て、花道に住ひ、兩人平伏なす、大内記見て、
大内　おゝ、政右衞門出仕なせしか。
政右　はゝ、はッ。
彌三　火急のお召しに取り急がせ、召連れましてござりまする。
大内　おゝ、待つて居つた、是れへ參れ。
政右
彌三　はッ。

ト辭儀をなし、合方きつぱりとなり、兩人腰を屈めながら舞臺へ來り、下手へ控へる。

大内 彌三衛門大儀であつた、政右衛門是れへ進め。

政右 はッ。（ト猶豫して居る、）

彌三 君のお許し、お進みなされい。

政右 然らば御免下さりませう。（ト彌三衛門に會釋なし、林左衛門の上座へ住ふ。）

大内 老臣共より差出せし、暇願ひのそちが願書、昨日披見いたせしが、測らざる此度の取込み、愁傷の程察し居るぞよ。

政右 身に餘りたる其の御諚、恐れ入りましてござりまする。

大内 予も其方に暇を出すは本意なき事と思へども、武道の信義舅の因み、止むを得ざれば詮なきこと、願ひの趣き聞き濟み得さする、心置きなく發足いたせ。

政右 はゝッ、御當家樣へ仕へてより君祿汚すばかりにて御奉公振も仕つらず、餘儀なき次第にお暇を願ひまするは政右衛門、心苦しく存じますれど、御諚の如く止むを得ざる凶變出來いたせしゆゑ、尊慮に悖る不忠の罪、偏に御許容下さりませう。（ト林左衛門思入あつて、）

林左 荒木氏にも其後は掛け違つて御意得ませぬが、測らざる舅の御最期、元を糺せば手前が甥たる又

五郎めが不所存より、起りし事と承りお氣の毒に存じ申す。

政右　これは〳〵櫻井氏、御前體ゆゑ政右衞門、御挨拶も仕つらず、失禮御免下されい。

林左　然らばいよ〳〵其許には、志津摩殿に力を添へ、助太刀めさるゝ御所存なるか。

政右　如何にも緣者の誼に依り、止むを得ずして又五郎殿を、弟志津摩に討たせる所存。

甚八　又われ〳〵は我が君より、お暇賜はり又五郎へ助太刀いたすも伯父甥と、從弟同士なる因みゆゑ、武道の習ひと御容赦あれ。

彌三　すりや櫻井氏兄弟にも、澤井へ助太刀召さるゝよな。

ト是れを聞き、政右衞門丁度よいといふ思入にて、

政右　それぞまことに好機會、豫て其許君へ願ひ、斯くいふ身共と眞劍の勝負をなさんと望まれしが、互ひに仕官の身の上に、兩虎爭ふ其時は、必ず一虎は命を失ひ、殘る一虎は手負となれば君へ對して不忠なりと、期を延ばせしも時至り、互ひに浮浪の身となれば、憚る所更になし、いつ何時でもお相手いたせば、出會ふ所が運定めとお覺悟あつて然るべし。

ト是れにて林左衞門、甚八氣味惡きこなしあつて、氣な替へ、

林左　あゝ、よくぞ言はれし政右衞門殿、そりや此方より望む所、此後の出會をお待ち申すぞ。

甚八　然らば途中で出逢はぬやうに、いやさ、途中で出會ふやうに、勝負の場所を極めねばならぬ。
大内　暇くれたる上からは、櫻井兄弟用事はない、心任せに退出いたせ。
林左　左様ござらば上意に随ひ、
甚八　最早退出仕つります。
伴藏　せめて我々四人の者は、
傳吾　子弟の因み御城下まで、
專八　お見送りの儀がいたしたく。
權六　暫時のお暇、
下手四人　願ひまする。
大内　おゝ、其儀はそち達隨意にいたせ。
左門　何さま是れでは門弟衆も、
右膳　どうやら肩身が、
上手四人　お狹うござらう。（ト當付けていふ。）
下手四人　えゝ、言はせて置けば。（トきつとなるを留めて、）

林左　あこれ、然らば君にも、

甚八 林左　御機嫌よろしく。

大内　そち達兩人、劍難を。

林左 甚八　や。

大内　いやさ、堅固にいたせ。

林左　はゝッ、有難く、

林左 甚八　存じまする。

ト靜かなる合方になり、林左衞門甚八は皆々へ辭儀をなし、林左衞門先きに甚八件の白木の臺を持ち、下手の諸士四人跡より附いて花道よき所まで行き、林左衞門振返り、甚八と顏見合せ、

林左　思ひ寄らざる不意を喰ひ、餘程勝手が違うたわえ。

甚八　それに附けても此の餞別、餘り貫目が輕うござる。

林左　いや、貰はぬより增しであらう。

ト兩人不承々々に先きに立ち、諸士四人附いて花道へはひる、彌三衞門前へ出で、

彌三　心よからぬ櫻井兄弟、こたびの儀に附きそれとなく、お暇を出し遊ばされしは、聰明叡智の君の

大内　御賢慮、恐れ入りましてござります。

先頃よりして眞劍の勝負を願ふは政右衛門が、仕官の身ゆゑ予へ憚り、辭退いたすを附込む曲者、心憎しと思ひしゆゑ、今日暇を遣はしたれば、出逢ひ次第に切捨て、日頃の宿意を晴らすがよいぞ。

政右　まことに以て君の御賢慮、有難く心得まする。（ト大内記小姓に持たせし袋入の刀を取り、）

大内　こりや政右衛門、暇のしるし其方へ、餞別を遣はすぞ。

ト差出す、政右衛門はツと前へ進み、刀を取つて押戴き、

政右　すりや御祕藏のお刀を、拙者へ拜領仰せ附けられ、

彌三　御餞別に賜はるとな、

大内　差し古びたれど不動國行、不動の文字は動かず動ぜず、大丈夫なる政右衛門が魂にして相當なれば、暇の形見に遣はすぞ。

政右　はゝツ、身に餘りたる御賜。

彌三　推擧いたせし拙者まで、

政右　有難く存じ、

兩人　奉つります。（トよろしく辭儀をなす。大内記思入あつて）

大内　暇の儀につき政右衞門に、尋ねたき仔細あれば、彌三衞門を始めとして、一統暫く退座いたせ。

彌三　はツ、委細承知、

彌三
四人　仕つります。

ト彌三衞門は下手、近習四人は上手へはひろ、大内記四邊を見廻し思入あつて、

大内　政右衞門、近う。

政右　はツ。

ト前へ進む、双方氣味合の思入、是れなきつかけに誂への合方になり、

大内　餘人を遠ざけ其方に、尋ぬる仔細は別儀でない、當家へ抱へ主從の因みは結べど劍道の師と賴みたる其方ゆゑ、今日暇を遣はすは右の腕をもがるゝ思ひ、殊更多年望みたる、柳生の家の三ケの傳授、未だ會得をいたさゞれば、汝が當家にあらん限り、教導に預らんと、思ふ甲斐なく此度の凶變、武道の表内緣の因みに依つて止むを得ず助太刀なして義弟たる、志津摩に孝道立てさせんと、暇の願ひ否み難く、直ちに聞き濟み得さすれど、殘り惜しきは其往古彼の天竺の檀特にて悉多太子に別れたる、舍匿童子の留別も斯くやと思ひ當りしなり、信義があらば武を貫き、首尾よく本意

を達せし後再び當家へ立歸り、未熟の我を教導なし、そちの目鏡に叶ひなば三ケの傳授を許しくれよ。神に祈りて其方の、歸參を樂しみ待つて居るぞよ。

ト思入にていふ、政右衞門ほろりとせしこなしあつて、

政右 はッ、勿體なき其の御諚、不鍛錬なる拙者めを左まで御賞美遊ばされ惜しませたまふは如何ばかりか、此の身の面目是れに過ぎず、仰せなくとも政右衞門、不肖の身にて今日までの御扶助を受けし御禮に、三ケの祕密を御前樣へお讓り申す心得にて、昨夜よりして今朝へ掛け、認め置きし傳書の一卷、篤と御披見下さりませう。

ト懷中より紫袱紗に包みし一卷を出し、大内記の前へ出す。

大内 むゝ、すりや未熟なる我にでも、此の一卷を熟覽なせば、三ケの傳授を得らるゝか。

政右 あいや、なか〱左にあらず、假令是れなる傳授の一卷御熟覽遊ばすとも、九死を出でゝ一生を得まする程の術なくんば、容易に會得は叶ひませぬ。

大内 して又それを會得なすには、如何いたして習ひしものぞ。

政右 其儀は當春お櫓にて雪見の御酒宴ありし節、君の御武術試しまして折があらば御傳授なし、お許し申さんと豫ての心得。（ト是れにて大内記思入あつて、）

大内　さてはあの節其方が、大醉なして前後を忘れ、更に他愛のあらざりしを我戲れに手槍にて、たゞ一突きと突き掛けしを。

政右　祕術を以て身を躱し、一二度四五度我が君に空をお突かせ申せしが、則ち三ケの傳授の内、水の月と名附けし祕術。

大内　して又あの節其方には、扇子を持つて立向ひ、僅尺にも至らざる扇子の蔭へ身を隱し、更に五體の見えざりしは、

政右　あれぞ柳生の極意にて三ケの内の一つなる、木の葉隱れと名附けたる、祕術と御會得遊ばされよ。

大内　して〱不審に思ひしは、槍の穗先きを兩の手にて平目に押へ動かせず、實に磐石を貫く心地。

政右　あれぞ眞劍白刄取りと名附け、三ケの内の祕密の傳。

大内　すりや其の傳授を許さん爲め、槍をもぢ取り又候や、我を目掛けて突き出せしか。

政右　あの節君の御武術が日頃に十倍增したるゆゑ、九死を脫れたまひしは、さてこそ傳授をお許し申す時至れりと政右衞門、感悅いたしてござりまする。（トよろしく思入、大内記悅ばしきこなしにて）

大内　おゝ、あの折こそ大内記もよしなき戲れいたせしと、今に汝を怖しく思ひ居りしが其の武術、如何いたして脫れしか、手練の前後を失念せり。

政右　則ち是れなる一巻に、巨細に認めござりますれば、いざ、御熟覽遊ばしませう。

大内　謹んで熟覽なさん。

ト是れより笙の入りし合方になり、兩人立上り、大内記は上手、政右衞門は下手の　襖を明け拂ふ、是にて三方打拔き奥殿の遠見になり、兩人元の座へ住ひ、大内記は褥を拂ひ塵手水を遣ふ、政右衞門は件の一巻を開き大内記に見せる、大内記見て會得し難き思入、政右衞門槍を突掛けて見ろといふこなし、大内記心得、槍を持ちし心にて政右衞門へ突掛けるこなし、政右衞門扇子にて受留めるこなしよろしく、大内記成程といふこなしあつて、又一巻の奥を繰出し見る、政右衞門指圖して、槍を突きかけろといふこなし、大内記よろしく、政右衞門扇の蔭へ五體を隱せしこなし、大内記突き入れぬ思入あつて、一巻を見て會得なし、政右衞門に突き掛ける、ト、政右衞門扇子を口に銜へ、兩手にて槍の穗先きを押へしこなしにてぢつと思入、大内記成程と感心のこなしあつて下に居る、政右衞門試合の形を解き、身をへりくだり、

政右　とくと、御會得遊ばしましたか。

大内　むゝ、(ト領くを木の頭)過分々々。

ト悦ばしきこなし、政右衛門はハッと平伏なす、此の氣味合、鳴物なしにてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕引きつけると、調べにて、道具廻しにて、直に引返す。

（荒木若黨部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方折廻し一間の障子屋臺、正面上手一間の押入、此の下手一面白地小形の張壁、手拭掛けの竿などあり、長押の所一間の棚板、粗末なる刀掛など取り附けり、下の方板羽目、正面中窓の後を見せ、總て荒木宅若黨部屋の體、爰に以前の武助、孫八着流しにて住ひ、兩人にて一つの硯箱を引張り合ひ、書置を書いて居る、此の見得風の音、床の送りにて幕明く。

〽暮れ近き夏の日足も西へ落ち、影も小闇き兩人が下る東の供さへも、叶はぬ身とて命毛の短き筆に書き殘す、文字も涙の薄墨や、取合ふ硯の海ならで、深き思ひのかこち言。

ト此内兩人書置を認め居る、床の合方になり、

武助　これ孫八どの、こなたはわしの眞似をして、書置を殘し死ぬといふが、それは無益なことであらう、さつきこちらの旦那樣や志津摩樣の前へ出て、此身の素性を語りし通り、わしは主家を浪人

してから諸方を彷徨ひ路用に盡き、妹諸共桑名にて既に命を失ふ所を旦那樣に助けられ、其の上ならず劍術の御指南受けて長の年一方ならぬ御恩があれば、今度のお供が叶はねば所詮生ては居られぬゆゑ、死ぬと覺悟を極めたが、こなたは僅の縁によりこちらのお內へ住込めば、武助の恩義に比べては遙かに輕い恩なれば、旦那樣の異見に附き、どうぞ命を全うして、兄弟分の誼には香華なりと手向けて下さい。又折入つての賴みといふは、一人の妹のあのお賤、こなたの氣には入るまいが、あれ程思つて居ることゆゑ、始終はこなたの女房に持ち、面倒を見て遣つて下さい。其替りには冥土からこなたが立身するやうに、きつと祈つて報いをしますぞ。

〽事を分けたるおとゞいの賴みも承知なり兼ねて、孫八傍へ進み寄り。（孫八思入あつて）

孫八　これ武助どの、是れまでこなたの言ふ事を背いたことはござらぬが、今日ばかりは其賴み聞き濟む譯にはなりませぬわえ。

武助　そんならやつぱり諸共に、死ぬと覺悟を決してござるか。

孫八　假令新參古參でも受けし恩義に變りはない。（ト合方きつばりとなり）成程こなたの縁により、わしは後から此のお內へ若黨奉公に住み込んで、內弟子同樣是れまでに主人の恩を受けたれど、こなたと違ひ不器用な生れ附ゆゑ人並に、劍術柔術を敎へ込むはなかなか容易なことではない、全

くこちらの旦那樣が、武助と互角に使へるやうに仕込んでやると仰しやつて、御丹精をなさればこそ、さつきもこなたと志津摩樣へ二人掛りで立合つても、どうやらかうやら不覺も取らず、互角の勝負で濟んだのはみんな御主人のお骨折、其の大恩を餘所にして今度のお供が叶はぬとて、おめ／＼生きて居られうか、死んで忠義の潔白を立てる心に定めたからは、こなたも生きては居られまいが、わしも覺悟をして居るから、どうぞあの世へ連れて行つて下され。

〽思ひ詰めてはなか／＼に、動がぬ心止め兼ね、武助も今は是れまでと、（ト武助思入あつて、）

武助　おゝ其の氣なら是非がない、丁度折よく旦那樣や御新造樣がお留守の內、二人諸共自殺して御主人方の影身に添ひ、お供をすると仕ようわえ。

孫八　おゝそれでこそ賴もしい、此世で恩が報ぜられずば、あの世で恩を返さうと、思ふ二人が魂魄ゆゑ、此世に止まり御主人の、手助け位は出來るであらう。

武助　思ひ廻せば其の昔、富士の裾野の假屋にて、曾我兄弟が祐經を討取る供を願つたる、鬼王團三に似た二人。

孫八　それは故鄉の鎌倉へ、曾我兄弟から賴まれし形見送りに是非なくも、死ぬに死なれぬ憂き別れ。

武助　是れは二人の書置を、形見に殘す死に別れ。

孫八　荒人神に異ならぬ、主人のお歸りなき内に、

武助　少しも早く、

兩人　さうぢや〳〵。

〽鬼王團三兩人に同じ思ひと書置の、かたみを左りへ卷き納め、封ずる糊の道しるべ、空に
啼く音の時鳥、

ト此内兩人書置を卷き、小皿の糊にて封をする、此留り、日覆にて時鳥笛聞える、兩人思入あつて、

武助　曾我兄弟の討入りは、皐月の末と聞きつるが、

孫八　今は卯月の末なれば、同じ曇りし夕空も、

武助　五月雨ならで、卯の花を、

孫八　下す時節の雨もよひ、

武助　八千八聲啼き盡し、

孫八　血を吐き死する時鳥、

武助　死出の田長と聞くからは、

孫八　啼くは冥土へ、

兩人　導くなるか。

〽諸肌脱いで兩人が、互ひに刀拔き放し、既にあはやと見えたる所へ、

ト此内武助は上手、孫八は下手にて襦袢肌ぬぎになり、刀を拔き手拭を卷き持ち、腹へ突立てようとする、此前方よき程に上手の障子を明け、以前の志津摩窺ひ居て、此時つか〳〵と出で、双方をよろしく留めて、

志津　死ぬに及ばぬ兩人とも、無益の最期いたすまいぞ。

〽止むる志津摩を見てびつくり、

武助　志津摩樣には何時の間にか、樣子を聞いてござりましたか。

孫八　無益の最期とおつしやりますが、所詮お供が叶はぬゆゑ、

武助　切腹なして二人が魂魄、御主人樣の影身に添ひ、

孫八　こたびのお供をいたしますれば、必ず無駄ではござりませぬ。

志津　いや魂魄にて我々の供をなすより存命にて、こたびの供をいたすがよい。

武助　でもお聞き濟みござりませねば、

孫八　所詮お供は叶ひませぬ。
〽又も斯うよと見えければ、（ト兩人死なうとする、此時上手障子の內にて、）
政右　其の心底を見る上は、二人も供に連れるであらう。
武助
孫八　え ゝ ゝ ゝ 。（トびつくりなす、）
打ち驚き、
〽見返るあなたの奧の間より、退出なせし政右衛門、心勇みて立ち出づれば、兩人これはと
ト此內上手屋體の內より、以前の政右衛門袴 裝に着替へ、一本ざしにて出來り、上手へ住ふ、是れ
にて武助孫八肌を入れ形を改め、
武助　すりや我々が自殺とまで、覺悟をせしを不便に思はれ、
孫八　兩人共に御出立のお供にお連れ下さりまするか。
政右　おゝさ、如何にも供に連れるであらう。（ト合方になり、）敵又五郎へ助太刀なすは、名に負ふ天下
の旗本ゆゑ助太刀の者多人數ならん、左すれば我等一人にて如何程働くとも、大悲の化身にあら
ざれば、兩の腕にて防ぎ難し、日頃忠義な兩人ゆゑ志津摩に助力いたすやう賴みたくは存ずれど
誰しも惜しむ一命を捨つる覺悟の出立に、もし敵討の期に臨み、もし變心でもいたされなば、却

つて害を引出さんと、二人の底意を試さん爲め、先刻志津摩と申し合せ、供には連れぬと言ひ渡し、其動靜を窺ひしに、こたびの供が叶はねば、一命捨てんと健氣な覺悟、篤と見屆け祝着せり、望みに任せ供許すぞ。

武助　すりや、あの、いよ〳〵兩人を、
孫八　お供にお連れ下さりますとか。
武助　え〻、有難う、
兩人　存じまする。

〽小躍りなして兩人が、悅び合ふぞ健氣なる。（ト兩人よろしくこなし）
〽折から奥の障子越し、立聞く主從立ち出で〻、
ト上手の障子屋體より以前のお谷先きにお賤、跡より二幕目の林平、着流し一本ざしにて附添ひ出來り、皆々よろしく住ひ、

お谷　始終の樣子は聞きましたが、一命に替へ兩人とも志津摩に助太刀したいとは、天晴見上げし志し、禮は詞に盡されませぬ。
お賤　御新造樣のお詞を承はるに附けましても、此身が男でござりますなら、やはり二人と同じやう、

林平　お供がしたうござりますが。敵討の御出立に女を連れては行かれぬと仰せられゝば是非なき事、何卒男子の端くれゆゑ、拙者も此度御出立のお供にお連れ下さりませ。

政右　いや其方は賤諸共、谷を誘なひ江戸へ歸り、世に便りなき老母の世話いたしくれるが敵討の供に立つより勝りし忠義、心を見込んで賴みおくぞ。

林平　すりや拙者めは、御兩所同樣、お供にお連れ下さりませぬか。

志津　女ばかりで江戸表へ、下るは旅中が氣遣はしければ、其方供をいたしくれよ。

林平　どちらのお供をいたしまするも、忠義の道と存じますれば、承知いたしましてござりまする。

政右　それにて萬事手分整ひ、

武助　よい御都合でござりまする。

〽お暇出でゝ主從が、勇む心に引替へて、妻は夫に立別れ、辛き名殘りに打萎れ。

トお谷愁ひのこなしあつて、

お谷　此身の心にたくらべても傷しいのはお賤、旦那樣へもお話し申し、近々それなる孫八と夫婦になさんと言ひ聞かせ、悅ばせしも少しの間、思ひがけなき取込みに、祝言所の騷ぎでなく、定まる

緣もそれなりに結ばぬ儘で別れるとは、嘸や本意ないことであらう。

〽身につまされて愛しやと、餘る情のお詞に、（トお賤思入あつて、）

お賤　いえ本意ないとは存じませぬが、御新造さまのお心をお察し申して見ますれば、まだ〳〵こんな事ではないと、思ひあきらめ居りまする。

〽口にはいへど目の内に、潤む涙の憂き思ひ、差しうつ向いて詞なし、荒木は勇氣引立てゝ

ト此内お賤孫八へこなしあつて、愁ひの思入、政右衞門此體を見て、

政右　孫八お賤兩人も、今は本意なく別るゝとも、やがて目出度く本意を遂げ、歸國いたさば改めて、此の政右衞門が媒介なし、夫婦となして遣はすぞ。

〽傍に武助が聞く嬉しさ。

武助　あれを聞いたか、これ妹、恐れ多くも旦那樣が、御媒介なし下さると冥加に餘る御一言。

孫八　やがて目出度く歸國を樂しみ、我々二人に成りかはり、お主のお世話を賴みますぞ。

お賤　どうぞお前もお替りなく、達者で戻つて下さりませ。

お谷　それに附けても又五郎を、旗本衆が腰押しなし、助太刀すると聞くからは、

志津　何れ相手は多人數にて、容易なことでは討ち取れまじ。

林平　何卒首尾よく御本意を、お遂げなされて下さりませ。

政右　〽未前を計り主從が、氣遣ふ體に莞爾と笑み、（ト政右衛門思入あつて、）いやく必ず心配すな、假令何人助太刀が、敵に附添ひ居らうとも、此の政右衛門が引受けて首尾よく本意を遂げさすれば、恐るゝことはかつてなし。

武助　して又是れより旦那樣には、當所をお立ちなされまして、

孫八　何れへ出でゝ又五郎の、所在をお尋ねなされまするな。

政右　されば先刻御前にて、お暇出し林左衛門、必ず澤井の隱れ家へ志さんと存ずるゆゑ、彼れを追掛け浪花へ出でん。

お谷　又われくは、大和路より、

お賤　伊勢路へ出でゝ東へ下り、

志津　道にて敵の所在を聞かば、

林平　早速お知らせ申しまする。

政右　お暇出でし上からは、何れ明朝發足と、

お谷　思へば今宵が、當地の名殘り、

志津　萬事手落のなきやうに、
武助　心靜に、
孫八　旅のお支度、
林平　御用を仰せ附けられませ。
政右　名殘りの酒宴を、開くであらう。

へ立つ鳥跡を濁さゞる、教へを守る出立に、鳥の啼く音や鐘の聲、
ト此時本釣鐘を打込み、日覆にて時鳥笛聞える、皆々思入あつて、

お谷　卯月の末といひながら、
お賤　おち返り啼く時鳥、
武助　最前死出の導きと、
孫八　思ひし鳥も今聞けば、
林平　鳴り響きたる鐘諸共。
志津　名をも雲井に、
皆々　上げる吉兆、

政右　はて、悦ばしき、（トにつたり笑ふを木の頭、）幸先きぢやなあ。

〽祝ふ門出ぞ。

ト床の三重、本釣鐘にて、皆々引張りよろしく、

幕

六幕目

備前町市藏内の場
中橋半兵衞内の場

〔役名――道中師伊豆屋重兵衞、町奴一時半兵衞、夢の市藏、夢の子分曉長吉、同宵寐の宗治、山野四郎左衞門、中間丑内、夢の子分幻長次、同寐言の藤藏、同手枕五郎吉、同鼾の根太郎、中間武太平、同九間八、一時の子分兼松、同權太、小奴千太、家主與九右衞門。市藏女房お蝶、半兵衞の女房お勝、宗治母おさが、子守お民等。〕

（市藏内の場）――本舞臺四間常足の二重、向う暖簾口上手間平戸の戸棚、續いて茶壁、下手鐵網の戸の臺所戸棚、此前に總銅壺の立派な竈、釜、茶釜、藥罐を飾り、上の方一間障子附屋體、いつもの所門口、下手臺所口、蝶の紋附きし腰障子、此前に用水桶、櫻田備前町といふ木札を打ち、總て夢の市藏内の體。爰に長次、藤藏、五郎吉、根太郎何れも着ながし白足袋子分のこしらへ、白木の臺へ載せし目黑不動の護摩札を持ち立掛り、千太の奴盆へ茶碗を載せ茶を出して居る見得、本町二

丁目飴屋の唄にて幕明く。

千太　今日はみんな何處へ行つたのだ。

長次　親分が此間から瘧を煩つて寐て居なさるから、早く病氣の直るやう、今日は目黒の不動樣へお百度を上げに行つたのだ。

千太　目黒へみんな行つたのなら、おいらも一緒に行きたかつた。

藤藏　手前を一緒に連れて行つて、瀧へ掛けて遣りたかつた、此間からの雨降りで滅法瀧が强かつた。

五郎　天窓を打たれた其時は、一度で髷がはじけてしまひ、目が廻るほど痛かつた。

根太　それにほんとの淸水だから、沁みわたる程冷たくツて、どこもかしこも縮みあがつた。

千太　それで丁度人並だらう、

根太　又そんなことを言やアがるか。（ト根太郎千太の天窓を打つ。）

長次　こいつア久保町の原へ出て居る豆藏の悴でゞもあつたか、よくお喋べりをしやあがつては、天窓をなぐられやアがる。

藤藏　手前はいつそ手廻りより、大神樂の荷擔ぎになつた方がよからうぜ。

千太　人の事よりお前達こそ、一文獅子になりやあいゝ。

藤藏　なに、一文獅子になりやあいゝとは。
千太　みんな面がひよツとこや外道だから、面入らずだ。
藤藏　餘計なことを言やあがるな。（ト天窓を打つ。）
五郎　それ見やあがれ、又打たれた。
根太　もう一ツお負けに毆つてやらう。（ト根太郎又天窓を打つ、千太武者振り附くを長次留めて、）
長次　これさ、もういゝ加減にしねえのか、不斷と違つて親分が、瘧を煩つて寐て居なさるから、奥へ知れねえやうにしろ。
ト右の唄ばた〳〵になり、下手より四幕目の子守お民掻巻で抱兒を背負ひ逃げて出來り、跡より與九右衞門羽織着流し、家主のこしらへにて、小錢を百持ち追掛け出來り、
與九　これさお民、何もそんなに逃げるには及ばない。
お民　それでもお前さんがわたしを捉まへて、きざなことをおつしやいますから。
與九　なに、きざなことをいふものか、よく蝶坊の守りをするから、褒美に錢を遣らうといふのだ。
お民　いえ〳〵そんなものは入りませぬ。
與九　そんな野暮を言はないで、髷紐でも買ふがいゝ。（ト家の中へ追込むを皆々立ち掛り、）

長次　もしく\大家さま、お前さんは年にも恥ぢず、こんな子供を追掛けずと、地主のお乳母がようござりますぜ。

藤藏　ありやあ產れが相模者、かぶりを竪にふる方だから、きつと出來るに違ひない。

五郎　お民ッ子を追掛けるより、お乳母に當つて見なさる方が、

根太　外れッこなしで割事だ。

お民　お前方が言はないでも、大家さんは婆アやどんを疾うに甜めて居なさいます。

長次　それぢやあもうお甜めなすつたかえ。

千太　大家さんが襤褸ッ買だから、お上さんは蠑螺のやうに、天窓中が角だらけだ。

與九　これさ、手前達はおれが店子の市藏の子分だのに、そんなに惡く言つてくれるな、こんなでぽちん天窓だがどこか女好きがすると見えて、何のかんのと持ち掛けられて鬱陶しくてならねえのだ。

長次　そりやあお前さんが小金があるから、それを見當に惚れるのだ。

藤藏　男に惚れると思ひなさると、大當違ひだから、さう思ひなさい。

五郎　お前に眞底惚れて居るのは、內のお上さんばかりだから、

根太　氣を揉ませずと大事になさい。

與九　そんなことをいふけれど、向うでおれに入り揚げるのを、手前達は知らねえからだ、一文錢が生爪かといはれる大家の與九左衞門、錢にならねえことをするものか。
長次　あんまり酷い受けさせやうだ、何ぞ大家さん奢りなさいな。
與九　お民に遣らうと思つた錢、是れがみんなへ受賃だ。（ト以前の百を出す、）
五郎　四人の中へたつた百かえ。
根太　此しみッたれに惚れるといふのは、
與九　實におれも不思議だと思ふ。
藤藏　今年や南瓜の當り年かね。
皆々　はゝゝゝ。（ト合方になり、奥よりお蝶世話女房好みのこしらへにて出來り、）
お蝶　みんな歸つたか、今日は大きに御苦勞だつたの。
長次　幸ひ今日は廿八日、御緣日ゆゑ目黑へ行き、お百度を上げて參りました。
藤藏　早く瘧の落ちるやう、不動さまへ護摩を上げ、
五郎　お札を頂く其時に、お御鬮を取つて參りましたが、
根太　大吉でございましたから、大丈夫でございます。

與九　然し大吉は凶に返ると、よく人がいふではないか。
長次　これさ、詰らねえことを言はつしやるな。
藤藏　凶に返つてたまるものか。
五郞　此の餅花は坊つちやんの、
根太　お目ざに買つて參りました。（ト お札と餅花を出す。）
お蝶　ほんに是れは綺麗だから、坊に見せたら悅ぶだらう。
お民　どれ、見せて上げませう。（ト お民取つて背中の子に見せる。）
お蝶　これ千太や、今しがた爰へ誰か來たの。
千太　あい、蝶々賣の六兵衛さんが、親分の見舞に來ました。
お蝶　よく毎日缺さずに、親分の見舞に來るが、感心な人だの。
長次　あの爺さんも可愛さうに、宗治が矢部の屋敷に居るので、それを氣病に娘が煩ひ、
藤藏　久しく見世へ出ねえから、嘸食ふに困るだらう。
五郞　際物賣りでいそがしからうに、斯うして毎日見舞ひに來るのも、
根太　喧嘩の初めが自分ゆゑ、氣の毒に思ふからだ。（ト 此內お民抱兒をおろし、）

お民　坊ッちやんがお睡むになりました。
お蝶　奥に小蒲團が出て居るから、そつくり寐かして置いてくんな。
千太　寐かす方が先きへ寐るだらう。
お民　憎まれ口をおきゝでないよ。
與九　その寐た所を。(ト煙管を逆に口へ入れ、)あつゝゝゝ。
お民　よい氣味でござんすなあ。(ト右の合方にて、お民抱兒を抱き奥へはひる。)
お蝶　お前方も草臥れたらう、湯へでも行つて來るがいゝ。
長次　湯へ行くよりやあ二階へ行つて、一杯やりたうござります。
お蝶　階子の下に昨日貰つた、樽があるから勝手に出しな。
藤藏　樽から捻つて出すのぢやあ、跡が見られなくツて有難い。
お蝶　呑むのは幾ら呑んでもいゝが、内の人が寐て居るから、間違ひをしておくれでないよ。
五郎　愛宕の喧嘩の濟まねえうちは、
根太　常談にも仕やあしません。(ト右の合方にてわや〳〵と、四人先に千太も附いて奥へはひる。)
與九　成程人を遣ふは遣はれるで、あの荒ッぽい人達を、遣ふは骨の折れたことだ。

お蝶　實にほと〳〵いたしますよ。

ト合方ばた〳〵になり、花道より、お勝世話裝陸尺の女房のこしらへにて走り出來り、直に舞臺へ來て、門口を明け、

お勝　姉さん、そこに居なさんしたか。

お蝶　誰かと思つたら、お勝さんか。

與九　あわたゞしい、どうしなすつたのだ。

お勝　わたしや悲しい目に逢ひました。(ト手拭を顏へ當て泣く)

お蝶　どんなことがあつたのか、大家さんだから御遠慮はない、譯を早く話してお聞かせな。

ト懷から去狀を出し、

お勝　これ、此通りわたしや今日、去狀を附けて去られました。

お蝶　え、そりやまあどういふことがあつて。

お勝　科もないのに去られたゆゑ、悔しくつて〳〵なりませぬ。

ト泣き伏す、お蝶合點のゆかぬ思入、此時奧より市藏むしりの鬘瘧病のこしらへ、大羽織を引掛け出て、

市藏 なに、半兵衞がお勝を去つたと。(ト前へ出る、お蝶座蒲團を敷き、市藏此の上へ住ふ。)
お蝶 勘辨強い半兵衞さんが、去るといふのはどういふ譯か。
市藏 犬も食はねえ夫婦喧嘩、詰らぬことを言ひ募つて、それから出來たことだらう。こりやあ大家さん、御挨拶もいたしませぬ。
與九 朝晩に來る此の家主、何の挨拶に及ぶものか。
市藏 何にしろ去られた譯を、氣を落着けてとつくりと、おれに話して聞かせなせえ。
ト合方きつぱりとなり、
お勝 譯といふは外でもない、此間から癇が起り何かに附けてわたしへ小言、男は出先きで腹の立つ事があると内へ歸り、誰でも女房に當るゆゑ、何を言つても柳に受け、さはらぬやうにして居るのに、今朝の出掛けに魚屋が來たら、鯛を買つて置けと言ひ附けては居たけれど、生憎不漁で鯛がないゆゑ買はずに置いたを腹を立て、なぜ不斷來る魚屋が持つて居ないことならば、土橋へ行つて見て來ない、總別おれが言ふことを何でもうぬは用ひない、そんな女房はいらないからたつた今出て行けと、何時にない無理難題、隣りや向うで聞き附けて詫びに來て下さんしたが、言ひ出したら片時でも待たない一時半兵衞だ、後ともいはず出て行けと、誰がいふ事もきかぬゆゑ、

留めにはひつた長屋の衆も持餘して、備前町の親方の所へ行きなすつて口を添へて貰ひなさいと、皆さん方に勸められ、お取込みのある中も知つて居ながら參りましたが、實はさつき身でも投げて、死なうかと思ひました、今日去られたは此譯ゆゑ、外に仔細はござんせぬ。

お蝶　そりやまあ危ないことであつたが、よくこつちへ出ておいでだ、それにしても合點の行かぬは、不斷怒らぬ半兵衞さんが、そんなことを言ひなさんすのは、何か譯がありませう。

與九　此家主の鑑定では、男振といひ氣前といひ、女惚れのする質だから、藝者に情婦でも出來たのだらう。

市藏　大家さん、お前ぢやアあるまいし。

與九　さてはそれを知られたか、禿天窓で面目ない。

市藏　ちつとお前さんもお嗜みなさい。

お蝶　半兵衞さんは不斷から、そんな噂のない人ゆゑ、よもやそれぢやアありますまい。

市藏　僅な事を言ひがゝり、無理にお勝を去つたのは、（ト市藏喧嘩ゆゑだといふ思入。）てつきりそれに違ひねえ。

お勝　てつきりそれとは、内の人に、外に情婦でも出來ましたか。

市藏　そんな浮いたことぢやあねえ、何れおれが半兵衞に、とつくり異見を言つた上、お前を家へ呼び返すから今夜の所は里へ行つて、泊り掛けに行つた積りで、二三日泊つて居てくんねえ、何の越度もねえものを去るといふ法があるものか、あれが何と言はうとも、おれが決して去らせねえから安心して居るがいゝ。

お勝　お前さんがさうおつしやつて、下さいますならそれを力に、是れから里へ參りませう。

市藏　ちつとの內の辛抱だから、里に泊つて居てくんなせえ、女は心が狹いゆゑ、詰らぬことをくよくよと不了簡を出す者が、世間にいくらもあるけれど、決してお前は心を廣く、無分別を出しなさんな。

お勝　何科もなく去られたゆゑ悔しいとは存じましたが、內の人の心さへ解ければ恨みはござんせぬ。

お蝶　さういふことなら里へ行つて、內の返事を待つておいで。

お勝　いつもながら御厄介を、こつちの家へ持込んで、濟まないことでござります。

お蝶　何の、濟むも濟まぬもあるものかね、此れが他人といふではなし。

市藏　兄弟分の此のおれに、厄介になるは當り前だ。（ト お蝶奧へ向ひ、）

お蝶　これ、千太や〳〵。

千太　あい〳〵、（ト奥より千太出來り、）お上さん、何ぞ御用かえ。
お蝶　お勝さんを送つて來てくんな。
お勝　いえ、それには及びませぬ。
千太　どうで遊んで居りますから、わつちがお送り申します。
お勝　それぢやあ兄さん、お頼み申します。
市藏　案じずと、待つて居ねえ。
お勝　大家さん、御免なさいまし。
與九　氣を附けて行きなさい。
お勝　有難うござります。（ト門口へ出る、お蝶送りながら、）
お蝶　不了簡をお出しでないよ。
お勝　決して出しはいたしませぬ。
ト唄になり、お勝先きに千太附いて花道へはひる、跡見送り、
お蝶　ほんに、氣の毒なことだねえ。（トこちらへ來る。）
與九　時に市藏殿、瘧も日ぶるひになつたらば、もう落してもよからうに。

く落すと悪いといふので、今日まで我慢をしましたが、ふるふ時は冷汗が出る程苦しうござります。

お蝶　最う皆さんがよいといふゆゑ、早く落したうござりますが、さうしたならば矢部との喧嘩、一つよければ又一ツ、實に苦勞でなりませぬ。

與九　聞けば大勢仲人がはひつて居るといふことだが、喧嘩は留人のあるのが花、よい加減な所で負けなせえ。

市藏　外の者なら負けますが、ちつとこつちに遺恨のある、矢部ゆゑどうも負けられませぬ。

與九　それぢやあこなたは町奴の、意地を立てぬく所存かな。

市藏　立てにやあ顏が立ちませぬ。

與九　さう立てるよりわしのやうに、凹んだ方が丈夫だのに。（ト煙管をしまつて立ちかゝるゆゑ、）

お蝶　大家さん、お歸りなさいますか。

與九　今日は地面の賣買で、蕎麥があるから喰ひに行くのだ。

ト本町二丁目の唄になり、與九右衞門下手へはひる、此の唄を借り、花道より曉長吉羽織着流し、手廻りのこしらへ、風呂敷包みを提げ出來り、花道にて、

長吉　讃岐樣の御供をして御國へ行つて三月ばかり内を明けたが歸つて見ると、江戸にも種々な事があつて、先づ第一に親分が瘧で難儀をしなさるさうだ、早く行つて樣子を見よう。（ト本舞臺へ來り門口を明け、）親分、此の間は。（ト内へはひる、）

お蝶　おゝ、長吉さん、お歸りか。

市藏　昨夜人をよこしたが、何時手前歸つたのだ。

長吉　日が暮れて歸りましたが、近所の者に押込まれ、出ることが出來ねえので、大きに遲くなりました。

お蝶　此間からお前の歸りを、内でも待つて居なすつたよ。

市藏　どこへか歸りに廻つたか。

長吉　御國の事ゆゑ金毘羅さまから安藝の宮島錦帶橋、名高い所を見物して、それから歸りに大阪から京の芝居を殘らず見て、大きに金を遣ひやした。

ト此内風呂敷を解き、金毘羅の札、鯛味噌の曲物、湯元の細工持遊びを出し、

詰らぬ土産でござりますが、行つたしるしに金毘羅の火防の御札に難波の鯛味噌、湯元細工は坊つちやんへ、上げようと思つて買つて來ました。（トお蝶の前へ出す。）

お蝶　是れはいろ〳〵有難う、嘸蝶坊が悦ぶだらう。
市藏　それぢやあ箱根で湯治をしたか。
長吉　一日湯元へ逗留しました。
市藏　手前の居ねえ其内に、江戸にも飛んだことが出來た。
長吉　宗治が大きな間違ひを仕出來した事は友達から、昨夜委しく聞きました、それに附いて親分が瘧を煩つて居なさるさうだが、さうして起きて居なさるからは、少しはよいと見えますね。
市藏　とんだ病に取附かれて二月から難儀をするが、ふるふ時刻の來るまでは我慢で斯うして起きて居るが、不斷の力がすつかり拔けて、悔しくツてこてえられねえ。
長吉　嘸じれつたうござりませう、瘧は外の病と違つてふるふだけ震はねえと、跡の肥立が惡いといふが、もう落しなさる時分かえ。
お蝶　さつきお醫者樣がおいでなさつて、もう二三度ふるつたら、落してよいとおつしやつたよ。
市藏　その二三日を待つて居るのが、待遠でならねえから、早く落してしまひたいのだ。
ト奥よりお民出で、
お民　もしお上さん、お袋さんがお呼びなさいます。

お蝶　今參りますと、さう申してくんな。

お民　はい〳〵。（ト奧へはひる。）

長吉　おゝ其お袋さんで思ひ出したが、まださつぱりなされませぬか。

市藏　お袋もまだ直らねえのよ。

長吉　困つたものでござりますな。

お蝶　おつかさんがお呼びだから、長さんゆつくりお話しよ。

長吉　どうで急には歸りませぬ。

お蝶　どれ、お茶でも入れて上げようか。

ト合方にてお蝶土產物を持ち、奧へはひる、長吉四邊を見廻し思入あつて、

長吉　もし親分、宗治の話しを委しく聞いたが、相手はお前の遺恨のある矢部の屋敷でありながら、なぜ打捨つて置きなさるのだ。

市藏　其遺恨ある屋敷ゆゑ、宗治が喧嘩を幸ひと思つた所へ中橋の、半兵衛が來ておれを留め、それから神田芝切つて仲間の者が仲へはひり、三日五日と延びる内おれが瘧を煩つて、延びるともなく二月から、ついそれなりになつたのだ。

長吉　そりやあ病氣で延びたのは仕方もねえが世間の口、瘧が落ちれば仕返しをしなさる心か、しねえ心か、それを聞かしておくんなせえ。(ト市藏思入あつて、)

市藏　喧嘩の時の張合で、宗治を連れて行かれた時は、直におれが屋敷へ踏込み、命の遣り取りする氣で居たが、段々人に留められて斯うして月日が經つて見ると、今更喧嘩をする氣もなく、いつそ瘧に假託けて詫證文を向うへ張り誤らうかと思ふのだ。

長吉　成程それが上分別、堅氣な人なら其の事だが、今町奴と人に言はれ、男を磨く手廻り陸尺、向うも武家の男達旗本衆が怖くつて證文張つて濟ましたと、世間の人に言はれたら、屋敷の供で下馬先へ、大手を振つちやあ出られますめえ。

市藏　なに、出られねえことがあるものか、人の噂も七十五日、ちつとの内の辛抱だ。

ト是れを聞き長吉きつとなり、

長吉　それぢやあ世間の噂の如く、親分お前は引込み思案か。

市藏　そこが年々一ツづゝ、年を取るので跡先を考へて見ると世の中に、喧嘩はしねえ方が德だ。

長吉　如何に瘧を煩へばとて、どうしてこんなしみッたれなお前は心になつたのだ。(ト誂への合方になり、)昨夜京橋の勘太の所へ、大阪から頼まれた用があつて行つたところ、内で四五人がやく

と大きな聲でお前の噂、門に忍んで樣子を聞けば、今京橋から久保町かけ、備前町の市藏といつたら二とねえ男だが、人は見掛けに寄らねえもの、尻腰のねえ今度の始末、子分の宗治が矢部の屋敷へ喧嘩で連れて行かれたを、貰ひに行つてくれなけりやあ高の知れた小ッ旗本、押身で行つて門を毀し、宗治を連れて歸らにやあ、いゝ親分とは言はれねえ、瘧を幸ひそれなりに、ぶん流してしまつたのはよく〳〵命が惜しいと見える、世間で人が夢といふが成程ねえ名は附けねえものだと、寄つてたかつて惡くいふゆゑ飛び込まうかと思つたが、蟲を怺へて内へ歸り、又も近所の友達に樣子を聞けば同じ事、手前の前ぢやあ言ひにくいが日頃に似合ぬ備前町、あれぢやあ男がすたるだらうと、人に惡く言はれるのを子分のわつちが聞く悔しさ、こんなことを言はれるやうな親分ではなかつたがと、昨夜は旅の疲れも忘れ、烏の啼くまで寐もせずに、男泣きに泣きました。

ト長吉よろしく思入あつて、手拭で涙を拭ふ、市藏もぢつと思入あつて、

市藏　それぢやあ手前は泣く程に、おれが人に意氣地なしと、言はれるが悔しいか。

長吉　親分子分となるからは、人に惡く言はれるのが、悔しくなくッてどうしませう。

市藏　人が何と言はうとも、右から左りへ聞いておけ、今仕返しをしなくつても、何時でもゆつくり出

來るから、そんなに急くにやあ及ばねえ。

長吉　さういふお前が心なら、是れを取つてくんなせえ。(ト懐から證文を出し前へ出す、)

市藏　これをおれに取つておけとは。(ト證文を取り開いて見て、)親分子分の縁を切り、後日にどんなことがあつても、聊か難儀を掛けまいと、おれへ送つた此の禮證文。

長吉　永々お世話になりましたが、今日からお前と縁を切り、一本立ちになりてえのだ。

市藏　親分子分の縁を切り、禮證文をおれへ張り、手前は命を捨てる氣か。

長吉　え。(トぎつくり思入。)

市藏　世間の人に意氣地なしと、言はれるのを悔しく思ひ、一本立ちになつたのは、矢部の屋敷へ振り込んで、手前は命を捨てる氣だな。

長吉　如何にもお前のいふ通り、跡の難儀を掛けねえやうに禮狀張つて屋敷へ振り込み、立派に命を捨てる氣だ。

市藏　はて、頼もしい心だなあ。

ト此内前下手より半兵衞羽織着流しにて出來り、門口に聞いて居て、此時上手を明け、

半兵　長吉、爰に居たか。

長吉　おゝ、兄貴か（ト半兵衛内へはひり）

半兵　昨日歸つたといふことを、今朝聞いたから逢はうと思つて、尋ねて行つたら空を踏み、こつちと聞いて廻つて來たのだ。

長吉　お前の所へも行くのだが、先づ親分に逢つた上、歸りと思つて寄らなんだが丁度いゝ所で逢つた。

半兵　手前の跡を追掛けて、今思はずも門口で命を捨てる話しを聞き、是れでこそ親分子分と、おらあ嬉しく思つて居た。

長吉　それぢやあ兄貴は門口で、

半兵　あらまし立つて聞いて居たが、手前がさういふ心なら、禮證文にやあ及ばねえ、恥辱を雪ぐ了簡で、死ぬと覺悟を極めたなら、緣を切らずに親分や、おれと一緒に命を捨てろ。

長吉　なに、禮證文を反故にして一緒に命を捨てろとは。（ト合方きつぱりとなり、市藏思入あつて）

市藏　おれが瘧を煩つて體が自由にならねえから、悔しい齒をば喰ひしばり今日まで辛抱して居たも、話しを聞きやあ先は旗本、打つた擧句に擔いで行つた、宗治を厚く手當をして寒い思ひもさせずに置くと、商ひに行く魚屋へ言傳をして寄越したから、あれが體の安否も知れ騷ぎの中で一つの安堵、既にあの時おれが達者で、子分を集めて押出しやあ、芝の果てから神田まで仲間が擧つて

出るのは必定、其響きを聞いたゆゑ向ふも晝夜飛道具で屋敷を固めて居るとやら、おれが瘧で日の延びたは丁度幸ひ度が拔けて、固めの薄らぐ虚を計り矢部の屋敷へ押掛けて、宗治を助けて潔よく命を捨てゝ跡々へ町奴の名を殘す氣だ。

長吉 それぢやあかうして居なさるのは、戰で言やあ計略で、今に遺恨を晴らしなさるか、是れでこつちも安心した。

半兵 兄貴も明日か明後日は瘧を落して病後ながら、死ぬと覺悟をしたからは、誰に怖れる者もなく、矢部の屋敷へ仕掛ける積り、それ故さつき無理無體女房を去つてしまつたも、長く此世に居ねえ氣で、足手纏ひを拂つたのだ。

市藏 其お勝が家へ泣き込んで、斯ういふことで去られたと、言ふからおれは其時に、手前の心の内を察し、實は嬉しく思つて居た。

半兵 長吉手前は獨身ゆゑ、女房を去る世話はないが、暇乞でもする所が、あるなら是れから餘所ながら、今の内に廻つて來い。

長吉 家といつても店借りに、居るのは雇ひと居候、誰に別れる者もねえが、旅の留守中家主に厚い世話になつたから、三月溜つた店賃と酒でも禮にやりやあいゝのだ。

市藏　さういふ事なら家へ歸り、そんなこんなの片を附け、又出直して來るがいゝ。

長吉　成程わつちも今の內、ちよつと家へ行つて來よう。

半兵　然し大事なことだから、うつかり人にやあ言えねえよ。

長吉　そこは無口なおれだから、決して人に漏らしやあしねえ。

ト此時奥より長次、藤藏、五郎吉、根太郎出で、

長次　樣子は奥で聞きましたが、

藤藏　それぢやあ明日、

兩人　矢部の屋敷へ。

市藏　これ、譬にもいふ壁に耳、野暮に大きな聲をするな。

半兵　お前達にも今跡で、言ひ聞かせようと思つた所だが、奥で聞いたとあるからは、別に言ふにも及ばねえが、暇乞でもする所が、あるなら行つて來るがいゝ。

長次　親兄弟はあるけれど、

藤藏　殘らず借りで音信不通、

五郎　暇乞に行きてえのは、

根太　三田、女の所ばかり。
市藏　今夜は内に用もねえから、ゆつくり別れに行つて來い。
半兵　勤めはおれが達引かう。
四人　それは有難うござります。
長吉　勤めが出たら酒と臺は、旅の土産におれが奢らう。（ト半兵衞長吉金を紙へ捻つて遣る。）
長次　これぢやアしつかり、
四人　遊べやす。
市藏　長吉、早く行かねえか。
長吉　今の内行つて來ませう。
半兵　暮れたら早く來てくんねえ。（ト長吉門口へ出る、四人出掛け。）
長次　どれ小頭を、
四人　送らうか。
長吉　いや、狼連は眞平だ。（ト本町二丁目の唄になり、長吉先きに四人附いて花道へはひる。）
市藏　長吉といひ手前といひ、よしねえおれと兄弟や親分子分の緣を組み、二人に命を捨てさすのが如

何にもおらあ氣の毒だ。
半兵　詰らねえことを言つたものだ。斯ういふ時に生死を共にするのが男の意地、足手纏ひの女房はそれゆゑさつき去つてしまつた。
市藏　手前に引替へおれは又煩つて居るお袋に、去られぬ義理の女房に子供、嘸や跡で困るだらう。
半兵　世間の廣いお前だから、跡で誰か三人の世話の仕手があるだらう、そんなことは氣にしなさんな、してお袋の病氣は何うだえ。
市藏　おれが話しを聞いて居るから、重るばかりでよくはない。
半兵　此世の別れに奧へ行つて、
市藏　逢つたら何も言はねえで、
半兵　氣休めを言つて置きやせう。
ト端唄になり、半兵衞思入あつて奧へはひる、市藏は吐息をつき思案の思入。此唄を借り花道より伊豆屋重兵衞羽織着流し一本ざし、道中師のこしらへにて出來り、花道にて、
重兵　今年は閏があるせゐか、四月になつてもまだ寒く、なか〳〵袷は着られねえ、早く陽氣を暖かに三月大根で初鰹の生作りを食ひてえものだ。（ト向うを見て）考へ事をして來たら、いつの間に

か備前町市藏の家へ來たが、どうかおれが言ふことを、今日は聞いてくれゝばいゝが、（ト舞臺へ來り內を窺ひ、）はい、御免なせえ。

市藏　どなたか知らぬが、おはひりなさい。（ト是れにて重兵衞門口を明け、）

重兵　おゝ市藏、そこに居たか。

市藏　こりやあ神田の元締さん、これへおいでなすつて下さいまし。

重兵　それぢやァ邪魔にならねえやうに、（ト合方きつばりとなり、捨ぜりふにて重兵衞上手へ住ふ、市藏煙草盆を出す、）斯うして爰へ出て居るからは、よつぽど氣分がいゝと見えるな。

市藏　此二三日は大きによく、明日あたりは瘧をば落さうと思ひます。

重兵　瘧はあんまり早く落すと、又ぶり返して煩ふからよく醫者樣に聞いた上、ゆつくりと落しなせえ。

市藏　是れがたゞの時ならば骨休めになるだけ寐て、ゆつくり落しますけれど、さうべんくとして居られぬは、仕掛けた宗治の喧嘩があるから、早く落さにやあなりませぬ。

重兵　其の喧嘩をばさせめえと、此間から江戶中の元締手合が仲へはひり、いろく扱つた其の末が、お前が矢部の殿に逢ひ長くはいらねえたつた一言詫びせえすりやあ宗治を返し、浪風立たず濟む喧嘩、定めて詫びも仕難からうが、仲へはひつたおら達の、顏といふのも嗚呼がましいが、何と

詫びちやあくれめえか。

市藏 御親切に其のやうにおつしやつて下さいますを、聞かれませぬと愛敬もなく強情を言ひ通すのも深い譯、定めて知つて居なさいませうが、女房お蝶が實の兄生田の家中の笹川丹右衛門、我が菩提所の青松寺で無念の切腹いたしましたも、其身の越度と言ひながら、矢部城五郎に欺かれ澤井が母を奪はれしゆゑ、此の遺恨が晴らしたく命を取るか取られるか、一番爰で花々しく喧嘩に花を咲かせます氣さ。（ト重兵衛是れを聞き思入あつて、）

重兵 負けぬ氣性のこなたゆゑ、女房の兄の肩を持ち、矢部と命の遣り取りをするといふも尤だが、爰をよく聞いてくんねえ。まさか一人で出來ねえこと。今手廻りで一といつて二のねえ夢の市藏親分、兄弟分や子分を始めお前の恩を着て居る者が幾人あるか知れやあしねえ、又其外にも彌次馬に血の氣の多い若い者が仲間の恥と徒黨をして矢部の屋敷へ押掛けたら、向うも旗本八萬騎只毀される氣遣ひなし、弓鐵砲で討つて出たらそれこそ天下の亂となり、曇りなき代に血の雨を降らすことになつたらば、双方共に死人の山、殊にはそれも獨身の者ばかりならいゝけれど、多くの内には親兄弟女房子供のある者は、跡へ殘つた身寄りの者が歎き悲しむばかりでなく其日に困る者が出來、貧に迫つたその上に命を捨てる者が出來よう、何と不便な事ぢやあねえか、又喧

嘩の事は公儀沙汰、治世に天下を騷がせし科によつて旗本衆が、改易にでもなる時は、こつちもそれだけ科を着て重くは死罪輕くて遠島。此の騷動になるかならぬは市藏こなたの心一ツだ、凡そ双方五百人の死人と見れば千人の命に拘はる此の喧嘩、とつくり胸に手を置いて、よく考へて見て下せえ。

ト重兵衞思入にて言ふ。此内上手の障子を明け、半兵衞窺ひ居て、よき程に障子をしめる。

市藏 事を分けたる其の御異見、聞かにやあならねえ場合だが、義理ある兄の丹右衞門が、死ぬ時遺恨を晴らさうと約束をした此の市藏、是れが反故にされぬのに、矢部の屋敷へ詫びて濟まさば、命を惜しむ意氣地なし、さりとは尻腰のねえ事だと、此の江戸中の物笑ひ、こつちばかりか兄弟分子分も共に世の中へ再び顏が出されねえ、天下の亂になるは元より喧嘩の上で死んだものゝ、其の親達や兄弟妻子の難儀をするのも知つては居るが、今更引くに引かれぬわけ、是れ程言ふに分らぬは、鄕在者に劣つた者と定めて思ひなさらうが、是れまで斯うと言ひ出したら、何處が何處まで貫く氣性、此事ばかりは元締さん、どうもわつちやあ聞かれませぬ。

重兵 其了簡も知つて居るが、思はぬ天下の亂となり、多くの人命捨つるのが如何にもおれは歎かはしく、斷られるを繰返し二度も三度も足を運び、膝を抱くのも兩の手の、指を折つて算へ切れねえ

人の命が惜しいからだ。

市藏　お前は不斷本を讀み、元締仲間の學者といはれ、天地の道理が明るいから、胸の分りがいゝけれど、わつちは餓鬼の時分から實語敎せえ讀まねえ體、天地の道理に暗いから、遣る所まで遣らねえけりやあ、腹の癒えねえ性分だ。

重兵　それぢやあ是れまで譯を言つても、了簡はならねえのか。(トきつといふ、市藏も思入あつて)

市藏　むゝ、どうあつても聞かれねえから、多くの人が助けたくば、さあ、わつちを殺してくんなせえ。

ト市藏體を向ける。

重兵　何と。

市藏　一旦約束した詞に、息があつては聞かれねえから、命を取つて助けなせえ。

重兵　人の命が助けたいとて、長年懇意にしたこなたを、何でおれが殺されよう、道中稼業はするけれど大名衆のお供をすれば、大小御免の伊豆屋重兵衞、駕籠で往來するゆゑに人に顏を賣らねえから、假令言ひ條が立たなくても恥とも何とも思やあしねえ。

市藏　それぢやあまことにお氣の毒だが、此の扱ひは元締さん、手を引いておくんなせえ。

重兵　それ程思ひ詰めたらば所詮思ひ止るめえから、向後おれは口は利かねえ遣る所まで遣るがいゝ。

どれ、お暇いたさうか。（ト立上り下手へ行くを市藏見送りながら、）

市藏　折角言つて下さるのを、只一言も用ひねえのは、濟まねえことでござりまする。

ト重兵衞門口へ出て、

重兵　二度も三度も斯うして來るも、只人命を惜しむゆゑ、

市藏　それをわつちは、捨てる覺悟、

重兵　はて、是非もない、（ト門口をしめ、）事だなあ。

ト唄になり、重兵衞思入あつて花道へはひる、是れを上手の屋體を明け、半兵衞尤もたといふ思入あつて、

半兵　兄貴。

市藏　半兵衞聞いて居たか。

半兵　爰へ出ると面倒だから、一間に隱れて聞いて居ました。

市藏　おのが利口を鼻へ掛け、尤らしいことをいふが、命を惜しんだ其の日にやあ、戰や喧嘩が出來るものか。

半兵　何にしろ仲人の伊豆屋の詞をきかねえ上は、あの重兵衞の口から漏れ、折角不意を打たうと思つ

た、

市藏　矢部で用意をされちやあ詰らぬ。

半兵　何でもこりやあ期を延さず、豫て約束して置いた、芝から神田へ觸れを出し、

市藏　今夜の内に瘧を落し、

半兵　明日夜明けに押掛けたら、

市藏　必ず勝つに違えねえ。

半兵　それぢやあ是れから仲間の者へ、

市藏　ちつとも早く。

半兵　合點だ。

ト半兵衛門口へ出で思入あつて、尻を端折り早き合方ばた〳〵にて、逸散に花道へはひる、お蝶出來り、

お蝶　樣子は奧で聞きましたが、わたしの緣で兄さんゆゑ、お前へ命を捨てさせてはおつかさんへ濟まぬから、重兵衛さんの詞に附き矢部の屋敷へ詫びをして、お前は元より子分の衆の命を助けて下さんせ。

市藏　世間の噂にならぬ先きなら、又了簡の仕樣もあらうが、今更引くに引かれねえから、もう斯うな

つたら遣る所まで、遣らにやあおれの男が立たねえ。
お蝶　そんならどうでも矢部の屋敷で、
市藏　おれは命を捨てるから、煩つて居るお袋や疱瘡擧句の小僧の世話を、
お蝶　そりやあわたしの役なれど、兄さんゆゑにおつかさんへ、
市藏　そんな義理がいるものか。（ト時の鐘、市藏ぎつくり思入あつて、）や、あの鐘は。
お蝶　ありや切通しの七ッの鐘。
市藏　ふるふ時刻になつて來たか。（ト風の音になり、市藏瘧にてふるふ思入、）
お蝶　見る間に顔の色も變り、
市藏　あゝ、ぞく／＼して堪えられねえ。
　　トお蝶小搔巻を出して市藏に着せる、合方にて此内花道より、四郎左衞門羽織袴大小、丑内紺看板
　　一本ざし、中間にて附添ひ出來り、
四郎　向うが夢の市藏が宅か。
丑内　へい、左樣でござります。
四郎　其方參つて案内いたせ。

丑内　はい。（ト先きへ舞臺へ來て、）頼まう〳〵

お蝶　はい、どちらからお出でなさいました。

丑内　麹町の三軒家から參つた。

市藏　なに、三軒家から、

お蝶　それではもしや、宗治が行つてる。

四郎　如何にも、矢部から參つたのだ。

市藏　何御用か存じませぬが、是れへお通り下さりませ。

四郎　許しやれ。（ト合方きつぱりとなり、四郎左衛門上手へ通り住ふ、丑内下手に控へる、）其方が、市藏なるか。

市藏　へい、左樣にござりまする。

四郎　身共は矢部の組合なる、山野四郎左衛門と申す者ぢや。

市藏　是れまでお目通りをいたしませぬが、山野樣には何御用で、手廻り風情の私宅へ。

四郎　矢部が頼みによつて參つた。

お蝶　先づ、お茶をお上りなさりませ。（ト茶臺にて茶を出す。）

四郎　いや、決して構やるな。
市藏　してあなた樣の御入來は、
四郎　先達愛宕におき、喧嘩をなせしそちが子分宗治と申す者、これなる中間丑内が面部へ疵を負はせしゆゑ、矢部の屋敷へ召連れ參り、そちが詫びに參つたら、許し遣はす所存にて、厚く手當をいたし置きしに、今日屋敷を脱け出し、何れへ行きしか行方知れず。
市藏　すりや宗治にはお屋敷を、脱け出しましてござりまするか。
お蝶　それはまことでござりまするか。
丑内　なに僞りを申すものか、親分子分のことゆゑに、慥に此家へ參つて居らうと、それを見込んで山野樣が、詮議にお出でなされたのだ。
四郎　當家へ參りし宗治めを、斯くいふ身共へ渡してくりやれ。
市藏　此市藏が子分ゆゑ、其のお疑ひは御尤だが、承はるは今が初めて、一向宗治は存じませぬ。
四郎　いや存ぜぬとは申させぬ、そも〳〵愛宕の喧嘩より、厄介掛けし其方へ參らぬといふ謂れなし。
市藏　假令何とおつしやつても、參らぬものは存じませぬ。
四郎　しかと此家へ參りしこと認めて來たる四郎左衞門、たつて知らぬと申すからは、家搜しなして詮

議なすぞ。

市藏　いや、家搜しはなりませぬ。

丑内　何、家搜しがならぬとは。

市藏　町人ゆゑに南北の、町奉行から御沙汰なら勝手にお通し申しますが、支配違ひの旗本衆に家内の詮議はさせられませぬ。

丑内　家搜しさせぬといふからは、さてはいよ〳〵此家の内に、匿ひあるに相違ない。

四郎　何でも家搜しいたさにや置かぬ。

市藏　左程お疑ひなさるなら、家搜しさせまいものでもないが、家内に宗治が居らぬ時は、其分にはいたしませぬぞ。

四郎　何と。

市藏　さあ、踏込んでお搜しなされ。（ト此内風の音、市藏顫へながらきつと言ふ。）

お蝶　又顫へなさんすか。（ト介抱する。）

市藏　時も時とて此の惱み。（ト齒を喰ひしばり、顫へ居るを見て、）

四郎　見れば大分顫へて居るが、さては身共が怖いのか、決して心配するには及ばぬ、斯く大小はたば

さめど、滅多に人は切りはせぬ。

丑内　不斷強いことを言つても、根が町人の悲しさは、怖くて〳〵ならぬと見え、齒の根も合はぬ胴顫ひ、はてさて意氣地のないことだ。そんなにぶる〳〵するには及ばぬ。（ト市藏悔しき思入にて、）

市藏　何でぶる〳〵するものだ、二本差しが怖くつて、燒豆腐が喰はれるものかと昔の人がよく言ふが、實に怖くも何ともねえが、此の顫へるのは此間から、瘧の病に取り附かれ。

お蝶　生憎今が顫へ時、それゆゑ齒の根も合はぬ程。

四郎　いや、さうでも言はねば面目なからう、備前町で手廻り頭夢と渾名の市藏は、侍勝りと話しに聞いたが、我一人にぶる〳〵と顫へるやうな膽玉では、取るに足らない者と見える、こりやあ身共の相手にならぬ。

丑内　名に負ふ名うての市藏ゆゑ、叶はぬ時はと伏勢に大勢土橋へ待たして置いたが、無駄なことをいたしました。

四郎　是れに長居をいたしたら、顫へ死にをいたさうから今日は情に歸つてやらう。

ト市藏の前に顏を出して憎く言ふ、市藏始終顫へながら、

市藏　いや、歸るには及ばねえ、一旦仕ようといつたからは、家搜しをして行きなせえ。（ト市藏立掛るを、）

四郎　えゝ、ぶる／＼しながら、我慢をするな。

ト市藏を蹴倒し門口へ出る、市藏起上り、ふるへ／＼立掛るを、お蝶留めて、

お蝶　負けたことのないお前が、足蹴に逢つて腹も立たうが、生憎今が顫ひ時、悔しからうが市藏さん病に負けて下さんせ。

市藏　それだと言つて、

お蝶　はて、負けるは勝でござんすぞえ。

ト悔しき思入の市藏を、お蝶ぢつと留める。此の內四郎左衞門丑內門口へ出で、

四郎　小さな形だが大きな膽と、名高い夢の市藏も、大小を見てぶる／＼と、さりとは意氣地のないことだ。

丑內　愛宕の喧嘩の仕返しに、今日は／＼と待つて居たが、これぢやあ屋敷へ來ねえ筈だ。

四郎　是れで枕を高く寐られる。

丑內　左樣なれば山野樣。

四郎　丑內來やれ。

ト唄になり、四郎左衞門、丑內、市藏を見て安心といふ思入あつて花道へはひる。市藏跡を追掛けよ

うとして、ぶる〳〵顫へ、どうと下に居て、

市藏　えゝ、折も折とて山野が來た折、瘧の發しに總身顫へ、足の踏所も覺えぬゆゑ、彼等如きに足蹴にされ、手出しさへもならぬといふは、こんな悔しいことはねえ。（ト市藏悔しさ思入）

お蝶　腹も立たうが氣を揉まずと、顫への止るを待ちなさんせ。

市藏　かゝる恥辱を取つたのも、取り附れたる瘧の病、名醫も多い此の江戸に、直る藥のねえことか。

ト體を叩いて悔しき思入。時の鐘。

お蝶　もう小半時たつたれば、大概顫への止る時分。

市藏　おゝ、少しは樂になつて來た。

お蝶　それは何より嬉しうござんす。

市藏　今ならあの儘歸さぬに。

お蝶　丁度病の起つたとこゆゑ、

市藏　手出しもせずに歸したは、

お蝶　え。

市藏　はて、殘念な、（ト市藏立上るを、道具替りの知らせ）ことをした。

ト向うをきつと見込む。時の鐘、合方にて此道具廻る。

（市藏内奥座敷の場）――本舞臺三間の間常足の二重、本庇本緣附、向う床の間、續いて地袋戸棚、下手襖の出入り、上の方後へ下げて障子屋體の前側、此前四ツ目垣石燈籠松の立木、いつもの所庭口の枝折戸、下の方建仁寺垣、總て市藏内奥の間の體。二重上手に絹蒲團を敷き、四幕目のおさが病人のこしらへにて絹夜具に寄りかゝり居る、傍に括り枕、見舞物の菓子折など置き、下手にお民盆の上へ藥茶碗を載せ、是れを持ち居る、枕元に行燈を點し、此模樣よろしく合方にて道具留る。

お民　お袋さま、お藥をお上りなされませ。

さが　其の藥は止しませう。

お民　なぜお上りなさりませぬ。

さが　幾ら呑んでも少しもきかず、無駄なことゆゑ呑まぬわいの。

お民　それではお直りなされませぬ、一杯上るがおいやなら、半分お上りなさりませ。

さが　折角煎じてくれたれど重い病に此の年病、所詮直りはせぬ程に、今日から藥は呑まぬゆゑ、跡は其儘煎じてくれるな。

お民　左様なら煎じたゞけ、是れをお上りなされませ。

さが　それはわしが呑んだ積りで、そつと流してしまつてくりや。

お民　それ程おいやでござりますなら、お上さんへ左様申しませう。

さが　お蝶にいふと勧めるから、呑まぬことを言つてくれるな。

お民　いえ／＼是れを私が、どう申さずに居られませう。

さが　えゝも、しつかう言はずと行つてくりや。

お民　はい、左様なら参りませう。（ト合方にて、お民薬茶碗を持ち奥へはひる。）

さが　所詮直らぬ我が病、斯うして居れば何やかや、見聞きをするゆゑ苦勞が絶えず、少しも早く此世を去り、夫の側へ行きたいものだ。（ト時の鐘、床の淨瑠璃になり、）

〽永の病にいとゞ猶、心も愚癡になる鐘の、三つは浮世の捨鐘と胸に時打つ思ひにて、一間を立ち出る市藏が、（ト此内おさが寐轉ぶ、時の鐘にて、奥より市藏出來り、）

市藏　お袋様、お目が覺めて居なさいますか。

さが　おゝ市藏か、（ト起返り、）今日はどうだの。

市藏　今しがた顫ひましたから、是れから樂でござります。

さが　瘧は切ないものださうだが、大分顏が窶れたの。
市藏　食を碌々喰べませぬから、それゆゑ窶れましたらう、お前も窶れなすつたが、夜るはとつけり寐られますか。
さが　晝間うと〳〵するせゐか、寐るかと思ふと目が覺めて、此の四五日は寐られぬわいの。
市藏　重い病に癇が手傳ひ、それで寐られぬのでござりませう。
さが　年のせゐで目はかすみ、齒もあらかたは拔けたれど、耳に變りがないゆゑに、善いも惡いも早く聞え、耳に苦勞が溜るので、それでろく〳〵寐られぬわいの。
市藏　その御苦勞のある中へ、お話し申すも申しにくいが、
〽跡言ひさして俯向けば、母は早くも心を察し、（おさが思入あつて）
さが　わしにそなたが言兼ねるは、此の世の暇をくれといふのか。
市藏　え。
さが　明日をも知れぬ病人に、定めて言出しにくからうが、是れまで賣つたそなたの顏、立たぬことがあるならば、決して留めはせぬ程に、わしに構はず心置きなく、立たぬ男を立てるがよいぞ。
市藏　すりやお袋には、此の身の切羽を。

さが　今日は言ふか明日は言ふかと、此間から待つて居ました。（ト床の合方になり、市藏思入あつて、）

市藏　斯うお察しの上からは、打明けお話し申しますが、お蝶が兄の丹右衛門殿が不覺を取つた意趣返し、子分の宗治が喧嘩をば幸ひにして買つて出たは、今は出入を止められたれど、親の代から御扶持を貰ひ大恩受けた生田樣、その大恩を報じる爲め矢部の屋敷へ切込まうと、思つた所へ半兵衛や仲間の者に止められ、五十日延ばす其内に、瘧の病に取附かれ體も疲れ力も拔け、今日まで我慢をして居ましたが、明日は屋敷へ切込んで日頃の恨みを晴らす所存、假令向うが小身でも勇氣滿ちたる旗本に、多分は切られて死にませう。是れまで受けた御恩も送らず、煩つて居るお前樣に苦勞を掛けるは何より濟まぬが、引くに引かれぬ生業柄、どうぞ許して下さりませ。

〽親に先立つ逆さまの、不孝な罪を許してと淚ながらに詫び入れば、母は健氣にわるびれず、

ト市藏よろしく、じゆつなき思入にて言ふ。

さが　おゝ先達ては留めたれど、今日の仕儀では命を捨てずば、そなたの男が立つまいから、決してわたしや留めぬから、心任せにするがよい。

市藏　すりや、死ぬのを許して下さりますか。

さが　許してやるも喧嘩にて、そなたが死んだといふことを、聞けば共々死ぬ心。

市藏　それでは手をば下さずとも、わしが殺すも同じこと。
さが　いや、良仙さまが見放せしことも疾うから知つて居る、所詮此世にない體、跡へ心を引かされず立派に行つて命を捨てよ。
市藏　濟まないことではござりますが、今日に迫りし身の切羽、其のお詞に隨ひまして、明日は命を捨てまする。
さが　其の望みを聞き屆けたら、最早わたしに用はあるまい、息が切れてならぬから、餘計に口を利かしてくれるな。
市藏　言ひ度いこともござりますが、それぢやあ何にも申しませぬ。
さが　とはいへ、是れが今生の、
市藏　果敢なき親子が、一世の別れ。
さが　悴。
市藏　お袋。（ト兩人顏見合せ、）
さが　引けな取るなよ。
へ盡きぬ名殘りに取交す、手を振放し氣丈にも、夜着打ちかつぎ伏しにける、母を市藏見返

りて、（ト兩人よろしく思入あつて、おさが横になり、夜着にて顔を隱し泣く、市藏是れを見て、）

市藏 流石は親仁の連合とて、立派に暇を下すつたは、男勝りな健氣なお袋、定めて世間の利口な人は命知らずと笑ふであらうが、我慢の出來ぬが顔を賣る下司生業の手廻り頭、跡へ其名を殘さにやあ死んだ親仁へおれが濟まねえ。これから先祖の御位牌へ、命を捨てるお詫びをせうか。

〽死ぬる覺悟に氣は張れど、濕り勝ちなる卯の花くだし、空も曇りて、

ト此内おさが顔を出し、市藏と顔見合せ思入あつて顔を背ける。此の模樣よろしく、三重にて道具廻る。

（元の場）――本舞臺元の道具。爰にお民抱兒を抱へて立掛り、門口に千太立掛り居る。合方にて道具留る。

お民 これ千太さん、歸り早々氣の毒だが、お上さんが坊つちやんをわたしに預けてたつた今、あつちの方へおいでだから、跡を追掛けて行つておくれ。

千太 さては内のお上さんも、親分に去られたのか。

お民 なに、そんな譯ぢやあないけれど、泣きながらお出でなすつたから、たゞごとぢやァありますま

い。

千太　それぢやあ跡を追掛けようか、どつちの方か知らないか。

お民　坊つちやんがお泣きなので、うつかり跡を見なかつたから、どつちだか知らないよ。

千太　こいつァ空な尋ねものだ。

お民　そんなことを言つてる内に、遲くなるから早くお出でよ。

千太　どれ、そこいらを捜して來ようか。

〽尻を端折りて一目散、土橋を目當に走り行く、母を慕ふか幼兒が泣入る聲に市藏が、一間の内より立ち出でゝ、

ト千太花道へはひろ、赤兒笛になり、お民抱兒に餅花を見せてだまし居ろ、奥より市藏出で、

市藏　これお民、何をそんなに泣かすのだ。

お民　お上さんがおいでなさいませぬから、それでお泣きなさいます。

市藏　お蝶はどこぞへ行つたのか。

お民　どこへ行くともおつしやいませんが、泣きながらおいでなさいました。

市藏　なに、泣きながら出て行つた。

お民　千太さんが跡を追掛け、今捜しに參りましたが、それとも裏の大家さまへお出でなされはしますまいか。

市藏　裏へ行つて見て來てくれ。

お民　はい、坊ちやんを抱いて下さりませ。（ト市藏に抱兒を渡し外へ出て）どれ、お聞き申して參りませう。

〽とつかは裏へ行く跡に、手馴れぬことに市藏が、泣入る我が子をいぶり附け、

トお民下手へはひる、市藏泣く子をいぶり附けながら、

市藏　おゝ、泣くな〳〵、生憎お針の婆アさんも寺參りに内へ遣り、子分の奴等は一人も居ず、此人手のねえ其中へ、乳呑みを置いて心なしな、どこへお蝶は行つたのか。おゝ、ちやんが困るから泣いてくれるな〳〵、お民も何をして居る、早く歸つて來ればいゝに、（ト此内市藏湯本細工を出し）それ、それ、是れを見ろ〳〵。

〽だましすかせど抱き馴れぬ、男の手ゆゑ泣き止まねば、

こんな困つたことはねえ。（ト抱兒の懷にある文を見附け）や、この懷にある文は、

〽引き出す文に書置と、あるにびつくり打ち驚き、

ト抱兒の懷から書置を出し、びつくりする、抱兒泣くゆゑ。

えゝ、泣いてくれるな〳〵、氣逆上がしてならねえ。

〽消える知らせか行燈の、闇き火影を搔き立てゝ、心せはしく讀終り、

ト市藏片手で書置を開き見て、

「一筆書殘しまゐらせ候、先程も御前さまへ申せし如く、私の兄丹右衞門の義理により、命を捨てさせ申し候ては、勘當の身に一方ならず厚き御恩を蒙りし、御母樣へ申譯なく候まゝ、身を投げ相果て申し候」。やゝゝゝ、(トびつくりなし、)えゝ、詰らねえことをするぢやあねえか、

ト書置を下へ叩き附ける、抱兒泣く、

おゝ泣くな〳〵(トいぶりながら、)其義理立ても尤だが、お蝶が兄の遺恨をば、晴らすばかりといふぢやあなし、數年御恩を蒙つた、生田樣への御恩送り、それも手前が知つて居ながら、命を捨てるさいさきに、足手まといの此の蝶太を、置いて死ぬとは分らねえ。子の大厄の疱瘡も、運よく凌いだ甲斐もなく、今日母親に明日は父、此の父親に別れにやならぬ、世にも因果なこれが身の上、

〽子の恩愛にやゝ暫し、涙に暮れしが氣を勵まし、

跡へ殘して行つたらば、病みほうけたお袋に、又も苦勞を掛けにやあならぬ、いつそのことにおれが手で、不便ながらも殺してしまへば、心殘りがなくていゝ。

〽さうぢや〳〵と頷いて、戸棚の内より一腰取出し、明日の勝負の血祭りと白刄を喉へ差附くれば、何の頑是も泣き止んで、につこと笑はれ、手もなまり、

ト文句の通り、戸棚より脇差を出し、抱兒を差殺さうとして、

今殺さうと突掛くる、刄物の光りにこ〳〵と、笑ふを見ちやあ如何なる鬼でも、どうして是れが殺されよう。

〽刄物納めて抱き上げ、不便のものやと市藏が、悲歎に暮れる裏口より、家主が入來り、

ト市藏脇差を納め、よろしくあつて、抱兒を抱へ、いぶり附ける、下手より與九右衞門お民出來り、直に内へはひり、

與九　おゝ、市藏どの、内儀が内に居ねえさうだの。

市藏　お前さんの所へ、參りはしませぬか。

與九　さつきちよつとお出でだつたが、永々お世話になりましたと、何の禮だか分らねえ禮を言つて歸られた。

市藏　其のお禮は、お暇乞だ。
與九　えゝ、お暇乞とは。
市藏　もう今頃は、死にましたらう。
與九
お民　えゝゝゝ。（ト兩人びつくりする。）
お民　それぢやあ、內のお上さんは。
市藏　これ、餘計な口を利かねえで、お袋を行つて氣を附けろ。
お民　はい〳〵。（ト合方にてお民奧へはひる。）
與九　して、お內儀が死んだとは。
市藏　詰らぬことの義理立てして、身を投げるといふ書置を、跡へ殘して行きました。
與九　そりやあ大變なことが出來たが、子分の衆は內には居ぬか。
市藏　みんな遊びに出ましたから、內には誰も居りませぬ。
與九　それでは搜しに行くにも行かれず。
市藏　足手まとひの、これは泣くし。
與九　こんな困つたことはない。

〽途方に暮れし奥の間より、(トばた〳〵にて奥よりお民出で、)

お民　もし、お袋さまが咳き入つて、お苦しみなさいます。(ト言ひ捨て奥へはひる。)

市藏　なに、お袋が苦しむと。

與九　早く行つたらお内儀が、助けられまいものでもないに。

市藏　行くに行かれぬ、此の場の切羽。

〽親と女房が生死の境、かてゝ加へて子に泣かれ、夫の寒山の四鳥の苦しみ、餘所の見る目も哀れなり。(ト此内市藏抱兒をいぶり附けながら、切なき思入あつて、)何事おいても親の病氣、これをお賴み申します。(ト抱兒を渡す。)

與九　おゝ、合點だ〳〵。(ト抱取る。)

市藏　誰ぞ來たらば呼んで下さい。

〽言ひ捨て一間へ急ぎ行く。(ト市藏奥へつか〳〵とはひる。)

與九　おゝ泣くな〳〵、今ぼつぼへ入れてやるぞ。(ト懐へ入れようとして、)あゝ冷てえ〳〵、ぐつすりひよぐり居つたわえ。

〽折柄爰へ半兵衞が、息をばかりに駈來り、

ト ばた〳〵になり、花道より以前の半兵衛尻端折りにて、走り出來り直に門口へ來て、

半兵　おゝ兄貴、兄貴々々。

市藏　おゝ、半兵衛か。

〽いふ聲聞いて市藏立ち出で、（ト奥より市藏出來り、）

半兵　兄貴、水を一杯くんねえ。

市藏　何でそんなに急いで來たのだ。（ト茶碗へ水を汲んでやる、半兵衛呑んで、）

半兵　何でもいゝから、悦びねえ。

市藏　譯も言はずに悦べとは。

半兵　今姐御が新橋から、身を投げようとした所を、折よくそこへ來合せて、おれが抱留め助けました。

市藏　それぢやあ、手前が助けてくれたか。

半兵　籠駕へ乘せて連れて來ました。

與九　そりやあ何より目出度いことだ。

〽悦ぶ門へ息せきとかき下したる四ツ手駕籠、

ト ばた〳〵になり、花道より垂を下せし四ツ手駕籠を擔ぎ出來り、門口へ下し、

駕舁　へい、親方參りました。
半兵　おゝ御苦勞々々。（ト門口へ來り、）さあ姐御、こつちへ來ねえ。
へ垂を上ぐればしを〳〵と、立出るお蝶は我が內も、敷居が高くたゝずめば、
ト駕籠の垂を上げる、內より以前のお蝶さし俯向き出る。
駕舁　歸りましてもよろしうござりますか。
半兵　おれが歸りに乘つて行くから、蕎麥でも喰つて待つてゝくんねえ。
ト半兵衞財布より錢を出してやる。
兩人　こりやあ有難うござります。
駕舁　左樣なら、ちよつと行つて、
兩人　參りまする。（ト駕籠舁下手へはひる。）
與九　おゝ、お內儀お歸りか、さあ〳〵こつちへ來なせえ〳〵。
ト合方にて、與九右衞門手を取つて連れて來る。
お蝶　親方、堪忍して下さいまし。（トお蝶泣き伏す、誂への合方になり、）
市藏　今更小言を言つたとて、仕方がねえから言ねはえが、おれが是れほどの苦しみを、するのを側で

お蝶　知つて居ながら、何でこんなことをするのだ。わたしが兄の遺恨から、お前に命を捨てさせては、おつかさんに濟まないから、つい死なうといたしました。

半兵　危い所を天の助け、折よくそこへ行き合せ此半兵衞が抱き留めたのは、全く壽命があるのだから、死なうと思つても其命數の盡きぬ内は、所詮死ぬ事は出來ないから、此後こんな不了簡を必ず出して下さるな。

お蝶　女子の狹い心から一途に死なうと思ひ詰め、喧嘩の事や何やかや、苦勞の多い内の人へ又もや餘計な苦勞を掛け、濟まぬ事をしましたわいな。（ト又抱兒泣くゆゑ。）

與九　濟むも濟まぬもいらぬから、早く一杯呑ませなせえ。（ト抱兒を渡す。）

お蝶　おゝ可哀さうに、嘸ひもじかつたであらうなう。

ト お蝶抱兒に乳を呑ませる思入、市藏胸苦しき思入にて、

與九　成程泣く子に乳といふが、母親の手へ行つたら、さつぱりと泣き止んだ。

市藏　手前が殘した書置で、一途に死んだと思つた所へ、奧では咳でお袋が苦しむ樣子に是れには泣かれ、どうしようかと思つたので、あれからこつち動悸がして息がはずんで物が言へねえ、何の因

果で此のやうな病におれは取附かれたか、是れぢやあ何の役にも立たねえ、一服呑んで立どころに瘧が落ちて直るやうな、耆婆扁鵲の上を行く、名醫は世界にねえことか。

お蝶　返すゞもわたしの越度、何と言譯の仕樣もないが、さうしておつかさんはどうでござります。

市藏　今は落着いた樣子だから、跡で行つて詫びるがいゝ。

〽傍に聞き居る半兵衞が、何やら思ひ出せし體にて、（ト半兵衞思入あつて、）

半兵　姐御を助けた混雜で肝腎の事を忘れたが、お前の瘧を落さうとさつき爰から歸りがけ、今御殿醫で指折の寶井樣がお出入ゆゑ、お前の樣子を殿樣へ委しくお話し申したら、さういふ事なら一服遣るから、半服呑まして遣るがよい、立どころに瘧は落ち氣分涼しくさつぱりと、全快するとおつしやつて下さつた此の藥、坊主天窓を幸ひに代脈氣取りで效驗を言立て、物は試し半分程、早くこれを呑んで見なせえ。（ト懷から誂への紙包の藥を出す、市藏嬉しき思入にて、）

市藏　それぢやあ手前がお出入りの寶井樣からお藥を、お貰ひ申してくれたのか、今御殿醫の出頭で通仙院とおつしやるお方、なかく以て手廻り風情が、あなた方のお藥をお貰ひ申すことは出來ねえ、手前がお出入りなればこそ、是れをおれが呑めるのだ。

お蝶　容易に呑まれぬお藥を、お貰ひ申すもお前のお蔭、お禮は跡でゆつくり言ひます。

半兵　是れが他人といふぢやあなし、兄弟分の其中でそんなに禮を言はれちやあ、何だかこつちが切なくて、共々胸がどき〳〵と、いや瘧の病は眞平だ。(ト思入。)
與九　何にしろ兄弟分によいのがあつて仕合せだ、寶井様のお藥なら必ず驗くに違ひない、ちつとも早く呑みなさい。
市藏　斯ういふ藥の手に入るのは、おれが運の盡きねえところ、こんな有難いことはねえ。
お蝶　さうして是れはお湯で呑むのか、但しは水で呑むのかえ。
半兵　さあ、そこはおれも聞かなんだが、湯でも水でも構やあしめえ。
〽聞かれて半兵衞ぎつくりなし、
市藏　それぢやあ淸く水で呑まう。お蝶、切り火をして一杯くれ。
お蝶　あい〳〵。
〽あいと女房がまめ〳〵しく、茶碗の水へ打ち掛ける影も果敢なき火の光り、
ト此内お蝶茶碗を盆へ載せ、火打箱を出し切火を打ち、市藏の前へ持つて行く。此時半兵衞肚の内にておど〳〵する思入。
市藏　どれ、お藥を頂戴せうか。

〽藥の包み押しいたゞき、呑まんとなせば半兵衛が、
ト市藏上包みを開き、中より藥袋紙に包みし粉藥の包みを頂き、呑まうとするを。

半兵　兄貴、ちよつと待つてくんねえ。

市藏　何で留めるのだ。

半兵　寶井樣から貰つた藥、病の障りになるやうなそんな事はあるまいが、おれが心が濟まねえから、半分毒味させてくんねえ。

市藏　なぜそんな他人業の入つたことを手前は言ふのだ、兄弟中に毒味の何のと、そんなことが入るものか。

半兵　そりやあ、さうでもあらうけれど、おれが半分それを呑まにやあ、まことを照す天道樣へ、

市藏　や。

半兵　いやさ、いはゞ天から授かつた寶井樣の其の藥、どんな藥か呑みたいのだ。

お蝶　半兵衛さんがあのやうに言ひなさんすから、其の藥を。

與九　半分遣つたがいゝではないか。

市藏　それぢやあ半分飲むがいゝ。

〽差出す藥を半兵衞が、包を開き掌へ分ける手先の顫へれば、
ト半兵衞藥紙を開き、掌へ粉藥をあける、此の内始終顫へる思入。

お蝶　何でそんなに、顫へなさんす。

半兵　さあ、おれも瘧の相伴と見える。

市藏　さういふことなら、少しも早く。

半兵　どれ、魁に、毒味をせうか。

〽顫へ〳〵て掌の藥をぐつと呑込めば、續いてこなたも呑みじまひ、半を分けて呑む水も、最れが別れと半兵衞は、口に言はねど咽返り、
ト此内半兵衞先きに市藏藥を呑み、市藏水を半分呑んで半兵衞へ遣る、半兵衞思入あつて、是れを呑み咽ることあつて、

市藏　成程たゞの藥と違ひ、腹の中へ沁み渡り、

半兵　痞へた胸もさつぱりした。

市藏　これで瘧が落ちるのだらう。

お蝶　こんな嬉しいことはない。

市藏　寶井樣の此の藥で、全快すれば期を延ばさず、
半兵　今夜の內に手分をなし、
市藏　かねて言附け置きたれば、
半兵　七ツの鐘を合圖として、
お蝶　そんなら明日明方に、
與九　こりや、こなた衆はどこへ行くのだ。
市藏　さあ、お禮參りに目黑から、
半兵　瀨田ケ谷道の三軒家へ、
與九　さては二子へ網でも打ちに、
市藏　むゝ、たゞ一網に、
兩人　獲物をせうか。（ト此時下手へ以前の駕籠舁出で、）
駕舁　へい、駕籠屋でござります。
半兵　もう少し待つて居てくれ。
駕舁　畏りました。

市藏　いや、駕籠屋が來たら、
お蝶　少しも早く、
半兵　それぢやあ明日、
三人　逢ひませう。
〽明日を約せど人の身は、今宵も知れぬ果敢なさに、
ト半兵衞立上り、下手へ行きかけ、是れが別れといふ思入あつて、
半兵　兄貴、
市藏　何だ。(ト顏を見て、)
半兵　お前、藥はきいたやうか。
市藏　胸が晴れて好い心持だ。
半兵　それではおれも、(トちよつと苦しき思入あつて、)どれ、歸らうか。
〽敷居に躓きよろ〱と、其儘駕籠に乘り移り、垂を下せば舁き上げて、足を早めて急ぎ行く。
ト半兵衞よろ〱として駕籠の中へどんとはひり、口へ手拭を當て垂を下す、駕籠舁かつぎ花道へ急

ぎはひろ、市藏思入あつて、

市藏　おれが病氣を直したいと、寶井樣へお願ひ申し、貰つてくれた此の藥、親身も及ばぬあれが親切、あゝ持つべきものは兄弟だ。（トドン〳〵になる。）

與九　何だか表が騷々しいが、何ぞ間違ひでもあつたか知らぬ。

お蝶　ほんに段々人聲が、近づくやうでござんすぞえ。

市藏　喧嘩は内の者ぢやあねえか。

お蝶　あゝ、案じられることでござんす。

〽案じる向うへ子分の長次、汗を拭き〳〵駈來り、

トばた〳〵になり、花道より以前の長次駈け出來り、門口へ來て、

長次　もし親分、大變が出來やした。

市藏　なに、大變が、

兩人　出來たとは。

長次　小ツ旗本の中間が三四十人押して來て、内を毀しに來た樣子。

市藏　さては屋敷を逃げ去つた、

お蝶　宗治が家に居ると思つて、
與九　取返しに押して來たか。
長次　何にしろ無法な奴等、女を逃がした方がいゝ。
市藏　恐るゝことはねえけれど、家を毀しに來たとあれば、
お蝶　奥においでのおつかさんを、
與九　おれが家へ裏口から、
お蝶　どうぞお頼み申します。
市藏　お蝶、手前は小僧を連れて、
お蝶　裏へ預けて參りませう。
長次　どれ、もう一防ぎして來ようか。

〽勢ひこんで急ぎ行く、こなたは母に怪我させじと、子を抱きてぞ奥へ入る。

ト此内長次は花道へ引返す、お蝶は抱兒を抱き、與九右衞門附いて奥へはひろ。市藏脇差をさし、二重へ腰を掛け居る。

〽折から街も騒がしく、打合ふ音のたゞ中へ、

トドン〳〵、合方、ばた〳〵にて花道より宗治、逆熊の鬘、鉢卷、尻端折り、繩襷にて小丸太を持ち、中間二人紺看板、尻端折り木刀を持ち、立廻りながら出來り、花道にて宗治兩人を相手に立廻つて、中間花道へ逃げてはひる、宗治舞臺へ來り、

宗治　親分、お案じなさいますな。

市藏　おゝ、宗治か、よく屋敷を逃げて來たな。

宗治　愛宕山から擔がれて行つた其日は打たれたが、流石は名うての矢部城五郎、厚い手當に昨日まで足輕部屋に居ましたが、匿つてある又五郎を、三州吉田へ落すといふから、敵と覘ふ渡邊樣へ、お知らせ申しに隙を見て、掃除門から脫けて來ました。

市藏　おゝ、よく其事を知らせに來た。して、押して來た中間は。

宗治　僅二十か三十の小ツ旗本の集り勢、最れから行つて追ひまくれば、必ずお案じなさいますな。

市藏　宗治、賴むぞ。

宗治　合點だ。（トドン〳〵ばた〳〵にて、宗治小丸太を搔込み、逸散に花道へはひる。）

〽又も聞ゆる人音に、市藏きつと向うを見て、（ト市藏きつとなり。）

市藏　明日夜明に屋敷へ押掛け、日頃の意趣を返さうと、思ひの外に不意を喰ひ、此方へ押して來られ

たか、寶井樣のお藥で瘧が落ちた上からは、是れから行つて腕試し。

〽目釘しめして市藏が、勢ひ込んで立出でしが、俄に五臟惱亂し、手足の痺れに打ち驚き、

ト市藏目釘をしめし、門口へ出掛け、行かうとして、苦しき思入にて、

やゝ、俄に手足が痺れて來たは、

ト誂へ床二挺の合方、これへ竹笛ドン／＼を冠せ、市藏行かうとしてどうとなり、

腹の内が轉覆り、五臟六腑がちぎれるかと、思ふばかりの此の苦しみ、こりやたゞことぢやあ、（ト立ち上りひよろ／＼として又どうとなり）ねえわえ。

ト市藏苦しき思入、こゝへ下手より武太平九間八の中間來り、窺ひ寄つて、

武太 九間　市藏、覺悟。

ト右の鳴物にて兩人切つて掛る、市藏身を躱しひよろ／＼としながら、兩人を相手に拔合はして好みの立廻りあつて、

市藏　正しく毒に、中りし樣子。

兩人　何を。

ト又立廻つて九間八を踏附け、武太平を引附け血を吐きかけ、苦しき思入あつて、

市藏　寶井樣のお藥に、毒のあらう謂れはないが、(ト兩人を振拂ひ、立廻つて左右へ切り倒し、其身もどうと
なり、)えゝ、苦しい〳〵。
(虛空を摑んで苦しむ所へ、駈け來る長吉、女房お蝶、それと見るより介抱なし、
ト市藏苦しむ、ドン〳〵ばた〳〵にて、花道より以前の長吉走り出で來る、是れと一緒に、奧よりお
蝶出でびつくりして介抱なし、

長吉　やゝ、親分が此の體は。

お蝶　こりやどうしたのでござんすえ。

市藏　むゝ、毒に中つて此の苦しみ。

長吉　して〳〵それは、

兩人　どういふ譯にて。

市藏　兄弟分の半兵衞が、寶井樣の藥といつて、さつきおれに呑ましたは、誰が指金か知らねえが、此
市藏を殺す毒藥。

兩人　えゝ。(ト兩人びつくりなし)

長吉　何の遺恨で半兵衞が、親分お前に毒藥を、

お蝶　呑ませし趣意は分らねど、
市藏　毒味と言つて其時に、
お蝶　半分藥を呑みたれば、
長吉　毒なら共に死なねばならぬ。
市藏　命を捨てゝ半兵衛が、
お蝶　お前に毒を呑ませしは、
長吉　誰ぞ賴みし、
兩人　者があつて。
市藏　人命惜しむ伊豆屋めが、天下の亂にさせまいと、計りしことではあらざるか。
長吉　すりや、智慧者と言はるゝ、
お蝶　重兵衛どのが、
市藏　えゝ、口惜しい目に、〈ト悔しき思入にて立上り、はつと血を吐くを木の頭〉逢つたなあ。
ト立身にて向うを見込み、口よりだらくと胸へ血汐流れ、長吉お蝶も口惜しき思入、前の合方竹笛にてよろしく、

ひやうし幕

ト道具蔭廻しにて、直引返す。

（半兵衛内の場）――本舞臺平舞臺、向ふ暖簾口、上手屋敷出入の帳を澤山掛け、下手茶壁、上の方障子屋體、いつもの所門口、下の方黒塀、總て半兵衛内の體。兼松、三次紺看板陸尺のこしらへにて、箱火鉢にて茶を入れて居る、側に大きな角行燈此見得よろしく、題目太鼓にて幕明く。

兼松　コウ三次や、おらの所の親分もどういふ氣だか分らねえ、何科もねえお上さんを、無理無體に去つてしまひ、外に情婦でもあるかと思やあ、そんな噂は少しもなく。

三次　何がいやになつたのか、女も好けりやあ心もよく、女郎や藝者の果でねえから、仕事も出來りやあ字も書けるし、是れを無理に去るといふのは、こりやたゞごとぢやアあるめえ。

兼松　何か仔細があるだらうが、これから直に備前町の親分の所へ行くと言つて、留守を頼んで行きなすつたが、

三次　兄弟分なり媒人なり、脫れぬ中ゆゑ其事を、屆けにでも行きなすつたか、それぎり今に歸りなされず。

兼松　廻りの髮結が話すを聞きやあ、備前町に今しがた、大喧嘩があつたといふが、

三次　ちよつと行つて見てえにも、奥に神田の元締が歸りを待つて居なさるから、
兼松　内を明けて行かれもせず、
三次　早く歸つてくんなさりやあいゝに。（ト合方になり、奥より前幕の重兵衞出來り、）
重兵　これ、半兵衞はまだ歸らねえか。
兼松　さつき備前町へ參りましたが、
三次　まだ歸つて參りませぬ。
重兵　さうしてお勝が見えねえが、これも何處へか行つたのか。
兼松　そりやあさつき親分が、詰らぬ事に腹を立て、無理無體に離緣をして、
三次　私共が留めるもきかず、去狀持たして親許へ、お上さんを歸しました。（ト重兵衞思入あつて、）
重兵　それぢやあお勝を無理無體、去狀持たして離緣したとか、大方それは跡々へ、難儀を掛けねえ了簡だらう。
兼松　跡へ難儀を掛けねえとは、
三次　何か仔細がござりますか。
重兵　それも是れも半兵衞が、歸つて來れば分ることだが、早く歸つてくれりやあいゝに。

兼松 ちよつとわつちらが備前町まで、
三次 迎ひに行つて參りませう。
重兵 然し備前町まで、氣の毒だな。
兼松 喧嘩があるといひますから、
三次 行きたい所でござります。
重兵 さういふことなら大儀ながら、
兩人 直行つて參ります。(ト題目太鼓にて、兩人逸散に花道へはひる。)
重兵 備前町に喧嘩があるとは、頼んだことが整はぬか、はて、心掛りなことだなあ。
ト右の鳴物にて、花道より前幕の四ツ手駕籠を舁き、直に舞臺へ來て駕籠を下し、
駕舁 へい、親分參りました。
半兵 おゝ、御苦勞々々、(ト紙に捻りし金を出し、)
駕舁 毎度有難うござります。(ト半兵衛苦痛を怺へる思入にて駕籠より出る、)左樣なら。
兩人 お暇いたします。(ト駕籠を擔ぎ下手へはひる。半兵衛門口へつかまり、)
半兵 今歸りました。

重兵　おゝ、半兵衛歸つたか。（ト半兵衛ひよろ〳〵と内へはひり、べつたり下に居る、）

半兵　お待遠でござりましたらう。（ト肩で息をする、誂への合方になり、重兵衛側へ寄り、）

重兵　天下の亂になるとならぬは、半兵衛こなたにある事ゆゑ、さつきから待つて居た。

半兵　首尾よくいたしてござりまする。

重兵　すりや市藏に、

半兵　呑ませました。（トむゝと言つて半兵衛手拭を口へ當て、苦痛を怺へる、重兵衛見て、）

重兵　こりや半兵衛、面色變つて語音の狂ひ、もしやこなたもあの藥を、

半兵　むゝ、人命助ける爲めとはいへど、兄弟分の市藏に、どうして一人呑ませませう。

重兵　さてはこなたも共々に、

半兵　半分わけて呑みました。

重兵　えゝゝゝゝ。

ト驚く、此時半兵衛手拭へ血を吐き、きつと思入、誂への合方、稽古笛をあしらひ、

半兵　兄貴と共に今日死なねば、天道樣へ濟みませぬ。あゝ苦しい〳〵、腹の中を搔るやうな。

トばた〳〵になり、下手よりお勝出で、これを見て、

お勝　やゝ、こちの人には。（ト縋り泣く）

半兵　おゝお勝か、さつき手前を無理無體、去狀書いて渡したは、明日喧嘩で死ぬ氣ゆゑ、跡の難儀を掛けめえ爲め。

お勝　そんなら、わたしを去つたのは。

半兵　まだ三十にならぬゆゑ、おれが死んだら何處へでも再緣させる其心で、無理を言ひ掛け去つたのだ。

お勝　さうとは知らずお前をば、わたしや恨んで居りました、去つたは情でござんせうが、何で外へ緣附きませう、お前に別れりや髮を切り、生涯尼で暮らす心、是れはお前へ返します。

ト去狀を半兵衞の前へ出す、半兵衞苦しき思入にて、

半兵　あゝ苦しい〳〵、嘸今頃は兄貴も共に、此の苦しみをして居よう。

重兵　苦しからうが天下の爲め、こなたが命を捨てたばかり、矢部との喧嘩も市藏が、世になき上は最早是れまで、さすれば幾人人命が助かることか知れざるぞ。

半兵　かねて遺恨に手廻り陸尺、徒黨をなして矢部の屋敷へ切入つたらば雙方に、死人の出來るは數知れず、其人命を助けたいとお前が言ふのは天理ゆゑ、兄と賴みし市藏に、寶井樣の藥と僞り毒味

をなして呑ませたは、道に缺けたことながら縱令惡人といはゞ言へ、二人が命で千人の命を助ける我が所存。

重兵　天晴健氣なこなたの心底、此功により重兵衞が、半兵衞市藏兩人が家名はきつと立てるから、心殘さず往生しやれ。（ト此以前下手より長吉出來り、門口に窺ひ居て、）

長吉　樣子は門で殘らず聞いたが、さてはそれゆゑ親分に、

半兵　おれが呑ました瘧の藥、

長吉　此の指金は重兵衞さんか。

重兵　いゝや是れは當時世間で、智慧者と人に賞さるゝ、

長吉　すりや老中の、

重兵　イヤ、いづれ其内知れるであらう。（ト本釣鐘、半兵衞四邊を見て、）

半兵　もう人顏が見えねえか。

お勝　そんなら、是れが、

長吉　此世の別れ。（ト半兵衞苦しき思入にて、）

半兵　最早我が身の知死期時。（ト本釣鐘。うつとりとなる、重兵衞側へ寄り、）

重兵　これ、死ぬのは天下の、

半兵　むゝ、(トうなづくを木の頭、)

重兵　爲なるぞ。

トきつと言ふ、半兵衞落入る。お勝縋り泣く、此の模樣やはり本釣鐘にてよろしく、

ひやうし　幕

七幕目

牛込櫻井下宿の場

同御門外堀端の場

麹町荒木浪宅の場

〔役名――荒木政右衞門、柘榴武助、池添孫八、渡邊志津摩、竹内鬼玄丹、櫻井甚八、同下部丑内安達清右衞門、宇佐美新八郎、星合段四郎、八十島喜平、長谷部九兵衞、川角源内、櫻井林左衞門、大坪彦左衞門、澤井又五郎。政右衞門妻お谷、武助妹お賤、茶屋女お清、同お駒等。〕

(櫻井假住居の場)――本舞臺四間常足の二重、上の方一間塗骨障子屋體、眞中正面上手一間の床の間、此次同じく違ひ棚、下手二間の間白地墨繪の襖、此の下手九尺奥深に玄關の裏向き、左右間平棧の戸の裏を見せ、奥へ玄關の式臺を見たる心、玄關の眞中塗骨障子二枚建切りあり、總て牛込邊櫻井假住居の體、平舞臺に酒肴の道具を取散らし、甚八、玄丹其外清右衞門、新八郎、段四郎、嘉平、九兵

衞、源内等、何れも袴一本ざし、劍客者のこしらへにて、並びよく住び、お淸、お駒島田鬘着流し前垂掛け料理屋の女中にて酌をしてゐる、皆々酒盛の模樣よろしく、稚兒が前髮の唄にて幕明く。

玄丹　計らざる今日の御馳走、千萬忝けなく存じまする。
甚八　各方をお招き申し、召上るものもござらねど、どうか御十分におあがり下さい。
淸右　いやも、櫻井氏は御酒家ゆゑ、御酒を御吟味なされし上、
新八　神樂坂の太鼓屋から、料理を取寄せお手厚く、
段四　此の御馳走に預かつては、こりや過さずには居られませぬ。
喜平　第一酌はたぼと申して、お召使か存ぜねども、
九兵　此あでやかなるお女中が、二人掛りで取持つゆゑ、
源内　酒と討死いたすまでも、徳利に後は見せられませぬ。
お淸　お燗のよいのがつきましたれば、
お駒　よろしうお上りなされませ。
お淸　どれ、お銚子のお代り目ゆゑ、
お駒　お燗をつけて參りませう。（ト立たうとするを玄丹留めて）

玄丹　いや、逃げようとて逃がしはせぬ、身共の側に坐つて居やれ。
お清　只今直に參りますから、
お駒　お放しなされて下さりませ。
皆々　どつこい、滅多に逃さぬ〳〵。

ト酒に醉ひたるこなして、お清お駒を追廻すことよろしく、甚八は迷惑なる思入にて、そこらを片附け居る、爰へ上手の障子屋體より、林左衞門袴一本ざしにて出來る、お清お駒林左衞門の後へ隱れる、皆々此體を見て、

玄丹　いや、當家の主人が參られては、
淸右　餘儀なく我慢を、
皆々　せねばならぬ。（ト下に居る、林左衞門よろしく住ひ、）
林左　各方が此の二人を御執心にござるなら、鬮取りにして當つた御仁へ、林左衞門がお讓り申さう。
お淸　いえ〳〵、それでは、
お駒　私どもが。
林左　はて、何事も身共に任せ、心配いたさず控へて居やれ。

玄丹　二人を讓ると仰せあるは、
清右　此の兩人は御兄弟の、
段四　お持物にて、
皆々　ござるかな。
甚八　いや、なか〳〵左樣な。（ト言ふを冠せて。）
林左　はてさ、御別懇の各方へ隱しても詮なきことぢや、先づ〳〵そちは控へて居やれ。（トよろしく呑込ませ、）實は二人はわれ〳〵兄弟、長の旅宿の徒然に、料理屋方から呼び寄せましては、夜分の伽をさせてござるが、御執心ならお讓り申す。
玄丹　いや左樣とも存ぜずして、戲れました粗忽の段、
清右　平に御容赦、
皆々　下されい。
お清　此後みだらななされませぬやう、
お駒　もつとあやまりなされませ。
玄丹
皆々　いやも、此通り〳〵。（ト天窓を下げてよろしく詫びる。）

林左　左様にお詫びをいたされゝば、手前も了簡いたしてござるが、まことはやはり兩人共、料理屋方の雇ひ女、まだ手入らずの様子でござる。

玄丹　さては貴殿にかつがれしか。

甚八　手活と言ひしは當意卽妙。

お淸　みだらなことがござりましては、

お駒　家の暖簾に拘はりまする。

林左　こりや色情のお戯れは、あきらめたがよくござる。（ト是れにて面目なきこなしにて、）

玄丹　して今日のお招きは、

淸右　如何なる御用で、

皆々　ござるよな。

林左　ちと各をお招き申し、御密談の儀がござつて、御入來の儀を願ひしが、よくぞお運び下された。

玄丹　すりや、我々へ、

皆々　御密談とな。（ト林左衞門四邊へ思入あつて、）

林左　そち達二人は休息しやれ。

お清　でも有難い其のお許し、

お駒　お次ぎへ行つて居りませう。（トお清お駒奥へはひる。）

玄丹　して御密談と、仰せあるは、

清右　かの一條で、

皆々　ござるよな。（ト是れより合方になり、）

林左　如何にも、先日各方を此の寓居へお招き申し、御相談せし儀でござるが、我が甥澤井又五郎事内縁ある誼に依り、矢部氏が匿はれし所、生田家より老中方へ取戻しの儀を頼みしゆゑ、伊豆守の内意あつて、旗本たりとも又五郎は最早匿ひ置かれねど、一旦助けし武門の意地、何れになりとも落し遣り全うさせんと評議の上、一先づ三州吉田へ送り、それより九州相良領人吉へ送る手段。

甚八　彼の地は過ぎし昔より隣國他國の者を、繩張り内へ入れぬ國風、假令渡邊荒木等が天を翔り地を走り六十餘州を尋ぬるとも、彼の地へ入ること叶はねば、落ち行く先きは九州の相良領と決定せし由。

林左　氣遣はしきは道中筋、彼の地へ赴く途中にて、志津摩政右衛門に出逢ひし時は、矢部氏の心盡し

も空しくなれば、路次の防ぎを各々方へ頼みくれとの我等へ内談、斯くいふ手前も伯父甥の縁に繋がる又五郎ゆゑ、共々頼み入れたうござるが、御承引は下さるまいか。（ト兩人思入にて言ふ。）

玄丹　其お頼み承知いたした。豫て我々矢部氏より、恩義を蒙り罷り居れば、報いをなすは今此時。

清右　假令荒木がどれ程の、武術鍛錬いたし居るとも、何の恐るゝことやあらん。

新八　道中筋を我々が警固いたして參りなば、大磐石も同然なり、

段四　縱令志津摩や政右衞門に、旅中に於て出逢ふとも、忽ち彼等を返り討ち．

喜平　敵の末は根を斷つて、葉まで枯らせし其上にて、

九兵　大手を振つて又五郎殿、九州相良へ恙なく、

源内　お送り申すでござらうから、お心安く思召されい。（ト是れにて林左衞門甚八悦ばしき思入にて）

林左　斯く速かに各々方が、御承引を下されば、手前に於ても先づは安堵。

甚八　まだ此外に劍道に、達せし御仁を算へなば、今江戸表に三十餘人、

玄丹　日頃荒木の高慢を、皆心憎く思ひ居れば、

新八　それを語らひ花々しく、

段四　道中筋を多人數にて、

喜平　大手を振つて行く時は、
九兵　流石の荒木も指を啣へ、
源內　よもや手出しは相成るまい。
林左　手前も遺恨の重なり居る、政右衞門めに鼻をあかせ、
甚八　日頃の恨みを返さねば、胸のつかへは下りませぬ。
玄丹　して本人の澤井氏には、
新八　矢部氏方にも居られぬ御樣子、
段四　何れに隱れ、
皆々　居られまする。(ト是れにて林左衞門思入あつて)
林左　こりや甚八、仕出しに參りし女共は、暇をやつて歸してしまやれ。
甚八　然し酒宴の興がさめては、
林左　はて、女は口のさがなきものぢや。
甚八　何さま、それも心遣ひ。(ト立たうとするを)
林左　あゝこれ、中間の丑內には、玄關番を言附け置きやれ。

甚八　承知いたしました。（ト甚八奥へはひる、林左衞門四邊へこなしあつて、）

林左　只今お逢はせ申すでござらう。

と合方きつぱりとなり、上手障子屋體を明ける。内より又五郎五十日鬘、着流し一本ざしにて出で、

又五　各方にも久々にて、御面會いたしまする。（トよろしく住ふ。）

玄丹　さては此家へ、又五郎殿には、

清右　いつの程にか、

皆々　參られしか。

林左　夜前竊に參りしゆゑ、一間へ匿ひ置いてござる。

又五　委細はあれにて承はりしが、各方の御厚志の段、千萬忝けなう存じまする。

玄丹　いやも、近頃自贊の大言ながら、我々共が御助力いたせば、鐵壁城にござるも同然。

清右　荒木であらうが鬼であらうが、少しも恐るゝことはなし。

新八　旅中に於て出逢ひなば、見事討取り御覽に入れる。

段四　お心安く思召され、幸ひ只今酒宴の半、

喜平　澤井氏にも一獻過され、御閉居中の御鬱氣など、

九兵　お晴らしあつて我々と、
源内　打ちくつろいでお話しなされい。
又五　添けなくはござりますれど、ちと伯父上に密々にて、内談の儀もござりますれば、跡にてゆるゆる頂戴なさん。
林左　なに、此伯父に内談ありとな。
又五　失禮ながら暫時の間、別間へお立ちを願ひまする。（ト是れにて皆々思入あつて、）
玄丹　いや、御別間へお立ちに及ばぬ、我々共は先刻より、餘程大醉いたしたれば、
喬右　ちと庭中を歩行いたし、氣を晴らしたく思ふ折柄、
新八　暫時の間御免を蒙り、
段四　又候頂戴。
皆々　いたすでござらう。
又五　それでは餘り恐れ入れば、
玄丹　いや、其方が勝手でござる。
林左　然らば御意に隨はん。

玄丹　どりや庭中を、
皆々　拜見いたさう。
　　　　ト玄丹先きに、皆々附いて奥へはひる。跡に又五郎林左衞門殘り、四邊へこなしあつて、
又五　其の御密談外ならず、今日只今又五郎、先非後悔仕つり濟まざることをいたせしと、我が身に愛
林左　して各を遠ざけて、密談ありとは如何なる儀ぢや。
　　想が盡きしゆゑ、自殺いたして相果てませうと、覺悟いたしてござりまする。
林左　何と申す。（ト合方きつばりとなり、）
又五　拙者若氣の至りにて、渡邊靭負を討ちし時、其場で切腹いたしなば、それにて事は相濟まんに、
　　母に一度見えたき恩愛故に死を延はり、其夜矢部の邸へ駈込み匿ひくれと賴みしゆゑ、首尾よく
　　老母を生田家より欺き果せて引揚ぐれど、使者に參りし丹右衞門は役目の越度に切腹いたし、既
　　に生田と旗本の戰爭にも至るべきを、智慧伊豆殿の計らひにて天下の亂にもならざりしが、それ
　　よりして丹右衞門の妹に連添ふ夢の市藏、矢部殿を深く恨み、子分を多人數語らひて旗本衆を相
　　手取り、大亂にもならんとせしを、夫の市藏の兄弟分一時半兵衞が扱ひにてやうやく事は納まり
　　しが、間もなく市藏半兵衞兩人敢果なく同時に命を捨て、まつた此度又五郎を九州へ送る爲めに

防ぎを頼む人々に苦心を掛ける面目なさ、我一人の不所存より、多くの人に苦心させ、又は最期を遂げさするは濟まざる事と悔悟なし、切腹いたし果てますれば、何卒今度の御出立は、お止まり下さるやう、偏に願ひ上げまする。(ト思入にて言ふ。)

林左　いや、其覺悟尤もながら、最早思案が遅れて居る。

又五　なに、思案が遅れましたとは。

林左　さればそちが矢部殿方にて、逢ひ難き母に逢ひ、其身の望み達せし時、切腹なせばそれまでにて、事穩便に相濟まんが、それより長く遺恨を重ね、矢部殿はじめ旗本中意地を立てぬく腰押しゆゑ、只今となり本人の汝が自殺なす時は、旗本衆の恥辱となり、世の物笑ひとならねばならぬ、さすれば汝の恥のみならず、此伯父までが世の人に後指をさゝれにやならぬ、兎にも角にも其方の死すべき場合にあらざれば、必ず短慮は出さぬがよい。

又五　すりや伯父上には拙者の自殺を、無益なりと仰せられるか。

林左　はて毒喰はゞ皿、是非なき事ぢや。

トきつといふ、爰へ奥より以前の甚八先きに、玄丹跡より皆々附添ひ出來り、

甚八　又五郎殿が兄上と、如何なる密談めさるゝかと、襖の陰にて承はりしが、

玄丹　言ひ甲斐のなき其のお覺悟、我々共はお手前の、身寄といふにはあらざれど、
清右　矢部殿はじめ旗本衆の、お頼みゆゑ義に依つて、
新八　一命に替へ、どこがどこまで、防ぎをいたす大和魂。
段四　只今となり左樣なる、卑怯未練を言はるゝは、
嘉平　渡邊靱負を討たれたる大丈夫にも似合はぬ其許。
九兵　信義を盡す旗本衆へ、
源内　それにて事は濟みますまい。（ト皆々雙方より詰寄る。此内又五郎差俯向き居て）
又五　其の御心底を聞く上は、いかで自殺をいたしませうや。
林左　すりや各の意見に附き、
玄丹　御身は自殺を、
皆々　止まりめさるか。
又五　實は斯くいふ又五郎、切腹なさんと申し出せしは、伯父上始め各方の心を引き見る爲ばかり、矢部殿はじめ旗本方まつた極意を極められし一流の達人たる各方が御助力下され、拙者を救ふと仰せあれば龍に翼を得たるも同然、いかで一命捨てませうや、左はさりながら何れも方、一人

として御不平なく日蔭者なる又五郎へ、斯くまで御助力下さるは、如何なる深き宿縁か此身に取りて冥加至極、お禮は詞に盡されませぬ。（トよろしく辭儀をなす。）

林左　そは又五郎ばかりでなく、伯父の身に取り如何ばかりか、

甚八　拙者も共々、

兩人　お禮を申す。

ト林左衞門甚八も辭儀をなす。爰へ奥より丑内燗徳利を持ち出來り、平舞臺へ下り、

丑内　仰せ附けられました、お燗のよいのを持つて參りましてござりまする。（ト出す、林左衞門見て、）

林左　そちは、玄關の番をせぬか。

丑内　へい、玄關の番とお燗の番と、兼帶にいたします。

甚八　燗がついたら用がない、玄關へ參つて番をいたせ。

丑内　燗番をしてはしけようもの。

甚八　何ぢやと。

丑内　いえなに、お玄關番を致します。

ト丑内下手玄關の二重へ上り、後向きにて番をして居る、甚八以前の酒肴の道具を前へ出し、

林左　さゝ、各どうかお始め下さい。
玄丹　先づ改めて御主人から、
林左　然らば、手前が亭主役に。
ト猪口を取上げる、甚八酌をする、此内丑内、後を見返りては酒の呑みたきこなしよろしく、こちらは捨ぜりふにて酒を呑み居る、よき程に下手玄關障子の蔭にて、
政右　頼まう。（ト大きくいふ、丑内びつくりして、）
丑内　どうれ。（ト障子を明ける、向うに政右衛門羽織着流し大小にて立つて居る、丑内横向きに手をつかへ、）どなた様でござりまする。
政右　荒木政右衛門でござる。
丑内　えゝ。（トびつくりなす、）
政右　林左衛門殿御在宅なら御意得たいと、取次いでくりやれ。（ト是れにて丑内思入あつて、）
丑内　主人は今日他出いたしまして、生憎留守でござります。
政右　なに、他出をめされしとか。
丑内　御意にござりまする。

政右　して、何れへ參られたな。
丑內　へい、何れでござりましたか。（ト始終おど／＼して居る、政右衛門扨はといふ思入にて、）
政右　お留守とあれば御歸宅まで、是れにてお待ち申すであらう。
ト玄關へ上り來り、よろしく住ふゆゑ、丑內困る思入にて、
丑內　いえ、お泊りなされますか、お歸りの程も知れませぬゆゑ、又お出直しを願ひまする。
政右　いや又參るも面倒ゆゑ、やはり是れにてお待ち申す、次第に依つては一泊いたす、奧へ御案內下されい。（ト立たうとするゆゑ、あわてゝ留め、）
丑內　あゝもし、お待ち下さりませ、お留守だとは思ひましたが、それともどうか知れませぬから、ちよつと伺つて參りまする。
政右　えゝ、さりとは胡亂な取次、待つて居るから早くさつしやい。
丑內　へい／＼、畏りました。（ト二重より下りてこちらへ來り、）もし旦那樣、參りました／＼。
林左　參りしとは、何が參つたのぢや。
丑內　荒木が參りました／＼。
皆々　なに、政右衛門が。（トびつくり思入、林左衛門小聲になり、）

林左　えゝ氣の利かぬ、なぜ留守だと申さぬのだ。
丑内　如在なく申しましたが、お留守ならお歸りまでお待ち申すと、玄關へ上り坐り込んで居りまする。
玄丹　荒木とあれば又五郎殿、奥へお隱れなされい。
甚八　事によつたら、油斷を見すまし、
玄丹　手前も彼奴に遺恨あれば、
甚八　見られぬ内に、早く〳〵。
ト是れにて又五郎先きに玄丹附いて上手の障子屋臺へはひる。此内政右衛門玄關の所にて四邊を見廻し、油斷をせぬこなしよろしく、林左衛門は丑内に囁く、丑内心得て下手玄關の所へ來り、
丑内　是れはお待遠さまにござりまする、只今客來にござりますれば、暫時是れにてお控へ下されませ。
政右　それでは主人は、奥に居るのか。
丑内　えゝ、（ト心附いて）いえなに私が、思ひ違へました。
政右　おのれ、身共を馬鹿にし居るな。（ト立上り奥へ行かうとするゆゑ留めて）
丑内　先づ〳〵お待ち下さりませ。
政右　えゝ、僞り者めが、退いて居ろ。

ト丑内を突き退け、二重より下りてこちらへ來る、此内林左衞門甚八皆々へ囁き、酒肴の道具を片附けようとする所へ、政右衞門奥へ通りし思入にて、

いや、お氣遣ひな者でござらぬ、以前は和州郡山にて、譽田家の同朋輩荒木政右衞門、御意得に參つた。御酒は好物、其まゝ〳〵。

ト平舞臺上手へ通りよろしく住ふ。是れにて皆々是非なく元の座へ住ふ、甚八下手へ來り丑内を眼顔で叱り附けろ、丑内手眞似にて無理に通つたゆゑ仕方がないと言譯をするこなし、林左衞門前へ出てよろしく住ひ、是れより浮いた合方になり、

林左　珍らしや政右衞門殿、其後は御意得ませぬが、ようこそお尋ね下された、先づお手前にも御勇健にて林左衞門祝着いたす。

政右　仰せの如く譽田家にて、然も同日お暇たまはり、何れ御身は浪花へ出られ、それより江戸へお下りならんと御同道いたす心得なりしが、前夜の内に御出立ありしが、手前は一足後に相成り、到頭浪花の生玉にて其許御兄弟に廻り逢ひ、かねてお約定の眞劍勝負をいたす積りで、日まで取極め御身の旅宿へ出掛け參ると、又も前夜に何れへやら御發足になりしと聞き、餘り殘念に心得ますゆゑ、お跡を追掛け遙々當地まで下つて參つた。先づは御身等兄弟にも、御勇健の體祝着いた

す。是れは何れも御免下さい、手前は荒木政右衛門でござる、以後はお見知り下されい。

ト此内政右衛門始終四邊へ心を附け油斷せぬ思入よろしく、林左衛門苦々しきこなし、甚八こちらへ來り、

甚八 これは〳〵荒木氏にも、當地へお下りでござつたか、存ぜぬ事とて今日までお尋ねも仕らず、よくぞ御入來下さりました。

政右 是れは御舍弟甚八殿、御壯健にて相變らず御酒機嫌と見受けてござるが、御酒の匂ひを嗅ぎましては、此政右衛門こたへられぬ、早速お合をいたすでござる。

甚八 餘り肴が荒れて居れば、外の料理を申し附けませう。

政右 いや〳〵、此の政右衛門肴は好まぬ、酒の良いのがあればよいのだ、久々にて頂戴いたさう。

ト始終四邊へ目を附けるこなし、林左衛門是非なき思入にて、

林左 こりや〳〵弟、御遠慮せずと其儘で、差上げるがよい。

甚八 左樣なら、此儘にて、(ト片附け掛りし酒肴を眞中へ出し、)これ丑内、お燗を直して持つて參れ。

丑内 へい〳〵、畏りました。(ト徳利を持ち奧へはひる。政右衛門四邊を見て、)

政右 こりやお玄關といひ、お座敷といひ、至極よいお間取りぢやが、何者が居つた宅でござる。

甚八　元御殿醫の居つた宅ゆゑ、兎に角時代な好みでござるが、當座の下宿に、（ト言ひ掛けるを、）

林左　えへん／＼。（ト目顔で知らせるゆゑ、）

甚八　いえなに、當分江戸表へ落着きまする心得ゆゑ、先頃居抜きで求めてござる。

政右　いやも、左樣な事とも存ぜぬゆゑ、つい鼻先の麹町へ寓居いたして居りながら、お尋ね申しもいたさなんだが、お宅が知れゝば晝夜を論ぜず、日毎に推參いたすでござる。

林左　又近々に手前事は、未だ日光を見ませぬゆゑ、此の夏中は參らうと存じ、留守になるかも相知れぬ。

政右　なに、日光を御見物とな、それはよい思ひ立ちだ、手前も未だ日光を見物いたした事がなければ、是非とも御同道仕らう。して、いつ頃のお立ちでござる。

林左　いや、まだ何時と治定はせねど、結構なりと承はる、日光ゆゑに見たいと存ずる。

甚八　いや、兄上には其前に、熱海へ湯治にお越しなさるお心組ではござらぬか。

政右　いや、湯治結構、政右衞門熱海とやらへ未だ參つたことがござらぬ、是非ともお誘ひ下されい。

林左　いや、それより成田へ參詣いたさう。

政右　いや、成田結構、手前事は先祖の代より、大信仰。

甚八　はてさて困つた。
政右　や。
甚八　いやさ、おかんの遲いには、困つたものぢや。
（ト此内外皆々政右衞門の透きを窺ひ居れど、政右衞門油斷せぬゆゑ討たれぬこなし、爰へ奥より丑内燗德利を持ち出來り、）
丑内　へい、お燗が出來ました。
政右　御亭主役に林左衞門殿、お手前呑んでお差し下さい。
林左　いや、手前は數獻過してござれば、弟そちが名代いたせ。
甚八　然し、酒には仔細ないか。
丑内　仔細はないかとおつしやりまするは。（ト合點の行かぬ思入）
甚八　いやさ、樽底にでもなつて居つては、體の毒にならうと存じて。
林左　いや、樽底などは申し付けねば、心置きなく呑んだがよい。
甚八　然らば手前が名代いたさう。（ト丑内に酌をさせ、酒を呑む事よろしく、政右衞門是れに目を附け居て、）
政右　いや、お見事々々、早速手前も頂戴いたさう。（ト前にある杯洗を打明け、）是れへ波々汲いで下さ

い。
丑内　ても、喰ひぬけな。
政右　何ぢやと、
丑内　いえ、其位の大きなものでは、お銚子がつぎ切りになります。
政右　なければ跡を、つけるがよい。（ト酒を呑む事よろしく、皆々呆れしこなしにて）
清右　荒木氏には御大酒と、承つて居つたるが、
新八　其のお手際では德利位の、
段四　燗ではなか〳〵間に合ふまい。
喜平　大きな物へつけて來やれ。
丑内　へい〳〵畏りました。（ト奥へはひる、政右衛門思入あつて）
政右　いや、改めて言ふでもないが、郡山出立の砌りは、櫻井氏と出會次第眞劍勝負をいたす積りも、互ひに浪人いたして見ると、命が惜しうござるゆゑ、眞劍よりも劍菱の酒の勝負をいたす方が餘程氣輕で面白い。今度は林左衛門殿、是非とも此の杯を受けて下さい。
ト杯洗を林左衛門の前へ出す。

林左　いや、身共は深く好みませねば、小さいものにてお合をいたさう。

政右　左樣なことを仰せあれど、生玉に於て御舍弟諸共、浪花の藝子を相手にして、大浮れに浮れてござつたを、此の政右衞門見屆け置いた、深く呑めぬとは言はせませぬ。

甚八　いえ、浪花の酒は地酒ゆゑ、幾ら呑んでも醉ひませねど、當地の酒は富士越しゆゑ、度を過しては呑まれませぬ。

政右　何にいたせ、代り目が、早く是れへ參ればよいが。（ト丑內燗鍋へ酒を入れしを持ち出來り、）

丑內　火燗にいたして參りました。

政右　然らば是れへなみ〳〵つぎやれ。

丑內　へい〳〵、畏りました。（ト酌をする、政右衞門思入あつて、）

政右　こりやたゞ呑んでは義理が惡い、林左衞門殿口をお附け下さい。

林左　然らば是れへおあけ下さい。

ト猪口を出す、政右衞門盃洗の酒を分けて遣る、林左衞門呑むゆゑ、政右衞門思入あつて、

政右　どれ、賞翫をいたすでござらう。（トよろしく呑んで、）いや空腹へ戴いたので、僅の酒に酩酊いたした、然らば只今仰せられた日光へでも成田へでも、きつと御同道仕るが、又大阪の生玉の

格で、夜逃などは御卑怯でござるぞ。

林左　いや、あの節は急用が出來、心急きにて御無音せしが、

甚八　今度はきつと手前方より、御沙汰いたしてお誘ひ申さう。

政右　これに列なる何れもが、證人なれば違ひもあるまい、然し油斷は大敵ゆゑ、おいて行かれぬ用心に、毎日朝暮お尋ね申さう。

清右　そりや、我々が證人なれば、

新八　間違ひなどは決してござらぬ。

段四　何は格別、荒木氏には、

喜平　日も晩景に及びますれば、

九兵　先づ今日は御歸宅あつて、

源内　又お出直しなさるがよい。

政右　いやも、出直さうとも〳〵、又今晩の夜半頃には、出直して參り馳走に預かる。

丑内　そんなに來られてたまるものか。

林左　あこれ、舊友なれば大切に、

甚八　大通りまでお送り申せ。

政右　然らば、各御免下さい。（トちよつと辭儀をなして、ひよろ〳〵と立上る。）

清右
皆々　いつぞ、此家で、

　　　ト立ちかゝるを、政右衞門しやんとなつて身構へをするゆゑ皆々控へる、政右衞門知らぬ顏にて、

政右　よい心持に相成つた。（ト丑内附いて下手の玄關の奥へはひる。跡皆々是れを見送り。）

林左　いや、とんだ奴めが舞込み參り、折角の興をさましてござる。

甚八　お熱い所を今一獻、何卒お過し下されい。

清右　いや〳〵、最早十分なれば、

新八　是れにてお納め下されい。

段四　然し、荒木は名譽の達人、

喜平　只今是れに居る内に、

九兵　五體に少しの隙のなきは、

源内　まことに驚き入つてござる。（ト爰へ上手障子屋體より、以前の玄丹出來り。）

玄丹　幸ひ最早夕暮なれば、政右衞門めが跡をつけ、たゞ一刀に切捨てくれん。

林左　玄丹殿には政右衛門に、
甚八　御遺恨にてもござるかな。（ト合方替つて、）
玄丹　何をか包まん、我が小鬢に產れも附かぬ痣のあるは、いつぞや彼れめに出逢ひし時、不覺を取つて組伏せられ入墨されし拙者が無念、何卒遺恨を晴らさんと武術鍛錬いたしたれば、歸りを追掛け途中にて、只一刀に切つて捨て、櫻井氏にも安堵させん。
林左　すりや其許が政右衛門を、
甚八　見事お仕止め下さるとな。
淸右　然し彼れめもさる者ゆゑ、
新八　なか〳〵油斷はいたすまじ、
段四　失禮ながら玄丹どの、
九兵　侮りめさると其許が、
源内　却つて恥辱を取りまするぞ。
玄丹　いや、其のお心添へ忝なけれど、鬼と呼ばれし此の玄丹、以前は不覺を取つたれど、今度はきつと仕果せて、やがて吉左右お知らせ申さん。

林左　然らばお早く、

皆々　玄丹どの。

玄丹　どれ、一療治いたしてくれん。

　卜玄丹刀を引提げ、下手の玄關の奥へはひろ、跡皆々顔見合せ、

清右　玄丹どのが政右衛門を、たゞ一打と言はれしが、

新八　首尾よくまるるでござらうか。

段四　但し不覺を取らるゝか、

喜平　其の腕前は計られねど、

九兵　櫻井氏のお見込みは、

源内　如何でござるか、承はりたい。

林左　玄丹殿の腕前にて、討たれる程の政右衛門なら、手前も苦心はいたさねど、なかく以て竹内の手並で行くべき荒木ならず、

甚八　十に八九は玄丹殿、不覺を取つて歸るでござらう。

清右　すりや荒木には、

皆々　及びませぬか。

林左　何にもいたせ此の下宿を、荒木が知つては事面倒、出し拔く工風がありさうなものぢや。

ト思案の思入、爰へ上手より以前の又五郎卷紙と硯箱を持ち出來り、

又五　お案じあるな伯父者人、政右衞門めを出し拔きまする、工風を拙者いたしてござる。

林左　して、其の工風と、

皆々　申すのは。（ト合方きつばりとなり、又五郎よろしく住ひ、）

又五　工風と申すは外ならず、只今拙者一間にて、荒木の樣子を窺ひしが、なか〳〵以て玄丹殿の手並で討たるゝ彼れならずと、遮つて止めしかど、用ひずして跡を追掛け參りしからは、仕損じて立歸ること目の當り、左すれば却つて大事を悟られ、まつた是れにて各が御集會めされしを、荒木に見られし上からは、拙者が爰に居る事を悟りしやも計り難く、それを出し拔く一工風と、思ひ附いたる手段と申すは、今認めし此の一書を、荒木が寓居の邊近くに、落しおいて拾はせなば、さては疾くにも又五郎は中仙道を逃延びしと敵の機密を探りし所存で、當地を立つは必定なり、其の虚を窺ひ東路より我々共は安泰にて、九州相良へ赴かんと、思案ながらも密書の文體、認めたれば御覧下され。

ト件の卷紙を出す、林左衞門取つて開き見る、此の時甚八手とぼしを點ける。

林左　むゝ、これぞ則ち軍法の奧義で申さば落し文、密書の文面奇妙〳〵。

甚八　然らば下部丑內に、申し含めて計らひませう。

清右　承はれば荒木方に、二人の家來が附添ひ居る由、

新八　相成るべくは其者共が、使ひに出し途中を窺ひ、

段四　態と粗相で取り落せし、樣子に見せかけ拾はせなば、

喜平　其の圖に當り渡邊荒木、當地を立つに疑ひなし、

九兵　何かに附けて澤井氏の、

源內　お年に似合はぬ才の働き、

清右　我々感心、

皆々　いたしてござる。

又五　いや、まだ文體が拙うござれば、

林左　そこは身共が一覽なし、

甚八　直してお貰ひなさるがよい。

又五　どれ、清書に、（ト硯箱を前へ引寄せるを道具替りの知らせ、）取りかゝらうか。

ト又五郎林左衞門に聞きながら密書を認め、皆々左右より助言のこなしよろしく、合方の鐘にて、此の道具廻る。

（牛込外堀端の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う牛込御門を見たるお堀端の書割、左右石垣の張物よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、誂への月をおろし所々に腰を掛ける程の捨石竝べあり、爰に以前の政右衞門捨石へ腰を掛け、摺火打にて煙草を呑み居る、側に以前の玄丹頰冠りにて拔身を持ちしまゝ悶絶して居る、此の見得、水の音合方にて道具留る。

政右　當今爰らへ賊が出て、人をあやめるといふ噂は聞いたが、まだ日が暮れて間もなきに、油斷のならぬ事ではある、人もあらうに此の荒木を討たうなどゝは圖太い奴、然し氣合の樣子では、餘程使へる奴と見える、どれ〳〵面を見てやらう。（ト玄丹の頰冠りを取りよく〳〵見て、）やゝ、此奴はいつぞや箱根にて、我を討たんといたせし山賊、しかも大きな毬栗にて鬼玄丹といへる坊主、命を取るも殺生ゆゑ、異見の印と片小鬢へ入墨なして逃し遣りしが、其後は彼れも改心なし、今竹内と姓を改め、劍道修業をいたすと聞きしが、又も江戸にて我を覘ひ、斯く切り掛けしは、こりや

櫻井に賴まれて參りし奴に相違ない、はてさて憎き奴ではある。（ト煙草のあとをつぎ、吞みながら思入あつて、）斯樣な奴を殺したとて、却つてこつちの刀の穢れ、とあつて此儘見遁しやるも、何とやら忌々しい、艾がはりに耳の穴へ、煙草の灸をするゑてやらう。（ト袂より煙草を出し玄丹の耳の中へ詰込み、其上へ吹殼を載せる、是れにて玄丹の耳の中にて煙草燃ゆる仕掛け、政右衞門此體を見てにつこり笑ひ、）己れが罪己れを責める、阿鼻焦熱の苦しみを見るも目前煙草の仕置、はて、小氣味のよいことではある。

ト唄になり政右衞門悠々と花道へはひる。跡に玄丹の耳に火の燒け込むこなしにて心附き、煙草を拂ひ落し、

玄丹　おのれ荒木め、（ト立たうとして、）あいたゝゝゝ。（ト耳を押へどうとなる、）えゝこれ、一度ならず再度までも、恥辱に恥辱を重ねしか、今に何うするか。（ト立たうとして腰を押へ、）あいたゝゝ。

トどうとなる、爰へ上手より以前の淸右衞門、新八郎、段四郎、喜平出來り、

淸右　いやなに各々、玄丹の歸りの遲いは、遣り損じたに相違ござらぬ。

新八　左樣でござる、口では立派に言はれても、なか〳〵以て政右衞門に及ぶ腕ではござるまい。

段四　然し闇夜の礫と申せば、如何なる手利も不意を喰ひ、

喜平　討たれまいとも申されねば、もう少々行つて見ませう。（ト四人こちらへ來り、玄丹を透し見て）
清右　やゝ、さてこそ荒木が苦しみ居ります。
新八　息の根留めねば、後日の憂ひ。
段四　幸ひ此程求めし一刀、
喜平　新身を試して御覽なされい。
清右　人の見ぬ間に、
四人　われ〳〵が。（ト立ちかゝる、玄丹びつくりして）
玄丹　これ〳〵各、早まりめさるな。
清右　や、さういふ聲は、
四人　玄丹どの。
玄丹　お目に掛るも面目ないが、たゞ一討と思ひの外、却つてこつちが當身を喰ひ、まだ其上に耳の中へ灰吹同樣吹殼の火をはたかれて大火傷、あつい仕置に逢ひました。
清右　いやも、鬼と呼ばれた玄丹殿を、
新八　たゞ一摑みに取つて押へ、

段四　斯樣な憂き目に逢はせるとは。
喜平　正しく鐘馗の再來ならん。
玄丹　荒木は鐘馗の再來でも、こつちはやう〳〵正氣に再生、何れも腰を抱へて下さい。
淸右
四人　さて〳〵迷惑千萬だ。（ト四人玄丹を手舁きにかき上げようとして持ち上らぬゆゑ、）
淸右　どうやら是れは、わい〳〵天王。
新八　兎角金魚に事なかれ。
段四　餘り馬鹿げたはなし龜。
喜平　大きな形の牛もう〳〵。
淸右　布袋の土佛で、
玄丹　つんぼ惠比壽にならねばよいが。
ト四人にてやつと手舁きにして玄丹を連れ上手へはひる。跡時の鐘合方になり、花道より武助頰冠り
そぼろなるこしらへにて、酒菰を引掛け、非人の思入にて出來り、花道に留り、
武助　日が暮れるとは斯うやつて、非人姿に身を窶し、こゝらあたりを徘徊するも、矢部の屋敷で匿ひし敵又五郎も此間、御老中から御沙汰があつて、最早匿ひ置く事ならず、何方へか逃せし樣子、

其の居所が分らぬゆゑ孫八諸共姿を替へ、毎夜斯うして尋ぬれど、今に於て一向分らず、志津摩樣を始めとして、われ〳〵までも朝夕に、神や佛をお願ひ申せど、何で利益のなき事かと勿體ないが神佛を、お恨み申し愚癡が出る。どれ、向うへ行きお堀端で、往來の噂を聞きかぢらうか。

ト舞臺へ來る、此時上手にて人音するゆゑ、武助後の松の木の蔭へ小隱れする、爰へ上手より以前の丑内尻端折り、一本ざしになり、酒に醉ひたるこなしにて出來り、

丑内　ゲエイ、今日は大事のお使ひだから附合つちやあ居られねえといふに、到頭こんなに呑ませやあがつた、ゲエイおれの使ひに行く屋敷はどつちの方へ行くのであひたか、見當を忘れてしまつた。

トひよろ〳〵しながら花道の方へ行かうとする、武助後より窺ひ出で、丑内の顏を覗き込む、丑内さてはといふこなしあつて、態と生醉の思入にて、

やい、何でおれの面を見やあがるのだ、憚りながら緩怠ながら、日本一の丑内さまだ、まご〳〵して踏み殺されやあがるな。（ト丑内態と手紙を舞臺へ落し、丑内下手へはひる、武助是れを見送り、）

武助　何れの彼は中間なるか、足も利かざる醉漢ながら、大事な使ひと言ひしゆゑ若しやそれかと思ひしが、やつぱり心の迷ひであつた。（ト上手へ行かうとして件の手紙を拾ひ、）さては今の喰ひどれが、落して行つたと見えるわえ。（ト空へかざし見て、）何だ。『三軒家樣へ櫻井林左衞門、』此の三軒家

と記せしは、正しく澤井を匿ひし矢部城五郎の邸の地名、こりやいゝ物が手に入つた。(ト封を開き空へかざし、)『時分柄兎角不順の時候に御座候へ共』いや、こんな所はどうでもいゝ、『扨尊公様篤く御懇請なし下され候澤井又五郎儀、貴命に隨ひ信州松本在へ竊に出立いたさせ、中仙道を罷り登り候所、道中恙なく彼の地に到着仕り候由、拙者方へ申し送り候間恐れながら御休意なし下さるべく候、尊公様はじめ諸家様へ御禮狀の儀は、跡より差出し候由、次に拙者兄弟當地を引拂ひ候ては、渡邊一家の者共近邊へ罷り下り居り候間、心附き、彼の地へ附け行き候やも計り難く、當分江戸表に在留いたし候心得に御座候間、近日參邸之上萬謝奉つり候。』(ト讀終り、)むゝ、すりや又五郎は信州へ最早竊に立越えたるか、さうとも知らず御主人方、在所を探る其爲に幾瀨の御苦勞なされしか、片時も早く此密書、志津摩樣へお見せ申さん。

ト花道の方へ行きにかゝる、此前方下手より以前の丑内出で、後に窺ひ居て、

丑内　非人め、手紙を拾やあがつたな。

ト武助に組附くを引附け、

武助　えゝ、捨て置く奴ではなけれども。

丑内　拾つた手紙を返しやあがれ。

武助　うぬらに構ふ隙はないわえ。

ト丑内を投げ退け、武助逸散に花道へはひる、丑内起上り、跡を見送り舌を出し、

丑内　大べらぼうめが。

トにつたり笑ふ、爰へ上手より以前の又五郎、着流し大小深編笠にて出來り、是れを見送り、

又五　是れでこつちの思ふ壺、うまく參つて重疊々々。(ト編笠を取る、丑内見て、)

丑内　あなたは又五郎樣。

又五　あこれ、(ト押へ、兩人四邊へこなし、時の鐘になり、)あの一通が政右衛門や志津摩の手に入り披見なさば、此又五郎は信州へ落ちしと思ひ打ち驚き、跡を追掛け參るは必定、中仙道の山中を彷徨ひ歩く其内に道も平地の東路を、ゆる／＼登り吉田から船へ乘込み九州相良へ赴きなば、最早一生安泰にて、彼等に討たるゝ氣遣ひなし、はてよき手段もあるものぢや。(トにつたりこなし、)

丑内　其使ひを仕果せて、投げられました御褒美に、金子を投げて下さりませ。

又五　褒美を遣はす其代り、今一働きいたしてくりやれ。

丑内　して、其御用は。

又五　是れへ參れ。(丑内に囁く、)

丑内　そんなら荒木の浪宅へ。（ト又五郎懐中より小判を一枚出し、）

又五　忍ぶ褒美は、山吹色。（ト投げてやる、丑内手に取上げ、）

丑内　こりや是れ小判で、（ト大きくいふを、）

又五　あこれ、跡は手前の、（ト編笠を取上げるを道具替りの知らせ、）働き次第だ。
　四邊を窺ふ、丑内は小判を懐へ入れる、此模様、水の音、時の鐘には道具廻る。

（荒木浪宅の場）――本舞臺常足の二重、上手一間反故張りの障子屋臺、正面上手一間の押入、此下手鼠の破れ壁、下の方一間臺所へ行く口の心得にて、反故張りの障子を建切り、いつもの所枝折戸、此外正面板塀の見切り、此前に玉椿の生垣、總て麹町荒木浪宅庭口の體、二重よき所に行燈を點し、平舞臺上手に志津摩、下手に孫八双方着流し襷鉢巻にて竹刀を持ち、劍術の稽古をして居る、此の見得白囃子にて道具留る。と兩人試合の立廻りちよつとあつて、ト、孫八志津摩に竹刀を打ち落され、下手へ退り下に居て、

孫八　恐れ入りましてござりまする。

志津　久しく稽古をいたさぬゆゑ、互ひに手並が下りしやうぢやが、是れを思へば困窮ほど、世に恐ろ

しきものはない。（ト兩人襷鉢卷を取り下に居る、是れより合方になり、）

孫八　いやも、二年越しの御浪々に、お蓄へとても段々にお遣ひなされて乏しくなり、今は貧苦の此お暮し、敵の所在を探りますので御主人樣もわれ〴〵も、日毎に諸方を駈け歩き、内にとては居りませぬゆゑ、ついお稽古も怠り勝、然し拙者は下りましても、あなた樣には例ながら、天晴れのお腕前、まだ御手練は下りませぬ。

志津　いや〳〵餘程當今は腕前が下つたやうぢや、何は然れ兄上や、武助が歸つて參つたら、又差替つてそちと二人、所在を探りに出るといたさう。

孫八　今晩は宵の口を武助が廻ると申しましたゆゑ、九つから夜明けまで拙者が代つて出ますから、御同道をなされますなら、只今のうち御寢なすつて、お目をお休めなされませ。

志津　然らば奧でまどろむ間、兄上がお歸りあつたら、遠慮なく起してくりやれ。

孫八　畏りましてござります。

志津　どりや、今の内寐て置かうか。

ト時の鐘にて志津摩は上手の障子屋體へはひる。孫八は件の竹刀を二本持ち、下手の障子の内へはひる。時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽住侘びし庭に咲いても杜若、過ぎし盛りは名のみにて、若紫の主從が忍ぶ姿の高祖頭巾、人目白齒も手拭に面を覆ひ夜の道、そこが此處かと立ち休らひ、

ト此内花道よりお谷着流しにて頭巾を冠り、お賤同じく着流しにて手拭を冠り、附添ひ出て來り花道に留り、

お賤 もし御新造様只今あとの辻番にて承りましてござりまするが、生垣のある庭口が近頃越して參つた家と、數へてくれましてござりますれば、あれに相違はござりませぬ。

お谷 故郷といへどこちらの方へは、つひぞ來たことがないゆゑに、何處がどうやら分らねど、そなたの案内でやう／＼と、夜道を辿つて來たわいなう。

お賤 何にいたせ向うへ參つて、聞いて見るといたしませう。

お谷 どうぞさうしてたもひなう。

〽月をよすがに垣の外、慥にこゝと差寄つて、（ト兩人舞臺へ來り、お賤枝折戸の外へ立寄り、）

お賤 御免下さりませ、ちと物がお尋ね申したうござりまする。

〽音なう聲に勝手より、（ト下手障子の内にて、）

孫八 はい／＼、（ト答へて出來り、平舞臺枝折戸の所へ來て、）どちらからお出でござります。

〽いふは覺えの家來の聲。

お谷　ありや、孫八の聲ぢやわいなう。

お賤　ほんに左樣でござりまする。（ト嬉しきこなし、孫八枝折戸を明けながら）

孫八　つひぞ見馴れぬお女中連れ、門違ひではござりませぬか。

お賤　孫八どの、わたしでござんす。

〽手拭取れば見てびつくり、

孫八　やゝこなたは、

お賤　おゝ孫八どのか、

〽飛びつく程の戀しさを、言はんとせしがお谷の目を恥ぢ。

御新造樣がいらしたわいなあ。

孫八　なに、御新造樣が。

〽工合もわるく枝折戸を、はたと立て切り詞なし。

ト孫八枝折戸をしめ、押へてぢつとこなし、お賤合點の行かぬ思入にて、

お賤　もし孫八どの、御新造樣がいらつしやつたに、なぜ爰をしめなさんした、ちよつと開けて下さん

せ。

孫八　いや折角のお出でなれど、旦那樣のおつしやり附けゆゑ、内へはお入れ申されませぬ。

お谷　そんならそれゆゑ、

お賤　御新造樣でも、

孫八　お連れ申して歸つて下さい。

〽言ふも切なき家來の身、こなたは心察し遣り、（ト雙方よろしくこなしあつて、）

お谷　こりやさう言やるも無理でもない。（ト合方になり、）そも國元を出立の折、嚴しく仰せ附りしゆゑ、わしも合點はして居りますが、二年此方御流浪に嘸御不自由でいらつしやらうと、明暮お案じ申せしに、此頃人の噂にて旦那樣を始めとして主從四人江戸へ下り、麹町の裏通りに借宅をしてござると聞き、餘りの事のお懷しさ、晝は人目を憚るゆゑ暮れるを待ちてそこ爰を尋ねてやう〳〵來た程に、どうぞよしなに旦那樣へ、取次をしてたもひなう。

〽賴むとばかり枝折戸に、取縋つてぞ涙聲、孫八は氣の毒顏。（ト孫八思入あつて、）

孫八　そりやもうお宅にいらつしやれば、お小言を聞くまでもお取次をいたしまするが、折惡しく今日は旦那樣がお留守といひ、又お賤どのゝ兄御にも他出いたして居りませねば、私一人の了簡で取

計らひは出來ませぬ、それゆゑ今宵は出直して、又明晩にもいらつしやりませ。

〽重い口ゆゑいとゞ猶、言ひにくさうに斷れば、お賤は聞くも怨めしく。（トお賤前へ出て、）

お賤 これ孫八どの、お留守であるなら猶のこと、旦那樣へ內證でも內へお通し申すのが、家來の誼ぢやござんせぬか、如何に堅いが持前とて幾瀨の思ひでやう／＼と尋ねてお出でなされしものを、外へ立たせて內へも入れず、出直してとはあんまりな、世が世であればわたしとても、お前の女房ぢやござんせぬか。

〽ちつとは女房の心をも、不便なものぢやと思召し、わたしの言ふこと聞き分けて、

お通し申して下さんせいなあ。

孫八 さゝ、其恨みは尤だが、御新造樣一人なら、お留守の事ゆゑ志津摩樣へ申し上げても取計らふが、そなたが一緒に附いて來ては、此孫八が逢ひたさゆゑと、疑ひ受けるが殘念だ、それで內へは入れられぬ。

お賤 そんなら是れからわたし一人、築地のお宅へ歸りますから、御新造樣のみ唯お一人、お通し申して下さんせ。

孫八 さあ、それは。

お賤　それもならぬと言はしやんすは、あんまり詮がござんせぬ。

〽つれなき人と怨み泣き、側にお谷が理を諭し、（トお谷思入あつて、）

お谷　いや、恨むのはこちらが無理、我が父上の事よりして艱難辛苦の其中へ、逢ひに來たのはこちらが不覺、此儘歸りもしませうが、たつた一言知らせたいは二年此方母上が、お煩ひにて此程は枕も上らぬ御大病、若しものことでもある時は、わしの不念になりますゆゑ、弟志津摩や旦那様へ跡でよしなに言うてたも、わしはそなたの詞を立てゝ、少しも早く歸りませう。

ト此内上手障子を明け以前の志津摩出來り、是れを聞いて居て。

志津　すりや母人には御大病とな。（トびつくり思入、お賤枝折戸の外にて目早く見て、）

お賤　あれにござるは、志津摩樣。

お谷　えゝ、どれ、どこに。

ト伸び上る、是れにて志津摩障子を建切る、孫八雙方へこなしあつてぢつと思入。

〽一目逢ひたき兄弟も、柵む義理と生垣に、隔てられたる月の影、さし込む癪のあるぞとは知らで我が家の庭口へ、立歸つたる政右衞門、合點行かずと打ち通れば孫八奥へ聲を掛け、

ト此内お谷愁ひのこなしにてトヾ癪の差込む思入、お賤是れを介抱して居る、よき程に花道より以前

の政右衛門出來り、お谷お賤を見る、お賤顔を背けてお谷を隱す、政右衛門心得ぬこなしにて枝折戸の所へ來る、孫八此體を見て枝折戸を明ける、政右衛門内へはひり、二重へよろしく住ふ、孫八障子の内へ思入あつて、

孫八　志津摩樣、旦那樣がお歸りでござりまする。（ト障子の内にて、）

志津　なに、兄上のお歸りとな。（ト上手より志津摩出來り、二重下手へ住ふ、孫八は平舞臺下手へ住ひ、）いつよりお遲い御歸宅ゆゑ、お案じ申して居りました。

孫八　先づは是れにて拙者めも、安心いたしてござりまする。

〽折目正しく慇懃に、會釋も武士の禮儀なり、政右衛門機嫌よく、

ト三人よろしくこなしあつて、

政右　ちと存じ寄りの所あつて、寄道いたして歸りしゆゑ、思ひの外暇取りしが、留守中何も替りはなきか。

志津　いえ、お留守中には何事も、

孫八　替りし事はござりませぬ。

〽垣の外には差惱む、癪をお賤が打ち案じ、（トお賤よろしくあつて、）

お賤　もし御新造樣、旦那樣がお歸りゆゑ、爰には長く居られませぬ。

お谷　ても折惡い此の惱み、我慢をしながら行かうわいなう。

〽怺へ〳〵て立ち立れど、又差込みてどうと伏し、側の見る目もいぢらし。

トお谷よろしくこなし。

お賤　こりやどうしたらよからうなあ。

ト當惑のこなし、此内孫八志津摩は枝折戸の外を案じるこなし、政右衞門扨はといふこなしあつて、態と氣を替へ。

政右　こりや孫八、表に何か居るではないか。

孫八　へい、御新造樣でござりまする。

政右　なに、谷が參つた。

孫八　へい、左樣にござりまする。

〽明けて言はれぬ政右衞門、態と怒りの面色にて。（ト政右衞門思入あつて、）

政右　さりとては怪しからぬ奴ぢや、出立の折あれ程に申し聞かせて置いたるに、我が言附を反故になし、尋ねて參るなんぞとは言はうやうなき不所存もの、なぜそち達にて追ひ返さぬぞ。

孫八　いえ旦那様のお留守といひ、豫ての仰せもござりますれば、おいたはしくも枝折を建切りお庭の内へも入れませず、御異見申して居る内に、お癪が差込みあのお惱み、相成るべくはこちらへ入れ、お藥にても差上げて、お癪を治めし其上にて、歸して上げたうござります。

政右　いや〳〵それはよしなき事ぢや、よくぞ日頃の忠義を貫き此の邸内へ入れざりしぞ、それに引替へ女には詞を背く憎き奴、持病で死なばそれまでぢや。

〽立派に言へど愛別の、思ひは同じ二世の緣、それと志津摩が取繕ひ。

ト政右衛門よろしくこなし、志津摩前へ出で、

志津　拙者もそれゆゑ、姉上の、お聲と知れど一間に隱れ、對面とてもいたしませねど、障子越しに承はれば、母が此程大病にて昨今九死一生ゆゑ、それを知らせに參りしと申されましてござります。

政右　なに姑には御大病とな、

〽驚く胸も怒りに紛らし、（ト政右衛門思入あつて氣を替へ、）

やあ、其御病氣を臺に出し參るなどゝは重々不埓、とつとゝ早く歸してしまへ。

〽外にはそれと聞き取りて、（トお谷思入あつて、）

お谷　母の病氣を假託に夫に逢はんと參りしかど、其お呵りは無理ならねど、嘘僞りではござりませぬ、お年は召せど母上は男勝りの御氣性ゆゑ、悴志津摩や聟殿に逢ひたうないとおつしやれども、

〽此世にある内、たゞ一目逢度き御樣子お側にて、

お察し申せばおいたはしく、せめて家來の林平を使ひに立てんと思へども、是れも風邪で居りますゆゑ、母の看病頼みまして、お知らせ申しに參りました。

〽身の言譯を傍より、お賤が猶も口を添へ、

お賤　御新造樣は旦那樣のお心をお察し遊ばし、お呵り受ける元なればとおつしやりましてござりますれど、お勸め申して私がお供いたしてござりますれば、此身の罪は幾重にもお許しなされて下さりませ。

〽詫びる手さへも隔ての外、破れぬ垣ぞ是非なけれ、政右衛門はそれとなく、

ト此内お賤よろしくこなし、政右衛門思入あつて、

政右　志津摩孫八よう聞きやれ。（ト床の合方になり、）凡そ五常の其内にて、主君へ忠義親へ孝、盡すは自然の道にして、是れ人倫の常なれば、我れも忠孝二道を立て誠の武士と呼ばれたけれど、抑々今度の仇討は私ならぬ大義にして、首尾よく本意を遂げざれば、われ／＼のみの恥辱ならず、生

田譽田の御兩家へ恥辱を與ふる大事ゆゑ、既に先年國元を發足いたす其砌り正八幡へ誓ひを立て大願成就のそれまでは、餘事に心を寄せまじと義を金鐵に固めたれば、假令姑が大病にて敢なき御最期遂げられても、是非なき事とあきらめれば、そち達二人も心撓まず恩愛の情を去り、只一心に武道の意地、貫く大義を心掛けよ、事成る上は如何やうとも、詫びは未來で出來ることぢや。

〽それと言はねど理を盡し、二人へ語る夫の詞、聞いて心を取直し、（トお谷こなしあつて、）

お谷　ても有難いあのお詞、それと聞いてはなかくに、長居するだけ夫の恥、少しも早う歸りませう。

お賤　それでもお癪が治まりませねば、途中でお困りなされませう。

お谷　いや、旦那樣や弟の長の困苦に比ぶれば、此癪位は何でもない、怺へて歸らにやならぬわいなう。

〽歸りともなき別れ路も、跡に枝折の庭口や、さし込む月の影ならで、癪の惱みを押し怺へ、心細くも出で行く、

ト此内お谷名殘惜しきこなしよろしく、お賤これを介抱しながら兩人愁ひのこなしにて、花道へはひる、政右衞門外へ思入あつて、

政右　こりや孫八、立歸つたか見て參れ。

孫八　はツ。(トこちらへ來り外を見廻し元へ返り、)最早すご〳〵お歸りの、御樣子でござりまする。

政右　おゝ、それでよい〳〵。して、武助は未だ歸らぬか。

志津　日暮を待つて姿を窶し、先刻宅を出ましたまゝ、未だ歸つて參りませぬ。

孫八　大方四谷か牛込邊を、搜索いたして居りませう。

政右　いや、それに就き今日は、怪しき奴に出逢うたわえ。

志津　して、兄上には何者に。

孫八　お出逢ひなされてござりまする。(ト是れより合方替つて)

政右　されば、某五ケ年以前諸國を廻歷いたせし折、相州箱根の山中にて、山賊に出會しが、一命助け意見を加へ仕置の爲と面體へ、入墨をして逃せしが、又候今日そやつに出逢ひ、牛込御門の濠端へ其儘投げ捨て歸りしが、察する所彼奴めも林左衞門に同意の者、必ず油斷は相成らぬ。

志津　して、此程より櫻井の所在をお尋ねなされしが。

孫八　何れに居るか、彼奴らの、未だ住居は知れませぬか。

政右　やう〳〵今日相知れた。

志津　して、どの邊に、

兩人　居りましたな。

政右　神樂坂の邊にて、圖らず聞き出す彼等が所在、これ幸ひと尋ね行き、不意を喰せて置いたれば、追々樣子を探るであらう。

志津　すりや住宅が相知れましたか、それぞ手蔓を求める小口。

孫八　どうぞいたして又五郎の、在所を早く知りたいものだ。

ト此時ばた〱になり、花道より以前の武助走り出來り、直に舞臺庭口へ來りて枝折戸を明け、

武助　旦那樣、殘念なことがござりまする。

政右　おゝ、武助歸りしか、

志津　して、殘念とは如何なる譯、

孫八　早く樣子を言はつしやい。

武助　牛込御門のお濠端にて、測らず手に入る此密書、中を御披見下さりませ。

ト件の密書を政右衛門の前へ出す、政右衛門手早く開き行燈の明りにて讀上げる。

政右　「一時分柄兎角不順之時候に御座候へ共、益御淸榮にいらせられ恐悅に存じ奉つり候、扨尊公樣

厚く御懇請なし下され候澤井又五郎儀、貴命に隨ひ、信州松木在へ竊に出立いたさせ、中仙道を罷り登り候所、道中恙なく彼の地へ到着仕り候由拙者方へ申し送り候間、恐れながら御休意なし下さるべく候、尊公樣始め諸家樣へ御禮狀の儀は跡より差出し候由、次に拙者共兄弟當地を引拂ひ候ては、渡邊一家の者近邊へ罷り下り居り候間心附き、彼の地へ附け行き候やも計りがたく、當分江戸表に在留いたし候心得に御座候間、近日參邸の上萬謝奉つり候以上、三軒家樣へ櫻井林左衞門。」(ト讀終り思入あつて、)むゝ、して此手紙は如何して其方の手に入つたるぞ。

武助　牛込御門のお濠端を姿を窶し通りまするると、喰ひ醉つたる一人の中間、大事の使ひに途中にて吞み過したと呟きながら、足もしどろに行き過ぎるを、如何なる奴かと面體を覗き込みしを立腹いたし、喧嘩を賣らうといたすのを、欺し賺して別れし跡、落ち散りありし其の一通。

志津　さては敵の又五郎は、はや信州へ逃げ延びしか。

孫八　さうとも知らず浮々と、當地で所在を尋ねしが。

武助　たゞ此上は一刻も、早く御旅行なされませ。(ト此中政右衞門思入あつて、)

政右　して此書翰を拾ひし時、狀箱へでも入れてありしか。

武助　いいえ、其儘で落ち散りありしを、拾ひましてござりまする。

政右　はて、あざとくも巧み居つた。

志津　そは、何ゆゑで、

三人　ござりまする。（ト誂への合方になり）

政右　其意を得ざる仔細と申すは、小祿たりとも旗本の矢部は天下の直參なり、又櫻井の身分と申すは元陪臣にて當時浪人、矢部の身分に比べては餘程の格が違ひ居れば、假令粗末な狀箱たりとも書翰を納め封印なし、謹んで送るべきを、まして密事の狀なるに如何に粗忽の櫻井でも、中間小者に輕々しく持たせて送るいはれなし、こりや恐らくは謀書にて、我々共を先きへ立たせ、跡よりゆる／＼立たんといふ、彼らが巧みに相違ない。（ト此內志津摩件の手紙を取上げ、よく／＼見て）

志津　其仰せにて思ひ當る、是れなる手跡は又五郎が、認めたるに相違なし。

政右　我も櫻井兄弟の、書風はかねて存じ居れば、一目見るより疑うたり。

孫八　さてはいよ／＼謀書であつたか、危い事でござりました。

武助　いやも、そこへ心の附きませぬが、愚鈍に產れし拙者が淺慮、只文體を見たばかりで、よき手掛りと存じましたが、今々思へば醉漢めを、一緒に引立てくればよかつた。

政右　して、そやつめの面體を其方しかと見屆けしか。
武助　宵月ゆゑにとつくりと見屆けましてござりまするが、下郎に似合はず色白く、外は何れも常體なれど、人並勝れて兩眼が、餘程窪んで居りました。
政右　むゝ、それぞ今日櫻井方にて、我が取次に出でたる下郎。
武助　すりや旦那樣には櫻井の、住居をお見出しなされしか。
志津　これなる書狀が又五郎の、手跡と知れし上からは、
孫八　櫻井方に又五郎が、匿ひあらうも計られず、
政右　こりや櫻井の宅へ押掛け、とくと吟味をいたすが近道。
志津　然らば直さま、我々も、
武助　お供いたすで、
武助孫八　ござりませう。
政右　おゝ、三人とも支度いたせ。
三人　はッ。
ト皆々きつとなつて立上る、此時以前下手より大坪彦左衞門、羽織袴大小にて出、枝折戸の外に窺居て、

彥左　いや、其の思案暫く待たれよ。（トずつと這入るゆゑ、皆々びつくりなし、）
政右　やゝ、何人なるかと存ぜしに、思ひがけなき大坪氏、
志津　すりや大坪の、
三人　御老體とな。（ト三人共きつとなるを政右衞門留めて、）
政右　あこれ、無禮をしては相成らぬ、次へ下つて控へてよからう。
　　　トきつと言ふ、是れにて三人是非なく控へる。
彥左　政右衞門には彥左衞門、久々にて對面いたすが、何時も堅固で祝着いたす。
政右　見苦しけれど、先づ〳〵是れへ。
彥左　然らば、許さつしやい。（ト彥左衞門二重上手へ通りよろしく住ふ、政右衞門前へ出て、）
政右　誠に其後は打絕えまして、お目通りをも仕らねど、何時に替らぬ御勇健の體、ようこそ御入來下さりました。
彥左　して、それに居るが聞き及ぶ、御身の義弟志津摩どのか。
政右　それ、御挨拶を申し上げい。
志津　若年者の渡邊志津摩、以後はお見知り下さりませう。

トよろしく辭儀をなす、此内武助孫八は顔見合せ、油斷がならぬといふ思入あつて、兩人共身構へをして居るゆゑ、政右衞門見て、

政右　こりや兩人、お茶煙草盆の支度をせぬか。

武助
孫八　へい。（トもぢ〳〵して居る。彦左衞門思入あつて）

彦左　いや〳〵必ず構はつしやるな、何でも物は早いがよい、早速申し出さう。（ト合方になり）扨此度の一條に附き、旗本共が意地を突張り、生田殿を相手となし一合戰いたさうなどゝ、血の氣の多い若者等が、向う見ずな事をして天下を騷がす所であつたが、老中伊豆の計らひにて事なく納まる我が悅び、定めて同じ旗本ゆゑ此大坪も矢部などゝ同意ならんと思ふであらうが、抑最初の相談より我を省きし仲間の奴等、癪に障つてならぬから、邪魔はするとも荷擔はせぬ、殊にあいつらは我意に募り横に車を通す氣ゆゑ、彦左衞門の氣には入らぬ、直な心の御身等に內通をして助力するから、其の氣で安心するがよい。

政右　すりや大坪の御老體には、日頃水魚のお交りの、仲間たりとも御荷擔めされず、

志津　世に薄命なるわれ〳〵へ、

武助　御助力なされて、

孫八　下さりますとな。

彥左　それと申すも彥左衞門、曲りし事が嫌ひゆゑ、忠孝全き御身等の、心に感じ二つには、荒木が師匠と賴みたる但馬殿とは其以前入懇を結びし我等ゆゑ、其誼にて蔭ながら詞の助太刀いたす積りだ。

ト是れにて皆々悅ばしきこなしにて、

政右　はゝツ、御仁情なる其お詞、

志津　承はりて我々も、

武助　心の丈夫此上なし、

孫八　身の面目と有難く、

政右　一統御禮、

四人　申し上げまする。

彥左　其儀に附いて老人が、態々今宵參つたは、旗本共にも手出しをさせず、生田譽田の兩家に於ても高見で見物いたせといふ、三方四方の爲になる、よき上策を思ひ附き、相談をしに出て參つた。

政右　して、御賢慮の上策とは、

志津　如何なる機密にござりまするか。
武助　心得の爲われ〳〵へも、
孫八　仰せ聞けられ、
武助
孫八　下さりませ。
彦左　然し手狹な此宅では、
志津　壁に耳ある世の習ひ、
政右　そち達二人は表へ參り、密談のうち心を附けよ。
武助　何さま、他聞の憚りあれば、
孫八　見張りをいたすでござりませう。（ト是れにて武助孫八下手へはひる。彦左衞門四邊へ思入あつて）
彦左　兩人近う。
政右
志津　はツ。（ト彦左衞門の前へ進む、是れより誂への合方になり）
彦左　澤井又五郎の所在といふは、今御身等の鑑定の如く、神樂坂なる假住居櫻井方に隱れ居る。（ト是れにて政右衞門志津摩扨はといふこなしにてきつとなる）さゝ、そこを直ちに附入つて討つのは易きことながら今江戸表で事をなさば、彼れを是れまで腰押しせし旗本共が一致なし、如何なる亂

暴なさんも知れず、さすれば一旦鎭まりし生田家にても人數を繰出し、忽ち天下の膝許も動亂なすは目のあたり、そこを存じて何事も我慢いたして期を延さば、今般澤井又五郎を旗本共の賴みにより警固の浪士三十餘人、道中筋の防ぎをなし、九州相良へ送るとあれば、程よき場所まで見遁しおき、不意に起つて旅中にて花々しく討取るときは、旗本共も出る事ならず、生田家にても深く悅び、そち達二人も將軍家へ憚りなくして、働かれんが、此の謀略は何うであらう。

ト是れにて政右衞門小膝を打ち、

政右　はゝツ、恐れ入つたる御計策、仰せの通り江戸表で又五郎を討取る時は、上へ對し憚りあれば、道中筋へ引出し地の理を選み討つのが上策。

志津　して、九州へ赴きますには、何れを通り彼の地まで、送る手筈にござりまする。

彥左　されば内々聞き及ぶに、當地は人に知れざるやう別れ〳〵に發足なし、神奈川驛にて人數を纏め東海道を眞直に、三州吉田の海岸まで、陸路を急ぎ登る由。

政右　して、又それより何方を廻つて彼の地へ到りまするや。

志津　お聞き及びにござりまするなら、仰せ聞けられ下さりませ。

彥左　それより吉田の出船を待ち、船路を急ぎ九州まで、安々落ち行く彼等が手筈。

政右　然らばわれ〳〵道を替へ、富士街道より間道傳ひ、

志津　先へ駈け拔け地の理を選み、敵の來るを待ち受けん。

彥左　して、途中にて討つべき場所は、何れが便利よろしきや、心得の爲聞いて置きたい。

政右　さればに候、われ〳〵は多人數ならねば、又五郎を取逃さぬやう、双方の出口を固むる場所ならねば、

志津　助力の者に隔てられ、討漏さんも計られず。

彥左　實に尤もなる其遠慮、東海道の其内にて、固めを賴む地はなきか。

政右　東海道にはござれど、もし伊賀越をいたしなば、上野の城主高堂家は我が同門の舊友なり、

志津　殊に代々高堂家は武術を好ませたまふゆゑ、兄政右衞門を豫て御最負下さるよし。

彥左　成程伊賀の上野こそ、敵を討つには好き場所にて、又出口をば固めるには最屈竟の城下なり。

政右　何卒いたし彼の地まで、追ひ込まんとは存じますれど、

志津　吉田で乘船いたしては、伊賀は通行いたすまじ。

彥左　いや、それにこそ工風あり、何をか包まん我が腹心、安達淸右衞門といへる者を、仲間の附合ひ仕方なく、浪士の人數へ出してあれば、伊賀越なすやう計はせん。

政右　して、又無理に伊賀越まで、多人數おびき寄せまするは、
志津　容易な事とは思はれませぬが、是れにも御手段ござりまするか。
彥左　されば別段工風もないが、吉田船には過ち多しと、安達に異見をいたさせなば、陸地を登り伊勢路よりして、伊賀を越ゆるは必定なり。
政右　いや陸地さへ登りますれば、假令順路に大阪を通行なすとも彼の地には、拙者の武術を學びし者三百人程罷り居れば、
志津　雁金組をはじめとして、俠客仲間に警固をさせても、やはか澤井を見遁すべき。
彥左　ほゝお、左樣な手筈にいたしあれば、首尾よく參るに疑ひなし。
政右　是れと申すも御老體の、
志津　御助勢ゆゑと有難く、
政右　御禮申し、
兩人　上げまする。（ト此時下手にて、）
武助孫八　うせう〳〵。
ト聲して以前の武助孫八、丑内の中間を引立て出來る、皆々此の體を見て、

政右　やゝ、彼れは先刻取次せし、

彦左　櫻井方の下郎丑内。

志津　さては大事を窺ひ居たるか。

武助　われ〳〵二人がくら闇に、見張つて居るとも氣が附ず。

孫八　忍び寄つたる怪しき奴、捕へて詮議をして見れば、

武助　先刻密書を落した奴、

孫八　是れへ引立て參りました。（ト志津摩見て）

志津　や、思ひ掛けなき其者は、父上澤井に討たれし折、同家に居つたる雇ひ中間。

武助　さては其時又五郎に、

孫八　助太刀なせしも計られず。

丑内　斯う見出さるゝ上からは、所詮おれを助けめえから、包み隱さず言つて聞かせる、如何にも其折緣の下から靭負を突いて又五郎樣へ、力を添へたは此丑内。

政右　さすればそやつは、敵の片割、

彦左　殊には蟻穴の憂ひあれば、

志津　武助そやつを切捨てい。

武助　はッ。

丑内　何を小癪な。

ト跳れ返すを孫八突廻して武助の方へ遣る。武助抜き討ちに丑内へ浴せる、丑内立身にて苦しむ、皆々是れを見て。

彦左　是れぞ門出のよき血祭り、

志津　とはいへ、浪士の身分にて、

武助　小者たりとも人一人、

孫八　殺すは上へ恐れあり。

彦左　いや、身が切捨てしと屆けをいたす。

政右　あゝ、何から何まで、（ト兩手を突く、是れと一時に武助刀を引く、丑内見事に轉るを木の頭。）

皆々　ちえゝ、忝けない。

ト彦左衞門へ辭儀をなす、此模樣合方風の音にて、

ひやうし　幕

大詰　伊賀上野仇討の場

〔役名――荒木政右衛門、柘榴武助、池添孫八、渡邊志津摩、竹内鬼玄丹、櫻井甚八、酒屋の亭主勘助、安達清右衛門、宇佐美新八郎、星合段四郎、八十島喜平、長谷部九兵衛、川角源内、馬士二人、侍二十人、中間大勢、雲助大勢、櫻井林左衛門、梶川源右衛門、澤井又五郎等。〕

（鍵屋ヶ辻の場）――本舞臺一面平舞臺、後ろ黑幕、上の方に九尺の藁葺の居酒見世繩簾の入口、後に戸を建てることあり、居酒と記せし障子を建て掛け、下の方に高札場、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て伊賀の上野金殿寺鍵屋ヶ辻の體、爰に勘助着流し前垂掛けの居酒屋の亭主にて、見世先きへ床几を並べ居る、此の模樣鷄笛馬士唄にて幕明く。

勘助　いや、朝起きは三文の徳があるといふから、斯うして毎朝暗い内に起きて、嬶あの代りに釜の下まで焚附けて働いて居るが、三文の事はさて置いて、まだ一文の徳もないとは、こりや朝起きも當にならぬ。

ト箒にて四邊を掃いて居る。やはり馬士唄にて花道より前幕の武助、大小旅裝にて、割掛の包みを肩へかけ、無印の小田原提灯を持ち先きに立ち、跡より政右衛門、志津摩、大小合羽裝にて、笠を持ち

出來り、花道に留り、

武助　もし旦那樣、最うちらほらと人が通りますから、夜の明けますに間はござりますまい。

政右　されば宿にて七つを聞き、直に出立いたしたれば、兜越の山道は足許暗く打越したが、最早東が白んで參つた。

志津　見受けますれば向うの家は、居酒を商ふ立場の樣子、あれへ參つて暫時の間、お憩ひなされては如何でござりませう。

政右　何さま、左樣いたすであらう、武助提灯を消すがよい。

武助　畏りました。（ト是れにて提灯を吹消し花道にて入替り、政右衞門、志津摩、武助附いて舞臺へ來り、）

勘助　これはいらつしやいまし、大分お早うござりまする。（ト是れにて皆々床几へ掛け、）

政右　こりや亭主、酒を商うて貰ひたいが、呑ませてはくれまいか。

武助　氣の毒ながら煙草の火を、先きへ出して貰ひたい。

勘助　へい〳〵畏りました。（ト繩簾の内へはひり、煙草盆を持つて出る、）

志津　まだ起き立てと相見ゆるが、餘り早過ぎて氣の毒ぢやな。

勘助　いえ、何ういたしまして、私方では朝惠比壽のお客樣是れで朝起きいたしました甲斐があると申

すもの、お一人前一文づゝ儲けましても、三文の德がござります。

政右　何は扨て置き酒の燗を、早くつけて貰ひたい。

勘助　へい〳〵畏りました。（勘助上手繩簾の內へはひる、志津摩四邊へ思入あつて、）

志津　大坪御老體の御助力にて、便利よろしき當所まで、到頭敵を追込みましたが、して高堂家のお手配りは萬事よろしうござりまするか。

政右　いや、其儀は少しも氣遣ひいたすな、昨日梶川源右衞門殿に對面いたして賴み置けば、出口の固め人數の手配り、少しも案じる事はない。

武助　それに附けても孫八が、敵の樣子を見に參つたが最う先觸れがありさうなものだ。

ト爰へ勘助膳の上へ小皿の肴を載せ、ちろりを持ち出來り。

勘助　若しお客樣え、まだ起きましたばかりゆゑ、外にお肴はござりませぬが、鹽鰯がござりますから燒いて持つて來ました。

政右　おゝ、何でもよいから早くくりやれ。

勘助　其代りには當所にて、譽れを取つた鬼殺しと申す、自慢の御酒を差上げます。

志津　譽れを取りし鬼殺しとは、よい酒の名もあるものぢや。

政右　左樣な酒なら、茶碗で呑まう。

武助　どれ、お酌をいたしませう。（ト政右衛門酒を呑み居る、志津摩件の肴を見て、）

志津　こりや鹽鰯と申すばかり、とんと田作のやうぢやわえ。

勘助　いえ、餘りの可愛らしい鰯ゆゑ、頭を取ると旦那方へ差上げますのに見立てがござりませぬから其儘燒いて參りました、どうぞ御自身に首を取つて、澤山お上り下さりませ。

ト三人是れを聞き思入あつて

政右　何ぢや、自身に首を取れとか。

志津　然も鰯とはかはいらしい。

武助　片言ながらかはいと澤井。

政右　はて幸先きの、

三人　よい吉兆。（ト悦ばしきこなし、勘助合點の行かぬ思入にて、）

勘助　御意に入りましたら、澤山に首を取つて召上つて下さりませ。

政右　おゝ、氣に叶つたゆゑ澤山貰はん、跡の燗をつけてくりやれ。

勘助　へい／＼、畏りました。（ト上手はひる。）

志津　然らば是れなるかはいらしき、鰯の首を斯うして取つて、まツこの如くにいたしくれん。

ト鰯の首を取り下へ打附け、足にて踏みにじる。

武助　いや、志津摩樣お出來しなされました。拙者も敵の素ツ首を、（ト鰯を取つて口にて嚙み取り下へ打附け、）斯うして遣るでござりませう。（ト足にて踏みにじる、）

政右　お〻心地よい〱、志津摩も祝うて一つ呑みやれ。（ト茶碗を差す、）

志津　目出たく頂戴いたしまする。

ト武助酌をして酒盛りよろしく、ばた〱になり花道より前幕の孫八、大小旅裝にて走り出來り、直に舞臺へ來り、

孫八　御兩所樣、これにお出でゞござりましたか。

武助　お〻孫八どの、して〱樣子はどうだ〱。

孫八　旦那樣の御鑑定通り、思ひの外の早立ちにて、六つ前から宿を繰出し、最早向うへ遣つて參ります。

志津　なに、すりや此處へ參るとな。

政右　然らばそちは餘人に構はず、目指す敵の又五郎へ一騎がけにて向ふべし、我は櫻井兄弟はじめ、

助力の奴輩相手となし目覺しき働きなさん。

武助　又われ〳〵は相手嫌はず、

孫八　出たとこ勝負に討つて取り、

志津　今にぞ思ひ知らせてくれん。（トきつとなる、此以前勘助後へ出で聞き居て、）

勘助　さてはお客は敵討か。（ト顫へて居る、政右衞門是れを見て、）

政右　いや〳〵何も心配いたすな、我々共は當地の御領主、高堂侯へ屆けをなし、仇討御免の御判まで頂戴いたし罷りあれば、迷惑などは決して掛けぬ、家内に怪我のなきやうに、戸締りいたして見物しやれ。

勘助　然しお酒の御勘定は、なされまするでござりませうな。（ト政右衞門懷中より小判を一枚出し、）

政右　鰯の首を自身に取れと、義心を祝うてくれた返禮、此の金子を遣はすぞ。（ト勘助に渡す、）

勘助　え丶、左樣なら此の小判を。

政右　早く見世を取片づけい。

勘助　こりや朝起きをした代り、到頭小判に有りつきました。え丶有難うござります。

ト勘助酒肴の道具を持ち上手へはひる、此内皆々向うへこなしあつて、

志摩　然らば是れへ參らぬ内、

武助　襷鉢卷に身を固め、

孫八　敵の來るのを待ち合さん。

政右　おゝ、小蔭に參つて支度いたせ。

志津　左樣ござれば、

武助
孫八　旦那樣、

政右　志津摩來やれ。

ト政右衛門先きに志津摩武助孫八附いて上手へはひる、繩簾の内より勘助出で四邊を見て、

勘助　やゝ、こりや何時の間にやら行つてしまつた、三文どころか一兩の小判を貰つた所はいゝが、敵討では油斷がならぬ、どれ戸じまりでもして置かう。

ト床几を片附け障子を内へ入れ、戸じまりをする事よろしく。よき程に、花道揚幕の内にて、馬士唄聞えて驛路入り誂への鳴物になり、林左衛門野袴ぶつさき大小旅裝にて、小荷駄馬に乘り、是れを馬士口を取り出る、其跡より又五郎同じく野袴ぶつさき大小旅裝にて馬に乘り、馬士口を取り出る、其跡より鬼玄丹、甚八、清右衛門、新八郎、段四郎、喜平、九兵衛、源内何れも野袴ぶつさき大小にて

附添ひ、其外野半纏の侍大勢、ずつと跡より旅裝の中間鎧櫃長柄の槍、半弓などを持ち出で、此人數花道へ並ぶ。

林左 いやなに又五郎、敵に孫子の智略あれば味方に吳子の計策ありと、裏の裏行く政右衞門、小股掬ひを出し拔きしは、何と小氣味がよいではないか。

又五 伯父上の仰せの如く、間者を出して探らせしに、浪花に於てわれ〳〵の通行なすを待構へ、俠客共が居るとやら、如何に荒木の門弟とて、論に絶えたる儀でござる。

立川 われ〳〵共が多人數にて、路次の警固をいたし居れば、

甚八 高の知れたる俠客共、物の數とも存ぜねど、

清右 市中を惑亂さする時は、將軍家への恐れあり、

新八 それぞ所謂癩病に、棒打ちとやら申す口論、

段四 町人共を相手といたすは、武士たる者の好まぬ所、

喜平 無事を計つて道を替へ、此の伊賀越をいたす時は、

九兵 浪花へ出ず大和路へ、易々出づる山傳ひ、

源內 夜明けぬ内に、各方お急ぎなさるがよくござる。

林左　いざ、又五郎急がうか。

又五　馬士共一骨折つてくりやれ。

馬士二人　えゝ、どう畜生め、歩びやあがれ。

ト右の唄にて此人數舞臺へ來る、此時上手より以前の志津摩、白四天を着込み大小鉢卷にて先きに進み跡より政右衛門、達附大小襷鉢卷にて附添ひ、武助孫八も大小襷鉢卷凛々しきこしらへにて、つかつかと出で、馬の先きへ立塞がる、馬士兩人此體を見て、

そりや出た、危ない、逃げろ〳〵。（ト下手へ逃げてはひる、敵役皆々びつくりなし、）

又五　やゝ、さては當所に、

皆々　待伏せ居つたか。（ト誂への鳴物になり、）

志津　珍らしや又五郎、汝を討たんと最前より、待ち設けたる渡邊志津摩。

政右　又林左衛門弟甚八、豫て望みし眞劍の勝負をなさんと政右衛門、疾くより爰に待受けたり。

武助　われ〳〵共も御主人の、緣に繋がる仇敵、

孫八　澤井へ助太刀の奴輩は、片ツ端から鏖し。

政右　脫れぬ所と、

四人　勝負なせ。
林左　計る〳〵と思ひしが、却つてわいらに計られしか。
又五　假令荒木が助太刀なす共、高の知れたる小わつぱ志津摩、いかで汝に討たれんや。
玄丹　又某は荒木めに、積る恨みの鬼玄丹。
甚八　不便やわいらは目前に、返り討だぞ。
敵役　覺悟いたせ。
皆々　
政右　何を小癪な。
四人　

ト是れより早き禪の勤めになり、雙方拔き合せごつちやの立廻りになる、此中林左衞門又五郎馬より飛下り身拵へをなし、中間に持たせし槍を取つて突いて出る、志津摩は又五郎、政右衞門は林左衞門に渡り合ひ、立廻りながら上手へはひる。武助・孫八跡皆々を追ひ廻し、立廻りながら上手へはひる。跡に淸右衞門殘り思入あつて、

淸右　大坪公の内意を受け、澤井の警固と見せかけて、是れまで欺き果せたれば、最早用なき淸右衞門どりや、高見で見物仕ようか。

ト につたりと思入、此の模様右の鳴物にて道具廻る。

(城下松原の場)――本舞臺後淺葱幕一面の松並木、上の方町木戸、左右柵矢來、下の方是れより金殿寺といふ榜示杭、日覆より松の釣枝、總て上野の城下松原の體、爰に以前の孫八甚八雙方拔身にて切結び居る、此の見得ドン〳〵にて道具留る。

甚八 やあ、死に損ひの下司奴、邪魔立てせずとくたばつてしまへ。

孫八 いゝや、おのれと疾うからして手合せ仕度く思つて居たが、身分違ひに仕方なく、郡山では控へて居つたが、今日の出逢ひを幸ひに、此孫八が手並の程をあらはしくれん、覺悟なせ。

甚八 やあ、小癪な奴めが。

ト早き鳴物になり、兩人よろしく立廻り、トゞ雙方共手負ひになり、切結びながら上手へはひる。やはりドン〳〵にて下手より以前の林左衛門槍を持ち逃げて出る、是を政右衛門拔身にて追掛け出來り、

政右 やあ卑怯なり林左衛門、汝が望む眞劍の、勝負をなすは今此の時、後を見するは未練至極。

林左 いや、何とて後を見せんや、程よき場所まで誘き出し、爰で勝負をいたしくれん。

政右 いざ、

林左 いざ、

兩人 いざ〳〵。

ト誂への鳴物になり、雙方氣合を計る立廻りあつて、トヾ林左衞門槍を打ち落され、肩先きを切下げられ、どうとなる、政右衞門踏込んで切らうとする、此時下手にてエイと矢聲して、指金の矢飛び來るを政右衞門拂ひ落し、きつとなつて、

政右　やあ、飛道具とは卑怯な奴。（ト此時下手にて、）

清右　お案じあるな荒木氏、卑怯な味方は切捨申した。

ト以前の清右衞門拔身にて切首を提げて出て來る、政右衞門此體を見て、

政右　やゝ、さういふは澤井が警固の者。

清右　如何にも澤井を道中筋、警固の者と見せたれど、まことは大坪老體の内意を受けし廻し者、安達清右衞門と申すもの。

政右　むゝ、さてはかね〳〵御老體より、承はりし安達氏か。

林左　すりや安達めは、間者であつたか、やゝゝゝゝ。（ト思入。）

清右　只今あれなる松蔭にて、八十島喜平が遠矢を射掛け、卑怯な振舞いたせしゆゑ、首級にいたしてまツこの通り。（ト件の切首を見せる。）

政右　こは、忝けなき其の御助力、早く當所を落ち延びられよ。

林左　冥土の道連れ荒木觀念。
トよろぼひながら切つてかゝるを、政右衞門よろしく立廻り、林左衞門を切り伏せ、止めを刺す、淸右衞門此體を見て、

淸右　左樣ござらば、荒木氏、

政右　大坪氏へよろしう。

淸右　はツ。
ト淸右衞門は花道へはひる、爰へ上手より以前の孫八手負のこなしにて走り出來り、政右衞門に行當ろ。政右衞門見て、

政右　そちは孫八、いかゞいたした。

孫八　おゝ、旦那樣か。（ト心の弛みしこなしにてうつとりとなる、政右衞門孫八を引起し、）

政右　こりや孫八、かばかり淺き擦り疵にて、氣絶いたすは何事ぢや、心を慥に、（ト活を入れ、）働きいたせ。（トきつといふ、是にて孫八はつきりとなり、）

孫八　面目もなき此不覺、今一働き仕らん。（トよろぼひながら立上る、）

政右　して〳〵、志津摩は如何せしか、其方は存ぜぬか。

孫八　志津摩樣には澤井を相手に、勝負を爭ひござる所へ、多勢の奴輩馳せ加はり既に危く見えましたゆゑ、此孫八が支へにはひり、敵の片割甚八めと渡り合つて、細腕ながら只今討取り、志津摩樣の所在をばお尋ね申すところ。

政右　むゝ、すりや甚八めを討取りしか、汝が身に取り大手柄、志津摩の所在を尋ねくれよ。

孫八　心得ました。（ト行きに掛る、爰へ侍一人窺ひ出で、）

侍　奴め、觀念。（ト孫八へ切つて掛るを、よろしく立廻り切倒し、）

孫八　おさらば。（トよろばひながら花道へはひる、政右衞門是れを見送り、）

政右　あこれ、彼等も容易なものならねど、名におふ相手は多人數ゆゑ、深手を負うてあの有樣、志津摩に過ちなければよいが。

ト案じるこなし、爰へ上手より以前の玄丹拔身を持ち窺ひ出で、

玄丹　こりや政右衞門、左程志津摩を案じるなら、冥土に於て逢はしてくれん。

ト前へ出る、政右衞門うしろを見返り、

政右　左いふおのれは兩度まで、われへ敵たふ鬼玄丹。

玄丹　如何にも先年箱根にて、恥辱を取りて又候や江戸で汝にめぐり合ひ、再度の恥辱も三度目は、積

る恨みの晴れ勝負、息の根留める、覺悟なせ。

政右　やあ、洒落臭き其の雜言、命を取るも無益ながら、望みとあらば討取りくれん。

ト兩人よろしく立廻り、トヽ玄丹政右衞門に切り下げられよろしく落入る、爰へ上手より以前の新八郎、段四郎、九兵衞、源内何れも襷鉢卷拔身にて出來り、

四人　政右衞門、覺悟。

ト切つてかゝる、政右衞門是れを相手に立廻り、トヾ差添を左の手に拔き兩刀になり、よろしく立廻る、よき程にばた〳〵になり、花道より源右衞門麻上下大小にて、手槍を持ち走り出來り、此體を見て、

源右　如何に、荒木氏へ物申さん。（ト是れにて政右衞門立廻りながらきつと留めて、）

政右　これは〳〵梶川氏には、早速の御出張、近頃以て忝なし。

源右　昨日貴殿のお頼みゆゑ、昨夜の内に手分なし城下の出口々々をば見張りの者が警固いたせば、必ず心配いたされな。

政右　種々の御厚意忝なし、して〳〵拙者の弟たる、志津摩をお見掛けなされずや。

源右　さればこ只今承はるに、志津摩殿には小田町邊にて、澤井と勝負をめさるゝよし。

政右　して、小田町と申しまするは、

源右　向うに見ゆる大手より、左りへ取つて曲る道筋。

政右　然らばそれへ馳せ附けん。

ト此中始終四人浪士と立廻りながら、よろしくせりふ渡り、トヾ政右衛門四人を切り倒し上手へはひる、源右衛門跡に殘り、思入あつて、

源右　荒木は勝れし達人ゆゑ、假令多人數相手になす共不覺を取るべき謂れなし、志津摩は未だ壯年にて名に負ふ相手は又五郎、こりや案じるも無理ではない、身共も參つてさうぢや〳〵。

ト槍を搔い込み上手へはひる、跡ばた〳〵になり、下手より侍六人拔身を持ち逃げて出る、武助大童になり、榜示杭を持ち追つて出て來り、ちよつと立廻つて見得。

武助　やあ、命知らずの蛆蟲めら、片ツ端から覺悟しろ。

侍六人　小癪なことを。

ト大太鼓入りの鳴物になり、武助榜示杭にて大まくしの立廻りよろしくあつて、トヾ眞中に杭を振上げし見得、侍六人左右に居並びどうとなる。此見得よろしく、此道具廻る。

（下馬先きの場）――本舞臺一面常足の二重、草土手の蹴込み、正面上手へ寄せて城の門、左右小高

き枕土手石垣の張物、眞中に松の大樹、日覆より同じく釣枝、下の方に埒を結廻せし下馬札、總て伊賀の本城下馬先きの體、爰に政右衛門松の大樹を小楯に取り、兩刀にて身構へして居る、左右に侍八人拔身にて取卷き居る、此の見得どん〳〵にて道具留る。と政右衛門よろしく立廻りあつて、

政右　弟志津摩は如何なせしか、小田町邊とは承はれど、不案内ゆゑ所在知れず、（ト又立廻りよろしくあつて、）志津摩やアい――（トよろしくあつて、）弟やアい――。

ト案じるこなしにて立廻りながら花道へ行く、此時眞中の松の梢に以前の勘助登り居て、

勘助　もし〳〵旦那、その小田町は向うだ〳〵。

ト東の揚幕の方を、指さして教へる、政右衛門是れを見上げ、

政右　さいふは酒屋の御亭主なるか。

勘助　小判のお禮に、お尋ねなさる弟御さんを、教へて上げます。

政右　すりや、此通りを參るのぢやな。（ト東の揚幕の方へこなし、）

勘助　向うの小高い松原で、弟御さんが危いから早く行つてお上げなさい。

政右　すりや弟が危いとな。

トきつとなる、爰へ侍切つてかゝる、立廻つて切倒し、逸散に東の揚幕へはひる、此の模様ドン〳〵

にて道具廻る。

（金殿寺松原の場）――本舞臺やはり常足の二重、向う切出しに城の遠見、上下植込みの張物にて見切り、所々に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て金殿寺松原の體。爰に以前の又五郎槍にて、志津摩は拔身を持ち兩人立廻り居る、上手に以前の源右衛門手槍を持ち控へ、左右菖蒲革の足輕六人棒を持ち警固して居る。此の見得白囃子にて道具留る。と右の鳴物にて兩人よろしく立廻り、志津摩危くなるゆゑ、源右衛門上手にて矢聲を掛け、槍を構へる、又五郎是れに氣を奪はれ猶豫をなす、志津摩力を得て立廻る事二三度あつて、トヾ又五郎きつとなり、

又五　やあ心得ざる御檢使樣、一騎がけなる此の勝負、どちらが不覺を取りませうとも、差構ひなきお役目なるに、御助力あるは依怙でござらう。

源右　いゝや助力は決していたさぬ、勝負は時の運次第、槍を捻るは武士の常、志津摩も必ず不覺を取るな。

志津　其のお詞が千萬力、今一勝負、いざ〳〵來れ。

又五　今度は見事突き伏せくれん。

ト又立廻り志津摩危くなるゆゑ、源右衛門矢聲を掛け槍を構へる、又五郎是れを見返りきつとなり、

やあ、それでも助力にあらざるか。（ト此時花道揚幕にて、）

政右　やあ／＼志津摩、暫く待て、我れにも一太刀恨ませくれよ。

又五　何と。

トばた／＼になり、花道より以前の政右衞門兩刀を持ちしまゝ走り出來り、直に舞臺へ來る、源右衞門見て、

源右　おゝ荒木氏、待兼ねしぞ。

志津　御檢使樣が數度の御助力。（ト言ふを冠せて、）

政右　こりや／＼志津摩血迷ひしか、掛け構ひのなき御檢使樣、御助力なされる筈はない、林左衞門を始めとして加勢の奴輩三十餘人、我が兩刀にて討取りたれば、殘るは澤井たゞ一人、ひるまず見事に討ち留めい。

又五　やゝゝゝ、すりや伯父上をはじめとして、助力の者は討たれしとな。

志津　いで、此上は汝一人。

政右　それ、附入つて討ち捨てい。

又五　さう聞く上は又五郎死物狂ひだ、覺悟なせ。

ト又白囃子になりて立廻り、志津摩危くなるゆゑ、政右衞門立寄り又五郎を一太刀切る。是れにて又五郎たぢ〳〵となるを、志津摩附入つて槍を打ち落し、又五郎を切り下げ、のしかゝつて止めを刺さうとするを政右衞門留めて、

政右　あいや、志津摩暫く待て、息の根留めぬ其内に、武助孫八兩人を、此處へ呼び寄せたし。

志津　して、彼等兩人は何れに罷り居りまするな。

政右　先刻かしこで見掛けしのみ、其の在所も定かならず。

志津　すりや、在所は知れませぬとな。

源右　それ、者ども、尋ねて參れ。

足輕六人　はツ。（ト立上る、此時下手にて）

武助　お出でに及ばぬ、只今それへ。

ト手負の孫八を肩へ掛け出て來る。志津摩此の體を見て、

志津　こりや、孫八には深手を負ひしか。

武助　深手を負へど志津摩樣が、御本意お遂げなさるまでは、死なぬと申して斯くの通り。

トよき所へ孫八を下に居させる。

孫八　志津摩様、お目出度うござりまする。（ト苦痛のこなしにて辭儀をなす。）
政右　志津摩諸共兩人とも、敵へ止めを刺してよからう。
武助　すりや、われ〳〵も、
孫八　止めの刀を。
政右　おゝ、苦心をさせし禮なるぞ。
武助
孫八　ちえゝ忝ない。（ト皆々にて又五郎の死骸へ立寄り、）
志津　父上の仇、
政右　舅の敵、
武助　主人の恨み、
四人　思ひ知つたか。
　ト止めを刺す。此時烏笛になり、正面切出しの城の蔭より、紅絹張の日の出を引上ろ、皆々是を見て、
源右　今ぞ輝く旭影、
志津　雲の上野と名にし負ふ、
武助　世に稱されし名城に、

孫八　天へも昇る、

三人　身の悦び。（ト政右衛門又五郎の差したる刀を取上げ改め見て、）

政右　こりや是れ正宗、（ト鞘へ納めるを木の頭、）ちえゝ忝ない。

ト刀を押戴く　源右衛門扇を開き悦ばしきこなし。武助は孫八を介抱する。跡皆々引ばりよろしく時の太鼓烏笛にて、

ひやうし幕

實錄伊賀越（終り）

歌舞伎新報俳優の投書

巡査の保護　按摩の白浪
天狗の生酔　娼妓の貞節
士族の乳貰　楠公の奇計

此兼題を一に結び二番目物に脚色しも三幕が四幕と思ひの外結局迄は五幕の長譚に六題を漸と綴りし七所拵へ切ない趣向も條立の鳥渡知ぬが隠れ杉彼八陣の古きを以九時開場の新狂言丁度打出す時刻に當り季候ちがひの名題をその儘

霜夜鐘十字辻筮

「霜夜の鐘」は始め雜誌「歌舞伎新報」の爲めに執筆されたもので、明治十二年（作者六十四歳）の一月から連載されて大好評を博した。上演されたのは翌明治十三年六月新富座に於てゞあつた。讀物として歡迎されたほどに舞臺效果は上らなかつたが、相當の成果を收め得た。上場脚本は讀物本位として最初執筆されたものとは些少の相違がある。例へば序幕の第一場は元の第二場であるが如き、幕明きなどにも相違がある。在來印行されて行はれてゐたのは、「歌舞伎新報」の通りであるが、玆には上演の時のを輯錄した。此の作の由來や、趣向に就いては記すべきことが多いが、詳しくは拙著『河竹默阿彌』詳傳を參看せられたい。何にしても此の當時在京の名優といふ名優を殆ど全部網羅したことであるから惡からう筈なく、特に仲藏の宗庵はづぬけて好評であつた。作者が巧みに新社會の事象を活寫した點及び戲曲構成の手法を窺ふに恰好なる代表作である。

　初演の時の役割は、市川團十郎（演說師楠石齋）、尾上菊五郎（査官杉田薰）、市川左團次（天狗小僧讃岐金助）、中村宗十郎（士族六浦正三郎）、岩井半四郎（石齋妻おむら）、中村仲藏（按摩岩淵宗庵、杉田母おなぎ）、市川小團次（稻田豐三郎、手代與七）、河原崎國太郎（女義太夫おとよ實は宗庵女房おとよ）、市川團右衛門（古着買泥藏）、尾上梅五郎（巾着切丹作）、岩井小紫（矢場娘お兼）、澤村淸十郎（茶屋娘お澤）、尾上菊之助（お豐娘おたけ）等であつた。――口繪にした三色版は畫工不明ではあるが、五世菊五郎の杉田薰の石版畫、小林淸親の筆かとも言はれてゐる。挿繪にしたのは團十郎の石齋の寫眞と守川周重筆の錦繪である、

大正十四年二月

校訂者誌す


第二番目序幕
上野三枚橋の場



霜夜鐘十字辻筮（霜夜の鐘―五幕）

序幕

不忍新土手の場
根岸道芋坂の場
上野三枚橋の場

（淨瑠璃）忍ケ岡の森蔭に、人目を厭ふ二人連、二十日月中宵闇（淸元連中）

〔役名――査官杉田薫、天狗小僧讃岐金助、浪士六浦正三郎、按摩岩淵宗庵、稻田豐三郎、雇人與七、僞役人堤丹作、巾着切四國の猿藏、同秩父の勘次、植木屋根岸の幸藏、同初音の音藏、正三郎妻お浪、矢場娘おかね。〕

（不忍新土手の場）――本舞臺正面小高き丸石の石垣、四つ目垣樹木の植込み、後一面座敷の書割、障子灯入り、下の方二間の屋體、伊豫簾を下し平舞臺上下に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て下谷廣小路松源裏手の體。こゝに幸藏、音松、半纏紺の股引腹掛草履、植木屋のこしらへにて植木の荷をおろし緣日歸りの心にて休みゐる、松源の流行唄にて幕明く。

幸藏 今夜はどうか降りさうだから、早くしまつて歸つて來たが、今の一吹きで切上り、弔しろが立つ

て來た、これぢやあ明日は天氣だらう。

音松　此間のやうに長時化ぢやあ植木屋は上つたりだ、どんなに安く見倒されても、かうして稼業に出せへすりやあ、米の錢は取つて歸る。

幸藏　緣日も方々にあるが、藥研堀ぐらゐいゝ物の賣れる所は外にはねえ。

音松　それだから谷中から駒込かけて、仲間のものが車に積んで出かけるのだ。

幸藏　これから四五日場所を休んで、淺草のお得意へ敷松葉に行かねばならぬ。

音松　おれも竹性のいゝ所で建仁寺をしてくれいと、吉原から賴まれてゐた。

幸藏　一息ついたら出かけようか。

音松　さうさ、早く歸つて一ぺいやらう。

ト兩人立ちかゝる、此の時上手より着流し駒下駄の待合茶屋の若い者出來り、

若者　もし、お前方は根岸の植木屋さんぢやあないか。

音松　あい、二人とも根岸でござります。

幸藏　何でおたづねなさいますのだ。

若者　松五郎といふ植木屋は、御近所ぢやあございませんか。

幸藏　松五郎なら、ついわたしの右隣りでござります。
若者　まことに申し兼ねましたが、此の書附を松五郎へお屆けなすつて下さいませんか。
幸藏　お屆け申して上げますが、大事の書附ぢやァありますまいね。
若者　わたしやあ廣小路の待合茶屋でござりますが、庭をなほして貰ひたいのに、植木を四五本取替る其の註文でござりますから、大事な書附ではござりませぬ。
幸藏　さういふことなら早速に、お屆け申して上げませう。
若者　それぢやあお賴み申します。（ト若い者上手へはひる。）
音松　いや、世間は廣いものだ、根岸であの位下手な植木屋はありやあしねえ、それへ庭を賴むとは、是れもよつほど茶人だわえ。
幸藏　どんなことが書いてあるか、中を讀んで見たいものだ。
ト此の時灯入りの月をおろし、
音松　丁度幸ひ月が出た。
幸藏　話しの種だ、讀んで見よう。（ト件の書附を開き、）「淨瑠璃名題――」（ト淨瑠璃の名題だけを讀み、）大方こんなことだらうと思つた。

音松　かういふことで幕明きに淨瑠璃觸れを讀ませるも、あんまり古い趣向ぢやあないか。
幸藏　こゝで一番新らしく、これを讀まずに引込まう。
音松　どうで初まりやあ知れることだ、讀まない方が新らしい。
幸藏　古い趣向をかつぎ出す。
音松　作者の鼻をはじいてやつた。
幸藏　さあ、行きませう。

ト流行唄になり兩人荷をかつぎ下手へはひると、直にばた〳〵になり、上手より巾着切猿藏、三尺帶尻端折り草履にて逃げて來る。跡より稻田豐三郎絲織の着流し駒下駄、高崎の呉服屋息子のこしらへにて追掛け出て來る、是れを巾着切勘六留め乍ら出て來る。

豐三　コレ、わしが紙入を返して下さい。
猿藏　此の野郎は途方もねえ、おれが紙入を取つたといふのか。
豐三　廣小路で玉突を見て居る内に、透を覗ひこなたが拔いたに違ひない。
勘六　そりやァお前が玉突を見て居て、誰にか拔かれたのだ、何で此人が取るものだ。
豐三　とらぬものなら今爰で、裸になつて見せなさい。

猿藏　見せろといふなら見せもせうが、此の寒空に吹晒しの北を眞受の信濃川岸、此辨天の池ツ縁で何で裸になられるものだ。

疊三　裸にならぬは取つた證據、サアわしと一緒に屯所へござれ。

勘六　屯所へ行けと言つたつて、取つた覺えもないものが、何で屯所へ行くものだ。

疊三　いや、何でも連れて行かねばならぬ。(ト猿藏を無理に捕へる。)

猿藏　えゝ小うるせへ、放しやあがれ。

ト振拂つて行かうとするを引留める。爰へ上手より堤丹作、黒のシヤツポ茶無地の羽織、木綿の襠高袴半靴忍び廻りの こしらへに出て來り、

丹作　コリヤ〳〵、往來中で爭ひ合ふは、行違ひの喧嘩なるか。

疊三　いえ、喧嘩ではござりませぬ、私の紙入を此者が取りました。

猿藏　いえ拔いた覺えはござりませぬ。

丹作　なに、ないことがあるものか、性懲もなく又稼ぐな。

猿藏　いえ、此間迄二人とも、八十日苦役をして實に懲々しましたから、盜は止めてしまひました。

丹作　いや、止めたとは言はさせぬ、此間から二人とも目を附けて居た所だ、さあ盜んだ紙入を出して

しまへ。（ト猿藏が襟首を取つて引寄せろ、此時そつと紙入を丹作の袂へ入れ）

勘六　常が常故親分に、さう思はれるも尤もだが。

猿藏　實に私らアとりませぬ。

丹作　取らずば爰で裸になり、此お人に見せるがいゝ。

猿藏　へえ、裸になつて見せませう。（ト三尺帶を解き）さあ、何處からでも改めて見ろ。

ト體を突附ける。豐三郎改め見て、

豐三　正しくとつたに違ひはないに。

猿藏　よく盜人にしやアがつたな。（ト猿藏豐三郎に打つてかゝるを丹作留めて）

丹作　これ、何で手荒いことをするのだ。

勘六　盜まぬものを盜んだと言掛りをしやアがるから、

猿藏　それで此奴をなぐつたのだ。

丹作　手前がたゞの者ならば、腹を立つも尤もだが、此間迄竊盜で土を擔いで居た體、綺麗な口は利かれねえぞ。

猿藏　以前は以前、赦免後は、堅氣になつた私等二人、

勘六　盗人の名を附けられては、此儘たゞは濟まされませぬ。
丹作　濟まされぬなら屯所へ來い。
猿藏　えゝ、何處へでも參りませう。
丹作　手前達二人のことぢやあ、聞込んであることがあるから、一調べ調べてやらう。
猿藏　それぢやア尻突がありますか。
勘六　早く逃げりやよかつたに。
丹作　もう二人共逃がしやアしねえぞ。
猿藏　こいつア又くらいこんだか。
卜兩人顏を見合せ思入、丹作は豐三郎に向ひ、
丹作　もし、お前は何處のお方だか、住所は何處の何番地、名前は何とおつしやいます。
豐三　へい、私は群馬縣下上州高崎宿、田町一丁目三番地で、吳服渡世を致します稻田作右衛門が悴豐三郎と申します者、商賣用で出京致し當時淺草廣小路の、松坂屋と申す旅人宿に逗留致して居ります。
丹作　して取られたといふ紙入は。

豐三　表は茶羅紗に裏は古緞子、獅子に牡丹の銀金物が附いて居りましてござりまする。
丹作　中には何がござりました。
豐三　五百圓の貸金證に、十圓札で七十圓入れて置きましてござりまする。
　　　ト是を聞い三人い丶仕事をしたといふ思入あつて、
丹作　むう、それぢやあ中には七十圓、
猿藏　こりや、斯うしては、
勘六　居られぬわえ。（ト兩人點頭き合ひ、逸散に花道へ逃げてはひる。）
丹作　うぬ、逃げるとて逃すものか。
　　　ト二人の跡を追掛けて花道へはひる。跡に豐三郎腕組をなし、途方にくれし思入にて、
豐三　昨日の朝宿の亭主が繪入新聞を讀みながら、此頃殖えたは巾着切取られたことの新聞がよく記してござりますから、外へおいでなさるなら煙草入や紙入を盜まれぬ樣になされませと、若い者故老婆心に心を附けてくれたのを、うツかり聞いてゐた故に、七十圓は兎も角も取引先へ五百圓貸した證書を失しては親父の前へ言譯なし、宿へ歸つて此事を亭主に話すも面目ないが、話さずにもゐられぬ譯、か丶る災難に逢ふといふのも、ふとした心の迷ひから、此程湯島の天神へ參詣をし

た歸りがけ、梅本といふ楊弓場で呼掛けられたが縁となり、其處の娘のお兼に馴染、毎日用をかこつけて遊びに行くを供に連れた與七が度々異見をしたのを、用ひなんだが我誤り、是から歸らばそれ見たことゝ必ず小言を言ふであらう、いッそ湯島へ立歸りお兼の所へ泊らうか、それでは猶々濟まぬ上、與七が案じて迎ひに來よう、とあつて歸るは歸り難し、コリヤどうしたらよからうなあ。

ト時の鐘、豊三郎ちつと思入、此時後松源の内にて、

女中 サア、濱町の家元さん、お初めなすッて下さいまし。

ト是をキッカケに下手の伊豫簾を卷上げる、内に清元連中羽織袴にて居並び、直に淨瑠璃になる。

〽春ならで朧に空の霜曇り、廿日の宵の月代も梢放れて影凄く、忍ヶ岡に撞き出す鐘の音沈む池の端、（ト豊三郎是を聞いて、）

豊三 大事の證書を盗まれて兎やせん角と行きなやみ、思案に暮るゝ折も折、何の苦勞もない人の催しなるか松源で、延壽太夫のあの淨瑠璃、世はさまざまなことぢやなあ。

〽更けて往來も中島の、一むら繁る蘆原へ落ち行く雁の唯一羽、

ト本釣鐘、合方、ばたばたにて東の揚幕より梅本のお兼、矢場娘のこしらへ、手拭を吹流しに冠り、

駒下駄にて出て來り、よきところへ留まり思入あつて、

お兼 義理ある中の親ゆゑに言ひたいことも言はずにゐれば、慾に迷つて無理難題、餘りのことに愛想も盡き、是非も涙に駈出して裏道傳ひに爰迄來たが、今打つたのは十一時、女の身にて唯一人夜更けて歩いたことならば巡査樣に見咎められ、思ふ所へ行かれまい、今宵は此儘不忍のお蓮さんの所へ行き、こつそり泊めて貰ひませう。

〽枯殘りたる蓮の葉の、そよぐ音さへ追手から後ろ見らるゝ忍び足、運ぶ時雨の村雲に隱せし影も小夜風に晴れて見かはす月の顏、

ト此内お兼は跡先へ思入あつて舞臺へ來る、豐三郎は袖で顏を隱し、上手へ行かうとして顏見合せびつくりして、

お兼 や、豐さんでございますか、

豐三 おゝ、さういふはお兼か。

お兼 おまへに逢ひたうございました。

〽逢ひたかつたと取りすがり、譯も涙にくれければ、

ト お兼豐三郎にすがり付く、豐三郎は合點の行かぬ思入にて、

豐三 さうしておまへは今時分、何處へ行くとて爰へ來たのだ。

お粂 わたしや今夜譯があつて、此不忍の知つた所へ急に行くのでございますが、お前さんは何で又爰らにおいでなさいました。

豐三 さつきお前の所から歸る途中で災難に、逢つて內へも歸られず、途方に暮れてゐた所だ。

お粂 災難にあつたとは、どんな目にお逢ひなさいました。

豐三 今歸りがけに廣小路で玉轉がしの店へ立ち、うつかり見てゐる透を覘はれ、五百圓の貸金證書と十圓札で七十圓入れて置いた紙入を、掏摸にそツくり拔かれてしまつた。

お粂 えゝ、すりや證文やお金のあつた其の紙入を拔かれたとは、飛んだ災難でございましたね。

豐三 直に傍に居た者が盜みとつたに違ひない故、逃げる跡を追掛けて、こゝでそいつを捕へたが何處へこかしてしまつたか、其紙入を持つて居ぬゆゑ、此方の難儀になる所を忍び廻りの探索方が、折よく其處へ來合せて二人のものを連れて行つたが、跡へ殘つた私が當惑、宿へ歸るも歸り難し、いつそ是からお前のところへ一晩泊めて貰はうかと、玆にうろ〳〵して居たが、お前は何で內を出たのだ。

お粂 さあ、是には深い譯あつて不斷休暇に見世へおいでの篠塚さまといふお客が、世話を仕ようとお

つしやるを、程よく逃げて居りましたが、お前さまがお歸りなさると間もなく内へおいでなされ、得心ならば十圓に外に五圓の小遣を、月々遣らうと旨い話し、慾に迷つてそれに乘り五歳の年に養女に貰ひ長年育てた恩返し、親にも樂をさせるやう是非共今夜得心して、世話になれと無理口說、親はあれどもある甲斐なく貰はれて來た私ゆゑ、恩にはなれど十四から湯島へ矢場の見世を出し、內の活計を立てたからは何ほ義理ある親ぢやとて、厭なことは聞かれねば、一つ言ひ二つ言ひ角目立つて裏口から駈出しは駈出しましたが、夜更のせゐか人力もなく氣味が惡さに不忍の知つた所へ泊めてもらひ、明日早くお前さんの泊つておいでなさいます宿屋へお尋ね申す積り、爰でお目にかゝつたのは神々さまのお引合せ、どうぞ是から何處へなりと連れて逃げて下さいまし。

豐三　そりや事と品によつたらば、連れて逃げまいものでもないが、お前が居ずば明日から親御の困るは知れたこと、みす〳〵それを知りながら、どうも連れては逃げられぬ。

お粂　慾に目がくれ我娘の厭がる客の世話になれとは、餘りと言へば無慈悲な親、其の義理立てには及びませぬ。

豐三　それは無慈悲であらうとも、お前は兎もあれ連れて逃げては、親御へどうも私が濟まぬ。

お粂　それではいつぞや末々の、こと迄私におつしやつたは、みんな嘘でござりますか。

豐三　決して嘘ではなけれども。

お兼　嘘でないなら爰から直に、連れて逃げて下さいまし。

豐三　それでは浮世の義理が濟まぬ。

お兼　義理にかこつけ私をば、連れて逃げて下さいませぬは、厭になつたのでございますね。

ト豐三郎に詰寄る故

豐三　何しに厭になるものぞ。

お兼　いえ〳〵厭になつたに違ひない、さりとは情ない豐三郎さん。

〽膝に取附き流し目に男の顏をぢつと見て、（ト豐三郎にすがり附き是より口説の淨瑠璃になる）

〽いつぞや見世へおいでの折、日の暮れるのを待兼ねて、連だち歸る道すがら、人目の首尾も宵闇にぢつと取る手の恥しく、顏に紅葉の濡色の時雨降る夜にしつぽりと、言替せしを忘れてか、今更お前に嫌はれてはわたしや生きては居りませぬと、既にかうよと見えければ、

ト此内お兼豐三郎をとらへ、くどきの振あつて、前なる池へ身を投げようとするを、豐三郎あわてゝ抱留め、

豐三　あゝこれ、あぶない、早まるな。

お兼　留めずと死なせて下さいまし。

豐三　イヤ／＼おぬしは殺さぬ／＼、（ト下へ引留め、）何で短氣なことをするのだ。

お兼　神を誓ひに末々迄言交せしを反故にして、連れて逃げて下さんせぬゆゑ。

豐三　其恨みは尤もだが、一緒に連て逃げられぬは最前拔かれた紙入に、得意へ貸した五百圓の證書の外に七十圓入れてあつたを失ふたれば、何處へ行くにも路用は無し、事によつたらおぬしより己が池へ身を投げて死なねばならぬ今日の災難、それ故連れては逃げられぬ。

お兼　すりや盜られたる紙入の、證書やお金の言譯に。

豐三　己も此儘越度ゆゑ、すご／＼内へは歸りにくい。

お兼　それではお前も義理ある中に、死なねばならぬことならば、わたしも共々死にませう。

豐三　其の志しは嬉しいが、我身と違つて死ぬ程のこともないのに死ぬには及ばぬ。

お兼　いえ末は夫婦にならうといふ、約束をしたお前に別れ、何で生きて居られませう。

豐三　それでは己が言譯に、死ねば共々そなたも死ぬか。

お兼　あい、死ないで何と致しませう。

〽男の膝に取附いて、見上ぐる顏におくれ毛のかゝることゝは白露の、きのふに替るけふ

の霜、結ぶかひなく消えて行く、はかない縁と手に手を取りて、暫し涙にくれにける。
ト兩人手を取りかはし思入あつて、

豐三　死ぬと覺悟をせし上は、仔細を跡へ書殘したいが、暫く忍ぶ所はないか。
お兼　それはさつきわたしが言うた、此の忍ばずの待合茶屋。
豐三　差合なくば其處へ行き、死ぬる仔細を書殘し、
お兼　此の世に居るも今宵限り、
豐三　翌日は浮名を流す身に、
お兼　洩らさぬ水の杯して、
豐三　落行く月の西の方、
お兼　蓮の臺の此池へ、
豐三　手に手をとりて、
兩人　身を沈めん。

〽是が名殘と引寄せて、ひつたり抱き月影も、粹を通して雲隱れ、夜半に紛れて、
ト此內兩人愁ひの思入あつて、時の鐘三重にて月へ雲を掛け、下手二階へ伊豫簾をおろし、淸元連

中を消し、兩人手を取替せし見得にて、此道具廻る。

（根岸芋坂の場）═══本舞臺一面の平舞臺上下石垣。此上棕櫚伏せの草土手、上の方晝心に坂の上は口、丸石の書割、向う杉の立木、後黒幕裾通り藪疊み、日覆より杉の釣枝、總て根岸道芋坂よの體、風の音題目太鼓にて道具留る。と鳴物にて以前の植木屋荷を擔ぎ坂の上より下りて來り、

幸藏　出がけは錢を儲けようと思ふ心で大儀でないが、歸り道は池の端から芋坂まで來ると、がつかりする。

音松　不斷通りつけてゐるから、十時過ぎに通れるが、神葬地を曲つてからこんな無氣味な所はない。

幸藏　それにさつきすつかり晴れたが、又東から雲を上げて時々月を隱すので、薄くらくツてどッとしない。

音松　何より怖いは此間から、こゝへ追剝が出るさうだ。

幸藏　此間も、醉虎が素ッ裸にされたさうだ。

音松　その追剝より怖いのは、此間から此の邊で狸が人を化すさうだ。

幸藏　狸などが怖いものか、出りやあおれがぶち殺し狸汁にしてやらあ。

音松　そんな强いことをいつたつて、こゝへ大入道か一つ目小僧が出たらびつくりするだらう。

幸藏　なに、そんなものが怖いものか。（ト あたりに捨てゝある古き菅笠を音松取つて）
音松　それ出た、（ト笠を投りだす、幸藏びつくりして、）
幸藏　あゝ南無阿彌陀佛々々、（トべつたり下にゐて、逃げられぬ思入）
音松　なにをそんなに怖がるのだ。
幸藏　幽靈が出た〳〵。
音松　今のは風でおれが荷の、笠がとんだのだ。（ト笠を見せろ。）
幸藏　それぢやあ今のは此の笠か、おらあびつしより汗をかいた。
音松　こつちは寒くてこてえられねえ。
幸藏　この暖みの冷めない內。
音松　ちつとも早く家へ歸らう。

ト風の音題目太鼓にて兩人花道へはひる。跡時の鐘、合方になり花道より、六浦正三郎五十日鬘黑縮の附着、古き黑羽織、腰に風呂敷色みを結附け、零落士族のこしらへ、下駄を履き小田原提灯を提げ出て來る、跡より女房お浪栗梅紋附の當附け、腹合せの帶、士族女房のこしらへ、駒下駄を履き當歲の子を抱き出て來り、花道にて、

お浪　モシ旦那、今打ちましたのは、何時でございますね。
正三　縁日へ出た植木屋がしまつて歸つて來たからは、大方九時か十時であらう。
お浪　道理で往來の人も無く、大層淋しうございますな。
正三　晝でもこゝらは淋しい所、それに此頃物騷な噂があるので夜に入つては、とんと往來の人は無い。
お浪　谷中においでの伯母樣が急病との知らせ故、夜道も厭はずまゐりましたが、後が見られてなりませぬ。
正三　なに淋しいとても僅の所、よし又道にて突然と盜賊などが出ようとも、少しは腕に覺えもあれば、決して氣遣ふことは無い。
お浪　何ぼあなたのお手が利いても、以前と違うてお腰の物が、
正三　いや、それも絕えず懷中に、
お浪　え、、
正三　いやさ、懷中物を取られた所が、わづか小札で五六枚、
お浪　それは些細なことなれど、若しや向うが刄物でも持つて居た其時は、どんなお怪我をなされうやら。

正三　おぬしはそれが怖いか。

お浪　士族の妻でありながら言ひ甲斐ないと思召しませうが、斯うして居ても後から切られでもする樣で、身の毛が立つてなりませぬ。

正三　後が見られて怖いなら、先へ立つて行くがよい。

お浪　どうぞさうして下さりませ。

ト兩人入替り抱兒の泣くないぶり附ながら舞臺へ來る。正三郎は後より舞臺へ來り、時の鐘になり上下を見返り思入あつて、

正三　これお浪、ちよつと待ちやれ。（トお浪はびつくりして、）

お浪　何ぞ居りましたか。

正三　狐狸の其外に、誰がこゝらに居るものだ。

お浪　えゝ、氣味の惡いことを。（ト抱兒泣く、）正太も怖くておびゆるか、おゝたがよ、たがよ。

正三　これお浪、今其方に正三郎が申聞すことがある、先づ暫く下に居やれ。（トお浪は心得ぬ思入にて

お浪　どのやうなことか存じませぬが、爰でお話しなさらずと內へ歸つて仰しやりませ。

正三　いや內では話しにくいこと故、伯母の病氣と僞つて往來のない芋坂へ、そちを伴ひ參つたのだ。

お浪　そりやまあどういふ譯あつて、
正三　仔細は胸に覺えがあらう。
お浪　思ひがけない其お詞、胸に覺えがござりますとは。
正三　よくも六浦正三郎の、面へ泥を塗りをつたな。（トきつと言ふ。）
お浪　え、（トぎつくりなして下に居る、正三郎は四邊を窺ふ、お浪思入あつて、）不束者故行屆かず、萬事に仕落もござりませうが、あなたのお顏へ私が泥を塗りしとおつしやりますは。
正三　泥を塗つた其證據を、唯今是で見せてくれう。（小田原提灯を下へ置き、腰に附けし風呂敷包を解き中より男の切首を出し、）お浪此首を見やれ。（ト目前へ差出す、お浪提灯の灯影で是を見て、）
お浪　や、これは。（トびつくりなしてどうと下に居る。此時一ツ鉦を打込み凄みの合方になり、抱兒頻りに泣くを叩き乍ら當惑の思入。）
正三　舊幕府の折同勤にて、佞人讒者と言はれたる心能からぬ野島傳治と、汝は密通なしたであらうな。
　　ト詰寄る、お浪はハアと泣伏す。
先達てより隣家の者が噂致すが耳に入り、竊に目を附け居たれども、確證なき故其儘に素知らぬ振に打過ぎしが、昨夜そちが添乳の折取落したる傳治が密書、拾ひ取つて開き見れば、それなる

一子正太郎を置去りにして當地を立退き、他國へ行きて世間晴れ夫婦にならんと勸むる文體、手跡は彼が自筆ゆゑ、是を證據に官へ訴へ處置を請はんとおもひしが、開明の世に今日まで斷髮なさぬ頑固の某、日頃の癇癖忍び難く今宵傳治を呼出し密書を以て詰問せしに、遂に白狀に及びたれば、隱し持ちし短劍にて彼が首を討落し、士たる者の一分立て、猶も伯母の病氣と僞り往來あらざる芋坂へ、今宵そちを連出したは、此場で首を討落し、傳治が密書を姦通せし證據となして自首なす所存、最早其の罪脫れざれば、サア有體に白狀致せ。（ト言ふにお浪は淚を拭ひて、）

お浪　かゝる證據のあるうへは、包み隱さず申します。餘儀なきことで愼むべき操を破り野島傳治と、密通致してござりまする。

正三　むゝ、すりや彌々密通せしとな。

ト言ふを聞いて正三郎腹に据兼れ、お浪が襟上を取り、むごく引き倒す、是にて抱兒泣く故、

お浪　お目をかすめてござりまする。

正三　えゝ汝ばかりは見損なひしぞ。（ト突放す、お浪は泣子をいぶり附ける合方替つて）今更いふも愚癡ながら未だ舊幕盛んの折り、我勤めたる徒士役の頭といふはそちが父、其頃仁者と言はれたる森戸小左衞門殿の目鏡により身分も卑き我妻に、媒を以つて贈られしが天晴女一通り行儀は元より讀

書裁縫、絲竹の道までも人に勝れしそち故に、六浦は果報者なりと組の者にも言はれたる其の喜びも瓦解の悲しみ、兩腰脫して仕馴れざる商法開き奉還せし金圓殘らず失ひて、今は其日の活計も貧に迫りて立兼ぬる此の正三郎を見捨てぬは、流石森戸の娘なりと心で褒めて居つたるが、いつしか我を見限りて傳治と密通せしからは、寶を得しと喜びし悴も彼の胤なるか、よくも〳〵今日迄まざ〳〵しく欺きしぞ、言はう樣なき人でなしめが。

ト拳を握り口惜しき思入、お浪は泣く子を勞りながら涙にくれ、

お浪　今更何とおつしやつても、道にそむきし密通を致しましたる上からは、返す詞はござりませぬが、傳治が胤と仰しやりまするが、此子は密通せぬ先に、產落したるあなたの胤、是ばかりは疑をどうぞ晴らして下さりませ。

正三　夫婦となつて十何年、できざる小兒のできたるは、傳治が胤に疑ない。

お浪　其お疑は無理ならねど、傳治と密通致しましたは僅か二月跡のこと、確な證據がござりまする、

正三　此期に及んで其證據、聞いて益なきことなれど、そち達二人は密通せし罪ある故に殺害なせど、假令傳治が胤にもせよ、小兒に何の罪なければ、此儘助け遣はす所存。

お浪　すりやお助けなされて下さりますか。

正三 近頃未練なことながら、そちが證據と申すのは。

お浪 唯今お話し申しませう。(ト此時抱兒又泣く故、)おゝ泣くなく、今此母に別るゝ故、蟲が知らして此樣に泣くか、たがよく、(トゆすぶり乍ら、)母と共々殺さるゝことゝ思つてゐた所、そちには罪がない故に、助けるとある今のお詞、嬉しいことではあるけれど、今宵限り乳に放れ明日より餓いことであらう、かゝる憂目をさせるのも母が道にそむきし故、おゝ泣くなく。此世の別れに此乳を澤山呑んで置きやいの。(トお浪は乳を呑ませながら泣入る、正三郎是を見て、)

正三 左程悴が不便なら、なぜ密通を致せしぞ。(ト言ふにお浪は正三郎をぢつと見て、)

お浪 もし旦那、あなたは傳治と私がまことに密通致しましたと、思召してござりますか。

正三 何と言やる。

お浪 傳治に此の身を任せましたる、切ない譯を一通りお聞きなされて下さりませ。(ト地藏和讃の合方になり、お浪は思入あつて、)あなたのお目を掠めまして、傳治と不義を致しましたは忘れも致さぬ跡の月三日の晩でござります、御朋友の三浦樣と夜網にお出なされし折、お留守を知つて竊に參り、詞巧に口說ます故、再び申出さぬやう深く恥しめましたれば、得心せずば一大事を訴へ出るからさう思へと、申す詞のいぶかしく、仔細を問へば日頃から、あなたが包む一大事、

正三　や、（ト正三郎びつくりなし、）すりや傳治には、彼のことを。

お浪　其の夜小影に忍び居て、一部始終を見て居りしと聞いて心も安まらず、此身を任さば誓ひを立て口外せぬと申します故、餘儀なく彼が心に隨ひ、密通致してござりまする。

ト涙ながらに言ふを聞いて、

正三　むゝ、すりや某が包み隠す、大事を傳治が存じをつて、そなたに不義を仕掛けしか。

お浪、否と申さばお上へ訴へ、あなたの御身にかゝります故。

正三　止むを得ずして身を任せしか。

お浪　切ない此身の不義徒、心の内の悔しさを、お察しなされて下さりませ。

トお浪は首を見て悔しき思入。

正三　かゝることゝも知らざれば、我目を盗みし憎くき女房、姦夫傳治と諸共に討つて捨んと此如く、（ト懐より白鞘の短刀を出し、）竊に一刀持參なし、伯母の病氣と僞つて此芋坂へ連出せしが、仔細を聞けばコハいかに、我身の大事を隠さん爲め身を穢したる健氣な女房、夫の常磐にも勝るとも劣らぬ貞女の其方に、不義の汚名を負せし傳治、思へば憎くき人非人めが。

ト短刀を下へ置き、傳治が首を舞臺へ摺附け口惜しき思入、此内お浪は死なうといふこなしあつて、

正三　ヤ、コリヤお浪には自殺なせしか。（ト抱起せば其手に縋り、）

抱兒をそつと下に寐かし短刀を取上げ、拔くより早く喉へ突立てる、正三郎びつくりして、

お浪　假令あなたの爲めにもせよ、此身を穢せし上からは、生きて此世に居られませうぞ。

正三　それも夫の爲めなれば、命を捨てるに及ばぬに。

お浪　いえ〳〵死なねばなりませぬ。

正三　とは又何故、（ト竹笛入りの合方になり、正三郎は子を抱上げ、お浪は苦しき思入にて、）

お浪　以前と違ひ今の世は、假令士族の身の上でも人を殺せばそれだけの、お咎受けねばなりませぬが、人に言はれぬお望みを、首尾よくお達しなさる迄、大事を知つた傳治故、折があらば差殺し我身も共に命を捨て、あなたの憂を除かんと、既に昨夜書置を認め置きしは斯なる知せ、傳治を殺せし其罪を此身に引受け死にますれば、跡にて日頃のお望みをお叶へなされて下さりませ。

ト帶に附けし巾着より書置を出し、正三郎に渡す、

正三　其の志ざしは忝いが、そちに一命捨てさせて、おめ〳〵それを見てゐられうか。

お浪　それでは折角思ひ詰め命を捨てしも犬死なれば、私不便と思召し我身の願をお聞下され。

ト苦しきこなしにて言ふ、正三郎も思入あつて、

正三　近頃未練の至りながら望みある身に其方が、誓詞に附くであらう。返す〴〵も斯る貞女を殺すは殘念至極なるぞ。

お浪　夫の爲に妻が死ぬのは、武士ならば御馬前で命を捨てるも同じ事、心殘りはござりませぬが、（ト抱兒を見て、）未だ乳呑の正太郎、嘸お困りでござりませうが、どうぞ育てゝ下さりませ。

正三　以前に變る身の上に乳母を抱へることはならねど、貰ひ乳なしても正太郎は、成人さすから心を殘すな。

お浪　えゝ、有難うござります。（ト本釣鐘を打込み、日覆より灯入の月を下し、正三郎思入あつて、）

正三　夫婦となつて十五年、宿らぬ腹へ宿り來て、此世へ出し甲斐もなく、

お浪　現在産みし母親の顏も知らずに別れるは、

正三　如何なる前世の因果やら、

お浪　今一響き呑んだ乳が、

正三　最早此世の呑み納め、

お浪　明日より人の貰乳に、

正三　嘸やひもじいことならん。

お浪　それが心にかゝれども、
正三　世間に鬼のあらざれば、
お浪　言はゞ佛の孤兒を、
正三　誰が育てゝくれるであらう。
お浪　果報拙い、
兩人　產れぢやなあ。（ト兩人愁ひの思入あつて、お浪うツとりとなるを介抱して）
正三　コリヤお浪、氣をしツかりと持て。
お浪　最早此身の知死期時、
正三　末期の別れに正太郎が、顏をとツくり見て行きやれ。（ト抱兒を顏の所へ出す）
お浪　おゝ、正太郎か。
正三　顏が見えるか。
お浪　あい、（トぢツと見て）もう見えませぬ。
正三　ムゝ、（ト抱兒を見て）斯る歎きも知らずして、にこ〳〵笑ふ正太郎。
お浪　そんなら笑うて居りますか。

正三　おゝ、機嫌よく笑うて居る。

お浪　我身も笑うて死にまする。（ト本釣鐘合方にてお浪短刀を抜きがつくりと落ち入る、正三郎側へ寄り、）

正三　これお浪〳〵、モウ息は絶えたか。（ト本釣鐘ホツト吐息をつき、）昨日に變る今日の身は、深き契りも水涸れて淺き縁の根岸川、妻の別れに袖絞る時雨が岡に千歳經る、松はあれども世を早う枯れて散行く小夜嵐、（ト此時抱兒頻りに泣く、正三郎死骸と抱兒を見て、）あゝ思へば不便な、（ト子を抱替るを道具替りの知らせ、）おゝ、たがよ〳〵。

ト死骸を見返り、子をいぶり附ける、寺鐘愁ひ三重にて此道具廻る。

（上野三枚橋の場）――本舞臺正面三枚橋上下駒寄せ、黒塗りに白く廣小路と記せし用水桶、日覆より雲のかゝりし月をおろし、總て上野三枚橋夜更の體、時の鐘、水の音、犬の聲にて道具留る。と右の鳴物にて上手より饂飩屋尻端折り草鞋にて、鍋燒うどんといふ行燈を點けし荷を擔ぎ出で來り、「鍋燒うどん、うどんやでござい」と呼びながら舞臺へ來る、合方になり、下手より手代與七着流し草履にて、小田原提灯の消えたるを提げ出て來り、

與七　もし〳〵饂飩屋さん〳〵。（ト呼びかけるゆゑ、）

饂飩　はい〳〵。（ト荷を下す。）

與七　まことにお氣の毒でござりますが、灯を貸して下さいまし。

饂飩　え、それぢやあ饂飩を、あがるのぢやァないのかえ。

與七　些し氣の急くことがあつて、今喰べて居られぬ故、堪忍して下さいまし。

饂飩　今夜の樣に間が惡く、さつぱり賣れないことはない。さあ〳〵早く附けなせえ。

與七　これは有難うござります。（ト提灯に灯を附け、）まことに少しばかりだが、饂飩を喰はぬ其替りに、

ト天保錢を出す。

饂飩　なに其の心配には及ばない、「鍋燒饂飩、うどん屋でござい、」（ト呼びながら下手へはひる。）

與七　饂飩も喰はず呼留めて、アヽ氣の毒なことをした。（ト時の鐘替つた合方になり思入あつて、）若旦那にも困つたものだ、ふとしたことから湯島の矢場でお孃お兼と評判の梅本の内の娘に惚れ、商賣用をかこつけて毎日朝から遊んでばかり、お供をして來た此與七が親御樣へ濟まぬ故、幾度となく御異見申せど糠に釘でお聞なさらず、今日も朝からお出掛けなされ、十時を打つてもお歸りないのは、てつきり湯島と思つた故内へ尋ねて行つた所、最前お歸りなされたがそれから間もなく娘が見えぬと、行方を尋ねに出た樣子、若しや今夜娘を連れ何處へか逃げでもなされはせぬか、

あゝ案じられたことぢやなア。（ト案じる思入にてゆきかけ、石に躓き右の手をつき起上つて、）折角附けた提灯を、すんでのこと消す所いゝあんばいに消えなんだ。（ト言ひながら右の掌を見てびつくりなし、）や、こりや掌へ血が附いたが、摺りこはした様子もないに、（トあたりを見廻し、）おゝそこら爰らに血のしたゝり、若しや人でも、（トぞツとして下手を見かへり、）幸ひの用水桶、爰で手を洗つて行かう。

ト提灯紐を口にくはへ、手を洗ひ手拭で拭きながら此方へ來ようとして、足に障りし紙入を取りあげ、

爰に紙入が落ちてあつたは、巾着切が金を取り捨て行つたに違ひない。（ト提灯の灯でよく〳〵見て、）コリヤ若旦那の紙入だが、扨は掏摸に抜かれたのか。（ト紙入の中を改め見て、）中には大事な證書類、札がそツくりあるからは、爰へお落しなされたか、今迄人に拾はれず我手に入つたは天のお助け、嘸や捜してござらうから、少しも早く宿へ歸つてお悦ばせ申しませう。（ト紙入を頂き上手へ行掛ける、時の鐘凄みの合方になり、與七四邊を見廻しきツと思入あつて、）幸ひ四邊に人もなく、此紙入を拾つたを見てゐた者は月ばかり、己が此儘ずりこんでおくとも知つた者はない、年季上りの身分では七十圓といふ金の手に入ることはありやアしない、コリヤ返すのは馬鹿々々しい、そ

ツくり何處ぞへどめておき、此ほとぼりがさめてから、出して遣へば知れやあしない。

ト心變りの思入あつて、紙入を懷中へ入れ、にツたり笑ふ、此時下手にて按摩の笛聞える。

どれ、更けぬ内歸らうか。

ト合方にて橋の方へ行きかゝる、下手より按摩宗庵茶の頭巾垢附きの縞の着附、齒の減りし下駄、杖を突き笛を吹きながらとぼ〳〵と出て來り、

宗庵 もし、そこへおいでなさるお方、お聞き申したいことがございます。

與七 見ればお前は按摩さん、私に聞きたいことゝいふのは。

宗庵 はい、俄盲人で方角を忘れまして、さつきから困りきつて居りましたが、道を聞かうにも往來の人も少ない夜更故、あちらへまご〳〵こちらへまご〳〵、どう仕ようかと存じました、是から淺草の田原町へは、どちらへ參つてようございます。

與七 おゝ田原町へ行きなさるなら、橋を渡つて右の方へ、といつた處が知れ難からう、丁度幸ひ廣小路へ是から私は歸る者、跡に附いて一緒に來なさい。

宗庵 それは有難うございます、斯ういふお方にお出合ひ申すも、見えぬ目ながら朝夕にお參り申す、觀音樣の御利益でございませう。

與七　俄盲目と言ひなさるが、いつ目がつぶれなすつたのだ。
宗庵　此頃のやうでござりますが、つぶれましてもう半年、思はぬ難儀を致します。おまへ様もお聲の様子はお若い方と存じますが、コリヤ御異見ではござりませぬが、かゝる姿になりました私がよい手本、若い折に傳馬町のさる商人に奉公を致して居ります其時分、主人の目をば忍びまして、よく吉原へ參りましたがたうとう末は瘡を背負込み、長煩ひをした擧句が、此の通目がつぶれ、厄介になる身寄もなく、此處に三日彼處に三日と安泊りに居りますが、よく人様が喰ふや喰はずとおつしやいますが、私は喰はず〳〵に餓鬼道のかゝる苦しみ致しまする、今々思へば奉公を餘所になしたる主人の罰、來世の地獄を待ちませず此世で報ふ阿鼻叫喚、損料錢や屋根代の鬼に毎日責められて、中有に迷ふ亡者同然、惡いことは出來ませぬと目は覺めれどもほんやりと、晝と夜るとが分かるのみ、何の手業も出來ませぬ故人の勸めで此間から按摩の弟子になりまして、療治を致して居りますが揉習ひゆゑ子供同やう、上下揉んで二百文と五十を越して大道を呼んで歩く身の悲しさ、お察しなされて下さりませ。
ト袂より絞の手拭を出し涙を拭ふ、與七も氣の毒だと思入あつて、
與七　それはまことに氣の毒なことが、さういふ難儀を仕なさるのも主人の罰といひなさる、お前の詞

は私へ異見、必ず仇には聞きませぬ。（ト與七は惡いことをしたといふ思入あつて、財布より小札を五十錢出して、）是は少しばかりだが五十錢、お前に上げるから煩はぬ樣體の肥しに、明日牛でも喰ひなせへ。（ト宗庵の手へ札を渡してやる。）

宗庵　これは〱有難うございます、煩はぬ樣體の肥しに牛でも喰へと御親切に、おつしやつては下さりますが、どう致して勿體ない、榮耀に牛が喰べられませう、思ひがけなく五十錢お惠みなすつて下さりました是で米を買ひまして、細く長く粥に炊き、朝夕御恩を頂きます。

ト與七を拜む氣で脇の方へ手を合して拜む、與七是を見て、

與七　中年からとは言ひながら、餘程勘が惡い樣子、是では道も知れぬ筈だ。

宗庵　それ故石に躓いて幾度轉ぶか知れませぬ。

與七　藝者だとよい金になるのに。

宗庵　金所か此間も、下水へ落ちてなけなしの錢を落してしまひました。

ト風の音になり、ぞッとせし思入あつて、

與七　アヽ上野颪しで寒い風、サア更けない內に行きませう。

宗庵　お供致すでござります。（ト兩人橋の方へ行掛け）

與七　爰らは砂利が大きいから、轉ばぬやうに氣を附けなさい。

宗庵　はい、有難うございます。（ト言ひながら宗庵石に躓きバツタリ轉ぶ、與七立掛り、）

與七　氣を附けなせへといふ下から、モウ躓いて轉ばれたか、どこぞ強く打たしつたか。

宗庵　はい、膝を打ちましてござります。（ト轉んだ儘膝を摩り居る、）

與七　それぢやア疵でも附きはせぬか。

宗庵　憚りながら此膝を、御覽なすつて下さりませ。

與七　どれ〳〵捲つて見せなせえ。

ト傍へ寄りしやがむ時、懷より以前の紙入を落す、宗庵手早く拾ふ、與七それを取りに掛る。所をウンと脇腹を突く、與七びつくりして脇腹を押へながら、

與七　コヽ、コリヤ按摩には、

ト言掛け苦しむ。宗庵は紙入をくはへ立上りながら手拭を襟へ掛け締殺す、與七は手足をもがき落入る、本釣鐘を打込み、宗庵與七の鼻へ手をやり、息の絶えしを見て手を放す、與七はバツタリ倒れる。宗庵紙入の中の札と證書を出す、此時灯入の月を出し札を算へ證書を見て、笑を含み紙入を捨て財布へ二品を入れ、

宗庵　宵に呼ばれた茅町の、尾張屋といふ米屋から、療治をしまつて歸りしな、頭痛を揉んだ其時に天窓へ遣つた手拭を、そつと袂へ入れて來たが、國の土産か有松染、金に鳴海の幸先よく、それが今夜の役に立ち、賣つたら五十か六十の古手拭で七十圓、濡手で安房から上總を見晴し、八十日の苦役をして汚れた體の垢を落し、仕舞湯よりも溫つた此ほとぼりのさめぬ内、產れ故鄕の九十九里漁場へ行つて一稼ぎ、百と二百の資本を拵へ日歩でも貸して暮さうか、(ト本釣鐘、思入あつて、)有松絞りの手拭は、この東京で持たねえから、足が着くめえものでもねえ。(ト與七を締殺せし手拭を取る、此時與七の襟の痣を見て、)や、耳から襟へ此痣は。

トぎつくり思入、此時下手にて、「鍋燒饂飩、うどんやでござい」といふ此聲を聞きびつくりして、

人に見られぬ其内に。

トすごき合方、水の音にて、死骸の帶を取つて川の中へ打込む。ドンと水の音。宗庵四邊を見廻し杖を拾ひ、何か心に掛る思入にて下手を振返る、此時駒寄の蔭へ天狗小僧金助、白の行衣同じく手甲腹掛脚絆草鞋、白の手拭を冠り後で結へ、金剛杖を突き窺ひ居る、宗庵ぎつくりして氣を替へ杖を突きながら、按摩上下二百文と呼びながら上手へ行掛けるを、

金助　おい、按摩さん〳〵。

宗庵　はい、お呼びなされましたか。
金助　ちつとお前に、頼みたいことがあつて呼んだのさ。
宗庵　むゝ、（トうなづき、）お療治でござりますなら、お宅へ御一緒に上りませうか。
金助　己ア療治をするのぢやアねえ。
宗庵　して頼み度いとおつしやりますは。
金助　按摩さん、旨くしたね。（ト宗庵の背中を叩く、宗庵思入あつて、）
宗庵　なに、旨くしたとは。
金助　そんなにお前とぼけなさんな、賣つたら五十か六十の古手拭で七十圓。
宗庵　え、（トぎつくり思入。）
金助　いやさ、降るかと思つた雨雲も、ぞつと身に染む夜風に晴れ影さへ凄い冬の月、宵にしまつた屋臺見世の中に己が寐て居るとも知らぬが譬の佛店、常念佛の六阿彌陀を、向うに見ながら年寄が後生をねがふ心もなく、慾に目のねえ振をしてごまかす按摩の荒療治。
宗庵　や、
金助　旨い仕事をしたぢやあねえか。

宗庵　むゝ、（トやはり目をふさぎ居るを見て、）

金助　何にしろ目を明きねえな、己に盲目の眞似は無駄だ。（トこれにて宗庵目を明き、）

宗庵　それぢやァお前はさつきから、屋臺見世に寐て居たのか。

金助　宵にタラフクのんだ酒も一寐入する其内に、おつかねえ夢を見てすつぱり醒めてしまつたから、頼みといふは外でもねえ、一ぺい呑してくんなせえな。（ト宗庵悪い奴に出逢つたといふ思入あつて、）

宗庵　見れば天狗の面を背負つて、お前は金毘羅へ行きなさるのか。

金助　いかにもおらァ金毘羅參り、御信心か御信心でねえか、そこ迄は知らねえが、樽で流す人せえあるから、象頭山へあげたと思つて、いつぺい呑ましてくんなせえ。

宗庵　己も若い時分には、十日にかゝさず參りにいつた、然も其ころ賽と杯女といふ字へ錠をおろした、野暮な額へ髷を添へ、たび／＼納めたことがあつた。（ト思入あつて、）隨分己も信心するから、象頭山へあげたと思つて、呑代をお前にあげよう。

金助　それは何より有難い、見なさる通り行衣一枚、夜明へいつていつぺいやらにやァ寒くつて凌げねえ。（トこの内宗庵財布から、小札を出して塵紙へ包み、）

宗庵　まあ少しばかりだが、これで呑みなせえ。（ト出す、金助手に取り戴いて、）

金助　四國は讃州中の郡象頭山金毘羅大權現、御信心の輩は家内安全息災延命、（ト是をいひながら札を探つて見て、）モシ按摩さん、こりやアいくらありますえ。

宗庵　あいにく小札がすくないから、氣の毒だが二十錢だ。

金助　なに小札にやア限らねえ、大札でくんなせえな。

宗庵　なんだと。

金助　二十錢や三十錢の、はした錢がいるものかえ。（ト叩き付ける、宗庵拾ひとり、）

宗庵　いらざアよしねえ天下の寶だ、無理に遣らうとはいやアしねえ。

金助　二十錢の其札は遣らうといつても貰はねえが、最前盗んだ七十圓、やらねえといつても貰はにやアならねえ。

宗庵　だいぶづぶとくいひ出したな。

金助　サア、按摩、二才野郎を締殺し、汝が盗んだ七十圓は飲代に貰ひてえ。

宗庵　萬年町から損料で借りた行衣と思ひの外、こなたもたゞの金毘羅參りぢやアねえな。

金助　それをおめえは今知つたか、目がみえぬながら惡い勘だ、三年跡まで下谷から淺草かけてごろつき歩き、盆の上ぢやア小天狗と異名を取つた讃岐産れ金助といふかすりとり、其頃己がいふ目が立

ち、ちッとからだにねえ役だが、人の娘を引渡ひ宿場へ賣つた勾引し、悪い噂が高くなり久しい跡に高島屋がだんまりに出た金毘羅まゐり、ふッとそれを思ひだし大きな面が小道具にあつたを無理に賣つて貰ひ、急拵らへに姿を替へ、くらひ込まねえ其内と箱根向うへ高飛びに三尺棒の難を脱れ、便る身寄の遠州路秋葉の在に身を忍び晝は天狗にさづかつた稀代な疝氣の妙藥と、性も得知れぬ藥賣、夜るは人目を鞍馬山牛若よりも早業に此處や彼處へ飛こんで、只取る錢に三熱の毎日朝から天狗の生醉、然し地酒をのんだお蔭に悪い噂も早く醒め、羽根をひろげて東京へ、歸り早々七十圓寐耳に聞いた上からは見脫すことが出來ねえ性分、堅氣にならうと思つたも又も魔道へ墮ちにやアならねえ。

ト金助金剛杖を突き思入にていふ、此内宗庵橋の土臺へ腰を掛け、懷からかます煙草入を出し、摺附木で煙草を飲みながらせゝら笑ひ、

宗庵 モウ言草はそれ限りか、些細な悪事を鼻へかけ手前極めの大天狗、金毘羅參りに相應な讃岐產れの金助さん、名前は立派な肩書付だが、かう見た所が三十になるかならずの二才上り、いかに若いといひながら己にそんなおどかしは、あんまり目前が見えねえなあ。

金助 なに、おれが目前が見えねえとは。

宗庵　己を上下二百文の、いゝでも按摩だと思つて居るか。

金助　なんと、（ト時の鐘合方きツぱりとなり、）

宗庵　いゝ年をしてこんなことをいふのは大人氣ねえけれど、默つて聞いて居られぬのが持つて産れた曲ツた根性、口は達者にきくけれど百に足りねえ九十九里、漁夫のおらァ悴だつたが、蟹でも親にあやかツたか何でもかでも横に行き鋏が利いて手が長く、堅氣な親父が海へぶちこみ鮫の餌食にしてしまふといつたを仲間に助けられ、雜魚場の問屋に年季奉公、濱邊に居るゆゑ十四五から品川などへ游ぎ出し、終には濱の港より深い恩ある主人の物を持逃して、それからぐれの仲間へ入り、押借强請荒稼ぎまだ其頃は舊幕の時分に痛え棒を背負ひ、しなびた腕に此入墨、それから段々沖を越え今度は首がなからうと思つた時が御一新、危い命を助かつたは早手に逢つた助船、天の惠みと有難く坊主になつてすツぱりと、改心したが喰ふに困り游ぎを知つて水で死ぬ譬の通り刑罪の、淺い深いも知りぬいて又もや元の夜働き、見掛はけちな按摩だが人殺し迄ある此宗庵、お前方の脅しを聞いて居るのは實に大儀だ。（ト宗庵ふて〴〵しくいふ、金助も思ひ入あつて、）

金助　そつちも聞くのが大儀なら、コツちも默つて聞くのが大儀だ。御たいそうなことを言つても時代おくれの老衰廻り、しなびた腕の入墨を自慢に見せる時分なら、七十圓はたいした金だが今の世

界で百圓に足りねえ金で人を殺すは、けちなやつだと思つて居たのだ、假令千圓盗まうとも生きて居られる有難いお上の御法を知らねえか、七十圓でも人を殺しやア長く首は付いてはゐねえぜ、いらねえ命か知ねえが、端た金ぢやア馬鹿げたことだ、おらア手前の金を取るとも決して命はとりやアしねえ、腕で取るからさう思へ。

宗庵　六十近え體ゆゑ、少しは老衰も廻つたらうが、古い女房に幼兒を付け捨てたも千住に馴染があつて、三日にあげず行く己だ、年は取つても手前達に持つてる物を取られるやうな、そんなゆるんだおれぢやアねえ、だんまりに出た金毘羅參りと飛んだ寶の奪合だが、取られるものなら取つて見ろ。

金助　おゝ、取らねえでどうするものだ。（ト宗庵の懷へ手を突込むを拂ひのけ、）

宗庵　えゝ、しやらツくせえことをしやアがるな。

ト時の鐘新内の合方へかすめて水の音を冠せ、此時月へ雲掛る。宗庵金助摑み合の立廻りあつて、宗庵の懷より以前の財布を引出す、是をやるまいと爭ひ、トゞ下へ落し宗庵取りに掛るを突倒し金助取上げる。宗庵起上つて足へ取付く、此時上手にて靴音する、振返り見て、

金助　南無三、お巡り、（ト金助金剛杖で宗庵を突退け、財布を持つて逸散に花道へはひる。）

宗庵　ウヌ、逃げるとて逃すものか。
　ト跡を追駈けはひる。時の鐘合方になり、橋の上より查官杉田薰官服帽子沓、手に角燈と棒を持
　出て來り、
薰　只今是にて高聲に呼はり居りしは何事なるかと、急いで參る其内に、雲を霞と逃行きし後姿は
金毘羅參り、一人は確と分らざりしがさのみなことでもないと見える。（ト杖と笛のあるを見て、）
玆に杖と笛のあるは、扨は按摩であつたるか。（ト角燈であたりを見て、）大ぶ爰らに血汐のしたゝ
り、心得難きことではある。（ト以前の紙入を見付け、）此の紙入は金毘羅參りや按摩の持つべき品
ならず、扨は掏摸にてあつたるか、取逃せしは遺憾の至り。杖に何やら彫付けあるは、（ト角燈で見
て、）いろは假名にてそうあんと記しあるのは後日の證據、分署へ持參致さうか。
　ト上手へ行きかける。下手にて端唄になり。
〽我物と思へば輕き傘の雪、妹許ゆけば冬の夜の、（ト薰是を聞き跡へ立戻り、）
最早今宵も十二時過ぎ、打捨て置かれぬ、あの三絃、
〽川風寒く千鳥鳴く、（ト此内方角を聞定むる思入あつて、）
あゝ布告を知らぬ、（ト角燈を上げるを木のかしら、）ものと見ゆる。

〽待つ身につらき置炬燵。
ト此唄へかすめて水の音を冠せ、宜しく、

ひやうし　幕

二幕目

奥山茶見世の場
車坂町入口の場
忍ヶ岡原中の場

〔役名――査官杉田薫、六浦正三郎、演說師楠石齋、讚岐金助、稻田豐三郎、古鐵買泥藏、巾着切丹作、宇治喜美太夫。石齋妻おむら、矢場娘お兼其他。〕

（淺草寺奥山の場）――本舞臺眞中に大きな石の供養塔、銀杏の大樹上の方屋根附板羽目の屋體にて見切り、下の方屋根附茶店の屋體、印附の軒提灯、正觀世音菩薩といふ長提灯を掛け、此内茶道具の臺、竹簾を掛け、後障子にて見切り、屋體の前に長床几を並べ、日覆より銀杏の釣枝、總て淺草奥山の體、爰に泥藏木綿羽織股引尻はしをり風呂敷包みを背負ひ、古着屋のこしらへにて臺石へ腰を掛け、側に序幕の猿藏、勘次白の手甲脚絆笈摺巡禮のこしらへ、小葛籠を側へ置き、笠を敷いて煙草を呑み居る、此見得辻打へ双盤を冠せ幕明く。

泥藏　今日お前方は巡禮姿で、何處へ稼ぎに行つたのだ。
猿藏　けいづ屋さんも知つての通り、東京は掏摸の詮議が嚴しいゆゑ、うつかりすると喰ひ込み、赤い仕着で苦界の勤めだ。
勘次　それも初會か裏ならいゝが、今度行きやあ三度だから、言はずと佃か小菅へ行つて、長い年季を入れにやアならねえ。
猿藏　そこで今日は巡禮姿で、葛飾三十三所をば廻るとごまかし稼いで來たのだ。
泥藏　定めて素早い二人だから、いゝ仕事をして來たらうね。
猿藏　所が明巣の稼ぎだから、ろくなものはありやしあねえ、（ト葛籠の中から黑の羽織木綿布子子供の着物赤銅の古藥鑵を出し、）目ぼしい物は田舍醫師の羊羹色の黑羽織に、小中飯に野良へ持つて行く、くすぶり返ッた銅藥鑵。
勘次　跡は布子に古半纏、小便くせえ小裁が一枚、直打はねえが龜井戸から態々背負つて來たのだから、今日は直をよく貰つてくんねえ。
泥藏　龜井戸だけに天神記に縁があつてか並べた品は、何れを見ても山家育ちふめる物は何にもねえ、まだふめるのは藥鑵だが、是も汚を落したら目方がげッそり減るだらう。

猿藏　何でもいゝから突込んで、ぞツきで直をよく買ひなせえ。

泥藏　ぞツきで直をよく、一圓と四十六錢といふ所だが、五十錢に買ひませう。

猿藏　二圓がものはあるけれど、幾らに賣つても儲けだから、それぢやァそれで賣つてやらう。

勘次　こんな安い物はありやあしねえ。

泥藏　安い高いは元直のあるもの、只取つて來る代物だから幾らに賣つてもいゝぢやあねえか。

ト紙入から札を出して渡し、代物を風呂敷へつゝむ。

猿藏　けいづ買も多くあるが、お前位な人はねえ、足許を見て安く見倒し、不正な品をしやァ〳〵と店へ釣して高く賣り、

勘次　まだそればかりか貰ひ娘の、お金を湯島の矢場へ出し、月に五圓や七圓で幾人となく旦那を取らせ、こんな商法はありやあしねえ。

泥藏　所が娘が堅藏で、己が言ふことをきかねえから思つた程は金にならねえ、此間も上州からほッと出の豪家の息子が二三度見世へ遊びに來たゆゑ、お金に勸めて膳を据ゑさせ、首尾よく箸を取らせたから、七十圓持つて居る路用の金を捲上げようと思つて居る内三枚橋で、其紙入を拔かれてしまひ、中にあつた五百圓の證書の爲に身を投げて息子が死なうといふ所へ娘が内を駈出して、

親の心子知らずに一緒に死なうと覺悟したのを、池の端のお蓮といふ茶屋の女房が引留めて内へ知らしてくれたから、直に己が飛んで行つて、娘は連れて歸つたが、覘つた金は取られてしまひこんな馬鹿げたことはねえ。

猿藏　今いふお前の娘の客、豪家の息子の紙入を其晩拔いたは己達だが、逃損なつて引つかまり、敲きなぐつて逃げようと思ふ所へ丹作が、詮議の積りで其場を胡麻かし、

勘次　首尾よくこツちへ卷上げて、三ツに割つて根津へでも押上らうと思ひの外、三枚橋で丹作が其紙入を落してしまひ、詰らぬ怪我をしたのが儲け、こツちも三人馬鹿を見た。

泥藏　そりやあ詰らねえことをしたな、誰か其晩其金を拾つたものがあるだらう、アヽ氣の惡い話だな。

猿藏　時に腹が北山だが、順禮姿を葛籠へ打込み、中見世の尾張屋か辨天山の惣菜で、一猪口やつて飯を食はう。

勘次　何處へ行つても中見世ぢやあ、面を知つて居られるから、大金へ行つて軍鷄にしよう。

泥藏　あすこの內はかしわがいゝから、大金なら突込みてえ。

猿藏　二人で呑むも淋しいから、一分投込んで一緒に來ねえ。

泥藏　二十五錢なら一人で行つて、幾らも釣を持つて歸らア。

勘次　それぢやァ小札を二枚出しねえ。

泥藏　所を一枚出して行く氣だ。

猿藏　いや、しみツたれな男だな。

泥藏　是でなけりやあ金は出來ねえ。

ト双盤浮いた合方にて三人上手へはひる。直に花道より石齋の妻お村黒の羽織、人柄よき御新造のこしらへ、下女お靜和し裝中働きのこしらへ、少し跡より喜美太夫黒の羽織着流し、男藝者のこしらへにて出來り、花道より、

喜美　もし、そこへおいでなさるは、小紫さんぢやあございませんか。

お村　おや、誰かと思つたら喜美太夫さん、久しくお目にかゝらないね。

喜美　まことに御無沙汰を致しました。

お靜　民中さんや善孝さんはよくお內へおいでだが、昔馴染でありながらなぜおいでゝないのだねえ。

お村　王子へでもおいでの時に、門から寄つてもよいぢやあないかね。

喜美　よい所ぢやあございませんが、久しく王子へ參りませんから。

お靜　それぢやあ王子へお出でなければ、お立寄りはないのだね。

喜美　なに、さういふ譯ぢやあないけれど、
お村　おやまあ、此寒いに汗をかいてサ。
喜美　あんまりおいじめなさるからだ。
　　ト右の鳴物にて舞臺へ來る、此内茶店より娘お澤前垂掛け、茶屋娘のこしらへにて出て、
お澤　これは根岸の御新造樣、よく御參詣なさいました。
お村　やう〳〵此頃肥立つた故、けふお參りに參りました。
お澤　昨日と違つて今日は、お暖かで宜しうございります。
お村　そんなに今日は暖かゝね。
お靜　いえ、暖かでございませう。喜美さんが汗をかきましたから。
喜美　又わたしをいじめるのか。
お澤　思入いじめてお上げなさい、喜美さんは奥山に意氣な話がございますから。
喜美　オツト、そんな話は致す可からず、又汗をかゝにやあならぬ。
お澤　色があるだけ何時見ても同じ樣に見えますが、わたしが赤ん坊の時分からの喜美太夫さんでございますから、モウ餘ツ程でありませうね。

喜美　野暮なことを聞いたものだ、役者や藝人に年はない。

お村　年があつてもなくても、モウ九十でありませうね。

喜美　いえ〳〵名前が喜の字だから、七十七かも知れません。

お澤　それとも八十八位か。

喜美　さう一がいに糶上げては、年の相場は暫く停止だ。四十代に下らねば婦人の人氣にかゝはります。

お澤　是はたゞは聞かれません。喜美さん何ぞお奢りなさいよ。

喜美　明日さしで中見世の、萬年屋へ行きませう。

お村　中見世の萬年屋とは。

喜美　まだ御存じございますまいが、玩具屋の後手へ萬年屋といふ料理茶屋が近い頃出來ましたが、俗にいふ半會席でちよつと喰へてお手輕ゆゑ、大層此頃流行ります。

お靜　此間武藏屋の鎌さんがおいでの時、其お話がございました。

お村　わたしやそれを聞かなんだよ。

喜美　時に今日は觀音樣へ、御參詣ばかりでございますか。

お村　けふは山谷のお寺參りから、こちらへ廻つて來ましたのサ。

喜美　承れば赤さんがお出來なすつたと申す事、まことにお目出たう御座ります。

ト　お村ちよつと思ひ入あつて、

お村　其のお目出たいといふ間もなく、二七夜に蟲で取られ、今日が四十九日故お寺參りに行きました。

喜美　それは惜しいことをなされましたな。

お靜　惜しいといへば美しい玉の樣なお坊樣で、御初產にお乳の出がよく、旦那樣を初めとして家中嬉し悦んだ其甲斐もなく驚風で、はかなくおなりなされました。

喜美　それは嘸かし御愁傷、お察し申上げます。

お村　只困るのは乳が張つて、毎日絞つて流しますが、乳の無い子に遣つたらば悦ぶことであらうのに。

お澤　此近所には二三人、困る者がござりますが、惜しいことでござりますな。

喜美　して旦那樣は演說に、やはりお出掛けなさいますか。

お村　此頃は寒いので、何處へもおいでなされませぬ。

喜美　それでは近日推參致し、御新造樣のお三絃で石の枕でも語りませう。

お村　久しい跡に紫朝さんの三絃で聞いたぎり、お靜お前嘸嬉しからうね。

お靜　まことに嬉しうございます。

喜美 そんなにお前嬉しいかえ。

お靜 此節癇で寐られませんから、喜美さんの石の枕を聞いたら睡くなりませう。

喜美 こんな惡い太皷はない。なんぼ石の枕だとて、其様に睡くなるものか。（トむつとせし思入。）

お澤 まアお湯でもお一ッ上りなさい。（トお澤櫻湯を出す。喜美太夫ぐッと吞んで、）

喜美 あつゝゝ、なぜ此様に湯を沸して置くのだ。

お澤 お湯は熱いものであります。

喜美 是も八十度位にしたらよからう。

ト舌を燒きし思入、女形三人は笑ふ、此時獨吟にて双盤の念佛一件あつて、跡誂の合方へかすめて、双盤をあしらひ、花道より序幕の正三郎切繼の着流し、黑の山岡頭巾を冠り抱兒を懷へ入れ、目病の思入にて出來り、花道に立留り、

正三 月日の立つは早いものにて、今日は妻の立日なれど一人の伯母も靜岡の悴の方へ引取れ、方今當地に緣者なく、我墓參りを致さねば花を手向ける者も無き故、眼病ながら知れたる道に、小梅迄佛參なし、事の次手に淺草寺へ參詣を致したが、往來の人を見返れば綺羅を飾りし者のみにて、斯く見すぼらしき姿の者なし、されば懷舊の情に迫り、昔日の事思ひ出せば、世にも不幸な我身

の上、あゝ生甲斐のないことぢやなあ。（ト思入あつて舞臺へ來り、石に躓き轉ぶ、喜美太夫抱起し。）

喜美　もし、何處も怪我をなされはしませぬか。

正三　いえほんの膝を突きしのみ、どこも怪我は致しませぬ。（ト此内抱兒泣くをいぶり附けながら、）おゝ泣くな〳〵。

喜美　膝へ泥が附きました。（ト拂つて遣るを、）

正三　これは〳〵憚りでござる。（ト此内お靜お村に囁く、是にて頭巾の内を覗き見て、）

お村　や、正三郎さんぢやござりませぬか。

正三　さういふ聲は。（ト見え兼る思入。）

お靜　あなたはお忘れなさいましたか、花魁でございますよ。

正三　え、小紫どのか。

お村　はい、左樣にござります。

正三　あ、面會致すも面目ない。（ト差うつむき恥入りし思入、）

喜美　まづ兎も角もこれへおいでなすつて、お掛けなされませ。（ト浮いた合方楊弓の音になり、喜美太夫正三郎の手を取り床几へ掛けさせ、）さッぱりお見それ申しましたが、六浦樣でござりましたな。

正三　さう言はるゝは、喜美太夫どのか。

喜美　花魁の所へ入らしッたは、五年跡でござりましたな。

正三　朋友共に誘はれ四五度通ひしことありしが、其時切に引替へて不幸續きで零落なし、見る影もない正三郎、よく見忘れさつしやれぬぞ。

お村　御朋友のお附合で僅な内のお馴染なれど、御親切なお心に是なる小藤と時折に、貴方のお噂致しますれば、何でお見忘れ申しませう。

正三　かゝる姿に成果ては、見ぬ顔するが常なるを以前を忘れぬ小紫殿、御身の誠忝なし。シテ唯今にては廓を出で、さるべき方へ縁附かれしか。

お村　はい、昨年の春仕合せと楠石齋といふ馴染のお客に、身請をされて苦界を脱れ、縁附きましてござります。

正三　おゝ、其石齋といふ仁は近附ではないけれど、演說家にて有名故、かねて名前は承知致す、何に致せ仕合せなことぢや。

喜美　仰しやる通りお仕合せなのは、旦那は第一學がよく、演說がよく作がよく、男がよくて氣性がよく、何から何迄よい物盡しの、中によいのが御內福、殊に是迄番頭の小藤さんが賄ひ役故、まこ

とに樂な御新造樣。

正三　それといふのも娼妓に稀な志し故、天の惠みぢや。（ト此内お村正三郎を見て）

お村　さつきから見ますれば、お目の惡い御樣子だが、流行目でござりますか。

正三　心配多き故なるか、此程より眼氣にて、暫時も明いてをることならず、ほとんと困苦致し居る。

お村　御新造樣はどうなされました。

正三　妻は先月死去致し、乳呑を跡へ殘されて難儀致す其所、不幸續きで盜難に逢ひ、遂にはかゝる姿となり、まことに恥入る次第でござる。

お村　それはあなたのお手一つで、嘸お困りなされませう。（ト此時抱兒泣く）

お澤　大そうお泣きなされますな。

正三　先刻出掛に隣家にて、貰ひ乳なせしのみなれば、ひもじうなつたと見えます。

お靜　もし御新造樣、あなたのお乳をあのお子さんに、お上げ申してはどうでござります。

お村　人見知りさへなされませずば、一杯お上げ申しませう。

正三　それは何より忝ない、（ト懷より抱兒を出し、）しかし、むさくるしい此の小兒を。

お村　いえ／＼、其の御遠慮には及びませぬ。（トお村抱き取り、）

お澤　それでは簾の此の蔭で、

お村　どれ、呑まして上げませう。（ト合方になり、お村簾の蔭へはひる。）

お靜　まだ上り物は上りますまいし、お乳が無くてはあのお子さんに、嘸お困りなさいませう。

正三　晝は乳を貰うて凌げど、夜るは貰ふ譯にもゆかず、泣立てられるにはほとんと困れば、里に出さうと存じたが、月々扶持を送るも手數、殊には此身に志願ある故、金子を添へて何れへか遣はし度存ずれど、恥かしながら零落致し今日其身の活計に差支へる程なれば、添へる金子も心に任せず、困苦極まる流浪の某、胸中察しられよ。

喜美　さういふことでござりますなら、慾氣を放れた貰手をお捜し申して上げませう。

　　ト此時簾の蔭よりお村出來り、

お村　澤山お呑ませ申しましたから、もうお泣きなさいますまい。

正三　これは〳〵忝ない。（ト抱兒を受取り）思ひがけない御馳走で、たんのう致しましたと見え、ぱッたりと泣止みました。（トお村思入あつて、）

お村　モシ喜美さん、さつきお前がお話しの萬年屋へ行きたいから、座敷が明いてゐるかゐないか、行つて見て來て下さいまし。

喜美　畏りましてござります、ちよつと行つて見て參りませう。六浦樣、御免なされませ。

ト双盤になり、喜美太夫下手へ足早にはひる。お澤是を見て、

お澤　どれ、お茶を入替へて上げませう。

トお澤奥へはひる。あとしんみりとした合方へ、楊弓の音をあしらひ、お村思入あつて、

お村　もし正三郎樣、只今あれにて承りますれば、引續いてのお不仕合せで、以前お出の時分と違ひ御不都合の御樣子故、甚だ失禮ではござりますが、何ぞの足に此お金をお遣ひなされて下さりませ。（トお村氣の毒さうに十圓紙に包みしを出す、正三郎奇特なことゝいふ思入あつて、）

正三　志しは、忝ないが、不都合ながらどうなりかうなり、其日を幽に送り居れば、此心配には決して及ばぬ。

お村　お物堅い御氣質故、御遠慮をなさいませうが、此お金は私が上げますのではござりませぬ。初會馴染の其折に下さいました十圓を、お返し申しますの故、お受けなされて下さりませ。

正三　零落なせし正三郎を貢いでくれるは嬉しいが、一旦贈りし其金子を、如何に貧苦に迫ればとて、何でそれが受けられようぞ。

お村　それではどうでも此お金を、お受けなされて下さりませぬか。

正三　志しを無にいたし、氣の毒ながら受けられぬ。

トきつと言ふ、お村是非なき思入、お靜こなしあつて、

お靜　もし御新造樣、それをお受けなされずば、お坊樣の御誕生をお祝ひ申して其お金を、お上げ申したことならば、お受けなさらぬとは仰しやりますまい。

お村　おゝよい所へ心附いた。それではお受けなさいますやう、左樣なれば改めて其お子樣へお祝ひ申せば、産着料とも思召し、お受けなされて下さりませ。（ト正三郎の前へ金包みを出す。）

正三　左程に言はるゝ親切を、悖くも本意ならざれば、如何にも受納致すであらう。

お村　そんならお受け下さりますか。

正三　志しの此金子、忘れはおかぬ忝ない。（ト金包みを戴き、懷中へ入れ、）今は何をか包み隱さん、瓦解此方貯への金子を遣ひ果せし故、餘儀なく家祿奉還なし、官より賜はる資本金にて一度商法開きしかど、馴れぬ手業に損のみ多く、それを氣病に母親が長病煩らひ死去致し、間もなく又も我大病、それ故二ケ年座食なし生活の道失ひし、折柄妻が不慮の最期、物入多き其中へ盜難に遭ひ衣類を失ひ、負債の爲に家屋を拂ひ、今は行方も定めぬ身に足手纏の此小兒、何れへなりとも遣はさんと思へど添へる金子もなく、止むを得ずして貰ひ乳なし困苦致して居つたるが、はか

らず今日御身に逢ひ惠みくれたる十圓にて、早速悴を他に遣はし、我一身と相成つて日頃の望みを達する所存、まことに大慶至極でござる。（ト正三郎嬉しき思入。）

お村　如何なることのお願ひか、存じませぬが其お金が、お役に立つと承りお嬉しうございます。

正三　遊里の者は薄情と、世人は言へど一樣ならず、僅四五度通ひしのみ、深き馴染にあらざるを我薄命を憐れみて、金圓惠みくれるといふは、流石は以前有名の金瓶樓の小紫、實に泥中の蓮ともいッつべき志し、感涙袖を浸せしぞ。（ト正三郎淚を拭ふを、お村お靜見て、）

お村　僅なお金を其樣に、お悅びなさるに附け、過し昔が思ひ出だされ。

お靜　花魁、おいとしいことではござりませぬか。

ト兩人いとしいといふ思入にて泣く、正三郎是を見て顏をそむけ泣く、双盤になり、下手より喜美太夫出來り、

喜美　萬年屋へ參りましたら、丁度立になる客がある故、跡を明けさせて置きました。

お村　それでは直に行きませう。（ト正三郎に向ひ、）左樣なれば正三郎樣。

正三　今日ははからぬ、（ト禮を言はうとするを、）

お村　あもし、（ト喜美太夫へ憚る思入あつて、）根岸へおいでなさいましたら、お行の松の左り手故、お

尋ねなすつて下さいまし。

正三　何れ其内参るでござる。（ト心の内で禮をいふ思入、奥よりお澤出來り）

お澤　もし、お歸りでござりますか。

お村　大きにお世話になりました。（トお靜紙包みの金を出し）

お靜　お澤さん、御新造樣から。

お澤　毎度有難うござります。

喜美　さあ、參りませう。

ト双盤浮いた合方になり、お村先にお靜、喜美太夫附いて花道へはひる。お澤茶碗を片附け、屋體へはひる。正三郎跡を見送り懷より金包みを出し、

正三　遊里通ひも朋友の附合故に僅四五度、さして爲にもならぬのに、以前を忘れぬ小紫が惠んでくれし此金にて、悴を他家へ遣はせば豫ての志願に心殘らず、思へば不幸重なりて斯迄零落致せども、未だ神佛の加護あつてか。

ト此時上手へ以前の猿藏、勘次世話裝になり、窺ひ居て、ツカ〳〵と來て正三郎に突當り、金包みへ手を掛けるを突廻し、眼病ながら立廻りちよつとあつて突放し、

　　えゝ、何を致す。

兩人　御免なさいまし。（ト双盤にて兩人下手へ逃げてはひる、奥よりお澤出て、）

お澤　もし、何ぞ取られはなさいませぬか。

正三　いや、何も取られは致さぬ。

お澤　それは宜しうございました。今の二人は掏摸でございます。

正三　さては所持なす金子をば、

お澤　取ります積りでございませう。

正三　いや、あぶないことで、（ト懐を押へるを道具替りのしらせ、）あつたなア。

　　ト抱兒泣くをいぶり附ける、双盤のせめにて道具廻る。

（車坂の場）――本舞臺一面の平舞臺左右三尺程の土手、松の立木日覆より松の釣枝、土手の裾溝の書割り、向う上野車坂夜るの遠見、總て山下通り車坂入口の體。下手に莚をしき、義太夫節といふ破れた角行燈。爰にお豊結び髪切繼なり、更けたるこしらへにて三絃を前へ置き、胸を押へ癪の起りし思入、娘お竹銀杏髷切繼裝にて、お豊の背中を摩り居る。時の鐘木魚入の合方にて道具留る。と

上下より仕出し出て、錢を遣り、捨ぜりふにて入違つてはひる、お竹思入あつて、

お竹　おツかさん、まだ胸が痛いかえ。

お豐　宵からの此塞さに、蓙の上で冷えるせゐか、きや〳〵痛んでならぬわいの。

お竹　困つたものでござりますな。（ト摩り居る、風の音になり、）

お豐　又風が出て來たの。

お竹　此風故に往來の人足が留まらねば、早くしまつて内へ歸り、行火でもしてお寢つたら、癪も納まりませうから、モウおしまひなされませ。（トお豐後を振返り、可愛さうだといふ思入あつて、）

お豐　此の吹晒しの大道へ破れ果てた蓙をしき、年端も行かぬそなたを坐らせ、夜毎に聲も枯々に、節も廻らぬ淨瑠璃を無理に語らせ往來の、人の情にやう〳〵と其日を送るはかない身の上、此寒空に綿入の手當なければ着の儘に汚れ袷に古浴衣、身巾も狹く切果て袖に涙の乾く間も、泣出しさうな天氣故、早くしまつて歸りたいが、此間から降續き安泊りの宿錢に借りる蒲團の損料が、七日程溜つた故、今日は貰ひの其内から、せめて五錢か六錢のお錢を借の内へ入れねば、宿の主人のお熊殿がよい顏せねば泊つて居られず、それ故どうか十四五錢合力受ける其間、定めて寒くもあらうけれど、もう少し辛抱して玆に居てくりやいの。（ト言ひながら涙を拭ふ、お竹是を見て、）

お竹　いえ〳〵わたしは薄着でも、少しも寒くござりませぬ、聲を出して淨瑠璃を語ると汗が出ますから、何時迄なりと居りますが、三絃を彈くおッかさんが、嘸お寒うござりませう、斯うして御苦勞なさるのも、足手纏ひの私がある故、其の替りもう少し大きくなると寄席へ出て、お前に樂をさせますから、それを待つてゝ下さりませ。

お豐　おゝ待つて居るとも〳〵、少しは世間に知つた人もあるのに斯うして顏をさらし、昔習うた淨瑠璃のお蔭で其日を助けられ、辛き浮世を送るのも、そなたを大きくしたいばかり、今いふ寄席へ出る樣になつたら跡から三絃を擔いで供を仕ようとも、どの位此母は嬉しいことか知れぬぞよ。

お竹　もう少しでござりますから、私も辛抱しますから、お前も辛抱して下さいまし。

お豐　そなたの優しい詞を聞き、少し胸が開いて來た、嘸草臥れたらう、少し休みや。

お竹　いえ〳〵草臥れは致しませぬ。（トお竹脊中を摩りながら思入あつて、）もしおッかさん、わたしのお父さんは亡なつたのかえ。

お豐　いえ〳〵亡なりはせぬけれど、今は何處に居なさるか、居處も確に知れぬわいの。

お竹　まだわたしが小さい時、お母さんと喧嘩をして、出ておいでだがおとッさんは、あれぎり歸つておいでゝないね。

お豐　お〻、夫の疵を言ふやうだが、若い時から身持が惡く、酒が好き女郎が好き、まだ其上に御法度の博奕事が大好で、内の物は着物から道具類迄賣つてしまひ、まだ賣足らず吉原へ年端もゆかぬそなたをば僅な金に賣るといふ故、是ばかりは賣られぬと摑み合つて留めた果が、たツた一枚殘してあつた、蒲團を擔いで行つたぎり、何處へ行つたか行方知れず、無據逃亡のお屆けをしてしまつたが、何處にどうしてござるやら、まことに困つた人ではある。（トお竹思入あつて）

お竹　おツかさんは此樣に可愛がつて下さるのに、お父さんは實の子のわたしが可愛くないのかねえ。

お豐　僅か五圓か六圓の、金にそなたを賣る氣故、何で可愛いことがあらう。

お竹　餘所の子のおとツさんはよい着物や簪を娘に買つてくれるのに、わたしを女郎に賣らうとは情ないお心故、其樣な親は入りませぬ。其替りおツかさん、どうぞ達者で居て下さいまし、お前が死んだらおとツさんに、直にわたしは賣られませう。それが悲しうござりまする。

　　トお豐の脊中へ取付いたま〻泣く、お豐お竹の手をとつて前へ引寄せ、

お豐　お〻、どの樣な事があらうとも、そなたが大きくなる迄は決してわたしは死なぬから、氣を丈夫に持つて居や。

お竹　どうぞお前も體を大事に、煩らはぬ樣にして下さいまし、段々寒さが強くなるゆゑ、體へ障ると

お豐　悪いから、今夜は歸つて下さりませ。
お竹　今歸るのは易けれど、貰ひしお錢も僅かなれば、此儘歸れば明日は御膳を、喰べずに居ねばならぬわいの。
お豐　明日御膳を喰べずとも、わたしは辛抱致しますから、どうぞ歸つて下さりませ。
お竹　親甲斐もない此母を、それ程迄に思つてくれるか、てもまあ可愛いことぢやわいの。
　　トお豐お竹を抱きしめぢつと泣く、合方きつばりとなり、上手より杉田薫巡査のこしらへにて棒を持ち、角燈を提げ出來り、此體を見て傍へ寄り、
薫　こりや〳〵、見れば苦痛の樣子ぢやが、其方は如何したのぢや。
お豐　はい、此寒さにて持病が起り、胸先へ差込みまして、思はぬ難儀を致します故、是なる娘にさすらせて居りましたのでござります。
薫　それは難儀なことであらう、持病は大方癪であらうが、吹晒しの大道へさうして居つては冷えるであらう、早く宿所へ歸るがよい。
お豐　人民保護のお役とて、數なりませぬ私を、おいたはり下さりまするは有難うござりまするが、只今直には歸られませぬ。

薫　何故あつて歸られぬのぢや。

お豊　はい、斯樣に大道へ出まして、娘に拙い淨瑠璃を語らせまして合力受け、其日を送る私共、今夜は出まして間もなく明日の煙りを立てますほど、まだ合力を受けませねば、差込む癪を怺えまして、もそツと是に居りませねば、明日の暮しに困りまする。

薫　すりや明日の活計が立兼ねる故、苦痛を怺へ、いまだ是に居ると申すか。

お豊　はい、左樣にござりまする。

お竹　只今も私が母の體が大事故、明日喰べます物がなければ喰べずに辛抱しますから、たんと持病の重らぬ内歸つてくれと申しますれど、母が聞いてくれませぬ。何卒内へ歸ります樣、仰しやり附けて下さりませ。幾日なりとも私は喰べずに辛抱致します。

薫　扨々そちは形に似合はず親を勞はる志し、誠にもつて感心致す、孝子は必ず下賤にありと申す詞に違はぬ孝心。して、そちは何年なるぞ。

お竹　はい、十年七ケ月でござりまする。

薫　名は何と申す。

お竹　岩淵竹と申しまする。

薰　學校へ入學せしか。

お竹　六ツの春より上りまして、讀本迄習ひましたが、お禮を致すことがならず、下りましてござりますが、私よりも等級の下な者が僅な内に、日本略史を讀みますのが、お金があらばと存じますと、まことに悔しうござりまする。

薰　おゝ嘸かしそれは遺憾であらう、僅十年七ケ月で其志しがあるからは、今日迄も通學致さば、天晴始終は女教師に、なるべき器量あるものを、斯く大道で淨瑠璃を語らせるとはそちよりも、今聞く僕が遺憾なるぞ。（ト薰惜しいものだといふ思入、お豐面目なき思入あつて、）

お豐　是と申すも私が、其日に困りまするゆゑ、よんどころなく此の樣な賤しいことを致させますが、實に不便にござりまする。

薰　シテそちの内は、何れぢや。

お竹　はい、私の内はござりませぬ。

薰　なに、内がないとは。

お豐　いえ、是はかやうでござりまする。元私共は牛込の山伏町に居りましたが、夫が逃亡致しまして女の身にて暮し兼ね遂に世帯をしまひまして、麻布谷町に居りまする店受方へ引きとられ、同

居致して居りまするが、場末故に大道で淨瑠璃を語りましても、合力致す者がないゆゑ、此間から萬年町の丹波屋と申す安泊りに、泊つて居つて淺草や下谷邊へ出でまして、往來の人の合力受け、生命をつないで居りまする。

薫 おゝ左樣であつたか、何れに致せ此寒風に吹きさらされて爰に居らば、病は增すとも治りはせぬ。
ト此内薫角燈を下へ置き、棒を小脇に挾み、隱より三十錢出し紙に包み、
是は少しばかりぢやが、そち達へ遣はすから、今日の合力と思うて早く泊りへ歸り、藥でも呑むがよい。(ト紙包を渡す。)

お豐 有難うはござりますが、あなた樣より頂戴しては。

薫 いや僕も一人の母あつて、先達てより煩うて居れば、所謂同病相哀れむで、そちに是を遣はすのぢや。

お豐 左樣なら仰せに隨ひ、頂戴致しますでござりまする。

薫 今遣はせしは三十錢ぢやが、今宵の泊り明日の米代、可なりそれであらうな。

お豐 いえ、あるどころではござりませぬ、二十錢ござりますれば、澤山でござります故、是はお返し申します。(ト包みを明け、十錢札を出すを、)

薫　いや／＼それは返すに及ばぬ、二十錢で事足りるなら、殘る十錢は其孝女に、何ぞ買うて遣つてくりやれ。

お豐　え、有難うござりまする。（トお豐金包を頂く、お竹手を突き）

お竹　母が內へ歸られまするもあなた樣のお蔭ゆゑ、お禮を申上げまする。（ト天窓を下げて禮を言ふ。）

薫　ほんのさゝいなことなれば、其樣にそち達が禮を申すに及ばぬぞ。（トお豐に向ひ）そちが病氣を娘が案じ、あの樣に悦んで居れば、早く仕舞つて歸るがよい。

お豐　明日の苦勞がござりませねば、直に歸りますでござりまする。（ト此時行燈の灯消える。）

お竹　おッかさん、蠟燭がなくなりました。

薫　灯りが入るなら見せてやるから、早く其處を片付けたがよい。（ト角燈を上げ見せる。）

お豐　何から何迄有難うござりまする。

トお竹三絃と行燈を持ち立ちかゝる、お豐莚を卷き片附ける、此內薫あたりに散る小錢を拾び、

薫　こりや、一厘錢がこゝにあつたぞ。（ト出す。）

お豐　有難うござりまする。（トお竹一厘錢を頂いてしまふ。）

薫　何も取落し物はないか。

お豐　いえ、何もござりませぬ。

薫　然らば早く參つたがよい。（トお豐薩を抱へ）

お豐　左樣なれば、

兩人　お巡り樣。

薫　氣を付けて行きやれ。

兩人　有難うござります。

ト時の鐘合方風の音、辭儀をなし、見返り〳〵上手へはひろ。薫は角燈を上げ跡を見送り、

薫　いかなる者のなれの果か、物言とても賤しからず、定めて今日貧に迫り止むを得ざることであらうが、此寒風に吹きさされ、大道へ出て淨瑠璃を語りて纔な合力受け、其日を送る哀れな身の上、我合力致さずば持病の惱も厭はずに、十時迄も大道に夜風に吹かれて居るであらう、母は是非無きことながら、孝心深きあの少女、天晴人になるべきを、かゝる賤業致さすは、アヽ憫然なことぢやな。（ト不便だといふ思入あつて、氣を替へ）孝女に感じて職務を怠る、どりや巡行いたさうか。

ト時の鐘合方にて薫下手へはひる、やはり合方直に花道より以前のお村、お靜「萬梅」といふ貸提灯を提げて出來り、

お靜　もし御新造樣、惡い風の車屋でござりますな。

お村　うつかり辻では乘れないよ。

お靜　女ばかりと侮つて根岸と申して極めたのを、廣德寺前までだと申し根岸迄の代を取つて、憎い奴でござりますな。

お村　あゝいふ風の車屋は、どんなことを言ふかも知れないから、下りてしまつた方がよい。

お靜　宿車だと安心故、坂本へ行つて乘りませう。(ト舞臺へ來りお靜お村のあたまを見て、)もし、簪はどうなさいました。(トお村天窓をなでゝ見て、)

お村　差して居たと思つたが、それでは車を下りる時、落したか知らぬ。

お靜　ちよつと行つて見て參りませう。

お村　もう拾はれてしまつたらう。

お靜　いえ人通りが少ないから。拾はれぬかも知れませぬ。

お村　それでは、行つて見て來てくんな。

お靜　直行つて參ります。

ト　お靜提灯を持つて足早に花道へはひろ、此内花道より金助縞の半天着流し、駒下駄にて出來り、そ

つと下手へ來て窺ひ居る。

お村　なければ早く歸つて來なよ。（ト跡を見送り思入あつて、）あの簪は小間物屋の吉兵衛さんへ誂へて、やう〳〵出來てまだ二三度差すか差さぬに落すとは、私の性に合はぬか知らぬ。

ト此時下手へ金助小腰を屈め出て、

金助　もし御新造樣、何ぞお落しなさいましたか。

お村　はい、簪を落しました。

金助　其の簪は珊瑚珠の、五六分位な差込で、金足ではござりませぬか。

お村　よく御存じでござりますな。

金助　それぢやあ私が拾ひました。

お村　えゝ、そんならお前さんが。

金助　御新造樣是でござりませうな。（トかます入より誂への玉の簪を出す、お村受取り見て、）

お村　はい、是でござります。（ト嬉しき思入。）

金助　只今是へ參る道で、金の光りが目に付いて拾ひましたが金目な品物、お巡りさんへ渡しませうと爰らを尋ねて居ります內、落したといふお話しがふつと耳へはひりましたから、お尋ね申してご

ざりますが、落し主へお渡し申せば、是で手數がかゝらなくて私も宜しうござります。

お村　よいお方に拾はれて、落しましたわたしの仕合せ、まことに有難うござります、何れお禮に上りますが、お宅はどちらでござります。

金助　なに、お禮も何も入りませぬ、裏家住の貧乏暮し、尋ねておいでなされますと、實に恥をかきますから、それはお斷り申しまする。

お村　さうおつしやらずと、どうぞお内を。

金助　そればかりは御新造樣御免なされて下さりませ。（ト是を聞きお村紙入より祝儀包へ札をいれ、）

お村　それでは甚だ失禮ながら、ほんのお禮の印ばかり、是をとつて下さりませ。

金助　どうして〳〵飛んだことだ、落し主へ拾つたものをお返し申すはあたり前、お禮をお貰ひ申しては、天道樣へ濟みませぬ。

お村　そんなことを仰しやらずと、どうぞ納めて下さりませ。

金助　こりやあ何と仰しやつても、お禮はお貰ひ申しませぬ。

お村　でも正直なお心ぢやな。

トお村感心せし思入、此時下手にて、

丹作　喧嘩だ〳〵。(ト大きな聲でいふ、お村びつくりする、)

金助　もし喧嘩がござります。早くお逃げなさいまし。

お村　何處へ行つたらようございませう。

金助　私と一緒においでなさいまし。

ト時の鐘、合方ばた〳〵にて、金助お村を連れ正面土手の後へはひる。下手より前幕の丹作世話裝尻端折り草履、白木綿にてむかう鬚をゆはへ、疵の有る體足早に出來り、

丹作　今金助にたのまれて、喧嘩々々とどなつたが、夜目でもきらつく天窓の物、身ぐるみ剝がば大した仕事、殊にやァ勝れた別品故、こいつァ天狗が謀叛を起し山へ浚つて行つた筈だ。ドレ張番をしてやらうか。

ト丹作思入あつて、正面土手の蔭へはひる、やはり時の鐘早き合方にて下手より前幕の豐三郎、着流しにて出來り、跡より同じく矢場の娘お粂出來て、豐三郎の袖を捉へ、

お粂　もし豐さん、どうぞ上州へおいでなら、一緒に連れて行つて下さいまし。

豐三　さあ連れて行かれる譯ならば、言はずと一緒に連れて行くが、どうもさういふ譯に行かない。

お粂　それでは是程申しても、連れて行つて下さいませぬか。

豐三　五百圓の證書を失ひ、一途に迫つてあの折に、一緒に死なうとおもつたも、お蓮さんに異見され不了簡と氣の附いた所へ泥藏殿が來て、お前をつれて行つたゆゑ、死なうとおもつた氣も拔けてすご〳〵宿へ立歸り、とられたお屆けをした所、三枚橋に紙入だけ落ちてあつたをお巡りが拾つて分署にあつたれど、五百圓の證書はなし、かてゝ加へて其晩に迎ひに出たる手代の與七が、何れへ行つたか行方知れず、幸ひ今度内からして迎が來た故一先歸り、身の言譯をなした上、再び此方へ出て來るから、それ迄待つて居て下さい。

お粂　いえ〳〵待つて居られませぬ、此儘内に居りますれば、實の親で無い故に、是を科にわたしをば旅へ娼妓に賣るのは必定、諸人に肌を汚すのを恥かしく思ふのも元が士族の娘故、連れて行つて下さりませずば、わたしや身を投げ死にまする。それを不便と思召すなら連れて退いて下さりませ。

豐三　此身に越度が無いことなら、一緒に連れて行くけれど、是から内へ歸るにも人を頼んで詫をする身、其處へお前を連れては行かれぬ。僅の内の辛抱故どうぞ待つて居て下さい。

お粂　連れて行かれぬ其譯を、お聞き申せば達てとも、言はれぬあなたのお身の上、一緒にお國へ參るのは、わたしや思ひ切りまする。

豐三　それでは待つて居てくれるか。

お兼　あい。（トうつむき泣き居る。）

豐三　泣いてばかり返事をせぬは、心に濟まぬことがあつてか。

お兼　あなたにお別れ申しますれば、辛い苦界の勤めをするより、わたしや死ぬ氣でござりまする。

豐三　死ぬといふのを此儘に、見捨て行くも本意無いわけ。

お兼　そんなら私を共々に、連れて行つて下さりますか。

豐三　はて、どうしたらよからうなあ。

　　ト豐三郎當惑の思入、お兼は豐三郎にすがり泣く、上手より以前の泥藏風呂敷包を脊負ひ出來り、豐三郎に突當り、

泥藏　えゝ、邪魔な所に居るぢやあねえか。

豐三　や、さういふ聲は。

お兼　お父さんかえ。（ト泥藏兩人を見て、）

泥藏　や、わりや上州の豐三郎、又お兼を連出したな。

豐三　何で私が連出しませう。

泥藏　いや〳〵連出したに違えねえ。（ト木魚入の合方になり）野郎も野郎なら女も女だ、こんな金のねえ奴に何時迄汝は惚れて居るのだ。今當世の娘はな煤に汚れた神棚の大黑天を見る樣な眞黑けへな男でも、惠比壽樣の附いて居る札をたんと持つて居る福神と見て惚れるが利口、それも金が無くなつて貧乏神に近くなつたら、さつさと團扇であふぎ出し、福祿壽の高帽子か又毘沙門の軍人か布袋和尚の教導職、壽老のよぼくれ親仁でも金のあるのに取替へて、親に樂をさせるのが育てられた恩返し、貧乏神を叩き出し是から福を招くから、おれと一緒に内へ來い。（ト手を取るを振拂ひ）

お兼　いえ〳〵わたしや歸りませぬ。

泥藏　それぢやあどうでも貧乏神を、見捨てることは出來ねえか。

お兼　死んでも見捨ては致しませぬ。

泥藏　えゝ金に仕ようと思つた娘、役に立たぬもおのれゆゑ、思へば憎い野郎だなあ。

ト豐三郎の胸ぐらを取つて引寄せる。

豐三　コレ泥藏殿、私が知つたことではない。

泥藏　なに、知らねえことがあるものか、おのれに惚れて居るからだ、娘が思ひ切る樣に、打殺すからさう思へ。（ト豐三郎を引附けむごく打つ、お兼是を留めて）

お兼　豐さんを殺すなら、わたしを先へ殺して下さんせ。

泥藏　えゝ邪魔をせずと、退いて居ろ。

ト時の鐘誂への合方へ狸囃子をかぶせ、泥藏有合ふ縫ぐるみを取り豐三郎をむごつ打つ、お兼泥藏を留める捨ぜりふにて立廻り宜しくあつて、トヾ豐三郎を手ひどく打つ、是にてうんと氣を失ひどうとなる。お兼側へ駈け寄らうとするを、泥藏手を手り、

娘はおれと一緒に來い。

お兼　いえ〳〵、わたしやお前とは。

泥藏　やかましい、來いといふに。

ト右の鳴物にて泥藏お兼の手を取り、無理に引立て下手へはひる。跡時の鐘かすめて風の音誂への合方になり、豐三郎立上らうとしてどうとなり、體の痛む思入あつて、

豐三　今夜お兼に國へ行く故暇乞を仕ようと思ひ、湯島へ尋ねて行つた所、親が非道な事を言ふ故一緒に連れて行つてくれと、爰迄附いて來た所へ親泥藏が來合せて、我連出せしと打擲なし、果は此身を踏んだり蹴たり、斯る憂目にあつたのも思へばみんな親の罰、お兼も今宵の事からして非道な親の泥藏故、宿場へ娼妓に賣るは必定、身でも投げて死なねばよいが、お兼が死んだら共々に

死なねば互ひに二世掛けて誓ひし仲の義が立たぬ、どうでもおれは死神に附かれて居ると見えるわえ。

トどうとひれ伏して泣く。石の鳴物きつぱりとなり、花道より楠石齋ラッコ帽子道行ぶり、着流し好みのこしらへ人力車に乗り、車夫車を引いて出來り、直に舞臺へ來り、上手へ行掛ける。石齋豐三郎を見て、

石齋　おい、ちよつと待つて下せえ。

車夫　はい、何ぞお落しなされましたか。

石齋　いや何も落しはしないが、其所に倒れて居る人は、病人でゝもありはせぬか。

車夫　いえ、生醉でござりませう。

石齋　生醉ではなさゝうだ、ちよつと尋ねて見てくんな。

車夫　畏りました。（ト車を下へ置き、豐三郎の側へ行き、）もしお前さん、どうかなすつたかえ。

豐三　只今爰で悪者に、打たれましてござります。

車夫　そりやアあぶないことだッたね。もし旦那、お聞きなさいましたか。

石齋　むゝ聞いたく、大方そんなことだらうと思つた。（ト石齋車より下り側へ行き、）見れば若いお方だ

が、どうして打たれなすつたのだ。

豊三　仔細あつて湯島に居る、泥藏と申す古着屋と口論を致しまして、打たれましてござります。

石齋　それは飛んだ目に逢ひなすつたが、何處ぞ疵でも附きはしませぬか。

豊三　疵は何處もござりませぬが、體が痛んでなりませぬ。

石齋　してお内は何處でござります。

豊三　はい、わたしは上州高崎田町一丁目で、呉服物を渡世に致す稻田作右衛門が悴豊三郎と申します者、商用あつて出府致し、先達て三枚橋で不慮な災難に遭ひまして、國へ歸るも歸られず、當時淺草廣小路の松坂屋と申す旅人宿に逗留致して居りまする。（ト是を聞き石齋思入あつて、）

石齋　すりやお手前は高崎の、稻田の御子息でござりましたか。

豊三　はい、左樣にござりまする。

石齋　お手前には初めてだが、拙者は楠石齋と申して平民ながら勤王家、聊か演説抔を致すが、四五年以前上州邊を遊歷なせし其折に、伊香保へ參り二週間程湯治を致し居つたる時、御親父と一ツ宿にて朝夕湯場で落合つて遂に深き御懇意を結び、歸路高崎迄御同道致しちよつとお宅へ立寄つて、直に同所の料理家にて別盃の饗應に預り、其の後遠路に書翰を以て只音信を致すのみ。さり

ながら見ず知らずの御仁でも難儀の體に見過しがたく、車夫に問はせて及ばずながらお世話をいたす氣であつたが、御懇意結びし稻田氏の御子息とあるからは、猶更お世話をせねばならぬ。手前は是より遠からぬ根岸の里にをりますれば、先づ兎も角も拙宅にて委細のことを承はり、及ばずながら石齋が御助力を致しませうから、一緒においでなされませ。

豐三　扨は石齋樣でござりましたか、豫々父がお噂をいたしますのでお名前は、承知致してをりまするが、思ひがけなく此處で貴方にお出逢ひ申しますも、不思議な御緣でござりまする。

石齋　して此間三枚橋で災難に遭つたと仰しやるのは、どんな目にお遭ひなすつたのだ。

豐三　湯島から歸りがけ、巾着切りに附けられて紙入を拔かれました。

石齋　其の紙入には大切な品でもはひツて居りましたか。

豐三　はい、金が紙幣で七十圓、それに五百圓の貸金證書、それを盗まれましてござりまする。

石齋　左程の物を取られては、嘸御殘念でござりませうが、取られた上は是非もなし、失禮ながら七十圓が若しお入用でござりますなら、御用立て申しませう。

豐三　返す〴〵も御厚情、有難うござりまする。（ト辭儀をする。時の鐘。）

石齋　只今打ちしは八時の鐘、御窮屈でも車があれば、相乘りで參りませう。

豐三　いえ、わたくしはお跡から、
石齋　跡と言はずにお乘りなされ。
豐三　然しそれでは、
石齋　はて、遠慮なされず、（ト豐三郎の手を取り、兩人車へ乘るを道具替りの知らせ。）急いでくんな。
ト車夫「へい」と梶を上げる、此見得合方早き木魚の音にて道具廻る。

（原中の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に松の大樹、小脇に小高き築山、此の下泉水枯蘆茂り、下の方古き石碑二三本、藪疊向う土手、樹木の間より下谷の町家を見たる夜の遠見、總て忍ケ岡寺跡野原の體、爰に以前の金助お村の帶の端を持ちて立身、一ッ鉦の刻みにて道具留る。一ッ鉦凄みの合方になり、お村逃げに掛るを、帶をたぐつて引寄せ、きつと思入。

お村　そんならお前は、どうでもわたしを。
金助　此の草原で自由にするのだ。
お村　えゝ、（トびつくりなす。やはり一ッ鉦合方にて。）
金助　そんなに驚くことはねえ、菊屋橋で車屋が切れた草鞋を履換へる其時丁度新堀から、出合頭に提

灯の灯りで思はず見てびつくり、ぞツと素顔の中年増、其の面差は覺えのある金瓶樓の小紫、以前に換る權妻風にふツと發つた煩惱から直に菩提の寺町通り、跡から附けて行つた所は寒さに一杯呑ましてくれとねだる酒手に途中から、下りた所も車坂町、鬢の薫りか櫻香の軒に隱れて拔いた簪、安く踏んでも四五十圓金目な物を拾つたと正直ぶツて返したは、其の金足に引替へてこツちは鍍金の喰せ物、地金を出しやァ天狗小僧金助といふ巾着切り、惡事は五分でも隙ねえ己だ、六分あまりの差込みを玉につかツて寺跡へ喧嘩を機に連込んだは、お前を愛で慰む氣だ、三ツ蒲團にやあ寐倦きたらうがまだ草原で下駄を枕に、野天の勤めの味は知るめえ、ちつと夜露で冷たからうが、是も話しの種だから、野暮をいはずにしつぽりと、昔を出して天井の雲間の星でも算へて居ねえ。(トきつと思入。)

お村 此の簪を拾つたと、金目な物を返せし上禮を受けぬは正直な人と思つて喧嘩に恐れ、一緒に來たはわたしの誤り、往來稀な原中故手籠に逢つても仕方がないが、わたしは兎もあれ此事が、世間へぱツとした時は夫の恥になること故、櫛簪はいふに及ばず金の指輪に紙入の、お金も添へて上げるから、どうぞ許して下さいまし。

金助 櫛簪から紙入迄元より見込んでした仕事、己が思ひを晴らした上身ぐるみ剝いで持つて行く氣

だ、いくら許してくれと言つても此美しい顔を見て、どう此儘によされるものだ、是がお孃さんか御新造なら、さういふのも尤もだが、今は人の女房でも元は汚れた苦界の身の上、否應をいふところはねえ。

お村　それは勤めをした身なれど、以前は以前今は今、主ある體にどうあつても、お前に此身は任せぬから、思ひ切つて下さいまし。

金助　それぢやあどうでも、いやだといふのか。

お村　金にしたら百圓からの品を殘らず上げるから、どうぞ此儘わたしをば。

金助　いゝや思ひ切られねえ、逹ていやだといふからには、（ト懷から短刀を出し、直に拔いてお村に差附け。）跡へ心の殘らねえ樣に、殺してしまふがそれでもいやか。

お村　假令爰で殺されても、お前に此身を任しては、夫へ操が立たぬ故、死んでも此身は任しませぬ。

金助　さう強情を言ふからは、芝居めいたせりふだが可愛さ餘つて憎さが百倍、突殺すから覺悟しろ。

お村　殺して思ひが晴れるなら、早くわたしを手に掛けて、

金助　おゝ、殺さねえでどうするものだ。

ト お村の胸元を取り、短刀を差附ける、此時しらせに付灯入りの月出で、金助お村の顔を見ていゝ女

だといふ思入あつて、

金助　此顔を見ちやあ殺されねえ。（ト胸元をはなし、短刀を鞘へ納める。）

お村　それでは許して下さいますか。

金助　どうして是が許せるものだ。（ト此時下手より以前の丹作出來り、）

丹作　兄貴、まだか。

金助　おゝ丹作か、いゝ所へ來た、ふん縛つて自由にするから、縛る物を見附けてくれ。

ト是を聞きお村逃げにかゝるを、金助裾を捕へて引留める。

丹作　何が爰にあるものだ、其下締を解きねえな。

金助　むゝ、どうで裸にする女、こいつを解いてふんじばらう。丹作手前も手をかしてくれ。

丹作　合點だ。

ト時の鐘早き合方になり、下じめを解かうとするをお村一生懸命に突きのけ逃げようとするを捉へる

立廻り、月雲に隱れ三人闇がりの立廻り、此内、

お村　お巡り樣、來て下さいまし、お巡り樣〳〵。（ト呼ぶ。）

金助　えゝやかましい、默りやあがれ。

ト手拭でお村に猿轡を掛、細帯を解き縛りに掛る、此時靴の音する、丹作上手を見てびつくりなし、

丹作　兄貴逃げねえ、棒だ〳〵。

金助　いめえましい、(ト以前の簪を抜取り、お村を池の中へ突落し)早く逃げろ。

ト兩人花道へ逸散に逃げてはひる。此時上手より以前の薫足早に出來り、

薫　我灯影に恐れてか、雲を霞と逃げ行くは正しく曲者。(ト直に花道へ追掛行き、思入あつて)や、水音なすは、(ト跡へ取つて返し、池の中を見て)池中へ落ちしは女の樣子、扨は今の曲者めが、(ト又花道へつか〳〵と行き思入あつて)捕縛なさぬも遺憾ながら、女が水死もはかられず、(ト跡へ戻り)いまだ遠くは逃行くまじ、(ト向うへ思入あつて)いや、人命には替難し。

ト宜しく思入あつて、角燈と棒を草原へおき、池の中へ飛込む、水の音にて薫お村を小脇に抱へ、池の縁の石へ踏掛けホツト思入、誂へ早めやうの合方へ水の音を冠せ、薫上へ上り、お村を寐かし猿轡を取り、よく〳〵見て、

是は氣絶を致せし樣子。(ト隱しより神藥の壜を出し)幸ひ爰に資生堂の神藥を所持なせば、是を一滴用ひて見ん。(ト壜の藥をお村の口へ入れ手拭の水を絞り入れて脊中を押す、是にてお村心附く)こりや女中、心が附いたか。(トお村思入あつて)

お村　どうぞ許して下さりませ。

薫　こりや〳〵、我は巡行の巡査なるぞ。(トお村薫を見て、)

お村　お巡り樣でござりますか、え丶有難うござります。

薫　流石は名譽の神藥とて、ハテ速な藥の卽功。(ト壜を隱し入れ、)こりや、其方は如何して、是なる池中に落ちたるぞ。

お村　惡者に出逢ひまして、此身を穢されますところ、あなた樣のおいでを知り、私を此池へ打込みましてござりまする、危ふい難を脫れましたもあなた樣のお蔭故、何とお禮を申さうか、え丶有難うござります。(ト泣きふす。)

薫　今一足早く參らば、そやつを捕縛なさんもの、遺憾なことを致したり。(ト花道の方へ思入あつて、)して其者の年齡恰好、其方は存じ居るか。

お村　はい、年の頃は廿七八、背は大がい人並にて、鼻筋通つて目は鋭く、怖い男でござります。

薫　頭は野郎か、散髮か。

お村　月代の長く延びし頭は、野郎でござります。(ト薫書留めようと手帳を出し、)

薫　手帳を水で浸せしか。シテ其方の宅は何れぢや。

お村　お行の松のつい傍で、楠石齋が妻村と申しまする。

薫　むゝ、只今此方より石齋方へ報知致せば、其方は一先づ僕と分署へ參り、猶も今宵の事柄を委しく申立てるがよい。

お村　すりやわたくしを御分署へ。（ト驚く。）

薫　いや決して氣遣ふことはない、一應調べを致すのぢや。

お村　左樣なれば、お供致しませう。

薫　然し池中で衣類が濡れ、嘸かし冷たいことであらう。

お村　いえ、わたくしよりあなた樣こそ。

薫　人命救ふ爲なれば、僕は濡れるも職掌なるわ。

ト風の音合方にて、下手よりお靜先きに車屋人力車を引いて出來り、

お靜　御新造樣、爰にお出でなさいましたか。

お村　おゝ、お靜か。

お靜　丁度根岸の車屋さんが、四ツ辻に居りましたから、直に賴んであなたをば、方々搜して步きました。

薫 迎ひの車が參りしは、丁度幸ひ、乘つて參れ。

お村 有難うござります。(トお靜お村を見て、)

お靜 や、何であなたのお召物は。

お村 仔細は跡で話さうが、思はぬ難に逢つたれどお巡り樣のお蔭にて、危ふい所を脱れたわいの。

お靜 それは宜しうござりました。

車夫 實に當時の世の中は、お巡り樣で助かります。

薫 さ、夜更けぬ内に分署へ早く。

お村 左樣なれば、

三人 お巡り樣。(ト薫空を見上げて、)

薫 今宵も雨に、(ト棒を持替るを木のかしら、)ならねばよいが。

ト薫空を見上げる、お村袂の水を絞る。此見得風の音寺鐘にてよろしく、

ひやうし　幕

三幕目

安泊丹波屋の場
忍ヶ岡袴腰の場

〔役名――杉田薫、六浦正三郎、按摩宗庵、讃岐金助、古鐵買泥藏、女義太夫おとよ、娘お竹、丹波屋お熊、口入婆お百。〕

（安泊丹波屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面暖簾口、上手押入戸棚、下の方鼠壁、上の方九尺の二階、反故張障子、柱に火の用心といふ行燈を掛け、いつもの所門口、下の方一間庇附き御客安泊丹波屋と記せし腰障子を立て、門口に諸國旅人御安泊といふ掛行燈、舞臺下手に居爐裏、二階下に六部の笈、順禮の葛籠、同行二人と記せし菅笠などあり、總て下谷邊安泊の體。爰にお熊結び髪縞の半天前垂掛女房のこしらへにて、角行燈の掃除をしてゐる、側に義太八左見六、鼠木綿の着附六部のこしらへにて煙草を呑みゐる、石川五右衛門釜の中の唄にて幕明く。

お熊　モシ六部さん、義太夫のいゝのが寄席へ出ますが、聞きにおいでなさらないか。

義太　義太夫は極好きだが、二人ながら大阪で、長く稽古をしましたから、

左三　大概な太夫では、くすぐたくッて聞かれません。

お熊　そんなにお出來なさるなら、どうか一段おはこの物を、お聞かせなすつて下さいましな。

義太　三絃さへあるならば、直に今夜語りませう。
お熊　昨夜内で語りました、伯母さんではどうでござります。
義太　ちと伯母さんではたるいけれど、そこらは旅ぢや我慢をしませう。
左三　わしは彈き語りにしますから、三絃は入りませぬ。
義太　あの伯母さんもよく語るが、娘はなか〳〵感心だ。
左三　今夜娘と掛合ひに、安達でも語りませう。
お熊　それは有難うござります。袖萩は大好きでござります。
義太　伯母さんの歸る迄に、二人も夜食を喰つて來ませう。
お熊　外へ上りに行かずとも、五合ばかりお炊きなさいな。
左三　是から炊くのも面倒だ。
義太　飯屋へ行つて喰つて來ませう。

ト五右衞門の唄にて兩人下手へはひる、此唄にて花道より口入婆お百、木綿裝駒下駄にて足早に出で來り門口から、

お百　お熊さん、内かえ。

お熊　おゝ口入のおつかア、まア此方へおはひりな。

お百　昨日お前がお頼みの、子供衆のことでョ。

お熊　いゝ口でもありましたかえ。

お百　あい、丁度相應な口がありました、先はツイ車坂で煙草入の筒を彫る鈍齋といふ職人だが、向ふは子供の死跡で乳があつて困るから、直に貰ひたいといひますが、此方の方はよからうかね。

お熊　昨日お前に話した通り、以前は立派な士族さまだが今詰らない身になつて、私の所に居なさるが乳呑を殘して御新造が亡なられたので仕方なく、乳を貰つて歩くのが難儀故に遣りたいと、子供に困つて居なさるから、話しは出來るに違ひないが、お前も私も世話賃を餘計に取らねば合ないから、合うは五圓か七圓位で、どうかくぎつて貰ひたい。

お百　其處はぬからぬ私だから、向ふは五圓遣る積りに話を極めておきましたが、其子をちよつと見たいといふから、私に貸しておくんなさいな。

お熊　今乳を貰ひに行きなすつたから、一服呑んで話しておいで。

ト右の唄にて花道より前幕の泥藏風呂敷を脊負ひ、銅の藥罐を提げ出來り、

泥藏　安泊りのお熊婆アが、居爐裏で遣ふ大藥罐が出物でほしいといふから、此藥罐を賣附けて今日の

立前を取度いものだ。(ト門口へ來り、)おつかア、内かえ。(ト言ひながら内へはひる。)

お熊　おや、贓品屋の泥藏さん、さッぱり此頃おいでゞないね。

泥藏　お金が内を駈出して死ぬの生きるのといふ騷ぎで、お前の所へも無沙汰をした。

お熊　ほんに其の話をわたしも聞いたが、相手がいゝといふことだから、金で轉べばしつかりだね。

泥藏　内は立派な呉服屋だが、何をいつても親掛り、たいした金になりはしない。(トお熊藥鑵を見て、)

お熊　此藥鑵はいゝ藥鑵だが、お前買つて來たのかえ。

泥藏　是は此間買つたのだが、お前がほしいと言つたから、今日わざ〳〵持つて來たのだ。

お熊　それぢやア是をおくれなのかえ。

泥藏　いや飛んだことを云つたものだ、三分二朱する此藥鑵を熨斗を附けて遣られるものか、外なら一分も儲けるのだが、お前のことだから元直で賣らう。

お熊　わたしやおくれだと思つて、大層嬉しかつたが、買ふのなら一分お負けな。

泥藏　三分二朱に踏めるのだからそんなには負らないが外の品で儲けたから、現金なら負けて遣らう。

お熊　わたしやお前の樣に借りて置くのは大嫌ひ、右から左へ直に上げるよ。(ト錢箱から錢を出して、)それ十一錢五厘あるよ。(ト泥藏錢を受取り、)

泥藏　よし〳〵、跡は札か。
お熊　二分はお前に貸があるから、それで差引きにするのだよ。
泥藏　何もお前に借りは無いぜ。
お熊　なに無い事があるものか、此間降込められてわたしの所へ泊つたらう、其時の勸めを引くのだ。
泥藏　己アたゞだと思つたが、それぢやあやつぱり世間並か。
お百　生馬の目を拔く泥藏さんも、お熊さんには叶はないね。
泥藏　おらアたゞだと思つて泊つたが、二分取られる位なら、白首の所へ行つたものを。
お百　そんなに愚痴をお言ひでないよ。
泥藏　何にしろ此の藥鑵を、二朱で賣つては詰らない。
お百　ほんに是は詰らなからう、よつぽど大きな藥鑵だね。
お熊　泥藏さんの睾丸ほどある。
お百　おや、それぢやあ大睾丸かえ。
泥藏　おつと、疝氣で大きいが、まさか是程ありやしない。
ト合方になり、花道より前幕の正三郎着流しにて、抱兒を懷へ入れて來り、花道へ留り、

正三　あゝ世間に鬼は無いもので、何れへ乳を貰ひに行つても惡い顏せず快よく、吞ましてくれるお陰にて母の手をば放れてより少しも痩せず育ちしは、不幸の中の幸ひながら、志願ある身にいつ迄も是を抱へて居ることならねば、何れか乳のある所へ早く遣りたいものぢやな。（ト舞臺へ來り、）今歸りましたぞ。（ト内へはひる。）

お熊　おゝ六浦さん、お歸りなさいましたか、昨日お賴みなさいました、其お子樣のことに就いて世話をする口入の、此をばさんがさつきから、お待ち申して居ります。

正三　それは待遠でござつたらう、遣はす口がござるかな。（トお百前へ出て、）

お百　これはお初にお目にかゝりますが、私は車坂町で雇人の請宿を致します、お百と申します者でござります、お遣はしになりますのは、其のお子樣でござりますか。

正三　いかにも、是なる小兒でござる。

お百　これは〳〵よいお子樣でござります、お世話を致します先と申しますは、私の同町で角彫を致します鈍齋と申す人でござりますが、當時流行の職分故餘程内福でござります、お内儀さんは廿四五で此間小兒のが亡なりまして間が無い故、乳はたつぷりござりますので、よい子があつたら貰ひたいと賴まれて居りましたから、此のお子樣なら打つて附け、直に御相談が出來ませう。

正三　一日も早く遣したいが、市中の勝手を存ぜねば、此家の内儀と相談下され、宜しく周旋お頼み申す。

お百　はい〳〵、お熊さんと相談致しまして、取計らひますでござります、何に致せ此お子様を先へ見せたうござりますが、お連れ申しましても宜しうござりませうか。

お熊　お連れ申して行つてもよいが、お泣きだつたらお困りだらう。

正三　只今たつぷり呑んだれば、急に泣くことではない。

お百　先にも乳がござりますから、一杯お上げ申しませう。

正三　さうしてくれゝば大丈夫ぢや。（ト抱兒をお百に渡す。）

お熊　それでは伯母さん、お頼み申すよ。

お百　承知しました、どれ行つて來ませうか。（ト右の唄にてお百子を抱いて花道へはひる。）

正三　今の周旋で首尾よく是が整へば、我日頃の志願も叶ひ、悅ばしいことではある。

泥藏　もし旦那、其お悅びにお羽織を、一枚お買ひなされませぬか。

正三　さう言はれるは古着屋殿か。

泥藏　丁度あなたに打つて附といふ、黑羽織がござります。（ト風呂敷包より黑羽織を出す。）

正三　古朋輩に出逢ふ時此姿では面目ない故、とうから羽織を求めたいと、存じをれど心に任せず、

お熊　お貰ひなすつた金子の内で、お買ひなすつたらようござりませう。

正三　アノ金子を遣うては、小兒を他家へ遣はす時に、

お熊　いえ、其のお土産は七八圓、あれ程は入りませぬ。

正三　さういふことなら求めたいが、して此の羽織はいか程ぢやな。

泥藏　極くお負け申しまして、一圓五十錢でござります。

正三　それは安い物でござるな。

お熊　此人の代物は皆不正物。

泥藏　あ、これ。

お熊　いえ、符牒は附いて居りますが、其の内を引きますから、餘程安うござります。

ト正三郎財布より十圓札を出し、

正三　十圓札ゆゑ兩替屋で、崩した上で求めたい、明日持つて來てくださるまいか。

泥藏　お前樣のことでござりますから、其儘お置きなすつて、代は明日で宜しうござります。

正三　然らば明日迄貸して下され。（ト羽織を取つて脇へ置き、此上へ財布を載せる。）

泥藏　跡に布子が二枚あるが、義太夫語りは買ふまいか。
お熊　此間の雨續きで、なか〳〵買へることではない。
泥藏　それでは是から松葉町の、立場へ行つて賣つて來よう。
　　ト右の唄にて泥藏足早に花道へはひる、時の鐘、
お熊　今打つのは五時の鐘だが、もう手元が闇くなつた。どれ行燈でも附けようか。
　　ト行燈の引出しから附木を出し角行燈へ灯りを附け、門口と二階の行燈へも灯りを附ける、やはり五右衞門の唄にて、下手より義太八左三六先に、前幕のお豐三絃を持ちお竹の手を引き出來り、直に内へはひり、
お豐　おかみさん、今歸りました。
お熊　おゝ、お豐さんか、だいぶ今日は遲かつたね。
お豐　お二人さんにお目にかゝり、それで遲くなりました。
義太　丁度飯屋の門口で、お豐さんに出會したから、
左三　晩のことを頼みながら、一緒に飯を喰つて來ました。
お熊　それぢやあ二人も喰べたのか。

お豐　御馳走になつて參りました。
正三　お豐どの、歸られたか。
お豐　おゝ、これは六浦樣、爰にお出なさいましたか。
お竹　もし、お坊樣は、どうなさいました。
正三　養子に貰ふ人があつて口入をする婆ア殿が、先へ見せに連れて參つた。
お豐　それではお口がござりましたか、それは宜しうござりました。
義太　時に義太夫の床急ぎだが、腹ツこなしに二階へ行つて、
左三　直に一段初めませう。
お豐　此間から雨でも降つたら、淩つて遣らうと思つた所、
お竹　丁度宜しうござります。
正三　今夜は淨瑠璃がござるかな。
お熊　六部さんの淨瑠璃が、今二階で初まります。
正三　それは樂しみなことぢやな。
お豐　どれ、お淩ひに掛りませうか。（トお豐、お竹、義太八、左三六二階へ上る。）

お熊　私も是から奥へ行つて、夜食でも喰べてしまはう。(ト合方にてお熊奥へひはろ。此時二階の内にて、)

義太　いよ〳〵此所安達ヶ原第三段目の切り、雪降の段初まり左樣、

ト　お竹が語る心にて、子供と太夫の掛合淨瑠璃になる。

〽只さへ、曇る雪空に、心の闇の暮近く一間に直す白梅も、無常を急ぐ冬の風身にこたゆるは血筋の緣、(ト正三郎思入あつて、)

正三　捨る神あれば助ける神ありと、斯く迄零落なしたれど小紫が情により、忰を他家へ遣はせば是で心殘りもなく、唯此上は日頃から尋ぬる人に廻り逢ひ、我誠忠の志願をば早く貫きたいものぢや、毎日あれを懷へ入れ、乳を貰ひに歩くので兎角に肩が張つてならねど、あれが居つては療治が出來ぬが、せめて此間に肩だけでも、按摩に揉んで貰ひたいものぢや。(ト肩の張りし思入、)

〽不便やお袖はとぼ〳〵と、親の大事と聞くつらさ、

ト　時の鐘風の音をあしらひ、花道より序幕の按摩宗庵和し裝低さ下駄、杖を突き、笛を吹きながら出來り、花道にて、

按摩　上下二百文、

〽娘お君に手を引かれ、親は子を杖、子は親を、走らんとすれど雪道に力なく〳〵辿り來て、

ト此内宗庵寒いといふ思入あつて、杖で探りながら舞臺へ來り、

按摩上下二百文、

正三　丁度幸ひ按摩が來た。こりや、按摩々々。

宗庵　はい〳〵。大風な奴だな。

正三　按摩々々。

宗庵　お呼びなさいましたは、どちらでござります。

正三　こりや、爰ぢや〳〵。

宗庵　眞平御免なされませ。

〽垣の外面に、ア嬉しや。（ト宗庵探り足にて内へはひり、下駄と杖とを片寄せ、下に居て）

まことにお寒うござります。

正三　肩が張つてならぬ故、療治をして貰ひたい。

宗庵　畏りましてござります。

〽お目に掛つて御難儀の樣子がどうぞ聞きたやと、探ればさはる小柴垣、

ト此内宗庵正三郎の後へ廻り、肩を揉みながら。

此位で宜しうござりますか。

正三 ちと、それでは强過ぎるな。

宗庵 左樣なら、此位に致しませう。（ト床の合方にて肩を揉む。）

正三 貴樣は子供の折目が潰れたか、又は中年で潰れたか。

宗庵 へい、中年で潰れましたのでまことに勘が悪く、よく下水などへ落ちまする。

正三 如何致して中年に、其樣に目が潰れたのぢや。（ト宗庵思入あつて、）

宗庵 何をお隱し申しませう、元わたくしは芝邊で米屋を致して居りましたが、二三十年跡迄は力持が流行りまして、所々に會などがござりました、力業の稼業故其仲間へ這入りまして、ありもせぬ力を出して持てぬ石を無理やりに擔いだり差したりしたので、脾胃を揉んだ其せゐか、不圖眼病を煩ひましたが、さしたる事とも存じませず、先づ笹屋の振出しに東法寺の目藥位で内療治をして居る内、俄に痛みが强くなり、只の目とも思はれませねば、其頃新橋に土生樣といふ名高い目醫者がござりまして、其處で見て貰ひましたら、もう手後れで療治は出來ぬ、所詮此目は助からぬと、言はれた時の悲しさは。

〽此垣一重へ鐵の門より高う心から、泣聲さへも憚かりて、

ト宗庵我目へ指さし、愁ひの思入にて涙を拭ひ、

今に忘れは致しませぬ、とう〳〵それから目も家も一緒に潰れて散々に、杖とも思ふ女房に別れせう事なしに中年かち、按摩になつてやう〳〵と、上下揉んで二百文の、おあしで其日を送りますはかない身の上でござります。

〽簀戸に喰附き泣き居たり、（ト宗庵泣きながら療治する。）

正三　それは嘸難儀であらう、身共なども此間から逆上したので目を煩ひ、見えぬといふではなけれども、灯りが附くと少しでも明いて居ることがならず、實に困却致す故、貴樣などの身の上もさこそと察しやられるぞ。

宗庵　それでは貴方は日が暮れますと、少しもお目が明けませぬか。

正三　夜分はとんと盲目の樣ぢや。

宗庵　それは、嘸お困りなされませう。

〽何心なく戸を明けて、よく〳〵すかせば娘の袖萩、

ト時の鐘を打込み、宗庵目を明き四邊を見廻し、羽織の上にある財布へ目を附け、取らうといふ思入、此時正三郎振返る、宗庵びつくりして目を塞ぐ、

へはツと呆れて又ばつたり、娘は聲を聞知れど、母樣かとも得も言はず、母は變りし裝を見て、胸いつぱいに塞がる思ひ、

ト此内下手路地口より讃岐金助、着流し三尺帶足駄掛手拭を持ち湯へ行く思入にて出來り、門口から内を覗き宗庵を見て窺ひ居る、宗庵は又目を明き財布が欲しき思入、揉みながら片手で取らうとして取れぬ思入あつて、片足を出し搔寄せる、是を見て金助聲を掛けようとして息を呑込みゐる。

宗庵　今日の寒さで小便近く、さつきから我慢をしたが、洩りさうでこたへられぬ。もし旦那、ちよつと御免下さりませ、小水に行つて參ります。

正三　小用所ならば、奧にあるぞ。

宗庵　いえ、勝手の知れぬところより、表が宜しうござります。

へ餘所へ知らすも涙聲、樣子知らねば腰元ども、

ト宗庵財布と羽織を懷へ入れ、下駄と杖を持ち門口へ出る、是にて金助路地口へはひろ、正三郎は是を知らず、

正三　目の惡いに外へ行かずと、内へ小用に參ればよいに。

ト時の鐘、宗庵下駄を履き花道へ行掛け、下手へそつとはひろ。路地口より金助草履を履き出來り、

金助　おれが見るとも知らねえで、いけぷてへ奴だな。

〽ヤイ物貰ひ、おあしがほしくば、なぜ唄を謳はぬぞ。

ト金助尻を端折り花道へ追掛けはひる。正三郎思入あつて、

正三　今の按摩はどうしたか、此の近邊に便所がない故、通りへ搜しに行つたと見える。

ト奥よりお熊出て、

お熊　按摩をお呼びなすつたやうだが、モウおしまひでございますか。

正三　小用に行くと申して出たが、それきり今に歸つて來ぬ。

お熊　それは怪しうございますぜ、何ぞ取られはなされませぬか。

正三　取られるものは何もないが。

お熊　よく搜して御覽なされませ。

〽あいとはいへど袖萩が、久し振の母の前、（ト正三郎あたりを見て、）

正三　最前求めた羽織の上へ、財布を載せて置いたが、二品とも爰に無いは、扨は按摩に盗まれしか。

お熊　もし、其の財布に十圓が、はひつてはをりませぬか。

正三　おゝ、其の中へ入れておいた。

お熊　えゝ、そんなら按摩に十圓を。

正三　こりや災難にあうたな。

〽琴の組とは引替へて露命を繫ぐ古絲に、皮も破れし三絃のばちも慮外も顧みず、

トお熊は驚き、正三郎途方に暮れし思入、此内花道より以前のお百抱兒を抱き、角彫師鈍齋縞の半天着流し、駒下駄居職のこしらへにて出來る、

鈍齋　おつかア、丹波屋といふはまだ先かえ。

お百　つい向うの、安泊りだ。

鈍齋　善は急げ、いゝ子だから早く極めて貰ひたい。

お百　いゝ子よりやあ金の方がほしくッて、貰ふのだらう。

鈍齋　そりやア言はずと知れたことだ。（ト兩人舞臺へ來り、）

お百　お熊さん、行つて來ましたよ。（ト內へはひる。）

お熊　折角行つておいでだつたが、中々內はそれ所ではない。

お百　何の取込か知らないが、貰はうといふ先のお方を、一緒にお連れ申して來た。

鈍齋　して、此お子の親御さんは。

正三　即ち手前でござります。

鈍齋　お初にお目にかゝりますが、わたくしは車坂町にをります鈍齋と申す彫物師でございますが、此お子を下さりますと申すこと故、どうかお貰ひ申したうございります。

お百　旦那もお困りの御様子故、五圓お土産を上げますことに致しましてござります。

正三　折角お世話下すつたが、此忰はあげられませぬ。

お百　いや、遣られぬものなら、なぜわたしに遣つてくれとお頼みなすつた。

お熊　お前のいふのは尤もだが、これは破談にしにやあならぬ。

お百　なに、破談にしにやあならぬとは。

お熊　十圓札の入つてゐた、財布を按摩に取られたから、附けて上げる金がない。

お百　えゝ、それでは金を取られたのかえ。

鈍齋　そりやあ飛んだことであつた。（下此時下手より、以前の泥藏出來り直內へはひり、）

泥藏　さつきはおやかましうござりました、今松葉町で買物をして、急に金が入りますから、どうかさつきの十圓札を、崩してお貰ひ申したいものだ。

鈍齋　金がほしいばツかりに、わざ〳〵爰まで來たんだが、

お百　禮にならずば小便臭い餓鬼を抱くのは眞平だ。（ト抱兒をむごく投り出すを、正三郎抱上げる）
〽今の憂身の恥かしさ、父上や母樣のお氣に背きし報いにて、二世の夫にも引別れ、泣潰したる目無鳥。

ト此内抱兒頻りに泣く故、正三郎是をだましながら、

正三　お〻泣く〳〵、斯る憂目にそちが逢ふも、惡い親を持つた故ぢや、お前方へも氣の毒だが、眼病ゆゑに目を明いて四邊を確と見ることならず、それ故透を覘はれて財布を盗み取られたゆゑ、餘儀なく破談に及びまする。

泥藏　して、おれが賣つた黑羽織は、

正三　あれも一緒に盗まれました。

泥藏　え〻そりや盗まれようが盗まれまいが、それは其方の不調法、此方は代さへ貰へばい〻のだ。

お百　わたしも暇を費して、これ見なせへ、一枚物に小便をされた上、子までやるのを小便されちやあ、口入の口が干上る、廿五錢も世話料を、貰はにやあ歸られねえ。

鈍齋　おいらも内で仕事をすれば、幾らか手間の附く體、六十錢の手間と見て三ツ一分の廿錢も、取らねば割に合はねえはなしだ。

お熊　まア誰よりか此中で、詰らぬ頭は此お熊、アノ十圓を崩したら勘定をして貰はうと思つた金が烟になつたら、是迄泊つた旅籠錢貸した蒲團の損料から、米代薪代何やかや、しめたら一圓半ばかり、是非とも是は取らにやあならぬ。

泥藏　お前の貸しも一圓半なら、おれの貸も一圓半、

お百　廿五錢の世話料に、

鈍齋　又廿錢の細工手間、

泥藏　しめて三圓四十五錢、逆さにしても鼻血より、外に何も出さうもねえ。

お熊　かうなる上は譬にいふ百貫の形に編笠一蓋、身ぐるみ脫して泥藏さんに、いくらにでも買つて貰ひ、それをみんなで分けて取らう。（ト是を聞き正三郎悔しき思入あつて、）

正三　お前方の立腹も尤もではあるけれど、此の衣類を償ひに出した所が僅な金、割つて取らるゝ程もなければ、明日迄猶豫して下され、懇意な者に無心を言ふても、勘定致せばどうぞ明日迄。

お熊　いえ〳〵待つことはなりませぬ、それきりお前に逃亡をされても、尻を持つて行く所がない。

泥藏　何でもかでもそれを脫いで、みんなに詫をするがいゝ。

お百　それとも外に貯への、

鈍齋　金があるなら出しなせえ。

正三　十錢なりとも所持なしをらば、身の言譯に差出せど、外に少々あつた札迄財布へ入れて盗み取られ、恥かしながら一錢の貯へもなき正三郎、借の形に衣類をば脱せられても是非なけれど、獨身ならぬ此様な、

〽明けてやう／＼十一の、子を持つて知る親の恩、

乳呑を抱へてゐる身の上、菰を纏ひてもらひ乳に、歩くことが出來ざれば、衣類も明日まで待つて下され、此程十圓惠みくれし小紫に頼んでも、三圓や五圓の金は必ず貸してくれようから、僅今夜一夜の猶豫、これ此通り手を下げて、頼む程に待つて下され。

〽知らぬ祖父様祖母様を、慕ふ此の子がいぢらしさ、不便と思し給はれと、跡謳ひさし咳入る娘、

ト正三郎手を附き詫びる、是にて抱兒泣出す、是が不便故待つてくれといふこなし、四人聞かぬ顏なして、

泥藏　これ人に物を頼むのに手を下げるは當り前、何もこなたが士族だつて、斯う落ぶれりやア乞食も同然、着物が脱げずば仕方がねえ、羽織の代はくれてやるから、天窓を地へ附け禮をいへ。

お熊　恥を恥と思はずに、天窓を地へ附けしやア〳〵と、禮を言はれてもをかしくない、何ぞ仕樣はあるまいか。

お百　わたしやあ餓鬼に小便をしッかけられた腹いせに、水でも浴びせてやりませう。

鈍齋　此方はそれより手短に、横ぞつぽうを張倒し、それで了簡してやらう。

泥藏　さあ、大道へ出て詫をするか。

正三　さあ、それは。

お百　天窓から水を打掛けようか。

正三　さあ、

鈍齋　横ぞつぽうを張倒さうか。

皆々　さあ〳〵。

泥藏　浪人返事はどうするのだ。（ト正三郎の胸ぐらを取りてこづく、）

正三　いかに貧苦に迫ればとて、僅な金に差支へ乞食非人と蔑せられ、手出しもならぬ口惜しさ。

泥藏　さあ口惜しけりや手出しをしろ。（ト體を摺附ける、抱兒泣く、）

〽孫と聞くより濱夕が、飛立つばかり戸の透間、抱き入れたさ縋りたさ、

ト此内二階の障子を明け、お豐下を見て氣の毒だといふ思入、

左三　おッかあ、下がごた〳〵する、己が彈くから行つてやんねえ。

ト左三六三絃を取り、障子をしめる。二階よりお豐お竹下りて來て、

お豐　まあ〳〵待つて下さいまし、さつきからの此場の樣子、二階で聞いて居りましたが、わたしも同じ難儀な身に、人のことゝは思はれず身につまされてお氣の毒故、お腹も立たうがモシ皆さん、待つて上げて下さりませ。

泥藏　おゝ義太夫語りのお豐さん、一つ宿に居るよしみで、大方留めに出たらうか、口を利くのはむだなことだ。

お熊　それともお前が留めるなら、幾らか爰へ金を出して、さうしてみんなを留めなせえ。

お豐　さあ償ふお金を持つて居れば、皆さんに上げますが、わたしとても大道で、往來の人の合力受け其日を送るしがない身の上、天の惠みで此間お巡り樣に三十錢お貰ひ申して歸る途中、車坂町の魚屋へ呼込まれて語りましたら、可愛さうだと二十錢思はぬお錢を貰つた故、お巡り樣からお惠みの三十錢は無き物に今日迄しまつて置きました。申譯に此札を皆さんに上げますから、足らぬ所は明日迄待つて上げて下さりませ。

〽唯非人の子と思召し、たつた一言お言葉を、お掛けなされて下されと、歎けばお君も手を合せ、（トお豊皆々へ頼む、お竹も共々前へ出て、）

お竹　まだそれで足りませずば、わたしが晝間淺草で通り掛りの旦那樣から、別に貰うた二錢のおあし、是も一緒に上げますから、堪忍なされて下さりませ。

〽お慈悲に一言物おッしやつて下さりませと、言馴れし袖乞詞に濱夕が、

トお豊お竹皆々に頼む、此内花道より前幕の杉田薫黑のシヤツポ書生羽織着流し下駄にて出來り、花道にて向うだといふ思入あつて舞臺へ來り、門口にて內を窺ひゐる、泥藏初め皆々お竹の言譯を聞き思入あつて、

泥藏　合宿にゐるよしみを以て、事を分けてお前の頼み、殊には又此娘が自分が貰つた二錢迄出して、待つてくれといふのを、待たれないとも言はれないから、わしは待つてやる氣だが、お前方はどうしなさる。

お百　一圓半貸のある泥藏さんがさういへば、わたしだつて鬼ぢやあなし、待たれないとも言はれませんよ。

鈍齋　おれも暇は費やしたが、なにも仕事の手間賃を、取らねばならぬといふでもなし。

お熊　元より按摩に持つてゐた、十圓札に羽織迄取られた上のことなれば、お前方が得心して明日迄待つといひなさるを、わたし一人いやとも言はれず、

お豐　それではどうぞ此金で、六浦樣のお借をば、お待ちなされて下さりませ。

正三　正三郎が今宵のせツぱを見兼ねて助くる志し、忝なくは思へども、折角こなたが貰うた其金わしが爲に使はしては。

お豐　いえ〳〵大事ござりませぬ、人民保護のお巡り樣よりお貰ひ申した三十錢、今又貴方のお役に立てば、人をお救ひなされます思召しが立ちますれば、必ず御遠慮なされませず、御都合のよい其時に、お返しなされて下さりませ。

正三　それ程迄に言つてくれるを、採用ひぬは本意ならねば、其方の詞に隨うて、暫時借用致すであらう。

お豐　左樣なされて下さりませ。

ト此内門口の薫裏向にて、紙入より五圓札を出し、紙に包み懷中なし、

薫　いや、御免下さい。

お熊　はい〳〵。（ト門口へ來り、）お泊りでござりますか。

薫　僕は當家に止宿致し、路上へ出て淨瑠璃を語る、親子の者に逢ひに參つた。
お熊　へい、左樣でござりますか、此方へおはひりなされませ。（ト　お竹薫を見て）
お竹　おツかさん、此間のお巡り樣がおいでなされました。
四人　なに、お巡りだ。（ト皆々驚く。）
薫　然らば許しやれ。（ト内へはひろ、正三郎眼の痛む思ひ入にてうつむく、お豐見て）
お熊　まことに旦那はお巡り樣、思ひがけない此所へ。
薫　孝女を尋ねて參つたのぢや。（ト皆々お巡りと聞いて氣味惡き思ひ入にて）
泥藏　時に皆さん、かういふ所に長居は恐れ、モウ歸らうではござらぬか。
お百　おゝ、お豐さんの頼みを聞いて、明日迄待つとしたからは、
鈍齋　最早爰に用はない、少しも早く歸りませう。
お熊　わたしも何だか不氣味だが、我家だから何處へも行かれず。
泥藏　掛構ひのない、わしらが方は。
お豐　お歸りなされまするなら、是をお持ち下さりませ。（ト札の包みを出す。）
泥藏　いや〳〵、是には及びませぬ、明日迄待つて歸ります。

〽酷ういふのは可愛さの裏の濱夕幾重にも、お慈悲々々と泣くばかり、鎌杖猶も聲荒らげ、
ト此内お豐札包を取つてくれと出すを、三人それには及ばぬと振拂ひ下手へ行くを、

薫　いや、何れも待つた。

三人　え、

泥藏　待てとお止め、

三人　なされまするは。

薫　手間は取らせぬ暫時の内、それに待つてゐて下され。

三人　へゝえ。（ト顔見合せて下にゐる。）

お豐　まだお禮も申し上げませぬが、此間はお惠み受け、有難うござりまする。

〽詫の種にもなれかしと、思ふは母より直方が、（ト兩人手を突き禮をいふ薫は正三郎に向ひ、）

薫　それにござるは、六浦氏ではござらぬか。

〽讀む文體の奥の名に、（ト正三郎顔を上げ、）

正三　眼病ゆゑにお面も、確と身共に分らぬが、さいふはどなたでござるよな。

薫　お見忘れなされしか、杉田郷右衛門が悴、同苗薫でござる。

正三　え、薫殿とな。

〽南無三寶、扨は貞任と緣組みしかと、心もそゞろに、（ト正三郎びつくりなし、）お豐殿、暫く是を。（ト抱兒をいだす。）

お豐　はい、畏りました。（ト抱取る、正三郎衣紋を作り思入あつて、）

正三　絕えて久しき對面に、見る影もない此姿、まことに面目次第もござらぬ。

ト誂への合方になり、正三郎俯きて面目なき思入、薫氣の毒なる思入にて、

薫　瓦解此方舊友も十に八九は零落なし、今日活計の道を失ひ甚しきは道路にて人力車を引く者さへござる、君ばかりのことでござらぬ、方今士族の常なれば決して恥辱と思召すな、是に附いても此所に君が寓居あることを、承知致さば土產の品も、何か持參致すべきを、近頃失敬の至りながら是を御受納下さりませ。（ト紙包を正三郎の前へ出す。）

正三　御土產とは何品なるか、頂戴致すでござる。（ト取上げ見て、）こりや目錄でござりますな。

薫　いかにも火急のこと故に、失敬とは存じたなれど、茲が舊友の誼と存じ、僕が寸志の其の土產、輕微ながらそれを以て、一時此場の仕拂にお使ひなされて下さらば、僕に於ても大慶至極。

正三　貴殿の御芳志忝ないが、是を受けては濟まぬ義理。

薫　濟むも濟まぬも斷琴の交り致す親友に、辭退めさるは舊幕の習風脱しめされぬか、開化の世には入らぬ御遠慮、平に御受納下さりませ。

正三　とはいへかゝる惠みを受けては、（ト正三郎受難き思入、お豊見兼れて、）

お豊　賤しい此身も顧ず、口出し致すは失禮ながら、お巡り樣が御親切にあれ程迄に仰しやりますれば、お受けなされました方が、宜しからうかと存じます。

正三　いかにも厚き志しを悖くも本意ならざれば、受納致すでござります。

ト正三郎金包を頂く、皆々顏見合せ、

お熊　そんならあなたが下すつた、其のお金で私共の、

泥藏　貸をお返しなされますか。

正三　唯今仕拂ひ致すであらう。

皆々　それは有難うござります。（ト正三郎金包を開き見て、）

正三　先刻申せし〆高は、三圓四十五錢とやら、杉田氏より惠まれしは五圓札故此儘に、主人へ是を預けおけば、計算なして請取りやれ。（ト札を出す、お熊受取り、）

お熊　へい〳〵、是は有難うござります、慥にわたくしがお預かり申し、それ〴〵勘定致しまして、お

釣は後程差上げます。

泥藏　つい先程は間違ひで、失禮なことを申しました、眞平御免下さりませ。

お熊　時に皆さん、お二人樣も定めてお話しがござりませうから、此札を崩しながら、みんな一緒に出掛けませう。

泥藏　お丶未來と思つた此金が、思ひがけなく手に入れば、

お百　是から何處ぞで一杯遣り、

鈍齋　割を貰つて歸りませう。

お豐　そんなら皆さん、御一緒に。

泥藏　どれ、出掛けませうか。

〽するどい詞にせがまれて、母も是非なく立つて行く、

ト泥藏先に、お熊お百鈍齋悦びながら花道へはひろ、跡時の鐘。

〽早暮過ぐる風に連れ、折から頻りに降る雪に、（ト床の合方になり、）

粂　唯今門にて承はりしが、按摩に盗み取られしは、何品でござるよな。

正三　羊羹色の黑羽織に、十圓入りし財布をば眼病故に盗み取られ、それ故難儀に及びしも、貴殿の助

薫　情ではからず脱れた、御芳志厚く謝し申す。

薫　些細なことを其樣に仰せあつては恐縮致す。早速ながら承はり度きは、御細君は如何なされましたぞ。

正三　手前妻は當十月、死去致してござります。

薫　すりや其乳呑をのこされて、御細君には御死去とか、嘸かし御難儀なことでござらう。して當今は何方に御住居あつて、此所に止宿なされてござりますぞ。

正三　申すも近頃赤面ながら、近年不幸に不幸重なり終に今日の姿となり、家屋も負債の其爲に賣却なして住居定めず、所々に下宿致してござる。

薫　何ぞ深いお見込でも、あつてのことでござりますか。

正三　別に見込もござらねど、少々志願のことあつて、斯く流浪致しをります。して杉田氏には、何方に當時御住居めさるゝな。

薫　御存じの如く、僕が父死去せし折は旅行中にて、遙程經て承はり早速歸京致せしが、母は獨りに親族方へ同居致してをつたるが、其後方位の方違ひにて一兩度轉宅致し、やう／＼此程入谷村に寓居致してをりまする。

正三　久しく音信不通にて、中絶なせしが御老母には、お替りはござりませぬか。

薫　母は長々肺病にて、ぶら〳〵致して居りましたが、昨今立居も不自由にて終に床に就かれし故、僕一人にて朝夕の看護に困却致しまする。

正三　今の此身にたくらべて貴殿の御難儀お察し申す、唯今是なる親子の者がお巡り樣と申せしが、當今巡査をお勤めなるか。

薫　先達て迄五方面の巡査を勤め居つたるが、性來虛弱に持病多く巡査の職掌盡し難く、殊には母の大病ゆゑ止むを得ずして此程より署長へ辭表を出せしが、やう〳〵過日指令になり首尾よく暇たまはりて、只今にては常の士族、職務無き身に先達て車坂にて出會うたる、孝女を尋ねて是へ參り、計らず君に面會せしは、まことに以て奇遇でござる。

正三　實は疾より貴殿の御在所尋ね居りしに思はずも、今日お目に掛りしは亡き御親父の導きなるか、月は替れど今日は御命日でござりますな。

薫　如何にも亡父の忌日故、菩提所牛島弘福寺へ久々にて墓參なし、唯今歸宅の途中でござる。

お豐　今日はお裝が變りしゆゑ、御非番かと存じましたが、貴方樣はお巡を御辭職なされましてござりますか。

薫　おゝ、病身故に辭職なし、勤め無き身に朋友と親しく談話も出來るのぢや。

お豐　御老母樣が御不快で、嘸御不自由でゐらつしやりませう。お洗濯物でもござりますなら、仰しやり附けて下さりませ。

お竹　入谷は爰から近い故、朝の内上りまして、お使ひでも致しませう。

薫　母も孝女を見たいと申せば、雨でも降つたら遊びに參れ。

お竹　有難うござりまする。

ト此内お豐抱兒をお竹へ渡し、半天を脫いで此上へ寐かす、正三郎は思入あつて、

正三　思ひ出せば某も、御教諭受けし御親父の忌日にはからず御子息の貴殿に巡り逢うたるは、正三郎が豫ての志願も、

薫　や、

正三　いやさ、師弟の緣の盡きざる所、長々御指南下されし、御恩報じをしたいものぢや。

〽身は濡鷺の蘆垣や、中を隔つる白妙も、

ト正三郎命を捨てたいといふ思入、薫も以前に變る姿を見て氣の毒だといふ思入あつて、

薫　益なき事を申す樣だが、未僕が十代の折には幕府盛んにして、御直參の方々が多く稽古に參られ

しが、君の親父は内福にて衣服は元より大小迄衆に勝れて美々しき故我人共に壯年輩は羨ましく思ひしが、世の變換といひながら以前に變る六浦氏、木錢に等しき安泊り、斯る賤家に止宿なし自身に乳呑を抱かれて恥辱を忍ぶお身の末、過行く昔を考へれば實に夢かと思はれて、嘸や遺憾にござらうと君の胸中お察し申し、思はず袖を浸してござる。

ト薫涙を拭ふ、正三郎も昔を思ふ思入あつて、

正三　晝は浮世の雜事に紛れ、何も心に浮まねど、夜は乳呑に泣立てられ、四邊の人の氣を兼ねて、詫し賺してやう〳〵に、子は寐入れども透間洩る小夜風寒く我は寐られず、露命を繫ぐ貯へも薄き蒲團に終夜、目前に昔のことが見え、斯迄愚痴になるものかと、我と我身に異見なし、枕に就けば夜も白み人の寐倦きる冬の夜の、長きも僅一時間、樂に寐られぬはかなさを、推量なして下されい。（ト正三郎愁ひの思入、此内お豐お竹ぢつと是を聞いて居て、）

お竹　ハア丶。（ト泣伏す。）

お豐　これお竹、何を其樣にそなたは泣くのぢや。

お竹　今旦那樣のお話しに、何も分らぬ心にも、おいたはしうてならぬ故、つい聲を出して泣きましたが、泣いて惡くばおッかさん、堪忍して下さりませ。

お豐　何で惡いことがあらう、そなたばかりか此母も常は人を泣かさうと、かたる哀れな三の切より、一倍胸が一杯に、淚の止度がないわいな。

お竹　それでは泣いてもようございますか。（ト兩人泣く。）

薫　年は行かねど利發故、物の哀を心に感じ、落淚なせしは感心なるぞ。

正三　よしなき此身の愚痴を申し其方達に迄落淚させ、返す〴〵も面目ない、（ト此時寐かせし抱兒泣出す正三郎抱取りて。）おゝそちも共々感じて泣くか、おゝたがよく〳〵。（トいぶり附ろ、時の鐘を打つ。）

薫　あの鐘は最早七時、母が梅の早咲を見たいと申して居つた故、幸ひ今日は摩利支天の緣日故彼處へ廻り、梅を求めて立歸れば、今宵は是にてお暇申し、後してゆるりと參上致さん。

正三　手前も所用取片附け、一兩日の其內に、入谷へお尋ね申すでござる。

薫　甚だ手狹な住居ながら、未だ妻を娶らねば母ばかり故御遠慮なく、是非お尋ね下さりませ。

正三　して入谷は、何番地でござるな。

薫　其番地姓名を、記せし手札を差上げ置きます。（ト手札入より手札を出し、正三郎へ渡す。）

お豐　わたくしも娘を連れ、何れお禮に上ります。

薫　親孝心の話しを聞き母も逢ひ度く申してをれば、暇があつたら尋ねてくりやれ。

お竹　是非上りますでござります。

薫　左樣ござれば、六浦氏、

正三　何れ近日、

薫　お待ち申してをりまする。

ト唄になり、薫思入あつて花道へはひる。お豐門まで送り跡を見送りゐる、お竹薫が忘れし手札入れを取上げ、

お竹　もしお母さん、爰にこんなものがござりました。（トお豐是を見て、）

お豐　是は今の杉田樣が、お持ちなされしお手札入れ。（ト受けとる。）

お竹　それではお忘れなさいましたか。

正三　御苦勞ながら跡を追掛け、それを屆けてくれまいか。

お豐　畏りましてござります。

お竹　摩利支天へおいでとあれば、

お豐　裏通しに御門へ行き、おいでをお待ち申しませう。

ト時の鐘合方にて、お豐お竹を連れて足早に花道へはひる、跡正三郎思入あつて、

正三　佛家に所謂過古未來、三世の業に現世にて斯る憂目にあふことか。我忠孝の道を守り、假にも不正のことをなさぬに、不幸に不幸の重なるは、

〽天道樣のお憎しみ、受けて此身は厭はねど、

百歳の壽を祈りたる其甲斐もなく父母とも、引續いて鬼籍に入り、未三年も立たぬのに生れて間もなき乳呑を殘し、刄に掛りて妻が死去、末期の際の遺言に此正太郎を育てんと、昔は槍を遣ひし身も、今長刀の草履を履き、貰ひ乳をなす身の恥辱、

〽樣子聞かねばなんぼでも、去なぬ〳〵と泣聲も、嵐と雪に埋もれて、

ト此内正三郎抱兒泣くを、だましながら愁ひの思入あつて、

豫ての志願を貫く時は、足手纏の悴故、他へ遣はさんと思へども土産の金に差支へ、如何はせんと思ふ折から、はからず出會ひし小紫が貧苦を察して惠みくれし深き情をあさはかにも貰ひし金と出し置き、遂に按摩に盜み取られ、日頃の望みも今日となり水の哀れや捨てるか殺すか、二ツに迫る一世の別れ、子の恩愛に兎や角と生死に迷ふ親心、アヽ子は三界の首枷ぢやなア。

〽聞えぬ父と恨み泣き、次第々々に降積る寒氣に肌も冷切れば、持病の癪の差込んで、かッぱと轉べばお君はうろ〳〵、

ト正三郎抱兒を抱き、捨てようか殺さうかといふ愁ひの思入。下手より以前のお熊出て、直に内へはひり、

お熊　まだお休みなされませぬか。

正三　おゝ、お熊どのか。

お熊　是はさつきの五圓札を、崩したお釣でござります。（ト札と錢を出す、此時抱兒泣くを見て、）大層お泣きなされますな。

正三　乳が呑み度くなつたと見える。

お熊　ちよつと一杯わたくしが、貰つて來て上げませう。

正三　然しこなたに足勞かけては、

お熊　なに、お前さん、造作もござりません。（トお熊空笑ひして抱兒を抱取るを見て、）

正三　心一つで鬼も佛に、

お熊　え、

正三　いや、子供は佛でござるなあ。

〽可愛のものやと老の足、見返り〳〵、

卜お熊子を抱いて下手へ行きかけ、振返る。正三郎薄情な奴だといふ思入。時の鐘三重にて道具廻る。

（袴腰の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方石垣此上草土手、松の立木下の方四斗樽の用水桶を積上げ、向う無極庵待合茶屋夜の遠見、總て山下袴腰の體、爰に序幕の鍋燒饂飩荷を下し、以前の宗庵捨石へ腰を掛け饂飩を喰つて居る、吉原地廻りの仕出し○△の二人、同じく饂飩を喰つて居る。此の見得米山甚句にて道具留る。

○ 今日は晝から西が吹き込み縮み上る程寒かつたが、饂飩を食つたら汗が出るほど、滅法おらあ暑くなつた。

△ 暑くなるといやあ、斯うして毎晩入谷田甫から、太郎樣の藪を越して廓へ行くのは容易なことぢやあ行けねえな。

○ 其替り行つてやりやあ臺と酒を達引いて、どの位へあいつ等が嬉しがるか知れやあしねえ。

△ 厭な客の憂晴しだから、其位なことはするがいゝ、どうでおらたちを客にすりやあ、仕舞は借増しをしにやあならねえ。（卜兩人饂飩を喰ひじまひ、）

○をぢさん、今夜は一文無しだ、お前も饂飩を達引いてくんねえ。
饂飩　あい、宜しうござります。
へ　いやあんまりよくもあるめえが、明日の晩持つて來るよ。
　　ト右の合方にて兩人上手へはひる、宗庵も喰ひしまひ、
宗庵　腹さん〴〵のろけた上、錢を拂はずに行くといふのは、押の強い奴だな。
饂飩　此方は四百か五百の錢を損をすればいゝのだが、あんな者でも客にすれば氣休めの一つも言はねばならぬ、成程女郎は苦界の勤めだ。
宗庵　それをいゝ氣で行く內が、人間も面白いのだ。あい、錢は爰へ置くよ。
　　ト懷から錢を出し、荷の上へ置く。
饂飩　有難うございます。（ト錢を受取る、宗庵は以前の財布を出し、行燈の灯りで中を見て、）
宗庵　是程あらうとは思はなんだ。
饂飩　療治がたんとありましたか。
宗庵　あい、宵ツからありました。
饂飩　そりやあようござりましたね。（ト荷を擔ぎ、）左樣なら、按摩さん。

宗庵　早くしまつて歸りなさい。
饂飩　鍋燒饂飩々々。
ト呼びながら上手へはひろ、時の鐘新内の合方になり、花道より以前の金助出來り、花道にて、
金助　丹波屋といふ安泊りが、表長屋にあるせるか、大江山の岩窟程鬼の集まるおれが内、酒呑童子を見た樣に食ひ醉つてぐつすり寐込み、やう／＼灯りが附いて目が覺め、湯へ這入らうと出掛けた門口、士族の金を盜んで逃げるを、草履を履き替へ追掛けたが何處へ逃げて行きやあがつたか。
ト四邊を尋ねる思入、宗庵も立上り、
宗庵　惡いことはしねえものだ、爰らへ來ると思ひ出すが、三月跡に三枚橋で七十圓の金に目が無く仕慣れた腕の荒療治に、二才野郎を締殺し、札を算へる月影も滿つれば缺ける二十日の月、旨い仕事に魔が差して、天狗小僧金助といふ金毘羅參りに出ツくはし、
金助　あの宗庵といふ按摩は、上下揉んで二百文と流して歩くが仕事の種、吹く笛の音も枯々に哀れな話で氣をゆるさせ、盜みを働らく僞盲目、杖は細いが根性は勝れて太へ兇狀持ち、
宗庵　首尾よくおれが手に入つた金を横から引浚ひ、高飛をする了簡か、雲足早き東南東風、空さへ雨の暴口に撞出す上野の十二時より、惡事を重ねし盜人同士、

金助　あいつの產れが九十九里、所柄故宗旨が法華か、古風な七もく題目を並べ立て脅すから、此方も四ヶ度の大難に首の座へこそ直らねえが、苦役を仕拔いた喰詰者。
宗庵　遣る遣らねえと爭つたが、是から屋根も白くなる雪を見掛けて佃へ行き、赤い仕着を着度くもねえから、男は當つて碎けろと、おれが體の罅燒茶碗、
金助　二つに割つて三十五圓仲よく分けて別れたが、又もや今夜あいつが仕事、おれが見るとも知らぬが佛、
宗庵　寺門前にくすぶつて土瓶の酒も吞倦きた、是から車で千住へ行き、縮んだ皺を延ばさうか。
金助　戀と無常の田甫から、又水暴れか燒場が匂ひ、
宗庵　くせへもの身知らずと、厭がられるも合點で、
金助　降らねえ内にもう一遍、
宗庵　今度で二度だが、あの年增に、
金助　居所を搜して、
兩人　逢ひてえものだ。
ト兩人心々のせりふあつて、宗庵以前の黑羽織を着る、此内金助舞臺へ來て、宗庵に突當りびつく

りして、
宗庵　えゝ、何をしやあがる。
金助　さういふ聲は、宗庵か。
宗庵　手前は、讃岐金助か。
金助　さつきから捜して居たのだ。
宗庵　何も捜される覺えはねえが。（下新内の合方きつぱりとなり、兩人捨石へ腰を掛け、）
金助　丹波屋から手前が出るのを、直に跡から追掛けたが、何處で道が違つたか、よつほどむだに方々捜した。
宗庵　おらァあれから跡へ歸り、坂本から此方へ來たが、何ぞおれに用があつてか。
金助　用があるから、追掛けて來たのだ。
宗庵　もうけ口の話しなら、おれも半分乘りてえものだ。
金助　そりやあ此方で言ふせりふだ、さつき手前が盜んだ金を、又半分貰ひに來たのだ。
宗庵　それぢやあ手前はあすこに居たか。
金助　おらあ丹波屋の裏に居るが、二三日廓へ泊り込み、すつかり耗つて仕方無しに、損料蒲團を引冠

り、朝から寐込んで灯が附き、やう〳〵目が覺め楊枝を遣ひ湯へ行掛けた丹波屋の、表で聞きやあ手前の聲、はてなと格子の間から覗いて見れば違はぬ宗庵、足で掻寄せ懷へ財布を入れたを見て來たのだ。

宗庵　いゝふりで呼ばれた安泊りの、門に手前が居ようとは、實におらあ知らなんだ。

金助　其時己が泥棒と、口迄出たを呑込んで、手前に仕事をさせたのは、直に跡から追掛けて、いくらあるか知らねえが、財布の中にある金を半分おれが貰ふ氣だ。

宗庵　さう知られたら仕方がねえ、兎や角う言はずに財布の金を、半分手前に分けてやらうが、中にあつたは十圓札、五圓の釣があるならやらうが、無けりやあ明日迄預かつて置かう。

金助　五圓の金が懷にありやあ、寐臭へ損料蒲團の中に、くすぶつて居やあしねえ、釣はねえから十圓そつくり、おれが方へ貰はうか。

宗庵　そりやああんまり蟲がよからう。

金助　それぢやあ今夜も十時前、兩替屋で切つて貰ひ、おれに半分それをよこせ。

ト是を聞き宗庵むつとして、

宗庵　何も借りたものぢやあなし、遣るも遣らねえもおれが料簡、兩替屋で切つて來いと手前の差圖は

金助 おらあ受けねえ、癪に障りやあ五圓はおろか、五錢の錢も遣りやあしねえ。

金助 三枚橋にも懲りねえで、まだそんなことをいふか、此の金助に見込まれたら、脱れることは出來ねえから、早く往生してしまへ。

宗庵 いゝやおらあ往生しねえ、六十越して念佛を一度も言つたことのねえ、後生嫌ひな按摩の宗庵、手前達が脅さうとも、びつくりともしねえのは、しなびた腕にあることだ。

金助 そんな野暮を言はねえで、器用に半分おれによこせ。

宗庵 しやらツくせへことを言やあがるな、遣らねえと言つたらどうする氣だ。

金助 どうするものか、腕で取らあ。

ト待合茶屋の藝者の騷ぎになり、金助宗庵の懐へ手を突込み、財布を引出す、宗庵やるまいと兩人摑み合ひの立廻り宜しくあつて、金助財布を引取り、宗庵を突倒す、宗庵石にて脇腹を打ちウンと倒れる。

巡りの來ねえ其内に。

ト頷き右の騷ぎ唄ばたくにて金助上手へはひる。此内花道より薫、鉢植の梅を持出來り花道にて、

薫 今日は摩利支天の緣日故、母の病苦を慰めんと室咲を求めて來たが、以前ならば血勞といふ世に

治し難き母の肺病、この室咲と同様に、どうか春迄保てばよいが。
　ト舞臺へ來る、此内宗庵心附き、脇腹を押へ苦しみ居て、
宗庵　又あいつに取られたか、忌えましい目に逢つたな。（ト薫是を見て、）
薫　こりや、其方はどうぞしたのか。
宗庵　はい。（ト目を塞ぎ盲目のこなしにて、）石に躓き轉びまして、横腹を打ちましてござります。
薫　それはあぶないことであつた、其方は目が見えぬか。
宗庵　はい、盲人でござります。
薫　盲人とあるからは、揉療治でも致すのか。
宗庵　お察しの通り按摩を致し、辛き浮世をやう〳〵と、送ります者でござります。
薫　して、其方の宅は何れぢや。
宗庵　日輪寺門前でござります。
薫　名は何と申す。
宗庵　宗庵と申します。（ト薫名を聞き思入あつて、）
薫　宗庵といふからは、當十月中二枚橋で、杖と笛を忘れはせぬか。

宗庵　え、（トぎつくりなし、）どうしてそれを。

薰　其夜僕が通行致し、いろは假名にて宗庵と、記せし杖と笛を拾うた。

宗庵　へい、左樣ならあなたのお宅に、其二品がござりますか。

薰　いや、其の二品は五方面分署に留めあるぞ。

宗庵　え〻。（トびつくりして思はず目を明く。）

薰　其方は目が見えるな。（ト宗庵目をふさぎ、）

宗庵　いえ、兩眼とも見えませぬ。

薰　唯今兩眼明いたでないか。

宗庵　さあ、それは。

薰　して何れから是へ參つた。

宗庵　萬年町から參りました、

薰　然らば今宵丹波屋といふ、安泊りへ呼ばれたらうな。

宗庵　そりや外の者でござりませう、私は呼ばれませぬ。

薰　療治中に黑の羽織と金圓入りし財布が見えぬが、其方は存ぜぬか。

宗庵　唯今も申します通り、呼ばれませねば存じませぬ。（ト薫宗庵の羽織へ目を附け、）
薫　木綿布子に不釣合な其の黒羽織は如何致して、其方着用致し居るぞ。
宗庵　さあ、是は。
薫　十圓入りし財布と共に、盗み取つたであらうな。
宗庵　さあ。
薫　存ぜぬなど〳〵横着者めが。（トきつと言ふ。）
宗庵　む〳〵。（ト詰りし思入。）
薫　三日前なら其方を、捕縛なして拘引致すに。
宗庵　拘引なすと仰しやるからは、もしやあなたはお巡りを。
薫　いかにも三日前迄は、巡査を勤め居つたるが多病に是非なく辭職なし、常の士族になりしかば今日捕縛の權はないが、舊友六浦が所有の財布と羽織を掠奪されし故、一應僕が問訊すが、知らぬとあれば其筋へ、召連れるからさう思へ。
宗庵　それぢやァあなたはお巡りへ、わしをお渡しなさる氣か。
薫　それと見留めし上からは、巡査へ渡して拘引さすぞ。（ト宗庵是非なき思入にて、）

宗庵　以前巡査をなされたら、急所を知つてるあなた故、所詮言譯をしたところが脱れられぬと覺悟して、隱さずお話し申します。いかにも只今仰しやる通り、丹波屋といふ安泊りへ呼ばれて療治を致す内、根が兩眼とも見えます故、ふつと目に付く羽織と財布、僅な物でも見脱せず、足で掻寄せ盜み取り小水に行くと其場を逃げ去り、中に小札の一二三枚もあるかと財布を明けてびつくり、思ひがけない十圓札、こいつあ四五日遊べると悦ぶ間もなく盜んだを、見て居て跡から附けて來た天狗小僧金助といふ、掏摸に財布を取られた上、突倒されて此石で脾腹を打つて今の難儀、盜みは盜みましたれど、金は天狗に浚はれて殘つた物は此羽織、是をお返し申しますから、巡査へお渡しなさるのを、どうぞお許し下さりませ。

薰　すりや其方が盜みし金は、金助とやらに取られしか。

宗庵　決して虛言は申しませぬ、裸になれと仰しやれば、なつてお目に掛けませう。

薰　六十越せし其方故、許して遣り度いものなれば、其方に十圓掠奪されしは舊友六浦正三郎、其の十圓故何程か難儀をせしか知れざれば、唯此儘には許されぬ。（ト是を聞き宗庵思入あつて、）

宗庵　其の六浦正三郎樣と、おつしやるお方は其以前、三筋町においでなされはしませぬか。

薰　おゝ瓦解以前は三筋町にて、舊幕府の徒士役なり。

宗庵　こいつあ飛んだことをしたわえ。

ト後悔せし思入、時の鐘ばた〳〵にて、下手より以前のお豐、お竹出來り、

お豐　旦那樣、是においでなされましたか。

薫　こりや、親子には何しに是へ。

お豐　最前旦那がお手札入をお忘れなされました故、持參致してござります。（ト以前の手札入れを出す。）

薫　途中で心附きし故、歸りに寄らうと存ぜし所、わざ〳〵是迄忝ない。

ト薫手札入を受取り懐へ入れる、お豐宗庵を見てびつくりなし、

お豐　や、お前は宗助殿か。

宗庵　おゝ、女房か。

お竹　お父さん、逢ひたかつたわいな。（トつか〳〵と行き宗庵にすがる。）

薫　さては孝女の親といふは、

宗庵　此の宗庵でござります。

薫　はてさて、思ひ掛けないことだ。

宗庵　あゝ、二人に逢ふも面目ない。（ト誂への合方にて薫捨石へ腰を掛ける。）

お豐　見ればそぼろな裝をして、お前は心が直りませぬか。
宗庵　持つて產れた根性に、盜み心がいまだに止まず、今も今とて此の旦那に此の羽織から安泊りで財布を盜んだことを見出され、分署へ引かれて行く所だ。
お豐　え、すりやお前が六浦樣の、羽織と財布を取らしやんしたか。
宗庵　おゝ二品とも、おれが盜んだ。
お竹　それではわたしのお父さんは、泥坊でござんしたか。（トお竹顏へ袖を當て泣く。）
お豐　ても情ない宗助殿、わたしら二人はお前に捨てられ、是迄いくせの難儀をしたれど、惡い人でも此子迄儲けた中の夫故、片時忘るゝことはなく何處にどうして居なさるか、此身の難儀をするに附け若い時からそでない事のみ、しなさんした故其報いで、煩つてゞも居なさるかと、我身の事より先づお前の、無事息災を神佛へわたしやお願ひ申して居ります。
お竹　此間もお母さんに、なぜにわたしのお父さんはたつた一人の娘だのに、可愛がつて下さんせぬと、恨みをいふもどうぞして親子一緒に居たい故。其かひもなく是からは泥坊の子と言はれませう、それが悔しうござります。
お豐　產れ立にて直らぬことなら、跡の難儀にならぬ樣な内の物を取らしやんせぬ。今夜お前が取つた

金故六浦樣がどの位御難儀なされたことか知れぬ、一つ宿に泊つて居れば、お氣の毒で見て居られず、わたし共も共々に其お詫をするほどに、宵に盗んだ其金を早く爰へ出しなさんせ。

宗庵　斯うなるからは持つて居れば、直に出してお詫をするが、金助といふ金毘羅參りに、其十圓は取られてしまつた。

お豐　其の金助といふ人は、安泊りの裏にゐる身性の惡い金毘羅參り、天狗小僧に其金を、お前は取られなさんしたか。

宗庵　負けねえ氣でも年の上、摑み合つたが向うは血氣に、突倒されて脾腹を打ち暫く息の止つた内に其十圓を取られてしまひ、今更思へばあの時に己が取らにやあよかつたが、目にかゝつたら見脱せねえのが、産れ附いたる盗人根性、いつそ此目がほんたうにつぶれたならば止めようもの、目の見えるのが己の敵だ。

お豐　さういふことなら仕方もないが、六浦樣へお返し申す、金の都合は出來ませぬか。

宗庵　五十錢か一圓ならどうか都合も出來ようが、もう十圓と纏まつては、盗みをするより外には出來ねえ。

お豐　わたしとても着たなりで少しもお金になるものは、三絃ばかりでございますが、賣つた所が三分

か一圓、其上是を賣つてしまへば明日から稼ぎの種を失ひ、親子が路頭に迷はにやならぬ。

お竹　もしお母さん、わたしやいつぞやお父さんに、吉原へ遣られる所、お前が留めて下さんして今日迄家に居たのが仕合せ、どんな辛い所でも、わたしや辛抱しますから、禿に遣つてお金を拵へ、お父さんが泥坊にならぬ樣にして下さりませ。（ト お豐宗庵に向ひ、）

お豐　今娘が言つたことを、お前聞いてゐなさんしたか、邪險に捨てゝ行つた子なれど、お前を親と思へばこそ、其身を辛い苦界へ沈め、盜みの科を消さうといふ、此子は可愛うござんせぬか。

宗庵　おゝ娘よく言つてくれた。手前が死なうと生きようと役を構はず捨ていつた、鬼の樣な此の己を親と思つて恨みもせず、其身を苦界へ沈めても助けようといふ志し、いかな鬼でも角が折れ、是ぢやあ發起しにやあならねえ。（ト 宗庵愁ひの思入、お豐お竹薰に向ひ、）

お豐　もし旦那樣、夫が盜み取りました金子は調達致しますから、旦那樣のお計らひにて、屯へ引かれまするのを、お許しなされて下さりませ。

お竹　手を合せて拜みます、お助けなされて下さりませ。

薰　天晴見上げし心底ゆゑ、僕がことなら其方達が心にめでゝ宥免致すが、取られし主は舊友六浦、今日に迫りし金圓に恥辱を受けしと承はれば、僕が所存で許し難し。

お豐　そこを何卒旦那樣の、お執成しにて助かります樣、
お竹　お願ひ申し上げまする。
薰　豐には夫竹には父親の事故尤もなるが、爰をよく聞分けよ。三日以前であるならば我職掌に盜賊と認めし上は捕縛なし、分署へ拘引致す宗庵、今日辭職致せし上は其權無ければ捕縛はせぬが見脱し難きは苟にも其職勤めし薰故、唯此儘には許されぬぞ。
お豐　すりや、どうあつても我夫は、
薰　是非なきことゝ諦めよ。
兩人　はあ。（ト泣き伏す、是をキッカケに稽古笛の入りし誂への合方になり、薰思入あつて、）
薰　こりや宗庵、妻子がかゝる歎きをするも、元は汝が不所存故不便と思はゞ改心なし、是迄なせし惡行を分署へ出て自首致し、犯せし罪の所刑を受け役所へ參らば身を愼み、壯年輩へ勸懲の道を篤と說諭なし、日夜勉强致しなば、上にも特志のおん慈悲あつて、一等罪を減じらるゝは是先例のあることとなるぞ、最早六十有餘の老年、事によりなば放免になるまじきとも申されぬ、左ある時には私宅へ歸り、靑天白日の身となりて正路の商法開きなば、妻子が悅びいかばかり、所詮此儘脫れられねば、娘を苦界へ沈めずとも、其身の惡事を自首致せ。

ト薫思入あつていふ、宗庵も先非を悔し思入にて、

宗庵　いかにもあなたの仰せに隨ひ、自首致しますでござります。

薫　すりや改心致して、訴へ出るか。

宗庵　今日といふ今日は宗庵が、濟まぬことを致しました。

薫　なに、濟まぬことを致したとは。

宗庵　元私は九十九里の漁夫の悴でござりますが、産の母は十代から六浦樣の大旦那正左衛門樣に奉公なし、長年御恩になつたことをよく話しました故、餓鬼の折から小耳に覺え、母の御縁で一二度上り、其後段々身を持崩し金に困つて六浦樣へ、十圓御無心申した時、厚く此身に御異見あつてお貸しなすつて下すつたを、金もお返し申さずに御恩を仇に音信不通、未其頃は正三郎樣も御幼年の時分故、お顔も覺えませなんだか今其樣に御難儀をなすつておいでなさるなら、御恩返しに少しでもお貢ぎ申さにやならぬのを、知らぬことゝは言ひながら、なくてならぬ其金をわしが盜んで御難儀掛け、こんな濟まねえことはねえ、遂には天の御罰にて盜んだ金を又盜まれ、石で脾腹を打つたが儲け、惡い事は出來ねえと改心致して是迄の、惡行を自首致します。

お豐　そんならお前は是迄の、惡事を自首してお仕置を受ける心でござりますか、ても情ないことぢや

なあ。(ト泣伏す。)

お竹　もし旦那樣、お父さんも老年ゆゑ、どうぞわたしを代りにやつて、お助けなされて下さりませ、拜みます〳〵わいな。(トお竹手を合して薰を拜む。)

薰　志しは感心なるが、是は代りで濟まざれば、そちが賴みは聞かれぬぞ、假令懲役になるとても其方が父は竊盜故百日以內の御所刑ならん、まことに僅の內なるぞ。(ト鉢植の梅を出し、)母の土產に求めたる此早咲の梅なども、未蕾と思ふ內花の開くは間も無きこと、其方が父も先づ其如く、未か〳〵と思ふ間に、いつか花咲き滿期に至らん、指折り算へて待つてゐやれ。

ト是にて兩人是非無き思入にて、

お豐　なした罪故懲役になるのも今更是非なけれど、是から寒氣に向ふ時節、どうぞ煩はぬ樣にして、

お竹　達者で歸つて下さりませ。(トお竹宗庵にすがる、宗庵お竹の顏を見て不便だといふ思入あつて、)

宗庵　若い時から寒い目は仕拔いた己の體ゆゑ、煩ふことはねえけれど、達者で歸るを樂みに、二人が待つてゐるだらうが、是から行つたら二度と再び、もう此娑婆へは出られねえぞ。

お豐　え、そりやまあどういふ譯あつて、

お竹　歸ることが出來ませぬ。

宗庵　出來ぬは重い罪ある故。

薫　扨は終身懲役になるべき其方は罪科あつてか。

宗庵　終身なれば長年の内には非常の大赦あつて、出られることもござりませうが、死刑を受けねばなりませぬ。

お豊　え〻。（ト驚く。）

薫　すりや人を害せしことあつてか。

宗庵　杖を捨てた其晩に、三枚橋の袂にて七十圓の金に目がくれ、若い男を締殺し、死骸を川へ打込みましたが、此一廉を自首致せば死刑を受けねばなりませぬ。

薫　して締殺せし其者は、何者なるか存ぜぬか。

宗庵　初手は知らずに殺しましたが耳から襟へ掛けての痣にぴつくりしたは其以前、江戸を喰詰上州へ逃げて行つて高崎の穀物問屋へ雇に入り、半年ばかり勤める内に、金を盗んで難儀を懸けた恩ある家の二番目息子、痣が證據に主人と知つて、以前ならば磔になるべき所を今日の、開化の御代に死刑のお仕置、有難いことでござります。

薫　かゝる大罪ある上は死刑にあふは天の罰。

お豐　そんなら是ぎりもう此世で、

お竹　お父さんには逢はれませぬか。

お豐　悲しいことでござりまする。（ト兩人泣く、宗庵是を見て、）

宗庵　人を殺した身の果は首になるのは當り前、おれは覺悟の上だから、手前達も泣いてくれるな。

お豐　お前が泣くなと言はしやんしても、是が泣かずにゐられませうか。（ト兩人泣伏す。）

宗庵　えゝ泣くなといふに。（ト涙を呑み込みこらへる思入。薫これを見て、）

薫　一命捨つる未練もなく、惡に根強き其方を善に用ひしことならば、物の役にもたつべきに。

ト本釣鐘を打込み、薫宗庵を惜しむ思入。

宗庵　破落戸の私に、冥加に餘る其お詞、是には涙がこぼれます。

ト宗庵手拭を額へ當て泣く、薫宗庵を見て、

薫　あゝ性は善なる、（ト立上るを木の頭、）ものぢやなあ。

ト薫感じたる思入、宗庵はお豐お竹の手を取り、別れを惜しむこなし宜しく、本釣鐘愁ひ三重の達な合方にて、

ひやうし　幕

四幕目

根岸石齋宅の場

【役名──楠石齋、讃岐金助、稻田豐三郎、下男佐兵衛、巾着切丹作、宇治喜美太夫、植木屋。石齋の正妻おむら、泥藏娘お兼、下女おしづ。】

(根岸石齋宅の場)──本舞臺一面の平舞臺、眞中一間屋根附の門、柱に楠石齋と記せし表札、此左右建仁寺垣、上の方垣の内に九尺の二階家、三尺の戸袋、一間肱掛窓、障子立切り、軒口に木枯しをする誂への木釣しあり、垣根の下の方、庭續きの心にて一面の生垣、此内樹木の植込柳讓葉などの霜除を藁人形と見たる誂へ、よき所に見越の松、日覆より同じく釣枝總て此道具雪持、舞臺花道共雪布を敷詰め、根岸の里石齋宅外構の模樣、爰に序幕の植木屋幸藏、音松の二人、紺の印半天腹掛股引草鞋竹笠にて、雪搔鍬を擔ぎ立掛り居る、此見得雪おろし端唄にて幕明く、

幸藏 十二月とはいふものゝ、未舊暦では霜月だが、今年はいつより陽氣が寒く、寒中の樣な此大雪、是では今夜は積るだらう。

音松 北の方は蔭のねえ三河島の田甫だから、雪風が烈しいのに上野の山の吹返しで、横ッ面を切られる樣だ。

幸藏 然し斯うして雪の中を出掛けて行くも慾德づく、寒い思ひをした跡で、暖かい思ひをしてへからだ。

音松 さうだとも〳〵、是から廓の出入場へ行き、雪を搔いて祝儀を貰ひ、晩にはぐつすり暖まらう。

幸藏 時に爰の家は立派な構へだが、何者の住居だらう。

音松 お前は未だ知らねえか、楠といふ學者の家だ。

幸藏 はゝあ、それぢやあ是が楠の家か、道理で庭の霜除が、藁人形に見えると思つた。

音松 釣塀換りか二階の軒に、大きな木が釣してあるが、定めて用心も嚴重だらう。

幸藏 さういへば此間、爰の前を通つた時、洋犬に吠えられてひどい目に逢つた。

音松 又吠えられねえ其内に、ちつとも早く出掛けよう。

幸藏 それがいゝ〳〵。

ト右の鳴物にて兩人連立下手へはひる。跡雪下し替つた合方になり、花道より讃岐金助頰冠り、三尺帶尻端折、安下駄を履き丹作同じ装にて兩人とも醉ひしこなしにて、番傘を相合に差し出來り、花道にて、

丹作 こう兄貴、溝ツ端はあぶねえから、垣根の方へ附いて步きねえ。

金助　いや幾ら醉つても大丈夫だ、按摩の金の十圓も唯一晩で遣つてしまひ、今日は鹽噌の錢もねえ。是から一番內會の種のいゝのを突當て、晩の吞代にしにやあならねえ。

丹作　何でも爰らの窠だと聞いたが、雪の降るので當りが附かねえ。

金助　いや、雪の降るのが此方の附目、下駄の跡から足を附け、雪に緣ある銀張りの札で張込む旦那衆の、いゝ內會を突當てるのだ。(トひよろ〳〵とする故、)

丹作　それ見たことか、此方へ寄んねえ。

金助　えゝ案じるな、轉びやあしねえ。(ト兩人舞臺へ來り、金助蹟き轉ぶ、是にて下駄の鼻緒切れる。)

丹作　それだから、此方へ寄りねえといふに、何處ぞ怪我でもしやあしねえか。

金助　怪我はしねえが鼻緒が切れた。

丹作　立つて遣るから爰へ出しねえ。(ト丹作生垣の內の霜除の藁を抜取る。)

金助　とんだ佐野の最明寺だが、下駄の鼻緒が切れた日にやあ、跡へも先へも行難しだ。門の下で雪見としようか。(ト門の前へ行き、)何だ楠石齋、べらぼうと堅い名だな。

ト此時門の內で洋犬の吠える聲聞ゆる。丹作びつくりして、

丹作　えゝ氣味の惡い、吠えやあがるな。(ト下手へ逃げるな、)

金助　これ丹作、何をそんなに驚くのだ、何處にも犬は居やあしねえ。

丹作　己あ又吠附いたと思つて、膽玉がでんぐり返つた。

金助　手前の肚胸に似合はねえ、何でそんなに恐れるのだ。

丹作　己あ犬ぢやあ懲々した。

金助　さうしてどんな目にあつた。

丹作　まあ馬鹿げた話しだ聞いてくんねえ、いつか上野の三枚橋で若い野郎の紙入を、猿藏勘次を相掏に首尾よく抜いて中を見ると、十圓札で七十圓大した仕事をした所へ、病犬が飛んで來ていきなり己が向う脛へ喰ひ附きやあがつたので、命からく〳〵山下迄三人とも逃げて來て、黑砂糖を買つて附け、痛さを怺へて家へ歸り、七十圓を分ようと、內懷を見てびつくり、犬の騷ぎに紙入を何處か途中へ落してしまひ、二人が直に搜しに行つたが誰か拾つた跡の祭り、十二座神樂の馬鹿を見て、それから此方へ怯氣がつき、聲を聞いてもびく〳〵するのだ。（ト金助是を聞き、）

金助　むゝ、それぢやあ手前が落したのか。

丹作　兄貴、お前知つてゐるか。

金助　え、（トぎつくり思入あつて、）誰かの話しに聞いたのだ。

ト此時上手二階の障子を明け、下男の佐兵衛出て、軒口に釣しある木を見て、

佐兵 こりや木枯しをなさる積りで、釣してお置きなすつたが、雪で濡れては何にもならぬ。どれ〳〵内へ入れて置かう。（ト取込まうとして過つて木を舞臺へ落し、）えゝ手が凍へてゐたばツかり、飛んだ麁相をやらかした、下へ廻つて行く内に、誰か拾つて行かねばよいが。

ト障子を建切る、下の兩人是を聞いてゐて、

丹作 あぶねえ物を落しやあがつた。（ト落した木を取上げ、金助思入あつて、）

金助 犬も歩けば棒に當ると、爰にゐたのが此方の幸ひ、こいつを種に一ゆすり、いゝ商法をしにやあならねえ。

丹作 なるほど兄貴は轉んでも、容易に唯は起きねえな。

金助 轉んで金の取れるのは、新聞に出る娼法猫。

丹作 それは應來（オーライ）、是れは往來。

金助 然も四つ乳か四つ辻に、

丹作 大師河原の道ぢやあねえが、

金助 鼻緒の切れたが、（ト丹作下駄を出す。金助履くを道具替りの知せ、）緣の端だ。

トにつたり思入、雪下し端唄にて道具廻る。

（座敷の場）——本舞臺四間中足の二重庇附まはり緣側、眞中に御影石の踏段、正面上の方一間の床の間、好みの掛物、花瓶に室咲の梅、續いて一間地袋戸棚下の方三尺瓦燈口、太鼓張りの襖腰張の茶壁、欄間へ油書の額を掛け、二重上手跡へ下げて一間障子屋體、此前に石燈籠、下手屋根附の土塀所々に冬木の植込み、いつもの所枝折戸、四ツ目垣、日覆より松の釣枝、此道具雪持、雪布を敷き爰に前幕のお村火鉢の傍へ座蒲團を敷きて住ひ、軍書を讀んでゐる、下手に喜美太夫羽織着流しにて煙草を呑み、中働きお靜急須へ茶を入れ居る、此見得誂への端唄にて道具留る。

喜美　實に油ぢやあございませんが、廓においでの時分と違ひ演說家の御新造樣に、浮いた小本をさらりと廢し、喜美太夫などには分かりませぬ、堅い軍書をばすら〳〵と、お讀みなさるのは實に感心致します。

お靜　ほんに喜美さんお待遠だが、今にお誂へが參りますから、お茶でも一つお上りなさい。

ト茶を出す。

喜美　いや、上を見習ふ下といつて、お靜さん迄が斯うも品行がかはるものか。

お村　さうして喜美さん、お前は今日雪の降るのに、何處へおいでだえ。

喜美　さる風雅なお客様と、今日は上野の八百善さんへ雪見のお供で參りましたが、景色はよいが寒いので私も縮み上り、歸りに新坂の玉の湯で、雪見の縮みを延ばしました。

お村　玉の湯へ這入つておいでか、わたしなどもお天氣の時は、あのお湯へ行きますよ。

喜美　二三町位ならおいでなさるは御尤も、凡そ溫泉多しといへど東京一でござりませう。先づ第一家がよく、水がよくツて世辭がよく、お負に流しの番頭が骨を惜しまず湯を惜しまず、ざぶざぶお客に使はせて、大勉强でござります。

お靜　ほんに彼所の溫泉で料理でも致しましたら、嘸流行ることでござりませう。

喜美　いや、料理といへば新富町の、芝居歸りに木挽町の萬安へ寄りましたが、彼處の家は溫泉の直に隣の庭續き、價も廉で喰はせる物が上等でござりますから、今度芝居のお歸りに、お出なすつて御らうじませ。

お村　旦那樣にお話し申し、芝居の歸りに寄つて見ませう。

喜美　時にお內の旦那樣は。

お村　手の放されぬ御用があつて、圍ひにおいでなさる故、今日はゆつくり暮方迄遊んで行つて下さいな。

喜美　へい、置いてさへ下されば、いつ迄もをりまする。（ト爰に瓦燈口より矢場娘のお兼出來り）
お兼　お靜どの、鶯春亭が參りました。
お靜　おや、さうでござりますか。どれ御酒の支度を致しませう。（トお靜瓦燈口へはひる。）
喜美　御新造樣。此お娘御はどちらのでござります。
お村　ちと仔細あつて此方の家へ、預かつてありますのさ。
喜美　扨はこちらの旦那樣が。
お兼　え。
喜美　いえなに、旦那樣の御親類でござりますか。
お村　いえ、親類ではないけれど、旦那樣が親御と御懇意にした、さる所の息子さんと一緒に此方に居なさるのさ。
喜美　それは御安心でござります。
お兼　御新造さん、お宅に梅干がござりますなら、少し頂かして下さいまし。
お村　此間龜井戸の臥龍梅で貰つたから、靜にさういつて出してお貰ひ。
喜美　いや唐の孔明日本の楠、その末流のこちらの旦那、臥龍梅とは是も緣、澤山お上りなさいまし。

お兼　いえ喰べるのではござりません。豊さんが風を引き頭痛がすると申しますから、黒焼にしてお湯を掛け、呑ませたうござります。

お村　風なれば梅干より、爰によい藥があるから、是を振出してお呑ませなさい。

　　ト火鉢の引出しより藥包みを出してお兼に遣る、是を喜美太夫見て、

喜美　是は馬喰町一丁目の、平尾の振出しでござりますな。此風藥はよく利きます。實に風藥の第一等爰の家で名高いのは白粉下の小町水、まだ其外に利中散、天眞丹に鎭痙散、通じの振出し薔薇の香水、何れも名におふ早稻田の殿樣、松本先生の御方劑故、利目のよいのは請け合ひます。

お兼　それでは早速此のお藥を、振出して呑ませませう。

　　ト藥を取つて頂く、爰へ奥よりお靜酒肴を持出て、

お靜　お燗が附きましてござります。

お村　不自由な所故、何も上るものはないが、寒さ凌ぎに一口お上り。

喜美　是は、御叮嚀なお持成し、まあ旦那樣がいらつしやつてから、初めると致しませう。

お村　旦那は今日はお物忌にて、何もお上りなさらぬから、御遠慮なくお初めなさい。

喜美　左樣なら仰せに任せて、頂くと致しませう。（トお靜酌をして喜美太夫酒を呑む。）

お兼　是は御新造さん、有難うござります。お前さん、御ゆるりとなさいまし。
喜美　若旦那を、お大事になさいまし。
お兼　有難うござります。（ト合方にて瓦燈口へはひる。直に下手より以前の佐兵衛出來り、）
佐兵　御新造様、飛んだ麁相を仕出かしまして、申譯がござりませぬ。（ト泣き出す。）
お靜　又めそ〳〵と佐兵衛どん、何をそんなに泣きなさるのだ。
お村　さうして麁相をしたといふのは、どんなことをしたのだ。
佐兵　旦那様が此間から木枯しをすると仰しやつて、二階の軒へお釣しなすつた桐の木が、此雪で濡れては悪いと存じまして、取込みます其のはずみに、手先が凍へてつい落し、あひにく下を通りました往來の人に當りまして、幾ら詫びても聞入れず、旦那に逢はうと申しまして、爰へづか〳〵參り、どうも申譯がござりませぬ。（トめそ〳〵泣く。）
お村　それでは疵を受けた人が、
お靜　今此處へ來ますのかえ。
喜美　何にしろ野暮なことだが、必ずお案じなさいますな、どうかわたしが扱ひますから、御新造様やお靜どんは、奥へはひつておいでなさい。

お村　そんならどうぞ喜美太夫さん。

お靜　扱つて上げて下さいまし。（ト此時下手にて）

金助　いやだ〳〵、了簡ならねえ。

丹作　これさ兄貴、まあ靜にしねえ。

佐兵　あれ〳〵、此方へ參りますが、こりやどうしたらよからうな。

ト又泣出す、此内お村お靜奥へはひる、爰に下手より以前の金助額へ疵を附け、件の木を持ち、丹作介抱しながら出て來り、

金助　あゝ痛へ〳〵、天窓がぐわん〳〵割れさうだ、どうかしてくれ〳〵。

丹作　痛からうが我慢をしねえ、己が敵を取つてやるから、痛さを怺へて靜にしねえ。

ト兩人枝折戸の内へはひり、金助佐兵衞を見て、

金助　やい野郎め、何が遺恨で己の天窓へこんな大木を打附けやあがつた。（ト此内喜美太夫庭へ下りて）

喜美　もし〳〵親方、定めてお腹も立ちませうが、全くお前さん方に遺恨があつて打附たのぢやござりません、麁相で上から落した所へ、生憎下をお通りなすつて當つたさうでござりますが、ほんの是は出合頭、殊に相手は取るにも足らぬ爰のお家の雇ひ人、泣いてお詫をして居れば、弱きを助け

る東京の、御氣性と見た親方手合、爰は一番大負にわたしに預けておくんなさい。

金助　えゝ、やかましいわえ、手前の知つたことぢやねえ、そつちの方へすつこんでゐろ。

喜美　ほい、これはしくじつたか。

佐兵　さあ、これだから喜美太夫さん、私やあ悲しくツて〳〵、途方にくれてゐますわえ。

ト又泣く。

金助　さあ此方の家の主人を出せ、亭主が相手だ〳〵。

喜美　さゝ其の御主人へ知れる時は、此人がしくじるから、どうぞ了簡して下さい。其代り詫賃に、一杯買ふとしませうから、それで勘辨して下さい。（ト金助是を聞きわざとむつとして、）

金助　何だ、こいつァおつなことを言ふな。己あ錢貰ひに爰の家へゆすり衒りに來やあしねえ、一杯買ふから了簡しろとは、あんまり人を見くびりやがるな。

丹作　さうだ〳〵、見くびつたことを言はれちやあ、なる勘辨も猶成らねえ、亭主に逢つて譯を聞き、あやまらせにやァ、濟まされねえ。

金助　早く亭主を出しやあがれ。（トきつといふ。）

喜美　いや、其の御主人がお家なれば、爰へ出てお逢ひなさるが、今日はお留守でおいでなさらぬ。

佐兵　あゝもし、家にござるといふ事は、今方わしが言ひました。

喜美　え、(トびつくりなして、)何さ、今迄おいでなすつたが、急な御用でたつた今。

金助　えゝ人を馬鹿にしやあがる。

丹作　何でも主人は、あの一間だ。

金助　早く行つて引摺り出せ。

丹作　合點だ。(ト佐兵衛の留めるを突退け縁側へ上り、上手の屋體の内へはひり、びつくりして逃出し來り、)何だかこいつァ夢の様だ。(ト四邊を見廻し、きよろ〳〵してゐる。)

金助　何をそんなに恐れるのだ。

丹作　まあ兄貴、あすこへ行つて見ねえ。

金助　おゝ行かなくつてどうするものか。

ト喜美太夫を掻退け平舞臺の上手へ行き、外より障子を明ける、内に石齋立烏帽子鎧の上へ菊水の紋付きし大紋、附太刀、楠正成畫面のこしらへにて、麾を持ち床几に掛りゐる、皆々此體を見てびつくりなし

や、思ひがけねえ。

皆々　此の裝は。

石齋　仔細あつて今日一日、我は楠聞多兵衛正成公に出立しぞ。

金助　それぢやあ此家の主人といふ、

丹作　石齋さんとは、お前のことか。

石齋　今平民と相なれど、元は河内の千早の郷士、多聞兵衛の末葉たる楠石齋といふものなるぞ。

ト是にて金助思入あつて、

金助　へん、山師の玄關を見る樣に、裝で一番脅す氣でも、そんなけれんを喰ふものか。

丹作　すつぱ拔なら其方より、此方が得手だ、打ちこはし、

金助　五輪五體の其中で一番大事なしやッ額、

丹作　何か遺恨で投打ちさせ、

金助　こんなに疵を附けやあがつた。

石齋　いや、其の話も先刻から、障子越に聞いて居つたが、敢て左樣な譯では無い、それへ參つて辯解致さう。

ト誂への合方になり、上手より石齋しづ〳〵と出來り、二重よきところへ住ふ。金助緣端へ腰をか

けきつとなり、

金助・足利勢は楠を攻めに千早に寄せたから、怪我をするのは覺悟だが足利勢でも何でもねえ、己の天窓へ大木を、何の遺恨で二階からわざと落して怪我をさせ、人脅かしの楠出立、ふざけた眞似をしなさるのだ。

丹作　其上見りやあ庭木から流れの際の寒菊迄、花を厭つた霜除を藁人形と見せる氣か、何處が何處迄菊水の正成氣取が癪に障らあ。

金助　四疊半を城廓に一間の內へ立籠り、其方が大將氣取りでゐりやあ、此方もごろつき仲間ぢやあ軍師と言はるゝ讃岐金助、盆の上の遣取りなら跡へ引かねえ己が腕、爰で一番宇都宮公綱氣取でやらかす氣だ。

丹作　其又加勢は丹作といふ、名も緣のある間者の武士、英雄氣取で公綱の後詰をするから覺悟しろ。

ト兩人きつとなる。

石齋　さう又時代に出られては、二番目物の狂言へ世界違ひの楠が、獨り交つて團洲の似ぬ聲色でも遣はねば、どうか相手に成兼ねるが、劇は好めど性來の無骨者故俳優の眞似は不得手な此石齋、堅い所で條理を說き詫を致して見る氣ぢやが、此方は麁相で二階から手過にて落せしを其方は

遺恨で打附けしと、議論に果し無き時は、止むを得ずして巡行の査官か又は分署へ到り、上へ手數を掛けねばならぬ、僅な議にて公然と所置を受けるも楠の、姓を名乘る身に取りては近頃恥辱の至り故、上へ手數を掛けぬ内それ相當の償金にて、不注意をせし詫をなし事穩便に納め度いが、それにて勘辨致しくりやれ。

金助 左樣又其方が事を分け詫をするといふからは、此方も頑固なことをいつて、强情張るのも不開化だ、さうして疵の療治代はいくらくれるかそれが聞きてえ。

石齋 さればそれもいくらと申し極りしことも非ざれば、此場のことは僕方より詫びて濟ませる身の不承、幸ひ居合す喜美太夫殿、それにて相場を入れて下され。

喜美 先づわたくしが相場を入れゝば、七十五錢と思ひますが、此方のお宅のことなれば一圓出さずばなりますまい。

金助 何だ、療治代が一圓だ、跡で禮でも貰はうと思ひ、けちな相場を入れやあがるな。

喜美 それでは相場が違つたかな。

丹作 えゝ口を利かずと、默つてゐろ。（ト佐兵衞前へ出て、）

佐兵 旦那樣へは濟みませぬが、お巡り樣を呼んで來て御所置を附けてお貰ひ申し、罰金だけは私の

石齋　お給金にてお差引きを、どうぞなされて下さりませ。

石齋　おゝ、其方が麁相で先方へ疵が附いたと申す故主人に代つて詫をなし、償金迄を出さうと申すに、不承知なれば是非無きことぢや、分署の所置を受けると致さう。

金助　むゝ面白へ突出してくれ、そりやあ分署へ出たことなら額の疵の療治代は僅な事で濟みもせうが鹿兒島以來泰平に治まる御代に禁制の、太刀を附けたり鎧を着たり、軍人の眞似をして疵を附けたと申立てたら、平民の身で濟むめえぜ。

石齋　や、(トぎつくり思入。)

丹作　此奴あ兄貴の言ふ通り、詮議の上で言譯立ち放免赦罪になるにもせよ、先祖の代から傳はつた太刀や鎧を取上げられ、品に寄つたら罰金を取られにやあならねえが、それでも分署へ訴へるか。

石齋　むゝ。(トぢつと思入。)

佐兵　いや旦那樣は御存じないこと、私が出來したことゆゑに、分署へ一緒にござらつしやい。

金助　そんな南瓜は相手にしねえ、何でも相手は爰の主人だ。

丹作　鎧や太刀を附けたのが、布告に背くが此方の附目、

金助　主人を此儘連れて行くのだ。(ト此時五時の時計なる。)

喜美　五時が鳴つては短日故、程無く暮れるでござりませう。
石齋　用があるなら遠慮なく、こなたは廓へ歸るがよい。
喜美　いえ、此一埒が附かぬ内は、決してお暇致しませぬ。
金助　假令日暮にならうとも、あかるい體のこちとらだ、早く分署へ出しやあがれ。
トきつと言ふ、爰へ瓦燈口より以前のお村行燈を持ち出來り、
お村　いえ、さう口綺麗には言はれまいぞえ。(トよき所へ住ふ。)
金助　や、さういふこなたは。(トびつくりなす、是より合方替つて、)
石齋　扨はお村が存ぜし者か。
お村　はい、此間車坂で此身に無體なことを言掛け、既に手籠めにしようとせし折、お巡り樣のおいでに驚き、池の中へ私を突落して迯げましたは、此の惡者でござりまする。
石齋　すりや原中で强姦せんと、迫りし者は此の者なるか。
佐兵　そんな奴故私に、言掛を致し居つたか、えゝ悔しいわえ〳〵。
ト佐兵衞泣く、丹作態と氣味の惡き思入にて、
丹作　これ兄貴、お前そんな覺えがあるか、よもや覺えはあるめえの。(ト此時金助思入あつて、)

金助　いゝや、己あ覺えがある、然もあの折車坂で、此御新造と色になつた。

丹作　これさ、何をそんなことをいふのだ。

金助　おゝ言はなくツてどうするものだ。（ト合方きつぱりとなり、）夜目にも光る差込は六分玉の金簪、拾つてやつたが縁となり、空も雨氣に薄暗い木影を幸ひ草原で、夜露に濡れた其果が一緒に迯げてくれろといへど、考へて見りや主ある女、濟まねえことゝ思つたから今夜の事は是限りに、夢と仕ようといつたらば添はれぬならば死んでしまふと、留めるも聞かず池の中へ飛込んだのを助けようと思ふ所へ巡査が來た故、見咎められては大變と後をば見ずに迯去つたが、いまだに其時可愛いと言はれた聲が耳に殘り、實は尋ねてゐた御新造、分署で是を言立てれば間男故に丸一年、二人ながら懲役の所刑を受けにやあならねえ身の上、其一年の日數より何百圓といふ金で勤めを引かせた小紫に、赤い仕着を着せるのもあんまり出來たことでもねえ、其處を見込んで此方から、いやさ、其處を二言と此方では言はぬ替りの金轡、知らねえ顏をしてやるから、手切を出して詫びるがいゝ。（トづう〳〵しくいふ。お村悔しき思入にて、）

お村　えゝ、此身に覺えもない事を、密通せしと惡名附け、一緒に罪に落さうとはあきれ返つた言掛り旦那のお恥にならうとも、出る所へ出て身の明りを立てねば世間へ明日から顏向けがなりませぬ。

喜美　おゝ御尤もなお腹立、こんな事を言掛けて御身分のあるお方の方で、御迷惑をなすつたはそれは舊幕時代のこと、今は開化の世の中に人民保護のお巡りあれば、お呼び出しが一番だ。

佐兵　さういふことならわしが行つて。（ト立掛けるを、）

石齋　こりや佐兵衞、暫く待て。

佐兵　待てとお止めなされますのは、

石齋　心得違ひの無きやうに、篤と說諭を加へし上にて、上のお手數願ふであらう、先づ其方は控へて居やれ。（ト留める。）

佐兵　へい。（ト控へる。）

石齋　こりや金助とやら、よく承はれ。（ト誂への合方になり、）身受けし所其方も、未だ三十前後ならんが、後先見ずの了簡に此方覺えも無き事を密通せしと申し掛け、恥辱を與へて金圓をゆすり取らん巧みなるは、言を俟ぬ所なり、然れども其實路傍にて强姦仕掛けしことなれば、假令何樣申張るとも其筋に於て虛か實か活眼を以て見分くる時は、巧みし事は判然と知れるは邪正を糺す職掌、いかでか僞り果せんや、さある時は其方が口より爲せし罪を訴へ、長く苦役を致さにゃならぬがまことに愚なことなるぞ、それとも妻と密通せし、確と致した證據があるか。

金助　別に證據といふはねえが、口說落して草原で自由にした時御新造が初めに引替へ私に惚れ、逃げてくれと言つたが證據だ。

石齋　確とそれに相違ないな。

金助　其の馬鹿念には及ばねえ、張番をして側に見て居た、此の丹作が證人だ。

石齋　すりや其方が張番せしか。

丹作　お〻如何にも己が證人だ。

石齋　さすれば其方達兩人が、其身の罪は脫れぬぞ。

金助
丹作　え〻。（トぎつくり思入。）

石齋　さ此方にては妻なる者を路傍に於て己等に强姦されては耻辱故、止むを得ずして離別なし、暇を遣はす迄の事、其罪却つて其身に及ぼし苦役の所刑を受けるは目前、それでも密通せしと申すか。

丹作　さあ、それは。（トぶる〳〵震へ出す。）

石齋　こりや佐兵衞、分署へ參つて警部方に、御出張を願つて參れ。

佐兵　畏りましてござります。（ト立たうするを丹作留めて、）

丹作　あもし、分署へお出なさるのは、ちよつと待つておくんなせえ。

石齋　何故あつて留めるのだ。

丹作　いえ、安い奴だが今言つたは、みんな虚言でござります。

佐兵　それぢやあ今のは僞りか。

丹作　おゝ僞りとも〳〵、强淫しねえといふ事は、己が確な證人だ。

金助　えゝ、何を詰らねえことをいふのだ。

丹作　分署へ擔ぎ出されては、己が身分に拘はるから、それで言つてしまつたのだ。

金助　意氣地のねえ野郎だなあ。

石齋　然らば全く僞りか。

金助　此の野郎がべら〳〵と、しやべつてしまつた上からは、もう僞つても仕方がねえから、本音を吹いてしまひますが、實は其晩强淫をしようと思つた原中へ、お巡りが來て二人ともくらひこまねえ其内と、思ひを殘して逃げたのだ。

石齋　すりや其折に簪を再び扱取り我妻を、傍の池へ突落し、巡査に恐れて逃去りしか。

金助　其の夜車坂町で落した珠の簪を、拾つて遣つたことはあるが、拔いたことはありやあしねえ。

お村　いや、覺えないとは言はさせぬ。初手に扱いたを拾つたと言つたは此身に言ひ寄つて、無體を仕

掛けるおのれが巧み、それもお巡り樣のおいでにて、再び拔いて逃げたであらうが。

金助　こつちに覺えもねえことを、拔いたといふには證據があつてか。

石齋　おゝ證據といふは其方が、其夜拔いたる珠の簪、再び此方へ戾つて居るぞ。

金助　えゝ。（トびつくりする。）

石齋　それ、彼めに出して見せるがよい。

お村　はい。（ト手箱の內より前幕の簪を出して、）是が何より確な證據。

金助　どうしてそれが。（ト合點の行かぬ思入、此前瓦燈口より以前のお兼出で、窺ひゐて、）

お兼　もし金助さん、爰のお家で其樣なことを言つては濟むまいぞえ。

金助　や、お前はどうして爰の家に。（トびつくりする。是より合方替つて、）

お兼　わたしや此方の旦那樣が、五つの年から育てられた養育金をお出し下され、義理ある親父の手を放れ、思ひ思うた豐さんの御緣によつて二人とも御厄介になる此方のお家、お前が賣つた簪が不正な品と知れた故、元直で親父が旦那樣へお上げ申したあの簪。

佐兵　斯ういふ確な證人が、あつては最早脫れられぬ。

喜美　これだから一圓で了簡すりやあよかつたに。

丹作　仕方がねえから、これ兄貴、殼を踏んで歸りねえ。

金助　いゝや、たゞは歸られねえ、己も讃岐金助と肩書附の商法仕、姿を變へて化けて出る狢や狸の獸もの仲間で、頭と言はるゝ虎の門、其緣日の荒稼ぎ惡事千里を走つても、恐れぬ肚胸は是迄に素早い仕事の天狗小僧、金毘羅參りとごまかして掠め取つたる金の字の印しが證據の札附に、白の行衣も古くなり、東京府下を喰詰めて嘘を筑波や秋葉山、飛んで歩いて身を隱し、自由自在の此體へ疵を受け、そればつかりか自慢の鼻を曲げられちやあ、療治代でも充分に貰つたならば知らぬこと、唯此儘にやあ歸られねえ。

石齋　して又僅なかすり疵に、いくらほしいと申すのぢや。

金助　さうさ、いくらにしたものか、此方で相場を切出さう。(ト丹作氣の揉める思入にて、)

丹作　これ兄貴、斯うぐれはまに行つた時は、高いことを言はねえで、元直限り安く言ひねえ。

金助　えゝ、びく〳〵するにやあ及ばねえ。(ト思入あつて、)もし楠さん、成程お前の言ふ通り、額の疵は僅だが大金を出して身請をした、女房に疵が附く所を無疵で難を脱れるのが、何より一番直打だから、五十圓とも言ふとこだが、療治代の定價を引下げ、三十圓に負けてやらう。

お村　其療治代が三十圓とは。

佐兵　それでは私の給金を、三年引いてもまだ足りぬ。

喜美　是はあんまり相場違ひだ。（ト石齋思入あつて、）

石齋　いや三十圓でよいことなら、唯今直に遣はさう、お村手箱を持つて來やれ。

お村　はい。（ト後の袋戸棚より手箱を出し持つて來る、石齋箱の內より書附を出し、）

石齋　切符代りぢや、是を取りやれ。（ト出す、金助合點の行かぬ思入、開き見て、）

金助　や、此の請取りは。

石齋　お兼の養父泥藏より、再び求めし簪の三十圓の代價の請取、公債證書も同然な、それを遣つたら言分あるまい。

金助　いや、思召しは有難へが、是はお返し申しませう。（ト請取を返す。）

石齋　然らば證書はいらぬと申すか。

金助　えい、わつちも讃岐金助だ、是を貰つてすご〳〵と、空を踏んぢやあ歸られねえ。

石齋　して又、そちはどうする氣だ。

金助　やつぱり爰から強淫の、廉を言立て突出してくれ。

丹作　これさ兄貴、短氣を出さずと、今日の所は歸んねえ。

金助　いゝや、おらあ歸らねえ、さあ突出してくれ〳〵。（ト金助あばれるを喜美太夫留めて、

喜美　長く居るだけぼろが出るから、さあ〳〵歸つた〳〵。

ト丹作喜美太夫にて金助を無理に引張つて、枝折戸の外へ出す。金助喜美太夫の筒差の煙草入を拔く
喜美太夫は心附かず、技折戸をしめる。丹作は金助を無理に連れて花道へ行き、

丹作　これ兄貴、今日の樣に詰らなく、どぢをくんだことはねえ。

金助　愚痴をこぼすな、是を見ろ。（ト懷より煙草入を出して見せる。）

丹作　や、何處でそれを拔いたのだ。

金助　喜美太夫が差してゐる、筒差の金物が確に無垢と見込んだから、今歸りがけに拔いたのだ。

丹作　はゝあ、それぢやあ今のどさくさに、成程兄貴は素早いな。

金助　金物ばかりも十圓が直打はきつとある筒差し。

丹作　さういふ仕事をした上は、

金助　氣の附かねえ内歸るとせう。

ト誂へ端唄の合方になり、兩人足早に花道へはひる。佐兵衞しを〳〵と前へ出て、

佐兵　旦那樣、飛んだ麁相を致しまして、申譯がござりませぬ。

喜美　これが所謂通り惡魔、先づ大難を小難で相濟みましたお目出たに、佐兵衛殿の不調法は、どうぞ御勘辨下さいまし。

お村　喜美太夫さんもあのやうに、共々お詫をいたしますから、

お兼　佐兵衛殿の不調法は、

佐兵　お許しなされて、

四人　下さりませ。

石齋　いや、佐兵衛の罪は問ふに及ばず、必ず心配せぬがよい。

佐兵　そんならお許し下さいますとか、是と申すも皆様のお蔭、有難涙がこぼれます。（ト嬉し泣に泣く。）

喜美　扨旦那樣に伺ひますが、どういふ譯で此樣なお裝をなさいましたのか、まことに合點がまゐりませぬ。

お村　こりや喜美さんでも知れますまい。

喜美　いえ、わたくしばかりぢやござりませぬ、誰でも是は分りませぬ。

石齋　不審に思ふは尤もなり、斯樣な出立を致せしは、斯う言ふ譯ぢや聞いてくりやれ。（ト誂への合方になり。）最前是にて申せし通り、僕の祖先は河内の國千早の里の鄕士にて則楠家の別れ、故正成

公の眞像を名譽の奇工に彫刻させ、湊川の遙拜所を我庭中へ造營なさんと、思ひ立ちしも適當の良工無き故打過ぎしが、肥後熊本の產にして今有名の木像師、彼安本龜八叟は人の面を活けるが如く寫すに妙を得たる故、前に神戸の知己よりして正成公の眞像を寫眞に取りしを僕方へ、贈られしを手本となし、龜八叟へ眞像の彫刻の儀を依賴せしに、寫眞のみでは其形眞に迫り難しと言ふ故、いつぞや芝の劇場で楠公記を演ぜしを、思ひ出して衣裳小道具、團洲方より借受けて今日一日我祖先正成公に出立しは、其形容を寫させんと安本來るを待つ所へ、今の二人が亂暴にも濫に圍ひへ入りし故、開化の御代に鎧附太刀、俳優ならで斯樣な裝を致す者の非ざれば、不審に思ふは尤もなるぞ。

喜美　左樣なこと〻は存じませず、あなたの今日のおこしらへには、さつぱり勘が附きませなんだ。

佐兵　其彫刻に遣ふ木の、枯してあつたを二階から、わしが落して此騷ぎ。

お村　さうとは知らず奧の間で、讀みし軍書も太平記、

お兼　又梅干の御無心に、臥龍といふも由緣ある、

石齋　それは孔明、楠は立籠りたる四疊半、

喜美　何れ堅固なお住居に、

佐兵　掛取りなどは責寄せねど、

お村　間者に等しきあの二人、

お粂　ゆする積りで參りしも、

石齋　三十圓の請返りで追歸せしは我計略。（ト此時喜美太夫腰の廻りを探り見て、）

喜美　や、こりや煙草入を分捕りされしたか。

お村　そんなら、今の、

お粂
佐兵　惡者に、

石齋　まことに油斷は、（ト附けたる太刀を取つて脇へ置くを道具替りの知らせ、）大敵ぢやわえ。

ト皆々引張の見得宜しく、雪おろしにて道具廻る。

（元の入口の場）＝＝本舞臺元の入口の道具へ戻り、雪下しにて留まる。と床の淨瑠璃になり、

〽鐘の音も降積む雪に埋もれて、常より遠き上野裏、笹の根岸の下通り辿る六浦は世に落ちて破れし傘に身を覆ひ、我子を肌に温め鳥、賴む木陰も白妙の軒を目當に夜の道、心細くも佇みて、

ト此内雪下し、日覆より雪を降らし、よき程に本釣鐘を打ち込み、花道より前幕の正三郎破れ傘をさし、古下駄を履き抱兒を抱き出來り、花道に留り

正三 誰やらが句であつたが、同じ垣根の幾曲りと、常さへ道の知れ難き初音の里に夜の雪、ほとんと困ることではある。いや困るといへば眼病で久しく難儀致せしが、二三日跡に練塀町の桐淵氏へ治療を乞ひしに流石名醫の良劑とて、僅の内に快氣に至り白き物は毒といへる此雪中に兩眼明き自由に歩行の出來るといふは、愁ひの中の悦びぢやなあ。

〽肌へを通す寒風に、身内も凍り幼兒が泣くをいたはりやう〱と、門の外面へ歩み來て、

ト此内抱兒泣くをいたはりながら舞臺へ來り、四邊を見て、

垣の内より二階家の見える家が、楠氏と、跡の酒屋で教へくれしが、二階の見えるは此家ばかり

〽樞へ立寄り表札を雪明りに透し見て、（ト正三郎門の際へ來て表札を見て、）

おゝ姓名記せし門の表札、此家に相違非ざれば、是へ便つて正太郎を捨つるも不便なことなれどまことに是非も無き事ぢや。（ト床の合方になり、）此程計らず淺草で、出會し時に零落せしを見かねて惠みし厚意を謝せず、門へ捨てたことならば押附業なる致し方と見下げられんは必定ながら、惠みくれたる金圓を掠め取られし上からは、手當なければ遣はし難く、殊には此身の豫ての志願

も、早明日に迫りし故、足手纏ひの正太郎唯一思ひに差殺し、跡の愁ひを除かんと既に決心なせしかど、いつぞや當所芋坂にて、浪が自殺の其砌り、假令男の手一ツでも、屹度養育致さんと誓ひし詞に殺し兼ね、子の恩愛に引かされて捨てんと是迄來れども、恩を仇に又候や迷惑掛けるも本意ならず、是を思へば捨てるより、心を鬼に差殺し我も一命捨つる身に、共に冥土へ連行かん。

〽さうぢや〳〵と打點頭き、引返せしが立留り、(ト正三郎思入あつて花道へ行掛けて、)

いや〳〵それではあの世から、嘸かし浪が恨むであらう、それを思へば殺されず、又小紫が義理を思へば、捨て行くにも行かれぬ仕儀、こりや如何したものなるか。

〽行きつ戻りつ二筋の、生死の道に踏迷ふ子故の闇も降る雪を、便となして來る人に、六浦は木蔭に身を忍ぶ、それと知らねば植木屋が、酒の機嫌の高調子、

ト此内正三郎行きつ戻りつ思案に餘る思入、よき程に上手にて人音する故、下手植込の蔭へ隠れる。

爰へ上手より、幕明の植木屋二人酒に醉ひたるこなしにて出來り、

幸藏　おい音松、今方打つたのは何時だらう。

音松　ありやあ確に上野の十時だ。

幸藏　十時ならいゝけれど、今勘定をして見たら、十三打つたから十三時だ。

音松　十三時といふがあるものか、三つ餘計に鐘を打つのは、ありやあ捨鐘といふものだ。
幸藏　己が何も知らねえと思つて、理窟の分らねえことを言ふが、捨鐘といふのはどういふ譯だ。
音松　何時と限らず、初手の三つは、捨鐘といつて數へ入れず、跡を何時と勘定するのだ。
幸藏　それでは三つは捨てるのか、己アさつぱり知らなんだ。
音松　手前も年中錢が無く、ピイ〳〵言つて困つて居るが、酒と女ともう一つ、あの三つを捨てにやあいかねえ。
幸藏　飯より好きだが賽事と女は隨分捨られるが、三つの内で酒ばかりはどうも己あ捨てられねえ。
音松　捨てられねえ所を思ひ切つて、捨てにやあ人になられねえ。
幸藏　それぢやあ酒も捨てるとしよう。
音松　それがい〻〳〵。（ト雪下しにて兩人花道へはひる。）
　〽跡見送りて正三郎、時に取つての辻占に、（ト下手の木蔭より正三郎出て、）
正三　今此所を通行せし二人の者が餘所事の話を時の辻占と、決定なせば捨鐘の三つは産兒の三ケ月、殊更十字の四つ辻にて身の辻占を聞く上は、假令曲りし横道の父は捨兒をいたすとも、直なる道の情ある善者に拾はれ成長なさば、やがてぞ廣き往還へも出らる〻樣に相成りて、牛にも馬にも

踏まれぬやうに、獨立なすに疑ひなし、妨げなきうちさうぢや〳〵。

〽吾に答へて吾に問ひ、捨つる我子は今生の別れと知らず餘念なき、寐顏を見るも雪明り、眼には時雨の憂き涙、霜よけ取つて門口の隅へ打敷き幼兒を、おろせばさすが父の肌離れ難なく泣く小兒、見付けられじと抱上げて、四五軒先きへ雪の中しめる聲さへ憚りて、

ト此内正三郎宜しく思入あつて、下手生垣の間より霜除の藁を引出し、門の庇の下へしき、抱兒を此上へ寐かすと泣出す故、びつくりして抱上げ、花道の方へ行きいぶり附けながら、

おゝ、たがよく〳〵。

〽寐ん〳〵よう、寐ん〳〵よう、寐ん〳〵轉りと眠る子は、是が一世の憂別れ、

ト此内子を寐かす思入あつて、

あゝ蟲が知らすか子心にも泣くは尤も、此父はあるに甲斐なき浮浪の身、たつた一人の小兒をも捨つるといふは心の鬼、かゝる邪險な此父を慕ひくれるか不便やなあ。

〽心弱くてかなはじと再び戻る門口へ、子を抱きおろせば又泣出す聲に子犬もなき立るを合點行かずと門内より、立出る人や足音に親は木蔭に窺ひるる、佐兵衛はあたり見廻して、

ト此内正三郎宜しくこなし、此内赤兒泣き門の内にて洋犬の聲する、抱兒を藁の上へ寐かし、下手へ

隱れる。門の潜りを明けて、以前の佐兵衞出て、

佐兵　何ぼわしが泣男だといつて、門の内では洋犬が泣き門の外では赤兒が泣く、こんなに泣かれる晩は無いが、家の御新造の乳の張るを近所の人が聞及び、乳貰ひにでも來たか。

〽折しも傍で泣出す幼兒、（ト又抱兒泣く、佐兵衞びつくりして、）

や、こりやさつきから泣いた筈、お家の門に捨てゝあるのだ、今度はまさか拾つたとて、ゆすり衒りに來もせまい、ドレ〳〵抱いて遣りませう。

〽もろき涙も慈悲深く泣く兒いたはり抱上げて、雪の明りによく〳〵見て、（ト抱上げて、）

こりや色白で、とんだいゝ子だ、早くお奥へお目に掛けよう。

〽門の内へと入る跡を、木蔭に忍び正三郎、篤と見すまし立出て、

ト佐兵衞は子を抱き門の内へはひる。下手の木蔭より正三郎出て、花道へ行き門の方へ向ひ、

正三　何卒養育、（ト手を合せるを道具替りの知らせ、）頼みまする。

〽跡を案じて、

ト床の三重雪下しにて、正三郎花道へはひる、是と一時に道具廻る。

(元の座敷)══本舞臺元の座敷の道具、爰に以前の石齋常の羽織着流しにて火鉢へ鍋を掛け、お村と酒を呑み居る、四邊に酒道具を並べ、お靜酌をして居る。此見得端唄の合方にて道具留る。

お村　いえ泊めませうと存じましたが、今宵は是非とも歸らねば都合が惡いと申します故、歸しましてございます。

石齋　此の大雪では吉原へ歸宅をしても暇であらうに、あの喜美太夫も歸らずと宅へ一泊致せばよいに。

石齋　取られた代りに遣はした、煙草入は氣に入つたかな。

お村　自分の持つて居りましたのより、大そうよいと申しまして、嬉しがつて歸りました。

お靜　それに安本龜八さんも、明日上ると申しまして、歸られましてござります。

石齋　祖先の像を彫刻さすに、先刻の樣な邪魔あつては何とやら心障り、明日更に身を淨め、又裝束を附けると致さう。

お村　それが宜しうござりまする。

ト爰へ下手より、佐兵衞子を抱き出來り、

佐兵　もし御新造樣、可愛さうなことがござりまする。

お村　なに、可愛さうなことがあるとは。

佐兵　御門の外で子が泣きます故、不思議なことだと思ひまして、出て見ましたら片隅に、斯樣な捨兒がござりました。

お村　そんなら其子が門前に。

石齋　それは近頃愍然なことぢや、當今有志の慈善者集り、捨兒養育の法を立て、開化に進む此時節、どれ〳〵是へ見せるがよい。

佐兵　へい〳〵、御覽下さりませ。（ト佐兵衞子を出す、石齋抱取り此時抱兒泣くを搖りながら、）

石齋　こりや色白なよい小兒ぢや、男子か女子か、其方は知らぬか。

佐兵　へい、唯今小水を遣りましたが、椎の實の方でござります。

お村　こんな可愛い子を捨てるは、よく〳〵なことでござりませうが、捨てられましては掛り合ひ、お屆けせずばなりますまい。

お靜　今宵の内に外の所へ、そつとやつて置きましたら、お掛り合ひになりますまいに。

佐兵　こりや又佐兵衞が不調法を、仕出かしましてござりまする。（ト石齋思入あつて、）

石齋　いや不調法なことは無い、われも豫々家督を讓る男子無きを憂ひし折から、村が懷姙致せしを悅び居りし甲斐もなく、十月を待つて安々と出產なせし其小兒は、驚風故にはかなく死去なし、遺

憾に思ふ其所へわが門前へ捨てられしは、是ぞ天より授かりし一子なりと思ふ故、幸ひ村に乳もあれば上へ願つて養子となし、われは育てゝ遣り度く思ふが、其方はこれを如何思ふぞ。

お村 いえわたくしにおきましては、何の否やがござりませう、左様なされて下さりますれば、此子を捨てし親達も、嘸悦ぶでござりませう。

佐兵 それで佐兵衛も願ひ通りに、よい善根が出來まする。

石齋 村が承知の上からは、小兒は其方へ引渡さう。

お靜 此方へお出し下さりませ。（トお靜抱取り顏を見て、）や、此お子は、（トびつくりする。お村も見て、）

お村 おゝ、ほんに是れは。（ト驚く。爰へ奥より二幕目の豊三郎、お兼附いて出て、）

豊三 承はれば御門前に、捨兒がありましたさうでござりまするな。

お兼 どんなお子でござりますか、お見せなすつて下さいまし。

佐兵 おゝ、お二人さん御覽なさい、玉のやうな男の子でござります。（ト是にて豊三郎お兼捨兒を見て、）

豊三 成程是はよい器量だ。

お兼 早くわたしも此樣な、子供がほしうござります。

石齋 いや、そちら夫婦は年若なれば幾らもこれから儲けられるが、僕は子縁が薄さうゆゑ屆けを致し

て其小兒を、我長男にする積りぢや。

豊三 それは何よりよい御功德、捨兒を致す親達は、其所のお家で拾ひ上げ育てゝ貰ふが望みとやら。

お兼 御新造樣にお乳のあるのを、知つた者かも知れませぬ。

石齋 僕も左樣と目的附け、養子に致す氣になつた。

佐兵 身を捨てこそ浮む瀨と、却つて其子は捨てられて、大仕合せになりました。

石齋 是にて村も張る乳の、乔手が出來てよいではないか。（ト此內お村ぢつと思ひ入あつて、）

お村 其子はあなたに對しまして、育てることがなりませぬ。

石齋 なに、僕へ對してならぬとは。

豊三 どういふ譯でござります。（ト合方きつぱりとなり、）

お村 さあ、何にお隱し申しませう、まだわたくしが吉原に勤めを致して居る時分、四五度通ひしお客の子故、それと存じてをりますのは、此程淺草の奧山で其お方にお目にかゝり、見れば以前と事變り世に零落し御樣子にて、貧苦に迫るお話しをお聞き申すもお氣の毒故、頭の物でも買ふがよいと、お貰ひ申したお金の內を十圓お惠み申しましたが、其節此方に居る事をお話し申しました故、それを存じて門へ捨て育てゝくれとわたくしへ、賴みますのでござりませうが、後日に是

が知れましては、あなたへ對して濟みませぬ。

石齋 いやそれなれば猶以て、養育致してやらねばならぬ。

豐三 それではあなたは御新造の、以前のお客と御存じでも、

お粂 此のお子さんを御養子に、なさいますでござりますか。

佐兵 十圓惠むお心では、若しや間夫ではござりませぬか。

石齋 假令以前の間夫にも致せ、馴染の客の小兒とあれば、他人の樣には思はれず、また村とても事柄を僕に包まず打明し、話しくれたる上からは、それにて胸中明かなり、其義理立には及ばぬゆゑ、改めて其方に頼めば、養育致してやつてくりやれ。

お村 其のお頼みがござりますれば、育てますでござりますが、十圓惠みし其折に金子を添へて何れへか、此小兒を遣はしますと申しましたる詞と違ひ、捨兒をいたしまするとは、いかに貧苦に迫りしとて押附業の仕方ゆゑ、どうも心が濟みませぬ。

お靜 それとも是なるお子樣に、何ぞ添へてはござりませぬか。

佐兵 拾つた儘ゆゑお靜どの、よく改めて見て下さい。

お靜 棄てる程故お金などは、所詮添へてはありますまい。(ト抱兒の懷を改め、手紙を取出し、)旦那樣、

斯樣な物がござりました。（ト出す、石齋受取り、）

石齋　お村、灯しを是れへ。（ト合方になり、お村燭臺を出す、石齋手紙を開封なし、思入あつて手紙を讀む、）「落目を救ふ淺からぬ深き惠みの信義に縋り、折入つて小紫どのへ御賴み申し度き次第、恥を忍びて書遺し候、陳者此程淺草に於て思ひ掛なくお目に掛り、以前に替る我姿に浪々中の難儀を察し、一子誕生の祝ひとして金圓の惠みに預り、汗顏の至りながら折角の志しを悖り候も本意ならず、殊には窮迫の折柄ゆゑ忝なく受納致し、早速其金圓を以て一子を他家へ可遣と口入の者へ賴みし所、よく／＼薄命極りしか其夜止宿にて療治を賴みし盲人に金圓を掠め取られ、ほとんと當惑致し候は豫ての志願時來つて明日達する事に及び、差向難儀は一子が身の上他家へ遣す手當なく切害致し候はんと、覺悟を極め候へども、燒野の雉子夜の鶴子を思ふの念捨て難く、據なくお見掛け申し一子を助け下さる樣只管お賴み申し候、定めて押付がましき事と思召しも候半が、捨難き恩愛の親子の情を酌分られ、養育被成下候はゞ大慶至極に存じ候、然しながら御連合石齋君の思召も計り難く、若御迷惑に成候はゞ何方へなりとも御遣し可被下候、世の物笑ひとなり候も承知致し候へども、唯々一命助け度く子に迷ふ親心御推察下され御取計ひ賴み入り候、我事も志願に依て相果て候心得故、泉下へ參つて愚妻にも御厚意を申聞け再生の時を待て厚く

謝し可申候。」

ト石齋手紙を讀終る。佐兵衛是を聞いてワツと泣出す。皆々愁ひの思入にて、

お村　扨は此程淺草にて、惠みし金子を盜まれしとか。

豊三　して、又小兒の御實父は、

お兼　いかなるお方でござりまする。

石齋　定めて是に記してござらう。（ト末を開き見て、）「楠氏御内室小紫どのへ、六浦正三郎。」

ト讀み是を聞きお兼思入あつて、

お兼　思ひ掛ない事なるが、若しや六浦といふお人は、丸の内に雁金の紋を附けては居られませぬか。

お村　はい、以前廓の大金へ四五度お出の其時に、羽織の紋は覺えある丸の内に二つ雁金、

ト此内お靜抱子の着物の紋の附きし繈を見出し、

お靜　もし、其御紋は此お子の着物の繈にござります。（ト見せる。）

お兼　それでは此子は私が、別れ程經し兄さんの設けしお子に違ひない。（ト皆々びつくりなし、）

石齋　なに、お兼殿の、

皆々　兄御とは。（ト合方きつぱりとなり、）

お粂　何をお隱し申しませう、私ことは五つの年惡者に勾引され、既に女郎に賣られる所を義理ある親の泥藏殿がお金を出して貰ひ受け、育てられましてござりますが、一昨年死んだ母さんは氣立もやさしく私を可愛がつてくれましたが、死ぬる末期に守りの內の臍の緒書を出しまして、實は其方は士族の娘何れの御藩か知れねども、六浦正左衞門正忠二女と此通り記しあれば、是を證據に名乘合へと守袋をくれましたが、其巾着の紋所も丸に雁金でござります。

ト內懷より誂への巾着を出して見せる。

豐三　わたしも唯今先生が手紙の名宛を讀まれし時、扨はと思ひし六浦樣は、舊幕の頃三筋町で御徒士をお勤めなされたが、お組內での御內福其方の親の正左衞門樣は、元高崎の御藩中矢島兵太夫樣の御次男にて、養子においでなされしお方、矢島樣は我母の緣家故に子供の折一度上りしことがあつたが、五つの年に娘御が行方知れずになつたことは、母の話に聞きました。

お村　そんなら是なるお二人は、

佐兵　素性を名乘れば御親類、

お靜　繋がるお家といひながら、

石齋　まことに不思議な奇緣にて、捨てし小兒の添狀より別れ程經し同胞の、

お村　知れたる甲斐も情ない、其書置の様子では、明日は命を捨てるとやら、
豐三　それもどういふ譯なるか、疾にもお兼の實親が、六浦樣と知れたなら、
お兼　其の在所をもお尋ね申し、又お力にもなりませうに、親の恥ゆゑ豐さんにも、
佐兵　言はぬ遠慮が今となり、
お靜　却つてお惡うござりました。

ト爰へ下手より縫ぐるみの洋犬出來り、枝折戸の外にて以前金助が落せし叺煙草入をくはへ、緣端へ來るを見て、

石齋　やゝ、洋犬が何やらくはへて參つた。（ト佐兵衞件の煙草入を取り、）
佐兵　是はさつきの惡者めが、落して行つたに違ひない。
石齋　扨は先刻喜美太夫が、拔かれし跡へ身代りに、落して行きしものなるか。
お村　惡者故に段口に、不正な品でもござりませぬか。
豐三　あつては此方の御迷惑、
お兼　よくお改めなされませ。（ト是にて佐兵衞段口より證書を出し、）
佐兵　外には何もござりませぬが、こんな書附がござりました。（ト出すを、豐三郎手早く開き見て、）

豐三　おゝ、こりやこれいつぞや三枚橋にて、掠め取られし紙入の、中にあつたる大事の證書。
お粂　それではさつきの相掏が、盗んだ奴でございましたか。
石齋　思ひがけなく五百圓の、證書が手に入る上からは、
お村　それをお詫の種となし、御歸參なさるによいお土産、
佐兵　又旦那樣が假親で、お嫁にござる娘御も、
お靜　元を糺せば御緣家故、御遠慮なさることもなく、
豐三　其悅びに引替へて、六浦の御當主正三郎樣。
お粂　いかなる願ひでお命を、お捨てなさるゝことなるか。
お村　明日死すとの此の書置、
石齋　どうか在所を、
皆々　知りたいものぢや。（ト此時洋犬、褒美をねだるこなしにて頻りに吠える。）
石齋　褒美の催促承知致した。
お村　ほんに洋犬故五百圓の、
豐三　證書が再び戻りし上は、

お兼　こりや澤山に御褒美を、
佐兵　洋犬に遣らずば、
お靜　なりますまい。
石齋　彼には牛が、

ト立掛る、洋犬は褒美をくれるかといふこなしにて、椽端へ首を載せる、石齋額を撫でるを木の頭、

何よりぢや。

ト皆々引張の見得宜しく、雪下し合方にて、

ひやうし幕

五幕目　入谷杉田宅の場

〔役名――楠石齋、讃岐金助、六浦正三郎、杉田薫、痣の與七、下男佐兵衛、差配人五郎兵衛。宗庵女房お豊、杉田母おなぎ、お竹、其他。〕

(坂本村杉田寓居の場)――本舞臺四間常足の二重、八枚飾り、正面上手一間障子、此内病床の心、此次三尺の佛檀内に誂への佛具位牌を飾り、佛檀の前に小机續いて一間襖出這入り、下手地袋戸棚上の方跡へ下げて一間の附屋臺、三尺暖簾口、三尺中窓、雪隱の心手水場口へ竹椽をつけ、

四ツ目垣摺鉢の手水鉢、松の臺幹いつもの所技折戸の庭口、下の方九尺の貸長家、一間二枚戸明立て是へ貸店の札を張り、三尺戸上げ此上白壁、總て坂本杉田寓居の體。爰に差配人五郎兵衞羽織着流しにて煙草を呑み居る、下女お政前垂掛にて火鉢へ藥土瓶を掛け藥を煎じ居る、お朝お夕世話裝植木屋の娘にて、下手に住ひ向うを見て居る、この見得冬至の獅子の鳴物にて幕明く、跡合方通り神樂になり、

お朝　もし大家さま、まだ一月には間のあるのに、何で獅子が來ましたらうね。

五郎　お前方は知らないか、今日は冬至で獅子が來るのだ。

お朝　それでは今日はお醫者樣で、神農樣を祭る日でござりますか。

お夕　道理で向うの玄伯樣から、お雜煮をお貰ひ申しました。

お政　今年は冬至が去年より、遲い樣でござりますな。

五郎　馬鹿なことを言はつしやい、新曆になつてから、冬至は毎年十二月二十二日に極つて居るのだ。

お政　それでも去年より三日ばかり、早いかと思ひます。

五郎　まだそんなことをいふか、冬至が二十二日で節分が二月の三日だ。

お朝　もう一月に十日ばかり、少しも早く年を越して、

お夕　朝から毬や羽根をついて、遊びたうござんすな。

お政　遊びたいもないものだ、年中遊んで居なさるくせに。

五郎　もうよい加減にするがよい、そんな事を言合つて仕舞はいつでも喧嘩になるのだ。ときに此方の御病人は、少しづゝもよい方かな。

お政　お藥も此通り怠らずお上りなさいますが、兎角同じ樣でござります。

五郎　それは困つたものぢやな、お朝坊もお夕坊もよく此方のお家へ來るが、御病氣のお見舞か。

お朝　お父さんが出商ひにお母さんが忙しい故、毎日お見舞に上りますも、御病人がござりますのに、お手少なでござりますから。

お夕　何のお役にも立ちませぬが、お臺所のお手傳に二人が斯うして上ります。

五郎　それは〳〵奇特なことだ、よく働いて上げるがよい。

お政　いえ〳〵奇特なことはござりませぬ、毎日かゝさずおいでだけれど、御病氣見舞はほんの附たり、唯薫樣のお顏ばかり見て、何一つ私の手助けをしたことはござりませぬ。

五郎　はゝあ、それでは病氣見舞をかこつけ、息子殿を張りに來るのか。

お朝　いえ〳〵さうぢやござりませぬ、お母さんの名代に、御病人樣の撫でさすり。

お夕　又お藥や上り物のお世話に上りまするのを、よい加減なことを言はしやんせ。
五郎　世話をするにしろ張るにしろ、さうして毎日來るならばお前達に頼みがある、爰の隣りが明店故火の用心が惡いから、よく氣を附けて貰ひたい。
お朝　あい、どつで爰を通りますから、
お夕　氣を附けて上げませう。
ト誂への合方通り神樂になり、花道より薰羽織着流し下駄にて、手拭を提げ出來り、花道にて、
薰　今日は冬至で獅子が來たが、通り神樂はいつ聞いても春めいてよいものだ。（ト舞臺へ來り、）今歸りしぞ。（ト言ひながら内へはひる。娘兩人出迎ひ、）
お朝　薰樣お歸りなされませ。
お夕　長いお湯でござりましたな。
薰　けふは冬至で柚湯故、いつもより中が込み、それで遲くなつたのぢや。（ト下に居て、）是は五郎兵衞殿にはようおいでなされた。
五郎　御老母さまの御病氣をお見舞に上つたが、御同扁ださうでござります。嘸御心配でござりませう。
薰　毎度お尋ね下すつて有難うござります。是から寒中に向ひます故、どうか寒氣を受けぬ樣致した

うござります。

五郎　何でも暖かになるまでは、御用心なされませ、それに又油斷のならぬは、いつものことだが暮になると、こそ〳〵泥坊が多くなるから、是も御用心なされませ。

薫　だいぶ此節掏摸などは捕縛になつたと申す事だが、かの濱の眞砂にて兎角に盡きぬものでござる。

五郎　お上でもよくお手が廻り、下谷淺草で人も知つて居る目の窪んだ丹作に、猿藏勘次といふ掏摸が昨日三人共捕へられ、其外所々で何十人か、捕られたといふことだ。

お政　そんなに方々で捕られましたら、少しはすくなくなりましたらう。

お朝　私なども此間お夕さんと淺草の觀音樣へ行つた歸り、

お夕　廣徳寺前で二人とも簪を拔かれました。

五郎　取る奴も惡いけれど、取られる方も油斷があるゆゑ、何でも用心に如くはござりませぬ。

薫　それに近頃は惡い風で、不正な品を買ふものが立派な家である樣子。

五郎　あるどころではござりませぬ。元屑を買つて歩きました泥藏といふ古着屋は、世間晴れての贓品買。

お政　其泥藏といふ人は矢場へ娘を出しておいて、よい客を引掛けては金を取るといふ噂、

五郎　おゝ、さうとも〳〵わしが隣の屑買がさつきも來て話して行つたが、其娘は貰ひ子で上州邊のよい客へ金を取つて遣つたさうだが、直に家へ泥坊が入り、取つた金を取られた上、何か惡い買物の其引合で拘引され、事によつたら懲役になるであらうといふことだが、是等は所謂自業自得、惡いことをした果はよい事はございませぬ。

薫　おつしやる通り天網脱れず、必ず罰を蒙るを存じて居つて賊をなすは、歎かはしい事でござる。

五郎　今も皆に頼みましたが、隣が明いて居りますから、どうぞ氣を附けて下さりませ。

薫　それはお頼みがござらずとも、火の元萬端氣遣ひ故、手前方で氣を附け居ります。

五郎　以前お巡りをお勤め故、お前様がさうおつしやれば大安心でございます。先づ暮れぬ内私も柚湯へでも這入りせう。

薫　もうお歸りでございますか。

五郎　爰に長居を致しましたら、二人に箒をたてられませう。

お朝　何をおつしやり、

兩人　ますぞいな。

五郎　どれ湯へ這入つて來ませうか。（ト合方通り神樂にて五郎兵衞花道へはひる。）

薫　お前方も毎日々々手傳うてくれるは忝ないが、内にも用があらうから、もうお歸りが宜しからう。

お政　ほんに日暮は何處の家でも用の多いものでござんす、旦那樣もあゝおつしやれば、もうよい加減にお歸りなさい。

お朝　いえ〳〵内に用はござりませぬ、不斷お世話樣になります故、お母さんが上りまして、お臺所のお手傳を致しませねばなりませぬ。

お夕　御存じの通り二人ともお父さんが出商ひ故、お母さんが出られませぬから、何のお役にも立ちませぬが、お小間使ひと思召し、

お朝　お買物やお掃除にお使ひなされて下さりませ。

お政　其のお買物やお掃除は雇ひに參つたわたしの役、それも側から手助けをして下さるならよいけれど、旦那樣がおいでなさると、お顏ばかり見ておいでゆゑ、何ぞお頼み申しても有頂天で手に附かず、（ト いひ掛るを、）

薫　こりや〳〵お政、どうしたものだ、御親切に來て下さるを失敬なことを申すな。

お政　いえ、失敬ではござりませぬ、斯うして毎日おいでのは御親切の樣に見えますが、當があつてゞ

ございます。

薫　はてさて、左様な事を申さずと、其方は其方が役を致せ、藥は煎じ詰りはせぬか。

お政　まだ詰りは致しますまい。（ト土瓶の蓋を取つて見て、）是は大變、煎附に成りました。

薫　餘計なことへ口出し致し、今日其方が勤むべき役を疎かに致す故、藥を煎じ詰らしたわ。

お政　眞平御免下さりませ。

薫　直に仕替へて煎じやれ。

お政　畏りましてございます。今旦那様に叱られたもお前方がおいでゆゑ、早く歸つて下さりませ。

薫　まだ〳〵さやうなことを申すか。（トきつといつて、二人にむかひ、）お前方も暮れぬ内、早う内へ歸られよ。

お朝　御用がございませぬなら、お暇致すでございます。

お夕　憚りながら御隱居様へよろしくおつしやつて、

兩人　下さりませ。（ト兩人門口へ出て、）

お朝　もしお夕さん、あのお三どんは旦那様に、氣がある様子でござんすな。

お夕　ほんにそれゆゑわたしらが、毎日行くのを邪魔にします。

お朝　人の事より二人とも、お顔見たさに行くけれど、

お夕　あのお三どんに朝から晩迄、旦那樣のお顏を見せるは、

お朝　惜しいものでござんすなァ

ト合方通り神樂にて、お朝お夕花道へはひろ、薫は濡手拭を垣へ掛ける。お政は藥を仕替る、此内花道より三幕目のお豐、お竹和し裝下駄を履き出來り、花道へ留り思入あつて、

お竹　お母さん、旦那樣のお家は、茲らでござりますか。

お豐　今彼處で聞いたらば、向うのお家ぢやといふことぢや。

お竹　それでは早く行きませう。

お豐　行つたら行儀をよくしなよ。

お竹　あいく。（ト兩人舞臺へ來り門口へ立ち）

お豐　はい、御免なさつて下さりませ。

お政　はい、何方からおいでなさりました

お豐　旦那樣はお宅に居らせられますか。（ト薫是を聞き）

薫　さういふ聲は、（ト門口を見て）おゝお豐どのか。よく尋ねて參つたな。

お豐　此間よりあなた様へお禮に上りませうと存じましたが、御存じの夫が身の上、差入物を致しますので、取込みまして、存じながら御無沙汰を致しましてござります。
お政　左樣なれば旦那様には、御存じのお方でござりますか。
薫　おゝ、疾くより存じ居る者だ。
お政　それなら此方へ、お這入りなされませ。
お豐　御免なされて下さりませ。（ト合方になり兩人内へはひり、下手へ住ひ）
お竹　旦那様、此間は有難うござります。
薫　其方が参るを我母も、此間から待つて居られた。（ト上手へ向ひ）起居てでござりますか。
ト上手の障子を明ける。内に絹夜具を敷き老母おなぎ白髪鬘病ひ鉢卷、病人のこしらへにて寐て居る後に屏風立廻しあり、
なぎ　孝女が、母と参りました。
それはよく参りしぞ。（ト起返るを見て）
お豐　お休みなされて居らつしやりませ。
薫　寐てばかりも居られねば、心配致すに及ばぬ。

お豐　初めてお目通りを致しまするが、先達旦那樣よりお惠みを頂戴致し、それが御緣になりまして此程も夫宗助へ厚いお諭しを蒙りまして、有難う存じまする。

なぎ　お前方も不仕合せで、大層苦勞をしなさるさうだの。

お豐　定めて夫が不身持を、お聞き遊ばしましてござりませうが、心良からぬ人故に、わたくし初め娘迄難儀致して居りまする。

なぎ　其話も悴から此程委しく聞きました。

薫　共に難儀を致しながら、母を厚くいたはりまする、孝女は是れでござりまする。

　　　トお竹を前へ出す。

お竹　あなた樣の御不快は、如何でゐらせられますか、母もお案じ申上げます。

　　　ト手を附き辭儀をする。おなぎ感心せし思入にて、

なぎ　長い事故捗々しくよいといふではなけれども、少し宛もよい方ぢや、聞きしに勝るよい娘、確十一と申すことぢやの。

お豐　はい、左樣にござります。

なぎ　お前も苦勞をしなさるやうだが、もう十一に此子がなれば、辛抱するも少しの內、世の諺にもい

ふ通り、人は七轉び八起といへば、惡い後は必ずよいもの、假令夫は惡くとも、貞女孝女を憐みて天の惠みがありませう。

お豐　有難うございます、只今仰しやります通り、長らく難儀を致しますが、今日迄も親子の者が露命を繫いで居りますは、天のお惠みでござりまする。

薫　今聞けば宗庵方へ、差入物をせしと申すが、難儀な中でよく致せしぞ。

お豐　貯へと申しましては、あなた樣から頂戴致した三十錢限にござります故、いかゞ致さうと存じましたら、丹波屋の主人を初め安泊りの仲間の衆が親子の者を不便と思ひ、金子を集めてくれました故、心の儘に見舞物を遣はしましてござります。

薫　それも二人の心立が、よい故情を掛けるのぢや。

お豐　まことに有難いことでござりまする。

薫　六浦殿も樣子を聞き、驚かれたことであらうな。

お豐　取られた金は是非もないが、命が無いとは不便だと、おつしやいましてござります。

お竹　もし旦那樣、どう致してもわたくしの、父の命は助かりませぬか。

薫　人を害せし上からは、死刑になるは天下の大法、それも過つてしたことでもあらば、其情を酌み

一命助け、終身懲役になることは、先例あれど其方が父は、賊をなして害せしからは、所詮命は助からぬ。

お竹　助かりませずばもう一度、逢ひ度いものでござります。

薰　それは罪科の極りし上、願へば逢はれることなるぞ。

お竹　有難うござりまする。（ト此内おなぎ手文庫より細工物の包と札包を出し、）

なぎ　是は少しばかりなれど、母御への心附け、又此包は若い折御殿に勤めて居つた時、拵へた細工もの、文庫の底にあつた故、此間から此子が來たらやらうと思うて出しておいた。

ト包を出す、薰取次いでお豐に渡す。お豐頂いて、

お豐　これは〱お惠みに預りまして、有難うござりまする。（ト細工物の包みを開き見て、）是はまあ結構な品を下さりまして、これ其方は見たことはあるまいの。

お竹　初めて見ましてござります、御隱居樣、有難く頂戴致します。（ト細工物を頂く、）

薰　して今日は、何れへ參りしぞ。

お豐　此方樣へお禮に上り、子供の折お竹をばお草履取に致しましたから、歸り掛に鬼子母神樣へお參り申して歸ります。

なぎ　又此邊へ來た折には、遠慮なく寄つて下され。
お豐　一度お目見得致しますれば、是から度々上ります。
薫　それではもう歸られるか。
お豐　はい、暮れぬ内に參詣致し、歸りますでございます。
薫　如何さま道が惡い故、明るい内に歸るがよい。
お豐　左樣なれば御隱居樣、お寒さが强うございますれば、
お竹　お大事に遊ばしませ。
なぎ　又尋ねて來て下され。
お豐　是非上りますでございます。
薫　まだ雪がありさう故、降らぬ内に歸られよ。
お豐　お暇致しますでございます。（ト合方通り神樂にて兩人花道へはひろ。風の音になり）
薫　だいぶ風が出ましたから、暖かにお休みなさりませ。
なぎ　おゝ、少し横になりませう。（トおなぎ寐る、薫夜具を掛けるお政藥をはかり）
お政　丁度お藥が宜しうございます。（ト此時花道揚幕にて）

大勢　泥棒々々。

ト獅子の鳴物ばた〳〵になり、花道より若き男頬冠り三尺帯尻端折草履にて逃げて出來る。跡より丁稚巳之松散髪股引、尻端折紺の前垂にて追掛け出て來る。續いて跡より以前の差配人五郎兵衞、所の若い者照藏、喜四郎の二人追駈け來る、若き男躓き轉ぶを丁稚捕へる。

五郎　おゝ小僧、よくつかまへた〳〵。

若者　何も己あ盜みやあしねえ。

巳之　盜まぬことがあるものか、おいらの財布を手前が盜んだ。

若者　財布などを知るものかえ。（ト逃げにかゝるを皆々捕へ、）

照藏　もうおいら達が來りやあ逃しやあしねえ。

喜四　野郎め覺悟をしやあがれ。

若者　べらぼうめ、逃げろといつたつて逃げるものか。

ト右の鳴物にて、若き男を圍ひ舞臺へ來る、此内お政は藥を一間の内へ持つて來る、薫障子をしめ表の樣子を窺ふ。

五郎　これ小僧、手前は何處の小僧だ。

巳之　へい、わたくしは坂本の紙屋の小僧でござりますが、唯今此先の荒物屋から淺草紙の拂ひをば、三圓五十錢請取り與一兵衞ぢやございませんが、縞の財布へ入れまして急いで歸る後ろより、おいおい小僧と言はれたから、扨こそ定九郎と思ひましたら、唯取らうといふ巾着切りが、二つ玉の續け玉に私を打つていきなりに懷へ手を突込み、財布を取つて逃げますから、泥坊々々と一生懸命跡を追掛けて參りました。

五郎　なかなか口を達者に利く、しつかりとした小僧どんだ。

照藏　見れば小さい形をして、

喜四　よく此野郎をつかまへました。

巳之　さあ、盜んだ財布を早く出せ。

若者　そりやあ、手前人間違へだ、己あ取つた覺えはねえ。

巳之　なに、無い事があるものか。

五郎　これ、ぼんやりとした小僧なら、そんなことをいつて喰ふだらうが、大人もはだしな此の小僧、盜んだ財布を爰へ出して、あやまつたらば大目に見て、此儘手前を逃してやらう。

若者　いえお前さん迄さうおつしやいますが、實にわつちやあ取りませぬ、これ此の通り袂にも懷にも

ありやあしませぬ。（ト懐を明けて見せろ。）

照藏　そんなことをいつたつて、手前を此儘逃すものか。

喜四　まことに取らねえことならば、裸になつて振つて見せろ。

若者　なれといふならなりも仕ようが、往來中で裸になりやあ直に罰金を取られにやあならねえ、何處でもいゝから内へ這入り、裸になつて見せやせう。

巳之　それぢやあ爰の明店へ、はひつて裸になつて見せろ。

若者　おゝ見せねえでどうするものだ、其替り己が財布を持つて居にやあ片端から、どうするか見やあがれ。（ト言ひながら背中にある財布を、枝折戸の内へ投込む。）

黨　内へ何やら打込みしは、

お政　こんな財布でござります。（トお政財布を取上げろ、是を開いて、）

五郎　なに、財布がお内にござりますか。

お政　外から内へ投込みました。（ト財布を出す。五郎兵衞受取り、）

五郎　扨はおのれが打込んだな。

照藏　もう盗まねえとは、

喜四　言はさねえぞ。（ト取巻く。）

五郎　これ小僧、財布はこれか。

巳之　へい、此財布でござります。中に三圓五十錢あるのが證據でござります。

五郎　成程それに違ひない。財布は手前へ返してやるぞ。（ト財布を渡す。）

巳之　是れは皆様、有難うござります。

若者　それを返しやあ五分と五分、もう己に用はあるめえ。

照藏　おゝ、財布を取りやあ用はないが、

喜四　只歸すのも忌えましい。

若者　忌えましくばどうともしろ、くれへこんで行つたとこが、高の知れた己は竊盜、四十日か五十日赤い仕着を着りやあ濟むのだ。

五郎　てもふてぶてしい奴だなあ。

照藏
喜四　うぬ此儘に歸すものか。（ト兩人巾着切を引倒さうとして襟首を引据ろ、五郎兵衛襟の痣を見て、）

五郎　や、耳から襟へ此痣は。（ト是を聞き薰枝折戸から見る。巾着切はづうづうしく、）

若者　そもそもおれがお袋の腹へ宿つた其時に、惡事をしたか黒闇から明るい娑婆へおぎやあと出た、赤

兒に黒い此痣は、拔いても拔けぬ身の入墨、まだ駈出しの盗人だが、痣の與七と仲間でも少しは知れた晝拵ぎ。さあ突出すなら突出してくれ。（トきつと思入。）

五郎　あやまるならば大目に見て許してやらうと思つたが、さう不手勝手をいふからは、交番所へ連れて行つて引き渡すからさう思へ、己を唯の差配人だと手前は思つて居るだらうが、土地でも小口を利く己だ、顏の赤いで赤玉と爰ら近所で人に知られた、五郎兵衞といふ差配人、恐れ入谷とあやまつても、古い洒落ぢやあ許さねえぞ。

照藏　喜四　さあ、交番所へ一緒に來い。（ト與七を引立て連れて行かうとする。薰思入あつて、）

薰　何れも、暫く待つて下され。

五郎　さうおつしやるは杉田樣、なんでお留めなされまする。

薰　最前からの此場の樣子、逐一是にて承はつたが、ちと其者に問ひたいことが、ござれば暫くお待ち下され。

五郎　御用があるなら、待ちますから、

照藏　喜四　さあ、何なりとお尋ねなさい。（ト薰二重の端へ出て、）

薰　こりや痣の與七とやら、其方に尋ねたいことがある。（ト與七下に居て、）

與七　逢に見たことのないお方だが、尋ねたいとおつしやりますのは。

薫　其方當十月中下谷三枚橋にて、所持せし紙幣七十圓、按摩に奪はれしことあらうな。

與七　え、どうしてそれを御存じでござります。

薫　仔細あつて存じをるが、其方に相違ないか。

與七　金を取られた其上に、按摩に喉をしめられて三枚橋から川中へ、打込まれましてござりまする。

薫　扨はいよ／＼其方であつたか。

與七　四邊に人も居りませなんだが、どうしてあなたは此事を、御存じでござります。

五郎　それは御存じでおいでの筈だ、此旦那は此間迄お巡りをしておいでなすつた。

薫　こりやお政、鬼子母神に今來た二人が未だ居るかも知れざれば、其方參つて居つたなら、直に同道致して參れ。

お政　畏りましてござります。（トお政足早に花道へはひる。）

薫　して七十圓の其金は、其方が所有の金か。

與七　何をお匿し申しませう。其の七十圓は三枚橋ではからず主人の紙入を、拾ひましたが其中にあつた所から氣が替り、我物にして使はうと問はず語りを聞いて居つたか、按摩に金を取れた上喉を

しめられ川の中へ打込まれたも命があつてか、水が口へ這入つたので再び息を吹返し、やう〳〵陸へ上りましたが、疵持つ足に主人の宿へのめ〳〵其儘返り難く、少しの知邊を便りまして大森在に半月ばかり、世話になつて居りましたが、小遣錢に困る所から明巣を覘つて盜みを初め、遂にやあ惡徒の仲間へ這入り、襟の印に痣の與七と言はれる樣になりましたが、どうして旦那は此の事を御存じでござります。

薰 存じ居るのは其按摩の、妻子は勝れし貞婦孝女に、聊惠み遣はせしが緣となつて此間はからず按摩に出逢ひしが、以前汝が父方に雇奉公せし者にて、三枚橋で其方が襟の痣より主人と知り、此程先非後悔なし、死刑を受ける所存にて、身の惡行を自首致せしぞ。

與七 金を盜んだ按摩に逢つたら殺した意趣を返さうと、今日迄思つて居りましたが、主人と知つて身の惡事を訴へ出たとあるからは、此方の命が助かつては彼奴に命を捨てさせるも、可愛さうなことだなあ。

トばたく〳〵になり花道より、以前のお豐、お竹お政出來り、

お政 丁度道で逢ひましたから、直に同道いたしました。

お豐 道迄お人を下さりましたが、火急な御用でござりまするか。

薫　おゝ、呼びにやつたは外でもない、宗庵が命は助かるぞ。

お豊　え、そりやまあどういふ譯あつて。（ト驚く。）

薫　三枚橋にてしめ殺せし、主人の悴は達者で居るわ。

お豊　それでは命が助かりますか。して其お人は、何れに居ります。

薫　則ちそれなる若者なるぞ。（ト與七を敎へる、與七兩人を見て、）

與七　おゝ、お前達は山下通りへ、いつも出てゐる義太夫語り、親孝行と評判の娘の親父は按摩であつたか。

お豊　左樣なればお前さんが、夫が勤めた上州の穀屋の、御子息でござりますか。

與七　如何にもおらあ穀屋の悴で、然も同所の吳服店稻田の手代を勤めてゐた。

お竹　それでは耳から襟へ掛け、お前は痣がござりますか。

與七　又と二人世間にねえ、持つて產れた己が痣。（ト襟の痣を見せる。）

薫　本人存命なる上は、此趣きを分署へ訴へ、夫が命を早く助けえ。

お豊　再び此世で逢はれませぬと、思つた夫に逢はれますとは、

お竹　嬉しいことでござりまする。

與七　按摩は憎い奴だけれど、二人の者が可愛さうだ、どうで是から懲役に、なる體だから名乘つて出己が按摩を助けてやらう。

お豐
お竹　えゝ有難うございます。

五郎　斯ういふことになる上は、分署の勝手が知れまいから、二人を連れて行つてやらう。

照藏　此方は小僧が叱られぬ樣、

喜四　店迄送つてやりませう。

巳之　それは有難うございます。

薰　不思議なことより人一人、危ふい命を助かりしは、此上もないことなるぞ。

お豐　どうぞお前も心を入替へ、

與七　おゝ、一旦お上のお仕置受け、眞人間になりませう。

薰　斯くなる以上は、片時も早く、

與七　どれ、名乘つて出ませうか。

ト時の鐘合方にて、與七先にお豐、お竹、五郎兵衛、巳之松若い者二人附き花道へはひる。薰跡を見送り、

薫　今の間に日が暮れた、行燈を早く附けよ。

お政　畏りました。(ト お政奥へはひる。時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になる。)

〽冬の日の影の長さに引替へて、日あし短く夕陽もいつしか西へ入相に、人顏見えぬ黄昏時。

ト此内奥よりお政行燈を附け出て來る、薫は火打箱で火を打ち佛檀へ灯りを附ける。よきほどに花道より郵便の配達角燈を提げ、手紙を持出來り、門口にて、

配達　杉田といふは、此方でござるか。

お政　はい、左樣でござります。

配達　郵便、(ト手紙をお政へ渡す。)

〽携ふ狀を手渡しなし、元來し道へ引返す。(ト配達花道へ引返してはひる。)

お政　旦那樣、郵便が參りました。(ト狀を出す、薫取つて見て、)

薫　「杉田薫殿、六浦正三郎」禮狀なりと思ひしに、直覽と記しあるは、何か密事のことゝ見ゆる。

〽封押切つて行燈の燈心掻立て讀終り、是はとばかり驚きしが、下女が手前を憚りて仔細を胸に卷納め、

ト薫行燈を引寄せ、手紙の封を切り中を見て驚き、宜しく思入あつて手紙を卷き替て、

これ政、其方宿に用事あつて暇をくれと申せしが、幸ひ今宵は用もなし、今より直に参るがよい。

お政　それは有難うござります。少し手間取りますかも知れませぬが、お許しなされて下さりませ。

薫　若し暇が取れるなら、一泊致して明朝帰れ。

お政　なるたけ帰ります様に致しますが、若し遅くなりましたら、仰せに任せて宿へ泊り、明朝早く帰ります。

薫　おゝ、其方が随意に致せ。

お政　左様なれば暫しの間、お暇を頂戴致します。

〽下女はとつかは支度をなし、我身の宿へ急ぎ行く、薫は跡を見送りて、

トお政宜しくこなしあつて、花道へはひる。薫は跡を見送り、障子の側へ来り、

薫　母人お目覺でござりますか。

〽音なふ聲に障子をあけ、（トおなぎ障子を明け、）

なぎ　悴、六浦殿より参りたる、書翰は何の用なるぞ。

薫　只今御覧に入れませうと存じましたる此一通、それにて御覧下さりませ。（ト手紙を出す、）

なぎ　今宵政を宿へ遣はし、一泊せよと申附けしは六浦殿の其書翰に、何か仔細のあることゝ思へば猶

更早く見たいが、長の病氣に眼力衰へ、兎角に文字が霞んで見えねば其方讀んで聞してくりや。お察しの如く六浦が書翰は、思ひがけなき事件故、只今手前が讀上げてお聞かせ申すでござりまする。

薫　＼四邊を窺ひ聲ひそめ、（ト床の合方になり、薫四邊を窺ひ、正三郎の手紙をひらき、）

「乍略儀以短章申入候、其後御疎遠に打過候處此程不圖得拜晤大慶不斜候折柄、拙者盜難にあひ困苦一時に來りしも仁惠篤志の救助により急難遁れ候は、全く貴殿の御厚意故、奉拜謝候、隨て拙者儀御令父尊師の門下となり、多年槍劒の御指南受け遂に奧義之蒙免許須彌滄海に可比厚恩不致忘却候得共、不得止事情により三年以前於貴邸、尊師を奉弑候其節、貴殿には九州地方へ御旅行中故東京待御歸府之時敵と名乘て貴殿に被討身之大罪を可謝と、三ケ年間困窮を忍び所々御在所相尋候拙者の志願達候時來り、今宵貴宅へ推參致し恨刀の下に一命を失し相果候覺悟故、拙者の首級尊師御廟前へ被備御孝道可被達候、餘は期拜面可述申候。頓首、杉田薫殿、六浦正三郎。」

＼無念を忍び讀終れば、聞く母親は茫然と思ひ設けぬ事故に、暫し詞もなかりしが、

ト薫宜しく一通を讀む、おなぎ呆れし思入にて、

なぎ　夫を討ちし曲者は、何者の仕業なるか、更に手掛りあらざりしが、扨は六浦が仕業でありしか。

薫　如何なる遺恨あつてか知らねど、一度師弟の因を結び、廢刀の令出ざる前は神影流の奥義迄傳授を請けし身を以て、其師を暗殺致せしは見下げ果てたる正三郎、斯る無道の者とも知らず、此程出逢ひし其折に僅な金子に差支へ、困苦に迫るを見るに忍びず舊交の誼を以て金五圓惠み遣はし其場の恥辱を救ひしが、今日となり遺憾至極、是へ參らば一刀に彼を討つて亡父が、修羅の無念を晴らさせ申さん。

なぎ　師匠を害せし罪ある身に、人もなげなる郵書にて斯る事を申送るは、返すぐも憎き奴此心では正三郎も、如何なる巧みがあらうも知れねば、必ず悴油斷致すな。

薫　正三郎も父の門弟、流義は同じ神影流、假令伍角の手練たりとも、彼は師匠を暗殺なし我は亡父の復讐なり、邪正二つに何れへか天の冥助がござりませう、必ず勝利の疑ひなければ、母上お案じなさるゝな。

〽母を慰め佛檀より父の位牌を取出し、机上へ飾りて一禮なし、

ト薫佛檀より誂への位牌を出し、小机の上へ飾り、是へ向ひ思入あつて、

月光院殿薫山香樹居士、（ト辭儀をなし、）飼置く犬に手を喰るゝと世上の俚諺に申す如く、未幕府

盛んの折より、多年劍道御指南ありし我門下たる正三郎が、非道の刄に死亡めされ嘸御無念にござりませう、三ケ年が其間討つたる者を探索致せど更に手掛りあらざりしが、今日只今正三郎が暗殺なせしこと分り、今宵我家へ推參なすよし、果し狀を送りしからは是に待受け勝負を決し、後刻首級を御靈前へお手向け申すでござります。

ト位牌へ向ひ亡父の、無念を察し打歎けば、母も詞の尾に附いて、

なぎ　我身が長の此病氣も、元はといへば氣の結ぼれ、以前は夫も劍道の指南をせし故用ひられ、人にも一時尊敬されしが廢刀の令出てより、共に廢りし劍道もやうやく少し世に出て、やれ嬉しやと思ふ間もなく刄にかゝつてはかない最期、其時其方は九州路へ旅立なして留守といひ、賴みに思ふ門弟も皆散々に誰一人、訪ひ音信れる者もなく、世の薄情を託ち詫び、終にはそれが病となりしが、今日といふ今日敵が知れ、其方が本望遂げたらば必ず病も治るであらう。

熊　父は元より母上の此御病氣も彼が爲め、遺恨に遺恨を重ぬれば、今にも是へ來りなば、ずた〳〵に切りさいなみ、御鬱憤を晴らさせまする。

なぎ　それが何より追善供養、さはさりながら今の世に、久しく刀も仕舞ひ置けば、若しや銹でも出はせぬか、正三郎が來らぬ内、刀を出して改め見よ。

薫　當秋蟲干なせし折、拭ひ置いたる備前祐定、必ず錆は出ますまいが、寐刃を合せて置きませう。

〽戸棚の内より取出す澁紙包みの紐とく〱、鞘を拂つて拔放せば、身を寒からしむ氷の刄、薫は其身の腕試し二振三振打振れば、刀の光り時ならぬ空にきらめく稻光り、斯る事とも知らずして門へ來掛る石齋の、下男佐兵衞は見てびつくり、齒の根も合はぬ胴震ひ、

ト此内薫下手地袋戸棚より澁紙包の刀を出し、紐を解き刀を出し、切尖より鍔際迄改め見る。よきほどに下手より前幕の佐兵衞尻端折下駄にて弓張提灯を持出て出り、枝折戸より内を覗く。此途端薫上段に構へて打下す、佐兵衞びつくりして震へ出し、

佐兵　南無阿彌陀佛々々。

薫　や、誰やら表に。

〽手早く刀を鞘に納め、（ト刀を鞘に納め、）

其處に居るは、誰ぢや。

佐兵　せゝ石齋方より、まゝ參りました。

薫　おゝ、楠氏の男衆、何ぞ用事でござるか。

佐兵　こゝ今晩は、とゝ冬至で、鴨雜炊をこしらへましたから、ごゝ御寸暇がござりますなら、御入來

願ひます。

薫　折角のお招ぎながら、手前方へも客來あつて今宵は他出致し兼ぬれば、お斷り申上げます。

佐兵　かゝ畏りましてござります。

薫　貴樣は大層震へるが、瘧でも煩うて居るか。

佐兵　いえ、瘧ではござりませぬ、けんのんでござります。

薫　おゝ、眩暈か。

佐兵　いえ〳〵、けんのんでござります。

ト言ひ捨て佐兵衛はがた〳〵と、後をも見ずに立ち歸る。

トばた〳〵にて、佐兵衛駈出して下手へはひる。

薫　はてさて、分らぬ奴ではある。

なぎ　今の男は其方が、刀を拔いた所を見た故、それで震へたことであらう。

薫　如何さま、左樣でござりませう。（ト薫　三幕目の鉢植の梅を出し、）母上御覽なされませ、一二三日前に求めたる是なる梅は蕾のみにて、一夜明けずば開くまじと思ひの外に一二輪、冬至梅の名空しからず、今日花の開きしは、日頃の恨みを開く吉兆。

なぎ　薫と言へば其方が名も、幸ひ梅に因みあり、
薫　六浦に出逢はゞ魁の、先を取つて落花微塵に、
なぎ　父の敵を討取らば、世上へ譽の香も高く、
薫　今日ぞ薫が一世の晴、
なぎ　必ずともに油斷せず、
薫　本望遂げるでございます。先づ正三郎の參る迄、御病床でお休みなされ。
なぎ　寐ても寐られはせぬけれど、
薫　お氣をお休めなされませ。

〽母を病所へ誘ひて、灯しの用意致さんと、共に奥へぞ入りける。

ト薫　おなぎをいたはり、障子屋體へ入れ、思入あつて奥へはひる。

〽折から爰へうそ〳〵と、天狗小僧が忍び來て、

ト時の鐘、花道より、前幕の金助尻端折草履にて出來り、花道にて、

金助　仲間の奴等が狩込まれ、浮々しちやァ居られねえが、幾ら取つても傍から使ひ、物に仕ようとどめて置いた、證書も煙草入と一緒に落し、小遣錢もねえ仕末、それに昨夜夜明しをして、今日落附

いて寐ねえから、睡くツてぼんやりした、何處ぞで一寐入りしてえものだ。

〽つぶやきながら金助は、明家の門へ彳みて、（ト金助舞臺へ來り、明店を見て、）

むゝ、こりやいゝ所に貸店がある。宵の內爰へ寐て、夜更になつたら羽根を廣げ、天狗小僧も高飛に又秋葉へでも出掛けようか。

〽四邊窺ひ戶を押明け、心太くも忍び入る、（ト時の鐘にて金助下手明店の戶を明けてはひる。）

〽折柄燭臺携さへて、薰は奧より立出て、（ト奧より薰木の燭臺を持出來り、）

薰　最早參るに間もあるまじ、身支度なして正三郎が、尋ね來るを相待たん。

〽待つ間程なく正三郎は、一命捨てる身の覺悟、髮取揃へ湯浴なし、垢に汚れし衣類さへ昨日に替る出立にて、

ト花道より正三郎前幕のこしらへ、草履にて出來り、花道へ留り、

正三　昨夜窃に見て置きし杉田氏の今の住居、最前出せし郵便が疾に屆きし時刻なれば、嘸や我を待つてゞあらう。

〽夜目にもそれと目覺えの、枝折の門へ彳みて、

ト此內薰は下緒を取つて襷に掛け、此上へ羽織を着て身支度をする。正三郎は門口へ來り、

御免下され、杉田氏のお宅は、是でござるよな。

薫　如何にも、薫が宅でござるが、さ言ふ貴殿は六浦殿か。

正三　仰せの如く某は、六浦正三郎でござる。

薫　先刻郵書で手前方へ、御案内がござつた故、お待ち申して居りました。

正三　然らば、御免下さりませ。

〽威儀を正して内へ入り、末座に住ひ手を支へ、（ト誂への合方になり、）

正三　扨此程は久々にて、断琴の交はりなせし貴殿に親しくお目にかゝり、拙者が大慶之に過ぎず、殊更困苦に迫りしを、御仁恵の救助に預り、貴殿の御厚意を謝し申す。（ト辭儀をなす。）

薫　些細なことを其様に、厚く仰せくだされては、甚だ迷惑仕る。

〽心の内の怒りを忍べば、此方も詞を改めて、

正三　貴殿に面會なせし上申上げんと存ぜしかど、さながら申し兼ねますれば失禮ながら郵書を以て仔細を申上げてござる、多年劍道の御教授受けし大恩ある御親父を、止むを得ざる事情により拙者弑し申せし故、貴殿に名乘つて討たれんと、元より覺悟致せしかど九州地方へ赴かれ、御在所知れざるそれ故に、空しく月日を送りしが、今日御在所相知れて志願を貫く時來り、まことに大慶

至極なり、いざ正三郎が首級を討つて、御親父のお位牌へ、お手向けなされて下さりませ。

薫　殊勝なることながら、師弟の因みを結びたる我父を、又何故に御身は殺害致せしぞ、止むを得ざる其事情を、手前へ明して聞かされよ。

正三　御親父を討つたる事情、死すとも口外致すまじと臍を固めし正三郎、唯此儘にお討ち下されい。

薫　其事情を明かされねば、假令敵と言はるゝとも、手前は敵を討たざるぞ。

正三　すりや、手前を討たざるとか。

薫　討たるゝ所存にござるなら、速かに明かされるか。

正三　さあ、それは、

薫　明かれぬか。

正三　さあ、

薫　さあ、

兩人　さあ〳〵。

薫　疾く〳〵事情を明かしめされ。

正三　假令何様言はるゝとも、其儀は口外仕らぬ。

薫　さすれば手前も討たざるぞ。

〽〔兩士が爭ふ中の間より、病に惱む老母が立出で、（ト兩人思入、障子屋體よりおなぎ出て）

なぎ　正三郎が其譯を言はねば言はぬ迄のこと、夫を討ちしといふを證據に、なぜ敵をば討たざるぞ。

薫　假令敵と名乘るとも、斯る遺恨で討ちしといふ、仔細を聞かねば討たれませぬ。

なぎ　えゝ言甲斐なき忰、薫、親を討たれて其方は、無念にはあらざるか。

薫　無念にあらぬことはなけれど、

なぎ　そんならなぜに敵を討たぬ。

薫　さあ、それは、

なぎ　疾く〳〵討たぬか。

薫　さあ、

なぎ　討たぬは其業鈍くして、正三郎に恐れしか。

薫　まつたく以て。

なぎ　いや〳〵それに相違ない。神影流の奧義迄父が其方へ傳へしは、斯る時の爲なるに、正三郎に其業が劣る故に討たざるか、さりとは臆病未練な奴、女ながらも鄕左衞門が妻、其方が討たずば夫

の敵、やはか討たいでおくべきぞ。

〽差添取つて母親が老の一途に立上れど、病苦の勞れにたぢ〱〱、どうと轉びて咳入る
を介抱なせば拂ひ退け、身を震はして歎くをば、見るに忍びず正三郎、

ト此内文句の模樣、おなぎ薫宜しく、正三郎も見兼ねし思入にて、

正三　事情を聞かねば名乘るとも敵を討たぬと言はるゝは、さすがは杉田薫殿、近頃感心致してござる。
さるを母御に未練なりと言はるゝ貴殿の御心中、嘸や切なき事でござらう、死す共口外致すまじ
と豫て心に誓ひしかど、差當りたる此場の御難儀傍觀致し難ければ、包む仔細をお明し申さん。

薫　すりや某の心中を、察して明しくださるとか。

正三　厚恩受けし師を討ちしは、斯る品がござる故、

〽四邊見廻し腹巻より、帛紗包みの一巻取出し、

ト思入あつて懷中の胴巻より、誂への服紗包みの一巻を出し、

他見を憚る此一巻、それにて篤と御覽下され。

〽御覽あれと差出せば、薫は一巻押開き、始終を讀んで打驚き、扨は是故討ちしかと、はッ
とばかりに胸轟き、兎角詞もなか〱に、老は心も苛立ちて、

ト此内薫は燭臺を引寄せ一巻を開き見て、びつくりなす、おなぎは心急く思入にて、

なぎ　それにて仔細がわかりなば、父の敵を疾く〳〵討たぬか。

薫　いえ、此敵は討たれませぬ。

なぎ　なに、敵が討たれぬとは。

薫　母上、是を御覧下され。

〽差出す一巻母親は、篤と見やりて打驚き、共に詞は無かりけり。

ト薫一巻を出す、おなぎ開き見てびつくりなし、兩人顔を見合せ、

薫　母上、

なぎ　悴、

薫　なんと敵は討たれますまい。

なぎ　むゝ。

〽親子は顔を見合せて、ほツと吐息をつく鐘の響きも胸へ應へる折柄、門へ來掛る石齋が、内の樣子の氣遣はしく暫し彳み窺ひ居る。

トおなぎ薫ホツト思入、此内時の鐘。下手より石齋羽織着流し、駒下駄菊下の紋附きし手丸の提灯

を持ち、門口へ來り思入あつて、提灯を消し窺ひ居る。合方替り、正三郎思入あつて、

正三　三年以前我師には、御内室に召仕への下女下男を附けられて御親類へ遣はされ、其夜拙者をお呼びなされ、天下治亂の談話より大義の企てある事を竊に拙者へお明しあつて、同盟せよとお勸めなれど所謂嫉妬偏執の心よりして徒黨を集め、其趣意立たぬ無益の企て、御身の破滅と存ぜし故、再三再四お諫め申せど、更にそれをお用ひなく、最早近きに發する所存、其幸先に其方が得心せねば露顯の元、助け置かれぬ覺悟せよと我を討たんとなされし故、とても捨つる命なら天下の爲に捨つるに如かじと、須彌滄海の大恩ある我師を討つは勿體なけれど、世界の爲に換難く、止むを得ずして討つたる故、其元枯れて葉は散々連書に記せし者共は、皆九州へ落行きしが彼の地で討たれしことならん、其折是なる連書をば取隱せし故誰あつて、謀叛を知つたる者無ければ、我師の惡名流布致さず、露顯致さば御家名の汚れと存じ止むを得ず、拙者が殺害致してござる。

ト初めて明す正三郎が、忠孝厚き志し、聞いて親子は現在の敵ながらも討難く、薫は机上に飾りたる父の位牌へ打向ひ、

ト正三郎思入あつて言ふ。これを聞きおなぎはうつむき居る。薫は最前の位牌に向ひ、

薫　これ父上、何故あつて此樣な無益の企なされしぞ、是故實の親子なれど常に心が合ざれば、九州

地方は劍道の廢れざるを賴みとなし、我は先年彼地へ赴き宅に居らねば知らざりしが、六浦殿世になくばよしなき謀叛を發しられ、忽ち其身に賊名負ひ、末代杉田の家名の恥辱、是ぞ今日活路を失ふ浪士輩に煽動され、斯る企てなされしか。えゝ情なきことなるぞ。

ト位牌を以て口惜しき思入、

正三 先に此儀を打明かさば條理を立つる薰殿、我を敵と討たるまじ、さある時には師へ對し自殺致さにや相成らぬ、死するは元より覺悟なれど、とてものことに貴殿の手に掛りて死するが身の志願それ故仔細を明かさずに討たれし後に此一卷見られしならば師を討ちし身の言譯も立つ道理と、懷中致し居つたるが、貴殿の御難儀見るに忍びず、餘儀なく出せし其一卷、見ぬ昔しと思はれていざ薰殿我を討ち、其お位牌へお手向け下され。

薰 假令何と言はるゝとも、父の惡名隱すといひ、討つたは則ち天下の爲。何故御身を討たれうぞ。

正三 貴殿が討つてくだされずば、此場に於て切腹致さん。

薰 必ず早まりめさるゝな。

正三 然らば討つて下さるか。

薰 さあそれは、

正三　切腹なさうか。

薫　さあ、

正三　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

正三　討つて恨みを晴らして下され。

〽互に爭ふ義心と義心、果しもあらぬ門口に、始終を窺ふ石齋が、

ト薫正三郎爭ふ、門口に窺ふ石齋感心せし思入にて、

石齋　御兩所、暫くお待ちなされ。（ト内へはひる。薫見て、）

薫　さいふは楠石齋殿。

石齋　今宵冬至を祝さんと、漢學者流が一兩輩入來せし故酒宴を開き、妻がお世話になつたるが御緣となつて御懇意結べば、君を招待致さんと、先刻佐兵衛を上げしところ拔刀なしてをられしと申すは心得難き故、何か仔細のあることならんと、是へ參つて先刻より始終は木蔭で承はつた。

薫　なには兎もあれ、

なぎ　先づ〳〵是へ。

石齋　御免下され。（ト合方にて眞中へ住ふ。正三郎思入あつて、）
正三　扨は楠氏でござるよな、拙者は六浦正三郎と申す士族の果にござります、お目に掛るも面目ないは、先夜貴殿の門口へお見掛け申して一子を捨て、御迷惑を掛けたるは敵と名乘つて討たれまするに、足手纏ひにござる故、餘儀なく捨てし此身の大罪、何卒お許し下さりませ。
石齋　御尤もなる其のお頼み、委細承知致してござる。お村に由縁のある其許、乳のあるこそ幸ひ故、手前で養育致すでござる。
正三　御厚情の段忝なく存じまする。（トおなぎ思入あつて、）
なぎ　石齋樣へお願ひは、只今此場で兩人が討つといひ討たれぬといふ義理に柵らむ敵討ち、如何致してよからうやら。
薫　爭ふ者は中よりと、
正三　裁判なされて、
三人　下さりませ。（ト誂への合方になり、）
石齋　假令如何なる事故ありとも、人を害せば法律を受けねばならぬ六浦殿、尤も天下の爲故に訴へいでなば情を酌み、助命は必ず疑ひなし、又善にもせよ悪にもせよ杉田氏には父の仇討たねば孝道

立たざれども、敵討の禁令といひ討つに討たれぬ此場の仕儀、拔いたる刀を納むるには六浦殿の髻を切つて則ち首級に換へ、位牌へ手向けて孝を盡し、六浦殿には死すべき命を生延はりて出家となり、師匠の菩提を弔はれよ、僕は妻の緣により拾ひし一子を成長させ、六浦の家名を相續させん。

〽條理を立つる裁判に、人々安堵の思ひをなし、

黨　はゝ、殘る方なき御裁判、

正三　一同安心、

三人　致しました。（ト正三郎思ひ入あつて、）

正三　是に附いても不便なるは、非業な最期を遂げたる我妻、出家となつて師と共に、是も菩提を弔ひ得させん。

黨　非業な最期をなされしとは、

なぎ　如何なることでござりましたぞ。

正三　我師匠を討つたるを、野島傳治がそれと見留め、お浪に不義をいひ掛けて、得心なさねば訴人なすと、脅せし故に其身を汚し、我爲ながら言譯なしと、自害致して相果てました。

薫　すりや、お浪殿には自殺ありしか。
なぎ　はかなきことでありしよな。(ト此中下手明店より、以前の金助出て、)
金助　まつぴら御免下さりませ。(ト内へはひろ、皆々見て、)
薫　遂に見馴れぬ其方は、
石齋　此程宅へゆすりに參つた、
金助　讃岐金助にござります。
薫　近附にてもあらざるに、何用あつて參つたのだ。
金助　宵から隣の明店へ、忍び込んで寐て居ましたが、皆さん方のお話しを壁越しに聞きまして、成程まことの人間は、是でなけりやいけねえと、初めてわつちも目が覺めて、自首する心になつたに附け、六浦樣の人殺しを何卒讓つて下さりませ。
正三　緣も由緣も無きそちが、我身の科を讓りくれとは。
金助　貴方の御新造お浪樣を、強淫同樣弄んだ傳治はわつちが實の兄、今日といふ今日改心して、兄貴がなした罪亡し、申譯にあなたの科を、脊負つて行く氣でござります。
正三　扨は傳治が弟でありしか、志しは忝ないが、

薫　今開明の世の中に、人代りでは濟まざるぞ。

なぎ　然し其方も改心いたさば、

石齋　惡事を早く自首いたせ。

金助　訴へ出る氣でござります。

薫　按摩の宗庵、手代の與七、

石齋　今又爰に金助迄、

正三　皆善心に返りしは、

なぎ　此上もない悦びなり。

石齋　其悦びの第一は六浦氏の妹御を泥藏方より我貰ひ、上州高崎田町なる稻田の子息豐三郎へ嫁に遣す約束なしたり。

正三　すりや行方知れざる妹を、貴殿のお世話で上州の、

薫　稻田は名高き呉服店、

なぎ　其處へ御緣の極りしは、

金助　何から何迄、

ト此時下手より獅子舞の人數四人獅子を冠り出て、

四人　お目出度うござります。

ト獅子の囃子になり、獅子を舞ふ。皆々引張りの見得宜しく、賑かに、

ひやうし　幕

霜夜の鐘（終り）

木間星箱根鹿笛

第二番目は湯治場で聞書なせし一夕話然も所は小田原の海老屋の内で九郎兵衛が死ぬと偽り小夜衣から百圓借りし悪計の錆も研師の良助が嘶しに知れて十兵衛は不便に思ひ恵みし證文それを氣病に福住へおせんが連れて氣の保養情も厚き厚原より贈りし菓子に言許を反故になしたる紙包み甘く見られし新三郎が山猫おきつに欺されし深き巧みを岩淵が隱す桐油の山駕籠におさよが居るとは白雨の夕立めきし雨上り輝光刄の稲妻に谷へ散り込む血潮の紅葉流れ流れて深川で墓所を隣の寺門前鐘の音凄く怨靈が目前へ見える神經病開明の世になき事と弟與七が言ひ諭せど彼村正の殺氣にて我身を亡す一譚は湯元土産の獨樂ならで廻る因果の旅路の怪談

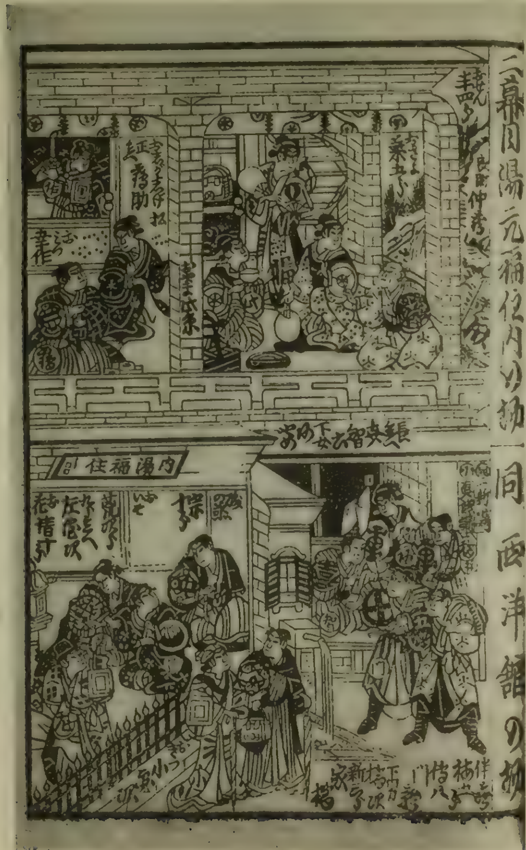
「木間星」は明治十三年十一月、作者六十五歳の時、新富座に於て書卸された。明治の新世界に材料を採つた、所謂散切物の代表作の一つである。舊時代の武士が士族として新世界に投げ出され、そこにさまざまな悲劇を生んだ。それを作者は好んで散切物の中に攝取してゐるが、此の作もそれが物語の骨子となつてゐる。菊五郎のおさよ、仲藏の良助も好評であつたが、左團次の九郎兵衞と小團次の藝者山猫おきつとが、大層なよい出來ばえであつたことが傳へられてゐる。殊におさよの亡靈が九郎兵衞の神經病として取扱はれてゐる點は、次第に西洋文明に影響されて來た世間の反映であるとも言へよう。

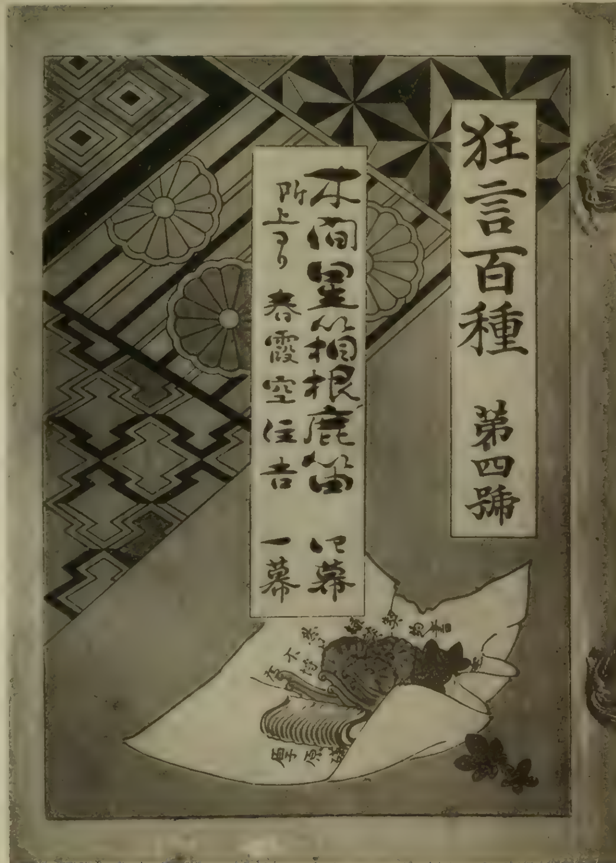
書卸しの時の役割は、尾上菊五郎(おさよ、葉茶屋與七)、市川左團次(士族岩淵九郎兵衞)、市川團十郎(海老屋十兵衞)、岩井半四郎(海老屋女房おせん)、中村宗十郎(厚原磯之進)、中村仲藏(研師鳴澤良助)、中村鶴藏(二階廻しちい〲お爪)、坂東家橘(浮島新三郎)、市川小團次(旅藝者山猫おきつ)、市川團右衞門(說經者倉澤願哲)、尾上梅五郎(黑瀨伴藏)、大谷門藏(相澤傳八)、中村鶴助(浮島の番頭正兵衞)、坂東喜知六(福住の番頭長兵衞)、澤村淸十郎(海老屋の娼妓おきよ)、尾上梅三郎(與七女房お咲)、岩井繁松(新三郎母おしが)等であつた。

挿畫にしたのは稿下當時の繪本の一部と、作者の意匠になつた狂言百種として刊行されたものゝ表紙である。

校訂者誌す

大正十四年二月


内湯福住


狂言百種　第四號
一幕

木間星箱根鹿笛（おさよの怪談―四幕）

序幕

小田原海老屋の場

〔役名―海老屋十兵衞、岩淵九郎兵衞、研師鳴澤良助、說敎者倉澤願哲、黑瀨伴藏、相澤傳八。海老屋の女房おせん、海老屋の娼妓おさよ實は九郎兵衞妻おさよ、內藝者おこま、おきよ、おなか、おみつ、ちい〳〵お爪、其他。〕

（海老屋の場）―本舞臺三間の間格子の書割、此前に丸太の手摺上へ二階の張物、上手一間入口破風の屋根、是へ瓦斯の釣出し、此正面跡へ下げて中足の二重海老屋と染めし短き暖簾、畫心に籬の書割、よき所に寫眞の看板、下手に用水桶此脇に瓦斯燈を立て、ずつと上下板塀、上手樹木の書割、總て小田原宿貸座敷見世先の體、爰に吾助大藏着流し若い者の打扮小ぢよく文を持ち立掛りゐる、此見得宿場騷ぎにて幕明く。

吾助　豆どん、何處へ遣る文だ。

まめ　是れをお龜さんが、いつもの湯屋へ使屋さんに、持たして遣つておくれと。

ト文を出す、吾助取つて見て、

吾助　葉茶屋の旦那の新三郎さんか、こりやあ遣つても無駄だのに。

まめ　何でもいゝから、やつておくれよ。

吾助　今に使屋が來たら持たしてやらう。

太藏　あの葉茶屋の新三郎さんは、やつぱりおいでなさらぬかえ。

吾助　こつちの内へおいでのないのは、此頃東京から稼ぎに來た、おきつといふ藝者に惚れて、木賀や湯本へ泊り込みに行きなさるといふことだ。

太藏　あすこの内も靜岡から湯場を當に支店を出したが、外の内より茶がいゝのに、秤目が安いから大層賣れる見世になつた。

吾助　何でも物がよくツて安くせえありやあ、不景氣だといつてもよく賣れる。

まめ　こつちの内のおさよさんも、それだから流行るのだね。

太藏　こまツちやくれたことをいふが、然し此子のいふ通り東京の吉原だつて、おさよさんの樣なのはありやあしねえ、實に宿場にやあ惜しいものだ。（ト吾助紅絞りの手拭を持つて居るを見て、）

まめ　吾助どん、お前の手拭は綺麗だね。

吾助　こりやあ紅屋のお客に貰つたのだ。
まめ　わたしにそれをおくれな。
吾助　どうして是を遣られるものだ。
まめ　それをわたしにおくれだと、いゝ話をするけれど、
吾助　なに、いゝ話とは。
まめ　おさよさんがお前ののろけを、大層言つて居なすつたから、
吾助　こう〳〵、そりやあ眞實か、何と言つてのろけて居たのだ。
まめ　それをおくれだと話すけれど、
太藏　飛んだとこで吾ス公も、胸ぐらを取られるな。
吾助　さあ、是を遣るから言つて聞かしな。（ト手拭を出す、お豆取つて懐へ入れ、）
まめ　人が聞くから、耳をおかし。
吾助　耳ツとうは御免だぜ。
まめ　そんな野暮なことをしますものか。（ト耳へ口を付ける。）
太藏　こいつアちつと氣が惡いわえ。

吾助　何だかさつぱり聞えねえぜ。

まめ　まだ何にも言はないのだ。

吾助　早くいつて聞かしてくんねえ。

まめ　あの吾助どんはね、

吾助　むゝ。

まめ　よつほど間拔な顏だね。（ト吾助を突倒して奧へ逃込む。）

吾助　えゝいめえましい、一ぺい喰つたか。

太藏　あんまりお前がのろいからだ。

ト賑やかな鳴物になり、花道より伴藏傳八着流し駒下駄蝙蝠傘を持ち、以前の士族と見えるこしらへにて出來り、

伴藏　何と相澤、愚なことを申す樣だが、二人共舊幕の盛んの頃に生れたから頑固だとか舊弊だとかよく人に言はれるが、昔はちよつと旅をするにも大小といふこけ脅しで渡し場立場は天窓を下げさせ、第一旅籠は本陣で隨分幅を利せたものだが、それを思ふと今の世界は、どうも己には氣に入らねえ。

傳八　さう一概にも言はれない、又いゝことも幾らもあるではないか。
伴藏　いゝことゝは、何があるのだ。
傳八　先づ第一が郵便に、それから電信陸蒸汽、ちよつとした早い話が、今朝新橋を乘出して神奈川へ着き、直に馬車で二十里ある小田原へ其日の內に來ると云のは、こりやあ以前に出來ねえ事だ。
伴藏　成程こなたのいふ通り、爰らは開化の進んだ所だ。
傳八　發明したらさあ行かう。（ト兩人舞臺へ來り、）
伴藏　爰が此頃賣出しの、海老屋といふ貸座敷だ。
傳八　成程話に聞いたより、大層爰はいゝ見世だ。（ト此內吾助太藏揉手をなし、）
吾助　よい子供衆をお見立遊ばして、如何樣で、お上り下さりませ。
太藏　綺麗なお座敷が明いて居りますが、如何さまで、お上り下さりませ。
伴藏　おい〳〵、何ぼ小田原だつてさういかゞさま〳〵といひなさんな、東京には本鄕に親玉があるぜ。
太藏　へゝゝ御常談もので、如何樣でお上り下さりませ。
傳八　上れ〳〵と勸めるが、此方は馴染の旅店があるのだ。
太藏　左樣でもござりませうが、一夜のお戲れに如何樣で、

伴藏　又如何樣か、しつこい男だ、とはいふものゝそれ程勸めるなら、湯元へ行つて泊るのだが、極手輕で遊ばせるなら上つてやらう。
吾助　それは有難うござりまする。極手輕に働きますれば、どうかお上り下さりませ。
傳八　是から湯元木賀底倉七湯を廻る積りだから、ぱツ〳〵と金が遣へねえが、其處はいゝかな。
太藏　宜しい段ではござりません。今日はほんの御緣繫ぎと致しまして。
伴藏　これさ〳〵、いゝ、ごえんつゞきでも四圓續きでも、此方は三圓も出せねえのだ、二人二圓で遊ばせるなら上つてやらう。
吾助　いえ二圓ならお釣を差上げます。
傳八　釣を貰ふにも及ばぬから、それより餘計は出さねえよ。
太藏　決して過分な御散財を、お掛け申しは致しませぬ。
吾助　お相方は新造衆に致しませうか、年增衆に致しませうか。
伴藏　其處はお前方に任せるから、程のいゝのを見立つてくんねえ。
兩人　畏りましてござります。
傳八　そこで地酒は御免だぜ。

吾助　宜しうございます、さあお上りなさいまし。お客だよ。

ト言ひながら伴藏傳八に吾助付いて奥へはひろ。跡に太藏履物へ札を付けながら、

太藏　今の客は東京だが、隨分締りの方ぢやあ指折だらう、然し東京だけ話の早いのが感心だ。

ト此時奥にて、

願哲　厭だ〳〵、歸るから履物を出せ〳〵。

ト騷ぎの鳴物になり、奥より願哲坊主甕法華坊主にて、女郎の浴衣しごきをしめ、是をお爪好の鬘二階廻しの打扮、大蓮、妙道同く出家の打扮、おきよ、おなか女郎にて留めながら出來り、

お爪　そんな大きな聲を出して、見ッともないではありませんか。

大蓮　歸らなくつてならぬことなら、愚僧も一緒に戻るから、

妙道　どういふ譯だか師匠さま、まあ靜にしたがようござる。

願哲　いや靜にしては居られぬ、昨夜愚僧が上るとき、なんともなかつたおさよが急に癪が發つたといふから、此頃宿へ流して來る安土町の藥をば買つて子供に持たせてやつたら、今夜はどうぞ堪忍してくれといふから、愚僧も野暮は少しも言はず、仕方なしに一人で寐たが今朝はちつといゝといふから、今日も一日流したに一度も顏を出さねえのは、あんまりな仕方だ、なんぼ佛の樣な愚

僧だつて、鬼にならずに居られるものか。さあ歸るから、誰も留めるな。

きよ　あひにく今日はおさよさんも、馴染のお客が落合つて、お前さんの所へ來られないのを、氣を揉んで居なさいました。

なか　野暮なお客なら仕方もないが、何時も粹なお前さんが、こんなにお腹をおたてなさるは、太アどん、お前何か麁相でもしたのではないかえ。

太藏　いえ何も御機嫌を損じた覺えはございませんが、もし旦那、只今直におさよさんをお連れ申しますから、まあ兎も角もお床へお出で下さりませ。

願哲　いや爰の内ばかり貸座敷ぢやあねえから、是から向うの内へ行くのだ。

お爪　お前さんを向うへ上げては、私がお部屋へ濟みませんから、今日の所はお厭でも、お連れ樣にお免じなすつて、機嫌を直して下さいましな。

太蓮　折角今寐た所を、お前さん故に寐られもせず、是で歸れば俗に言ふ佛作つて魂入れず、せめて引導渡す迄暫く待つて下さいまし。

妙道　此儘歸ると可愛さうに、おなかゞ今夜焦れ死に、人を助けるは出家の役故、野暮を言はずにお師匠さま、まあ床へおいでなさいまし。

願哲　厭だ〳〵、誰が何と言つても向うへ行くのだ、只でも遊ばうといふではなし、紙幣を遣つて愉快をするに、誰に遠慮が入るものか、一ヶ寺こそ持たねえが、今說教者で智敎院の次へ廻るは此願哲、酒が好きに女が好き故、諸國を斯うして廻つて步くが、おさよがうんと言ひさへすれば、直に前借の金を返し一ヶ寺持つて大敎正、奥樣に成られるのだ、欲を知らねえにも程があらあ。

お爪　ほんに私なら飛付いて、二つ返事でございますのに、じれッたいぢやァありませんかね。

大蓮　些と目尻は下つて居るが、欲にかけたら目のないばあさん。

妙道　物は相談、お爪どんに、乘替へてはどうでござります。

お爪　さうなると太り過ぎた、あなたの體を吸取つて、もつと痩せさせて上げますに、自由にならないものさね。

願哲　何ぼ物喰ひがよくッても、ちい〳〵お爪は眞平だ。

大蓮　あんまり口綺麗なことは言はれませんぜ。

願哲　えゝ餘計な口を利きやあがるな、さあ歸るから一緒に來い。

ト騷ぎの鳴物になり、願哲を皆々捨臺詞にて留める、爰へ奥よりおさよ好の鬘宿場女郎の打扮にて、上履草をはき出來り、願哲を宜しく留め、

さよ　もし願哲さん、どうしたのです、靜におしなさいな。

願哲　おゝおさよか、靜にしろもないものだ、お主の仕方があんまりだから、向うへ上つて遊ぶのだ。

さよ　おやさうでございますか、お前さんもあんまり分らないではありませんか。

願哲　何が分らないのだ。

さよ　何がといつてお聞きなさいよ、今歸る客人があるから歸してしまつてゆつくり來ますとあれ程わたしが言つたのに、それを待ておくんなさらず、どんなわたしがお前さんに不勤めでもした樣で、お部屋へ對して濟みません。就いては向うや隣の内へ外聞が惡うございますから、歸るならお歸りなさい、憎らしいね。（ト願哲を突倒す、是にてひよろ〳〵として足を痛めしこなしにて、）

願哲　あいたゝゝ、酷いことをしやあがる、おゝ歸らないでどうするものだ、さあ歸るぞ〳〵。

さよ　意氣なお前さんにも似合はない、野暮に大きな聲を出して、歸る〳〵とお言ひだが、眞實にお歸りなさんすか。

願哲　おゝ、歸るから留めるな。

さよ　わたしは留めはしませんが、智教院樣の次へ付き、大教正にもなるお前が、其の裝で歸られますかえ。（ト願哲心付き、）

願哲　いや、いや歸らうと思つたが、女の浴衣にしごきでは、成程是は歸られない。
さよ　歸られませんなら、機嫌を直して、
なか　早く奥へおいでなさいな。
大蓮　此方も歸る氣ではないが、師匠が歸れば是非がない。
妙道　全體見得の場所へ來て、おこるといふのは、いやさ菓子でも鮨でも奢るなら、師匠を早く宥めた宥めた。
さよ　ほんに皆さんには濟みませんが、なかなか内の人はわたしの樣な者が、なんと言つても言ふことを聞く人ではありませんから、捨て置いて下さいまし。もし願哲さん、何故お前さんは是程思ふわたしに、苦勞をさせなさんす、悔しいねえ。

ト願哲を後から留める、是にて願哲ぐにやぐにやとなり、

願哲　これおさよ、そんなに悔しがるにも及ばねえ、お主が顔さへ見せてくれゝば、何腹を立つものだ。
お爪　ほんに都々逸の文句の通り惚たお客と貰つたものは、腹を立つても返しやせぬ。（トちよつと唄ふ。）
太藏　成程お爪どんの心いきだ、いえなに、お爪どん心いきはお座敷でやるとして、御機嫌が直つたらちつとも早く、お連れ申した方がようござりますぜ。

きよ　ほんに、見世先へ人が立ちますから、

なか　まあ二階へおいでなさいまし。

大蓮　中直りにお爪どんの、月琴でもお聞きなさい。

妙道　それこそ一人でも寐られます。

お爪　大きにお世話でございます。

願哲　べらぼうめ、さう〳〵一人で寐られるものか。

さよ　あれさ、誰がお前を一人で寐かしますものかね。さ、おいでなさい。

願哲　それでも今朝から一人で。（ト言ひかけるを、冠せて、）

さよ　さあ、おいでなさいといつたら、おいでなさいよ。

ト騒ぎの鳴物になり、おさよ願哲皆々付いてわや〳〵言ひながら奥へはひる。太藏跡に殘り、

太藏　えゝ騒々しい坊主だ、丸で大風の吹いた跡の樣だ、それはさうとおかみさんが、板橋の地藏樣へお參りにおいでなすつたが、もうお歸りになりさうなものだ。

ト流行唄になり、花道よりおせん好みの鬘女郎屋女房の打扮、蝙蝠傘と珠數を持ち、おこま內藝者にて網代笠を冠りし女の子供の手を引出て來り、花道へとまる、爰へ以前の吾助出て來る。

こま　おかみさん御覧なさい、だましましたらぱつたりと泣止みました、おとなしい子ではござりませんか。

せん　今に連の人が來ようから、わたしの所へ一緒に來な。

子供　あい、有難うございます。

こま　ほんに聞分けがようございます。さあおいでよ。（ト三人舞臺へ來る。）

吾助　おかみさんお歸りなさいましたか、旦那がお尋ねなさいましてござります。

せん　さうかえ今日は地藏樣の御緣日故、板橋の地藏樣へお參りに行つた所、此頃流行る濱邊の地藏樣が大層お參りがあるといふから、序に是へもお參り申し、それ故大きに遲くなつたが、旦那は何處へもおいでぢやあないかえ。

吾助　いえ、內證に新聞を讀んで居らつしやいます。

太藏　お駒さん、此子はどうしたのでござります。

こま　此子はね、地藏樣の御門を出ると、泣いて居る故どうしたのかと樣子を聞いたら、連にはぐれ迷子になつたといふので、可愛さうにと、知つての通りお情深いおかみさん故、渡す迄兎も角も一緒に內へ連れて來いと仰しやる故、それで連れて來たのです。

太藏　さうでございますか、何にしろ可愛さうなことだ。

吾助　なか／＼こりやあい丶女の子だ、さうして何處の者だか知れませんか。

せん　先刻聞いたが泣いて居て、さつぱり譯が分からなかつたが、今よく所を其處で聞いて見な。

吾助　へい畏りました。これ坊や、あのい丶おかみさんはお前の内へ送らしてやると仰しやるから、何處だか内を伯父さんに言ひな、何處だえ。

子供　わたしの内は深川の、御船藏前でございまする。

太藏　さうか、さうして一緒に來たのはお父さんかおつかさんか、誰が連れて來たのだ、泣かずにちやんとして伯父さんに言ひな、誰だ／＼。

ト此内思ひ出したるこなしにて、しく／＼泣いて居る故おこま涙を拭ひ遣り、

こま　泣くとお巡りさんに叱られるよ、お前一緒に來たのは誰だえ。

子供　良助といふ、ぢいやあでございます。

吾助　は丶あ、それぢやあぢいやあが連れて出て迷子にしたのか、さうして深川の内のお前のお父さんは、何といふ名だ。

子供　其處はぢいやあの內でございます。

太藏　分つたく〵、それぢやあお前のお父さんや、おッかさんはないのか。
子供　いえ、ありますが知りません。
太藏　あつても知らねえとは、こりやあ妙だ。
せん　そのぢいやあとお前何處へ來たのだえ。
子供　おッかさんを尋ねに靜岡へ參ります。
せん　なに靜岡迄尋ねに行くえ、それはまあ何にしても可愛さうなことだ。
吾助　然しお慈悲深いお上さんに連れられて來たは、此子の仕合せといふものだ。
太藏　是といふのも利益のある地藏樣のお導きだ、嘸ぢいやあが尋ねて居るだらう。
こま　連れの人が目に付く樣に、何か爰らへ出しておいてはどうでござりませう。
せん　其子の冠つて居る笠を、目印に門口へ提げて置きな。
吾助　畏りましてござりまする。（ト子供の笠を取る。）
こま　お前お腹は何うだえ。
子供　まだお晝を喰べません。
せん　それは嘸ひもじからう、内でお飯を喰べさせてやりませう。

子供　有難うござります。

せん　さあ、お駒連れて來な。

ト右の合方にておせん先に、お駒子供の手を引き奥へはひる。吾助件の網代笠を門口の柱へ引掛け置く。

吾助　斯うして置けば尋ねる人の、早く目に付くに違えねえ。

太藏　早く檢査に來りやあいゝが。

ト流行唄に驛路をあしらひ、花道より九郎兵衞好みの鬘着流し、草履、木綿の蝙蝠傘を持出來り、花道にて、

九郎　旅へ出てはうつかりと車へ乘れぬと、成程人のいふ通り夏と違つて日暮が早く、心がせいてならぬ故、大磯から小田原迄三十五錢で直を極めて乘つた人力は早かつたが、小磯がのつけで梅澤酒匂途中で二三度車を取替へ、其度毎に錢を貸し殘りはわづか五錢の所十五錢殘つてゐると言掛されても初手に極めた車でなければ仕方なく、とう〳〵十五錢なけなしの路用を内に取られたが是れが泣ツ面に蜂といふのだ、（ト舞臺へ來る、太藏出て九郎兵衞をとらへ）

太藏　お手輕さまで如何樣でござります、お上り下さりませ。

九郎　わしは遊びに來たのではない、こちらの内へ東京から出稼ぎに來てをります、おさよに逢ひに來ました者でござります。(ト是を聞き、吾助九郎兵衞を見て、)

吾助　や、お前樣は九郎兵衞樣ぢやござりませぬか。

九郎　おゝお前は若い衆の吾助どんか、其後は久しく逢ひませぬが御機嫌よくお勤めでござりますな。

吾助　お前さんもお變りなく、お達者でようござります、さうして只今頃此邊へおいでは、大山も季節後れ、道了樣へでもおいでなさいましたか。

九郎　いえ大磯迄商法事で參りましたが、纔な道故車に乘り、ちよつと逢ひに參りました。

吾助　そりやあよくおいでなさいました。

太藏　是はついお見それ申した、眞平御免下さいまし。

九郎　どう致しまして、御挨拶で痛み入ります、さうしておさよは替ることはござりませぬか。

太藏　おさよさんはお替りなく、お達者でござります。

九郎　それは仕合せなことでござります。

太藏　まだお仕合せなのはお聞きなさいまし、御器量のいゝので大層はやり、今小田原で一といつて二のない程の賣れ頭、おさよさんで私共迄餘分な祝儀を貰ひます。

九郎　そりやあなにしろ御主人でも、大金を出して抱へなされた甲斐があつて、宜しうござりました。
吾助　それにちつとお前さんの前ぢやあ言難いが、女房にしたいといふ客が幾人あるかしれませぬ。
九郎　そりやアもよい所がありますなら、あれが出世でござりますから參つても宜しうござります。
吾助　それぢやあお前さんは、手切でも貰つて別れなさる氣かえ。
九郎　いえ〳〵どう致して、私故に小田原へ出稼ぎに來たあのおさよ、長く苦勞をさせましたから出世になりますことなれば、綺麗にあれは遣はします。
太藏　さうしてお前さんはどうなさる氣だえ。
九郎　どうで始終は私は、（ト思入あつて、）寺へでも這入る氣でござります。（トホロリとこなしある。）
吾助　說敎師にでもなんなさるなら、願哲さんのお弟子はどうだらう。
太藏　札はあるやうだが、寺がないぢやあねえか。
九郎　いえさうなれば行く先は、大概覺悟がしてござります。
吾助　さうでござりますか、何にしろおさよさんに逢はせるから、おいでなさい。
九郎　それでは直に參つても、宜しうござりますか。
太藏　外の人ぢやあなし、遠慮には及びません。

九郎　それは有難うございます。

吾助　お前さんの顔を見なすつたら、

太藏　おさよさんも嘸嬉しからう、

九郎　其悦びが此世の別れ。

兩人　え。

九郎　いえなに、分りませぬから、（ト隱して涙を拭ふを道具替りの知せ、）御一緒に參りませう。

ト兩人案内して、九郎兵衞しを／＼と入口へ行き掛る、此模樣賑やかな宿場騷ぎにて道具廻る。

（おさよ部屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、櫛形の欄間、上寄りに三尺の床の間地袋違ひ棚、續いて重ね簞笥、上に延喜棚樣の瓦燈口、此下手腰張の茶壁、上手一間の屋臺是へ好みの襖を建切り、下手晝心に障子屋臺、此内廊下より部屋々々を見たる片遠見、よき所へ長火鉢傍に茶盆急須煎茶ちや碗など宜しく總ておさよ部屋の體。上手に以前の願哲薄團の上に住ひ前へ酒肴の臺の物、牛肉の鍋を控へ、酒を呑んで居る、おさよ湯沸しの下を紙にてあほいで居る、誂への端唄にて道具留る。

願哲　これおさよ、そんなに火ばかりあほがずと、燗がいゝからもう一つ呑まぬか。

さよ　わたしやあお酒はもう、澤山でござります。

願哲　呑むのが厭なら爰へ來て、せめて酌でもしてくれろ。

さよ　わたしでよければお酌はしますが、お前さんもお酒はいゝ加減にして、今お茶を入れて上げます
から、ちつとお休みなさいな。

願哲　昨夜から今日へ掛けて、一人でさん〲寐飽きたから、己はちつとも睡くない。

さよ　眠らないでも横になつて、話でもおしなさいな。

願哲　話しよりはおさよ、おぬしにいゝものを見せてやらう。

さよ　何だか知りませぬが、いゝものならお見せなさい。

願哲　おさよ、斯ういふいゝものだ。（ト胴巻より札の包を出し明けて見せる。）

さよ　それは札ではありませんか。

願哲　何と惡いものぢやァあるめえな。

さよ　いくらいゝものでも、それはみんなお前の物、わたしの爲めには行燈部屋の紙屑も同じことです。

願哲　其の紙屑も製し様で、お主の自由に遣へる札、それも別にむづかしい機械も何も入りやあしねえ、
此願哲の女房にならうと言やあ後共言はず、爰の内の前借は殘らず己が返してやり、二階中へも

それ相應振舞をして今夜にも、立派にお主を連れて行き榮耀榮花をさせる氣だ、さうなる日にやあ此札は、己のものなら汝のもの、何にしようと好きになるが、うんと言つてはくれまいか。

さよ　ほんにわたしをそれ程に、言つておくんなさんすは有難うござりますが、よい御返事の出來ないのは、わたしには亭主がござんす。

願哲　それも疾うからおれが手で、洗ひ方をしてあるが、役に立たずの貧乏士族、一と度亭主の其爲に苦界へ沈んで其金を遣はしたれば澤山だ、それでも汝が氣が濟まずば、澤山のことは出來ねえが五十兩迄手切に遣る氣だ、さうさへすりやあ義理も立ち、言はれるところはありやあしめえ。

さよ　假令何と言はしやんしても、今落ちぶれてをります者を、どう見捨てられませう、私も今は九郎兵衞さん故、斯ういふ身にはなりましたが、九郎兵衞さんも私故難儀をして居なさんすれば、末始終襤褸を着て、マチやたわしを賣りましても、別れることは出來ませぬ。

願哲　それぢやあ是程親切に、おぬしの爲めを思つて遣つても、己の女房になる氣はねえとか。

さよ　亭主を袖に札のある、お前の襟に付いたなど丶後ろ指を差されるは、わたしや嫌ひでござりますから、お氣の毒だが願哲さんもう其話はよしておくんなさい。（トきつぱりといふ。願哲むつとして、）

願哲　え丶強情な女だなあ。（ト灰吹をひどく叩く、爰へ以前のお爪出來り、）

お爪　もし願哲さん、とてもお前さんの重い口で、手輕くうんとは言ひますまい。

願哲　二階廻しの仕つけが惡く、情のこはい女だ。

お爪　おや／＼飛んだ所へ口を出して、鼻を彈かれ立つ目がないが、實は廊下で耳を引立て、さつきから聞いて居たが、どんなに勝れた顔を持つても額に波の皺を寄せ引眉毛をする年增になる迄、娼妓をしても居られまいから、襟に付くと言はれても脊に腹は替られぬ譬もあれば、よく胸とも相談をして惡足同樣尻腰のない、九郎兵衛さんは手切を出して肩をぬけ、天窓の上から爪先迄そつくり體を願哲さんに、任せた方がいゝぢやあないか。

さよ　お爪どん迄同じ樣に、御親切は有難いが、わたしや欲がありませぬから、餘計なお世話はおよしなさい。

お爪　はい／＼、ほんに欲を知らぬは何とやらと、是ほど言つて上げるのに、あんまりすげないおさよさん、もし願哲さん、嘸お腹も立ちませうが、ちつとお前さんに話しがありますから、まあ私の部屋へおいでなさいまし。

願哲　うんと言へば此金も、みんなおぬしにやるものを、さりとは欲をしらねえ女だ。

ト札をしまふ、お爪是を見て、

お爪　わしは名代のちい〳〵お爪、欲は大層知つて居ますから、まあ一緒においでなさい。

ト願哲の手を取り立掛る。

願哲　何の話かしらないが、お前の部屋ぢやあをかしくねえ。

お爪　所がをかしい話があります。

願哲　なにかい〳〵話しか。

お爪　何でもい〳〵から、おいでなさいよ。

ト騒ぎの鳴物になり、お爪願哲を引ぱつて下手へはひる。跡におさよ思入あつて、

さよ　いくら札があればとて、女子供に見せびらかし、ほんに好かないあの願哲、お爪どんなら知ぬこといかに賤しい勤の身でもあんな坊さんに身を任し、自由になるなら尼寺へはひつてしまふかいつその事死んだ方が遙にまし、其厭な人に買はれるも九郎兵衛さんのみんな爲め、それに付けても東京から久しく便りがない故に、日外郵便を出したれど其返事を下さんせぬは、商法事で遠方へ行きなさんして知らぬのか、それ共煩つてゞも居なさんすか、離れて居れば樣子も知れず、此二三日はお晝前氣にかゝる夢を見る故、案じられてならぬけれど、外に話す人もなし、心で心を痛めては晝夜お客の機嫌をとるも、旦那さんへの御奉公、ほんに苦界はつらいものさねえ。

ト思入あつて言ふ、下手より以前の九郎兵衛出來り、おさよを見て、

九郎　おゝおさよ、替る事もなかつたか。（ト側へ住ふ、おさよびつくりして、）

さよ　九郎兵衛さん、よく尋ねて來て下さんしたなあ。

九郎　疾うから逢ひに來よう〳〵と、思つて居ても心に任せず、漸々のことで出掛けて來たのだ。

さよ　今も今とて問はず語りに、お前の噂をしましたが、久しう便りがない故に、毎日案じて居りました。

九郎　さうだらうとも、此間尋ねてくれた返事をば、出さうとしたが其内に、己が來る氣で出さずにしまつた。

さよ　まあ何にせいお前が御無事で、こんな嬉しいことはありませぬ。

九郎　そなたも達者で流行と聞き、己が一つの安心だ。

さよ　ほんにまあ今日逢はうとは、思ひがけない。

九郎　實に十年も逢はずに居た樣だ。

さよ　こりやまあ夢ではないかねえ。

ト是より替つた合方になり、おさよ敷いてある蒲團を押しやり、有合ふ座蒲團を敷き此上へ九郎兵衛

住ふ、おさよ茶を汲んで出す、九郎兵衛四邊を見廻し思入あつて、

九郎　然し己が爰に居て、客の邪魔になりやあしないか。

さよ　さつき馴染のお客を歸せば、其心配はありませぬから、まあゆつくりとしなさんせ。

九郎　それは丁度いゝ所であつた。

さよ　さうしてお部屋へ顔を出しておいでかえ。

九郎　馴染の吾助どんに見世で逢ひ、案内をしてくれたので、御主人にもお目に掛り、今迄そなたのはやる噂を、お部屋で委しく聞いて來たのだ。

さよ　それでわたしも安心ゆゑ、久し振で一と口上げたいが、お肴は何にしませう。

九郎　此の二三日は胸が張つて、まだ何もほしくない。

さよ　さういふことなら夜も延びたし、晩にゆつくり上りなんせ、あんまり思ひ掛けないので、何から先へ尋ねてよいか。ほんにそれ〱、わたしが爰へ住んでから何ぞよい商法を思ひ付いて、少しは樂にならしやんしたか、毎日それが苦勞故早う話してお聞かせなさい。

トおさよいそ〱せしこなし、九郎兵衛じゆつなき思入あつて、

九郎　聞かれて話すも面目ないが、よく世間でいふ士族の商法、奉還金を資本として仕慣れぬ喰物生業

で、所々方々へ借が出來、遂にはそなたは苦界を勤め、前借金で借を返し不用の道具を土臺にして、殘つた金で小道具屋を初めた所が根が素人、直になるものは日々來る端師に皆んな選拔かれ、是も稼業にならぬ故いつその事身を落し、擔ぎ商ひがよからうと煮染や豆や納豆賣、あれがい丶是がい丶と、種々なことをしたけれど、今もいふ士族の商法、何をしても取續けず、そなたに斯ういふ勤をばさせる甲斐がない故に、疾うから逢ひに來たかつたが、面目ないので今日明日と、一日延しに日を送り、やう〳〵のことで逢ひに來たが、よく〳〵非運なこの九郎兵衞、そなたに顏を合すのも、實は己は恥かしいのだ。

ト愁ひの思入にて、懷よりぜんまい織の紙入を出し、中より鼻紙を出し、鼻をかんで淚を隱す思入

おさよ尤もといふこなしあつて、

さよ　夫婦の中に其樣な、遠慮をするには及びませぬ、さういふことなら、纔二錢で、直に屆く郵便故、なぜ知らせては下さんせぬ、勤の身故朝夕のお世話こそ出來ませぬが、其の日稼に身を落し、小商ひで暮すとあれば取續く迄の元手位つもりの物を賣つたとて、少しは手助になりませうに、何故打明けて下さんせぬ、斯うして居ても便りにするはお前一人ではありませぬか、其お前が煩ひでもしなさんした其時は、どんなに心細いか知れませぬ。わたしを不便とお思ひなら、どんなこ

とでも隱さずに、相談をして下さいまし、苦勞を共にするといふ夫婦の中の情合は、十九や二十ではあるまいし、お前知つて居なさいませう。（ト愁ひのこなし九郎兵衛面目なき思入）

九郎 さう言はれるのが知れて居るから、猶々已は來難いのだ。（ト又鼻をかみながら涙を隱す、）

さよ 何故其樣に他人行儀な、お前は遠慮をしなさいます。（トいひながら九郎兵衛の紙入へ目を付け）其紙入は日馴れぬ切でござりますな。

九郎 是か、是は信州埴科郡松代の住人で、寺内安秀といふ人が新發明に織出した、薇蕨錦といふ織物、此の日本はいふに及ばず、外國迄も博覧會で評判になつて居る切だが、さる人から貰つた故、紙入に拵へたのだ。

さよ 面白い織物故、是は煙草入にしたがようござりませう。

九郎 東京の勸工場へ二軒見世が出て居るが、反物もあれば敷物もあり、珍らしいので人の目に付き大層賴まれるといふことだ。今度來る時そなたの持つ、煙草入を拵へて來てやらう。

さよ それは嬉しうござりますが、いつ今度おいでなさんす。

九郎 何時此方へ來られようか、纔其口に十錢か二十錢の元手に困り、所詮商法ではいけないから、西國筋に極く樂な奉公口があると言ふから、それを賴んで行く積り、暫くそなたに逢はれぬから、

暇乞に今日來たのだ。

さよ　奉公をしなさんすにそんな所へ行かずとも、濱か横須賀にいくらもありさうなものでございますに、さうして西國筋へ行きなさんして、久しく向うに居なさるのかえ。

九郎　なに、いつ迄といふ限りはないが、先づ來年の盆までは、こつちへ歸つて來ない積りだ。

ト手拭で目をこすり、涙を隱す思入、およよ案じるこなし。

さよ　段々寒空に向ふのに、そんな遠くへ行きなさんして、煩ひでもしたらどうなさんす、見れば顏の色も惡し、お前どうぞしなさんしたかえ。

九郎　此間から時候に當り、實は藥を呑んでゐるのだ。（ト俯向く、およびつくりして、）

さよ　え、そりやまあどうぞ、重くならぬ樣にしたいねえ。

九郎　貧さりや鈍すると人がいふが、ろくなことはありやしねえ。

ト胸を押へて居る、騷ぎの鳴物になり、下手より銀杏髷の小ぢよくお豆掛盤の菓子を持つて出來り、下に置き、

お豆　おさよさんのお客が、是を上げますと仰つしやいました。

さよ　それは有難う、宜しく申してくんな。

お豆　あい〱、何ぞ御用はございませんか。
九郎　あの子や、手水に行きたいが、敎へてくんな。
お豆　あい、お連れ申しませう。
さよ　まめどん、氣を付けておあげ。
お豆　あい、是をお穿きなさいまし。（ト草履を出す。）
九郎　有がと〱。

ト言ひながら九郎兵衛紙入を其處へ置き、おまめと一緒に下手へはひる。跡におさよ案じる思入にて、

さよ　久し振で九郎兵衛さんに逢ふ悦びも、委しい事を聞けば悲しい今の話、生れ付いての苦勞症に案じられてならぬのは、遂に是迄風一つ引いたこともございませぬに、貧苦故とは言ひながら何となく影も薄く、どうも氣になる今の口ぶり、何か譯のあることか。（ト心に掛る思入にて側にある紙入を取上げ見る、中より手紙が出かゝり居る故、そつと出して見て、）書置き、（ト讀みかけびつくりする、騒ぎの鳴物になり、あたりを見廻し開き見て、口の中にて讀むこと宜しくあつて驚き、元の通りに紙入の中に入れ、）はあゝゝ。

ト泣伏す。爰へ下手より九郎兵衛手を拭きながら片足爪立つて出て來る、お豆鼻緒の切れし上草履を

片々持出で來り、おまめ手拭を出して」

お豆　足を拭いて上げませう。

九郎　なに、爪立つて來たからいゝ。

さよ　どうぞしなさいましたか。

お豆　草履の鼻緒が切れました。

さよ　切れる筈ではなかつたが、

お豆　さつき猫がじやれましたから、疵を付けたかも知れませぬ。

さよ　其の鼻緒の切れたのは。

九郎　え。

さよ　さ、心にかゝるいやな辻占。

お豆　おゝ辻占が來たならば呼んでくれと、小花さんに頼まれて居りましたッけ。

さよ　それぢやあ早く見世へ行きな。

お豆　あい／＼。（ト下手へはひる、此内九郎兵衛元の座へ住ふ。おさよそしらぬ振にて）

さよ　今貰ひました此お菓子、一つ上りなさんせぬか。

九郎　有難いが、胸に支へて。
さよ　え。
九郎　なに、溜飲で胸が張るから、甘いものは止しにしよう、(ト懐へ紙入を入れ)どれ、暮れぬ内に出かけよう。
さよ　もう今に日が暮れるに、お前是から歸りなさんすか。
九郎　おぬしに逢つて今のことを、言へば心殘りもなし、遠い所へ一里でも餘計出ておきたいから、是から直に行く積りだ。(ト立ちかゝるを留めて)
さよ　九郎兵衛さん、お前西國へ行くといふのは、今夜死ぬ氣でござんせうがな。

ト九郎兵衛びつくりして、

九郎　え、どうしてそれを。
さよ　今手水に行きなさる時置いて行きなさんした紙入から、文の見えるは若し餘所の情人からでも來た文ではないかと、つい女の廻り氣に明けて濟まない紙入から、出してびつくり書置と、表に記してあつた故。
九郎　それでは中を明けて見たとか。(トとんだことをしたといふ思入。)

さよ　殘らず讀んで見ましたが、なぜ此事を打明けて私に話して下さんせぬ、いかに其日に困ればとて此結構な世を捨て死ぬと言ふは情ない、どんなことでも相談して、苦勞をするなら共にしますと、あれ程迄に言うたのに、お前聞分けては下さんせぬか、ても情ない氣になんなさんしたなあ。

　　ト泣伏す、九郎兵衞面目なき思入にて、

九郎　實はそなたに面目ないから、歸りしなに書置をそつと置いて歸る積り、見られた上は仕方がない、實はさつきも云ふ通り、種々なことをしたけれど、何をしても儲けはなし、諸式の高いに喰込んで無據高利を借り、利に利がかさんで詮方なく、是も不幸の親の罰と思ひ詰めて死ぬ氣になり、暇乞に出て來たが、今斯うして居る内も己は心が心ならねば、どうぞ此儘歸してくれ、長居をする内足がつくと、そなた迄の難儀故、逢はぬ昔と諦めて、己を今から歸してくれ。

さよ　いえ／＼何で歸されませう。連添ふ亭主が死ぬといふを、どうまあわたしが見のがされませう。

九郎　いや留めずと今日を命日に、跡の回向をしてくれろ。

さよ　いえ／＼何とお言ひでも、此儘お前は歸されませぬ。

九郎　えゝ聞分のない、放せと言ふに。

　　ト留めるをおさよ振拂ひ、九郎兵衞下手へ行く、此時下手より以前の伴藏傳八出來り、

伴藏　どつこい汝を、
傳八　逃すものか。（ト立塞がる、九郎兵衞兩人を見てびつくりなし）
九郎　や、こりやこなた衆は小田原迄、
伴藏　おゝ、てつきりこゝと思つたから、
傳八　さつきから來て、待つて居たのだ。
九郎　あゝ面目ない〳〵。（ト天窓を押へて蹲る。）
伴藏　なに、面目ない、面目ないでは、
兩人　濟むまいがな〳〵。（ト兩人下に居て叩き立てる。是を合方になり）
伴藏　これ九郎兵衞殿。こなたは〳〵こんな人ではなからうと、思ひの外に見下げた人だ。仕馴れぬ士族の商法でする事爲す事鶍となり、段々喰込み方が付かず、一錢も貸手がなく、喰ふや喰はずに居られるのが、如何にも氣の毒千萬だから、舊友のよしみを以て證人に立ち、借りて遣つた三十圓の資本金、目歩の金故ずん〳〵登り、利子を元に書直して其金高は五十圓、それからこつちへ五十圓の又利がくつて六十何圓、
傳八　手前も同じ舊友故、店請をして進ぜたが、月一圓の店賃が十月溜つて是が十圓、其外こなたが是

迄に商ひをした問屋の借り、まだ〳〵外に米屋と薪屋、皆店請の己に掛り、是も細に書付けたが、
（ト懐より書付を出し、）これ見さつしやい、五十七圓七十五錢、

伴藏　どう負けさしても百圓の金がなければ方が付かぬが、百圓は扨置いて百にならぬ天保一枚、こなたの體で出來ぬから、皆證人の我々へ貸方から掛つて來るが、逃げるくらゐの了簡では、氣の毒だとも思ふまい。

傳八　知つての通り二人共、疾うに家祿奉還なし、今貯へも乏しければ所詮償ふことは出來ぬ。それを承知で親切に周旋をした我々へ、迷惑掛けて逃げようとは、見掛に似合はぬ太い男だ。

伴藏　盗人に追錢同樣、入費を遣つて爰迄來て、つかめえたからにやあもう逃さぬ。

傳八　これからこなたを東京へ引いて行つて貸方に、煮て喰ふとも燒いて喰ふとも、勝手にして貰はにやならぬ。

伴藏　さあ、おれと一緒に、

兩人　うしやがれ。（ト九郎兵衞を兩人して引立てにかゝる。おさよ氣を揉み、兩人を留め、）

さよ　段々譯をお聞き申すと、お二人共にお腹の立つは御尤もでございますが、廊下へ人が立ちますから、どうぞお靜に仰しやつて下さいまし、お願ひでございます〳〵。（ト泣きながら手を合して賴む。）

伴藏　妻君には氣の毒だが、誰に聞えようが、どなたが聞かうが、
傳八　此方に無理は少しもないのだ。さあ〱一緒に、
兩人　行きなせえ〱。（ト又引立てに掛る、九郎兵衞是迄といふ思入あつて）
九郎　斯う見つかつた上からは、逃げも隱れも致しませぬ。二人の衆と一緒に行きます。是迄長のお世話になり其御恩も返さずに、御難儀を掛けるは濟みませぬが、命を捨てゝ死ぬ程故お許しなすつて下さりませ。
伴藏　そりやあこなたが女郎を買つたり、酒を呑んだり博奕を打つたり、遊んだ金といふではなし、
傳八　假名でいへば意氣地がなく、仕馴れぬことで損をして、段々殖ゑた此の借金。
伴藏　二人が都合が出來るなら、どうかしてやりたいが、
傳八　こつちも同じ貧乏人、それ故こなたを連れて行つて、
伴藏　貸方へ言譯するのだ。
傳八　早く爰を立ちなせえ。（トきつと言ふ。おさよ思入あつて）
さよ　仰しやる通り、何一つ道樂をせず律義に稼げど、馴れぬことで取續けず、御親切なお方へ御迷惑を掛けまして、お詫の仕樣もございませんが、所詮九郎兵衞さんを東京へ連れておいでなすつた

とて、お金の出來る當はなし、ひよんな事にでもなりましては、離れてをります私が、實に苦勞でござります故、どうか都合を致しますから連れておいでなさりますのを、お待ちなすつて下さいまし。

作藏　そりやあ金が出來さへすれば、九郎兵衞殿を連れて歸るより、

傳八　金を連れて歸つた方が、貸方でも大悅びだ。

作藏　それぢやあ金を直に爰へ、

兩人　出しなさるか。

さよ　さあ、其のお金は。

九郎　あゝこれおさよ、そなたを苦界へ沈めたも、己が爲にした勤め、又もや苦勞を掛けては濟まぬ。あゝ斯うと知つたらいつそのこと、暇乞に爰へ寄らず、直に死んだらよかつたに、こりやどうしたらよからうな。（ト愁ひのこなし。）

作藏　直に死なれてたまるものか、それぢやあ何か、女房へ濟まぬと義理を立つて、

傳八　我々二人へ百圓の借を背負はして難儀をかけ、それで濟むと思ふのか。

九郎　いえ、決してさういふ譯ではござりませぬ。

伴藏 そんなら妻君、今言つた、

傳八 金の都合を早くしなさい。

さよ さあ、其の都合は。

兩人 どうしなさる。（ト大きく言ふ、おさよちつとこなし、此時下手より願哲先に大蓮、妙道出來り）

願哲 其百圓は、己が貸してやらう。（ト浮いた合方になり、三人上手へ通り、宜しく住ふ。）

さよ 誰かと思へば願哲さん、そんなら今の樣子をば。

願哲 さつきからの談義をば、廊下で殘らず聽聞したが、こんな事にならぬ先、百蔓陀羅說き諭した名僧知識に隨へば、五十圓も手切の施主が附いて遣りやアあの亡者も、成佛得脫するだらうに、今日迄おぬしが迷つて居て浮んでくれねえばつかりに、とう〳〵百圓の入佛事、所詮檀家で出來やあしめえ、愚僧が寄進に付かうから是を渡して三行り半の、離緣狀を取つてしまへ、爰らが往生し所だらうぜ。（ト紙に包みし百圓をおさよの前へ出す。おさよ思入あつて）

さよ 思召は有難うござりますが、此のお金はお貰ひ申せませぬ。

大蓮 これ〳〵おさよ、瘦我慢も時による、急場に困る百圓をお師匠樣が見兼ねなすつて、出してやると仰しやるから、

妙道　有難いと其札を貰つて直に手切に渡し、證書替りに離緣狀を取つてしまへば後腹痛めず、直に尊いお師匠様の、

大蓮　奥様と崇められるが、

兩人　どうだな〳〵。

さよ　皆さん迄御親切に仰しやつては下さいますが、わたしや願哲さんは蟲が好きません。

願哲　どうしたと。

さよ　どんな尊い御出家かわたしや知らぬが貸座敷へ、お上んなすつて牛肉で朝から晩迄大酒を呑んで體はお宗旨の、だぶ〳〵太つた願哲さん、幾らお前が金滿家でもお金を目當に惚れる樣な、賤しいおさよぢやありませぬ、今は海老屋の娼妓でも年を勤めて出る時は、同じ四民の其內でも人の上なる士族の妻、いかに男女同權とて貧苦に迫る夫から、離緣狀を取つて生臭い法華坊主の女房に、わたしやなる氣はありませぬから、百圓はおろか何萬圓でも道にかけた此札は、失禮ながら穢れますから、どうもお貰ひ申されませぬ。（トずつけりと言ふ。）

仲藏　いかさま內儀の言ふ所は尤もには違ひないが、操を破つて操を立てる常磐御前の例もあれば、どう成り行くも夫の爲めだ。

傳八　しかしそれより手短に、あの百圓を二人で請取り、九郎兵衛殿に去狀を直に書かせて御出家に、渡してしまへば否應なしだ。（ト伴藏橫手を打ち、）

伴藏　さうだ〳〵。（ト立掛り、件の札を取らうとするを、おさよ留め、）

さよ　いえ〳〵あの札は、どうあつても取られませぬ。

伴藏　それぢやあ外に百圓の、

傳八　都合が直に出來ますか。

さよ　それぢやというて今直には。

伴藏　出來ずばあれを貰つて渡すか。

さよ　いえ〳〵、あれは。

傳八　それぢやあ九郎兵衛殿を、

兩人　連れて行かうか。

さよ　さあ、それは。

兩人　札を貰ふか。

さよ　さあ、

兩人　外に出來るか。
さよ　さあ、
兩人　さあ。
二人　さあ〳〵。
作藏　おさよ殿、
兩人　どうする氣だ。

ト きつと言ふ、おさよハツト泣伏す。九郎兵衞氣の毒なる思入、此以前より上手襖を明けかけ、以前のおせん覗き居て、

せん　其金は旦那へ話し、わたしが貸してやりませう。（ト前へ出、好き所へ住ふ。）
さよ　え、そんならわたしへおかみさんが、
九郎　お貸しなすつて下さりますとか。
兩人　えゝ有難うござりまする。（ト辭儀をなす。）
せん　さつきからの樣子をば隣座敷で聞いて居たが、内の爲にも去年から一方ならずなつたおさよ、旦那へ話したことならば、直に貸して下さんせうから、氣を揉まずに居たがよい。

さよ　お慈悲深いおかみさんが、旦那に話して貸して遣るとおつしやるからは九郎兵衛さん、もう大丈夫でございます。

九郎　これもそなたが御奉公を大事に勤めてくれる故だ。何とお二人、御主人は有難いではござりませぬか。

伴藏　有難いとも〳〵、百圓が出來ぬ時は、こなたを連れて東京迄歸る入費の出所もなし、

傳八　行きも歸るも持出しで、おまけに貸方へ言譯なく、どんなに困るかしれぬところ。

さよ　わたしも厭なお客樣に、自由にされる苦勞もなし、

九郎　一人よければ二人三人、

伴藏　四人が斯うして助かるも、

傳八　當家の主人が情故。

四人　有難うござります。（ト四人悦ぶこなし、願哲忌々しいといふ思入にて、件の札を引込ます。）

せん　善は急げとちつとも早く、旦那に話しをしてやりませう。

さよ　何分よい樣、おかみさん、

九郎　どうぞお願ひ申します。

せん　今呼びによこすから、待つておいで。

兩人　有難うござりまする。（トおせん立掛り、願哲へ思入。）

せん　是はお客樣、失禮御免下さいまし。（ト會釋なし、おせん下手へはひる、跡に願哲思入あつて、）

願哲　年季のある上又百圓借りて段々勤めをば、長くするより手短に、己の札を遣つた方が樂な身分になられように。（ト件の札を見せびらかし、）入らずばこつちも遣らねえばかりだ、負惜しみだと人は言はうが、ふられて歸る果報者、先づ百圓が助かつた。（ト懷へ入れる。）

大蓮　こつちは菓子を散財して、甘く見られた其せゐか、おきよは何處かへ行つてしまひ。

妙道　屏風一重の割床に、どつちも坊主の一人もの、枕の通夜もどつとせぬから、

願哲　お爪を相手に藝者を上げ、

大蓮　今夜はこれから、

妙道　呑みあかしませう。

願哲　さあ見通しへ行かうか。（ト騒ぎの鳴物になり、願哲先に兩人付いて上手へはひる。）

伴藏　どれ、こつちも二人で二圓の客だ、さつきの臺がそつくりあるから、

傳八　金の出來る迄二人して、一杯やつて待合さう。

さよ　どうぞさうして下さいまし。
九郎　請取り次第知らせます。
伴藏　然し、金を遣つて遊ぶ見世で、
傳八　金を請取つて歸る客は、
伴藏　先づしまり見世の、
傳八　隊長小見世だ。
伴藏　洒落迄しまりだ。

ト兩人上手へはひろ、跡に九郎兵衛面目なくふさいで居るを、おさよ見て氣の毒なるこなし、

さよ　もし九郎兵衛さん、もう心配をなさんせずと、丁度こゝにあるお肴で、熱いお燗を一つ上つて、氣をしつかりなさいまし。（ト燗徳利を湯沸へ入れる。）
九郎　其の心遣ひは有難いが、酒を呑んでは御親切な御主人初め、おぬしに濟まない。
さよ　又其樣に遠慮をなさんすか、そりやもう澤山あがつては、お部屋へ濟まぬが一つ二つは藥故、胸の痞へが下りませう。
九郎　其の痞へもそなたのお陰で、己は重荷をおろした樣だ。

さよ　借さへ返しなさんしたら、何をするにも肩身も廣く、
九郎　死ぬる命を助かつて、もう一辛抱したならば、
さよ　前借金の年も切れ、やがて二人で共稼ぎ、
九郎　稼いだならば七轉び八起といふ故是から先き、
さよ　お前もわたしも運が向き、
九郎　樂になつたら今の難儀を、
さよ　寐物語りに、（ト煙草を吸付けるを道具替りのしらせ、）しませうねえ。
ト九郎兵衛へ煙管を出す、九郎兵衛煙管を頂き煙草をのむ。此の模樣誂へ端唄にて道具廻る。

（貸座敷居間の場）――本舞臺正面中切障子、上手一間延喜棚、此下帳場箪笥、續いて帳面の掛けてある書割り、此上へ帽子かけを取付け前に帳場格子、内に掛硯、大帳、よき所に鐵瓶を掛けてある長火鉢、日覆より好みの切出し欄間を下し、ずつと上手櫺子窓の書割、下手に廊下口の出這入、此上に時計を掛け、揚幕の所狐格子の開き、すべて貸座敷居間の體、爰に十兵衛好みの臺亭主のこしらへにて、座蒲團の上に住ひ以前のお豆に肩を叩かして居る、側におせん煙草を呑んで居る、此

見得鳴物入り、座付にて道具留る。

十兵　それぢやァおさよが亭主の爲に、百圓金が入るといふのか。

せん　今其金を貸さなければ、おさよの亭主が死ぬといふ故、ことによつたらおさよ迄死ぬかもしれぬ今夜の切羽、どうか貸して遣つて下さいましな。

十兵　人の命に拘ることを聞いては捨て置かれぬ、それに又あのおさよも、隨分内の爲にもなるし。よし〳〵さういふ事なら百圓貸してやらうから、爰へ二人を呼ぶがいゝ。

せん　それはまあ嘸二人が悦びませう。これお前、おさよの部屋へ行き、私がさういつたといつて、二人共爰へ呼んで來な。

お豆　あい〳〵。（ト下手廊下口へはひる。）

十兵　何でも人は仕馴れたことをしてさへ居れば喰ひはぐれはないものだが、瓦解此方仕馴れない商法をして士族の衆がどの位難儀をしたか、生やさしいことぢやァあるめえ。それといふのも舊幕頃袖手座食で暮してござつたみんな入合せといふものだ。己なども彌勒町で親の代から遊女屋を長年駿河でして居たが、あんまり好んでする程な旨い生業でもあるめえと、仕出した見世を一旦しまひ、何ぞ堅氣な生業と思つて見たが仕馴れぬ事より、覺えたことが丈夫故、小田原へ來て貸座

敷、やんやと當つて以前より今では立派な見世になつたも、仕馴れたことをするお蔭だ、何になるのも其人の備はり事に違えねえな。

せん　ほんに旦那のおつしやる通り、假令どんな生業でも馴れたことを大事に守り、冥利さへよくすれば、天道樣のお惠みでも、困ることはありませんね。

十兵　まあ、そんなものよ。

ト煙草を呑み居る、流行唄になり、下手廊下口より、おさよ先に九郎兵衛出來り、下に居る、

さよ　九郎兵衛さん、旦那やおかみさんに今話した御恩のお禮を、宜しう申して下さいまし。

九郎　厚くお世話になることを、これから委しく聞きましたが、士族上りの武骨者を、お慈悲深ひお二人樣が御丹誠を下さるので、御奉公も勤めよく、こんな有難いことはござりませぬ、此末共に不束者を、お目掛けられて下さりませ。

十兵　三日でも抱へれば他人とは思はぬから、世話をしたとて禮には及びません。外の奉公人の前もあるから、さうさう口へ出して言やあしないが、よく精を出して勤めてくれ、内のために隨分なるから、實は內の金箱だと是と二人で褒めてゐるので、首尾よく年を勤めてくれりやあ、惡い樣にはしまいから、辛抱するやうお前からも、よく當人に言つて下せえ。

九郎　へい、申しますでございます。
せん　あれから直にさつきのことを、旦那へお話し申したら、外ならぬおさよ故貸して遣らうとおつしやるから、苦勞にせずと安心しな。
さよ　え、それでは百圓私に、お貸しなすつて下さいますとか。
九郎　重ね〴〵の御高恩、何とお禮を申さうか。
さよ　これで夫の命が助かり、こんな嬉しいことはございません。
九郎　旦那樣、
さよ　おかみさん、
兩人　有難うございます。（ト辭儀をなす。此內十兵衞帳場簞笥より札を百圓出し、おせんに渡す。）
せん　さあ百圓改めてお請取り。（ト出す。）
十兵　九郎兵衞殿、印形を持つて居なさるか。
九郎　はい、持參致して居ります。
十兵　それは丁度よかつた。（ト十兵衞罫紙へ證文を認める。此內九郎兵衞おさよ悅ぶこなし）
さよ　もし九郎兵衞さん、お前も此の御恩を忘れては濟みませんよ。

九郎　なに忘れるものか、そなたも是から御奉公を、猶大事に勤めてくれろ。
さよ　そりやお前がいはずとも、此の御恩返しに今迄より、輪を掛けて勤めます。
九郎　どうかさうしてくれ、百圓といふ札を、直にお貸し下さるとは、
さよ　是も偏におかみさんのお蔭故、
九郎　まことに有難うござります。
さよ　おかみさん、有難うござります。（ト銘々に禮を言つて悦ぶ、此内十兵衛證文を書き、印紙を張り、）
十兵　さあ九郎兵衛さん、念の爲め印形を。
九郎　畏りましてござりまする。（ト紙入より印形を出し、）印紙がござりませぬが、取つて參りませう。
十兵　内にあるから張つておいた。
九郎　それは種々有難うござります。（ト證文を見て印を押し、おさよにも見せ、爪印をさせる。）へイ、旦那まことに有難うござります。おかみさん、早速有難うござりました。どうぞお後で旦那樣に宜しう仰しやつて下さりませ。
せん　モウそんなに禮を言はずと、札を改めておさよにも見せて、安心おさせ。
九郎　へイ、有難うござります。これおさよ、そなたのお蔭で命が助かり、一度ならず二度迄も、實に

女房とは思はない。（ト涙をこぼして禮を言ふ。）

さよ　旦那さんやおかみさんはいゝけれど、人が聞くと見ッともないから、私に禮をお言ひなさいますな。

九郎　それだといつて何の中でも、ちつとは義理のあるものだ。

十兵　こりやァさうだ、はゝゝゝ。（ト爰へ下手の廊下より、伴藏傳八出來り。）

伴藏　上つた時には二人共、隨分出來がよかつたが、追手としれて女は來ず、

傳八　男同士で退屈故、樣子を見ようと爰へ來掛り、今の話を聞きましたが、

伴藏　いゝ女房を持つてこなたの仕合せ。附いては情深い御主人で、斯うして貸して下すつたから、

傳八　九郎兵衞の命も助かり、店請人と證人の我々も助かります、有難うござります。

ト兩人辭儀をする、九郎兵衞二人に向ひ、

九郎　おさよのお蔭で此金が、思ひがけなく手に入つたが、是をみんな返してしまへば、又直に困る故どうぞ元手の殘る樣、取計らつて下さりませ。

伴藏　それは決して案じなさるな、我々二人が貸方へは、なるたけねぎつてお前の手へ、金のはひる樣にして上げよう。

傳八　金といふのも外ならぬ、お內儀が苦勞した金、どうぞ是で九郞兵衞殿の取續きの出來る樣、

伴藏　したいといふのも二人とも、

傳八　皆舊友のよしみ故。

さよ　かうして離れてをりますれば、何分ともにお二人樣、よい樣にお賴み申します。

伴藏　九郞兵衞殿のことに付いては、惡い樣にはしまいから、

傳八　わたし達に任せておき、決して苦勞しなさいますな。

さよ　有難うござりまする。

九郞　厚い御恩になつた上、御厄介になつては濟まぬから、わたしは直にお暇すると致しませう。

さよ　もう暮れるのに百圓の札を持つて知らぬ所へ、宿を取るより今夜はこちらへ、泊つた方がよいではありませんか。

十兵　おさよだつて久し振だ、今夜はゆつくり爰へ泊つて、

せん　明日早く立つた方が、こちらも安心します。

九郞　有難うはござりますが、大磯迄夜を掛けてのり出して置きますと、明日の都合もよい上に、生業都合もござりますれば、是から直にお暇致します。（ト札を入れし紙入を懷中して、）段々有難うござ

りました、左様なら御機嫌よろしう。（ト立掛るを留めて、）

十兵　然し夜に入つては、なんぼ街道でも一人ぢやあ物騒だ。

伴藏　どうで追手に來た二人が、一緒に歸れば三人連れ、

傳八　道中筋は大丈夫、決してお案じなさいますな。

さよ　そんならどうでも是から直に。（ト本意なきこなし。）

九郎　少しも早く東京へ、歸つて一旗上げる氣だ、そなたも體を大事にしなさい。

伴藏　どれ、お見世へ行つて二人の、

傳八　勘定をして歸りませう。（ト三人そこ〳〵に立上る。）

さよ　それでは九郎兵衞さん、話しがあるからちよつと部屋へ寄つておくれ。

九郎　二人の衆も待つてござるし、遲くなるとそれこそ物騷だ。さうして、何の話しだ。

さよ　爰では言ひ難いことですから。

九郎　近い内にお禮ながら、泊り掛けに來て、ゆつくり話さう。

十兵　それぢやあ九郎兵衞殿、氣を付けて行きなせえ。

九郎　へい、有難うござりまする。

せん　おさよ、其處迄見てお上げ。

さよ　はい。（ト嬉しき思入。）

伴藏
傳八　さあ、行きませう。

ト鳴物入り「送りませうかえ」の唄になり、伴藏傳八先に九郎兵衛おさよ並んで、捨ぜりふを言ひながら花道へはひる。此鳴物にて、下手より藝者おこま子供を連れ出來り、

こま　おかみさん、さつき迄遊んで居ましたが、思ひ出したかして泣いて困りますから、連れて來ました。

せん　可愛さうに今に尋ねて來ようから、おとなしく待つて居な。（ト十兵衛子供を見て、）

十兵　迷兒といふは、此子か。

せん　はい、いゝ子ぢやあございませんか。

十兵　目つきから鼻つきは、何處かおさよに似て居るぢやあないか。

せん　ほんにさうおつしやれば口元迄、あの子に生寫しでございます。

こま　氣が付きませんでしたが、まことによく似て居りますね。

ト端唄の合方になり、花道よりおさよしを〳〵と出來り、直舞臺へ來て、

さよ　旦那さん、おかみさん、有難うございました。九郎兵衛も宜しく申しました。

十兵　もう歸りなすつたか、泊つて行けばいゝに。（トおさよ子供に心付き、）

さよ　おかみさん、此子は何處の子でございます。

せん　此の子は地藏樣の御門に泣いて居た故、わたしが内へ連れて來てやつた迷兒さ。

さよ　それは可愛さうに。（ト言ひながら子供の顏を見てびつくりなし、）おゝそなたは、おみつぢやないか。

子供　あい、わたしやおみつでござります。

せん　お前此子を知つて居るのかえ。

さよ　はい、（ト思入あつて、）知つてをります。（ト子供に向ひ、）そなたは誰と一緒に、こつちへ來たのだえ。

みつ　おつかさんが死んだ故、良助ぢいやあと一緒に來ました。

さよ　え、それでは里のおつかさんは、死んだのかえ。

みつ　あい、此間死んでしまひましたァ。（ト泣く、十兵衛扨はといふ思入にて、）

十兵　おさよ、其子はおぬしの由緣の者か。

さよ　何をお隱し申しませう、今爰へ參りました九郎兵衛との中へ出來ました、實の娘でございます。

せん　そんならそなたの實の娘かえ。
こま　それでは顏が似て居る譯でございます。
さよ　これ、そなたは私の眞實の子だよ。
みつ　いえ〳〵わたしのおつかさんは、こんな綺麗なおつかさんではない、良助ぢいやァのがおつかさんでございます。
さよ　あれはそなたの里親で、眞實のおつかさんはわたしだよ。
せん　それでは此子は小い時より、里にでも遣つてあつたのかえ。
さよ　生れました時乳がなく、丁度家來の其娘が、我子が死んで乳が張り困るといふ故其處へ預け、時折顏は見ましたが、十日と一つに居りませねば、親といふのは存じませぬ。
十兵　迷つて居たのを折もよくおせんが爰へ連れて來たのは、親子盡きない緣だから、連のぢいやあが搜して來る迄、部屋へ連れて行くがいゝ。
せん　もう少し早く知れたら、九郎兵衛さんにも逢はれるもの、
こま　惜しいことをしましたね。
さよ　これに付けても九郎兵衛さんが、泊つて行きなさればよかつたに。

こま　さあおさよさん、一緒に連れて行きませう。（トお光の手を取る。矢張泣いて居る故、）

さよ　ぢいやあの來る迄、どれ遊ばしてやりませう。（トおみつを連れ、おさよ、おこま下手の廊下口へはひる。）

十兵　不思議なことから二人の中に、子のあることを初めて知つた。

せん　それはいゝがあの子をば、若し尋ねて來なければ、あの儘では置かれますまい。

十兵　今日來なければ委しい譯を、屯所へ屆けて置きさへすれば、人民保護のお役の衆から、所々へお達し下さるから、直に知れるに違えねえ。

せん　おさよに聞いたら深川の、以前家來の內といふのが、多分知れるでありませう。

十兵　其の家來へ里に遣つたと、今もあれが話といひ、噂に聞けばあのおさよは、立派な士族の娘ださうだが、亭主の爲に苦界の勤め、以前は樂に暮して居た、いゝ人だけに落ちぶれて、氣の毒なことぢやあねえか。

せん　ほんに不仕合せな子でございますね。

ト早めたる騷ぎの鳴物になり、花道より若い者太藏出來り、直舞臺へ來て、

太藏　もしおかみさん、笠を見付けて先程の、迷兒の親仁が尋ねて來ました。

せん　尋ねて來たらこつちへよこしな。

太藏　畏りました。（ト花道へ引返す。）
十兵　何にしろ連が來て、
せん　おさよも里の安否がしれ、
十兵　こつちも屆ける世話がなく、
せん　わたしも安心、あの子も仕合せ、
十兵　めつぽう都合が、（ト伸をするを道具替りの知らせ）よかつたなあ。
ト肩の張る思入、おせん十兵衞の肩を叩くこなし、所作の切にて道具廻る。

（おさよ部屋の場）――本舞臺元のおさよの部屋、上手におさよ住ひ、おこま、おきよ、おなか、お豆子供のおみつを取卷き、合卷を見せて居る、よき所へ誂の置きランプをする爪端唄の合方にて道具留る。

さよ　おみつお前の氣に入つた物を、どれでも取つてお喰べ。（ト以前の掛盤の菓子を遣る。）
みつ　わたしの好きなおいちがないね。
お豆　おや〳〵お前もおいちが好きかえ、わたしも内に居た時分はおいちやねちがねが好きだつたが、今ぢやあまづくて喰べられません。

こま　洒落たことをお言ひでないよ。
きよ　さあ、どれでもよいのを早くお取り。
みつ　それでは、みんなお菓子かえ。
きよ　みんなお菓子だが、どれがよいね。
なか　どれ〳〵わたしが見立てゝあげませう。（ト懐紙の上へ二つ三つ取つて遣る。）
みつ　有難うござります。
さよ　豆どんにも遣つておくれよ。
お豆　わたしは此の有平がようござります。
こま　蟲のいゝことを言ふ子だの。
お豆　どうぞそれを下さいまし。
きよ　それをやるから、此の頃はやりの、
なか　へら〳〵へいを踊つて見せな。
お豆　踊ります〳〵。（ト前へ出て。）箱根にお化が今はない、ほんとにあつたら凄かろよ、へら〳〵へい〳〵。

ト　お豆以前の手拭を冠つて宜しくちよつと振あつて有平を貰ひ、ヒウドロ〳〵と言ひながら下手へはひろ、誂の合方になり、下手より太藏先に良助更けたる打扮、脚袢三尺の上帶、旅裝にて出來り

良助　これは大きに、お世話樣でござります。

太藏　もしおさよさん、其子の親父が尋ねて來ました。

さよ　おゝ良助か。

良助　おさよ樣、お替りもござりませぬか。

みつ　ぢいやあか。（ト良助に縋る。）

良助　おみつ樣、よくおとなしくしておいでなされました。

太藏　ぜんたい、どうして迷兒にしなすつたのだ。

良助　地藏樣がおはやりなさると大層な評判故、無事に此のお子が成人する樣、お連れ申してお參り申し、とつた笠を冠つて居る内、つい人込にて見失ひ、飛んだことをしたとわたくしも、氣違ひのやうになつて、方々と尋ねてをる内さる方が、其の迷兒は小田原の宿で二人とない程な、お美しいおかみさんが、連れておいでといふこと故、それを力に搜す内、お見世の柱に掛つた子供の笠がふつと目に付き、もしやと思つてお尋ね申せば、無事で此方においでと聞き、大安心を致しま

した。

さよ　此の子がお内のおかみさんに、爰へ連れて來られるとは、ほんに不思議なことでありました。

良助　これも大方お參り申した、地藏樣の皆御利益、南無地藏尊かあかみさんまんえいそわか。

ト拍手を打ち拜む。

こま　今おさよさんが言ひなさんした、お前さんの娘御さんが、里にお取りなさんしたのかえ。

良助　はい、おさよ樣と同じ樣に、娘も産をしましたが、七夜の晩に其孫は蟲で取られてしまひました。

太藏　やれ、可愛さうに。

良助　所が御方便にわたくし方へ此お子を、里にお取り申しました。

こま　それでお前の娘御を、眞實のおつかさんだと思つておゐでのだね。

きよ　さつきからおさよさんが、幾らほんとうの子だとお言ひでも、

なか　今迄それを知らぬと見えて、ほんとでないと言うてぢやわいな。

さよ　今聞けばおつかさんが死んだといふが、そなたの娘は亡くなつたのかえ。

良助　はい、御存じの通り五年後に、民の亭主が病死致し、それから世帶もしまひまして、私方へ娘は同居、此お子樣を我子の如く大きくなるを樂しみに、お育て申してをりましたが、去年からして

ぶら〳〵と血勞とかいふ病ひにて、一月毎に惡くなり、とう〳〵先月七日の晩に、はかなくなりましてござりまする。（ト手拭で涙をふき、）それから後は男の手一つ、お育て申しかねます故、あなた樣にお目にかゝり、御相談を致しませうと、實はそれで此子を連れ、昨日東京を立ちましてござりまする。（ト是を聞き皆々思入あつて、）

こま 今お聞き申した樣子では、定めて内輪のお話しがありませうから、私達が爰に居てはお邪魔故、

きよ ほんにこゝらは氣を利かして、

なか わたしのところにお鮨があれば、

太藏 御馳走になりに行きませう。

さよ まあ、お話しなさいな。

こま 又後に遊びに來ませう。（トわや〳〵言ひながら、四人下手へはひる。）

さよ ほんに苦勞のない樣に、羨しいね。

良助 娘なども今の衆の樣に、達者でをつたらようござりませうに、年寄りますとつい愚痴が出てなりませぬ。

さよ ほんにたつた一人の娘を、氣の毒なことをしましたなあ。

良助　これおみつ様、是がお前の實の母様、此間迄お乳を上げたは、いはゞお乳母も同様な、此良助ぢいが娘だから、あれは眞實のおつかさんではないよ。

みつ　そんなら此の美しい伯母さんが、ほんとうのおッかさんでござりますか。

さよ　おゝ今も良助がいふ通り、そなたはわたしが生んだなれど、乳がない故お民の所へ七夜の晩から預けたそなた、其後度々逢うたれど、まことの母といふことを今日迄明して聞かさぬ故、知らずに居たも尤もぢやわいな。(ト以前の掛盤を取寄せ、)さあ、何なりとも一つおたべ。(ト菓子を取て遣る。)

みつ　ぢいやあ、いゝお菓子だから、おたべよ。(ト取つて遣る。)

良助　おゝ是は結構なお菓子だ。どれ、お相伴をしませう。

さよ　ほんに、せめてもう少し早く此子が知れたなら、父様に逢はせたものを、惜しいことをしましたわいな。(ト菓子を喰べかける、良助是を聞き、)

良助　へえゝ、それでは九郎兵衛様は、こちらへおいでなされましたか。

さよ　今し方九郎兵衛さんが、暇乞をして歸らしやんした。

良助　旅籠屋は門並あれど、二十里ある東京へ日暮を見掛けてお歸りとは。(ト合點の行かぬ思入にて、)さうして、何しにおいでなされました。

さよ　久しく逢はぬと今日爰へ、來なさんしたがすまぬ顏色、案じる內に手水に立つた跡にあつた紙入を明けて見れば中に書置、びつくりして樣子を聞けば、何をしても間が惡く百圓餘の借が出來、返せぬ故今夜死ねば暇乞に實は來たと、話の內に東京から追手に來たは二人の舊友、それが金の證人にて難儀をする故金が出來ずば、九郎兵衞さんを連れて行くと、聞いて私も見て居られず、まだ前借のある上に旦那さんから百圓借り、それを渡すと悅ばしやんして、明日の都合で大磯迄行つて泊ると三人して、今し方歸りなさんした。（ト是を聞き良助びつくりして、）

良助　もう一足早く參らば、其の百圓をお前樣に、お出させ申しますまいもの、え丶悔しいことを致しました。（トおさよ合點の行かぬこなしにて、）

さよ　これ良助、そりやどういふ譯故に。

良助　もしおさよ樣、あなたがおいとしうございます。（ト愁ひの思入、合方きつぱりとなり。）あなたがこちへ出稼ぎにおいでなされた前借金で、一時の借は返されたが、それからこつちへ何もなさらず、毎日遊んでござる故、又々元の苦しいお暮し、私などは御家來故、どうでも宜しうございますが、只の一月でも里扶持を、下すつたことはござりませぬ。

さよ　え丶、すりやそなたの方へ九郎兵衞さんは、此子の手當を渡さぬとか。

良助　したが、それは構ひは致しませぬ、外の者ではなし、私ことはあなたのお里庵崎様へ中間奉公、旦那様には何よりか刀劍がお好故、お詞について研を覺え、其頃はまだ舊幕時分お暇を願ひ江戸へ出て、研師を家業に相應な暮しを致して居りましたが、瓦解此の方廢刀の世界になつて上つたり、せうことなしに刀研が庖丁剃刀鋏研と、研盥を擔ぎまして歩きましたも得意がふえ、今では樂に暮されますも、旦那様で刀研を覺えましたお蔭故、御恩送りに此お子様のお世話を是迄致しましたが、娘が病死しましては何分にも手一つでお育て申しかねます故、九郎兵衛様へ其事をお話し申しに上つた所、あんな小さな者を押付けられてたまるものか、育てることが出來ずば、そつちで外へ預けて置き、年頃にして連れて來いと、けんもほろゝな御挨拶、餘儀なくあなたをお尋ね申し、御相談を致した上、靜岡においでなさります御隱居様へお話し申して、お世話をお願ひ申さうかと、存じまして遙々と、こちら迄參りましてござります。

ト思入あつて言ふ。おさよびつくりし、

さよ　さういふ事とは夢にも知らず、纔な稼ぎの其内で、おみつの手當何やかや、不自由勝の其上に仕馴れぬことでお困りと、毎日苦勞をして居たに、女房を娼妓に賣つて置き、たつた一人の子の世話もしなさんせぬとは情ない、何時そんな氣にならしたなあ。

ト泣く、良助尤もといふこなしあつて、

良助　實に申すも情ない、あなたが前借なされた金も、纔お借へ入れたぎり、跡のお金は皆主に酒と博奕と女郎買、それも一人で行く事か、供といふのは以前のお仲間、ならず者を相手になされ、何商法もなさらぬ故世間に大した借が出來、四五日跡にお内は出たぎり、支配人から逃亡のお屆けをしたとやら、最前こちらへおいでなされて死ぬの何のと言はれしは、それはみんな僞事、又一緒に歸つた其二人は、日頃からの合口で銜り仲間でござりまする。（ト是を聞き、おさよ腹の立思入。）

さよ　それでは私を僞つて、百圓借りて行かしやんしたか、てもまあ酷い仕方ぢやなあ。

トむかうへぢつとこなし。

良助　お前樣を誑つても其の百圓を資本にして、身でも持つことならよいけれど、此頃聞けば餘所外に言交した女が出來、現をぬかしてござるとやら、其の百圓も其女に遣ふ金でござりませう、さうとも知らず誑られたお前樣が、良助はおいとしうござります。

ト此内おさよは悔しき思入にて、持つて居た團扇を引裂き、きつと向うを見て、

さよ　此小田原へ來てからも、元手に困ると賴み故、おみつに着物の一枚も着せて遣らうと思つた金を貸して上げたも兩三度、其後久しく便りのないは取續いて居なさると、思ひの外に借金で死なね

ばならぬと哀れな話、實と思つて貸して上げたあの百圓は、馴染の女に遣ふ金であつたるか、親の恥辱も厭はずに賤しい娼妓の勤をするも、夫の爲と思ふのに、又もや深みへはめるとは言はう様ない人でなし、斯ういふ心と知らぬ故、朝夕拜む神佛もわたしの事より第一に夫の開運二つには、此子が無事に育つやうと、頼まぬ日とてはござんせぬ、こつちは夫を思ふのに、お前は女房を思はぬか、男泣きに涙をこぼし、死ぬとある故まことゝ思ひ、欺されたのが腹が立つ、大磯迄行くとあれば、車で跡を追掛けて、恨みを言はねば腹がいえぬ。

ト悔しき思入にて立掛る。おみつおさよに縋り、

みつ　何處へ行くのだえ。（トおさよおみつを見て向うへこなし。）

さよ　えゝ情ない九郎兵衞さん、此子は可愛うないことか、少しも早く此恨みを

ト下手へ行掛るを。良助留め、

良助　まあ〳〵、お待ちなされませ。

さよ　留めずに一緒に來やいなう。

ト振拂つて行掛ける。此時上手屋體より以前の十兵衞、おせん出かゝり、

十兵　おさよ、まあ待ちな。

さよ　はい。（トもぢ／＼してゐる。）

十兵　さて、先刻からの一部始終、隣座敷で聞いて居た、腹の立つのは尤もだが、元より巧んで己ぐるみ一ぺいはめて歸つた三人、なに大磯に居るものか、まあ氣を靜めて爰へ來やれ。

ト十兵衞おせん上手に住ふ、おさよこちらへ來て、

さよ　旦那樣おかみさん、まことに悔しうござります。（ト泣き伏す、誂への合方になり、）

せん　其悔しいのは尤もだが、九郎兵衞さんが涙をこぼし死ぬといふのは旦那もわたしも、まことの事と思つた故、直にお前に百圓貸し、そつくり亭主に持たしてやつたが、是から跡を追掛けたとて何處に居るか知れはしまい。

良助　實に左樣でござります、又首尾よく道で逢ふ時は、あゝいふ人達でござりますから、まだ此上にどの樣なあなたに難儀を掛けようも、知れたものではござりませぬ。まあ諦めるより仕方はござりませぬ。

さよ　旦那樣やおかみさんのお詞を背いては濟みませぬが、餘り悔しうござりますから、誰ぞ頼んで一緒に行き、爰へ連れて來たうござります。

十兵　はて、それが益ないことゝいふもの。これおさよ、こりやあ話だからよく聞きな。どんな惡い亭

主でも夫婦の中の情合はこりやあ又別なもので、容易にはたから水なぞをさせるものぢやあねえけれど、今老爺やあとかの話といひ、眼前今日の始末ぢやあとても行末妻子の力に、己はなるめえと思ふから、あの百圓を手切と思つて、九郎兵衛殿と切れなせえ、夫婦と言へど其籍は九郎兵衛附籍のおさよ故、表向で女房といふ事ならぬを幸ひに、これをかせに縁を切り、もう一稼ぎかせいでくれたら、何處へか生涯樂な所へ此十兵衛が里になり片付けて遣らうから、必ずくよく思ひなさんな、よし又今に改心して眞人間に成らうとも、死んだと思やあそれ迄だ、こりやあ諦らめた方が上分別だぜ。

せん　わたしも外に兄弟と頼みに思ふ者もなければ、妹と思つてお前の世話は、二人でするから案じなさんな。（ト此内おさよ俯向きゐる故）

良助　御親切に有難いお二人樣の今のお勸め、何分お世話をお頼み申すと、早くお願ひなされませ。どうで九郎兵衛樣は頼みにならぬと、思召したがようござります。（ト是にておさよ顔を上げ、）

さよ　お慈悲深いお二人樣故、其樣におつしやつて下さいますは有難うございますが、九郎兵衛殿と馴合つて、あの樣な事を申しまして百圓金を衒りしかと、思召しませうかと存じますと、實に顔が上げられませぬ。

十兵　つまらねえことを言つたものだ、誰がそんなことを思ふものか、それは不斷にあることだ。
せん　娼妓に稀なお前の心、常から褒めてゐるからは、誰がそんな事を思ひませう。
十兵　然しあの百圓が氣になるなら、おぬしに遣るから心配するな。
さよ　え、そんならあのお金を、わたくしに。
十兵　おゝ、さつき取つた證文は、おぬしの方へ返して遣らう。（ト以前の證文を投げてやる。）
さよ　いえ〳〵大まいの其お金を、まだ一日も勤めずに、あなたにお貰ひ申しては、
十兵　はて其心配には決して及ばぬ、去年おぬしが內へ來てから、此宿一の見世の繁昌、不斷賣れねえ子供迄お茶を引いたことがなく、幾ら儲けたか知れやあしねえ。さつき百圓貸したのも、實はおぬしへ褒美にやる氣だ。
良助　なるほど多くの人を遣ひ、派手な家業をなさるだけ、誰は斯うだと不斷からお見分けなされて御褒美迄、御心配下さるとは實に御主人は有難い。斯うして見ると何奉公も、主人は麁末に出來ないわけ、早くお禮をおつしやりませ。
さよ　いえ〳〵私が參つたとて、お見世のはやるわけではない。お內の暖簾がよい上に、お部屋に人氣がございます故、それをわたしに御褒美とは、勿體なうございます。

十兵　其辭退には及ばぬといふもの、お前の親御樣が庵崎樣とあるからは彌勒町に居た時分、普請をする時五百圓お借り申したこともあれば、見ず知らずと言ふではなし、決して心配しねえがいゝ。

良助　是程迄におつしやりますお二人樣の思召を、無足にしては濟みますまい。

十兵　恩には掛けぬ其の證書は、

せん　心ばかりの褒美故、

十兵　器用に受けて、

兩人　置くがいゝ。（ト是にておさよ思入あつて、）

さよ　何から何迄其樣に、お心籠めての此の御褒美、お貰ひ申すでござります。

十兵　それぢやあ受けてくれると言ふのか。

さよ　旦那樣、おかみさん、有難うござります。（ト證文を頂く。）

良助　是で何より私が安堵致してござります。（ト騷ぎの鳴物になり、下手よりおこま、おきよ、おなか出來り、）

こま　もしおさよさん、今し方上つた大一座の、

きよ　廣間でお酌が踊りますから、

なか　其子に見せて上げませう。

さよ　それは有難うございます。
みつ　早く行つて見たうございます。
良助　お宅が廣いから、お內で迷兒にならぬ樣、皆さんお願ひ申します。
十兵　そんな廣い內ぢやあねえ。
さよ　ほんに迷兒も迷はずに、
良助　こちらへ參つて大仕合せ、
せん　是から此子を手元で育て、
十兵　もう一と稼ぎ、(ト立上るを木の頭。)して下せえ。
ト十兵衞おせん上手へ行掛ける。おさよ、良助證文を見て悅ぶこなし、此模樣宿場騷ぎにて賑かに、
ひやうし　幕

二幕目　箱根湯本福住の場

〔役名――岩淵九郎兵衞、研師鳴澤良助、厚原磯之進、浮島新三郞、浮島の番頭正兵衞。娼妓おさよ、女房おせん、旅藝者おきつ、磯之進妹お花、新三郞母おしが、其他。〕

（福住店頭の場）――本舞臺四間常足の二重、本庇銅網の蹴込み、上手一間折廻し下足入の戸棚、眞中九尺の出這入り此向う手摺付の廊下より庭を見たる片遠見、下手一面の板羽目諸縣定宿の掛札、賣藥取次のびら抔、上手の見切鐵の駒寄せ、青石西洋館の張物、下手同く板羽目の見切、此前掛樋吹水の流れ、軒口に一新講の旗を出し、總て箱根湯本福住見世先の體、爰に長七散髮髷着流し福住番頭の打扮にて帳場を控へ、平舞臺におやま島田鬘前掛下女の裝にて、落間へ如露にて水をまき、おやす同じく下女にて掛樋の下にて旅人の脚袢を洗濯して居る、此模樣驛路入りの箱根八里、流の音にて幕明く。

やま もしお安どん、洗濯物が落ちなければ、シャボンを使つてお洗ひよ。

やす もう一足になつたから、シャボンには及ばぬわいな。

やま 今年は取分道者が多く、其内にも西の方から泊りになつたお客樣は、みんな富士の戻り故、汚れきつた脚袢や甲掛、晝寐をする間もないわいな。

やす ほんに一夜の道者衆は此混雜も察しないで、脚袢や足袋の洗濯をわたし共に頼むのは、目先の見えぬものでござんす。

長吉 其のお世話をして上げるが一新講社の規則故、決して麁末にしてはならぬ、それに今朝破風屋か

ら知せのあつた、靜岡の厚原樣がおいでとあれば、西洋館の十二疊をよく掃除して置くがいゝ。
やま　其の知せで思ひ出したは、今朝小田原から上つておいでの魚屋さんから屆いた手紙は、何處の座敷へ參りましたえ。
長吉　あれは二十一番の八疊にいらつしやる、小田原の海老屋のおかみさんへ、内から來たお手紙だ。
やす　あのおかみさんと御一緒の女中衆はいゝ器量、たゞのお方とは見えませぬが、
兩人　何者でござりますえ。
長吉　あれは海老屋の一枚看板、先づ小田原切つて大磯にも並ぶ者なき女郎衆で、名は小夜衣おさよといつて、あすこの内の金箱だ。
やま　いゝ調子のお方故、さうであらうと思ひましたが、湯治においでなすつては、肝腎のお見世が明きませう。
やす　それとも、素人になつたのでござりますかえ。
長吉　なあに、此頃ぶら〳〵病ひで氣が欝いでおいで故、お上さんが御一緒に、遊山湯治に二週間此箱根へいらつしやつたのだ。
やま　御遊山とあるなら去年の樣に、伊左衞門さんでもおいでゞあつたら、義太夫でも語らして嘸御保

養になりませうに。
長吉 ところがあの伊左衛門さんは、去年に限らず箱根へかゝさず湯治に來なさるが、幾らお客の好みでも湯時中は決して出ぬと、それで何時でも聞きそこなふて。
やす そんなことを言はないで、語つたらよささうなもの、ほんに定格でござりますねえ。
長吉 いまだに湯治へござらぬは、播摩太夫になつたので、東京の席が忙しく、それでおいでがないのであらう。
やま 何ぞお慰みになる、よい藝人が、
やす 七湯の内へ來ますか。
長吉 大概の藝人より三味線さへあれば、わしの清元が延壽太夫の次へ出るのだ。
やま ほんに此間旦那さんも東京切つて箱根にも、
やす あんな清元はないとおつしやいました。
長吉 定めし旨いといつたらうの。
やま いいえ、あの位まづいのは、外にはないと、
兩人 おつしやいましたよ。

長吉　えゝ人をへこましたな。

兩人　お顏の通りでござりまする。（ト箱根八里になり、花道より、前幕の伴藏、傳八生醉の思入にて出來り、）

伴藏　樂あれば苦ある浮世の習ひにて、あの岩淵がおさよをだまし、百圓借りた其金も山を打越し三島へ行き、宿の女郎を惣揚に、大すつちやんで愉快を極め、三日流した其擧句に、

傳八　熱海へ行つたことがないから、遊山がてら藤屋へ行つて一週間の湯治をしたので、御大將の岩淵が囊中おのづと手薄になり、君々たれば臣々たりと、元より錢なき黑瀨、相澤、

伴藏　相談の上此湯元に、目的あつて下つて來たが、峠の茶屋から川端迄の、駕籠賃さへがやつとのとこへ、

傳八　畑の升屋で一升引ッかけ、其勢ひで是まで歩き、膝ががく〳〵致して參つた。

伴藏　申合したこともござれば、先づ福住へ一泊致し、岩淵氏の參るのを待合さうではござらぬか。

傳八　でくぼく道の山坂ばかり、實に拙者も草臥たれば、君御盡力下されて、かの旅宿をおはからひ下され。

伴藏　其所は身共が胸にあり、えゝい。

傳八　成程、溜飲と同樣でござるな。

兩人　はゝゝゝ。（ト兩人ひよろ〳〵しながら舞臺へ來て下手にて、）

仲藏　毎度當家の厄介になる身共等は、小田原の者ぢやが、又今日も泊めてくりやれ。

ト是にて長吉惡い奴だといふ思入あつて、

長吉　それは毎度有難う存じますが、あひにく今日は立込みまして、どこの座敷も皆ふさがり、一間も明いてをりませぬ。

やま　まことにお氣の毒樣で、

三人　ござりまする。

傳八　いや決して座敷の斟酌には及ばぬ、今一人峠より下つて參る者もあれば、何れの所でも苦しうない、左樣申さず泊めてくりやれ。

長吉　いえ、明いてさへをれば御贔屓樣ゆゑ、お斷り申しませぬが、御案內の道者衆で何處も一ぱいでござりますれば。

仲藏　いや、よしんば車夫の寐る處でもよい、其心配には及ばぬ。泊めてくれ〳〵。

長吉　いえ、折角のおいでながら、

やま　失禮がござりましては、

やす　手前方で濟みませねば、

長吉　どうぞ、御勘辨を、

三人　願ひまする。（ト三人にて斷るを傳八出て）

傳八　こりや／＼若い衆、一人旅ならしらぬこと、兩人の外今一人後より參ると申すのに、何故あつて斷るのだ。あゝ聞えた、こりや身共等が身裝の惡さに、あやぶみて斷つたな。

長吉　いえ、なか／＼さういふ譯では。

傳八　いやさうだ／＼、今廢刀の世の中に大小こそさゝねども、我等二人は士族だぞ。纔一夜の泊位に差支へある樣な者だと思ふか、どうでも都合致して泊めろ。

ト兩人二重へ腰を掛ける、長吉困りし思入にて、

長吉　決して御人體には拘はりませぬが、何分明いてをらぬ故、致し方がござりませぬ。

仲藏　まだ／＼左樣に斷るなら、念晴しに座敷を見せろ。

傳八　もし塞がつて居たことなら、いかにも許して遣はさう。

兩人　さあ案內しろ／＼。（ト立掛るを、長吉留めて）

長吉　其の御立腹は御尤も、實は明いたところも、いえなに、明いてをればお入れ申しますが、これは

まつたくでござりますから。

伴藏　いや、止める程猶わからねえ。

傳八　何でも上つて見にやあならねえ。（ト又立上るをとめて、）

長吉　どうぞお客のお邪魔になりますから、

三人　御勘辨を願ひまする。

伴藏 傳八　えゝ、いやだ〳〵。

長吉　左樣なら、斯樣なすつて下さいまし、手前より御案内致しますから、小川なり湯元なり、いらしつて下さりませ。

伴藏　初めて箱根へ來やあしねえ、案内される田舍者と、一つにされてたまるものかえ。

傳八　泊めずばいゝ、勝手に行くわ。うぬ等、覺えて居やあがれ。

長吉　それでは恐入りますから、ちよつと御案内致しませう。（ト二重より下りて一緒に行かうとするを、）

伴藏　えゝ、いゝといつたら、面と一緒に、

傳八　そつちの方へ、

兩人　引込んで居ろ。

ト兩人にて長吉を蹴倒す、矢張右の唄になり、伴藏傳八ひよろ／＼しながら下手へはひる。長吉倒れて居るを、おやまお安介抱しながら、

やま　長どん、何處も怪我は、

兩人　しなさんせぬかえ。

長吉　あゝ痛へ／＼、士族でなければあんな奴にあやまる己ではないけれど、生業に負けて堪忍してやつたのだ。

やま　見ともないから、

やす　早く起きなさんせ。

長吉　色の出來ねえ奴等と見えて、しぞく（ひどく）腰を蹴りやあがつた。

やま　こりやしぞく（しごく）御尤もな洒落だねえ。

ト驛路入りの合方、水の音になり、花道より磯之進、羽織襠高袴、半靴士族の打扮にて、ステッキを持ち妹お花同じく旅裝麻裏草履にて、下女おいそに手を引かれ、跡より供草鞋にて大形のカバンと包みを割掛にして出來り、花道にて、

磯之　妹嘸草臥れたであらう、最早向うが福住なれば、もう一息辛抱しや。

お花　今朝から駕で草臥ましたから、歩きますのも運動がてら、氣が晴れて宜しうございります。

いそ　孃さま、天野屋で函根細工をお取りなさらないと、福住迄お駕籠で參りますのに。

供　近い樣でも天野屋からは、六七町の山道で、なか〳〵御難儀でござりませう。

磯之　福住へ參つたら、十分入湯致すがよい。

　　ト矢張右の合方にて舞臺へ來る、此内長吉向うへ思入あつて、下女と花道の附際迄出迎ひ、

長吉　これは靜岡の旦那樣、大層お早いお着でござりました、相替りませず、

三人　有難う存じまする。（ト此内皆々舞臺へ來り、二重へ腰を掛け、はき物を脱ぎ、）

磯之　あまり朝から快晴ゆゑ、破風屋の庭より舟を頼み、湖水の景色を眺めながら權現へ參詣致し、遲くならうと存ぜしところ、駕籠屋が血氣に急ぎし故、日のある内に着致した。

長吉　峠から今朝早くお言傳がござりましたから、實は松明の用意を致し、夕方から畑邊りへお迎ひを出す心得でござりました。

いそ　もつと早く着きますのを、甘酒屋の子を相手にして、お喋べりをやつて居たので、よつほど時間が立ちましたよ。（ト此内磯之進お花二重へ上り、）

磯之　いつもながら當家の繁昌、わたし共は供の者と纔四人連なれば、狹い所で苦しうない。

長吉　いえどう致しまして、お先觸がござりましたから、新規の西洋館を一間明けて置きました。

お花　噂に聞いて居ましたが、去年補理になつた西洋館は、大層立派な普請であると評判でござんすわいな。

長吉　して此度は七湯を、お廻りになりまするかな、

磯之　先づ當家に一週間程、逗留致した上のことぢや。

長吉　それは有難う存じまする。（ト此前よき時分、下手より以前の伴藏傳八出來り窺ひ居て、）

伴藏　いや〳〵番頭、跡から來た客を泊めながら、なぜ身共等を斷つた。

傳八　種のいゝやつだと思つて、よくもそいつを客にしたな。

伴藏　さ、先口だ、其客を斷つても、此兩人は泊らねばならぬ。

傳八　やい、座敷へ案內しろ。

兩人　さあ、案內しろ〳〵。（ト下手より眞中へ來るを、長吉出て、）

長吉　いえ此のお客樣は、今朝早く峠から知せがあつて、それでお座敷を除けてござります。是はお馴染で致し方がござりませぬ。

伴藏　何だ、馴染で仕方がない、此兩人も馴染だぞ。それとも馴染に二色あるか。

長吉　いえ、左樣な譯ではござりませぬ。
伴藏　それではなぜ泊めねえ。
長吉　どうも、お座敷が。
伴藏　え丶人を馬鹿にしやあがるな。
　　ト立掛らうとする、此内傳八磯之進に心付き、思ひ出せしこなしあつて、立掛る伴藏を留め、
傳八　こりや黑瀨、まづ待ちたまへ。
伴藏　いや、暴を申すから泊らねばならぬ。
傳八　はて、そりやいかん、先づ來給へ／＼。（ト無理に伴藏を引立て、花道迄來り。）彼にお氣が付かれぬか。
伴藏　なに、彼とは。
傳八　當時靜岡在留の擊劍家で、名の高い舊友厚原磯之進でござる。
伴藏　なに、厚原とな。（トびつくりなし氣を替へ。）なに、あいつらにこめられては引込まれぬ、何でも一泊せねばならぬ。
傳八　はて、身共に任してお置きなさい。
伴藏　いや、了簡ならぬ／＼。（ト言ひながら傳八より先に、花道へ逃げようとするを傳八とらへ。）

傳八　これはしたり、置きざりとはよい手廻しだ。
伴藏　いや了簡ならぬ〳〵。
傳八　はて身共に任してお置きなさい。
ト右の合方にて伴藏後じさりにしながら立腹なすを、傳八留めながら花道へはひる。
長吉　飛んだ客人が參りまして、嘸おやかましうござりましたらう、どうぞ御勘辨を願ひまする。
磯之　癈刀の時節故、しかと樣子は分らねど、以前は武家の物の言ひやう、當家で存じをる者かな。
長吉　別段存じた者でもないに、先から馴染と申しまして馴々しく參ります故、風體の惡いところから斷りましてござりまする。（ト思入あつて、）
お花　お兄樣、今の二人を御覽なされませぬか。
磯之　却つて逢つては面倒と、脇を向いてをつたのだ。
いそ　一人が旦那のお顏を見ると、びつくり致して袖を引き、急いで街道の方へ參りましたが、孃樣御存じでござりますかえ。
お花　元は同じ御組內、黑瀨相澤の兩人が、參つたのでござりまする。
磯之　すりや岩淵九郎兵衞が懇意に致す、伴藏、傳八。いや存じがけなきところで逢うた。

長吉　へえ、左樣なら今の二人は旦那樣が、御存じのお方でござりましたか。
磯之　ちと某に面會致し難き舊事件がござる故、それで脱れ參りしならん。
いそ　道理で一人が留めましたら、威張りながら後じさりに、はふ〳〵向うへ行きましたは、其譯でござりましたか。（ト合方になり、奥よりおしが大商人後家の打扮にて出來り、）
しが　これは厚原樣でござりましたか。
磯之　おゝ浮島の御老母なるか、はからざる御面會、こなたも湯治においでゞござるか。
しが　いえ、あなた樣の御存じの小田原へ出しました支店が、當節殊の外茶の賣が宜しいので、見廻りがてら四日前參つて丁度戻りがけ、湯治を致して參りまする、よくまああなたも御兄弟連で、お出掛けでござりました。
お花　箱根へ初めて參りまして、見る物每に珍らしく、體さへ健なれば此樣な樂みはござりませぬ。
いそ　旦那樣がお案じなされて、御遊山がてらの此の湯治、私の樣な者でも、胸隔の開く足しにならうと、お供を仰せ付りました。
しが　して、御不快とおつしやりますのは、何御病氣でござりますな。
磯之　別に病ひもござらねど、生れ付人並より兎角内端な性質に、些細な事も氣に致し、どうも鬱いで

ならぬ故、まだ此地は初めて故、遊山湯治に參つてござる。

しが　外の病ひと違ひまして、お欝ぎ遊ばす御性分は中々油斷がなりませぬから、そりや御心配でござりませう、して當分御湯治でござりますかな。

磯之　遊山がてら、ちと聞糺すこともござれば、先づ一週間と定め置き、次第に寄れば今一と週りも是に居る心得でござる。（トおしが思入あつて、）

しが　其の聞糺すとおつしやるのは、もしや悴の。

磯之
お花　え。

しが　いえ悴も是へ參りたがり、せびられて居りましたが、何分宅が明きますので、殘して出て參りました。

磯之　當分御逗留とあれば座敷にて、又お話など致すでござる。

しが　さ、お構ひなくとお座敷にて、御休息なされませ。

いそ　御案内して下さんせ。

長吉　へい、畏りましてござりまする。（ト磯之進思入あつて、）

磯之　御老母、後程お目に掛りまする。

ト矢張右の唄にて、長吉案内して皆々奥はひる、跡におしが居殘り思入あつて、

しが　磯之進樣がお妹御のお鬱ぎなされる病ひといひ、又お兄い樣が詞の內に、聞紀すことがあるとは、もしや忰の不身持を御存じあつてのことではないか。(ト四邊へ思入あつて、)こりやとつくり意見をせねばならぬ。

ト唄になり、おしが考へながら奥へはひろ。跡浮いた合方になり、東の揚幕より新三郎散髮かづら着流し駒下駄、商人息子の打扮にて、小さなカバンに蝙蝠傘を持ち、後よりおきつ藝者端折りの打扮、駒下駄にて新三郎の筒差の煙草入を持ち、マッチにて吸ひつけながら出來り、

きつ　もし若旦那、今夜は湯元へ泊るのかえ。

新三　七湯の內では湯本の福住が、普請のいゝのと主人の注意で、萬事氣を付けてくれるから、いつち寐心がよくつていゝ。

きつ　それに番頭の長どんが、飛んだ愛敬者で面白いから、東京から藝者衆なども先のつけに湯元へ行きますよ。

新三　ごうせい番頭をお前は褒めるが、何ぞ引きぬいたのぢやないか。

きつ　そんなことはないけれど、あんな顏でも長どんは、藝者が惚れますのさ。

新三　又惚れちやあいかねえぜ。

きつ　厭な、あんな散蓮花に。（ト煙管を新三郎に出しながら兩人舞臺へ來る。此内奥より長吉出來り、）

長吉　昨晩はお歸りと存じまして、お座敷を片付て置きましたら、とう〱何處かへお泊りでござりましたな。

新三　歸る積りで居た所を、木賀で無理に引留められ、龜屋の内へ寐てしまつた。

きつ　わたしは何でも歸らうといふに、無理に龜屋へお泊りなすつたは、何か當のあること〻昨夜はちつとも寐ませんよ。

長吉　ちん〱の夜明しは、嘸お疲れでござりませう、函根はなか〱物騷で、うつかり致すと若旦那を、どういふ婦人に攫はれますか、御油斷は出來ませぬ。

新三　おきつが湯本へ下らうと言ふを無理に木賀へ泊つたも、こつちの内をあやぶんで、それで昨夜歸らないのだ。

長吉　そりや又何故でござりまする。

新三　さあ、二言目にはおきつの口から、あの長吉は藝者好きがするの、又女が岡惚するのと、お前の噂ばかりするから、若し是が惚れやあしないかと、それで一晩明けたのだ。

長吉　これは又けしからぬ、福住九藏の宅に於ては、一人も左樣な者はござりませぬ、若旦那もそれは御安心なさいまし。

新三　どうして安心ならぬのは、東京のいろは新聞や歌舞伎新報へ出るお前の腕まへ、私はどんなに心配であらう。

きつ　人のことよりお前さんこそ、隨分いろはの御厄介、新聞を讀んで知つて居ますよ。

新三　それは大方久しい後に、東京の兩國と濱見物に行つたことがあらう。

きつ　飛んだ濱見物でござりますねえ。（ト新三郎なつめる、）

新三　あいたゝゝ。新聞よりよつぽど苦しい。

長吉　いや、言ふに言はれぬ此味ひ、こりや淸元のほしい所だ。

きつ　おや淸先にかこつけて、新聞ののろけかえ。

長吉　おきつさんも新聞で、御存じでござりますかえ。

きつ　長どん、よかつたねえ。

長吉　是はまことに面目ない。（ト此時奧にて、）

やま　もし番頭さん、浮島のお袋樣がお呼びなさいますよ。（ト新三郎思入あつて、）

新三　同じ名前もあるものだが、今浮島の客と言ひしは。

きつ　若しや若旦那のお内のお方が。

長吉　さあ、うつかり痴話は出來ませせぬ。昨日あなたのお袋樣が、小田原よりのお歸りがけ、お泊りになつてをりまする。

新三　なに、お袋が來て居るとか。（トびつくりする。）

きつ　若しや案じたことではないか。

新三　どうせ私に異見を言はうと、捜して居るに違ひない。

きつ　斯ういふ事と知つたなら、さつき駕籠から下りた時、塔の澤へ泊ればよかつた。

新三　これだから歸り度くないといふのだ。（ト三人當惑の思入、奧にて）

しが　長吉殿、悴は戻りましたかな。

新三　や、あの聲は。

長吉　お袋樣。

きつ　わたしがお目に掛つては。

新三　此庭傳ひに、

きつ　奥の座敷へ。

卜合方になり、おきつ上手の棲より駒寄の内へはひろ。此時奥よりおしが先に正兵衛羽織着流し、番頭拵へにて出て來る、長吉 思入あつて、

長吉　只今お歸りになりましたから、お座敷へお知らせ申しに出ますところでござりました。

（卜此内おしが上手へ住ひ、新三郎面目なき思入にて、

新三　おつかさま、何時こちらへおいでゞござりました。

しが　さあ、四日後に小田原の見世へ來て、番頭から、委しう樣子を聞きましたわいの。

新三　すりや、何もかも正兵衛より、

正兵　へい、わたくしより申上げました。

新三　え。（卜びつくりなす。正兵衛前へ出て、）

正兵　若旦那、よくも此番頭をあなたはお騙しなされましたな。（卜合方になり、）神君樣の御遺書を手本にするぢやござりませぬが、先づ人間の一生は重荷を脊負つて遠き道を行くが如しと、日頃からあの石摺のお掛物を、お床に掛けて大旦那が見世の者への御意見も、昨日と過ぎて御死去の折は、まだ十代のお年若、なれども親御のお仕附よく、御發明なるお生れ付に、家業の道は大人も及ば

ず、日にましお見世は御繁昌、年々殖ゑる茶畑も靜岡製と申せども、宇治にも負けぬ選り葉も出來、手廣になさるところより、豆相の湯場の繁榮を見込みに開きし小田原の、支店の支配を言付り、道中筋は申すに及ばず、箱根熱海の湯場迄も安いと廣まり日々の注文、手廻り兼ねて月の內半月は若旦那に、見廻りがてらおいでを願へど、夜分のすきに宿內の緣日さへもおいでもなく、隣近所で評判に堅い〳〵と言觸され、聞く私迄肩身が廣く、悅び居りし甲斐もなく、不圖同業の息子衆と宿の海老屋へ兩三度、遊びにおいでなされましたを、是もお若い附合と思つて居る其內に、三度が四度と度重り娼妓藝妓を揚詰めに、片時見世へお歸りなく、此頃聞けば東京から此小田原へ稼ぎに來た藝妓と深く馴染になり、四日後から二人して七湯廻りをなさるとやら、こりや打捨ては置かれぬと、お呼び申したお袋樣、是も何故あなた樣へ、御異見願ふ忠義の爲め。

しが　正兵衛より靜岡へ別配達の郵便で、委細を讀んでびつくりなし、取る物も取敢ず、支店へ着いて相談なし、先づ福住から尋ねようと思ひ掛けない此出合、そりや先代の新右衛門殿も若い時には道樂をなされた事もあつた故、野暮に留めはせぬけれど、さう每日內へ戾らず剩へ藝者と一緒に七湯廻りをするといふは、ほんに呆れたそちが行ひ、幽にこなたも知つて居ようが瓦解の折に浪人が軍用金に差支へると四五人連で强談に、金子を借に參りし折、言譯盡きて困りし所へ、まだ

御若年の折なれど厚原様がおいで下され、浪人共を懲せし故危ふい難を脱れたる其時の御恩により、御懇意結びし磯之進様、丁度末のお妹がそなたと似合の年頃に、傳手を求めて中入れしが、其所は開化のお方と見え、當時は士族平民の差別のなき時節故先方さへよい事なら、遣らうと迄行届きしが、去る方位家の仰せには新暦九月中旬迄待たねば惡しといふことにて、只話しのみ致せしが、月には雲の障りにて、此頃そなたが身持放埓譬にもいふ惡事千里、若し此事がお耳に入り厚原様と破談とならば、死なれた夫且は又、あなたへ言譯が無いわいの。

ト正兵衞おしが宜しく思入。

長吉 深い様子は存じませぬが、お二人様の御心配は一通りなことぢやござりませぬ、あなたと深い仲ぢやというて噂を致す先の相手は、言はゞ浮氣な旅藝者、客の先々出る度に惚れたはれたと申すのは渡世柄と申すもの、こりやすつぱりと思ひ切るのが、上分別でござりませう。

正兵 こりやお袋様ばかりでなく、支配を致すわたくしも、さも忽がせにした様で、御親類へも濟みませねば、厚原様のお妹御お花様を表向嫁御にお貰ひなされませ。

しが さもない時は此母も、先へ顔向がならぬ故、斯うしてのめ〳〵居られぬ仕儀、さ、爰の處を考へて厚原様へ知れぬ內、私と一緒に靜岡へ戻つてくりやるが親への孝。

正兵　且は御先代への御孝行、爰の所を御承知あつて、
しが　思ひ切つたと今爰で、
正兵　お袋樣へ御安心を、
しが　どうぞさせてくりやいの。（ト兩人迫る。新八郎俯向きぢつとこなし、長吉見兼ねて、）
長吉　もし〳〵若旦那、あなたは藝者のおきつさんに大あつでいらつしやるから、それは楊貴妃小町とも思召すでござりませうが、又お嫁御になる孃さんを端からお見受け申しますと、二とは下らぬ立派な御器量、先づ東京を喰ひ詰めて東海道の小田原迄流れ渡つた古猫より、新規正眞正銘のお嫁御さまが遙に増し、惡いことは申しませぬ、うんと御返事なされませ。
しが　さあ忰、是ほど寄つて譯を申すに、そなたが返事しやらねば、私は生きては居られぬ仕儀。
正兵　お袋樣に變でもあれば、此番頭は言ふ迄もなく、御先代へ對しても共々生きては居られませぬ。
しが　さ、一人ならず二人迄、命を捨てねば此儘に、渡世の出來ぬは知れたこと。
正兵　それでもお構ひござりませぬか。
新三　さあ、それは。
しが　思ひ切りやるか。

新三　さあ、

三八　さあ〱〱。

正兵　もし若旦那、

しが　どうぢやぞいの。（トきつと言ふ。新三郎思入あつて、）

新三　お父さんにお別れ申し、今日迄あなたに御安心をおさせ申したことのない不孝者でもそれ程迄、おつしやつてくださいますは、勿體ないと存じますれば、此後ふッつり思ひ切り、駿府へ歸るでござりませう。

しが　え、そんなら得心してくりやるか。（ト正兵衛思入あつて、）

正兵　若旦那、そりやほんたうでござりますか。

新三　なに嘘を言はうぞい。

しが　え〱、何にもいはぬ。

しが
正兵　え〱有難い〱。（ト兩人手を合せ、新三郎に禮を言ふ。）

長吉　いや流石は大家の若旦那、又思ひ切りも格別だが、然し是も先の女におつしやらずばなりますまい。

しが　ほんにそれが何より肝腎、斯ういふことには不得手のわたし。
正兵　此の正兵衞もちと不得手、いや是はさしづめ事馴れた、番頭殿が大得意、
しが　どうぞ宜しくお前より、
正兵　斷り言うて、
兩人　下さりませ。
長吉　こりや若旦那が御自身に、お斷りは御面倒、委細承知致しましたが、所詮素手では行きますまい、
　そこらも御承知でござりませうな。
しが　そりや言ふ迄もない、手切の金も遣はす心でござんすが、そこらの邊も取はからうて。
長吉　是迄取つたり取られたり、腕に覺えの番頭ながら、若旦那は名にしおふ靜岡切つての御大家ゆゑ、
　私並では濟まされまいが、若旦那何處らでござりませうな。（ト袖の下より手を出すを、）
新三　えゝそんな事を知るものかえ。（トむつとして袖を拂ふ。）
長吉　ほい、是は惡かつた。左樣なら、先づ五十圓と思召して下さい。
しが　それはいと易いこと、悴に渡しておけば、どうぞ計らうて下さりませ。
　トおしが懷中より札を出し、新三郎に渡す、新三郎しぶ〳〵請取る。正兵衞悅ばしき思入あつて、

正兵　物事當つて碎けろと、思つたよりも產むが易く、
しが　心も清く温泉に、垢を流してさつぱりと、
長吉　登る峠は若旦那、さがる相手は小田原へ、
新三　別れともなき右左、胸の曇りも山霧も、
正兵　晴れて目出度く三々九度、
しが　四海浪さへ靜岡の、
長吉　土地に老木の御繁昌、
新三　なまなかそれが、

ト札を持ちしまゝぢつと思入あつて、思はず上手を見る、以前より駒寄の内へ以前のおきつ出て、是を窺ふ、此時顏見合せ、

あ、これ。（ト目で知らせるを道具替りのしらせ、）大きにお世話になりまする。

ト氣をかへ長吉に禮をいふ、正兵衞おしがは悦ばしき思入、この模樣驛路入り、馬士唄にて道具廻る。

（福住西洋館の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面一間の床の間、文人の軸を掛け續いて三尺の地袋違ひ

棚、此下丁字引の襖、上手九尺の附屋體、此内三尺西洋形の廻り階子、三階の上り口、此脇廊下の片遠見、下手一間の附屋體、腰高の塗骨障子、いつもの所矢張西洋形の手摺にて二階の上り口、此外同じ二階の手摺にて見切り、大盡柱の際石造の三階の張物、半程に内湯福住九藏と記せし白ペンキ塗の額を掛、總て福住西洋館二階座敷の體。爰に前幕のおせん好みの打扮にて、蒲の敷物の上に住ひ煙草をのみ居る。下手に以前のおやま浴衣を疊み居る、此模樣荻江の唄にて道具留る。

やま　ちと糊が強いかもしれませぬが、引のしを致しておきました。

せん　供の者を使ひにやつたので、飛んだお世話になりますねえ。

やま　お客樣のお世話を致すのは、私共の役でござりますから、其の御遠慮には及びませぬ。

せん　今日下座敷へおいでになつた、荻江の唄を唄つておいでのは、お馴染のお客かえ。

やま　あれは東京の柳橋の御連中、家元の露友さんの一群で、今日宮の下からお歸りがけでござりました。

せん　道理で節が違ふと思つた、去年も湯治の歸りがけに、私共で二日程遊んでおいでの其時も、藝者衆に教へなすつたが、唄にも寄るがあゝも節を、長く持つてはうたへない。おゝ長いといへばおさよの湯は、大層に長いやうだが、又廊下の縱覽所で新聞でも讀んでゐるのか。

やま　さうでなければ泉水で、緋鯉を釣つておいでなさるかも知れませぬ。
せん　御苦勞でも見て來ておくれ。
やま　はい〳〵ちよつと行つて參りませう。（ト二階の口へはひる。）
せん　內のおさよも此間、九郞兵衞殿に騙されて百圓借りたを氣の毒がり、あれから一日々々と欝ぐ樣子を旦那が見て、氣晴しがてら一週間遊山湯治に連れて行けと、お許しが出て來て見れば、お客を斷る此繁昌、當時の流行は湯治場と眞誠講の車だねえ。
ト矢張荻江の唄になり、二階の口より前幕のおさよ浴衣裝湯上りの思入にて、おやま付添ひ出來り、
さよ　おかみさん、大層長湯を致しましたよ。
せん　あんまり長いからどうしたかと、此子を迎ひに上げたのさ。
さよ　今日は是で五度目故、早く上つた其所へ荻江の家元さんに出ツくはし、廊下で長話しをして來ました。
せん　それぢやあ今年も露友さんは、箱根へおいでなすつたのかえ。
さよ　去年より大連で、藤岡の德さんや竺仙さんも一緒でござりますよ。
せん　おや〳〵それは丁度いゝが、仙さんにお賴み申したい物があるが、歸りにお寄りだといゝね。

さよ　それは如在なく家元さんにお賴み申して置きましたから、是非お立寄りでござりませう。
せん　それで、お連も御一緒に內へ來ておくれだらうね。
さよ　おいで所ぢやあござりませぬ、それに小田原も段々開けて笠仙さんの染物に丸忠さんの煙草入、荻江をちよつと唄はねば恥のやうでありますのに、此頃は又吉兵衞さんの銀簪もだいぶ流行ますよ。
せん　箱根手前のせいかして、野暮は段々なくなるねえ。
　此內おやま下手よき所へ、旅持の鏡臺を置き化粧道具を出し、
やま　あなた、鏡臺をそれへ上げませうか。
さよ　おや、それには及ばないよ。
せん　いえ〳〵お前はさうお言ひでも、大事な內の代物故、花を飾つて下さんせ。
さよ　飾りばえも致しませぬが、それではちよつと身拵へを。
せん　どうぞさうして下さんせ。（ト鏡臺へ向ひ身拵へをする。）小町水は抽出にあるよ。
さよ　爰に出てをりますが、是も元は東京の馬喰町迄買ひにやり、不自由でござりましたが、もう此頃は小田原にも箱根にも取次が出來て、どんなに調法でござりますね。
せん　爰らが開化のお蔭といふもの、當時の世界は有難いね。（ト此內おさよ化粧をしながら。）あんまり

長湯をしたせいか、大層目まひがして來たが、もし姐さん、水を一杯おくれな。
やま　はい〱。（ト立掛るな）
せん　あゝもし〱、水よりもお前の合藥清婦湯をのみさんせ。
さよ　ほんに血の道には、利きのいゝ世話なしの振出し故、それぢやァあれを飲みませう。
せん　姐さん、地袋の鞄をおくれ。
やま　はい〱。（ト地袋の内よりかばんを出し、内より藥包を出しおさよに渡す。）
さよ　此の清婦湯は東京の、大阪町で名の高い高木といふ藥屋から、近いころ賣出しましたが、世間に是までありふれた藥と違つて利目が能い故、大層今ではひろまりました。
せん　それも箱根に取次があつて、血の道持には大助かりだ。
さよ　大層賣れるさうでござんす。
せん　お前が流行るやうなものさ。
さよ　おやお上さん、油過ぎますよ。
トおさよ藥包を出し、おやまに渡す、是にて鐵瓶の湯にて振出し、おさよの前へ出す、合方きつぱりとなり、二階口より長吉手紙を持出て來り、

長吉　扨おかみさん、お詫に出ましてござりまする、先程お内からお手紙が參つたを、つい見世が取込んでをつて失念を致しました、どうか御勘辨を願ひまする。（ト手紙を出す、）

せん　それはお世話でござりました。（ト受取り上書を見て、）なに急用としてあるは。（と開き見る。）

長吉　こりや猶々申譯がない、何御用でござりまする。

さよ　御心配なことではござんせぬか。

せん　こりや隣り内の娘御が、急病でなくなつたので、直歸つて來てくれと、旦那さんから此の手紙、こりや行かずばなるまいわいな。

さよ　え、そんならあの娘さんが。あゝ人は何時死ぬかしれぬもの、まだ年若な盛の花惜しいことをしましたな。

せん　親類中のことなれば、直行くとしませうわいな。

長吉　折角のお湯治を、惜しいことでござりまする。

せん　いつもの人力を言付けて下さんせ。

長吉　へいへい畏りました。（ト長吉おやま下手へはひる。）

さよ　おかみさんがお歸りなれば、御一緒に參りませう。

せん　いえ、お前はまだよいから、跡へ殘つてゆつくりと遊山湯治をしなさんせ。

さよ　それでもあなたがお歸りでは、お氣の毒でござんすもの。

せん　其の遠慮には及ばぬから、なるたけ體の養生して早く全快してくれないと、旦那は元より私も共
共心配でならぬわいな。

さよ　それ程迄御親切におつしやつて下さいますなら、せめて良助が靜岡から戻ります迄此箱根に、湯
治を致してをります。

せん　良助殿も今夜か明日は、戻つて來ようもしれぬから、別に内は急がずとゆつくり遊んで來なさん
せ。

さよ　それではどうも旦那樣や、朋輩衆へ濟みませぬ。

せん　それがお前の取越苦勞、斯うして私が付いて來れば、おつけ晴れて二た廻りは暇の出た自儘の體
必ず遠慮しなさんすな。

さよ　旦那といひ、お上さんといひ實の親より有難いお情深い其のお詞、わたしや涙がこぼれまする。

ト愁ひの思入。

せん　又其思ひ過しがお前の病ひ、涙は何より體の毒、氣を取直して居なさんせ。

さよ　親はあれども勘當に、頼みに思ふ亭主に捨てられ便りない身を其様に、やさしく言つて下さいますと、涙の止め度がござりませぬ。

せん　假令親御に見放され、便りない身になるとても、内の旦那が俠氣に末始終迄お前の體を引受けようと言つたからは、安心をして居なさんせ。

さよ　有難過ぎた其のお詞、お上さん、どうぞお見捨て下さいますな。（トぢつとこなし、此時長吉出て、）

長吉　車が參りましてござりまする。

せん　道で大方暮れようから、急いでくれろと言付けて下さんせ。

長吉　へい〳〵。（ト立掛るを、おせん祝儀を出し、）

せん　もし、是を遣つて下さんせ。

長吉　へい是は有難うござります。（ト長吉はひろ、此内おせん煙草入を帛紗に包み、身支度をなし、）

せん　そんならおさよさん、ゆつくりお歸りよ。（ト行かうとする。）

さよ　あゝもしお上さん、人間は老少不定、若い者とて明日をも知れず、露の命でござんすな。

せん　是限りお前に別れる樣に、そんな弱い氣をお出しでないよ、若し淋しければ良助が、戻り次第歸つておいで。

さよ　何だかあなたに別れるのが、心細うござりますから、ことによつたらさうしますよ。

せん　おみつ坊は何處かへ行つたかえ。

さよ　下で遊んでをりまする。

せん　崖が多いから氣をお付けよ。

さよ　有難うぞんじまする。（トおせん行きかゝるを、ちよつと下迄。）

せん　いえ人目がうるさいから、爰においで。

さよ　そんならおかみさん、御機嫌宜しう。（トホロリとこなし。）

せん　あい。（トとも〴〵ホロリと思入、爰へ長吉出來り。）

長吉　さ、車が待つてをりまする。

せん　えゝも、知つて居るがな。

ト唄になり、おさよに心を殘す思入あつて、長吉傍からせき立てながら二階口へはひる。おさよ下手の手摺へ行き、下を見下す心にて、ぢつと思入、しんみりした合方になり、

さよ　あの同じ貸座敷の其内にも、お情深い御主人樣、それには引替へ夫の身で女房を騙して百圓の金を衒りし九郎兵衛殿、其のむやくしさに氣が結ぼれ、勿體ないと知りながらつい血の道でぶらぶ

らと、ふさぐを見兼ねて旦那さんが、保養がてらに湯治をせいと、有難過ぎたお詞も、胸の思ひの晴れやらず、丁度入日に山々の霧も無常を誘ひ來て、虫の音細き湯元道、藥は飲めどはかどらぬ病ひの凝の石坂に、流も濁る泥水の今は果敢ない苦界の勤め、せめて我子の成長を松も老木の蔦蘿、哀れ河鹿の鳴聲も若しやそれかとつまさるゝ身は空蟬の憂き思ひ、あゝ秋は淋しいものぢやなあ。

ト おさよ愁ひの思入、合方になり、上手廊下口より前幕のおみつ、綺麗な裝に着替へ、紙に包みし菓子を持ち出來り、

みつ　もし母樣、大きに長く遊びました。

さよ　おゝ今噂をしたところ、そちや三階へ行きやつたか。

みつ　いえ〳〵、今方お着のお客が爰へ來いと仰しやつて、此のお菓子を下さいました。

さよ　是はまあ結構なお菓子、して下されたお客樣は、お女中であつたかや。

みつ　あい、美くしい孃樣が是を包んで下さいましたが、御一緒においでの旦那樣が、わたしの生れをお聞故、本所ぢやと言うたわいな。

さよ　よく忘れずに覺えて居やつた、それぎり何も聞かなんだか。

みつ　兩親の名をお聞き故、お父さんは岩淵九郎兵衛、母はおさよと申しますと、いうたらお客がびつくりして、扨は九郎兵衛の娘かと、私を抱いて下さんしたわいな。

ト件の菓子を出す、おさよ開き見て、

さよ　むゝ、すりや、わたしら夫婦の者を御存じのお方であつたか、してまだ其外に何かのことを、そちに聞きはしなんだか。

みつ　あい、さうして誰と此箱根へ湯治に來たとおつしやる故、お前と一緒と言うたれば、此のお菓子を下さんして、母に見せよとおつしやりました。

さよ　母に見せよとおつしやつた結構な此お菓子、何か仔細のありさうな。（ト包紙へ目を附け、）何やら紙に認めあるは。（ト有合ふ團扇の上へ菓子をあけ、包紙を伸し見て、）なに契約書、えゝ（トびつくりなし、）こりやおみつ、廊下をちよつと見てくんな。

みつ　あいく。

ト合方きつぱりとなり、おみつ上手廊下を窺ふ。おさよは二階口より下へ思入あつて元の所へ住ひ、件の包紙を取上げ、

さよ　なに「契約書、一我等娘さよ儀貴殿御子息磯之進殿と許婚致し、結納取替之上縁談取極候所實正

也、然る上はさよ事十六歳に相成候はゞ、御約定通り貴殿方へ差送り可申候、萬一當人不埒之儀御座候節者、御存分に可被成下候、其節一言の儀申間敷候、爲後日契約證文仍而如件、厚原磯太夫殿五百崎郡右衛門、」こりや先頃父上より厚原様へ送りたる、許婚の契約書、是をそなたに下されしは、若しやあなたは厚原の、磯之進様ではなかりしか。

ト はツと思入、此時上手廊下口へ以前の磯之進立身にて是を窺ふ、此の姿鏡臺の鏡へ寫りし心にて、おさよびつくりして思はず後を振向き、互ひに顏見合せ、氣味合の思入、誂への合方になり、おみつ磯之進の側へ行き、

みつ　お客様、只今はお菓子を有難うござりまする。

磯之　ようお禮が出來ましたの。(トおみつおさよの側へ來り、)

みつ　もし母様、お菓子を下すつたお客様がおいでなさんしたわいな。

ト おさよ面目なきこなしにて、俯向き居る、磯之進思入あつて、

磯之　おゝ小兒の母御はこなたでござるかな。(ト上手へ住ふ、おさよ餘儀なく手をつかへ、)

さよ　まことにお目にかゝりまするも、面目なうござりまする。

磯之　なに面目ないことがござらう、只今下女に承れば小田原の娼妓さうなが、勤の身にて子のある故

面目ないかは存ぜぬが、是も世間にまゝあること、其の斟酌には及ばぬわい。

さよ　お情深き其お詞、是迄永々浪々致し果は勤の賤しき身となりましたのも兩親の、心に背きしばつかりに、遂には宿場の出稼ぎ娼妓、よく〳〵思ひ廻して見れば、あなたの罰でござりまする。

磯之　こは異なことを申さるゝが、それは大方人違ひ、身共是迄遊興の場所へ立入りしことなければ左樣な事を申さるゝ此身に覺えはござらぬぞ。

さよ　それ程迄に此さよの罪をおかばひ下さるとは、恥入りましてござりまする。

磯之　すりやこなたの名も、おさよ殿とか、はてよく似た名のあるものぢやわえ。

さよ　何とおつしやりまする。（ト合方になり、）

磯之　初めて參りし此の座敷、知らぬお方に馴々しく物語るも異なものなれど、同じ名前の其上にどうやら似寄りの、いやさ、似たこともあるものにて、我幼少の其折に親共が許婚せし、駿州靜岡の士族五百崎郡右衞門が娘にて、しかもこなたと同じ名のさよと申す者ありしが、十六歲の折同組の岩淵九郎兵衞と言へる者と密通なしてをつたるを、遂に親の耳に入り面目なさに逃亡なし、今に生死も知れざるが、丁度似た名のおさよどの、然し何れの娘やら手前は存ぜぬ娼妓のおさよ、決して心配致すに及ばぬ。（ト思入にて言ふ。）

さよ　すりや、見ず知らずの娼妓おさよと、あなたはお慈悲のお詞にて、此身にかゝる罪科を、

磯之　さ、郡右衛門が娘なら假令婚姻なさずとも、契約なせし許嫁、不義密通の罪科は脱れず、面會なさば士族の表、其分には致し置かぬ。（トきつと言ふ。）

さよ　え、（トびつくりなすを氣をかへ）

磯之　さ、然し逢はねばそれ迄にて、取交したる契約書も今は反故たる赤の他人、戻してしまへば、いやなに、覆水盆に返らぬ譬、愚痴なことをば思はずも、知らぬこなたに身の上話し、是も徒然に合宿の互ひに憂を語り合ふ隣同士の座敷內、必ず笑うて下さるな。（トおさよぢつとこなしあつて）

さよ　はあゝ。（ト泣伏す、おみつ走り寄り）

みつ　もし、お前は何で泣くのだえ。

さよ　わしや濟まぬことがある故に。

みつ　なに、濟まぬとお言ひのは。

さよ　さ、濟まぬといふはお隣座敷の、お情深き磯之進樣に、

磯之　え。

さよ　いやさ、いつそ此事打明けてお話し申すも折角のお慈悲を無にする樣なもの、とあつて此儘お別

れ申さば此身に掛る罪科は、死んでも拔けぬ情なさ、なれどもお菓子を包みたる紙は緣しの契約書、反故にせよとの仰せでも現在不義せし私故、どうぞお胸の晴るゝ樣、お手に掛けて下さりませ。（トおさよ磯之進に體を突付ける。おみつびつくりなし、）

みつ　こりや、母樣には、

さよ　はて、申譯なきことある故。

みつ　そんならお前は死ぬのかえ。

さよ　おいなう。

みつ　こりやどうしたらよからうな。（トおみつ泣伏す。磯之進思入あつて、）

磯之　はて娼妓に稀なおさよ殿、其身の罪を後悔なし、緣なき我に一命斷てと、迫るはあつぱれな心底なるが、何の是が討たれんや、よしんば御身を五百崎の娘さよとせしところが、一旦心のけごれしものは一命取らぬ磯之進、此儀は思ひ止まられよ。

さよ　すりや、五百崎の娘にても、あなたは不義の罪人を、お助け遊ばす心よな。

磯之　取交したる契約の、反故と相成る上からは、まことのさよに面會なすとも、知らぬ他人に構ひなし、そこらへ心は殘さぬ某、いさゝか心配あらざるぞ。

さよ　すりや死ぬにも死なれぬ譯、こりやどうしたらよからうなあ。（ト愁ひの思入、磯之進こなしあつて、）

磯之　こりや兩人ともによく聞かれよ。（ト誂の合方になり、）先づ人間の一生は瓢の中をくゞるが如しと、道二翁が殘せし譬苦しみに苦しみて漸く人の道も分り、學問なして五常の道を辨へたるその所が先づ最初の口を入りたるところ、其時よしと油斷せず猶一層堅固になし、主に忠親へ孝人たる道を守りなば、自と天の惠みにて上たる人に相成るは、再び瓢の縊れを抜け、末の廣きに至るの教へ、なれ共多くは中邊にて自分極めに果てるが習ひ、我も戊辰の瓦解には一度零落致せしが、仁義の道を守りたる其惠みにか當今は廢れし劍道再び世に出で、門弟共が盡力にて斯く安樂の身分となり、妹花が養生がてら遊山湯治を致するも、一度苦勞せし故なり、必ずそちも短氣を出さず、今の苦勞を忍びなば其行末は安樂に故郷へ飾る錦の袖、人とならんと思ひなば詞を用ひ死を止まり親御へ孝行盡されよ。（ト磯之進思ひ入あつて諭す、おさよ涙を拭ひ、）

さよ　私風勢の愚昧の者にもよう分りまする今のお諭し、さつぱり胸の曇も晴れ、死ぬのは思ひ止まりますれば、憚りながらあなた樣も、御安堵なされて下さりませ。

磯之　すりや、只今申せし詞を用ひ、短氣なことは出さぬと言やるか。

さよ　決して短氣は出しませぬわいな。

磯之　いや、流石は五百崎の娘御程、いやなに、言はぬは言ふに增す花の、再び開く歸り咲、勤め大事に致すがよいぞ。
さよ　御親切なる其お詞、有難う存じまする。（ト米山甚句になり、二階の口より以前のおいそ出て來て、）
いそ　おや、旦那樣が爰にいらつしやるとは、ちつとも心付なんだ、先程からお膳が出て早く召上りませと、お孃さまがお待兼ね、それに實は私も空腹にござりますわいな。
磯之　おゝ只今參るから、先へ食事を致すがよい。
いそ　いえ、旦那樣がいらつしやらぬと孃樣は上りませぬ、左樣致すと私も共々上られませぬわいな。
さよ　あまり長話しを致しまして、嘸御迷惑でござりましたらう。
磯之　いや、身共こそ大きに長座、然し詞を用ひくれ、此樣な悅ばしいことはない。
さよ　こりや、そちもお禮を申しやいの。（ト是にておみつ手を突き、）
みつ　お客樣、段々お世話になりまして、有難う存じまする。
いそ　おやまあ此子の可愛いこと、こりや孃さんのお氣晴しになりますわいな。（ト磯之進思入あつて、）
磯之　おさよどのとやら、必ず心得違ひをするなよ。（トちつとこなし、おさよ契約書を取上げ、）
さよ　お情深きお諭しを、決して反故には、（ト思入あつておいそへ兼ね、）致しませぬわいな。

みつ　左樣なれば、お客樣。

磯之　おゝ又遊びに來やれよ。（ト矢張米山にて磯之進おいそ付いて上手廊下口へはひる、おさよ跡を見送り。）

さよ　あゝ面目ない〳〵。（ト泣伏すおみつ側へ寄り。）

みつ　又お前泣くのかえ。（トおさよおみつを引寄せ。）

さよ　これおみつ、そなたも同じ女子故母が詞をよう聞きや。（ト合方になり。）今お歸りなされたは、わしが幼い其時に許嫁せしお方にて、此身が全う致しなば今安樂に暮すのを、そちが親ぢやが九郎兵衞殿と不義密通致せしゆゑ、遂には親の勘當受け、する事なす事左り前餘儀なく夫婦相談づく、金の工面に小田原の海老屋の門に打付けし名札の肩に娼妓の二字、是も誰故九郎兵衞殿が以前に替る不身持に、斯る憂目の此の有樣、今々思ひ當りしは親の詞を用ひずして、自儘になびきし其報い、廻る因果は小車の緣につながる汝までも此難儀、道ならぬことせし者は必ず來る親の罰、十六七の娘御には現在わしがよい手本、そなたも大きうなりやつたら母が憂目を忘れずに、まことの道を盡しなば、親に勝りし娘ぢやと必ず人に褒められん、それが何より孝行ぢやぞ。

　　トおみつをとらへ宜しく思入。

みつ　それは不斷旦那さんやお上さんがおつしやるにも、此秋の試驗が濟めば直學校へ上げるからよく

勉強して人となり、母が勘當ゆりずともそなたは詫をしてやると、わたしへおつしやりましたわいな。

さよ　すりや御親切に御主人が、そなたを人にして下さるとか、あゝ生業柄には似合はぬお氣立、わしや嬉し涙がこぼれるわいの。

みつ　お前も體を丈夫に持つて、わたしが大きうなる迄は、どうぞ達者で居て下され、小田原學校へ入學したら、必ず人となつた上、假令そでない父さんでも、すごして上げる氣ぢやわいな。

さよ　すりや道ならぬ父親迄も、そちがすごすと言やるのか、おゝよう言やつた。九郎兵衞殿に此事を聞かせて心を直させたい、親に勝りし心立に、現在我子に顔向のならぬ様になるわいな。

トおさよおみつに縋り愁ひの思入。合方になり、二階の口より前幕の良助旅裝にて小さな包を持出て來り、

良助　おさよ様、今戻りましてござりまする。

さよ　おゝ良助、今お歸りか、もう待兼ねて居たわいな。

良助　定めしさうぢやと思ひまして、道中は急ぎましたが、何を申すも年のせる、峠へかゝると大汗で、やつとの事暮れぬ内、こぎ付けましてござりまする。

さよ　定めしあちらの御樣子も、以前に替つたことであらうと、言暮して居ましたわいな。

良助　いやもう替つたどころぢやござりませぬ、久し振で參つたのであちらこちら顔出しして、昔話に暇を費し、大きに手間どつて參りました。（ト包より駿河細工を出し、）是は良助がお孃樣へお土産に取つて參りました、駿河細工でござりまする。（トおみつへ遣る、おさよ見やり、）

さよ　箱根細工と事替り、こりや珍らしい細工物、おみつこはさぬ樣にしやいの。

みつ　こりやよい手遊を取つておくれで、わしや嬉しいわいの。（ト悦ぶ、此内良助紙包を出し、）

良助　こりや只今戻りがけに峠の破風屋で休みましたら、あまりよい山椒魚孃樣へ御養生に少し取つて參りましたが、いやもう流行ものといふ物は、池の端の寶丹が賣出してから此方は、種々な賣藥が出來ましたが、此の良助は昔者矢張山椒の魚とか赤玉とか、有來りの藥の方が利目がよいかと思はれまする。

さよ　これがこと迄其樣に、思うてくれるは忝い、して靜岡のお母樣はお替りはなかつたか。

良助　先取あへずお袋樣へお目にかゝつて段々と、あなたのお話し致しましたら、殊の外御立腹、あれがことなら聞くも穢れ、もう／＼言うてくれるなとおつしやりますれど兩の目に、溜る涙のおいとしさ、お察し申してお膝に縋り、おさよ樣が此頃は先非後悔なされまして、是迄なせし不埒を

ば只管お詫びしてくれと、御傳言でござりましたと、申上げたら其時は、又一倍の悦び涙、此親仁も共々に、貰ひ泣きに泣きました。

さよ　すりやお母樣は此身をば、憎いものとも思召さず案じておいでくださるとか、あゝ是ばかりでもわしが身に、罰が當らにやならぬわいな。

良助　さあ、其時のお詞にも憎いやつ程不便なは、雨につけ雪につけ思ひ出さぬことはなけれど、以前に替る今の身の上、之迄所持の金圓も皆それ〴〵に貸込みし先と申すは士族にて、十に八九は零落なし貸したものは貸倒れに、思ふ樣には行かぬとて、涙ながらに親仁へお話し、しかし折角來た良助、娘に見繼ぐ心はないが長年そちが世話したる禮の印と下されし、此の短刀はあなたへお形見、（卜包より白鞘の短刀を出し、）御先代よりお家に傳はる、千壽院村正の作、以前ならば百圓の直打のものでござりますが、一度廢刀のお觸が出て直打も下落致しましたが、當時は大きに世に出まして、先づ三十圓位には堅くなります此短刀、何と親御と申すものは、有難いぢやござりませぬか。

さよ　すりや、それ程に迄仰しやつて、形見に下さる此短刀、御恩は詞に盡されず、有難涙がこぼれるわいの。（卜短刀を取り思入。）

良助　して海老屋のお上さまは、お湯へでもおいでゞございますか。

さよ　さあ、今方內から急の迎ひでお隣の娘さんがお亡なりゆゑ、取敢ず車でお歸りなされたわいな。

良助　そんなら、あの娘御が、はて人間は老少不定、見掛に寄らぬ。（トびつくりなせし思入。）

さよ　幸ひ下さる此短刀、旦那樣が百圓の金は勤に精出す故褒美にやるとおつしやれど、それではどうも濟まぬ故、此から直に內へ歸り、今三十圓の品にもせよ以前百圓の直打とあれば、お金の抵當に此品をお預け申して明日から、見世へ出て是迄の埋合せをせにやならぬわいな。

良助　いや其の思召は結構だが、もう追附灯ともし頃、纔な道で箱根山、明日にしてはどうでござります。

さよ　いえ〳〵假令日が暮れても、三枚橋から先へ行けば、坂はあれども人家があれば、心配には及ばぬわいの。

良助　そんなら私もお供して、御一緒に參りませう。

さよ　いえ、こなたは旅の疲れもあり、さう急がいでもよい事なれば、今夜はゆつくり湯に這入り明日此子と連立つて、戻つたがよいではないか。

良助　それでも夜道にお一人では。

さよ　何の歩いて行くではなし、駕籠で行けば一時間立たぬ内に行かれる所、一人で大事ござんせぬ。
良助　左様なら仰せに隨ひ、實は草臥れてをりますから、明朝孃さんと同道して、戻りますでござりまする。
さよ　どうぞさうして下さんせ。（トおみつ是迄細工物を持遊び居て、此時おさよの膝へ縋り、）
みつ　わたしも一緒に行きたいわいな。
さよ　いえ、お前と一緒では却つて人目が五月蠅から、明日歸つて來なさんせ。
みつ　それでもどうやら別れるのが、悲しい樣に思はれるわいな。（ト縋り泣くを良助思入あつて、）
良助　隣の不幸が娘とあれば、此のお別れも氣に掛り、
さよ　え、
良助　いえ、氣掛りなことはござりませぬが、跡を追ふのがお可愛さう、いつそ明日にしてはどうでござりまする。（トおさよ思入あつて、）
さよ　お許しの出た體故、明日でもよいが今宵の内、歸らにやならぬといふ譯は。（ト上手へこなし、）
良助　何ぞ仔細がござりますかな。
さよ　もし。（ト良助に囁く。）

良助　すりや、靜岡の厚原樣が。（ト大きく言ふを、）

さよ　あもし。（ト押へる。是を道具替りの知らせ、）

良助　へい、左樣でございましたか。

ト此模樣宜しく合方にて道具廻る。

（下座敷の場）――本舞臺四間中足の二重、トタンの本庇本緣附、上手一間の床の間續いて三尺の地袋、此下一面文人畫百草の襖、上下の棲塗腰骨高障子を閉切、欄間に官員の書きし額、平舞臺の眞中根生川の大沓脫、上下の張物石造西洋館の見切、左右共臂掛窓、是に白金巾の日除を掛け內に障子を建て、ずつと高梁際に前に見たる福住の額、所々に松原の立木、日覆より同じく釣枝、いつもの所鐵物の西洋門、內より門にてしめきり、すべて以前の道具下座敷の體、よき所に燭臺を點し爰に以前のお花おいそ立掛り居る、琴打合せにて道具留る。

いそ　只今女中衆に聞きましたら、爰のお座敷のお客樣は塔の澤からお歸り迄は、明いてゐるといふこと故、爰でお聞きなされませいな。

お花　ほんに箱根は東京のお客が多いせゐかして、何處のお座敷も藝盡し、あの琴の打合せも、定めし

いそ　東京のお客であらう。

いそ　私の鑑定では、今度名古屋から歸つて參つた、役者が今晩泊りましたから、てつきりそれだと存じまして、ちよつと隙見を致しましたら、案に相違のぺい／＼ばかり、其内一人てら／＼光つた眉毛の細い人が居る故、こりやてつきり芦の湯へ參る病人ぢやと存じまして、あなたはなりでございますなと申しますと其人が、直團十郎の聲色を遣ひましたが、己惚とあればかりは直に增長するものと、大笑ひをしましたわいな。

お花　今日湯場へ着いてより思ひの外氣分もよく、あたりに聞ゆる音曲に思はず病ひを忘るゝわいの。

いそ　それに第一孃さんには、お藥よりも利目のいゝものがござります故。

お花　なに、いゝ物があるとわえ。

いそ　おとぼけなすつちやいけませぬ、それ豫てあなたと約束の浮島の若旦那、新三郎樣が此湯場で惚れた藝者を番頭の、正兵衞殿が異見に付きふッつり思ひお切りなされ、近々あなたと御婚禮、嘸お嬉しうござりませうな。

お花　さあ、嬉しい樣ではあるものゝ其の藝者とは事替り、不束者の私故、もし嫌はれた其時は、どうしたらよからうと、それが苦勞でならぬわいな。

いそ　何の苦勞がござりませう、先づ生業物のお茶で申さば、あの藝者衆は灰汁のある王子か染井の東京自園、あなたは宇治の上林、外に類も選葉の正銘、二つ並べて見る時は、銘茶と番茶の隔あり、先は藝者を挽茶の氣でも、紛茶濃茶の中ぢやもの、茶にしてお氣を靜岡園、三々九度の高砂屋、此浦船に帆を揚げて四海波風納まらば、親御樣のお悅び、又孃樣のお悅び、目出度盡しの納りに悅び溜つて末始終は、あなたつおなかゞかたまらば、又其時はお悅び、こりや悅びきれやせぬわいな。（ト宜しく思入。）

お花　あれまあ、おいそのいやらしいことを。

いそ　なあに、お話しをさ。

お花　ほゝゝ。（ト恥かしきこなしにて顏を隱す。）

いそ　ほんに久し振で孃樣のお笑ひ顏を見ましたが、斯うして居るとお心では、嘸お樂みでござりませう。

お花　あれ、又其樣に、恥かしいわいな。（ト宜しく思入、此時奧にて、）

きつ　もし、ちよつて來て下さいまし。（ト此聲にお花思入あつて、）

お花　誰やら爰へ來る樣子。

いそ　大方お客が、お歸りと見えまする。

お花　そんなら此間に三階を、

いそ　どれ、見物致しませう。

　　トお花おいそ上手障子の内へはひる。爰へ奥より以前のおきつ新三郎の手を引き出來り、

きつ　もし若旦那、ちよつと爰へ來て來さいまし。

新三　あわたゞしい、己を呼ぶのは、

きつ　ちとお頼みがありますが、叶へては下さいませぬか。

新三　今日に限つて改まり、頼みを叶へてくれろとは。

きつ　きつと叶へて下さりますかえ。

新三　そりやあおぬしの言ふことだ、出來ることなら何なりとも、聞かないでどうするものだ。

　　トおきつは四邊へ思入あつて、

きつ　若旦那、私と切れて下さいまし。

新三　え。（ト合方きつぱりとなり）

きつ　さあ、斯うばかりではお前さんも、御合點が參りますまいが、さつきあなたにお袋さんと番頭さん

の強異見、思はず脇で立聞して、親御樣のお胸を察し、わたしや思はず泣きました。（トおきつ泣く。）
新三　そりやおきつ何を言ふのだ、よしんば異見を言はれたとて、そんならさうと承知して、婚禮しようと言ふぢやあなし、さういふ氣の早い奴もないものだ。
きつ　それはお前さんは何處迄も、一緒に居る氣でござんせうが、それではお爲めにならぬ故、どうぞ切れて下さいまし。
新三　飽きもあかれもせぬ中を、達て切れろといふからは、おきつわたしが厭になつたのか。
さつ　さあ、厭なものなら勝手に行くが、義理にからまるさつきの仕儀、お花さんと末長う添ひ遂げて下さいまし。
新三　すりや、どうあつても切れる心か。
きつ　さあ、それもお前のお爲め故。
新三　何といやる。（ト合方替つて、）
きつ　開化の人に聞かれたら、笑はれるのも合點で、道了樣へ御願を掛け、血起證迄した二人が仲、親の爲めとはいひながら二十里隔つた小田原へ、東京から出て來た時は、まだ駈出しに馴染も薄く、配りし猪口や手拭から漸知られて名ざしのお客、初めてお目にかゝつた時、思ひ付いた若旦那、

それから互ひに深くなり、頭の物から移り替りの着物迄もして貰ひ、身に不相應のめりめりも出すので、尻尾の裂けた古猫も、私に一目置く位、是もみんなお前さんのお陰故ぢやと思ふ故、末始終は鑑札を廢業して一緒になり、御新造さんと言はるゝ樣に、なつたら其時御恩返しと、思ひしこども今日といふ今日、言約束のお嫁さんが、あるとのことに氣拔がして實にふさいで居りますが、賤しい藝者の身分では及ばぬことゝ諦めます故、是から靜岡の御本店へお歸りなすつて末長う、御婚禮をなされませいなあ。

トおきつ愁ひの思入。此時上手の西洋窓の障子を明け、お花おいそ出て悦ぶこなし、新三郎思入あつて、

新三　流石は東京生れのおきつ、又心立は違つたものだ、是が並の藝者なら腹は切る了簡でも上部に切れぬと見せ掛けて、手切と來るが世間並、それを切れろとそつちから爲を思つて言ひ出すとは、實に見上げたものぢやなあ。

きつ　取交したる血起證も、今は仇なれ散る花の、見るも涙の種なれば、いつそあなたへお返し申し思ひの念を斷てばそれ迄。(トおきつ腕守へ手を掛けるを、)

新三　あゝこれ、それはあまり短氣ぢやないか。

きつ　さあ、あなたは短氣とおつしやれど、持つ程未練が。(ト新三郎の手を拂ひ、)殘りますわいな。

ト守りを持ちしまゝ泣伏す、新三郎腕組をなしぢつとこなし、花道より前幕の九郎兵衞好みの打扮にて、女の文を讀みながら出て來る、少し後より以前の伴藏、傳八足早に出來り、

伴藏　これ岩淵、さう君の樣にツカ〳〵と、湯元へ行つてはならぬといふに。

傳八　まあ待つて下され、話がある〳〵。(ト兩人跡より來るを、)

九郎　木の間の星の拾ひ讀み、今肝腎の所へ來て、ぎやあぎやあ跡から騷ぐので、何處だか文句をなくしてしまつた、いや惜しいことをしてしまつた。

伴藏　何も際どい往來中で、お店者が女郎の文を主人に隱して見る樣に、讀まなくつてもいゝことだ。

傳八　今兩人が留めたのは、此福住には御同樣におぞけを震つて除けて居る、厚原磯之進が泊つて居るよ。

伴藏　又小田原の海老屋の女房と、おさよ殿も養生がてら湯治に來たと聞きし故、出ッくはしては面倒と、

傳八　それ故お留め、

兩人　申したのだ。

九郎 いや、そいつあうつかり福住へは泊る譯には行かないが、それに付いて貴樣達に、旨い話しが出來たのだ。

兩人 なに、旨い話しとは。

九郎 これ。（ト囁く、兩人うなづき。）

伴藏 それぢやあ是から引かへして、

九郎 かの所で待つてゝくれ。

兩人 おゝ合點だ。

ト兩人足早に引返して花道へはひる、此時九郎兵衛舞臺へ來り、下手へ行かうとして思入あつて西洋門の所へ來り、内の灯りを借り件の文を讀む、おきつは泣きながら腕守より起請を出し、

きつ さあ若旦那、あなたの起請を返しますから、私の起請もたつた今どうぞ返して下さいまし。（ト起請を新三郎の前へ置く、新三郎腕組をなしぢつとこなし。）さ、何故出して下さんせぬ、あなたは未練がござんすかえ。（ト新三郎の思ひ切れぬといふ樣子を見やり、又愁ひのこなしにて。）あなたは未練がござりませうが、わたしや覺悟をしましたわいな。（トきつと言ふ、新三郎思入あつて、）

新三 なに、覺悟をしやつたとは。

きつ　お袋様と二つには、お花様へ義理を立てゝ、あなたと別れる上からは、死ぬと覺悟を極めました。
新三　えゝ。
　　　トびつくりなす、此時表の九郎兵衞は此聲に心付き、門に寄添ひ、是を立聞する。お花おいその兩人は案じるこなし、おきつ帶を引きしめ、
きつ　若旦那、堪忍して下さんせ。（ト立掛るを、）
新三　これおきつ、そちや何處へ。
きつ　わたしや死に行きまする。
新三　いや、そりや惡い、わしが返事をせぬ内に。
きつ　それぢやといふて。
新三　はてまあ、待ちやいの。（ト是にてぢつと下に居る。）それ程迄にそなたの心底。どうしてこれが切られよう、親に不孝となるとても、濡れぬ先こそ厭ふ身の、もう斯うなつたら仕方がない、起請は元へ納めて置きやれ。
きつ　そんなら私を見捨てずに。
新三　假令此地に居られずとも、生涯そちは見捨てぬ心。

きつ　そりやほんとうでござんすかえ。
新三　幸ひ先刻お袋より、受取る札を路用となし、
きつ　明日とも言はず今宵の内、
新三　直に是から東京へ、
きつ　えゝ嬉しうござんすわいな。
　ト新三郎に縋る。上手のお花は是を聞きびつくりなし、ハアツと泣伏す。おいそ押へ障子を建切る、是と一緒に九郎兵衛下手へ忍ぶ、此の時奥にて、
○　小田原へ行くお駕籠が待つてをります。（ト新三郎思入あつて、）
新三　こつちも宿迄駕籠で行き、直に車に乗りかへて、
きつ　今宵の内に、大磯の、
新三　一新講の近半まで、
きつ　そんなら直に此庭から。
　ト兩人身支度をなし、おきつ下手の障子の内より上草履を二足出し、直に平舞臺へ下り、門の閂を取り下手へ出て、

新三　四邊へ心を、

きつ　さあ、行きませうわいな。

ト合方流の音にて、新三郎おきつの手を引き、足早に花道へはひる。跡時の鐘を打込み、下手より九郎兵衞出て、向うを見込みきつと思入、合方になり、跡追掛けてはひる、ばた〳〵になり、上手よりお花道中持の剃刀箱を持ち走り出る、おいそ留めながら、

いそ　もしお孃樣、あなたは何をなされまする。

お花　さあ新三郎樣に嫌はれし、不束者の此身故所詮生きては居られぬわいな。

ト剃刀を出し、死なうとする、

いそ　あゝもし、めつそうなことおつしやりませ、何もあなたを嫌つたと申す譯ではござりませぬ、今に譯がわかりませうから、早まつたことなされますな。

お花　いえ〳〵何と言やつても、女子の恥になること故、どうぞ死なして下さんせ。

いそ　どうして〳〵、それはなりませぬ。（ト兩人爭ふ、爰へ奥より磯之進出來り、）

磯之　樣子は次にて逐一聞いた。こりや妹、それへ出い。

お花　はい。

磯之　え〻、出いと申すに。

お花　はあ〻〻。（ト餘儀なく下手に住ふ、磯之進思入あって、）

磯之　こりや、現在兄がありながら、何故早まつたこと致するぞ。藝妓に心奪はれて駈落なせし新三郎はありやまことの人ではない、併し女儀たる狭い了簡、兩親とてもあらざる其方、便りなく思ふであらう、それは兄たる磯之進が不便に思ひ察し居るが、今此所にて變ある時は、所謂論語讀の論語知らず、幼年より兩親が丹精籠めし學問に數度の試驗に昇等なし、今女教師にもなるべき其方、立派に人を諭す身で、斯く淺はかなることをなさば、此箱根は言ふに及ばず、靜岡中の物笑ひ、爰の所を會得なし、かゝる懶惰な者の爲に貴重の一命失はず、嫁さぬが此身の幸ひ故、あれ一人が夫ならず凡そ三千五百萬の日本の人種は皆同胞、一倍勝る聟がねを兄が必ず持たす故、彼へ戀慕は思ひ止まり、あつぱれ開化の娘なりと親磯太夫迄世間の者に褒めらるゝ樣心を改め、決して士族の名義を汚すな。（ト宜しく諭す。お花涙を拂ひ、）

お花　お師匠樣の御教授にて、物の理合も辨へながら、淺はかな事を仕出せしは、申譯なき身の不束、お兄い樣の御異見にて今といふ今目が覺めて、ふッつり思ひとまりますれば、此上共に妹へお目掛けられて下さりませ。

磯之　そりや我異見に從ひて、無分別は出さぬと申すか。

お花　思ひ止まりますでござりまする。

磯之　いや、あつぱれ妹よく申した、理にくらからぬは是迄に勉強なせし學の德、必ず人と生れなば學問せねばならぬわえ。（ト磯之進安堵せし思入）

いそ　之が並の娘御なら、此堅くろしい御異見では、なか〳〵御承知ござりませぬが、其處は小學讀本から日本略史と段々に、勉強仕上げたお孃樣、又思ひ切りも格別なもの、私などの身に引較べると、是がうんどんぼんでんの違ひ、實にあんぷく致しました。

トおいそ感心せし思入、此時上手西洋窓より以前の正兵衞下手の窓よりおしが是を窺ひ、心遣ひのこなし、磯之進思入あつて、

磯之　我妹は得心なし、其身も無事に納りしが、

お花　此家を出し新三郎樣、嘸や親御のお身ならば、

いそ　不緣になるのであちこちへ、面目玉を踏潰しませう。

磯之　それに引替へ後先の考へもなく東の空、

お花　塒はなれて行く鳥も、戀には心目無し鳥、

いそ　番ひ離れぬ思ひでも、末は互ひの身のつまり。（ト磯之進思入あつて、）
磯之　人は教が、（ト思はず上下の兩人と顔見合せるを木の頭。）肝要ぢやわえ。
ト宜しく、お花は俯向きふさぐを、おいそ介抱なす、正兵衛おしがは向うへ心遣ひの思入、此模様宜しく合方時の鐘にて、

ひやうし幕

ト山颪にてつなぎ、直引返す。

三幕目

湯元地藏前の場

〔役名――茶商岩淵與七、岩淵九郎兵衛、浮島新三郎、黒瀬伴藏、相澤傳八。娼妓おさよ、おきつ、其他。〕
（地藏前の場）――本舞臺常足の二重、岩組の蹴込、後岩組の張物、此上一文字の所星を大分に切抜きし灯入の青空の張物、此前へ雲の幕を下し、後に上げ下しあり、二重の眞中人の隠れる程の松の大樹、上の方に岩へ彫込みたる石の大地藏、此上手藪疊、下手熊笹の茂み、ずつと上下杉林にて見切り

舞臺一面杉の梢を見せ、日覆より同じく釣枝、すべて箱根湯元道岨地藏の體。眞中松の木の後へ桐油を掛けし山駕籠一挺を下し、駕舁の鐵米二人松の下に雨宿りをしてゐる、此側に獵人一人筒袖かるさん草鞋にて鐵砲を持ち、雨宿りなして居る、此見得山颪雨車にて幕明く。

鐵　湯元の湯氣が下へ籠り、山から雲を上げたから降るだらうとは思つて居たが、桐油を掛けても凌げねえ、こんなざんざ降があらうとは、おらあさつぱり知らなんだ。

米　然し斯ういふ降り方は運び雨も同然で、今一降はひどかつたが、直に小降になつて來たから、もう少し休んだら、段々西が切上るだらう。

獵人　車流行の世の中に、街道筋で駕籠を見掛けるのは、箱根山か修善寺道だが、さうしてお前方は何處へ行くのだえ。

鐵　なあに、わつちらは此下の直小田原迄行くのだが、登りと違つて下りぢやあ、雨でも降ると道が辷り、

米　下手をまごつくと乘つて居る客人迄怪我をさせ、づんでんころりと投げられるから、雨止をしにやあ行かれねえ。

獵人　なるほど駕籠は登りより、下りの方がむづかしからう。

鐵　さうしてこなたの生業も、雨が降つちやあ火繩が濕り、嘸是ぢやあ困るだらう。

獵人　何さ、今ぢやあ昔の樣に火繩なんぞは用ひないから、降つても打てないことはねえが、只困るのは肝腎の猪や鹿が出ねえから、雨が降つちやあ上つたりだ。

米　いや、何生業でも其道へ這入つて見にやあ分らねえが、さうして猪と鹿とぢやあ、どつちが錢になるだらう。

獵人　そりやあ以前は猪の方が、鹿よりはるか錢になつたが、今日々ぢやあ猪は牛に押れ、却つて鹿が錢になるのさ。

鐵　なるほど當時は角彫の、筒差なんぞが流行るから、こいつあ錢になるだらう。

米　鹿を打つにやあ鳥さしが、雀の笛を吹く樣に、鹿笛とやらがあるさうだが、

鐵　こんたなんぞも其笛を、吹いてやつぱり打ちなさるのか。

獵人　其の鹿笛は爰にある、こいつを吹いて鹿を打つのだ。

ト腰に提げたる袋より、笛を出して見せる。駕舁兩人手に取りて見て

米　それぢやあ是を吹く時は、鹿が自然と寄つて來るのか。

獵人　笛の音を聞き山の中から、出て來る所を打留めるのだ。

鐵　哀れなものだと聞いて居たが、笛の音色を鹿の聲と間違へるとはそゝつかしい、

米　さうよ、しかと聞いてから出ればいゝに。

獵人　いや、きはどい所で洒落たものだ。（ト此内雨車止む故、）

鐵　こう、すつぱり西が切上つて來た。

米　それぢやあそろ〳〵出かけよう。

獵人　どれ、己も山へ行くとしよう、（ト山颪になり、獵人は下手へはひる。）

鐵　ときにとつぷり日が暮れたが、灯りの支度をせずばなるめえ。

米　あひにくマッチを忘れたから、何處ぞで灯りを借りてえものだ。（ト鐵向うを見て、）

鐵　こう、向うへ來るのは湯元の駕籠だぜ。

米　それぢやあ爰で待合せて行かう。

ト山おろし合方になり、花道より桐油を掛けたる山駕籠二挺、是を駕舁四人にてかき、棒鼻へ提灯を提げ出來り、直に舞臺へ來る、米前へ出て、

其處へ來たのは湯元の手合か。（ト四人も二人を見て、）

虎　おゝ黒鐵に、づく米だな。

松　それぢやあ二人も今の降りで、
清　困るだらうと思つたが、
留　爰で雨止をして居たか。
鐵　纔爰迄五六町だが、
米　出し抜け降りでぐつすり濡れた。
四人　どれ、一ぷくやつて行かう。
ト舞臺能き所へ駕籠を下す、是にて先の駕籠の桐油内より明くと、前幕の新三郎乘つて居て、
新三　これ若い衆、急ぎの川で行くのだから、ちつとも早く遣つて下ツし。
虎　やれと言ふなら遣りもしようが、
松　雨降擧句の下り道、
清　其上こんなに夜に入つちやあ、
留　酒手なしぢや急げません。（ト新三郎乘つて居ながら紙入より小札を出し、）
新三　こう若い衆、是を遣るから急いで下ツし。（ト虎に渡す、虎提灯の灯りにて札を見て、）
虎　もし旦那、こりやあ二十錢のお酒手かね。

新三　人力車なら十錢だが、駕籠に乗るだけ倍増に、二十錢なら相場だらう。

虎　そりやあ當時は人力車が酒手の相場を下げたから、男ばかりの客人なら、

松　二十錢は扨おき、十錢呉れても文句を言はず、默つて貰つて置きますが、

清　女を連れて山道を、夜越に下る旦那株、雨降擧句と來て居ちやあ、

留　足許ばかりか口先迄、いはゞ辷らぬ口留だ、二十錢ぢやあやられねえ。

新三　さうして幾ら呉れといふのだ。

虎　さうさ、是が昔の相場なら、百貫とでも言ふのだが、

松　今時そんな相場を立つて、無闇なことも言はれぬから、

清　一人前に一圓宛、四人の天窓へ四圓の所、

留　四の字を嫌つて勘定よく、器用に五圓、

四人　おくんなせえ。（ト是にて新三郎思入あつて、）

新三　それぢやあこつちが女を連れて、夜道をするのを付込んで、手めえ達はゆするのだな。

虎　何だ、ゆすりだ、こいつあ途方もねえことを言やあがる。

松　さうだ〳〵、それ相當に酒手をねだるに、

清　ゆすりだなんぞと言はれちやあ、
留　そつちで酒手を呉れると言つても、
虎　もう一錢でも、
四人　入るものか。
新三　入らざあそれ迄、遣らぬばかりだ。
虎　其替りにやあ、
四人　仕樣があるのだ。（ト四人にて新三郎の手を取り、駕籠より引出す。爰へ以前の駕舁鐵、米割つて出て、）
鐵　これさく、手前達もそれぢやあちつとおとなしくねえ。まあおらッちに任せてくれ。
米　又旦那もさう言つちやアあんまり色氣がごぜへません、まあく二人にお任せなせえ。
ト兩人にて宜しく留める。
新三　これ若い衆、聞いて下さい、湯元から小田原迄五十錢宛で極めた駕籠に、五圓の酒手をねだられては、ゆすりと言ふのも無理はなからう。
鐵　そりや五圓は法外だが、女を連れて湯元から夜道を急がせる駕籠へ乘れば、二圓や三圓はあたりまへだ。

米　さういふ旦那におねだり申して、旨え酒でも飲みませんぢやあ、駕舁仲間がたちませんから、中へ這入つた二人に免じ、今夜の事でごぜへますから、駕籠一挺に一圓宛、
鐵　二圓酒手をお遣んなせえ、それで二人が扱ひませう。
米　それは折角の扱ひだが、是が遠國他國の者なら勝手の知れぬ山道に、脅しを喰つて法外な酒手を出して賴みもしようが、爰から近い小田原に堅氣で暮すこちとらが、そんな酒手は出せませぬ。
新三　然し二人の扱ひに免じて只も置けぬから、四人の天窓へ五十錢、酒手をやるとしませうから、それで話しを付けて下さい。
鐵　そいつあ所詮いけません、一圓宛なら知らぬこと、五十錢ぢやあ出來ねえ相談、
米　餘計な世話を燒くやうだが、見るからかぼそい旦那株、爰で喧嘩をした日にやあ、迚も叶はぬ相手は駕舁、
鐵　多勢に無勢で打倒され、怪我でもするだけお前さんの損だ。
米　それより奇麗にわつちどもが、捌いた通り二圓出し、無難に爰を、
兩人　通んなせへ。

新三　いや假令何と言はうとも、そんな酒手はやられない。
鐵　それぢやあどうでも、
兩人　出されやせんか。
新三　相場でないから出されません。
鐵　えゝ、出せざあ勝手に、
兩人　しやあがれ。
虎　構ふことはねえ、擔ぎ返せ。
三人　それがいゝ〳〵。（トわや〳〵立掛る。此内下手の駕籠の内にて、）
きつ　もし、ちよつと待つておくんなさいよ。（ト聲する。）
虎　こう女が待てと留めるから、桐油を上げて聞いて見ろ。
ト松駕籠の桐油を上げる、内におきつ乘つて居て、
きつ　わたしが酒手を上げようから、是で何にもお言ひでない。（ト紙に包みし札を出す、松取つて開き見て、）
松　こいつあ中に二圓あるね。
きつ　はい、扱つた人の顏を立てゝ、二圓出したらいゝぢやあないか。

清　こんな別品を連れて居ちやあ、五圓の直打は慥にあるが、
留　折角二人の扱ひを、今更四の五の言はれぬ譯だ。
鐵　それぢやあ二圓で手前達も、
米　勘辨をして置くがいゝ。
新三　勘辨どころか十分だ。（ト言ふを冠せ、）
きつ　はてまあ、わたしにお任せなさい。（ト宜しく宥める、是にて駕舁四人件の札を懐へ入れ、）
虎　どれ、不承して歸るとしよう。
三人　それがいゝ〳〵。（ト四人にて二挺の駕籠を擔ぎにかゝる故、）
新三　こう〳〵若い衆、小田原迄の約束を、なぜ爰から歸るのだ。
虎　おゝ、酒手の出し樣がしみッたれだから、
松　誰が小田原迄やるものか。
新三　それぢやァあんまり無法だらうぜ。
清　おゝ無法で悪くば、こちとらを、
留　爰から一緒に突出して見ろ。

虎　よもや連れちやあ、
四人　出られめえが。
新三　えゝ言はして置けば、（トきつとなるを留めて）
きつ　はて、何事もおつしやらずに、仕方がないと我慢をなさい。
新三　それだと言つてあんまりだ。
きつ　はてもう、何にもおつしやいますな。
ト宜しく留める、是にて新三郎ぢつとこなし、駕舁四人思入あつて、
虎　旦那はぼく〳〵だが連の女は、東京者だけ捌けが早へ、
松　器量もいゝが肚胸もよく、切離れのいゝ苦勞人だ。
清　それに免じてこちとらも、文句を言はずに早く行かう。
留　然し斯ういふ仇物を、只ぢやあ連れて歩かれめえよ。
ト四人の籠舁行きに掛る故、鐵、米、前へ出て、
鐵　こう〳〵みんな待たねえか、二人にさんざ口をきかせ、
米　挨拶もなく手前達は、此儘野面で歸る氣か。

虎　さうよ、酒手を取りやあ用はねえのだ。

松　是がこつちの言條通り、五圓も取れたら禮をするが、

清　四人の天窓へたつた二圓、扱ひ樣が氣に入らねえが、

留　不承をしてやる其替り、挨拶もせず歸るのだ。

虎　然し大きに、

四人　世話であつた。（ト又行掛るを留めて、）

鐵　やい、そんな言草があるものか。

米　行くなら別れを置いて行け。

虎　えゝ、誰が別れを、

四人　やるものか。

鐵　それぢやあ手めえ、

米　濟まねえぞよ。

虎　えゝ、濟むも濟まぬも、

四人　いるものか。（ト四人の駕舁振切つて明駕を擔ぎ花道へはひる。）

鐵　えゝ、待てと言つたら、

米　待ちやあがれ。（ト山颪になり、駕屋兩人跡を追掛け花道へはひる、おきつ是を見送り、思入あつて、）

きつ　もし若旦那、忌々しい奴でございますねえ。（ト合方になり、）

新三　御一新から世界も替り、道中筋で雲助が酒手をねだるなぞといふそんな惡弊はない筈だが、全くこちらが女を連れ駈落者と見られし故、今の奴等の強ねだり、無法な奴もあるものだ。

きつ　さうして是から駕籠はなし、歩いて行くのでございますか。

新三　さあ、ちつとおぬしは不氣味だらうが、もう小田原迄纔の道、駕籠に乘らずに歩いて行き、宿へ行つたら眞誠講の切符を買つて車へ乘り、今夜の内に大磯迄出掛けて置くとしようわえ。

きつ　そりやもう、假令不氣味でも、あなたと一緒に逃げるのなら、山の奥でも厭ひませんが、何處へ行くにも先立つのは、路用のお金でございますが、あなた宜しうございますか。

新三　さあ澤山持つては居ぬけれど、先刻湯元でお袋が預けて行つた五十圓、是を路用に東京迄行きさへすれば取引の、得意も多くある事故、跡の都合はどうでもなる。

きつ　さういふことなら小田原迄、すこしも早く行きませう。

新三　是から下りの坂道で、石があるから氣を付けなよ。

きつ　どうぞ手を引いて下さいまし。

新三　まだ降らぬのが仕合せだ。

ト兩人手を引合ひ上の方へ行きに掛る、此時上手の藪疊の蔭より、前幕の九郎兵衞安番傘を持ち先に立ち伴藏、傳八付添ひ三人共跣足尻端折りにて出て、兩人の前へ立塞がり、

九郎　やい、間男待て。

新三　えゝ。（トびつくり思入、おきつは九郎兵衞を透し見て、）

きつ　や、さういふおまへは。

九郎　おゝ手前の亭主の九郎兵衞だ。

きつ　こりやもう爰には。（ト逃げに掛るを伴藏、傳八にてとらへる。九郎兵衞は新三郎をとらへ、）

九郎　野郎め、じたばたしやあがるな。

トきつと思入、是より凄みの合方になり、新三郞扨はといふ思入あつて、

新三　そんなら今迄知らなんだが、おきつおぬしは亭主持か。

きつ　あい、亭主があるとあけすけに言つてしまへば身も蓋もないて頼んだ無心迄、ばれになるのは知れたこと、言ぬが花と收入のよい大盡客を引掛けに、旅へ出るのも有樣は亭主の爲めと夕暮の、

涼風慕ふ夏場をかけ湯治場近き小田原で、宿場稼ぎの旅藝者、知らぬ土地故オウライの轉ぶ噂も昨日と過ぎ、今日迄すまして居られたが、東京に居た其頃は毎度いろはの新聞で、假名垣さんに叩かれても、のんこのしやあで押通し、山猫おきつと名を取つた尻尾の裂けた氣まぐれ者さ。

九郎　其猫又の女房を啣へて歩く九郎兵衛は、轉ぶのを待ち喰ひ付く狼もの〻喰物を、今度ばかりやあ汝といふ二才野郎に裾をか〻れ、すんでに横取される所、丁度湯場から二人して逃げる樣子をかぎ付けて、爰迄送り狼とは畜生じみた仕事だが、痩せても枯れても其の以前幕府の祿をけがしたる士族の身分に對しても、汝に女房をなぐさまれ擧句に連れて逃げられては、朋友共へ恥辱故汝を是にて討果すと、言つたところが廢刀の布告此方丸腰に、光る刄物はたばさまねど、雨にきらめく稻妻の光に對す傘で、破れかぶれとなる迄も己が骨々へし折つて命をとるからさう思へ。

伴藏　それとも命が惜しいなら、我々共が取扱ひ命は助けてやらうから、首代替りの金子を出し、尻尾を巻いて這ひつくばへ。

傳八　其の首代も以前とは相場の違つた十層倍、七十五圓といふのだが、安く見切つて五十圓、爰へ出したら知らぬこと。

九郎　さなくば命は、

三人　助けられぬ。（トきつといふ、此内新三郎扨はといふこなしあつて、）

新三　そんなら眞實言交し、女房にならうといつたのも、手くだに掛ける畜生あま、さうとは知らずおめ〳〵と騙されたのが口惜しい。うぬ、どうするか思ひしれ。

トおきつの方へ立掛るを、九郎兵衞傘にて打ちすゑ、

九郎　えゝ指でも差したら、叩き殺すぞ。（トきつと思入。）

伴藏　人でも來ちやあ面倒だ、金子を早く巻上げませう。

傳八　何さまそれが早手廻し、野郎め金を出しやあがれ。（ト新三郎の懷より紙入を引出すを、其手へ縋り）

新三　扨は湯場にてお袋から、預かつたのを取らう爲め。

九郎　おゝ、察しの通り此きつに、手前を爰迄連出させたは、其の五十圓を巻上げて榮耀な眞似をしよう爲めだ。

新三　さう聞く上は猶のこと、何でわいらに渡さうぞ。

伴藏　えゝ未練なことを、

傳八　言やあがるな。

ト三人にて新三郎を酷くなぐり、トゞ九郎兵衞件の紙入を取上げる。伴藏傳八新三郎を引付ける。

九郎　首代替りに是を取りやあ、もう手前に用はねえのだ。
伴藏　西へ行くとも東へ行くとも、
傳八　勝手な方へ行きやあがれ。（ト兩人にて下手へ新三郎を突倒す、是にて新三郎無念のこなしにて、）
新三　やい、おきつ、うぬらはいよ〱此己を突出しものにしたのだな。
きつ　知れたことさ、お前に惚れたのはれたのと、甘い詞を掛けたのも金が欲しさの娼法づく、わたしやどうした性分だか、お前の樣なよごれッぽい、生ッ白い首は嫌ひだよ。
新三　うぬ、そのいけ口を。（ト立掛るを留めて、）
伴藏　こう〱兄い、どういふものだ、面と向つてひらぶつけに、愛想づかしを言はれたら、それで未練は殘らぬ筈だ。
傳八　亭主持とも知らねえで、うか〱深みへはまり込み、騙されたのは手前の間拔け、誰を恨むに當らぬから、
伴藏　ぐづ〱せずと、
傳八　早く行きやれ。
新三　いや騙されたのも仕方がないが、假令猫でも飼主の恩は少しは知つて居るに、是迄さんざ世話に

なり、恩を仇なる其悪口、それでおのれは濟まうと思ふか。（ト又立掛るを、）

作藏　え丶、さりとはしつこい、

傳八　間拔野郎め。（ト兩人にて新三郎をくらはし引付けて居る。）

九郎　いやなに、御兩所、ぐづ〳〵言ふなら面倒だ、何處ぞへどんぶりやつて下せえ。

作藏　なにさま、いつそ谷河へ、

傳八　どんぶりやつてしまひませう。

新三　え丶、何をおのれに、

作藏　え丶、じたばたせずと、

兩人　うしやあがれ。

ト　もがく新三郎を無理に引立て、伴藏傳八下手へはひる。おきつ是を見送り居る故、

九郎　これおきつ、手めえあいつに未練があるのか。

きつ　なあに未練なんぞはありやあしないが、なんぼ悪婆なわたしでも、今迄世話になつたと思やあ、いゝ心持はしないのさ。

九郎　のろけやあがると、叩きなぐるぞ。

きつ　誰がのろけるやつがあるものかね。

ト是より替つて合方になり、九郎兵衞件の紙入より五十圓の札を出し、

九郎　然し手前の働きで、思ひ掛けねえ五十圓、

きつ　それを路用に小田原から、通し車で島へ行き、

九郎　久し振にて夷屋へ、一晩泊りあくる日は、

きつ　三浦三崎の景色を見て

九郎　金澤泊りに日を暮し、

きつ　それから直に濱へ行き、

九郎　鐵道にせえ乘込めば、

きつ　またゝく内に東京入り、

九郎　新富座でも見物しよう。

きつ　何より一番樂しみだねえ。（ト九郎兵衞思入あつて、）

九郎　そりやあさうと此儘行つたら、手めえの追手がかゝりやあしねえか。

きつ　それは少しもお案じでない、あの馬鹿野郎を騙し込み、前借だけは此間すつかり濟ませて小田原

で、今は自前稼ぎのわたし、こざく借りは少しはあるが、態々それを東京迄取りに來る者もあるまい。

九郎　そいつあ何より安心だ。

きつ　たゞわたしの氣になるのは、あの海老屋に居るおさよさん、以前を聞けば色戀で逃げた中だといふこと故、元木にまさる末木なしと、お前の心が替らうかと、そればつかりが心掛り、私を捨てるときかないよ。

九郎　そんな氣遣ひがあるものか、そりやあ以前は許嫁の立派な亭主のあるやつを引攫つて出た位だから、己もちつとは惚れて居たが、女房に持つて世帶染み、意氣地のねえのに愛想が盡き、遠い宿場へ叩き賣り、まだ其上に此間あいつをいたぶり百圓といふ金迄借りてしまつたから、もう增し借も出來ねえ體、あいつは生涯うつちやりものだ。

きつ　ほんにお前の女房には不釣合のおさよさん、何ぞといふと二言目にはお部屋の爲めだの主人の爲めと自分一人が利口ぶり、目下の者へ異見をするが、女郎に賣られて主人方を大事に思つて居る樣では、どうして體が續くものか、今にきつと梅毒で鼻でも落ちるに違ひない。

九郎　道理でさつき福住へ、湯治に來て居る樣子であつた。

きつ　お前の樣な意氣な人に、どうしてあんな野暮てんが、是は失敬、御免なさいよ。
九郎　え丶、あいつのことを言つてくれるな、名を聞いてせへ蟲唾がはしらあ。
きつ　へん、あんまりさうでもありますまい。（ト此時後の一文字の黑幕を上げ、灯入の星空になる、）
九郎　こう、雨が上つて木の間を洩る、星明りとは有難え。
きつ　それはさうとあの二人は、何處迄あいつを連れて行つたか。
九郎　なあに、どうで泊りは知れて居るから、一と足先へ出掛けよう。
きつ　そんなら更けない其內に、
九郎　どれ小田原へ下るとしよう。
　　ト兩人身支度をして、思はず後を見返る、松の木の蔭に山駕下しある故、おきつびつくりして、
きつ　もし、ちよつと御覽。（ト駕籠を指さし敎へる、九郎兵衞見てびつくりなし氣をかへ、）
九郎　なあに、からッ駕籠だ。
　　トおきつを連れて上手へ行掛る、此時件の駕籠の桐油を內より上げ、前幕のおさよ乘つて居る、
さよ　九郎兵衞さん、待ちなさんせ。（ト駕籠より出る。是にて兩人ぎつくりなし、）
きつ　さういふお前は。

九郎　南無三しまつた。（トおきつを連れ、逃げに掛るを、おさよ前へ出て二人をとらへ、）

さよ　えゝ逃げるとて逃がさうぞ、まあ下に居なさんせ、はてまあ下に居て下さんせ。（ト無理に九郎兵衛を下に居させ、）えゝお前はなあ〳〵。（ト蟲笛の入りし誂への合方になり、）今更何を言つたとて、お前の耳には入るまいが、身の徒とはいひながら、お前故には親を捨て許嫁せし夫を捨て、故郷を跡に所々方々さまよひ歩きおみつといふ子迄なしたる夫婦中、其上ならずお前の爲めつらい苦界へ身を沈め、まだ其上に倦足らで私を騙し百圓の金迄貪り取らしやんして、人もあらうに小田原の、一つ宿にて近付の此おきつどのと二人して、東京へ逃げ一生涯わたしを捨てる心とは、よくもさうした不人情な手前勝手が出來たもの。さうとは知らず商法の損が續いて命にも拘はる大事と聞きし故、今の主人のお情でお貸し下さる百圓を持たして歸すも末始終、假令貧しいくらしでも親子夫婦が一緒になり、樂にしたいと思へばこそ、そればつかりを樂しみにつらい苦界の辛抱も勤め大事と身を詰めて、主人に御損掛けねばこそ。お前はそれをよい氣になり、わたしを騙した其金で藝者狂ひに湯治場で、大方湯水かなんぞの樣に遣ひ捨てたでござんせう、是も誰故おきつといふ惡魔が付いて居ればこそ、えゝ恨めしい心ぢやなあ。

ト思ひ入にて言ふ。此内おきつは九郎兵衛に目まぜをして、早く逃げろといふこなし。九郎兵衛案じる

なといふ思入あつて、わざとづうづうしく前へ出て、

九郎　こうおさよ、もう言ひぐさはそれぎりか、いやさ、なるほどおれの女房なら、そんな文句も言ふだらうが、疾うに離縁をした汝今ぢやあ他人のおぬしだから、其言ひぐさは言はれぬ譯だ。

さよ　女房でないと言はしやんすが、現在おみつといふ子迄二人が中にあるのが證據、わたしやお前に離縁を受け、去られた覺えはござんせぬ。

九郎　なにねえことがあるものか、手めえを娼妓にする時に、女房の籍ぢやあ賣れねえから、表向にて區役所へ離別屆けをした上で、附籍に直した同居人、女房と言はれる覺えはねえ。

ト是を聞きおさよ悔しきこなしにて、

さよ　むゝ、そんならあの時區役所でわたしの籍を書替へたは、斯ういふ時に女房ではないと言張る企みぢやなあ。

九郎　企みもへちまもあるものか、表向にて區役所で去つた女房に不思議はねえ、叉おみつといふ餓鬼とても、手めえに緣ある良助の娘に乳があるのを幸ひ、生れて間もなく里にやり、他人の手にて育てたおみつ、おらあ子だとは思やあしねえ。（ト是にておさよ悔しき思入にて、）

さよ　えゝ、どう言へばかう言ふと、よくもお前は其樣な氣強いことが言はれたもの、そんなら何で女

房とも思はぬ者から此間、百圓といふ大金をお前はいたぶり取らしやんした。

九郎　そりやあ以前のよしみ甲斐、女房と思つて手めえからおらあ借りやあしねえ、全體こんな邪險な己に、貸すのが手前の醉狂だ。（ト是を聞きおさよ猶々悔しき思入。）

さよ　え丶醉狂とはどの口で、お前はわたしに言はしやんす。

九郎　どの口でもねえ此口だ。（ト憎々しく言ふ。）

さよ　ちえ丶。（ト無念の思入あつて、こちらへ向ひ、）もしおきつさん、いえさ、爰な藝者どん、私の亭主といふことは一つ宿にて海老屋へも、度々呼ばれるお前故、定めて知つてゞござんせうに、只一言の話しもなく、よくものめ〱取らしやんした、きつとお禮を言ひますぞえ。（とおきつ思入あつて、）

きつ　おやお氣の毒なお門違ひ、そりやもうお前の亭主なら、さう言はれても仕方がないが、女房でもないお前さんに恨みを言はれる覺えはない。浮氣家業の藝者故、色をするのは當りまへ、お前も娼妓でありながらさりとは野暮な其恨み、なるほど以前がお屋敷だけ、品のい丶ので海老屋でも今ではお職の流行ッ子、然しさういふ了簡では年中お客に騙されて、娼妓の方から入上げては、跡で後悔おしだらう。ほんに亭主に捨てられる、お方は違つたものだねえ。（ト憎々しく言ふ。）

さよ　これ、おきつどん、そりや本心で言ふのかえ。

きつ　おやまあ、飛んだ三段目の喧嘩場氣取り、よしてもおくれ、わたしやお前に殿づけで呼ばれるやうな科はしないよ。（ト此内おさよ懐より前幕の短刀を出し、）

さよ　殿付ならばまだなこと、今は賤しき娼妓でも元は士族の娘の果、身元も知れぬ藝者風情に男を寐取られ悪口され、呼捨にしても構ひはせぬ。

きつ　おやそれぢやあお前は御士族さんの娘御さんでござんしたか、士族の娘が娼妓になり、おまけに亭主に捨てられたら、立派なものでござんせう、成程違つたものだねえ。

さよ　ちえゝ、もう了簡がならぬわえ。（トきつとこなし。）

きつ　了簡ならずばどうともおしな、憚りながら私には九郎兵衛といふれツきとした、亭主が後に付いて居ますよ。（ト脇を向いて澄して居る故、おさよ堪へ兼し思入にて、）

さよ　もう此上は。（ト短刀を抜きおきつへ切つて掛る、九郎兵衛びつくりしておさよの手を捉へ、）

九郎　や、わりやあ刄物を持つて居るな。

さよ　勘當受けし母樣から、お貰ひ申した形見の刀、恨み重なるおきつめに、疵でも付けねば腹が癒ぬ。

きつ　お前の樣な意氣地なしに、めつたに切られてたまるものか。

さよ　やわか己を切らいで置かうか。

九郎　えゝ、刄物三昧しやあがるな。

　ト是よりおさよ九郎兵衞の捉へし手を振拂ひ、おきつの方へ切つて行くを、九郎兵衞宜しく留めろ。おきつ下の方へ逃げて行くをおさよおきつの帶をとらへ、三人きつと見得、是より誂の鳴物になり、有合ふ番傘を遣ひ、三人宜しく立廻り、トゞ九郎兵衞おさよの持ちし刀を傘にて打落し、取らうとするをおさよ遣るまいと爭ふはづみに、おさよの肩先を切る、おさよ疵口を押へ糊紅を見てびつくりなし、

さよ　人殺し。（ト大きく言ふを、九郎兵衞口を押へ、星明りに透し見てびつくりなし、）

九郎　やゝ、留めるはづみに手が辷り、深手を負はせた上からは、

きつ　仕方がないから、やつておしまひ。

九郎　もう是迄だ、覺悟しろ。

　トおさよに切つてかゝる、ちよつと立廻り又一刀あびせる。おさよ手負になり、九郎兵衞に縋り苦痛の思入にて、

さよ　ちえゝ恨めしい九郎兵衞殿、子迄なしたる女房を其身の爲に苦界へ沈め、藝者狂ひに現をぬかし、金迄貪り取りし上、まだ飽足らで命迄取るといふのは鬼か蛇か、是も誰故女め故、人に恨みのあるかないか、今にぞ思ひしらせてやるぞ。（ト物凄く言ふ、九郎兵衞思入あつて、）

九郎　其幽靈で名の高い累やお岩を音羽屋が芝居で見せた昔でも、野暮とお化は箱根から先と極つた山境、其山中も小田原へ纔に近い地藏前、是も因果の約束で殺す心もなかつたが、つい手が廻り足元が惡いは元より合點で、元の亭主の此己が、引導渡して遣らうから、開化の世界に開けねえ、極り文句で柳の下、化けて出ようの恨まうのと、餘計なごたくをつかねえで、賽の河原や小地獄へ行くに便利な山中で、勝手に往生しやあがれ。

さよ　幽靈などはないものと、開化のお人が言はうとも、無念と思ふ一念をやわか殘さで置くべきぞ。是に付けても御主人にまだ年のある體にて、お情深い御夫婦へ、御恩を送らで死ぬるのが、それが一つの心掛り、又二つには湯治場で跡を慕うたあのおみつ、此世の名殘りもう一目逢うて死にたい此事を、たつた一言知らせたい、假令死んでも此無念、やわか晴らさで置くべきか。

ト此時ドロ／＼の樣なる風の音になり、おさよ物凄くなる、此體を見て九郎兵衞ぞつとせし思ひ入、おきつも氣味惡きこなしにて、

きつ　もし九郎兵衞さん、生して置くだけやかましいから、早く殺しておしまひな。

さよ　さういふ己れも諸共に。（トおきつの方へ行くを、九郎兵衞髻をとらへきつとなり、）

九郎　え丶ぐづ／＼言はずと、くたばつてしまへ。

ト是より山颪誂への合方になり、おさよ九郎兵衛に切られながらおきつを追廻す。おきつ逃げながら眞中の松の大樹の蔭へ隱れる。おさよ是を追つて行き、同じく松の後へはひろ。九郎兵衛又一刀あびせる、おきつは逃げて出る。跡よりおさよの吹替天窓を切られ糊紅になり、松の蔭より出て、おきつにむしやぶり付くを、九郎兵衛引戻し、有合ふ山駕を遣ひ、三人宜しく立廻り、トゞおきつは下手熊笹の蔭へ小隱れする、九郎兵衛はおさよを切倒し、のし掛ッて止めを刺し、ほつと思入。是にて本釣鐘を打込み、下手熊笹の蔭よりおきつこは〴〵出て、

きつ　九郎兵衛さん、やつておしまひか。

九郎　まだぴく〳〵として居るのは、往生際の惡い女だ。

きつ　こんな肚胸のいゝ人とは、わたしも今迄思はなんだが、實に今夜は感心したよ。

九郎　それといふのも手前といふ、見當があつてする仕事だ。

きつ　おやまあ私に下駄を預けて、一人惡者におしでないよ。

ト此内九郎兵衛件の白刄を死骸の着物にて拭ひ、星明に透し見て、

九郎　勘當されたお袋から、貰つたのだと言やあがつたが、なるほどこいつあ業物だ。

きつ　當時は不用な刀だから、そこらへ捨てゝおしまひな。

九郎　いや、何ぞの役に立たうから、こいつあ此儘持つて行かう。
きつ　お前も餘つぽど狡猾だねえ、（ト此時下手に人の足音する故下手を見て、）
九郎　や、あの提灯は慥に旅人だ。
きつ　見付られちやあ面倒だが、死骸を何處ぞへやりたいものだ。
九郎　隱す處も外にねえが、駕籠へそつくり入れて置かう。
きつ　山駕籠の葬式は、こりやあ箱根に限るだらう。
ト九郎兵衞おさよの死骸を抱上げ、有合ふ山駕籠の中へ入れ、桐油を冠せる、此内おきつは帶などをしめて居る、此時後に鹿笛聞える故、おきつびつくりして、
もし九郎兵衞さん、ありやあ何だえ。
九郎　ありやあ夜山で狩人が、鹿を呼出す鹿笛だ。
きつ　わたしやあ芝居で幽靈が出る時あんな笛を吹くから、ゑてぢやないかとびつくりしたわ。
九郎　いや、手前も肚胸の惡いやつだ。
きつ　ちつとお前に仕込まれたいよ。
九郎　どれ、更けねえ内に出掛けよう。（ト此時後の空へ黒幕かゝる、兩人思入あつて、）丁度木の間の星影も、

きつ　雲に隠れて眞の闇、

九郎　立退くには持つて來いだ。

きつ　何だか不氣味な。

ト是より木魚の入りし合方になり、おきつ番傘を拾ふ。九郎兵衛は短刀の鞘を尋ねる。此内下手より茶商與七旅裝塗笠達摩合羽を引掛け、脚袢草鞋にて小田原提灯を提げ出て來る、九郎兵衛跡へ戻り件の提灯を打落す、是にて與七跡へ下り、兩人を窺ふ、九郎兵衛はおきつを圍ひ同じく與七を窺ふ、是より忍び三重になり、九郎兵衛おきつを連れて又行掛るを、與七九郎兵衛の腰をとらへ引戻さうとする、九郎兵衛是を振拂ひ行きに掛るを、與七支へ三人世話ダンマリの立廻り宜しく、此内九郎兵衛懐中より序幕の紙入を落し、是に心付ずおきつを連れて上手へ脱れはひる、跡に與七提灯を搜す心にて、件の紙入を拾ひ、空へ透し探り見て、

與七　こりやあ紙入だ。

ト此時後にて、本鐵砲の音するに、與七びつくりして下に居るを木の頭、此のとたんに冠りし笠脱げる事宜しく、與七胸を撫でおろしながら、

あゝ、びつくりした。

ト此模様山下し誂への合方、鹿笛にてよろしく、

ひやうし幕

四幕目

馬喰町旅籠屋の場
深川寺町茶屋の場
正覺寺橋川岸の場
和倉川岸石場の場

(役名)――葉茶屋岩淵與七、岩淵九郎兵衞、浮島新三郎、厚原磯之進、硏師鳴澤良助、說教者願哲。おさよの亡靈、山猫おきつ、新三郎妻お花、與七女房お咲、九郎兵衞娘おみつ、ちい〳〵お爪其他。)

(馬喰町旅籠屋の場)――本舞臺四間通し常足の二重、本庇二階格子、戸袋付の前側を下し、三間上緣付、一間落間、上手に狹き障子に御泊宿駿州屋と記し、正面紺の暖簾口、上手押入戸棚、下手板羽目諸講中の札を掛け、軒口に眞誠講の大きな掛札、上の方黑塀下の方一間平家、千本格子の前側、此前に用水桶、すべて馬喰町旅人宿の體。爰に若い者茂助有喜世新聞を見て居る、上手に權右衞門金十着流し旅人のこしらへにて煙草をのみ居る、下手におとく前垂掛け、下女のこしらへにて、煙草盆を掃除してゐる、此見得本町二丁目の飴屋の鳴物にて幕明く、

權右　これ若い衆、何ぞ珍らしい新聞があるかな。

茂助　深川寺町へ、幽靈が出るといふ新聞がござります。
とく　おやまあ氣味の惡ひ、それはほんたうのことかえ。
茂助　本じやう、、ぢやあない深川だ。
とく　惡い洒落をお言ひでないよ。
金十　何にしろ新聞に出て居るからは、嘘ではあるまい。
茂助　お慰みに御覽なさいまし。（ト新聞を出す、權右衞門取つて見て）
權右　是は有喜世新聞か、小新聞の元祖といふ鈴木田正雄がはひつてから、大層今では賣れるさうだ。
とく　どんなことがござりますか、讀んでお聞せ下さりませ。
茂助　臆病のくせに、よせばよいのに。
とく　いえ、こはい物見たしとやらで、やつぱり聞きたうござります。
權右　それぢや讀んで聞かせようか。（ト新聞を見て）開化の世にはなさゝうな、聞いても凄き寺町通積る恨みの深川に、岩淵といふ葉茶屋あり、爰に此頃厄介の九郎兵衞といふ士族上りが、病の熱に浮されて、其處へ出た此處へ出たとさながら側に幽靈が居る樣に思はれるのは、何か恨みを受けることの覺えがあつて神經病、段々筋を探つて見ると、菊五郎でもしさうな怪談、ぞつと駿河の

金右　母親から送つた刄の祟り迄、委しき事は何れ次號に。
金右　繪入新聞が初りで、續きものが流行するが、是はといふ所へ來ると、何れ次號で明日來る配達が待どほだ。
とく　是からお化が出るか出ないか、跡が見たうござります。
權右　跡を人が見たがるので、續きものが賣れるとよ。
茂助　今日は是から淺草へでも、見物においでなされまするか。
金十　昨日王子へ行つたので、草臥たから兩國で綱太夫を聞く積りだ。
茂助　綱太夫へおいでなさるなら、お早くおいでなさいまし、直ぐ一ぱいになります。
權右　それでは直に行きませう。

ト右の合方にて、兩人下手へはひる。奧より喜兵衞羽織着流し、宿屋の亭主更けたるこしらへにて出來り、

喜兵　奧の八疊においでなさる、厚原樣のお二人は、何處へおいでなされましたな。
とく　あのお孃樣と若旦那は、深川へお寺參りにいらつしやるとおつしやいました。
喜兵　車は佐兵衞がお供をしたか。

とく　はい、左樣でござります。

茂助　あのお孃樣は、厚原樣のお妹御ださうでござりますな。

喜兵　今日一緒においでなされたのが、嫁においでなされた先の聟樣だといふことだ。

茂助　慥靜岡の葉茶屋だと申すことでござりますが、いゝ男でござりますな。

とく　ほんに素人には珍らしい、役者の樣でござります。

喜兵　成程そなたの言ふ通り、何處か家橘に似て居るな。

ト下手より吾市羽織着流し、道具屋のこしらへにて出來り、直に見世へ來て、

吾市　旦那、昨日は有難うござります。

喜兵　おゝ道具屋の吾市さん、よく精が出ますな。

吾市　廢刀此方世に埋もれた、刀劍類が此節は大きに世に出て來ましたので、まことに忙しうござります。

喜兵　安く買つておいたものが、ずん／＼高く賣れるから、吾市さんは福々だ。

吾市　昨日はこちらの御周旋で、お客へ短刀を賣りまして有難うござります。

茂助　しつかり儲かりましたらう、何ぞお奢りなさいまし。

吾市　何れ鰻でも奢りませう。
とく　私しや丑の年で喰べませんよ。
吾市　それぢやあお前は簪か、櫛でも買つて上げませう。
とく　それは有難うござります、
喜兵　斯うして懇意にする中で、そんな心配は無駄なことだ。
吾市　お禮をするも生業の、一つは種でござります。
ト合方になり、奥より磯之進羽織着流しにて出て來る、喜兵衞見て、
喜兵　これは〳〵厚原樣には、嘸今日はお一人で、御徒然でござりませう。
磯之　餘り退屈致した故、往來を見に是へ參つた。（ト喜兵衞毛布を敷く。）
茂右　さあ〳〵是へいらつしつて、御覽なされませ。
吾市　旦那樣、昨日は有難うござります。
磯之　おゝ短刀を賣つた道具屋か。
吾市　お高い樣におつしやいましたが、實に三十五圓では餘程廉價でござります。
磯之　いかにも、瓦解以前ならば百金缺けては賣らぬ村正、金色と言ひ鍛へといひ、實に無類の上出來

だ。

吾市　研ぎは昨日中上げました、御舟藏前の良助へ仰付けられましたか。

磯之　先刻家來に持たせてやつたが、いまだ其者が歸つて來ぬ。

喜兵　よいものがお手に入りまして、宜しうござりました。

磯之　多年搜しをつたる所、思はぬ寶が手に入つた。

吾市　お舟藏前の良助は、よい研師でござりますが、廢刀此方仕方がなく、剃刀研を致しましたが、中中業は勝れたもので、殊に目利をよく致します。

磯之　左樣申すこと故に、先刻賴みに遣はした。

とく　馬喰町から纔な道、もうお歸りでござりませう。（ト下手より、千助着流し草履にて出來り）

千助　旦那樣、只今歸りましてござりまする。

磯之　おゝ千助か、大儀であつた。

茂右　先刻からお歸りを、お待兼ねでござりました。

千助　大きに遲うなりました。

磯之　して研師は、何と申せしぞ。

千助　大層出來を褒めまして、何か伺ふことでもあつてか、旦那樣にお目にかゝつて、それからお受合ひ申すと、只今跡より參ります。

磯之　それでは研師が參ると申すか。

千助　へい、左樣にござりまする。

磯之　然らば座敷へ參つて待たう。

喜兵　それ、お茶の支度を、

とく　畏りました。

磯之　研師が參らば知らしてくりやれ。（ト唄になり、磯之進先に千助おとく付いて奧へはひる。）

喜兵　ちよつと一ぱい有合で、煎茶代りにやりませうか。

吾市　それは有難うござります、御遠慮なしに頂戴仕つりませう。

茂右　昨日の禮に鰻でも、奢る所を奢らずに、

喜兵　こつちで一杯呑みなされば、

吾市　まことに今日は大吉日、

茂右　然しいゝ跡は惡いといふから、

吾市　えゝ延喜でもない、(ト耳を押へるを道具替りの知せ、)眞平々々。

ト前の本町二丁目の唄になり、道具廻る。

(旅籠屋二階座敷の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面四間上の方一間の床の間、續いて一間袋戸棚、此下茶壁上下折廻し障子屋體、下手に手摺付の二階上り口、總て旅籠屋二階座敷の體。床の間脇に兩掛荷物、舞臺一面に薄縁、上手へ萠黄のケツトを敷き、爰に礒之進住ひ前に煙草盆、下手に千助控へ、おとく茶盆の上へ急須と茶碗を載せ是を持ち居る。合方にて道具留る。

とく　旦那樣、お茶がはひりましてござります。

礒之　それへ置いて行つてくりやれ。

とく　畏りましてござります。(トよき所へ置き、)旦那樣は召しましたが、お湯へおはひりなされませ。

千助　日が暮れてからでようござる。

礒之　夜と言はずと今のうち、湯へはひつて參るがよい。

千助　左樣なら御免を蒙り、一風呂はひつて參りませう。

とく　さあ、おいでなされませ。(ト千助おとく付いて、階子の口へはひる。)

磯之　扨近年は引續きていづくも五穀豐熟故、農家は富を得ると見え、伊勢參宮をなす者多く何處の宿でも相客は、大概田舍のものばかりぢや。（ト急須の茶を注ぎ呑みゐる、階子の口より茂助出で、）

茂助　はッ先刻仰せ付けられました、研屋が參りましてござりまする。

磯之　直に爰へ通してくりやれ。

茂助　はッ、畏りましてござりまする。（ト階子の口へ向ひ、）研屋さん、こちらへおいでなされませ。

ト合方になり、良助羽織着流し短刀の風呂敷包みを持ち、前幕のおみつを連れ出來り、

良助　大きにお世話樣でござります。

茂助　あれにおいでなされまするが、厚原樣でござります。

良助　もう宜しうござりまする。（ト是にて茂助階子段の口へはひる。良助おづ〳〵前へ出で、）短刀の研を仰付られましたは、あなた樣でござりますか。

磯之　おゝ申し付けしは身共ぢや。

良助　あなた樣は靜岡の、厚原磯之進樣でござりまするな。

磯之　いかにも、厚原磯之進ぢや。

みつ　やや、お前樣は先達て、箱根で御菓子を下すつた、旦那樣でござりますな。

磯之　まことにそちは福住で、菓子を取らせし娘なるか、扨はそなたは由緣の者か。
良助　へい、私は此お子の母御の里方、靜岡の庵崎郡右衛門が家來鳴澤良助と申します者。
磯之　おゝ庵崎の家來なるか、見た樣ぢやと思つた筈ぢや。
良助　以前のあなたも私も同じ靜岡でござりましたに、只今にては東京に住居を致してをりまする。
磯之　まことに思ひ掛けぬことぢや。
良助　何所にどう知つた者があることやら知れぬもの、是を思ふと厚原樣惡い事は出來ませぬな。
磯之　何と申す。（ト誂への合方になり、風呂敷包より短刀と、外に脇差を出し、）
良助　計らず今日お目に掛るも、則ち天のお導き。さあ名乘合して此處で、勝負なされて下さりませ。
ト脇差を持ちきつとなる、磯之進心得ぬ思入にて、
磯之　こは心得ぬことを申すが、勝負せよとはそりや何故、
良助　何故とはしらぐ〵しい、元こなたと許嫁の主人の娘おさよ樣、若氣の至りに不埒をなされ親御を捨て東京へ男と逃げてござつたのは、八年後でござりましたが、此程箱根の湯治場で計らず出合つて在所がしれ、以前の遺恨で小田原へ歸る途中の三枚橋、地藏前で殺害なし、おさよ樣が持つてござつた此の村正の短刀を、よくもこなた盜まつしやつたな。然し此の短刀より敵と知れた磯

之進、此のお子樣には親の敵、又私にはお主の敵、名乘り合して勝負さつしやれ。

ト良助きつとなつて詰寄る。

磯之　こりや〳〵、良助とやら暫く待て、それは物の間違ひなるぞ、此短刀は道具屋より、昨日身共が求めしぞ。

良助　いや〳〵それは卑怯だ〳〵、外のことなら左樣かと存じますこともござりますが、おさよ樣には遺恨のあるこなた故に此わしは、其言譯は聞きませぬ、武藝が世に出て劍道の指南をなさるぢやござりませぬか、人の師ともなる者が、なぜ僞りをおつしやります。

磯之　おさよ殿が村正の此の短刀を所持せし故、一途に左樣思ふのも、家來の身では尤もながら、先々そちの心を靜め、我申すことを承はれ。

良助　此期に及んで卑怯にも、言ふ事があるならば、サアきり〳〵と言はツしやれ。

磯之　そちが疑ふ此短刀は、此家の主人が周旋で、道具屋吾市と申す者より、三十五圓で求めし短刀、證據は則ち此金の、請取證があるから見やれ。（ト黑革のカバンより請取を出して見せる。）

良助　いや〳〵そんな請取なぞを、わしは見度くはござりませぬ、おさよ樣が箱根にて殺された時取られし短刀、それを所持してござるからは、お主の敵に相違ない。

磯之　さりとはそちは分からぬ者ぢや、此の請取を證據とせずば、賣つた道具屋周旋人、是へ呼出し其方が、疑ひを晴させん。（ト手をたゝき、）こりや女子共々々、（ト此時階子の口より喜兵衛、吾市出來り、）
喜兵　いえお呼びなさるに及びませぬ、二階で大きな聲のするのは何事なるかと最前から、階子の段に居りまして殘らず聞いて居りました。
吾市　お前の疑ふ短刀は三十五圓で旦那樣へ、昨日私が賣つた品、決して御所持でないことは、此の道具屋の吾市が證人、
磯之　身に覺えなき我よりか、其短刀が何處から出たか、先の先をば詮議したなら、討つた敵が知れるであらうに、
喜兵　よく其先を吾市さんに、何處から買つたか聞いて見なさい。（ト是にて良助成程といふ思入あつて、）
良助　なるほど是は一理あり、此村正の短刀は、いよ〳〵こなたが賣つたものか。
吾市　おゝ賣つたとも〳〵。（ト懷から手帳を出し、）而も手帳に此通り記してあるから、是を見なさい。
ト良明に見せろ思入あつて、
良助　して又此短刀は、何處でこなたは買はしつた。
吾市　それも是に記してあるが、其買先は深川寺町岩淵といふ葉茶屋の内で、同じ苗字の九郎兵衛とい

ふ士族の手から買ひました。（ト是を聞き磯之進びつくりして、）

磯之　昨日出處を聞かざりしか、扨は岩淵九郎兵衛より其方は求めしか。

吾市　それに相違ござりませぬ。（ト良助も扨はといふ思入あつて、）

良助　それでは箱根の三枚橋、地藏前でおさよ樣を殺した敵は連合の、九郎兵衛殿であつたるか。

みつ　何でお父さんがおつかさんを、殺しなさんしたのぢやえ。

良助　心よからぬお人故、馴染の藝者の其爲めに、殺さつしやつたのでござりまする。

磯之　左樣な品と承はつては、手前が寶にならぬ故、此短刀は吾市殿、其方へ返しますぞ。

ト前にある短刀を吾市の前へ出す。

吾市　へえお返しなさるとおつしやつても、致し方はござりませぬ、その代金を先方へ掛合ひまして請取る迄、暫くお待ち下さりませ。

磯之　むゝ承知致した。これ良助とやら、我を敵と一途に思ふ、其疑ひは晴れたであらうな。

ト良助面目なき思入あつて、

良助　疑ひは晴れました、此短刀を證據としてあなたを敵と存じまして、失禮な事申しましたは、面目次第もござりませぬ、是も主人を思ふ故、粗忽の段は厚原樣お許しなされて下さりませ。

磯之　そちが我を疑ふも、元忠義より出しこと故、決して此方心にかけぬ、唯疑ひさへ晴れゝばよいのぢや。

良助　えゝ有難うござりまする。（ト辭儀をする。）

喜兵　其疑ひが晴れたらば、早くお前は歸りなさい。

良助　お暇致すでござりまする。返す〴〵も厚原樣、御免なされて下さりませ。

磯之　もう其詫には及ばぬぞ。

吾市　是から先は九郎兵衛殿の、所へ行つて詮議をしなせえ。

良助　左樣致すでござります。

みつ　そんなら是からお父さんの處へ、

良助　さあ、一緒においでなされませ。（ト合方にて良助おみつの手を取り、階子の口へはひろう

喜兵　飛んだ品をお世話致し、御迷惑を掛けまして、申譯がござりませぬ。

磯之　いや、其の心配には決して及ばぬ、我求めずば九郎兵衛が所持せし事も知れざるまじ、これもつながる縁ある故、隱す事ほど顯れると、

吾市　此短刀の研からして、

磯之　露顯に及ぶも、（ト件の短刀を見るを道具替りの知らせ。）不思議なことぢや。

ト宜しく思入、唄にて道具廻る。

（葉茶屋の場）――本舞臺四間の間常足の二重、正面茶の暖簾口、上手押入戸棚、下手一面に小さな茶壺を載せし棚、此下大きな茶壺、總て茶道具の書割宜しく、上の方一間障子屋臺、いつもの所門口諸國銘茶御茶所といふ看板を掛け、下の方後へ下げ、九尺の冠木門下手潜り付き、總て深川寺町葉茶屋の體、爰に願哲坊主螢鼠の着付、出家裝にて茶を呑み居る、お咲前垂掛、世話女房のこしらへにて、茶を袋へ詰めて居る、此見得合方へ屋臺囃子を冠せ道具留る。

願哲　もしお上さん、私は側土地から來た者故、深川の勝手をしらぬが、何ぞ祭でもありますかな。

お咲　今年コレラのござりませぬも、八幡樣のお蔭故、氏子中から二十五座を奉納致すつもりの所、世間の祭がよく出來ました噂に浮れて、獅子が俄に出ますさうでござります。

願哲　それで方々で軒提灯や、屋臺囃子をしますのか。

お咲　左樣にござりまする。（ト茶の袋を二つ出し。）はい一圓が小半斤に、五十錢が小半斤。

願哲　それでは幾ら上げますな。
お咲　はい、三十七錢五厘でござります。（ト願哲財布から小札と錢を出しながら、）
願哲　失禮ながらお前の所は、小さな内だが賣る物は、大きな内よりよつぽどよい。
お咲　葉茶屋は所々にござりますから、なるたけ品を吟味致し、お安く差上げまするから、御贔屓をお願ひ申しまする。
願哲　酒でも茶でも呑んで見ると、良い惡いは直に知れます。いや、惡いといへばお前の所に、病人があるさうだねえ。
お咲　はい、良人の兄でござりますが、ちと惡い病症で熱が強うござりますので、憑物でも致して居る樣でござります。
願哲　それは嘸お困りだらう、愚僧は法華の行者だが、若し祈禱でもしなさるなら、ふきとりをして上げよう、内は豆腐屋の直裏で、願哲といふ者故、何時でも賴みにおいでなさい。
お咲　事によりましたらば、お願ひ申しますでござります。
願哲　お手ずくなでお困りだらう。代は爰へ置きましたよ。
お咲　有難うござります。（ト願哲茶袋を持ち下手へはひる。）今日は朝から引續きお客樣の絕間がない、

是といふのも内の人が商ひを精出す故、木場の方から龜井戸へ出商ひに行かしやんしたが、もうお歸りなされさうなものだ。

ト矢張合方へせうでんを冠せ、花道より與七やつし裝白足袋、草履、茶の箱を背負ひて出來り、花道にて、

與七　此二三日此方は、秋の日の短いのがめつきりと知れて來た、嘸内でも忙しなく。女房が待つて居よう。（ト舞臺へ來り、）お咲今歸つた。（ト内へはひる。）

お咲　おゝ、お歸りなさんしたか、だいぶ遲うござんしたな。

與七　日が詰つたので廻りきれず、是でも一軒殘して來たのだ。さうして内はどうだつた。

お咲　大層商ひがござりました。

與七　それは何よりよかつた。よつたく是も靜岡の浮島樣より直を安く荷を送つて下さるから、こんな有難いことはない。

お咲　其浮島樣の若旦那を、あのおきつさんが騙したとやら、知らぬ顏をして居ますが、濟まぬことでござんすな。

與七　聞けば東京見物に、おいでなされたといふことだが、尋ねておいでがなければよいが、

お咲　おきつさんのおいでのことが、知れて居るかもしれませねば、おいではござりますまい。

與七　して留守に、誰ぞ來なかつたか。

お咲　狹山の問屋の手代衆が催促に參りましたが、三十圓整ひましたか。

與七　やつとの事で都合したが、是迄こんなに催促を受ける樣なことはなかつたが、元より夫婦掛向ひ、小僧も使はぬ小賣見世、大した利益のない身の上、兄貴の前では言はれぬが、二人の衆が內へ來てから、あひにく諸式の直が上り、暮しが倍もかゝる上、上醫者の藥禮鍼按摩、何やかやで餘計掛り、のけて置いた問屋の拂ひを、つい遣ひ込んでおくれたのだ。

お咲　後に來ると言うた故、苦勞に致して居りましたが、お金が出來て安心しました。

與七　背負つて步く茶箱より、おれも今日の重荷を下した。（ト紙入より札包を出し、）奧の簞笥へしまつて置いてくれろ。

お咲　隱しへ入れて置きませう。
　　ト合方にて札包を持ち奧へはひる。上手障子屋體より九郞兵衞やつし裝病人の打扮、小がい卷を引掛け、おきつ結び髮やつし裝にて、介抱しながら出來り、

九郞　與七、歸つたか。

與七　おゝ兄貴今日は氣分はようござりますか。
九郎　いゝかと思ふと熱が出て、苦しみをする己が業病、長く斯うして厄介に、なるも實に氣の毒だ。
きつ　九郎兵衞さんがお前さんに、一人ならず二人迄お世話になるのが氣の毒だと、朝夕言つて居なさいます。
與七　つまらないことを言つたものだ、兄の世話を弟がするのは、是は當りまへ、何で氣の毒なことがあるものだ、ましておきつさんが居ない日には、雇女でもせねばならぬ、決して遠慮をしなさいますな。（ト九郎兵衞思入あつて、）
九郎　是迄手前に厄介を度々掛けた擧句故、實に氣の毒でならねえが、知つての通り小田原から是が借りを催促され、仕方なしに短刀を道具屋へ賣つて方を付けた殘りが爰に五圓ある、飯米代にも藥代にも足りねえ金だが其內へ、是を取つて置いてくれ。（ト紙包の五圓を出す。）
與七　何故そんなことをしなさるのだ、人と違つて此の與七は、以前の士族をすつかり捨て、生涯是で活計を立てる見込で出精した故に、どうなりかうなり見世になり、お前方が一人や二人內に居たとて困りはしませぬ、決してこんな他人めいた義理立をせずいつ迄なりと、わしが內に居なさいまし、此五圓は追々に寒空に向ふ故、古着でも買つて着なさるがいゝ。

九郎　志しは忝ないが、今の二人の話しを聞いては、いやさ、二人が斯うして厄介に、なるのは大した物入故、何の足しにもなるまいが、まあ此金は手前の方へ、どうぞ受取つて置いてくれ。
與七　いえ〳〵何と言ひなすつても、其の金は受取りませぬ。
きつ　それでは心が濟まぬ故、
九郎　兎やかう言はずと此金は、
與七　どうでもわしは受取りませぬ。（ト奥よりお咲薬包を持ち出來り、）
お咲　奥で樣子は聞きましたが、お二人さんがあの樣におつしやいますからそのお金は、預つておきなさいましな。
與七　いや〳〵己は預からぬ。
お咲　爭ふ者は中よりと、私が暫時此お金はお預かり申しませう。（ト取上げるを、）
與七　何のそなたがいらぬことを。
お咲　はて、後でお返し申せば濟みます、先づそれよりもおきつさん、お醫者樣へお加減のお藥取りに行つて下さりませ。
きつ　もうお歸りの時分故、是から行つて參りませう。

與七　今日お見舞がござりましたか。

九郎　さつきお見舞下さつて、早く熱の取れるやう加減をするといはれました。

與七　それでは暮れぬ其内に、

きつ　どれ、行つて參りませうか。（下せうでん入りの合方にて、藥包を持ちおきつ花道へはひる。）

與七　それはさうとお前の爲に、小田原へ行つて娼妓をして居る、おさよどのはどうしました。

九郎　おゝ、あのおさよは小田原の海老屋に稼いで居る内に、内の女房と湯治に行つた其歸りがけ、三枚橋の地藏前で、賊に逢ひ切殺されてしまつた故、それから己も一人身で、何かに付けて困るから、今のおきつを貰つたのだ。

與七　つながる緣のおさよ殿は、はかない最期をしなすつたが、お前故に勘當受け、苦界の勤をしなすつたも、末は一つになるのを樂み、つらい月日を送られたらうに。

お咲　お氣の毒なことをしましたなあ。

九郎　それが心にかゝる故、每晚己が目の先へ、

與七　え。

九郎　夢は五臟の勞れだなあ。

ト宜しく思入、又せうでん入りになり、花道より二幕目の伴藏傳八出來り、花道にて、

伴藏　九郎兵衞が居る所を、昨日君は突留めたか。

傳八　おきつに突然出ッくはし、當今きやつが隱れて居る、寓居を委しく聞いておいた。

伴藏　何にしろ以前の知己を一軒殘らず借盡し、十錢札にも困る窮迫、

傳八　弟は堅固に商法なし、小金があるといふ噂。

伴藏　厭がらせを言つたらば、小遣ひ泣になるだらう。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、門口から窺ひ囁き合ひ、）頼まう〳〵。

與七　表へどなたか、おいでなすつた。（トお咲出て、）

お咲　はい〳〵、何方からいらつしやいました。

伴藏　岩淵九郎兵衞殿は、こちらでござるか。

お咲　はい〳〵、手前に居られまする。

兩人　然らば許しめされ。（ト合方になり、兩人内へはひろ。九郎兵衞見て、）

九郎　頼むとあるは舊弊な、何人なるかと思つたら、相澤黑瀨の二人か。

伴藏　此間から君の居處を、

傳八　所々方々と尋ねたのだ。
與七　お珍らしい御兩所方、先づ是へお通りなされませ。
伴藏　御舍弟には、久々にて御面會を致しまする。
傳八　いつもながら御壯健で、重疊なことでござる。
九郎　して二人が尋ねて來たは、何ぞ用でもあつてのことか。
伴藏　ずんど用があつて參つた、外でもないが兩人の裝を見ても大概は、貴殿も推量めさるだらう。
傳八　すつかり喰詰めて昨今生活の道を失ひ、止むを得ず斯うして參つたは、貴殿に合力請けたいのだ。
九郎　斷琴の交りと堅くは行かぬが牛店で、胡座鍋の親友故、若干か進ぜたいが、先頃湯場から歸つてより、風を引いたが元となり、瘧の樣な此病ひ、少しあつた貯も遣ひ果して當今は、二分の金にも困る九郎兵衛、お氣の毒だがお斷りだ。
伴藏　大方そんな挨拶で、あらうと思つてこなたの手へ、
傳八　しつかり金のはひつた事を、聞き込んで來たのだ。
九郎　なに、金がはひつたとは。
伴藏　いつか箱根の山道で拾つたといふ短刀を、米澤町の道具屋へ三十圓に賣つたことを、慥に向うを

洗つて來たのだ。
九郎　どうしてそれを。（ト驚く。）
傳八　其所は譬の蛇の道は蛇、瓦解此方小道具屋を生業にする朋友から、委しく聞いて知つて居る。
九郎　さう知られたら隱しはせぬ、實はおきつが小田原に借りが殘つてあつたのを、願ひ立てると代言が度々來るがうるせへから、其の濟方に短刀を二十圓に賣却したが、乾いた擧句に忽なくなり、殘つた錢は纔十錢、是でよくば持つて行きねえ。（ト煙草入の段口から十錢札を出してやる。）
伴藏　志しは忝いが、まだ十錢や二十錢の端た錢を貰ふ樣な、そんなしみつたれな心はねえ。
傳八　三十圓に賣つた金を、二十圓貸せとは言はねえ、十圓二人に貸して下せえ。
九郎　以前ならば貸しもせうが、今も言ふ働きの出來ねえ體の此病人、それで不承して置きねえ。
伴藏　十錢ならばこつちから、こなたの方へくれてやる。（ト札をはふり付け、）
傳八　十圓位は口ふさげに、二人にくれてもよからうに。
九郎　そりや又何故。
伴藏　三枚橋の、
兩人　地藏前で。

與七
九郎　やゝ（ト九郎兵衞は南無三といふ思入、與七は扨はといふこなし、）

伴藏　こなたが拾つた短刀は、元は庵崎郡右衞門が家の寶の千壽院、娘のおさよへ母親から送つてよこした形見の短刀、拾つた所は地藏前、しかも其夜は秋雨も夕立めいた強い降、胸に轟く雷に目先にきらめく刄物の稻妻。

傳八　峰から落す一吹に、水へ散行く血汐の紅葉、夜風もぞつと身に沁みるくれえ仕事の箱根山、十圓位は二人へくれてもいゝから貰ひに來たのだ。くれぬと言やあ仕方がねえ。

伴藏　貸した物といふでもなければ、指を啣へてすご〳〵歸るが、

傳八　後で後悔しなさんなよ。（ト此内與七思入あつてお咲に囁き、最前預りし五圓をとり、思入あつて、）

與七　お二人樣、ちよつと待つて下さりませ。

伴藏　なに、待てと二人を、

兩人　留めたのは。

與七　以前をいへばお互ひに同じ勤の舊幕臣、ましてや兄とは水魚のお二人、餘儀ないことのお賴みを、其儘お歸し申すのは、まことによしみのないこと故、おつしやるだけにはなりませぬが、茲に五圓ござります。是を進上致しますから、御不承なすつて下さりませ。

ト最前の五圓の紙包を出す、伴藏傳八顏を見合せ、しめたといふ思入あつて、

伴藏　それでは君が舍兄に代り、五圓お惠み下さるとか、それは千萬忝ない、御厚志深く謝し申す。

傳八　十圓なければ不都合なれど、折角君の思召しを、悖くも近頃不本意ゆゑ、

伴藏　五圓頂戴致すでござる。（ト札包を頂き懷へ入れる。）

九郎　えゝ、遣らずともよい金を、

お咲　あゝもし兄さん、お前さんは。（ト留める。）

九郎　それだといつて。

お咲　默つておいでなされませ。

伴藏　思ひがけない御舍弟から、

傳八　合力請けて忝ない。

與七　それを上げます其替り、お二人樣へお願ひは、御覽の如く大病で煩らつて居る兄九郎兵衛、若い時より放蕩故惡いこともござりませうが、竹馬の友のよしみを以て、必らず世間へ何事もおつしやつて下さりますな。

伴藏　そりやあ君が言はずとも、魚心あれば水心、

傳八　此の合力を請けるからは、世間へ何も言やあしねえ。（ト九郎兵衞悔しき思入、）

九郎　え丶弱りめに祟りめと、煩つて居るばかりに、

與七　あ丶これ、お前は何にも言ひなさんな。（ト九郎兵衞を留める。）

伴藏　どれ、取るものを取つたらば、

傳八　暮れねえ内に歸らうか。（ト門口へ出る、）

與七　左樣なればお二人樣、

伴藏　飛んだお世話に。

兩人　なりました。（トせうでん入りの合方になり、兩人思入あつて花道へはひる。）

九郎　え丶、あんな者に五圓の金を、遣るのは無駄なことだに。

與七　無駄と知りつ丶持たしてやつたも、お前の爲めを思ふ故、惡い樣にはしませぬから、私に任して

おきなせえ。

九郎　それぢやあそなたに任しておかう。

與七　どれ、暮れぬ内賣つた帳合をしておかうか。

ト右の鳴物にて與七奥へはひる。此鳴物にて下手より以前の吾市短刀を持ち出來り、

吾市　はい、御免なされませ。
お咲　何方からおいでなされました。
吾市　私は米澤町の、道具屋吾市でござります。
お咲　お丶此間おいでの道具屋さん、こちらへおはひりなされませ。
吾市　眞平御免なされませ。（ト吾市内へはひり、下手へ住ふ。）
九郎　米澤町の吾市さん、何ぞ用でもあつてかえ。
吾市　外のことでもござりませぬが、此間引取りました村正の此短刀。（ト風呂敷包より短刀を出し、）仔細
あつてお前樣へ、是はお返し申します。（ト前へ出す。）
九郎　此の短刀を返すとは。（ト合點の行かぬ思入、誂への合方になり、）
吾市　此村正はお前樣の、御所持の品でござりますか。
九郎　いかにも是は家代々、先祖よりの讓りものだ。
吾市　實は昨日さる方へ三十五圓で賣りましたが、不正な品故返すとあつて、先方から返されました。
五圓の儲けを生み出して、三十五圓先樣へ、お返し申さにやなりませぬ。
九郎　うむ、其短刀の買主は、

ト此以前下手より以前の磯之進羽織着流し、駒下駄にて出來り、門口に窺ひ居て、

磯之　其の短刀は身共が求めた。（ト門口をあける、九郎兵衞見て、）

九郎　や、貴殿は厚原磯之進殿。（トびつくりする、お咲前へ出て、）

お咲　むさくろしうはござりますが、是へお通り下さりませ。

磯之　然らば許しめされ。（ト合方きつばりとなり、上手へ通り住ひ、）九郎兵衞殿には御不快でござるか。

九郎　長らく不快でござりますが、まことに以て貴殿には、白晝面の合されぬ大罪のある此九郎兵衞、

磯之　以前ならば兩腰たばさむ武士の身の上に、刀の手前と申すこともなきにしもあらざれど、今は無刀に平民同樣、ほとんと士氣を捨てたれば、過ぎ去りしことは何事も、拙者は水に致せしぞ。

九郎　左樣貴殿に言はれては、猶々面が合はされませぬ。

磯之　はてさて、それはいらぬ遠慮、必らず心配致されるな。

九郎　申譯もなきことながら、斯く大病を煩ひ居れば、御宥免下さりませ。（ト辭儀をなして、）して此短刀を不正とて、お返しなされましたのは、

磯之　人をあやめし刄物と見え、血汐を拭ひし曇りある故、研ぎ直さんと家來に持たせ、研師良助と申す者へ、今日研を賴みし所、其者旅宿へ尋ね參り、我を敵と申す故、こは何事と仔細を問へば、

此の短刀の持主は、庵崎郡右衛門が娘おさよ。

九郎　むゝ。（ト ぎつくり思ひ入）

磯之　親の形見と所持せしを、箱根山にて賊に出逢ひ、殺害されし其折に盗み取られし品とあつて、主人の敵とおさよの娘の小兒を連れて良助が、頻に敵と迫る故、求めし是なる道具屋を呼寄せて證に立て、我疑ひは晴れたれど快からぬ短刀故、道具屋方へ返せしぞ。

吾市　今お聞きなさる通り故、此短刀はお前へお返し申しまするから、三十圓の代金をお返しなされて下さりませ。

九郎　其研師の良助が、何樣申しまするとも、是はおさよが存生中、貰ひ置きたる短刀故、不正な品といふではないが、返すとあれば是非がないが、金は殘らず遣ひし故、今三十圓の其金を遣はす譯には行かざるぞ。

吾市　いかぬとあれば其筋へ、事の次第を訴へ出で、お調べを受けませう。

九郎　すりや此の趣を其筋へ。

吾市　生業づくだ、訴へます。（ト 行きかける、此時奥にて、）

與七　いやお待ち下され、其の金子は私から償ひませう。（ト 奥より以前の與七出來り）

吾市　待てとお止めなされたは、

與七　此家の主人岩淵與七。

磯之　まことに貴殿は與七郎殿、久々にて面會致す。

與七　厚原氏には御健勝にて、恐悦至極にございます。（ト兩人思入宜しく）

九郎　扨は此場の樣子をば、

お咲　お前は奧で聞かしやんしたか。

與七　殘らず聞いて忍び難く、出訴を止めに是へ出た。

磯之　瓦解後貴殿は奉還なし、それを資本に生業に心を用ひられし故、今一廉の見世になり、恐悦なことでござる。

與七　葉茶屋と申すも面目ない、見る影もない小賣見世、所謂士族の商法でお恥かしうござりまする。

吾市　いやお話し中でござりますが、三十圓の代金はお前樣から下さいますか。

與七　兄の事故其金は、わたくしから差上げます。幸ひ爰に三十圓、之をお渡し申します。

ト最前の三十圓の包を出す、お咲見て、

お咲　それは先刻の三十圓、それを遣うてしまつたら、後に問屋へ遣る金の、

與七　當はなけれど此場の切羽、假令之から跡の荷を送らぬとても仕方がない。現在兄の身の上に拘はる事故償はねばならぬといふは短刀の、其の買主が厚原氏、三十圓の其金を此場でお返し申さねば、今日浮世の義理が立たぬ。

お咲　なるほどさうでござりますな。

ト此以前下手より武兵衛羽織着流し、草履、帳を包みし風呂敷包を背負ひ出て、門口に窺ひ居て、

武兵　はい、御免なさい。（ト内へはひる。）

お咲　や、お前は狹山の、

與七　武兵衛さん。

武兵　こちらの内の掛許りで、在所へ歸ることがならぬ。此の間から五六度無駄足をしましたが、今日は是非とも三十圓渡して貰はにやなりませぬ。

與七　豫て今日は上げます積りで、都合致しておきましたが、只今急に三十圓入用がござりますから、どうか二三日お待ち下され。

武兵　いえ〳〵二三日のことは置いて、一日も待たれないといふ其譯は、一日居れば居るだけに旅籠代から小遣ひが、幾ら入るか知れませぬ。

與七　それはどうともしませうから。

武兵　假令入費をお前の方で持つてくれてもべん〳〵と、長逗留をして居ては、主人へ對してわしが濟まぬ。

與七　其處を何卒二三日。

武兵　いえ〳〵今日は待たれませぬ、今勘定をして下されずば、代物で受取りませう。

與七　是非とも今日でなくてならずば、代物で渡しませうから、暫く待つて下さりませ。

九郎　己をかばつて三十圓出してくれるは嬉しいが、どうで始終は死靈の爲に、いやさ、始終は病ひで死ぬ體、捨てゝおいてくれゝばよいに。

與七　お前を捨てておく位なら、こんな苦勞は致しませぬ。さあ、短刀を賣つた代金三十圓渡します。

ト吾市の前へ三十圓を出す。

武兵　それではこつちへ拂はずに、

與七　餘儀ない事故三十圓、暫く待つて下さりませ。家財を賣つてなりとも、跡で勘定致します。

ト吾市金を請取り、

吾市　こつちは之で訴へる手數がかゝらず有難いが、然し儲けの五圓をば今産出すは難産だ（ト紙入より

五圓札を出し、紙に載せ）へい、三十五圓お返し申しまする。

磯之　おゝ、落手致した。（ト請取りて、）こなたもむだに暇を費し、甚氣の毒千萬故、五圓の金は之迄の手數料に遣はすぞ。（ト吾市の前へ五圓札を出す。）

吾市　え、左樣なら私へ、此の五圓を下さりますとか。これは〳〵有難うござります。

磯之　最早金子を請取れば、此家に用なき磯之進、之にて暇致すでござる。

與七　遠路の所を手前宅迄、態々おはこび下さりまして申譯もござりませぬ。（ト磯之進思入あつて、）

磯之　九郎兵衞殿には其以前恥辱を受けしことあれば、幕府の時分でござらうなら、女敵討を致さにやならぬが、今開明の世の中に罪を問はねば古朋輩、まして御舍弟與七郎殿は孝心深き噂を聞けば、厚き交りなしたき舊友、十年振にて計らずも對面なせし事故に、何か土產を贈るべきを、火急のことにて心に任せず、甚だ是は失禮ながら、土產の印に進上申す。

ト紙に包みし三十圓を出す、與七取上げ、

與七　何かは知らず貴殿の御厚志。や、こりや只今の三十圓。（トびつくりする。）

磯之　兄を敬ふ孝心を、感じて贈る三十圓、以前は一つ組合に、古きよしみに進上致す。

與七　三十圓の金圓に差支へたる不體裁を、御覽に入れて面目なし、それを見兼ねて舊友のよしみにお

惠み下されし、お志しは忝ないが、之を頂戴致しては、
磯之　濟むも濁るも億川の、同じ流れの舊幕臣、必ず遠慮致されるな。
與七　ではござりますが貴殿より、お惠みを受けましては、どうも義理が濟みませぬ。
　　ト磯之進思入あつて、
磯之　然らばお貸し申さうから、其金圓を差當る役に立て下さらば、手前が信義が立つといふもの。
お咲　折角の思召、あなたの仰せに隨うて。
與七　いかにも以前のよしみにて、お貸し下さる三十圓、暫時借用致します。
磯之　何時迄なりと遠慮なく、お遣ひなされて下されい。
與七　はゝ、有難うござります。（ト金を頂く。）
武兵　それではこつちの三十圓も、
與七　後とも言はず今爰で。（ト金を出す。）
武兵　是は何より有難い、（ト札を改め、請取を出して渡す、此内九郎兵衞思入あつて、）
九郎　命を取つても飽きたらぬ、罪ある者の弟へ土産と言つて三十圓、お惠み下さるお志し、今日といふ今日九郎兵衞も、面目ないといふことを、初めて此身に知りました。

磯之　それを知られたことならば、改心なして自首めされ、いやさ、慈悲善根を盡されよ。
與七　返す〴〵も御厚情、
三人　有難うござります。
磯之　然らば旅宿へ立歸らうか。
吾市　お歸りならば私も、お供致すでござりまする。
武兵　手前も道迄御一緒に。（ト皆々立上る。）
九郎　左樣ならば、厚原氏、
與七　何れ近日。
磯之　決してお禮に及びませぬぞ。（ト唄になり、磯之進先に吾市武兵衞付いて花道へ入る、與七跡を見送り）
與七　厚原殿の厚情で、今日に迫りし狹山の拂ひも、ゆゑなく渡して我安堵、
お咲　こんな嬉しいことはない。
九郎　是もそなたの孝心ゆゑ、持つべきものは兄弟だ。
與七　何にしろ大事の請取、奥へしまつて置いてくれ。（ト請取を渡す。）
お咲　あい〳〵、合點ぢやわいな。

ト合方にてお咲請取を持ち奥へはひる、與七思入あつて戸棚の内の小箪笥より、ぜんまい織の紙入を出し、四邊へ思入あつて九郎兵衞の次へ住ひ、

與七　これ兄貴、お前改心しなすつたか。

九郎　むゝ、先非を悔いて改心した。

與七　それがまことであるならば、包まず明して下さりませ。

九郎　なに、つゝまず己に明せとは。

與七　箱根山の湯元道、三枚橋の地藏前で、おさよ殿を殺したは、こなたの仕業でござらうの。

九郎　なんと。（ト跳への合方になり、）

與七　而も其折靜岡へ仕入れに行つた歸り道、七湯廻つて湯元から小田原泊りに夜をかけて急ぐ山路の一人旅、星はあれども木隱れに行當りしは二人連、雲を霞と逃行きし跡に殘りし紙入を、拾つて其夜小田原で、落した人の證據でも、あるなら屆けてやらうと思ひ、ぜんまい織の紙入を明けてびつくり其中に、あつたは兄貴お前の書置。

九郎　むゝ。（トぎつくり思入、）

與七　扨は其日の暮しに困り、死ぬる心になつたかと、惡い人でも親身の兄弟、はからず是が手に入つ

たは我亡き跡を弔つてくれと兄貴の賴みと思ひ、直に其日を命日に涙ながらに小田原の小伊勢屋を立つ其時に、三枚橋の地藏前で昨夜娼妓が殺されしと、噂に聞けど急ぎの身、耳にも留めず内へ歸り、こなたの事を女房に話し、佛事を弔ふ門口へ尋ねて來たは幽靈かと、思ひの外に女を連れ死ぬる氣色のあらざれば、此紙入の書置は何か企みの種と知り、折があらば其譯をこなたに聞かうと思ふ所、厚原殿が短刀を所持なしをつて良助に主人の敵と言はれし由、察する所地藏前でおさよ殿を殺害なし短刀奪ひ逃げる折、正しく落せし此紙入れ、何と相違はござるまいな。

　トきつといふ、九郎兵衞思入れあつて、

九郎　さう知られた上からは、包み隱さず言つてしまふが、おきつを玉に浮島の新三郎の金を取り、それを路用に東京へ逃げる所も三枚橋、地藏の顏も二度三度騙して金を借りさせた、おさよが後ろに居ようとは實に夢にも白鞘の親の形見の短刀を、持つて居たのが運の盡き、おきつを恨んで殺さうと突いてかゝるを留めるはづみ、思はぬ深手に是非なくも止めを刺して逃げる折、ぜんまい織の紙入を落した代りに拾つた短刀、おきつが借を小田原から願ふと言はれて仕方なく、三十圓に賣つた村正、それから隱す身の惡事が、露顯なすのもおさよが一念。

與七　扨はいよ〳〵おさよ殿を、こなたが手に掛け殺したのか、それでは斯ういふ病ひを煩ひ、日夜難儀

をしなさる筈だ、それに引替厚原殿は許嫁せし我妻を、こなたに取られ恥辱を受け、その女敵の片割なる私が難儀になるを見て、三十圓といふ金を惠みくれしは世に稀な慈善を施す志し、是では出世をなさる筈だ。

九郎 其慈善者と裏表、己はおさよを靜岡から無理に連れ出し東京で夫婦になつて暮す內、あれの是のと仕馴れねえ商法をしてすつかり耗り、手足も出なけりや首も廻らず、せうことなしに小田原へ前借をして娼妓にやり、それから度々借込んだ擧句が死ぬと僞つて、百圓借りて深みへ沈め、よどの仕舞に殺したからは、中有に迷ふおさよの亡念、恨みを言ひに來る筈だ。

與七 なに、恨みを言ふとは。

九郎 毎晩寐るとおさよが來て、己が殺した恨みを言ふ。

與七 それはお前の氣の迷ひ、恨みを言ひに來るだらうと、思ふ心に見えるのだ、惡いと知つたら念佛でも〳〵毎晩唱へてやんなせえ。(ト時の鐘)おゝ秋の日の釣瓶落し、もうあの鐘は入相だ。

九郎 それでは今に、もう暮れるか。

與七 ランプの支度をせずばなるまい。

九郎 あゝ灯りが付けば目の先へ、

與七　見えるといふが心經病。

九郎　これを思ふと、早く死にてえ。

與七　えゝ弱い心を、（ト立上るを道具替りの知せ、）出しなさんな。

ト時の鐘、合方兩人宜しく思入、此道具廻る。

（深川寺町の場）――本舞臺一面の平舞臺上の方橋の袂を見せ下の方柳の立木、正面川を隔てし町家の遠見、總て深川寺町川端の體。上手に二人乘の人力車、是に新三郎羽織着流し町人のこしらへ、お花半元服屋敷娘のこしらへにて相乘に乘り居る、人力車夫立掛り居る、せうでん囃子を冠せし合方にて道具留る。

車夫　もし旦那樣、今お寺で水を汲む時笠を忘れましたから、ちよつと取つて參る内、暫くお待ち下さりませ。

新三　それは飛んだことをした、早く行つて取つて來なさい。

車夫　直に行つて參ります。（ト下手へ急ぎはひる。）

お花　もし旦那、爰は何といふ所でござります。

新三　爰は深川の正覺寺橋、此の先が高橋だ。

お花　わたしや初めて東京へ參りましたが廣い所、靜岡なぞとは大層違ひ、なか〳〵三日や四日では見物は出來ませぬわいな。

新三　ゆつくり見るには十日間もかゝらねば見られぬから、大概な所は後にして、明日二人で新富町の芝居へ行つて見物しませう。

お花　それが何より見たうござります。

新三　見るはいゝが、いゝ役者が大勢居るから、惚れてはならぬよ。

お花　お前さんこそ藝者のおきつに。

新三　それは騙されて居た時分、今ではおきつといふ名を聞いても、腹が立つてならぬ位だ。

お花　それは眞實でござりますか。

新三　嘘のほんのと生娘でも、知れさうなものだに。

ト右の鳴物にて橋の上より、以前のおきつ藥包を持出て來る、跡よりおつめやつし裝損料貸のこしらへにて出來り、

つめ　これおきつさん、お前は〳〵顏に似合はぬ、さりとはづぶとい根性だの。

きつ　往來中でみつともない、まあ靜に言つておくんなさいよ。

つめ　いゝや靜に言つては居られない、此夏お前が小田原へ藝者稼ぎに來た時に、馴染になつて知つた仲故、ちよつと三圓貸してくれと言はれて厭とも言へないから、今の亭主の願哲から三圓借りてやつたきり、期限が來てもそ知らぬ顏、あんまり馬鹿にしなさんな。

きつ　都合が出來ればお返し申すが、まことに都合が出來ないから、

つめ　出來ずば出來ぬと其時に、なぜ言譯をしなさらねえのだ。

きつ　此間願哲さんに溫泉で出逢つた時、來月の晦日迄とお賴み申して置きましたよ。

つめ　あの坊主は女好きだから、大方お前と溫泉で酒でも吞んで賴まれたらうが、金は坊主の金にしろ貸したは私が貸したのだ、さあ、期月がきれた上からは、たつた今返しなせえ。

きつ　今といつては以前と違ひ、ちよつと無心を言ふ樣なお客筋もない體、マッチの箱や鼻緒ぐらゐな僅な錢の內職では、所詮三圓といふ金を返すことは出來ないから、座敷も暗い曖昧屋でちつと稼げば出來る金、もう四五日待つておくれ。

つめ　初手から私に賴みなさりやあ、待つまいものでもないけれど、あの坊主に賴んだのが、わたしや癪に障るから、もう一日も待たれない、金が出來ずば裸になれ、着物を抵當に取つてやらう。

（ト立掛り、帶を解きにかゝるを留めて、）

きつ　裸になれといつたつて、往來中でなられるものか、どうぞ晩迄待つておくれ。

つめ　えゝしつこい、待たれぬと言ふに。（ト此時車より新三郎お花下りて、）

新三　いや、ちよつと待つて下さいまし、其金を立替へませう。

きつ　や、お前さんは、

つめ　浮島の新三郎さんか。

きつ　あゝ、お目にかゝるも面目ない。（ト誂への合方になり、おきつ下に居て俯向く、お花側へ寄り、）

お花　日外箱根の湯治場でお見掛け申したことはあれど、まだお近付になりませぬが、わたしは駿河の靜岡で厚原磯之進が妹花と申します者でござります、先頃是なる新三郎さんの私は妻になりましたが、今日思はずも爰へ來合せ、お前の難儀を見るに忍びず、其の三圓のお金をばお立替へ申しますから、お間に合して下さいまし。（ト三圓紙に包み出す、おきつ只俯向き居る。）

新三　そなた故に箱根にて既に命を失ふばかり、憂目に逢つたが身の仕合せ、騙されたのは我愚かさ、改心なして内へ歸り此お花を女房に貰ひ、今は生業一三昧に出精なす故繁昌なし、今度東京見物に兄御と共に三人連、馬喰町に逗留なし、緣家の寺が寺町に今日佛參の歸りがけ、測らず爰で出

合つたそなた、今の難儀をお花が見兼ね、志しに贈る三圓受けて、此場を濟ますがいゝ。

つめ　これは感心致しました、まだ小田原に居た時分、噂に聞いて居りましたが、いはゞ男を寐取られた戀の敵のおきつさん、それへ三圓下さるとは、ても結構なお志し、附いては貸しにわたくしが大仕合せでござります。（トおきつぢつと思入あつて、）

きつ　お志しは身に取りて、有難うはござりますが、是はお貰ひ申されませぬ。

新三　なに、此金が貰へぬとは。

きつ　お印迄來た其中を、妨げました此のおきつ、なんぼ私があばずれでも、此三圓をのめ〳〵と、

新三　受けねば期月の金の爲め、爰で裸にならずばなるまい。

きつ　假令身ぐるみ脱せられ、裸にされて耻をかくとも、是はお貰ひ申されませぬ。

つめ　それは惡い了簡だ、折角下さる此金を貰はぬといふがあるものか。お花さんのお志しを無足にしては濟まない譯、さあ何でもかでも貰ひなせえ。

きつ　何といつても、是ばかりは。

つめ　それでは以前お馴染の新三さんの其前で、裸になつて耻をかくか。

きつ　さあ、それは。

つめ　惠みの金を貰ひなさるか。
きつ　さあ、それは。
つめ　裸にせうか。
きつ　さあ、
つめ　さあ、
兩人　さあ〳〵。
新三　野暮を言はずと、受けたがいゝ。（トおきつ是非なき思入にて）
きつ　左樣なれば此お金を、お貰ひ申しますでござります。（ト金を請取る。）
お花　それでは受けて下さりますか。
きつ　はい。（ト俯向きぢつと思入）
新三　以前に替り身もやつれ、素襤褸の裝をして居るからは、好いた男の九郎兵衞殿故、そなたは難儀をすると見えるの。
きつ　あなたを騙した其罰でこんな姿になりました、實は朝夕小田原へ向つてお詫を致しまする。あの折あなたを二人の者が三枚橋から谷川へ打込んだと申した故、此世にないと思ひましたが、よく

新三 お命がござりましたな。
二人の者に川中へ打込まれたが雨上り、水氣で何處に怪我もなく、其夜母は狂氣の如く、厚原樣へ濟まぬと言うて氣を揉みあせれど夜道の物騷、跡追掛ることもならぬを、見兼て駕籠で厚原樣が跡を追掛けおいでなされ危ふい所を助けられ、それから實は斯う〳〵と騙されたことをお話し申し心を改め内へ歸り、直にお花を女房に貰ひ、出精する故得意も殖ゑ、以前に勝る見世になつた。
つめ 以前に勝る御繁昌とは、結構なことでござります。何にしろ三圓の、お金を早く貰ひたい。
きつ 利息は先へ上げたから、證文を返しておくれ。
つめ それは言はずと知れたことさ。（ト巾着より證文を出し、引替にする。）
新三 お爪どんは此邊に、今では住つて居られるか。
つめ あなたの見世へおいでの時分、おさよさんの所へ來た說教坊主の願哲の、女房になつて小田原から、流れ〳〵て深川で、損料貸しをして居ります。
新三 それは仕合せなことだな。
つめ 何よりかより仕合せは、三圓爰で拾ひました。どれ、お神酒でも上げませう。
ト せうでん入りの合方にてお爪下手へはひる。

お花　この車屋はどうしましたらう。

新三　笠を取られでもしたかしらぬ。（ト下手より車夫出來り、）

車夫　大きにお待遠でござりました。

新三　あんまり歸りが遲いから、どうしたかと思つて居た。

車夫　笠を犬が啣へて行つたと、子供が教へてくれましたから、方々搜して取つて來ました。

新三　おゝ、いつの間にか日が暮れた、嘶宿で案じて居よう。（トおきつに向ひ、）それでは是で別れます。

お花　また小田原へおいでがあつたら、必ず尋ねて下さりませ。

きつ　是非お禮に上ります。

お花　左樣なれば、おきつさん。

きつ　お靜においでなさいまし。（ト此内兩人車に乘る。）

新三　遲くなつたから、急いでくんな。

車夫　畏りました。

トせうでんの合方にて車は橋を越して花道へはひろ、跡時の金誂への端唄になり、おきつ立上り跡を見送りホツト思入。

きつ　思ひがけない新三郎さんに、お目にかゝつたも面目ないが、一頻は邪魔をしたお花さんから三圓貰ふは身を切られるほどつらかつたが、貰はぬ時は裸にされ、恥をかゝねばならぬ故、せつない涙を内へ呑込みよんどころなく貰つたが、斯ういふ憂目を今見るも、皆おさよさんの恨み故、まだ此上にどの樣な憂目に逢はうも知れぬ身の上。（ト時の鐘端唄になり思案の思入宜しくあつて）生て憂恥かゝうよりいつそ命を捨てるがまし。私が死んだことならばおさよさんの恨みも晴れ、九郎兵衛さんのあの病氣も、少しは輕くなるであらう、こりやどうあつても身を投げて、死ぬより外に思案はない。お巡り樣の來ぬ内に、少しも早う。

ト又端唄になり、石を拾ひ袂へ入れ、死なうといふ覺悟して後の川へ飛び込まうとする、此の以前橋の上より良助おみつを連出て窺ひ居て、

南無阿彌陀佛。

ト飛び込まうとするを、良助ツカ／＼と行き、おきつを抱留め、

良助　あゝこれ、待たつしやい。

きつ　どうぞ放して下さりませ。

良助　いや／＼放さぬ／＼、目にかゝつたら放しはせぬ。

ト良助おきつを引きすゑる、お光はうろ／＼して、

みつ　老爺やあ、怖いよ／＼。

良助　怖いことはござりませぬ、ぢつとしておいでなさりませ。

きつ　お留めなされて下さりますは有難うござりますが、死なねばならぬ者故に、どうぞ放して下さいまし。

良助　死なうといふにはよく／＼な、定めてことがありませうが、斯うして留めるも何ぞの縁、譯を話して下さりませ。（トおきつ思入あつて、）

きつ　わたしは爰の寺町の、さる内の厄介人、きつと申します者でござりますが、此身の懺悔を致しますが、まだ十四五の時分から、身性が惡く男を拵へ、逃隱れをした果てが、遂に藝者になりまして旅を稼いで歩く内、身の惡縁に子迄ある女房を捨てさせ思ひ通り、夫婦にはなりましたが、人の所の厄介に少しは持つて居たものも、皆小遣ひに賣つてしまひ、其上亭主に煩はれ種々な難儀をしますのも、是迄客を騙したり人の亭主を取つたりした惡いことの報い故、罪滅しに身を投げて死なうと覺悟致しました。

良助　定めてそんなことであらうが、死ぬのは何時でも死なれます、命を捨てずと身の詫は、幾らも仕

様があらうから、せかずと氣をば靜めさつしやい。

きつ　見ず知らずのお方だが、御親切にお留め下され、有難うござります。

良助　してお前の生れ故鄕は、

きつ　神奈川在で十四五迄育ちましてござりますが、實の親は何處の者だか、四十二の二つ子で捨てられたのを拾ひ取り養女に致した親達も二人共に死んでしまひ、今は他人へ附籍の身の上、只戀しいは實の親、逢ひ度く思へど雲を當、何處に居らるゝことぢややら。（ト之を聞き良助思入あつて）

良助　して其實の親といふは、何といふ名でござります。

きつ　養母が不斷話しには、元は武家出で刀の研師鳴澤良助といふ人だと、申すことでござります。

ト良助思入あつて、

良助　むゝ、すりや鳴澤良助の娘で、四十二の二つ子とな。

みつ　老爺やアの名と同じ名だな。

きつ　え、思ひがけないお前さんも、鳴澤良助とおつしやりますか。

良助　いかにも私は鳴澤良助、四十二の二つ子は親に祟るといふこと故、話し合で捨てた娘を、拾つた者が田舍へ行き、遂に音信不通になつたが、それではそなたは娘であつたか。

きつ　お前が實の父さんか。
良助　計らずこゝで死ぬところを、
きつ　助けられたばつかりに、
良助　別れ程經た娘に逢ふとは、
きつ　是も盡きせぬ親子の縁、
良助　よくも達者で居てくれたな。（ト兩人手を取交し宜しく思入あつて、）そなたの顔を見れば見る程、死んだ婆あに生寫し。
きつ　そんなら母さんは死なしやんしたか。
良助　おゝ七年後に婆あは死んだ、して今人の厄介にて、種々な苦勞をするといふが、亭主は何といふ人だ。
きつ　元舊幕の直參で、岩淵九郎兵衞といふ士族。
良助　え、岩淵九郎兵衞といふ人だ、それでは捨てた女房は、
きつ　おさよといつて小田原で、勤めをして居た士族の娘、
良助　えゝ、（トびつくりして良助どうと下に居て、）あゝ、こりや助けねばよかつたに。

きつ　え、何と言はしやんす。

良助　而も箱根の三枚橋で、其の九郎兵衛に殺されたおさよ様といふのはな、此お子様の母御にて、己が爲には主人の娘御。

きつ　えゝゝゝ、（トびつくりして下に居る。合方少し早めになり、）

良助　其のおさよ様を殺したことが、千壽院の短刀から今日はつきりと知れたれど、此お子さまには父御故、討つに討たれぬお主の敵、兎やせんかくと深川へ尋ねて來たる途次、二十年來別れたる娘に計らず廻り逢ひ喜ぶ甲斐も情なや、餘計な苦勞を增すといふは、如何なる己は因果なことか。

ト良助泣く、おきつ思入あつて、

きつ　南無阿彌陀佛、（ト後の川へ飛込まうとするを良助止める、）

良助　これ娘、死なうといふは尤だが、（ト引廻して、）急かずと待つて、（ト下へ引据ゑるを道具替りの知せ、）くりやいの。

トおきつはハツと泣伏す、良助はおみつを抱へ泣く、此模樣宜しく、合方寺鐘にて道具廻る。

（葉茶屋奥の間の場）――本舞臺四間常足の二重本庇本緣付、正面上手に佛檀佛具宜しく飾り、眞中

一間襖出這入り、跡鼠壁上の方跡へ下げて一間雪隱、同じく通ひ口、此前に手水鉢四ツ目垣、いつもの所庭口の片開き戸、是より屋體迄四ツ目垣の見切り、よき所に空洞のある柳の大樹、本枝の枝垂、下の方に井戸、此脇に墓手桶を載せる棚是より後ろ一面丸物の石塔卒都婆を結込みし藪疉、總て寺町葉茶屋奥の間の體、二重上手に蒲團を敷き夜着をおき、二枚折の屏風を立廻し、此側に角行燈硯箱あり、此道具誂へ通り宜しく飾り、合方にて道具留る。卜本釣鐘を打込み、誂への獨吟になり、

〽物思ふ憂身はいとゞ胸とぢて、晴れぬ心の雨催ひ、常聞く鐘の音もしづみ、哀れます穗の穗芒も、風に亂るゝ秋の末、

卜本釣鐘、屏風を明ける。內に九郎兵衞以前の短刀を持ち思ひ入あつて、

九郎 此の短刀は箱根から歸つた後に研がしたが、恨の念が殘つて居るか、刄鐵に殘る血汐の曇り、己が體も是迄の惡事の銹にあれからは、する事なす事鶍となり、とゞの仕舞が引風をしこじらかして此病氣、殺したことも今日迄は祕し隱しに隱して居たが、短刀からして厚原の旣に耳へも入つた上、相澤黑瀨の兩人が向う面になるからは、彼等が口から暴れるは必定、搜索方に聞かれたら、明日をも知れねえ我身の上、不孝に不孝を重ねた上、繩目に逢はゞ家名の汚れ、爰らが命の捨所、覺悟をした故其事を、一筆後へ書殘し、此村正で死んだなら、おさよが恨みも晴れる道理、

おきつが歸りの遲いを案じ、弟與七が見に見つた留守の間に書殘さん。

〽月はあれども薄墨の、曇りし空に朝顏の半は枯れし破垣に、莟の筆も明日待たで、書置く文の鴈の聲、

ト此内九郎兵衞行燈を引寄せ、硯箱を明け、墨を磨り書置を書きかける。よき程に瓦斯の灯りを暗くなし、九郎兵衞書置を書きかけ、暗き思入にて、

油がわりいか行燈の、灯りが今夜は大層暗い。

〽茂りし笹の葉に置きし、露の雫のはら／＼と結ぶかひなき夢の世の、夢か現かうつゝか夢か、姿も凄き枯柳、

ト凄みの獨吟へよき程に一つ鉦を打込み、薄ドロ／＼になり、好みの所よりおさよ殺しの衣裳を薄色にしたる拵へにて出る。九郎兵衞は灯りの暗き思入あつて、行燈を掻立てる。おさよ行燈の向うへ下に居て、九郎兵衞を見る。九郎兵衞は心付ず又かき立てようとして、おさよを見付けびつくりなし、

や、おさよか。

亡靈　よくも私を邪慳にも、酷く殺しなさんしたな。

九郎　おゝ其恨みは尤もだ、みんな己が惡かつたから書置をして腹を切り、手前に詫をする心だ。

亡靈　いゝやお前はまだ殺さぬ、もそつと此世で憂目を見せねば、非業に死んだ恨みが晴れぬ。

九郎　おれは非道なことをしたからどんな憂目に逢つてもいゝが、厄介になる弟に難儀を掛けるが氣の毒だ、定めて深い恨みもあらうが、命を捨てたら許してくれ。

亡靈　假令命を捨てるとも、憎しと思ふ我恨み、取り殺さねば腹がいぬ。

ト立上り、行燈の上より九郎兵衞を見越し、きつと見る。

九郎　是ほど言ふに聞分けぬは、さりとは執念深ひやつだ。

トきつといふ、ドロ〳〵になり、およ九郎兵衞の後へ行く、九郎兵衞熱の出し思入、

おさよの姿が見えなくなつたら、俄に惣身火の如く熱が發して此苦しみ、あゝ苦しい〳〵。

ト胸を掻きむしり、

なんたる因果な病ひだか、

〽木蔭小暗き軒端まで、まつはる葛のうらみ言、（トおさよ上手より九郎兵衞の前へ顔を出し、）

亡靈　それもおさよが皆一念。

九郎　えゝ、又もや爰へ、あゝ苦しい〳〵。（トおさよ側へ立掛る、此時奥にて、）

お咲　兄さん、熱が出ましたか、見世をしめて行きますよ。

〽一と吹落す小夜風にぞつと身に染む秋の肌。

ト此聲にてドロ〳〵になり、おさよ好の所へ消える。九郎兵衛ほつと思入あつて俯伏になり、奥より
お咲出來り、九郎兵衛を見て、

兄さんは又夢を見て、うなされなさんしたのか。（ト側へ寄り、ゆり起し）もし兄さん、大きな聲をし
なさんしたが、怖い夢でも見なさんしたか。（ト九郎兵衛起きて四邊を見て、）

九郎　いやなに、夢を見たのぢやあねえ、今爰へおさよが來た。

お咲　え、おさよさんとは。

九郎　箱根で死んだ己が女房。

お咲　死んだお方が、どうして爰へ。

九郎　來たのは、あれが幽靈だ。

お咲　え丶氣味の悪いことをおつしやいますな。

ト此時薄き風の音にて、お咲の後ろへさしがね誂への蝶舞ふ、九郎兵衛是へ目を付け、

九郎　それ、お前の後ろに立つて居る。

お咲　あれエ。（ト奥へ逃込む、件の蝶九郎兵衛の目先へ飛びかふ、是を見て、）

九郎　又もや恨みを言ひに出たか。（ト蝶へきつと目を付け居る。奥より與七出來り、）

與七　おきつ殿が遲いから、良庵樣へ見に行つたら先刻歸つたといふことだが、何處へか歸りに行つたと見える、それ故逢はずに歸つて來たが、又熱に浮されたか。

九郎　なに、熱に浮されるのぢやあねえ、先刻も手前に言ふ通りおさよの死靈の此業病、今も恨みを言ひに出た。

與七　死靈が出ると思ふのが、それが熱に浮されるのだ。（ト誂の合方、）應擧が畫いた畫空事、幽靈などゝいふものは決して世界にないものだ。恨みがあるから出るだらうと、思ふ心の迷ひから夢ともつかず幻しに、目先へそれが見えるのは、是が所謂心經病、年は取つてもお前などは稍ともすると舊幕の時分は斯うだのあゝだのと、頑固と言はるゝ士族故、畫空事の幽靈が恨みを言ひに出るなどゝ、よく舊弊を言ひなさるが、當時六つか七つになる學校へ行く子供等は、幽靈などは無きものと佛徒の説を見破つて、お前の樣な者はない。

九郎　手前は開化の世に泥み、飜譯本の拾ひ讀みに西洋がつて無いと言ふが、人の恨みに幽靈のないと言はれぬ其證據は、後ろにおさよが立つて居るが、手前の目には見えねえのか。

ト與七後ろを振返り見て、

與七　誰が立つて居るものだ。それがお前の心經病、心の迷ひを晴しなせえ。(ト合方にて奥よりお咲出て、)

お咲　もしお前さん、願哲さんがふきとりのお加持をして遣らうとおつしやる故、お頼み申して參りまじた。

與七　兄貴は熱に浮されて、うは言をいふのだから、お加持には及ばなんだに。(ト奥にて、)

願哲　さあ〳〵、みんな一緒に來い〳〵。

ト合方にて、奥より以前の願哲茶の衣丸ぐけ帶、長房の珠數を持ち、後より大蓮、妙道鼠の着付け、白の前帶同じく珠數を持ち、以前のお爪付いて出て來る、此の時九郎兵衞は苦しき思入にて、

九郎　あゝ苦しい〳〵。

與七　何處がそんなに切ないのだ。(ト與七九郎兵衞の介抱をする。)

願哲　かゝる苦しみをさつしやるのは、是は常の病ひでない。正しく死靈の祟りと見える。愚僧が加持をする時は、朝日に霜の消えるが如く、忽死靈は退散なせど、然し一人は不氣味ゆゑ、いやさ、武相の方へ修行に參つた弟子が幸ひ旅から歸り、一人よりか三人で祈つた方がお布施も澤山、いやさ、怨靈退散疑ひなし。

大蓮　我が師匠は壯年より諸國の大寺を修行なし、方今並ぶ者なき高僧。

妙道　なかく以て中山の祈禱者なぞは遠く及ばず、天下無双の法華の行者、

つめ　わたしは元から小田原でお近付の九郎兵衞さん、何かお加持の御馳走があらうとそれを付込んで、共々傍でお題目でも、上げませうと參りました。

與七　それは有難うござります。御覽の通り病症の分からぬ兄が此の難病。

お咲　お加持をお願ひ申しまする。

願哲　承知しました〳〵。（ト願哲眞中に、大蓮妙道左右へ控へゐ、お爪は下手に住ひ、願哲珠數を摺て）南無妙法蓮華經々々、南無中山御祈禱御本尊、鬼形鬼子母尊神幷に十羅刹女、只今死靈の祟りに依つて、既に絕命に及ばんとする、病者の苦惱を救はせたまへ〳〵。

ト是より皆々にて陀羅尼品を上げる。此内九郎兵衞うつとりとなり、よき程にきつとなり、薄ドロドロにて、

九郎　えゝやかましい、靜にしねえか、慾張坊主が祈つたとて、幽靈が立去るものか。

ト是にて經を止め、お爪氣味の惡き思入にて、

つめ　氣味の惡いことをお言ひだが、何處にか幽靈が出て居るのかえ。

ト瓦斯の灯を少し暗くなし、九郎兵衞四邊を見廻し、熱に浮されし思入にて上聲にて、

九郎　眞中に居る其坊主の、側に一緒に坐つてゐる。

願哲　え、愚僧が側に。（トぎつくりして、側を見る。）

九郎　それ〳〵、こなたの後ろへ廻つた。

願哲　なに、後ろへ廻つた。（ト首をすつこませる。）

九郎　はて、何處へ行つた知らぬ。（ト四邊を見て、）おゝ其の大きな坊さんの、後ろにすつくり立つて居る。

大蓮　えゝ。（ト驚き、怖々後ろを見る。）

九郎　それ〳〵小さい坊さん、おめえのそばに坐つて居るぜ。

妙道　えゝ、側に居るえ。（ト驚き、震へ〳〵四邊を見る。）

九郎　其所に居る幽靈が、おめえ達には見えねえか。

願哲　いや、私等が目には、

四人　見えませぬ。

與七　なにそんなものが見えませう。見えるといふが心の迷ひ、心經病でござります。

九郎　何で己が迷ふものだ。それ〳〵婆あさん、お前は一つ内に居たから、手を取つて引張るぜ。

つめ　えゝ、氣味の悪い。(ト手をふるひ、)氣のせゐか冷たい手で、引張られる様だつた。

願哲　開化の人はないといふが、斯うして見ると、

四人　あるやうだ。

ト皆々四邊を見て氣味の悪き思入、此内一つ鉦凄き合方、九郎兵衞下手を見てきつとなるを、與七介抱しながら留めて居る、

九郎　是ほど己があやまるに、まだ手前は恨みを言ふか。執念深い奴だな。

ト側にある短刀を抜き、願哲を一刀切る。

願哲　や、こりや愚僧を切りをつたな。

つめ　是は険呑。

四人　逃げろ〱。(ト四人あわてゝ逃げにかゝるを、九郎兵衞追廻しながら)

九郎　箱根山で殺された、恨みを返す、覺えて居ろ。

ト四人は庭口から逃出し、下手へはひる。與七九郎兵衞をとらへ、

與七　又熱に浮されたか、刄物はあぶねえ放しなせえ。

九郎　いゝや放さねえ〱。(トお咲うろ〱して、)

お咲　こりやどうしたらようござりませう。

與七　手前は表を氣を付けろ。

お咲　あい〳〵。

　　ト お咲奧へはひる、九郎兵衞振拂つて花道へ行かうとするを、後から與七羽がひしめに留める、九郎兵衞短刀を振上げ、きつと見得。是より佛めいた誂への鳴物になり九郎兵衞又振拂つて與七に切つてかゝる、是を留める立廻りに、あやまつておさよの樣に肩先を切り、糊紅になり、

九郎　や、こりや己を切りやあがつたな。

與七　誰が兄貴を切るものだ、我身にお前が切つたのだ。

九郎　いゝや、己が邪魔だから手前は己を殺すのだ。さあ殺されるなら殺して見ろ。

　　ト又九郎兵衞切つて掛る、與七もてあまし、體を捨てゝの立廻り宜しくあつて、短刀を持ちし手を掻込み、

與七　こう兄貴、何をお前は狂ふのだ。病ひのせゐとはいひながら、何で分からぬことを言ふのだ。是迄惡事を仕拔いた上、現在連添ふ女房を箱根で酷く殺したから、定めて恨んで居るだらうと、心を責める心經病、おさよ殿も恨むだらうが、今日人の道にかければ、天の御罰を蒙るこなた、所

九郎　詮うだつは上らぬから、積る先非を悔悟して、姿を替へて靈場を菩提の爲に廻りなせえ。

與七　厭だ〳〵、誰が悔悟をするものだ、是から恨みのある奴を鏖しにして腹を癒る、幾人切つてもたつた一つの己の命を捨てれば濟むのだ。

九郎　手前が困るは當りめえだ。

與七　まだそんな不理屈を、お前は言つて困らせるのか。

與七　何たる因果で、此樣な。（ト短刀をもぎ取り胸ぐらを取る。）

九郎　何だと。

與七　兄貴を持つた。（トこづくを道具替りの知せ、）ことだなあ。

ト與七もてあませしこなし、九郎兵衞は苦しき思入にて、肩で息をする、合方早き木魚の勤めにて道具廻る。

（和倉川岸の場）――本舞臺一面の平舞臺上の方伊豆石を積上げ下の方材木の置場にて見切り、眞中葛籠石を所々に置き上下に柳の立木、後ろ川にて向う川岸切出しの遠見夜の景色、總て和倉川岸通りの體、屋臺囃子にて道具留る、とやはり屋臺囃子にて、子供大勢揃ひの單衣物上ツ張にて、灯入の萬燈を持出て來り、わい〳〵と上手へはひろ。花道より以前の伴藏、傳八手を負ひ逃げて出來り、

作藏　久し振で愉快を極め、よい心持に醉つた所、九郎兵衞めに出ツくはし、思ひ掛けねえ手疵を負つた。

傳八　あいつが持つて居る短刀は、殺氣を含む村正だが、刄物の祟りで氣がふれたか、何にしろ險呑だ。

作藏　あいつに切られた其日には、病犬も同然だ。

傳八　こつちも惡事のある身の上、ちつとも早く逃げるが勝だ。

ト此内手の疵を手拭で結び、上手へ行かうとする、石の蔭より九郎兵衞出て、

九郎　うぬ等、逃げるとて逃すものか。

作藏　やあ、病犬め、

兩人　爰に居たか。

ト屋臺囃子を冠せし鳴物にて、九郎兵衞切つて掛る、兩人逃げる立廻りあつて切倒す。ばた〳〵になり、下手より以前のおきつ、良助おみつの手を引き出來り、おきつ九郎兵衞に行き當り顏を見て、

きつ　や、九郎兵衞さんか。

九郎　うぬ、おさよめ。（ト切り下げる、アツといつて倒れる。良助びつくりしておみつを抱へ）

良助　あゝ人殺しだ〳〵。（トおきつ起上り）

きつ　なんで私を殺すのだ。

九郎　箱根の恨みがあるからだ。

ト佃の合方へ屋臺囃子を冠せ、九郎兵衞おきつを切らうといふ立廻り、良助は人殺し〳〵とおみつを抱へうろ〳〵する、ばた〳〵にて花道より與七尻端折りにて、走り出來り、九郎兵衞を留める。この立廻りの内に九郎兵衞おのが手に體を切りどうとなる、與七おきつを見てびつくりなし、

與七　やゝ、こりやおきつどのを、

九郎　此の九郎兵衞が切つたのだ。

良助　これ娘、氣を慥に持つてくれ。（ト介抱する。）

きつ　これ父さん、私が非業な死をするも、みんな此身が惡いから、必ず悔んで下さんすな。

良助　段々話しを聞いて見れば、そちが心得違ひ故、自業自得であるけれど、親の身にては悲しいぞよ。

與七　扨はこなたはおきつどのゝ、

良助　實の親にておさよ様の、お宅に以前勤めし良助。

みつ　これ、とゝさま。（ト九郎兵衞の側へ行く。）

九郎　假にもおさよを離縁したれば、おれは手前の親ではねえ。

みつ　いえ〳〵親でござります。

與七　惡い人でも親子の恩愛、思へば不便なことだなあ。

ト屋臺囃子になり、上手へ三人づゝ祭りの揃ひ長提灯を持つて、若い者出來り、

若者　やあ、人殺しだ。人殺しだ。（トこの時上手より巡査出來りて、）

巡査　こりや〳〵靜にいたせ、見ればあたりに手負の者、何者の仕業なるぞ。

與七　殺氣を含む村正の短刀故に發狂なし、多くの者を切りましたは、卽ち私でござります。

良助　いえ〳〵切つたは九郎兵衞殿。

きつ　しかも死靈の祟りにて、

與七　何にも言つて下さるな。

九郎　それでは、おれが、

與七　これ、（ト押へて、）罪は脫れぬ岩淵與七。

巡査　眞僞は分署で詮議いたさん。

與七　いざ、繩かけて、

（ト後へ手を廻すを木の頭。これにて向う遠見へ、灯入りの萬燈を出し、）

下さりませ。

トよろしく思入、九郎兵衞おきつは手を取交し、良助はおみつを抱へ、皆々引張りよろしく、祭りの鳴物にて、

ひやうし　幕

木間星箱根鹿笛（終り）

(附錄)

主なる興行年表

實錄伊賀越

年時	座名	名題	政右衞門	城五郎	又五郎	市藏	丹右衞門	大内記	お蝶	敎山	半兵衞
明治十三年三月	新富座	日本晴伊賀報讐	市川團十郎	市川團十郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村宗十郎	中村宗十郎	岩井半四郎	中村仲藏	市川左團次
明治十五年十一月	中島座	神妙劍荒木白鞘	中村壽三郎	片岡市藏	片岡我童	片岡我童	中村壽三郎	片岡我童	市川鬼丸	嵐冠十郎	勝川又吉
明治三十一年十月	明治座	日本晴伊賀報讐	市川左團次	市川壽美藏	市川小團次	市川左團次	市川左團次	市川小團次	澤村源之助	市川壽美藏	市川小團次
明治三十六年七月	東京座	日本晴伊賀報讐	市川左團次	市川高麗藏	市川猿之助	市川左團次	市川八百藏	市川高麗藏	市川升若	市川猿藏	市川猿之助
明治四十一年三月	市村座	日本晴伊賀報讐	中村吉右衞門	中村吉右衞門	尾上菊五郎	尾上菊五郎	坂東三津五郎	守田勘彌	岩井粂三郎	中村歌六	尾上榮三郎
大正三年二月	歌舞伎座	日本晴伊賀報讐	市川左團次	市川左團次	中村又五郎	市川羽左衞門	實川延二郎	市川羽左衞門	坂東秀調	市川左升	實川延二郎
大正七年四月	市村座	日本晴伊賀報讐	中村吉右衞門	守田勘彌	坂東彥三郎	尾上菊五郎	坂東三津五郎	尾上菊五郎	尾上菊次郎	守田勘彌	中村吉右衞門

霜夜の鐘

年時	明治十三年六月	明治二十八年九月
座名	新富座	市村座
名題／役割	霜夜鐘十字辻筮（しもよのかねじふじのつじうら）	霜夜鐘十字辻筮（しもよのかねじふじのつじうら）
石齋	市川團十郎	市川八百藏
正三郎	中村宗十郎	市川八百藏
薫	尾上菊五郎	市川猿之助
金助	市川左團次	澤村訥子
宗庵	中村仲藏	片岡市藏
おむら	岩井半四郎	尾上榮三郎
豊三郎	市川小團次	尾上菊三郎
お浪	河原崎國太郎	中村富十郎
お豊	河原崎國太郎	中村富十郎

木の間の星

年時	明治十三年十一月	明治二十七年七月
座名	新富座	明治座
名題／役割	木間星箱根鹿笛（このまのほしはこねのしかぶえ）	木間星箱根鹿笛（このまのほしはこねのしかぶえ）
おさよ	尾上菊五郎	坂東秀調
與七	尾上菊五郎	市川壽美藏
九郎兵衛	市川左團次	市川左團次
おきつ	市川小團次	市川小團次
磯之進	中村宗十郎	中村壽三郎
良助	中村仲藏	中村壽三郎
新三郎	坂東家橘	市川米藏
おせん	岩井半四郎	市川升若
十兵衛	市川團十郎	市川壽美藏

大正十四年三月十五日印刷
大正十四年三月十八日發行

『默阿彌全集第十五卷』
非賣品

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

補修 河竹糸女

校訂編纂者 河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂





